

しゃ ぐち

社口遺跡第3次調査報告書

1997

山梨県北巨摩郡 高根町教育委員会
社口遺跡発掘調査団

しゃ ぐち

社口遺跡第3次調査報告書

1997

山梨県北巨摩郡 高根町教育委員会
社口遺跡発掘調査団

序

本報告書は、平成7年9月に高根町教育委員会から依頼を受けた山梨文化財研究所が社口遺跡発掘調査団を組織し、高根町教育委員会が行った第1次、第2次調査の延長線上で行われた「第3次調査」の報告書である。

社口遺跡は山梨県北口寧郡高根町村山北割・東割地内に所在し、山梨県が進めている八ヶ岳地区広域常農団地農道整備事業に伴う農道建設に遺跡が係わるため、平成3年度には山梨県埋蔵文化財センターによって遺跡詳細分布調査が行われ、予定路線内の試掘坑26ヶ所全てから遺物が確認できるなど、濃密な遺跡の存在が明らかとなった。

高根町教育委員会が行った第1次調査は平成6年1～2月に、第2次調査は同年8～12月に行われ、あわせて東西10m×南北約200mの間に縄文時代中期の堅穴住居址27軒、土坑約100基、平安時代堅穴住居址2軒、平安時代鍛冶関連土坑2基が発見されたもので、社口遺跡の規模の大きさ・中味の濃さを垣間見ることが出来たと同時に社口遺跡の重要性が広く認識されるに至った。

本報告書で報告する社口遺跡第3次調査は、第2次調査の延長線上から県道（万年橋・長坂線）までの区間（巾10m×長さ300m）となったが、第1次、第2次調査の遺構・遺物の出土状態から当該区間でも濃密な分布が予測されたため、慎重に調査が進められ、堅穴住居址35軒（縄文時代中期14、同後期7、平安時代12）、ビット（土坑、集石土坑含む）414基、溝（近・現代中心）21本を確認、遺物もプラ箱（30×45×25cm）で65箱を数えるに至った。

縄文時代草創期～早期から平安時代に至る長期にわたる人々の生活の痕跡が見事なまでに残されていたことが調査で明かとなつたが、農道で本遺跡は残念ながら消滅してしまった。せめてもの救いとでも言える「本報告書」によってしか社口遺跡で生きた人々の暮らしぶりは知るよしもないが、幸いにも緻密な報告が出来たことに、関係機関、地域の皆様、直接調査・整理に携わった皆様の努力に対し深甚なる感謝の意を捧げたい。

最後に本報告書が広く研究資料として活用されることを祈念している。

1997年3月

社口遺跡発掘調査団

団長 谷 口 一 夫

例　　言

1 本書は山梨県北巨摩郡高根町村山北割・東割所在の社口遺跡の発掘調査報告書であり、高根町の委託を受け社口遺跡発掘調査団が実施した第3次調査の報告である。

2 本調査報告書作成のための作業分担は以下の通りである。

遺物洗浄・注記	名取もと子・岩崎満佐子・林紀子・雨宮寛美・藤井多恵子・佐野靖子・矢房静江・保坂真澄・若木美和
遺物復元（石膏入れ）	佐野靖子
遺物尖削・拓本	矢房静江・斎藤ひろみ・岩崎満佐子・林紀子・佐野靖子・保坂真澄
遺構写真	柳原功一・森原智恵子
遺物写真撮影・プリント	佐野靖子
遺構トレース	柳原功一・森原智恵子
遺物トレース	柳原功一
国版作成	柳原功一・森原智恵子・岩崎満佐子・林紀子・斎藤春美
写真国版作成	柳原功一・矢房静江
表作成	柳原功一・森原智恵子・矢房静江

なお、航空写真是（株）シン技術コンサルによるものである。

3 本書の原稿執筆分担は以下の通りである。

第3章第2節	森原智恵子・柳原功一
第4章第1節	新山雅広・植田弥生・山形秀樹（鈴バレオ・ラボ）
第4章第2・3節	河西学（側山梨文化財研究所）

その他の原稿執筆、全体の編集・校正は柳原がおこなった。

4 発掘調査および整理作業において次の調査・業務を以下の機関・各位に委託した。

基準点設置・航空写真測量	鈴シング技術コンサル
テフラ分析	側山梨文化財研究所 地質研究室 河西 学
炭化木材種同定・炭化種実同定・放射性炭素年代測定	鈴バレオ・ラボ 新山雅広・植田弥生・山形秀樹
金属製品保存処理	側山梨文化財研究所 保存修復研究室

5 本書で用いた地図は建設省国土地理院発行の地形図（1:25,000、1:50,000）、地勢図（1:200,000）、高根町発行の土地集成図（1:10,000）である。

6 石器石材鑑定は、河西学氏による。

7 引用・参考文献は第4章以外は巻末にまとめた。第4章については各節末に注・引用参考文献をまとめている。

8 本書に関わる出土品・図面・写真等の語記録は、高根町教育委員会にて保管している。

9 社口遺跡の概要については『帝京大学山梨文化財研究所報』28で紹介しているが、木吉の記述をもって本報告とする。

10 発掘調査から報告書作成までの間、以下の諸氏、諸機関から多くなる御助言・御配慮を賜った。記して心より感謝申し上げたい。（順不同・敬称略）

中嶋精・小清水淳三・原一元・雨宮正樹（高根町教育委員会）、新津健・保坂康夫・小野正文・田口明子・森原明廣・笠原みゆき（山梨県埋蔵文化財センター）、今福利恵（山梨県立考古博物館）、秋葉三雄・宮澤公雄・平野修・河西学・鈴木稔・伊東千代美・市川昌子・中山千恵・畠大介（（財）山梨文化財研究所）、佐野謙（甲野村教育委員会）、小宮山隆（長坂町教育委員会）、竹田眞人（武川村教育委員会）、杉本充（白洲町教育委員会）、瀬川正明（一宮町教育委員会）、小瀬忠秋（石和町教育委員会）、佐藤勝広（小淵沢町教育委員会）、伊藤公明（大泉村教育委員会）、信藤祐仁（甲府市教育委員会）、堀内真（富士吉田市教育委員会）、布施光敏（富士吉田市歴史民俗博物館）、原田昌幸・土肥孝（文化庁）、広瀬昭弘・宇賀神誠司（長野県埋蔵文化財センター）、神村透（木曾郡遺跡調査会）、堀山雄二（東部町教育委員会）、吉川昌伸（株）バレオ・ラボ、石原正敏（上日町市教育委員会）、佐藤雅一（津南町教育委員会）、谷口康浩・宮尾亨（國學院大學）、安達満・奥山和久

（財）山梨文化財研究所、高根町役場、山梨県埋蔵文化財センター、甲斐正陵考古学研究会、北巨摩郡埋蔵文化財担当者会、縄文早期土器研究部会（長野県考古学会）、東京大学考古学研究会、岐北土地改良事務所、岐北広域シルバー人材センター、馬淵建設

凡　　例

1 清跡全体図におけるX・Y値数は、平面直角座標第四象限（原点：北緯36度00分00秒、東経138度30分00秒）に基づく各座標数値である。各遺構平面図中の北を示す方位は、すべて座標北を示す。

2 遺構および遺物の縮尺は原則として次の通りである。

<遺構>	堅穴住居址	1:60 (概・切は1:40)
	ピット	1:40
	溝	任意
	全体図	任意
<遺物>	縄文土器（小・中型・拓本）	1:3
	縄文上器（大型）	1:4 1:5 1:6
	縄文下器（单創～早期）	1:2
	石器（打斧・四石・平安時代支脚石など）	1:3
	丸石・石皿	1:4
	石錐・縦長剥片・攝器・調節痕のある剝片	1:1
	砥石	1:2
	石匙・小型磨斧・卡	2:3 1:2
	鉄製品	1:2
	土師器・灰釉陶器	1:4
	銭貨	1:1
	十製品・土偶	1:2

3 遺構図版中の床面上、竈内断面図中の手書き点文は焼土分布および焼土の堆積を表す。また竈周辺の点綱掛けは白色粘土分布を表す。また灰石・竈壁中の手書き点文は被然痕を表す。遺物分布図中のマーク指示は次の通りである。

- | | | |
|----------|------------|--------|
| ● 土器・上師器 | ▲ 灰釉陶器・須恵器 | ■ 金属製品 |
| ● 土製品 | ■ 石器 | |

ただし草創～早期遺物分布図におけるマーク指示は異なるため、図版内で説明している。

4 遺構図版中の遺物番号は遺物図版番号・遺物観察表番号と一致している。また遺構図版中の遺物接合線については、実線ラインは接合した2点の遺物の接合関係を、また破線ラインは接合していないか同一個体であることを意味するものである。

5 遺構図版中の柱穴深さ（—）は基準床面シベルからの深さ（cm）である。また基準床面レベルはおおよその床推定レベル、又は完掘時の平均的な床面シベル値である。

6 遺構図版中および土器観察表中の色調名は農林省水産技術会議事務所監修『新版標準上色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1990）による。

7 遺物図版中の土器・陶器の断面図が黒塗りは須恵器・点綱掛けは灰釉陶器で、それ以外の白ぬきは土器・十師器・土師質土器・中世土器である。また上師器器面の点綱掛けは黑色処理面である。また断面図中の後合帯を意味する破線は、やや不明確な接合帯を、実線の接合帯は明確な接合帯を表す。

8 四石・磨石・石斧の外形線に沿った実線は磨り面、破線は叩き（漬し）面、小さな矢印は敲打痕を表す。また打斧・磨斧の刃部。境上の細かな条線は、磨耗痕（使用痕）、もしくは磨き痕を表す。

9 堪穴住居址の床面積は、壁下端ラインをゾーニメーターで計測した。使用機器はウシカタX-PLAN360 d。

10 遺構および遺物写真的縮尺は統一されていない。

目 次

序		5章 遺構・遺物の分析
例 言		
本文目次		第1節 社口遺跡における土地利用の変遷 208
挿図目次		第2節 縄文時代草創～中期の上器 211
表目次		第3節 縄文時代中期 214
写真図版目次		1 上器の分類と段階 214
第1章 序説 1		2 石組みを伴う集石炉について 217
第1節 調査の概要 1		第4節 縄文時代後期 219
第2章 調査に至る経過と調査体制 2		1 上器の分類と段階 219
第3節 調査の方法と経過 3		2 16号住の散石に関する観察 219
第2章 遺跡の位置と環境 162		第5節 平安時代上器類の分類と編年 223
第1節 遺跡の位置と現況 162		第6節 配石上坑と中世墓 228
第2節 地質・自然環境 162		第7節 調査の反省と今後の課題 230
第3節 歴史環境 162		引用・参考文献
第3章 遺構と遺物 165		
第1節 縄文時代 165		挿 図 目 次
1 縄文時代草創～早期包含層と出土遺物 165		第1図 遺跡の位置 (1:200,000) 5
(1) 包含層の状況・層序・遺物出土状況 165		第2図 遺跡分布図 (1:50,000) 6
(2) 草創～中期の遺物 166		第3図 遺構分布図 (1:25,000) 7
2 縄文時代中期後半の住居址 (34号住) 168		第4図 調査区周辺図 (1:1,000) 8
3 縄文時代中期後半の住居址 (3・7～10・13・14・27・28・30～33・36号住) 168		第5図 調査区周辺の地形図および堆・川水路図 9
4 縄文時代後期の住居址 (16・17・18・19・21・26・35号住) 173		第6図 遺跡付近の地形現況図 およびグリッド配置図 10
第2章 平安時代の住居址 (1・2・4～6・12・15・20・24・25・29・37号住) 177		第7図 遺構全体図 11
第3節 近世～近・現代 184		第8図 遺跡の地形及び縦断面図 12
1 獣 184		第9図 遺構分類図 (1) 13
2 節輪彫 (ふるせぎ) 186		第10図 遺構分布図 (2) 14
第4節 ピット 186		第11図 遺構分布図 (3) 15
1 繩文時代草創～早期 186		第12図 遺構分布図 (4) 16
2 縄文時代中期 187		第13図 遺構分布図 (5) 17
3 縄文時代後期 189		第14図 遺構分布図 (6) 18
4 平安時代 190		第15図 社口遺跡第2次調査全体図 19
5 中世～近世 190		第16図 縄文草創～早期包含層土器分布図 21
第5節 遺構外出土遺物 190		第17図 縄文草創～中期包含層石器 ・鍬分布・接合図及び熊十断面図 23
第4章 自然科学分析		第18図 縄文草創～中期土器の分布・接合図 (1) 25
第1節 炭化物の分析 191		第19図 縄文草創～中期土器の分布・接合図 (2) 27
1 社口遺跡から出土した大型植物化石 (新川謙弘) 191		第20図 34号住実測図 29
2 社口遺跡から出土した炭化材の樹種 (横田弥生) 194		第21図 3・7号住実測図 30
3 放射性炭素年代測定 (山形秀樹) 198		第22図 7・8号住実測図 31
第2節 高根町社口遺跡のチフタ (河西 学) 199		第23図 9号住実測図 32
第3節 社口遺跡出土土器の胎土分析 (河西 学) 201		第24図 10・13号住実測図 33
		第25図 13・14号住実測図 34
		第26図 27・28号住実測図 35
		第27図 28・30号住実測図 36
		第28図 31号住実測図 37
		第29図 32号住実測図 38
		第30図 33・36号住実測図 39
		第31図 16号住実測図 40

第32図	17号住実測図	41	第70図	草創～早期石器実測図	81
第33図	18・19号住実測図	42	第71図	草創～早期石器実測図	82
第34図	21号住実測図	43	第72図	草創～早期石器実測図	83
第35図	26・35号住実測図	44	第73図	草創～早期石器実測図	84
第36図	1号住実測図	45	第74図	草創～早期石器実測図	85
第37図	1・2号住実測図	46	第75図	34号住出土遺物実測図	86
第38図	4号住実測図	47	第76図	34号住出土遺物実測図	87
第39図	5号住実測図	48	第77図	34・3・7号住出土遺物実測図	88
第40図	6号住実測図	49	第78図	7・8号住出土遺物実測図	89
第41図	12・15号住実測図	50	第79図	8号住出土遺物実測図	90
第42図	20・23号住実測図	51	第80図	9号住出土遺物実測図	91
第43図	24号住実測図	52	第81図	9号住出土遺物実測図	92
第44図	25・29号住実測図	53	第82図	9号住出土遺物実測図	93
第45図	29・37号住実測図	54	第83図	9号住出土遺物実測図	94
第46図	37号住・4・5・10・21・22・25号 ピット実測図	55	第84図	9号住出土遺物実測図	95
第47図	33・41・45・52・53・55・63号 ピット実測図	56	第85図	9号住出土遺物実測図	96
第48図	61・69・70・73・79・81・82・83・86・95 ・137・145号ピット実測図	57	第86図	9号住出土遺物実測図	97
第49図	149・156・159・160・165・169・184・206・ 232・248・249・250・251・263・294・296・ 309・328・335・337・338・343号ピット実測 図	58	第87図	10号住出土遺物実測図	98
第50図	314・366・368・381・382・390・391・393・ 395号ピット実測図	59	第88図	13号住出土遺物実測図	99
第51図	398・401・404・406・407・408・412号 ピット実測図	60	第89図	14号住出土遺物実測図	100
第52図	1・2・4・5・6・11・13・14・15・17・ 20号溝実測図	61	第90図	14・27号住出土遺物実測図	101
第53図	3・8・9・10・12号溝、焚輪堰（ふるせぎ） 断面図	62	第91図	28号住出土遺物実測図	102
第54図	草創～早期土器実測図	63	第92図	28号住出土遺物実測図	103
第55図	草創～早期土器実測図	65	第93図	30・31号住出土遺物実測図	104
第56図	草創～早期土器実測図	67	第94図	31号住出土遺物実測図	105
第57図	草創～早期土器実測図	68	第95図	31号住出土遺物実測図	106
第58図	草創～早期土器実測図	69	第96図	31号住出土遺物実測図	107
第59図	草創～早期土器実測図	70	第97図	31号住出土遺物実測図	108
第60図	草創～早期土器実測図	71	第98図	31号住出土遺物実測図	109
第61図	草創～早期土器実測図	72	第99図	31号住出土遺物実測図	110
第62図	草創～早期土器実測図	73	第100図	31号住出土遺物実測図	111
第63図	草創～早期土器実測図	74	第101図	31号住出土遺物実測図	112
第64図	草創～早期石器実測図	75	第102図	32号住出土遺物実測図	113
第65図	草創～早期石器実測図	76	第103図	32号住出土遺物実測図	114
第66図	草創～中期石器実測図	77	第104図	32号住出土遺物実測図	115
第67図	草創～中期石器実測図	78	第105図	32・33号住出土遺物実測図	116
第68図	草創～中期石器実測図	79	第106図	33・36・16号住出土遺物実測図	117
第69図	草創～中期石器実測図	80	第107図	16号住出土遺物実測図	118

第118図	21号住出土遺物実測図	129
第119図	26・35号住出土遺物実測図	130
第120図	35・1号住出土遺物実測図	131
第121図	1号住出土遺物実測図	132
第122図	1・2号住出土遺物実測図	133
第123図	2・4・5号住出土遺物実測図	134
第124図	5・6号住出土遺物実測図	135
第125図	6号住出土遺物実測図	136
第126図	6・12・15号住出土遺物実測図	137
第127図	20・23・24号住出土遺物実測図	138
第128図	24号住出土遺物実測図	139
第129図	25号住出土遺物実測図	140
第130図	25・29号住出土遺物実測図	141
第131図	29号住出土遺物実測図	142
第132図	29・37号住出土遺物実測図	143
第133図	37号住出土遺物実測図	144
第134図	4・5・10・21・22・25・33・41号ピット 出土遺物実測図	145
第135図	41・52・53・55・61・63・69・70号ピット 出土遺物実測図	146
第136図	73・79・81・82・86・95・136・137・149 ・156号ピット出土遺物実測図	147
第137図	159・169・184・206・232・248・250号 ピット出土遺物実測図	148
第138図	251・263・294・296号ピット 出土遺物実測図	149
第139図	328・331・335・336・337・338・344・368号 ピット出土遺物実測図	150
第140図	391・393・395・401号ピット 出土遺物実測図	151
第141図	404・407・408・412号ピット 出土遺物実測図	152
第142図	遺構外川土遺物(1)	153
第143図	遺構外出土遺物(2)	154
第144図	遺構外出土遺物(3)	155
第145図	遺構外出土遺物(4)	156
第146図	遺構外出土遺物(5)	157
第147図	遺構外出土遺物(6)	158
第148図	遺構外出土遺物(7)	159
第149図	遺構外出土遺物(8)	160
第150図	遺構外出土遺物(9)	161
第151図	草創～早期土器の重量比	165
第152図	1号住内炭化種突出土状況	178
第153図	集石炉の構成	188
第154図	社口遺跡B62地点での火山ガラス含有率	199
第155図	A・A'型火山ガラス屈折率	200
第156図	縄文時代草創期～早期分析試料の拓影図	202
第157図	点数片岩中の曹長石斑状変晶	202
第158図	土器の岩石鉱物組成	203
第159図	上器の岩石組成折れ線グラフ	204
第160図	平府盆地周辺地域河川砂の比較樹形図	205
第161図	八ヶ岳南麓縄文中期土器との比較樹形図	205
第162図	土地利用の変遷	209
第163図	青木遺跡との位置関係	210
第164図	縄文草創期～早期の土器変遷図	212
第165図	縄文中期土器の変遷	215
第166図	縄文中～後期土器の変遷	216
第167図	16号住居址の敷石磨り痕・レベル・変色部 ・重層分布図	220
第168図	平安時代土器・陶器編年(1)	225
第169図	平安時代土器・陶器編年(2)	226
第170図	食器類の割合の変遷	228
第171図	追加資料図	258

表 目 次

第1表	遺跡地名表	164
第2表	産出した大型植物化石	192
第3表	縄文時代の住居跡から出土した炭化材の樹種	196
第4表	平安時代の住居跡の縄から出土した炭化材の樹種	197
第5表	年代別測定結果数	198
第6表	計数火山ガラス粒数	200
第7表	火山ガラスの屈折率	200
第8表	試料表	201
第9表	土器試料中の岩石鉱物	202
第10表	岩石組成による土器の分類	204
第11表	16号住の敷石觀察表	221
第12表	平安時代住居出土の上器数	228
第13表	住居址一覧表	232
第14表	ピット一覧表	233
第15表	土器・陶器觀察表	235
第16表	石器觀察表	251
第17表	土製品觀察表	257
第18表	金属器觀察表	257
第19表	墨書き・刻畫一覧表	257
第20表	追加資料表	258

写真図版目次

図版1	1.北から見た遺跡 2.南西から見た遺跡	
図版2	1.北から見た遺跡 2.西から見た遺跡	
図版3	1.南から見た遺跡 2.西から見た遺跡	
図版4	1.53～74グリッド付近 2.36～43グリッド付近 3.28～37グリッド付近	
図版5	1.22～28グリッド付近 2.13～23グリッド付近	
図版6	1.調査前景観 2.調査中景観	

- 図版7 1. D52付近から北を見る 2. C67付近から南西を見る 3. B68付近から南を見る
- 図版8 1.50~74グリッドを西から見る 2. F43付近から南を見る 3. J27付近から北を見る
- 図版9 1. 積雪の朝 2. 019付近から北を見る 3. R14付近から北を見る
- 図版10 1. C61付近から西南を見る 2. 早期包含層調査風景 3. 早期包含層下層の調査状況
- 図版11 1. 早期包含層 2. 早期包含層 3. 早期包含層
- 図版12 1. 出土状況 2. 出土状況 3. 出土状況 4. 出土状況 5. 406号ピット内配石
- 図版13 1. 34号住居掘削状況 2. 34号住内遺物出土状況 3. 34号住深鉢出土状況 4. 34号住炉体上器出土状況
- 図版14 1. 3号住跡・遺物出土状況 2. 3号住完掘状況 3. 7号住完掘状況 4. 7号住炉完掘状況
- 図版15 1. 8号住完掘状況 2. 8号住が 3. 8号住埋甕 4. 9号住完掘状況
- 図版16 1. 9号住遺物出土状況 2. 9号住内石皿・磨石出土状況 3. 9号住地盤出土状況 4. 9号住炉内砾・道物出土状況
- 図版17 1. 10号住炉断面 2. 10号住完掘状況 3. 13号住完掘状況 4. 14号住完掘状況
- 図版18 1. 14号住埋甕 2. 14号住炉 3. 27号住完掘状況 4. 27号住炉 5. 28号住完掘状況
- 図版19 1. 28号住遺物出土状況 2. 28号住炉完掘状況 3. 30号住遺物出土状況
- 図版20 1. 30号住内出土土器 2. 30号住炉 3. 31号住完掘状況 4. 31号住遺物出土状況
- 図版21 1. 31号住炉 2. 31号住内上器出土状況 3. 31号住内器出土状況 4. 31号住内土器出土状況
- 図版22 1. 32号住完掘状況 2. 32号住遺物出土状況 3. 32号住内遺物出土状況
- 図版23 1. 32号住炉 2. 32号住内土器出土状況 3. 33号住完掘状況 4. 33号住炉完掘状況
- 図版24 1. 36号住完掘状況 2. 16号住遺物出土状況 3. 16号住敷石状況
- 図版25 1. 16号住内丸石出土状況 2. 16号住遺物出土状況 3. 16号住石敷設状況 4. 16号住完掘状況
- 図版26 1. 16号住炉 2. 17号住遺物出土状況 3. 17号住敷石・柱穴配置状況 4. 17号住炉体土器
- 図版27 1. 18号住遺物・砾出土状況 2. 18号住完掘状況 3. 18号住炉体土器出土状況 4. 19号住遺物出土状況
- 図版28 1. 19号住床面遺物出土状況 2. 19号住床面の住口上器・凹石 3. 19号住床上の深鉢 4. 19号住炉と炉体土器
- 図版29 1. 19号住完掘状況・敷石敷設状況 2. 19号住完掘状況 3. 21号住遺物出土状況
- 図版30 1. 21号住敷石敷設状況 2. 21号住完掘状況 3. 21号住炉内炉体土器出土状況
- 図版31 1. 26号住遺物出土状況 2. 26号住完掘状況 3. 26号住炉体土器 4. 26号住内双口上器出土状況 5. 35号住遺物出土状況
- 図版32 1. 35号住完掘状況 2. 35号住炉内炉体土器出土状況 3. 35号住内深鉢川土状況 4. 1号住遺物出土状況
- 図版33 1. 1号住内鉄製品出土状況 2. 1号住窓南側付近での出土状況 3. 1号住窓内・窓周辺遺物出土状況 4. 1号住窓内支脚石の状況 5. 1号住窓袖石の状況
- 図版34 1. 1号住完掘状況 2. 1号住掘り方完掘状況 3. 1号住内中央のピット
- 図版35 1. 2号住完掘状況 2. 2号住窓内出土状況 3. 2号住支脚石と袖石 4. 4号住遺物・砾出土状況 5. 4号住完掘状況
- 図版36 1. 5号住遺物出土状況 2. 5号住完掘状況 3. 5号住窓川土状況 4. 5号住礫石状況
- 図版37 1. 6号住遺物出土状況 2. 6号住杯出土状況 3. 6号住袖石状況 4. 6号住窓内遺物出土状況
- 図版38 1. 6号住完掘状況 2. 6号住掘り方完掘状況 3. 12号住完掘状況
- 図版39 1. 12号住窓 2. 15号住完掘状況 3. 20号住完掘状況 4. 23号住遺物出土状況
- 図版40 1. 24号住遺物出土状況 2. 24号住完掘状況 3. 24号住窓遺物出土状況 4. 24号住窓とつき印
- 図版41 1. 25号住遺物出土状況 2. 25号住完掘状況 3. 25号住出土状況
- 図版42 1. 29号住遺物出土状況 2. 29号住完掘状況 3. 29号住窓 4. 29号住窓
- 図版43 1. 37号住遺物出土状況 2. 37号住完掘状況 3. 37号住ロクロ要出土状況 4. 37号住内山土・枚重ねの皿出土状況
- 図版44 1. 10号ピット出土状況 2. 21号ピット出土状況 3. 22号ピット出土状況 4. 25号ピット出土状況 5. 95号ピット出土状況 6. 250号ピット出土状況 7. 263号ピット出土状況
- 図版45 1. 343号ピット出土状況 2. 344号ピット出土状況 3. 381号ピット内集石出土状況 4. 381号ピット下部石組出土状況
- 図版46 1. 382号ピット内石紅出土状況 2. 390号ピット内集石・石組出土状況 3. 390号ピット内石組出土状況 4. 398号ピット内集石出土状況
- 図版47 1. 398号ピット内上部集石・石組取り上げ後の下層集石状況 2. 398号ピット内下層石組状況

- 3.381~398号ピット全景 4.401号ピット内出土状況
- 図版48 1.404号ピット上面配石出土状況 2.404号ピット完掘状況 3.408号ピット出土状況 4.箕輪車（くるせぎ）断面
- 図版49 草創期～早期土器
- 図版50 草創期～早期土器
- 図版51 卵創期～中期土器
- 図版52 草創期～中期土器
- 図版53 草創期～早期土器
- 図版54 草創期～早期土器
- 図版55 草創期～早期土器・石器
- 図版56 草創期～中期石器
- 図版57 草創期～早期石器
- 図版58 34号住出土遺物
- 図版59 34・3・7号住出土遺物
- 図版60 7・8号住出土遺物
- 図版61 9号住出土遺物
- 図版62 9号住出土遺物
- 図版63 9号住出土遺物
- 図版64 9号住出土遺物
- 図版65 10・13号住出土遺物
- 図版66 13・14号住出土遺物
- 図版67 27・28号住出土遺物
- 図版68 28号住出土遺物
- 図版69 30・31号住出土遺物
- 図版70 31号住出土遺物
- 図版71 31号住出土遺物
- 図版72 31号住出土遺物
- 図版73 31号住出土遺物
- 図版74 31号住出土遺物
- 図版75 31・32号住出土遺物
- 図版76 32号住出土遺物
- 図版77 32・33号住出土遺物
- 図版78 33・16号住出土遺物
- 図版79 16号住出土遺物
- 図版80 16・17号住出土遺物
- 図版81 17・18号住出土遺物
- 図版82 18・19号住出土遺物
- 図版83 19号住出土遺物
- 図版84 21号住出土遺物
- 図版85 21号住出土遺物
- 図版86 26・35・1号住出土遺物
- 図版87 1号住出土遺物
- 図版88 1・2号住出土遺物
- 図版89 4・5号住出土遺物
- 図版90 6号住出土遺物
- 図版91 6号住出土遺物
- 図版92 12・15・20・24号住出土遺物
- 図版93 24・25号住出土遺物
- 図版94 25・29号住出土遺物
- 図版95 29・37号住出土遺物
- 図版96 37号住・ピット出土遺物
- 図版97 ピット出土遺物、鉄製品・鉄矛・土偶・墨書き器
- 図版98 社口遺跡出土炭化材の樹種
- 図版99 社口遺跡出土炭化材の樹種・大型植物化石

第1章 序 説

第1節 調査の概要

社口遺跡は、北巨摩郡高根町村山北割・東割地内に所在する（第1～3図）。山梨県が進める八ヶ岳地区広域農業地帯整備事業にともない、須木町（茅ヶ岳広域農道）から長坂・小瀬沢町に連絡する農道建設が予定され、平成3年度に山梨県埋蔵文化財センターにより遺跡詳細分布調査が行われた。その際、村山東割字社口地内の長さ600mにわたる道路予定地内約6000m²に、10～30m間隔で2×2mの試掘坑を26ヶ所入れたところ、ほとんどすべての地点から遺物の出土があり、遺跡の存在が確認された。この調査以前には社口遺跡の存在は明らかでなく、昭和61・62年に行われた高根町内詳細分布調査では、現況の多くが山林だったため遺跡の存在は確認されていない。平成3年度の試掘調査報告によると、出土遺物は縄文時代中期前葉から後葉、後期初頭から前葉を主とし、また早期末条文土器や晚期の可能性ある土器片も出土した。中でも中期中葉から後葉に至る井戸尻～曾利式には人型破片が多く、中期後半を主体とした遺跡であることが想定された。

本調査は平成6年（1994年）に高根町教育委員会によって、町民グランドに近い北側から南側へ向けて開始され、1月～2月に第1次調査が、また同年8月～12月に第2次調査が行われた。第1・2次調査では東西10m、南北約200mにわたる調査の結果、縄文時代中期の堅穴住居27軒、土坑+ピット約100基、平安時代堅穴住居2軒、平安時代鐵冶連土坑2基が見つかった（第15図）。内容については教育委員会発行の『社口遺跡一八ヶ岳広域農道建設に伴う発掘調査一』（南宮 1995）に詳しく述べてあるが、惜しいことに報告書には図面等の基礎データがないため、詳細については不明といわざるをえない。台地西側縁辺に弧状に住居址が密集した状況を示し、おそらく曾利I～III式期を中心とする環状集落の一端であろうと想像できる。住居址には戸に接して奥壁部に配石をもつ4号住や、炉隣に副炉のある2号住、埋葬施設位置に石四脚状の特殊施設を持つ12号住など、見るべきものが多くない。また上流域には井戸尻式期の土器を埋設したものがある。

平成7年9月に高根町教育委員会の依頼を受けた鶴山柴文化財研究所では、社口遺跡発掘調査隊を組織し、第2次調査の鉢長線上から県道（万年橋・長坂線）までの区間を本調査することになった（第3次調査）。この間は幅10m、長さ約300mで、第1・2次調査区の存在した北側の台地上（北台地）、水田のある低地面、箕輪堰が横切る南側の台地（南台地）へと起伏に富んだ地形を呈している。一部の畠地では開墾時に土を持ち出したという話があり、また斜面では遺構はない予想されていたが、念のため全面的に精査したところ、くまなく遺構が発見された。

測定面積は3721m²、発見された遺構は堅穴住居35軒（縄文時代中期14、縄文時代後期7、平安時代12）、ピット（上坑・集石炉・シミ状ピットを含む）414基、溝（近・現代中心）21本である（第7図）。遺物量はテラ箱（30×45×25cm）で65箱であった。

調査結果を時代順に並べるならば、縄文時代草創期～中期の包含層、縄文時代中期洛沢式期住居址、曾利I式期集落址、曾利II～IV式期集落址、後期前半（縦之内式期）集落址、平安時代集落址である。

草創期～中期の包含層は北台地南斜面、B・C58～62グリット付近の10×15m程度の狭い範囲にある。表裏縄文土器を中心に燃糸文土器が集中し、それらに伴って黒曜石製の搔器や、砥石・磨石・凹石などの石器が出土した。燒土や焼け跡もあり、生活址の可能性もあるが、台地上出土土器との接合事例があり、覆土は斜面上方から下方への流れと判断できたので、多くは北台地上からの二次堆積土であろうとの推測に至っている。表裏縄文土器は緩やかに外反・屈曲した平口縁が主体で、小さな瘤状貼り付けをもつものがある。底部は尖底、もしくは丸底で、裏面の縄文は内面底部まで施文するものが多い。土器の大半は井草式直前から稻荷台式併行で、井草式に対比できる資料があり、山梨県における早期前半期の様相を明らかにする資料である。また、表裏縄文土器と折衷的な資料もあり興味深い。破片数は敷細資料を含めて千点余り出土している。

中期前半、急び式期の住居址（34号住）は、南台地上に1軒のみ発見された。中期後半、曾利I式期の集落址も同じ南台地上に6軒がまとまっている（27・28・30・31・32・33号住）。それらには大きな重複はない。31号住では多くの上器が見つかり、良好な資料を得ることができ、また炉内に大きな丸石が遺存し、生居窓棄の際に何らかの祭祀的行為を行っていることが伺えた。曾利I式の集落址は県内ではそれほど多くなく、良好な資料を提供した。

中期後半、曾利II～IV式期の集落は、北台地上にまとまっている（7・8・9・10・13・14号住）。台地上に展開すると思われる中期後半集落の一端を示す資料となり、第1・2次調査との関連性が明らかになった。さらに台地斜面では中期末と思われる馬蹄を配した3号住も見つかっている。

後期鼎之内式期の集落は低地に広がり、等高線に沿った形で、列状に16・17・18・19・21・26・35号住があり、ほかに炉と思われる焼土を伴う單独埋蔵が2カ所ある。住居はいずれも広庭の板石住居で、うち16号住が鉄平石を用いた全面に近い形で敷石を敷設し、19号住では出入り口部へ炉までを、また21号住では炉裏を中心に敷設し、他のものは周縁を巡らす程度である。住居はいずれも円形で、壁際にやや細い柱穴をもち、炉は例外なく石造の壇場炉もしくは壇場炉である。この集落は、かつて町役場が圓場整備事業にともない創在した青木連跡の一部と思われる。先の調査では配石を中心に住居が敷軒出していたが、このような形で配石から随分離れた地点での住居配置は意外であった。

平安時代の住居は調査地内の各地点にある（1・2・4・5・6・12・15・20・24・25・37号住）。時期は9世紀中葉～10世紀前半台で、窓の石組みを良好に残すものが多い。かつて圓場整備で調査が行われた東久保遺跡など、周辺集落との関連性の中で捉える必要がある。

そのほか笠輪塙の「ふるせぎ」といわれる溝を断面観察し、V字状の溝であることを確認した。また土坑底面に平石で石組を設け、上層に小礫の集石を充填した集石炉が4基まとまって見つかり、うち1基は¹⁴C年代測定の結果、繩文中期と推定された。それらの集石は、高湯のため多くの磚の表面が充泡した状態である点が注意された。また中世の土坑墓が1基あり、上面は配石で密閉され、内部には5枚銅鏡が副葬されていた。

発中の半ば強行的な調査であったため、凍土の影響で遺構確認が十分でなく、上坑やビットなどを完全に検出できたとは言い難いものであった。また調査終了後に調査範囲の一部誤認が判明するという調査ミスがあるなど、反省すべき点を残す調査であったが、それでも十分な成果をあげることができた。

第2節 調査に至る経過と調査体制

平成7年9月、高根町教育委員会より山梨文化財研究所へ広域農道建設にともなう社口遺跡調査の依頼があり、協議した結果、委託契約を結んで調査することとなった。委託者は高根町町長 大柴恒雄、受託者は社口遺跡発掘調査団長 谷口一夫で、平成7年9月25日委託契約を行い、調査を行う運びとなった。

現場での調査は1995年10月16日～1996年3月22日まで、96日ほど実施した。また室内での整理作業は1996年4月～1997年3月まで山梨文化財研究所で行った。

<社口遺跡発掘調査団組織>

調査団長	谷口 一夫	山梨文化財研究所	所長
調査員	樋原 功一	同	考古第2研究室長
同	森原智恵子	同	研究助手
経理	五味 芳子	同	事務主任

<発掘調査参加者> (順不同、敬称略)

秋山圭子（筑波大学生）・秋山喜美恵・浅川利一・浅川江代・浅川朝子・浅川みのり・植松梅子・植松志げ子・植松千鶴子・大柴欣子・重川恵美子・重川英雄・重川八千子・国府田孝吉・小林昭子・小林輝晴・小林 裕・小林立枝・五味ゆき子・坂本よし江・坂本明子・坂本聰津美・篠原邦彦・清水とよ子・清水まつ代・白倉カツ子・中嶋當子・原藤 栄・福井光幸・保坂実香子・堀川ふじ・松沢みどり・二沢ふみ江・宮川昌歲・矢戸いと恵・吉田香代子・古本勝美・頼 末順

<整理作業参加者> (順不同、敬称略)

佐野靖子・南宮寛美・藤井多恵子・矢房静江・齐藤春美・齐藤ひろみ・岩崎満佐子・林 紀子・保坂真澄・若木美和・名取もと子

第3節 調査の方法と経過

(対象地区) 計画された道路予定地約4000m²のうち、県道に近い人家協水田および竹藪(現筑輪堤の南側)を除く、すべての予定地を調査対象地区とし、3721m²を調査した。竹藪付近は、近世以降の水田地が藪となったもので、当初調査予定地としての指示がなく、また木工造成時の段切りが大きいため、近世をさかのぼるような遺構はないだろうと予測された。しかし竹藪付近は築輪堰が直角に曲がるコーナー内側にあたり、何らかの屋敷地の可能性があり、また調査区南端では中世の土坑墓や内耳上器片が出土するなど中世の遺構の発見が予想され、調査すべき地点であったと反省している。また調査終了後、予定路線図と調査全体図を比べたところ、O19グリッド付近で幅2mほど予定路線幅に達していないことがわかり、調査地区設定ミスが判明したが、造成工事開始後であったため追加調査できなかった。現地で示された路線ラインが一部間違っていたようだ。

(基準点の設置) 調査予定地区すべてをカバーするように、国家座標に基づく5mメッシュの杭設置を委託した。X軸方向(北方向)を0~74、Y軸方向(東方向)をA~Vとし、XYの組み合わせで各グリッドを表示した。ちなみにA12は、X座標 -18480、Y座標 -6510、緯度 35°50'0.2175、経度 138°25'40.5604、N 0-2-31.9である。水準点は調査区内にベンチャーマークを4カ所設置した。

(基本層序・土層サンプリング) 調査区は起伏に富んだ地形であり、覆土状況も異なる。66~72グリッド付近では遺構確認面までが浅い上に畑の耕作が著しく、15~28グリッド付近では表土がきわめて薄いいろカラマツが多いために、抜根による擾乱が激しい地区である。また35~45グリッド付近では牧草地にするために十地を造成し、土を搬出したとのことで、遺構面までが浅くなっていた。したがって、遺跡全体の統一的な基本層序は定めていない。しかし57~63グリッド付近の草創~早期仮層が厚く、良好な堆積を示していたため、調査区の西側に沿って南北方向に、それに直交するように東西方向にトレントを入れて断面を観察した。またデラフ分析のための上層採取は、A61グリッドの南北トレント内で行った(第4章第2節参照)。また3号溝の壁面でさらに下層の堆積土(火山灰層など)の観察を行っている。

(遺構番号) 遺構は原則として住居址、ピット、溝に分け、「一号住」、「一号ピット」、「一号溝」と発見順に遺構番号を付けた。また住居址内のピットは各住居址ごとに「一号住P-」と付けた。

(調査の進め方) 調査は北側から開始し、南側へ向かって進行した。重機による表土除去後、じゅれんがけで遺構確認面を査定し、遺構確認を行った。途中出土した遺物は原位置に残し、後で1:10の平板測量による全体図に記録して取り上げることを原則としたが、グリッド一枚で取り上げたものもある。遺構は近世以降現代までの溝や畠を最初に調査し、その後ピット、平安時代堅穴住居址、繩文時代住居址へと新しい順に調査していく。平安時代堅穴住居址の調査手順は次のとおりである。まず十字のセクションベルトを残し、遺物や砾・焼土を残しながら床面付近までさげ、1:20の土層実測・観察後にベルトを撤去し、遺物出土状況写真撮影後、遺物を1:20で平板測量し、取り上げる。その後、床面・周溝を出すとともに竪の調査を行う。竪は十字ベルトを残して掘り下げ、断面観察・写真撮影後に遺物や砾を残した状態でベルトをはずす。出土状況写真撮影後、実測枠を用いて1:10で実測し、遺物取り上げ後、写真撮影し、竪石組みを残したまま住居全体の全掘写真を撮影する。1:20で平板による平面図作成後、最後に貼り床を掘り下げ、再び写真撮影、平面図作成を行う。なお掘り方の測量は調査区全体の空撮時に併せて撮影し、航空測量をした。繩文時代堅穴住居も原則的には平安と同じであるが、貼り床の存在が不明なものに関しては床下の調査は行っていない。ピットは南側を半蔵し、1:10で断面実測・観察・実測・写真撮影し遺物を残して掘り下げ、出土状況を1:10で実測後、完掘し、再び写真撮影した。溝もほぼ同様である。すべて調査終了した後全体写真を撮影した。全体図作成は委託し、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、航空測量で作成した。調査区が長細く、一度に全ての空撮を行うことはできないため、2回撮影した。また調査区周辺の地形状況(1:500)を作図するための航空測量も同時に行った。なお遺構写真是35mmカメラで白黒・リバーサルの2種類撮影するとともに、中判カメラ(6×6サイズ)で白黒・カラー撮影を行った。

(自然科學分析) 土・窓内から種植・炭化材・焼骨を抽出して食生活を探るための土壤採取を、遺存状況の悪い住居を除く全ての堅穴住居址を行った。また1号住では焼土が床面に広がり火災住居と思われたため、50mメッシュを床面に設定し、床面直上の土を採取した。整理階段でそれらの土を水洗選別し、主に炭化物や焼骨を抽出した。抽出方法は、土壤を平日程度乾燥し、重量を測定後、バケツの水に静かに投入し、浮上した炭化物をすぐく。さらに水を搅拌して炭化物を徹底的にすくい出し、なくなったらバケツの水を0.5mmメッシュ程度のふるいにかけて、泥を洗い流し、泥中の炭化物・焼骨類を拾い出す。あるいはチップ洗浄器内で水洗選別を行う。同定

は委託した。また住居床面に遺存した大型炭化材も樹種同定を委託したが、それらのうち縄文時代中期曾利II式期の8号住、縄文時代後期掘之内2式期の19号住、集石炉である398号ピット出土炭化材について β -線計数法による¹⁴C年代測定を委託した。また早期包含層付近で土層の年代を知るためのテフラ分析を委託した。

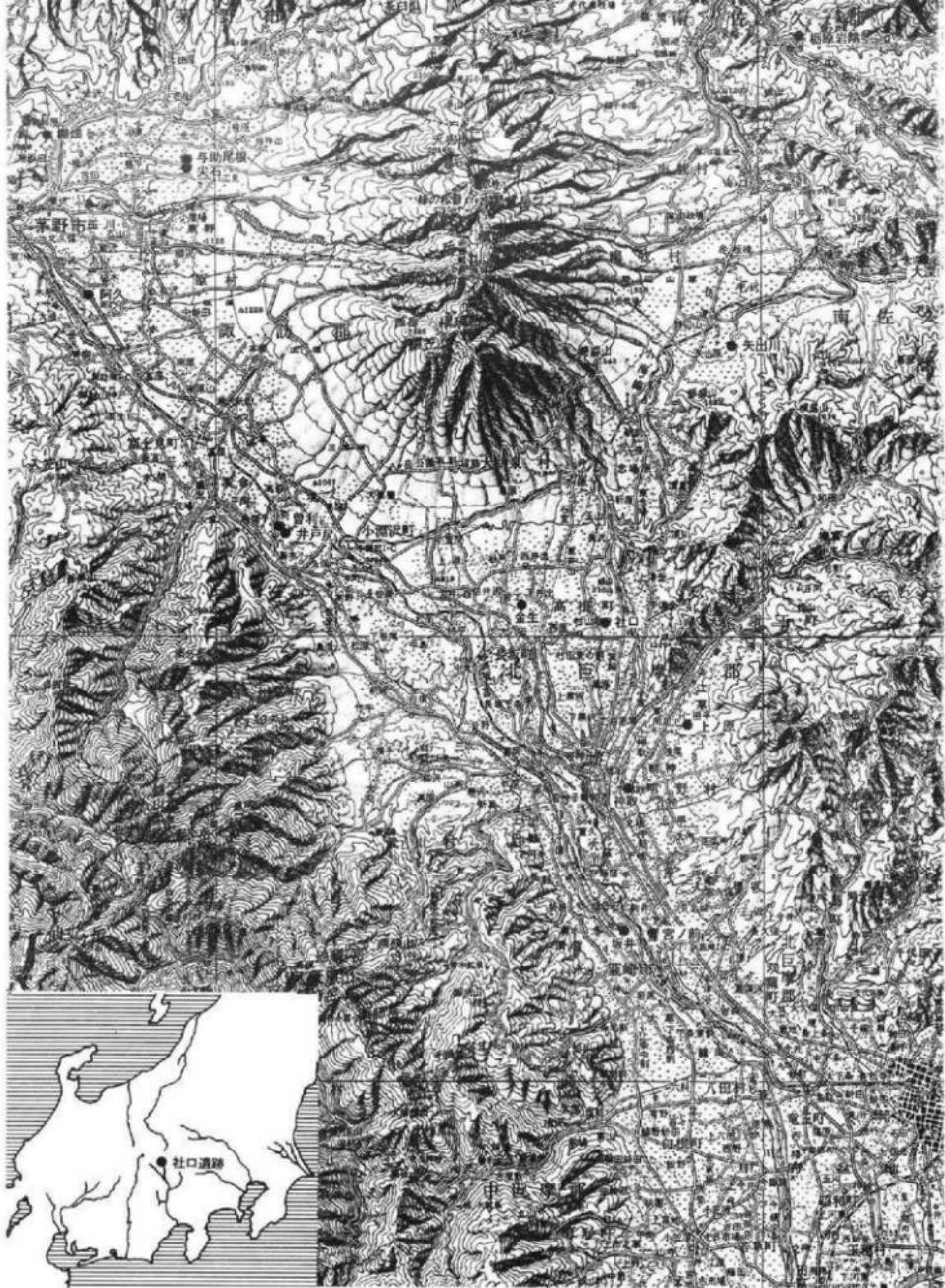
(整理作業)注記作業の簡略化のため、一括遺物はジエットマーカーを借用した。ただし、黒文字しか印字できないために、縄文土器の多くの場合必ずしも適切であったとは言えない。ナンバー付資料については手書きで注記した。接合後、実測作業に支障あるもののみ石膏を入れた。実測は通常の手描きで行ったが、ガラス透視法で効率化を計った。図面は土器の場合選択し、石器は極力実測する方針をとった。

(図版作成)図版は原則的には2倍図で作成し、トレスにあたってはロットリング0.1・0.2・0.3および丸ペンを用いた。

<調査日誌抄録>

平成7年(1995年)

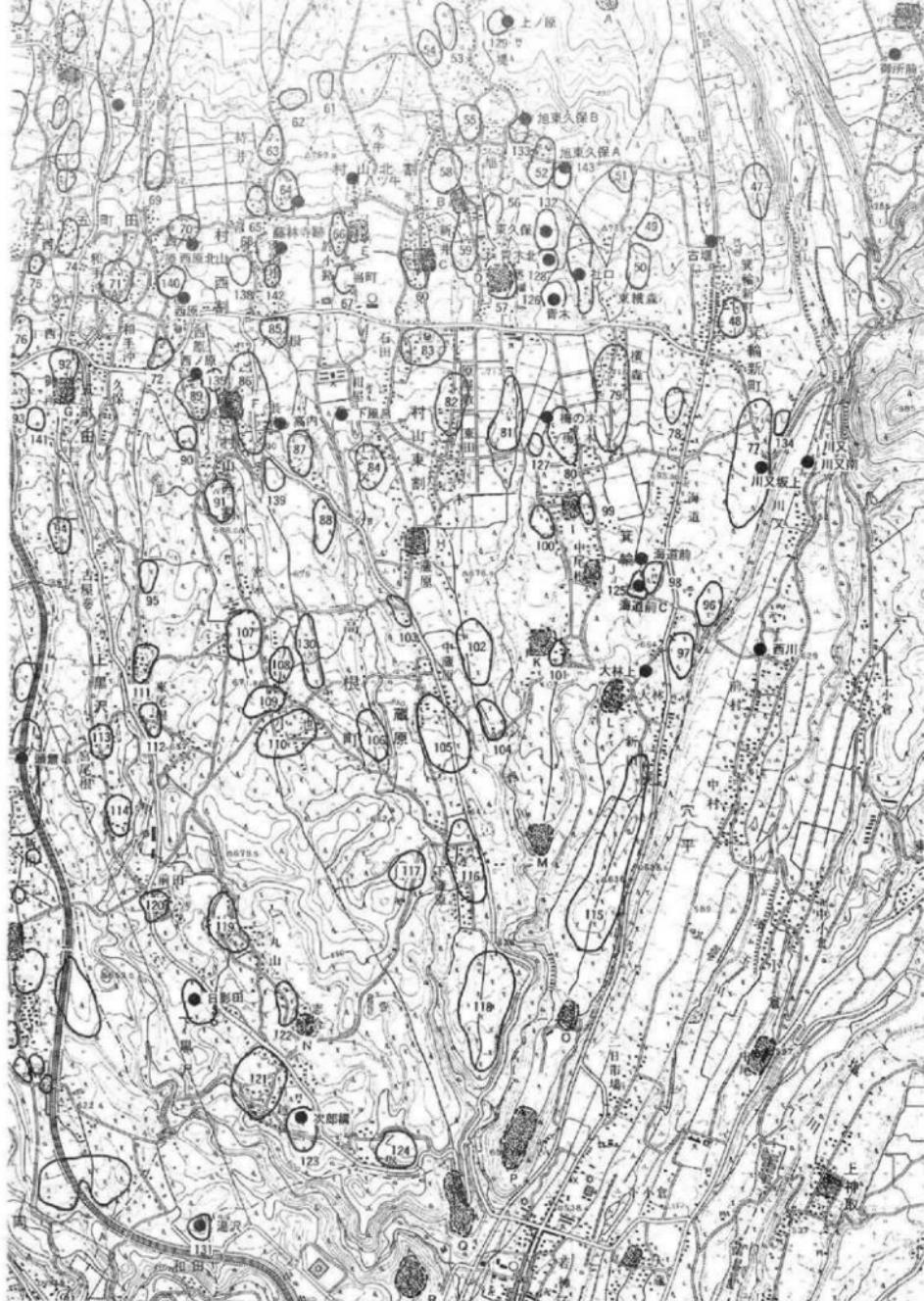
- 10月16日(日) ブレハブを設置、器材搬入し、調査の準備を整え、調査区の範囲確認を行う。また重機により縄木の抜根をする。
- 10月17日(月) 重機により表土剥ぎ開始。同時にじょれんかけによる遺構露覗を開始。
- 10月24日(月) 重機による表土剥ぎは本日で完了。
- 10月26日(水) じょれんかけ中に表土縄文土器片を発見。
- 10月30日(日) 1回目のじょれんかけは終了し、本日より遺構の掘り下げを開始。調査区北側の近・現代と思われる溝から調査を始める。
- 10月31日(月) 1号住設定。3号溝掘り下げを開始したが、非常に深く、調査難航。
- 11月1日(火) 線シングルによる杭打ち開始。グリッド設定。
- 11月2日(水) 2・3号住設定。
- 11月7日(月) 4号住設定。
- 11月9日(水) 5号住設定。
- 11月11日(金) 11号溝設定して掘り始めたが、非常に深く、調査難航。
- 11月15日(火) 6号住設定。
- 11月16日(水) 7・8・9号住設定。
- 11月17日(木) 10・11・12号住設定。
- 11月21日(月) 13号住設定。ピット番号を付け始める。
- 11月28日(月) 14号住設定。
- 12月12日(火) 北側地区の斜面(B-C61・62付近)を再度じょれんかけしたところ、表土縄文土器片が多数出土。良好な包含層であることを確認。
- 12月18日(月) 層序確認のため、早期包含層東壁に沿ってトレントン設定する。
- 12月19日(火) 高根町CATVが取材。
- 12月21日(木) ピット群の調査。
- 12月22日(金) 防寒対策のためシートを調査区全面にかけて保護し、1995年の調査は終了。
- 平成8年(1996年)
- 1月8日(月) 本日より調査再開。午後から降り出した雨が夜間雪となる。
- 1月9日(火) 雪かき。参加作業員は少ない。
- 1月10日(水) 表土が本格的に凍結し始めたため、霜わらの「こも」を購入し造構内に敷いてみる。
- 1月11日(木) 早期包含層に東西方向のサブトレントンを設定。
- 1月12日(金) 中央地区で再度じょれんかけをし、敷石住居を確認。後期遺構の広がりが予想される。青木遺跡のちょうど東側に相当する。
- 1月19日(金) 午前包含層の断面図作成し、土層観察を行う。
- 1月26日(金) 15~21号住設定。調査開始。
- 1月27日(土) 午前10時より遺跡見学会。地元の方がたを中心に90名ほどが参加。
- 1月30日(火) 午前中、北側地区的空撮のために清掃したが、風が強く中止となる。
- 1月31日(水) 河西学氏(山梨文化財研究所・地質研究室)による土層サンプリング。早期包含層を中心依頼。南地区的じょれんかけ(2回目)。
- 2月1日(木) 22・23号住設定。時雪が舞い、土は厚く凍りついだままであった。作業は難航。
- 2月6日(火) 21・25号住設定。
- 2月7日(水) 線シングルによる空撮(1回目)。
- 2月8日(木) 26号住設定。
- 2月13日(火) 南地区的じょれんかけを行い、27号住設定。
- 2月14日(水) 28・29号住設定。
- 2月16日(金) 30・31号住設定。
- 2月21日(水) 32号住設定。このころ、早期包含層の掘り下げを終結。
- 2月23日(金) 本日にて大半の作業員は終了。
- 2月24日(土) 山梨県考古学協会埋蔵文化財パトロールが実施され、併せて遺跡見学のため来隊(社員遺跡東側で行われた重機による農地開墾状況を視察)。
- 3月4日(月) 33・34号住設定。
- 3月5日(火) 東人考古学研究会メンバーが見学。
- 3月12日(火) 霜解明あり。風非常に強い。35号住設定。
- 3月13日(水) 36号住設定。
- 3月14日(木) 北側地区的調査終了部分にて、周間に盛り上げた堆土を調査区内に戻すため、重機を入れる。同時に貨輪橋「ふるせぎ」箇所を重機で掘削し、断面記録。
- 3月16日(土) 9号溝付近の上部器が多く出土した部分を念のため再度じょれんかけしたところ、住居が確認され、37号住を設定。
- 3月18日(月) 空撮準備をしたが、風が強く中止。
- 3月19日(火) 朝、空撮(2回目)。
- 3月21日(木) 道具洗浄、ブレハブ内清掃。発掘調査は本日で終了。
- 3月22日(金) 器材撤収。
- 3月26日(火) 勘定処理等終了し、現場での業務は終了。



第1図 遺跡の位置 (1:200,000)



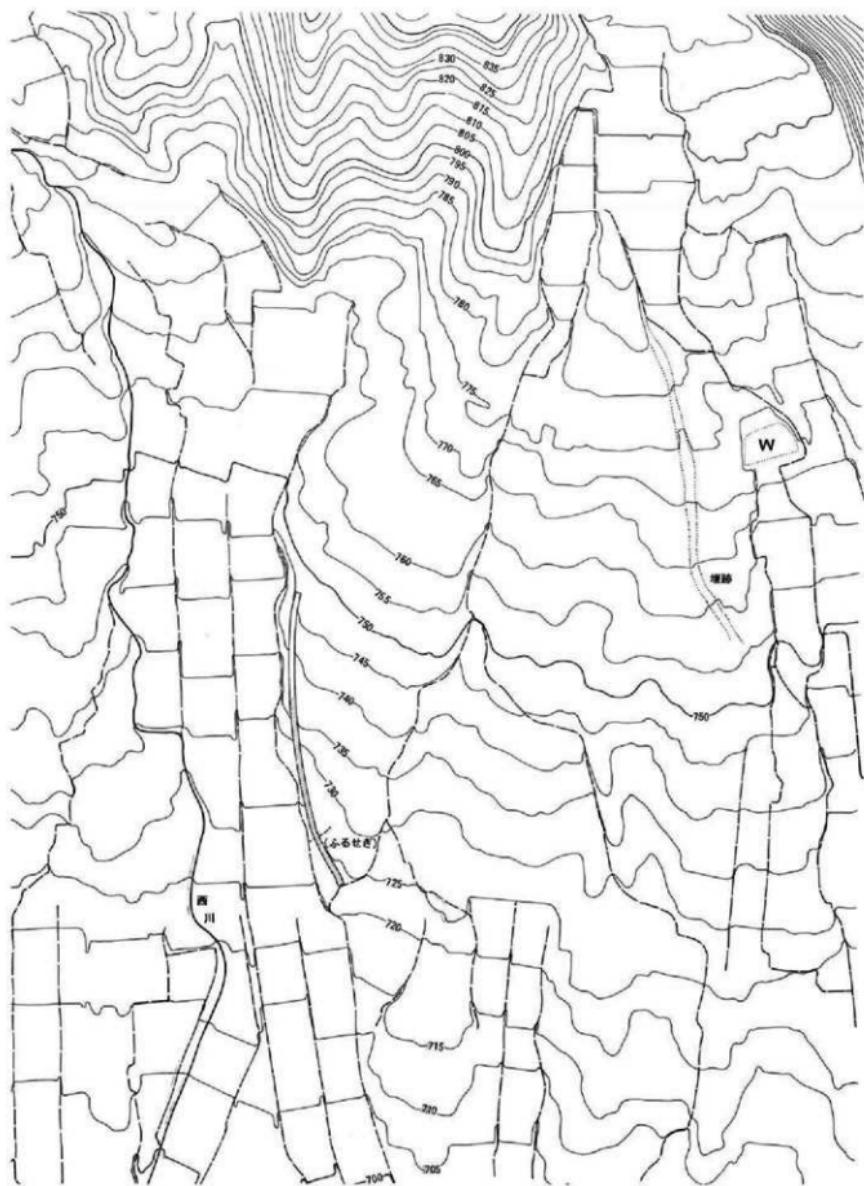
第2圖 道跡分布圖 (1:50,000)



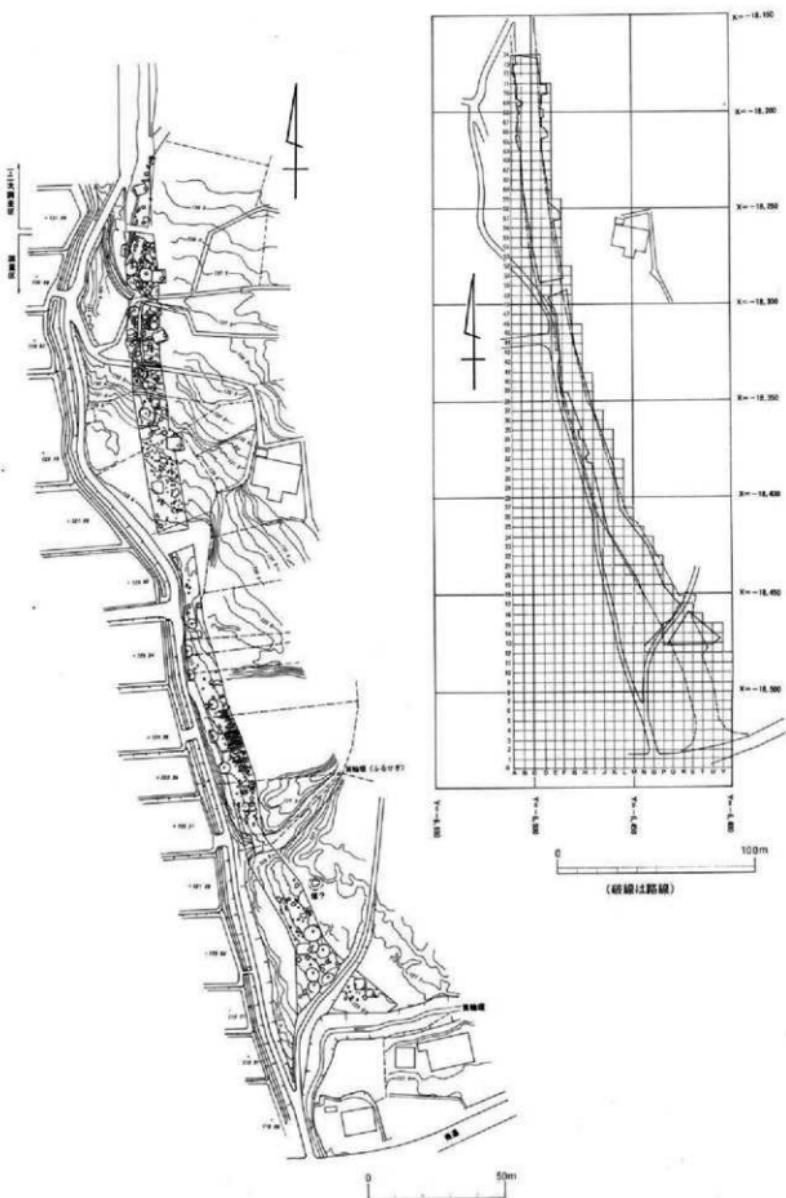
第3図 遺跡分布図(1:25,000, 網部は城館址。遺跡名は第1表参照)



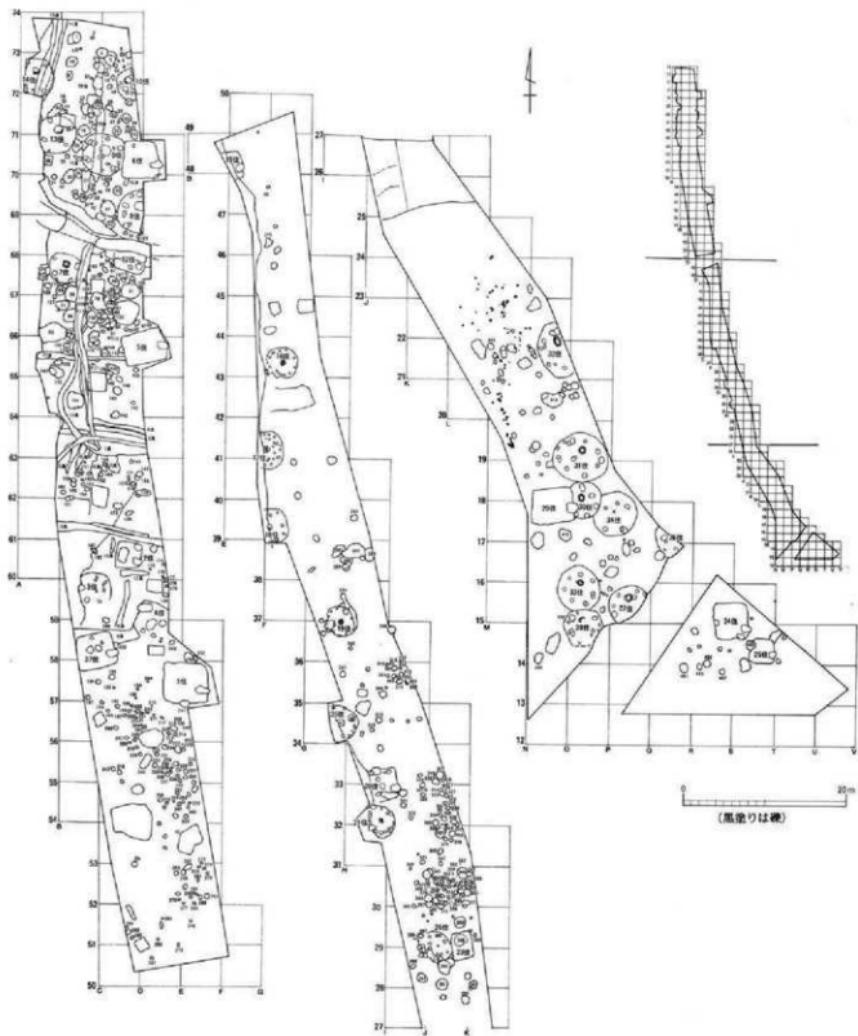
第4図 調査区周辺図（1:10,000）（道路網部が調査区）



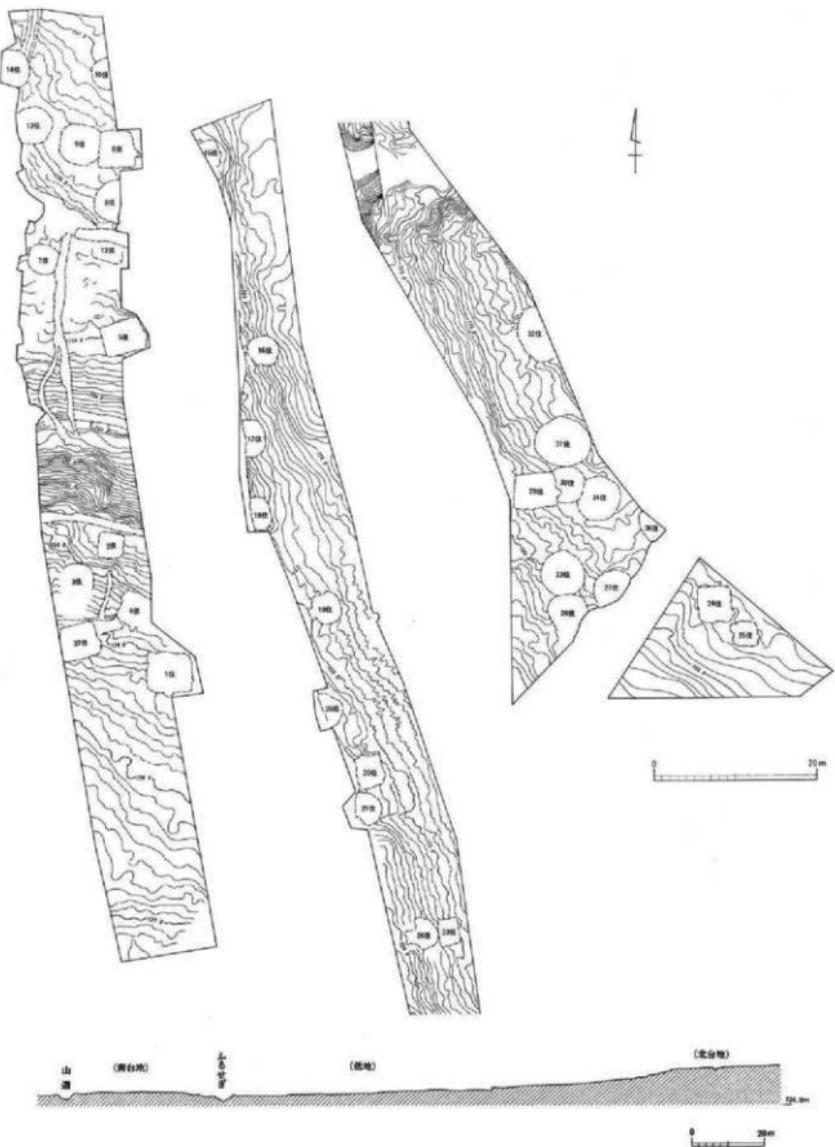
第5図 調査区周辺の地形図および堰・用水路図（破線は堰・用水路）



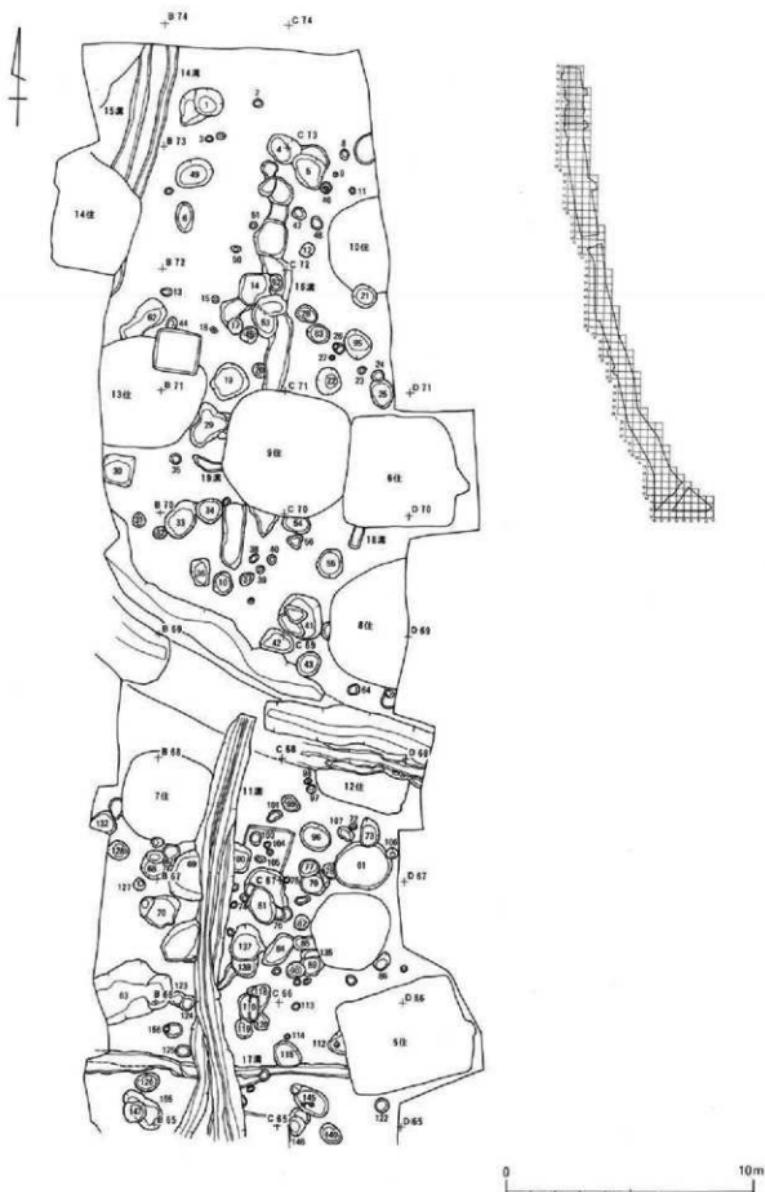
第6図 進路付近の地形現況図およびグリッド配置図（コンタは50cm、破線は地境）



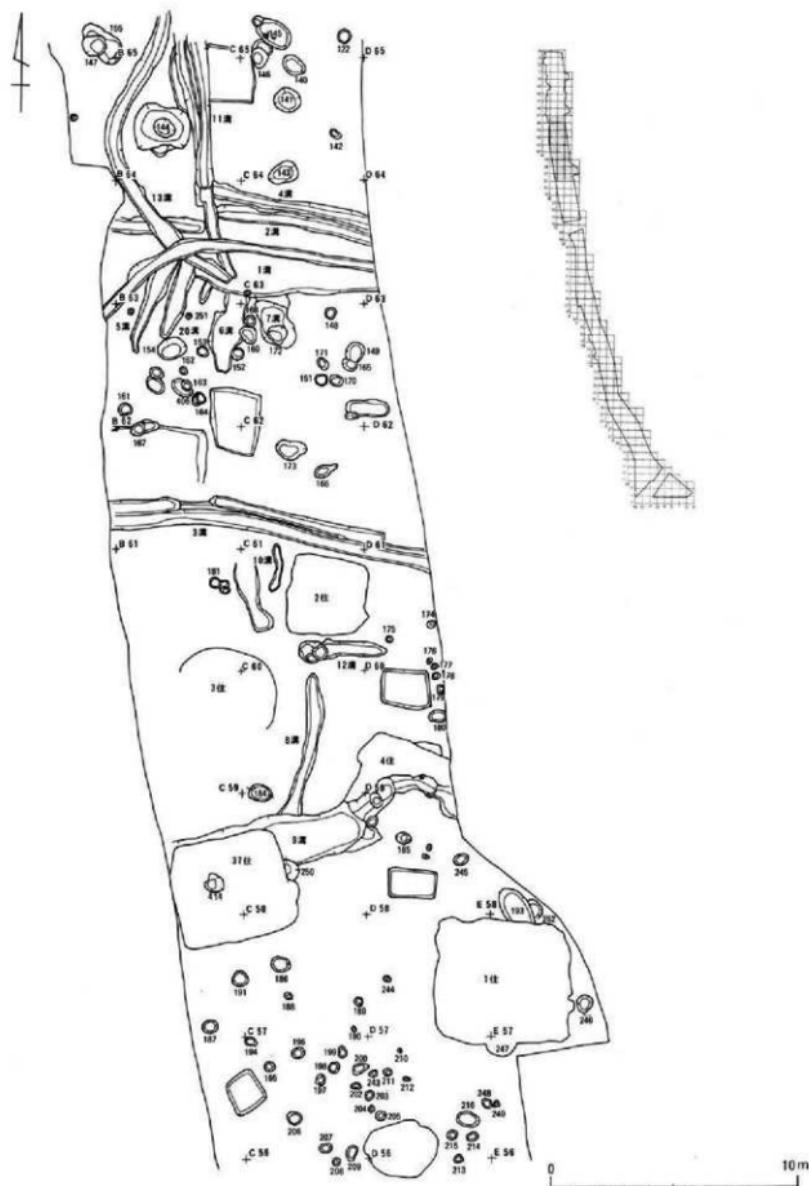
第7図 遺構全体図



第8図 遺跡の地形及び縦断面図（10cmコンタ）



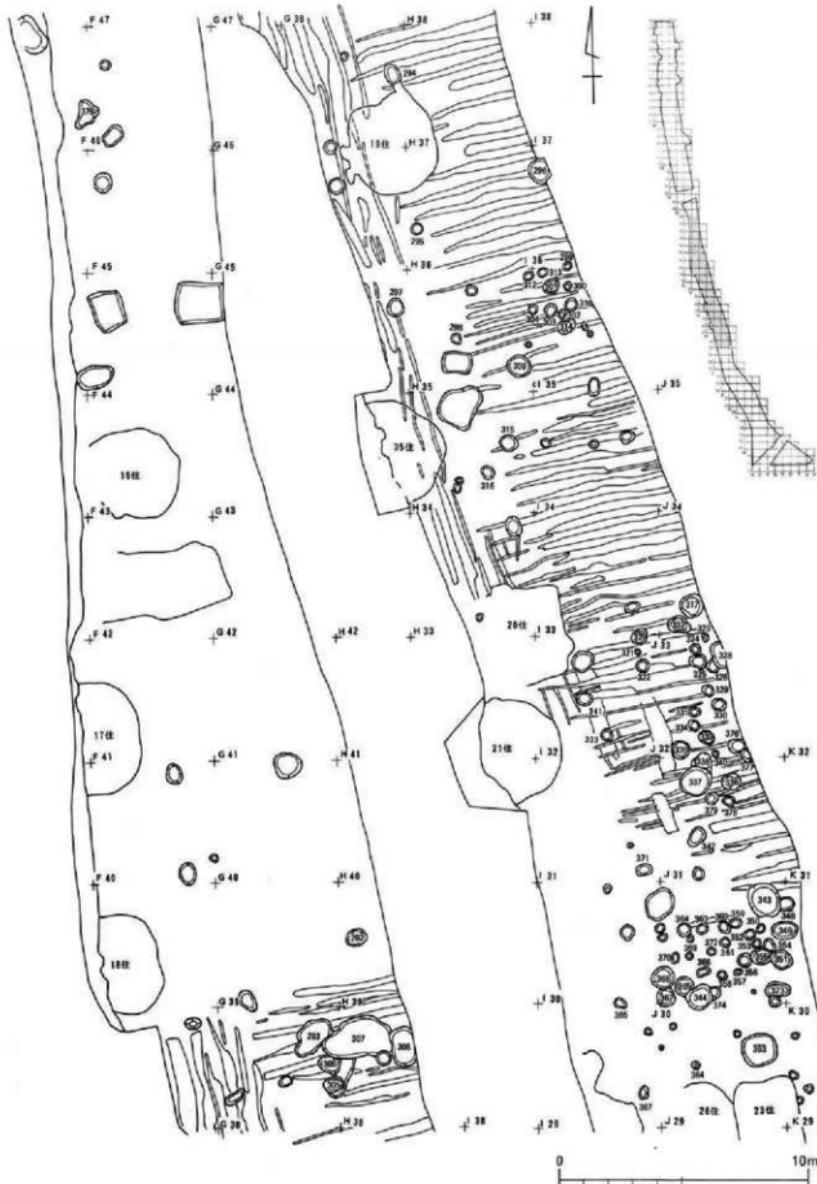
第9図 遺傳分布図(1)



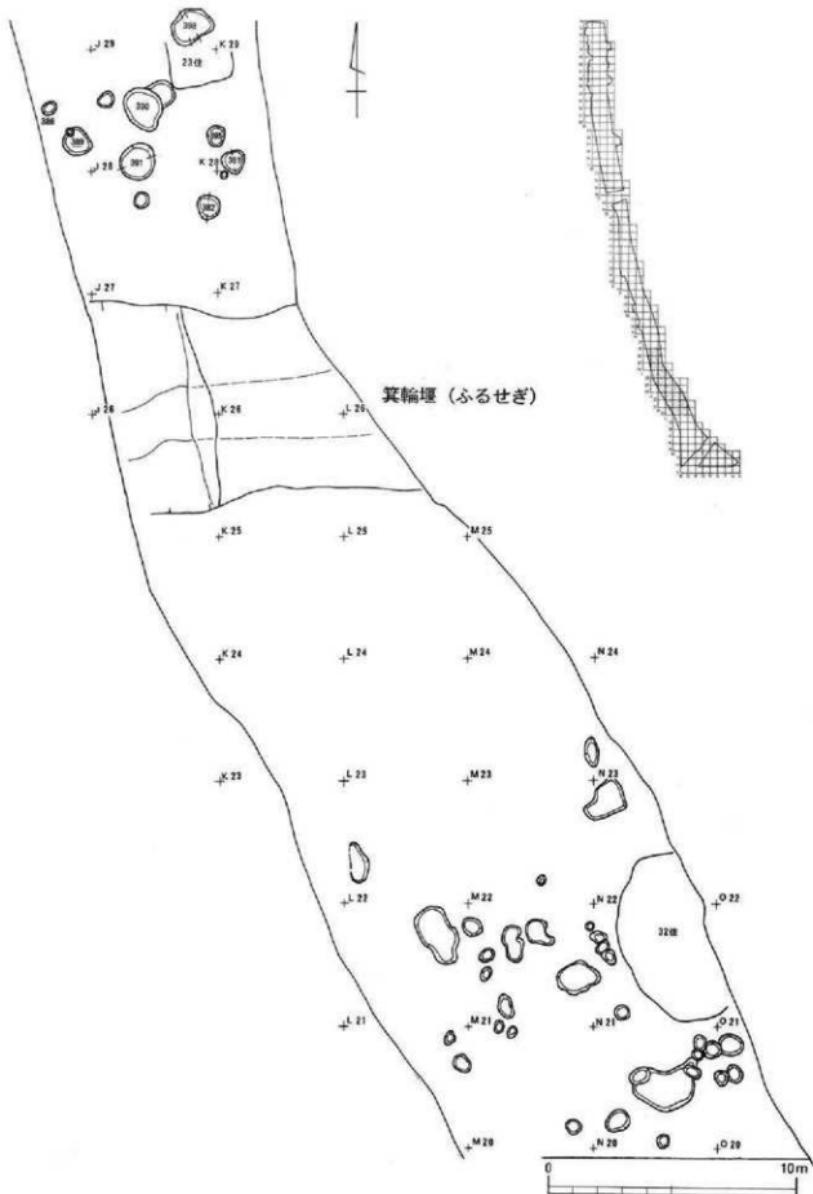
第10圖 滲構分布圖(2)



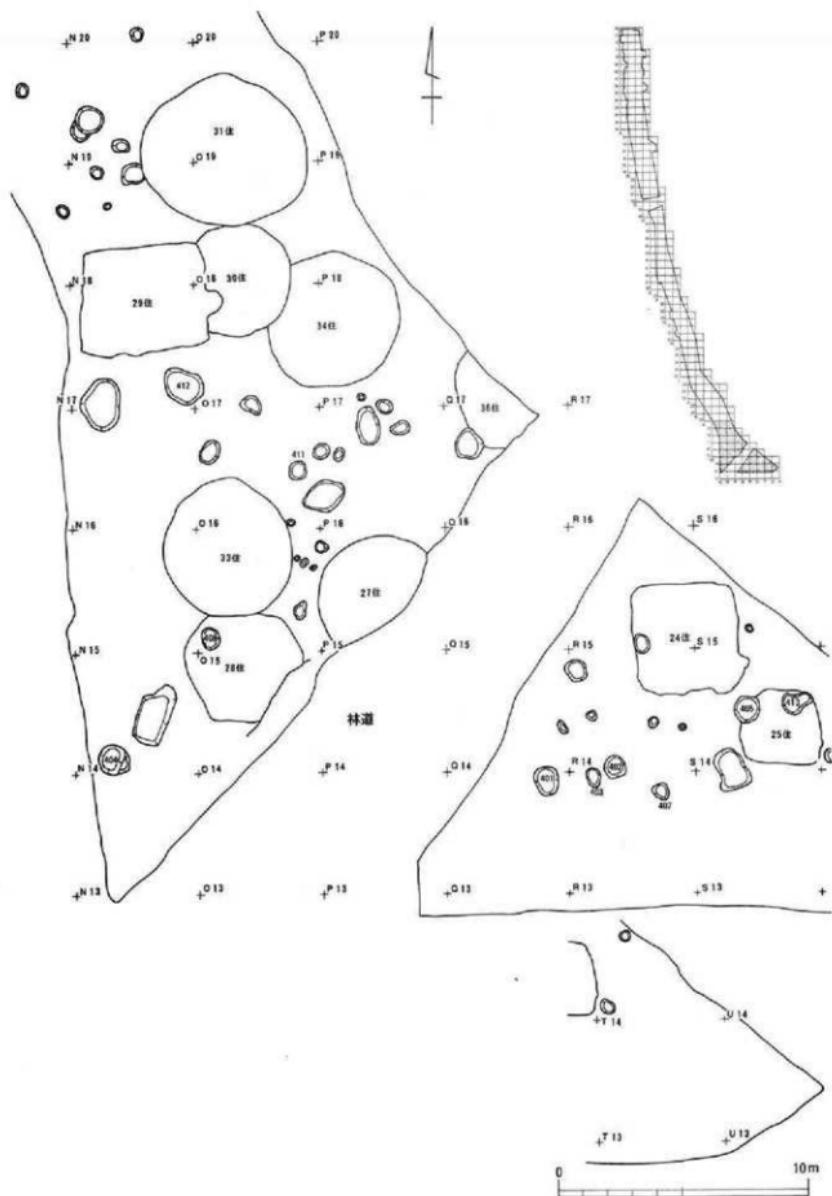
第11図 遺構分布図(3)



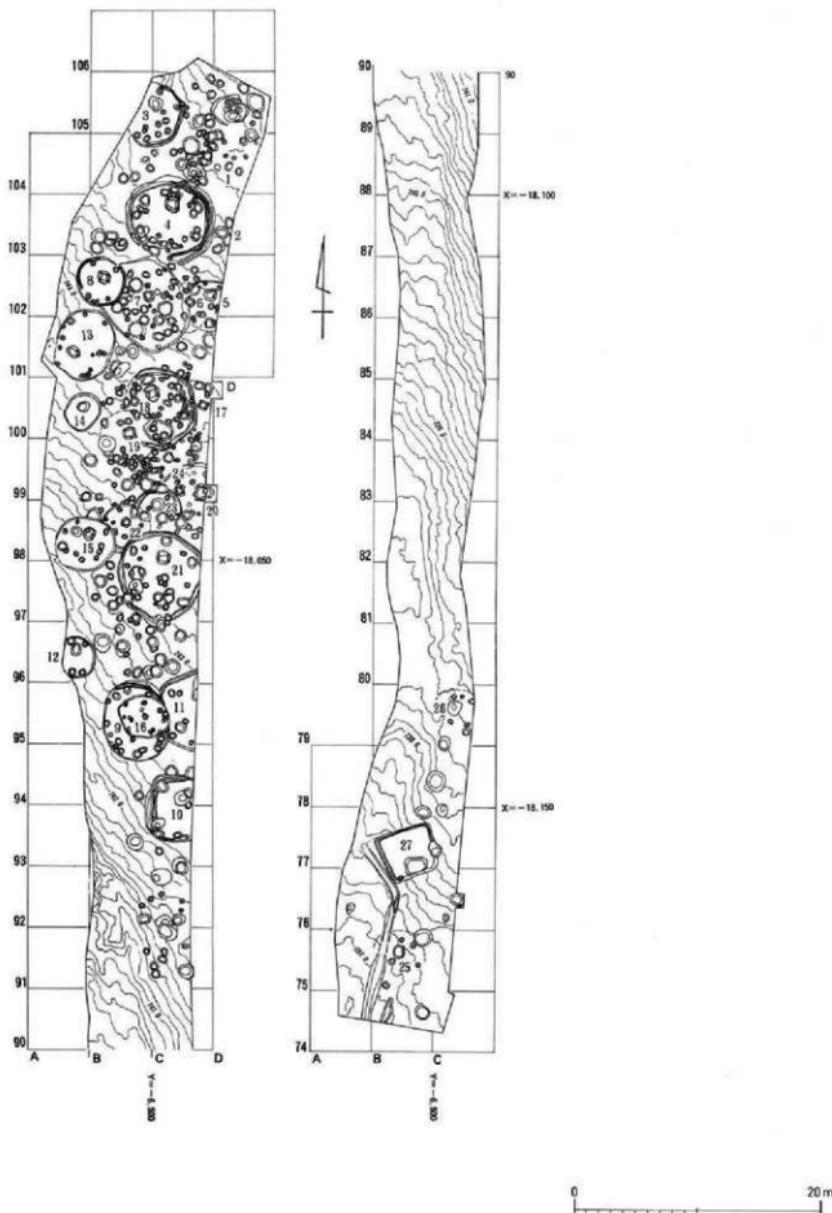
第12図 遺構分布図(4)



第13図 遺構分布図 (5)



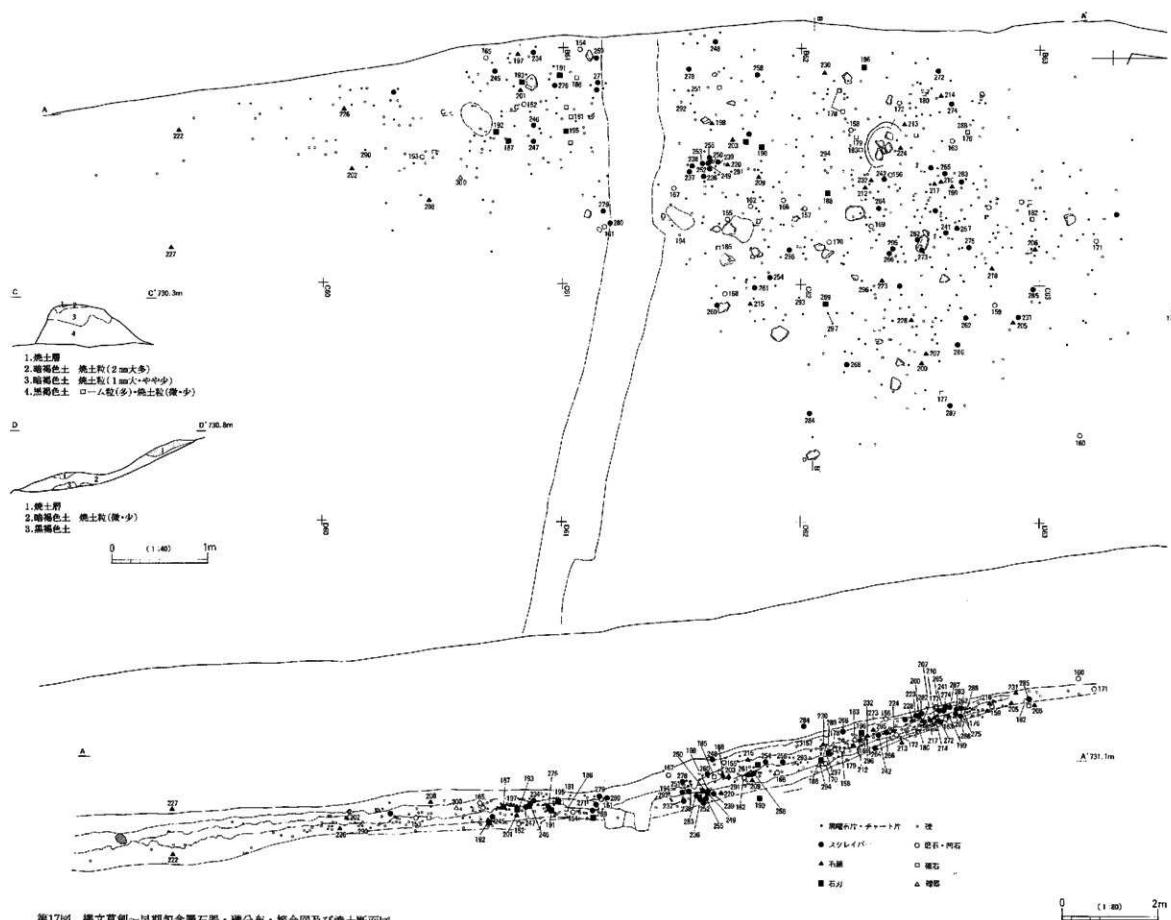
第14図 遺跡分布図(6)



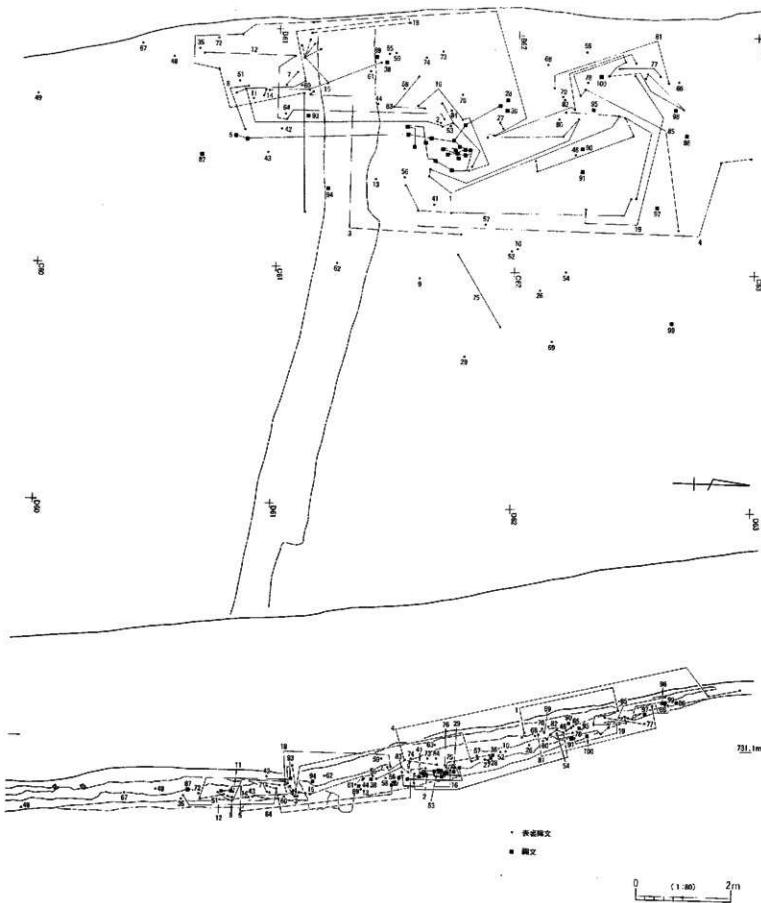
第15図 社口遺跡2次調査全体図（平成6年度高根町教委調査、コンタは10m、数字は住居番号）



第16図 織文草創～早期包含磨土器分布図



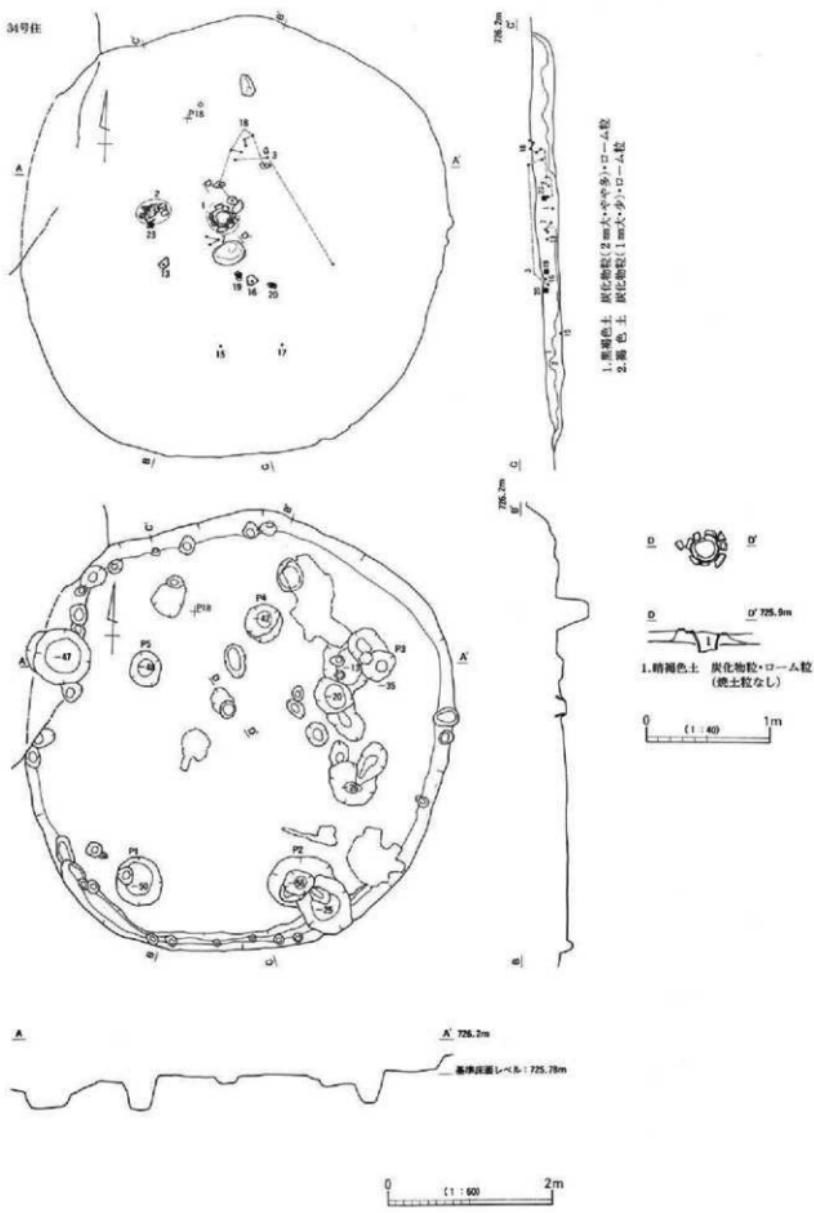
第17圖 標文草創～早期包含磨石器・礮分布・摺合圖及石壁土斷面圖



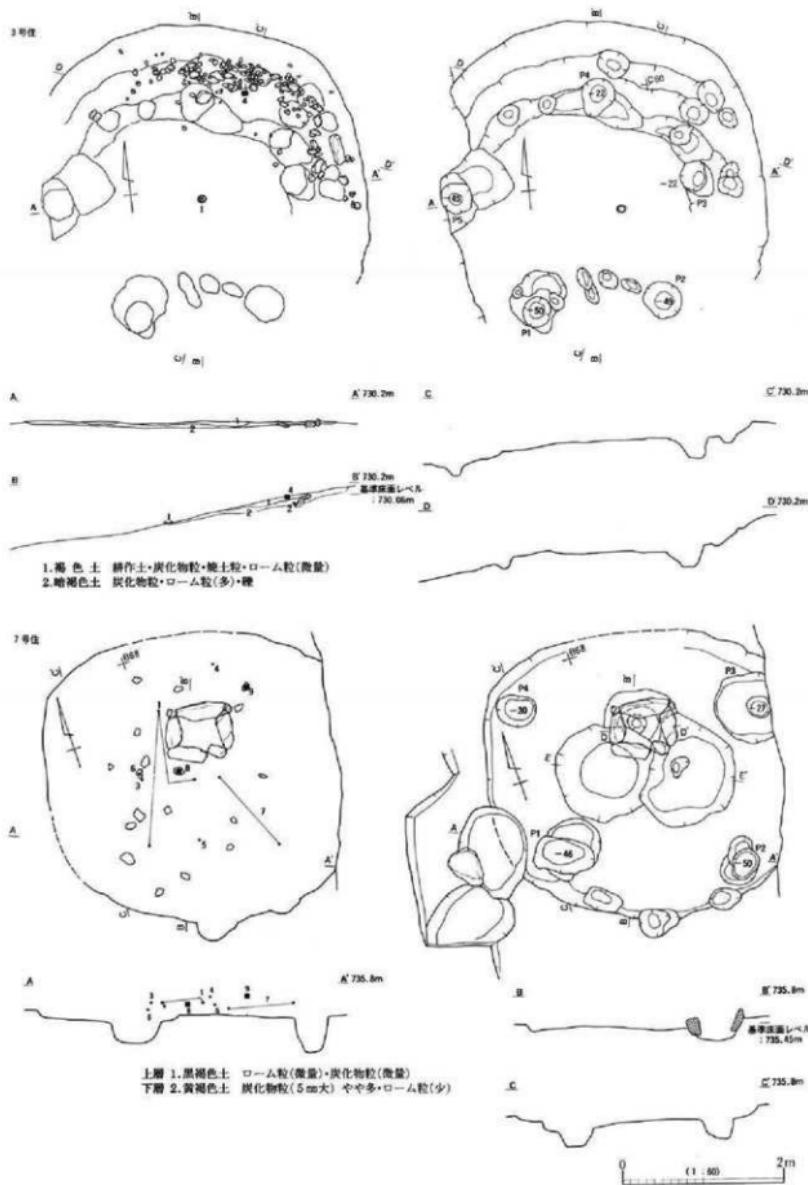
第18図 繩文草創—早期土器の分布・接合図(1)



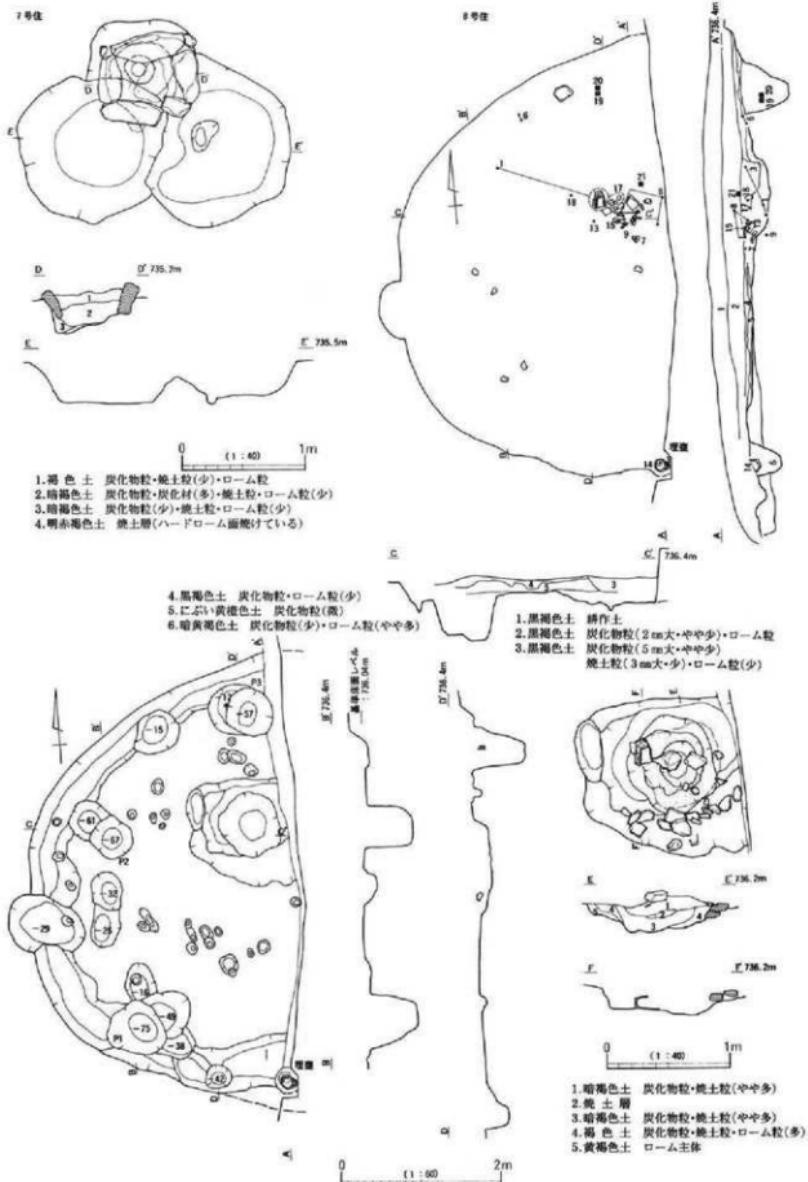
第19図 繩文草創～早期土器の分布・接合図(2)



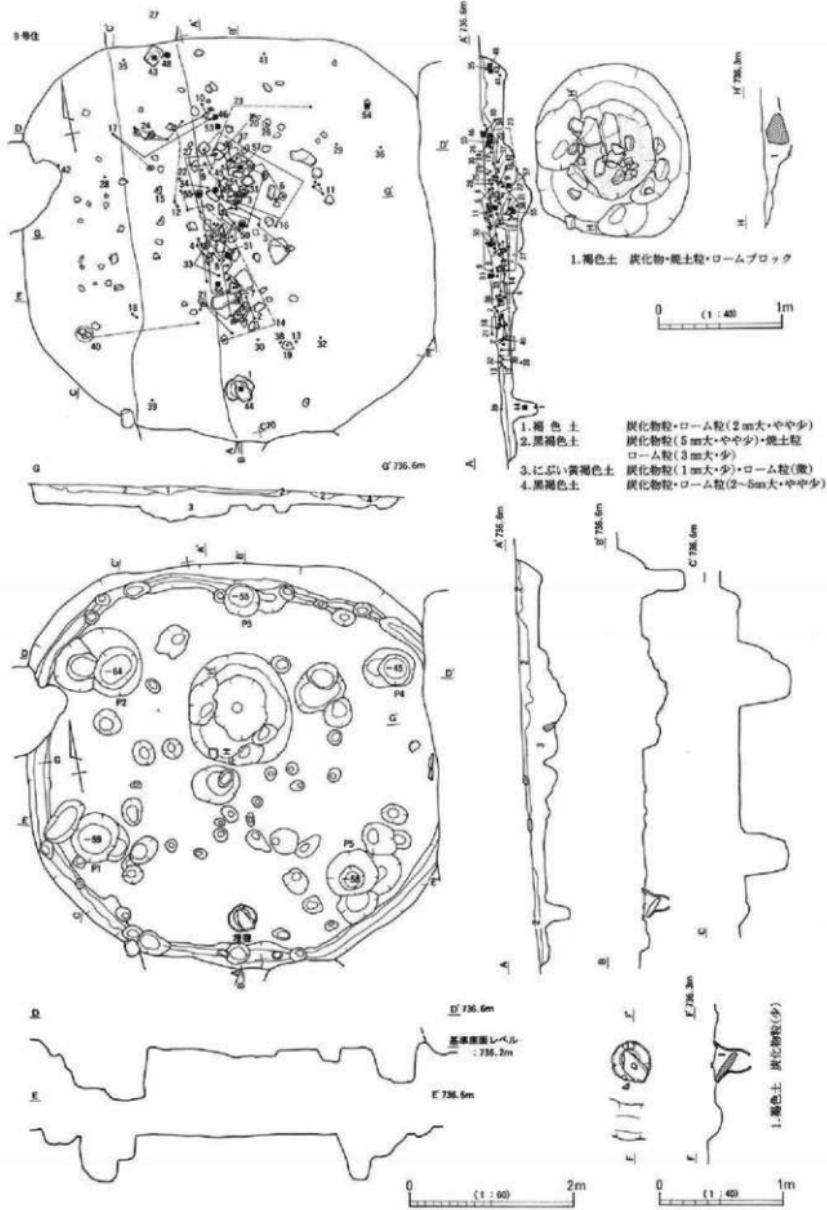
第20図 34号住実測図



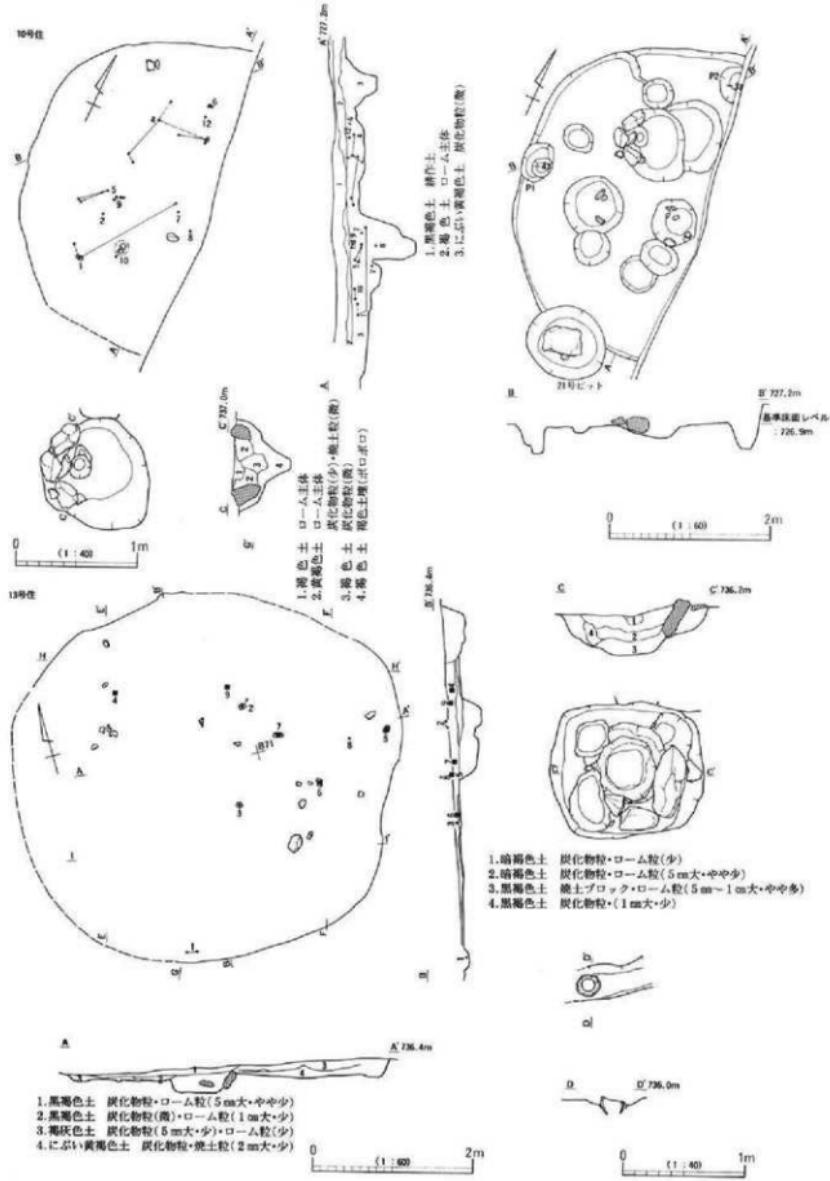
第21図 3・7号住実測図



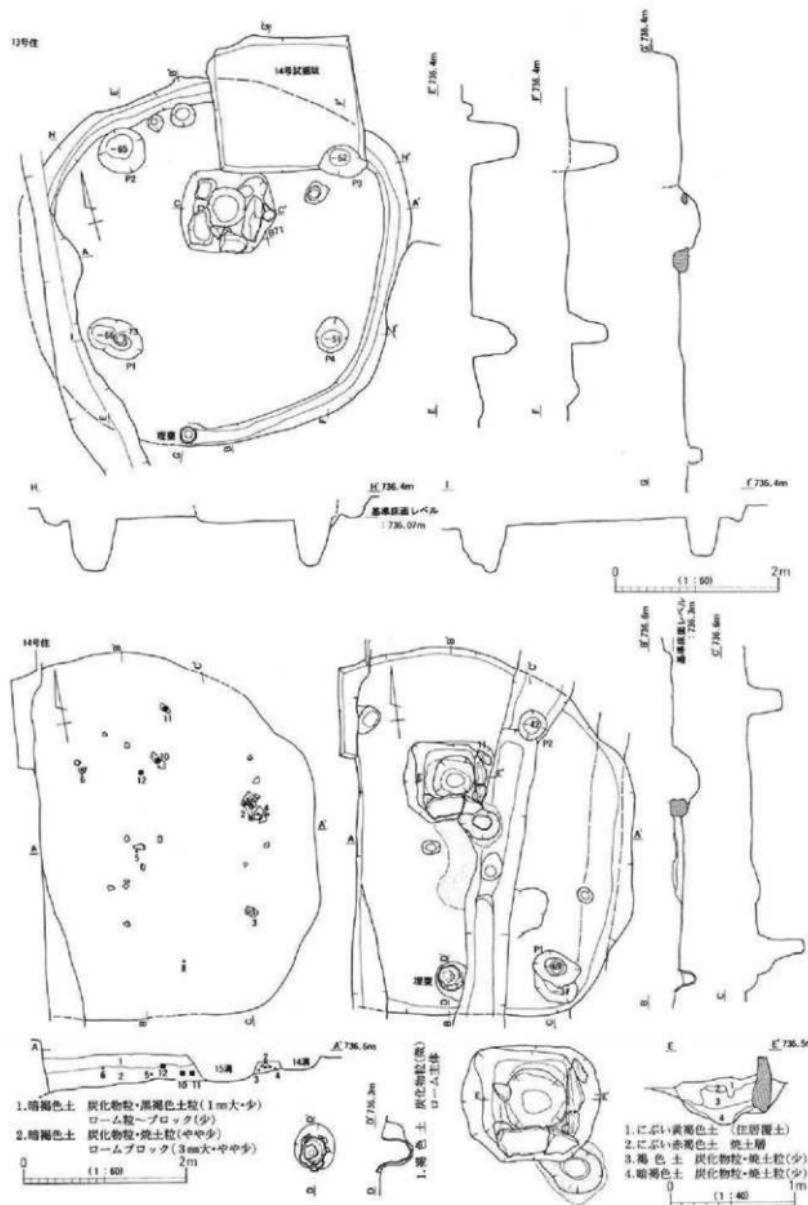
第22図 7・8号住家実測図



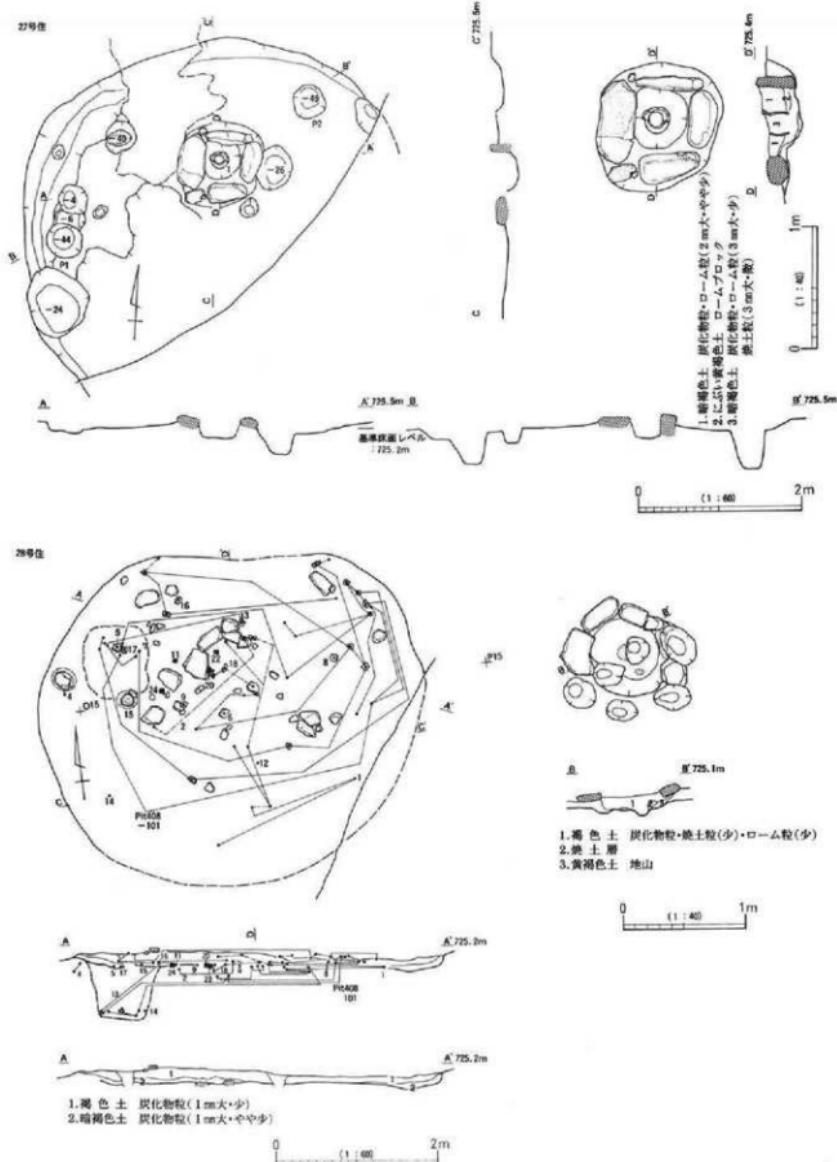
第23圖 9號住家測區



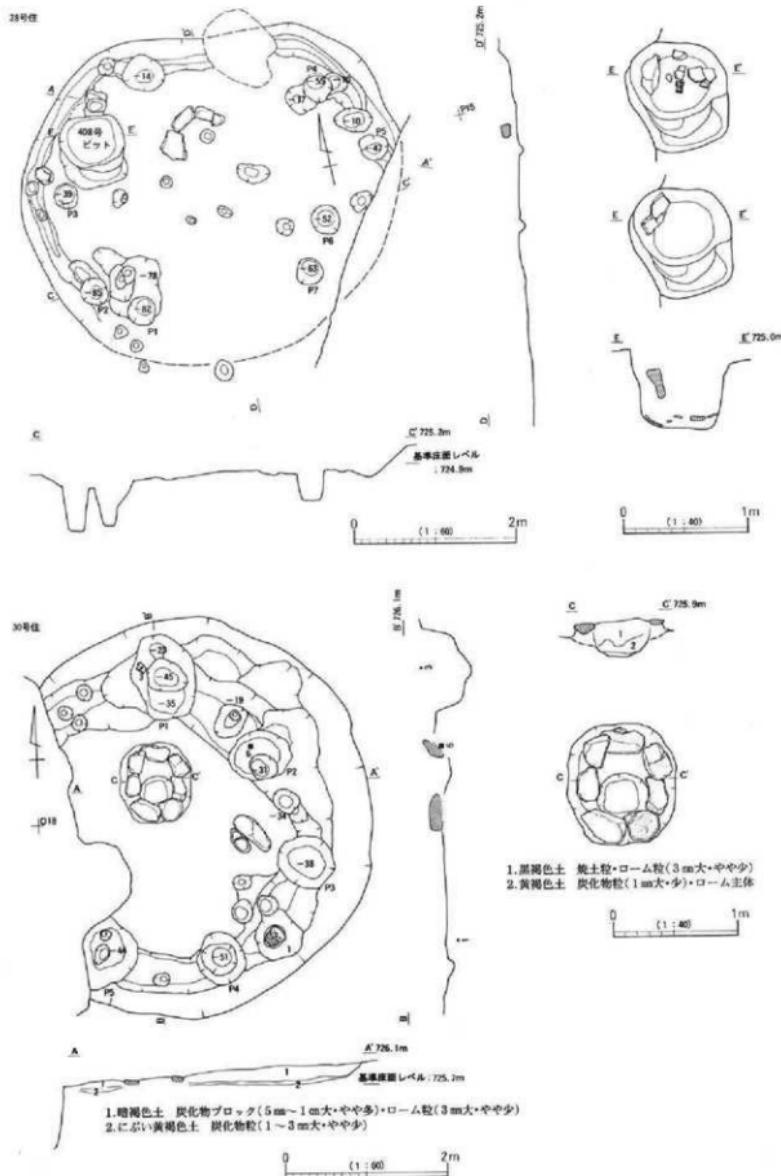
第24図 10・13号住実測図



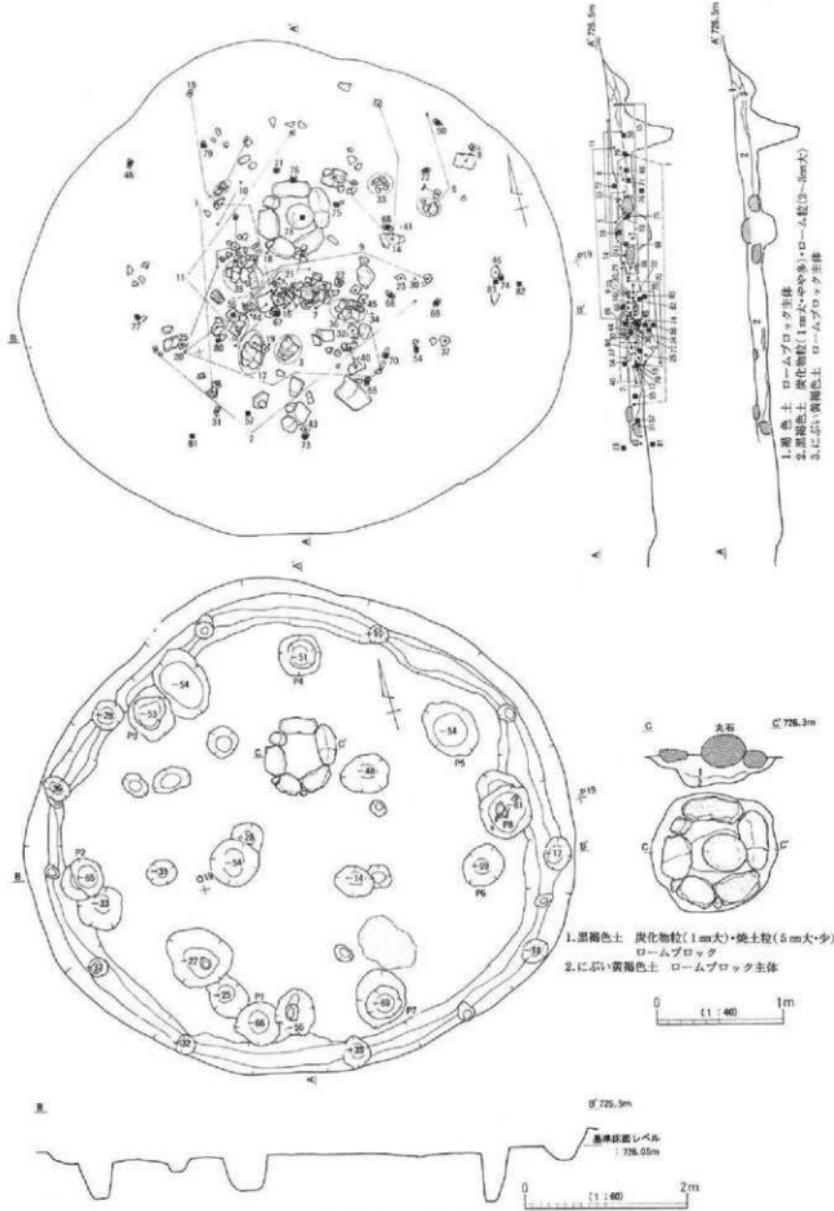
第25図 13・14号住実測図



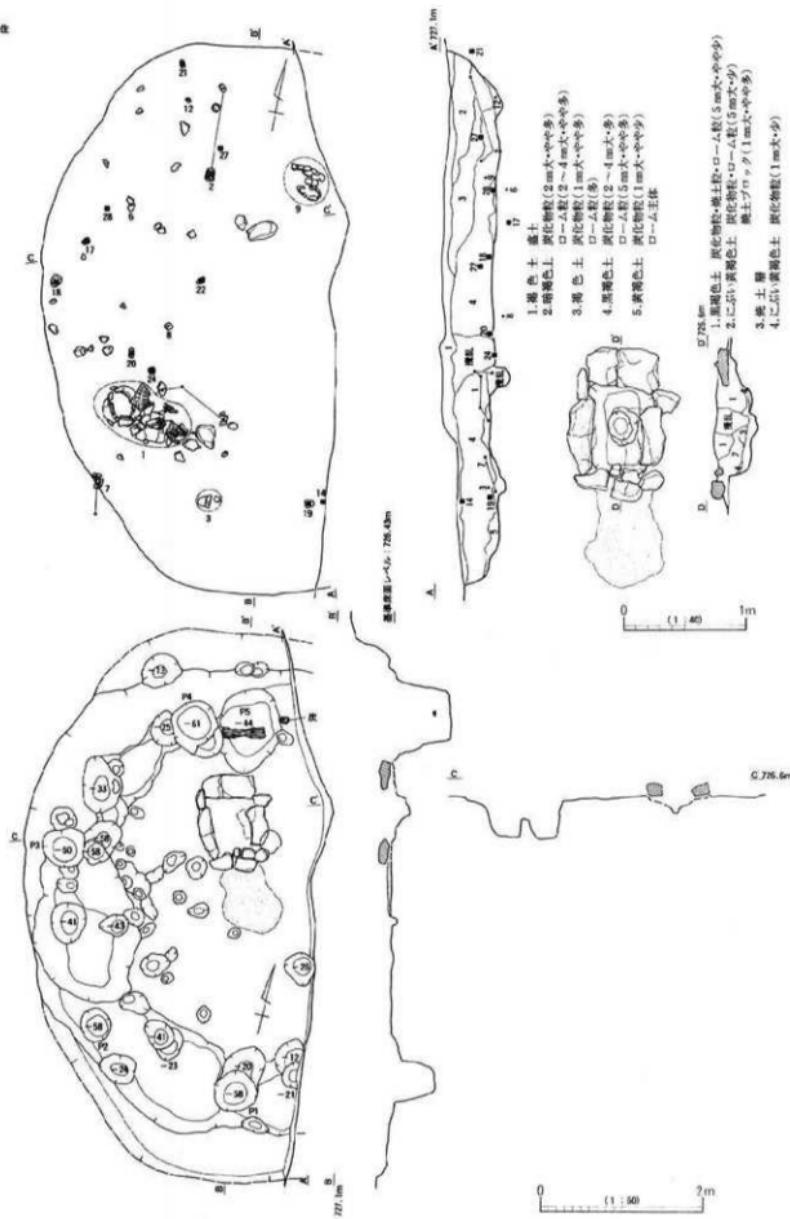
第26図 27・28号住実測図



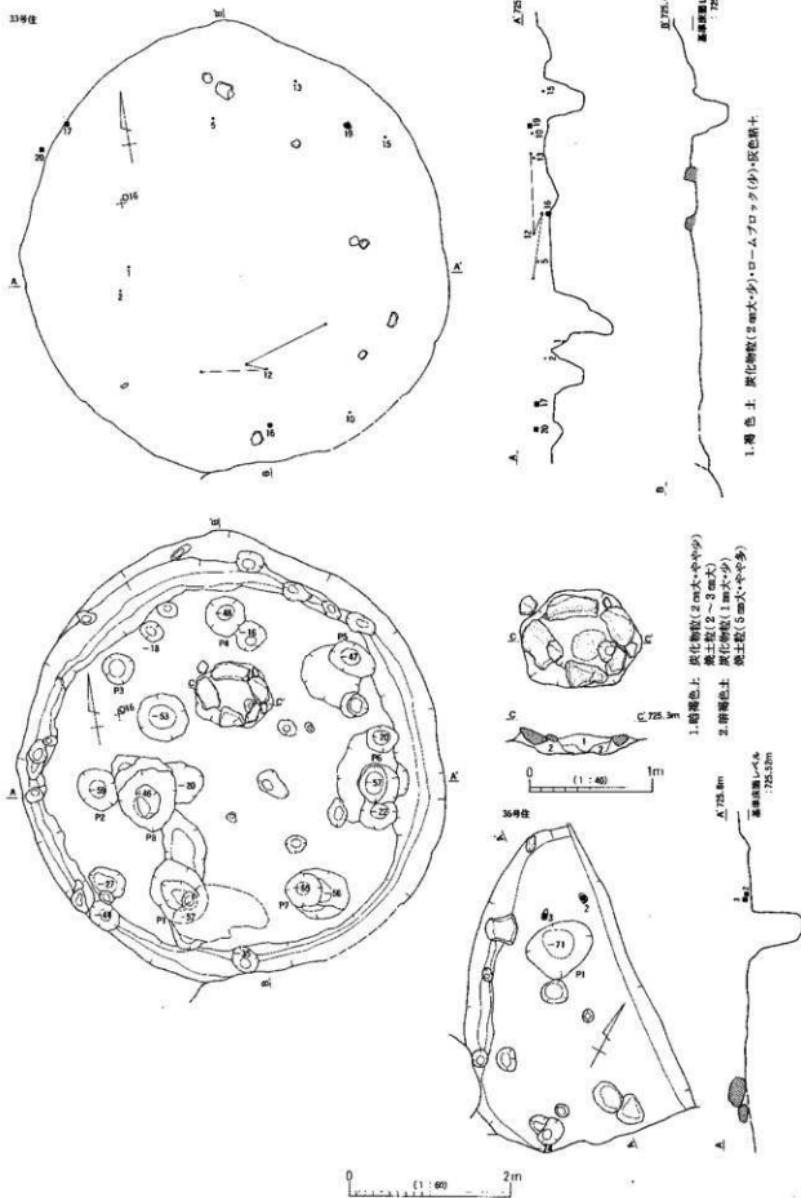
第27図 28・30号住実測図



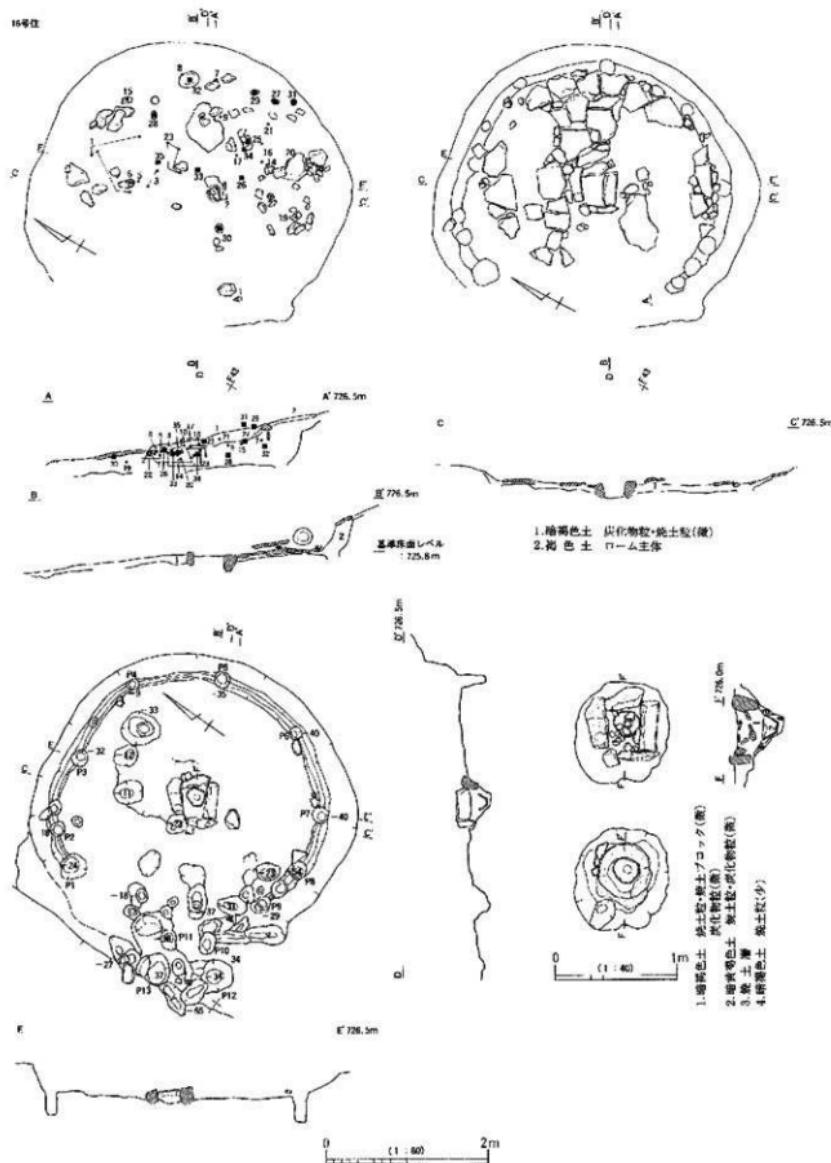
第28図 31号住実測図



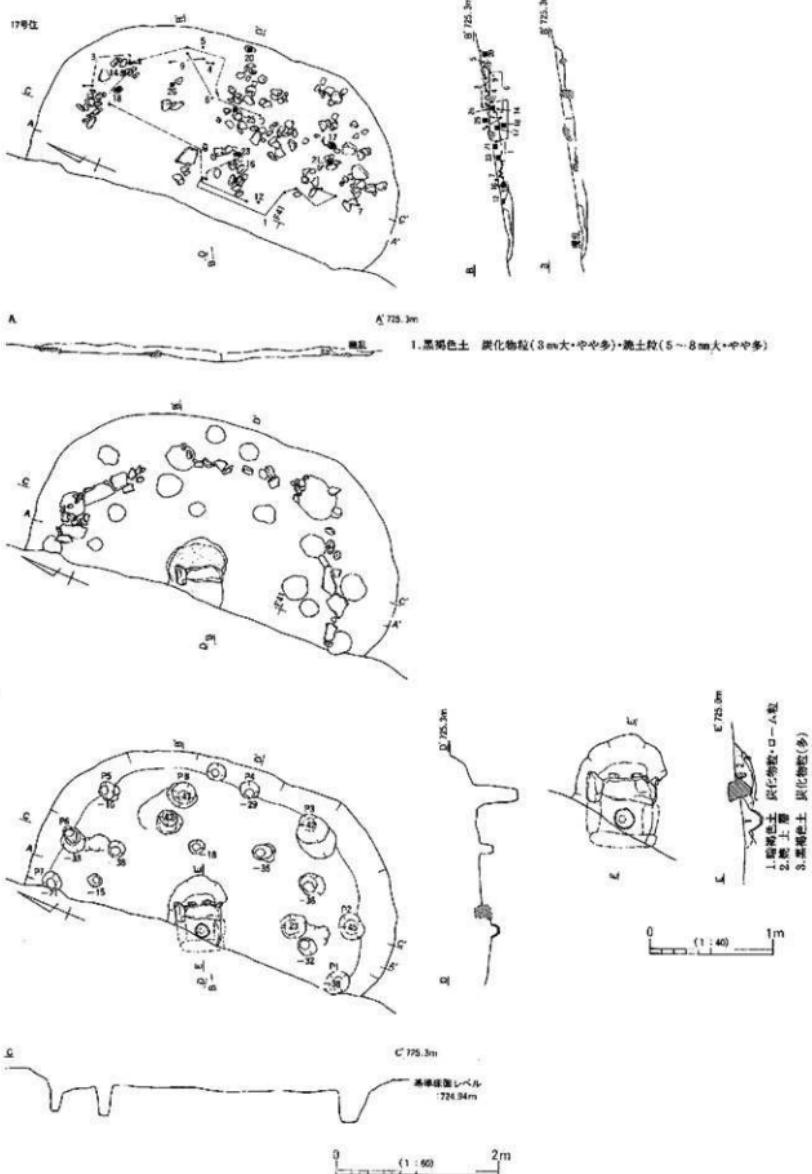
第29図 32号住実測図



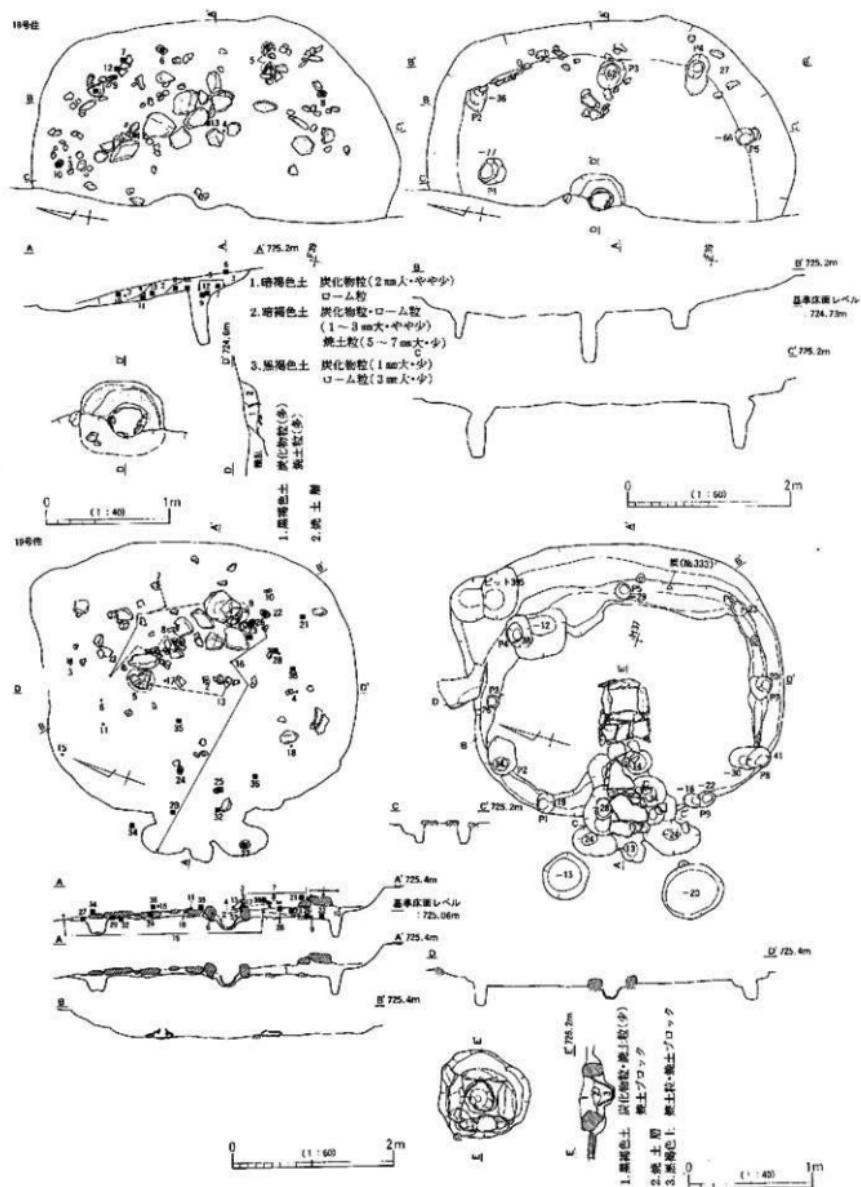
第30図 33・36号住実測図



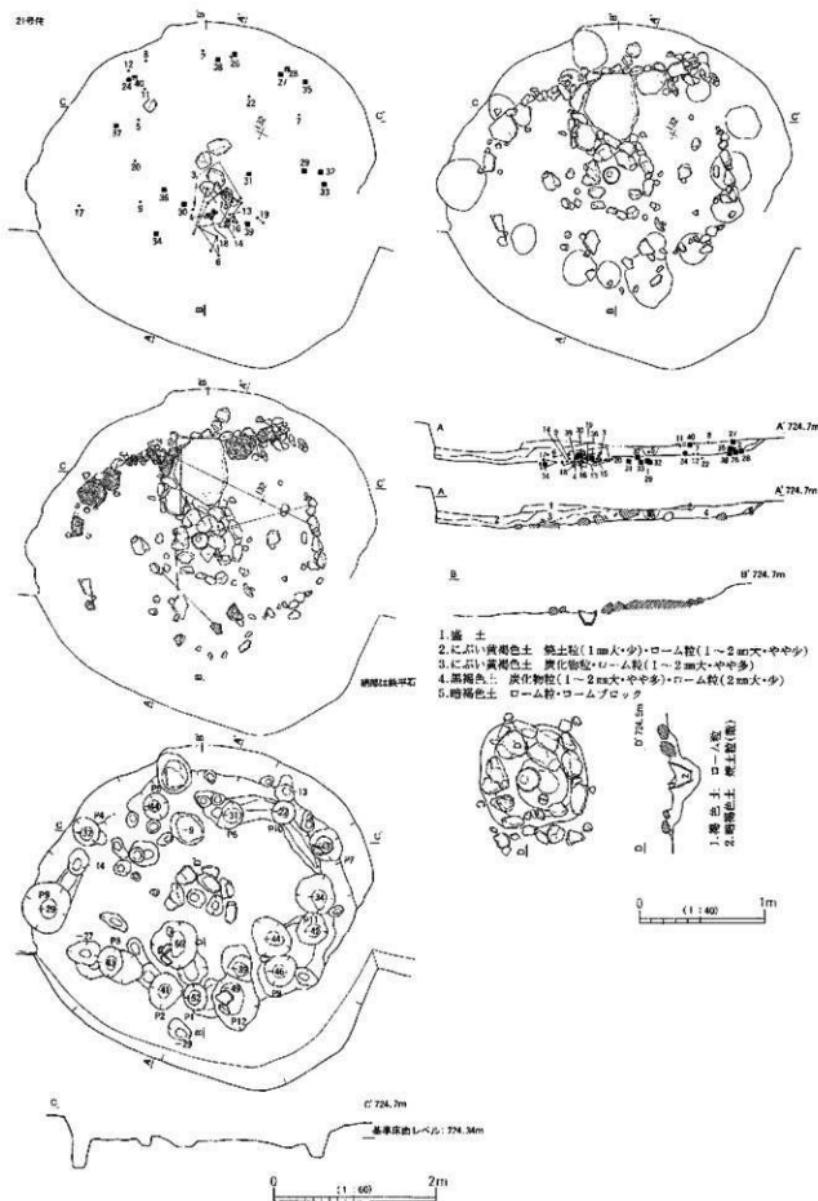
第31図 16号住家測図



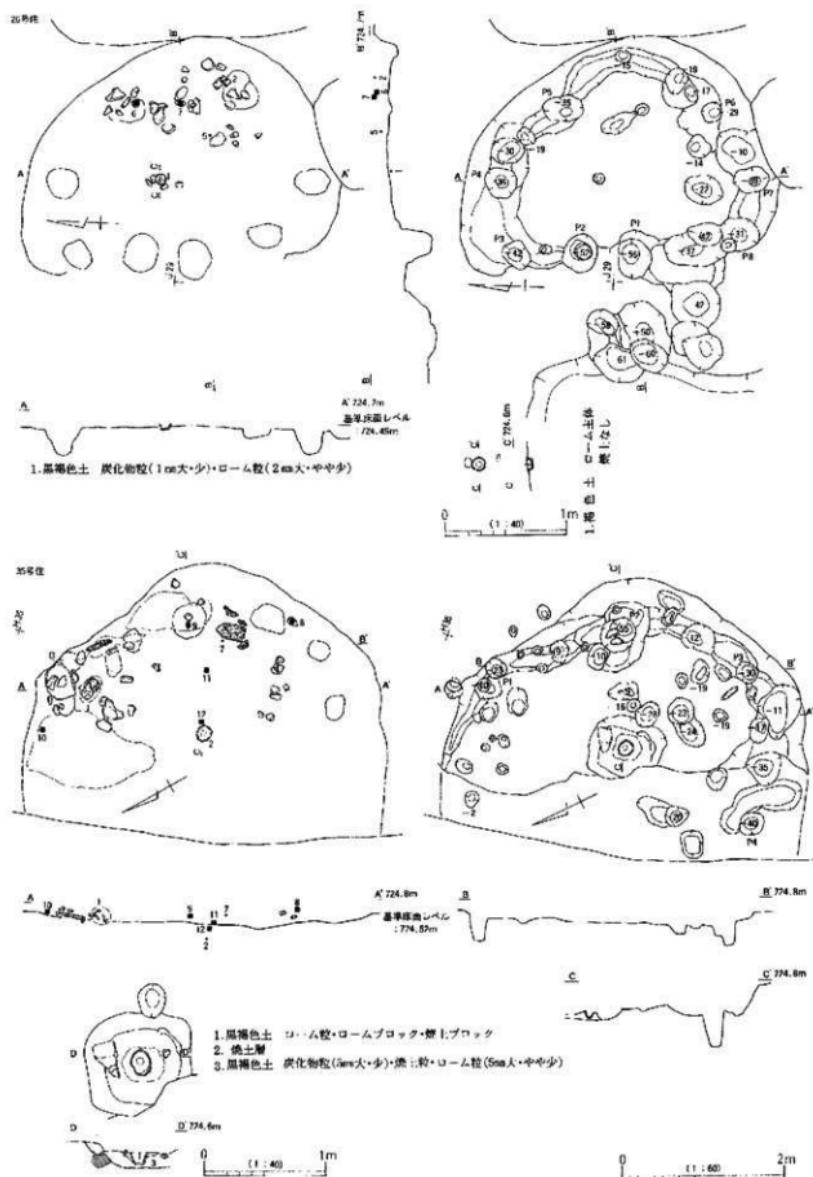
第32図 17号住実測図



第33図 18・19号住実測図

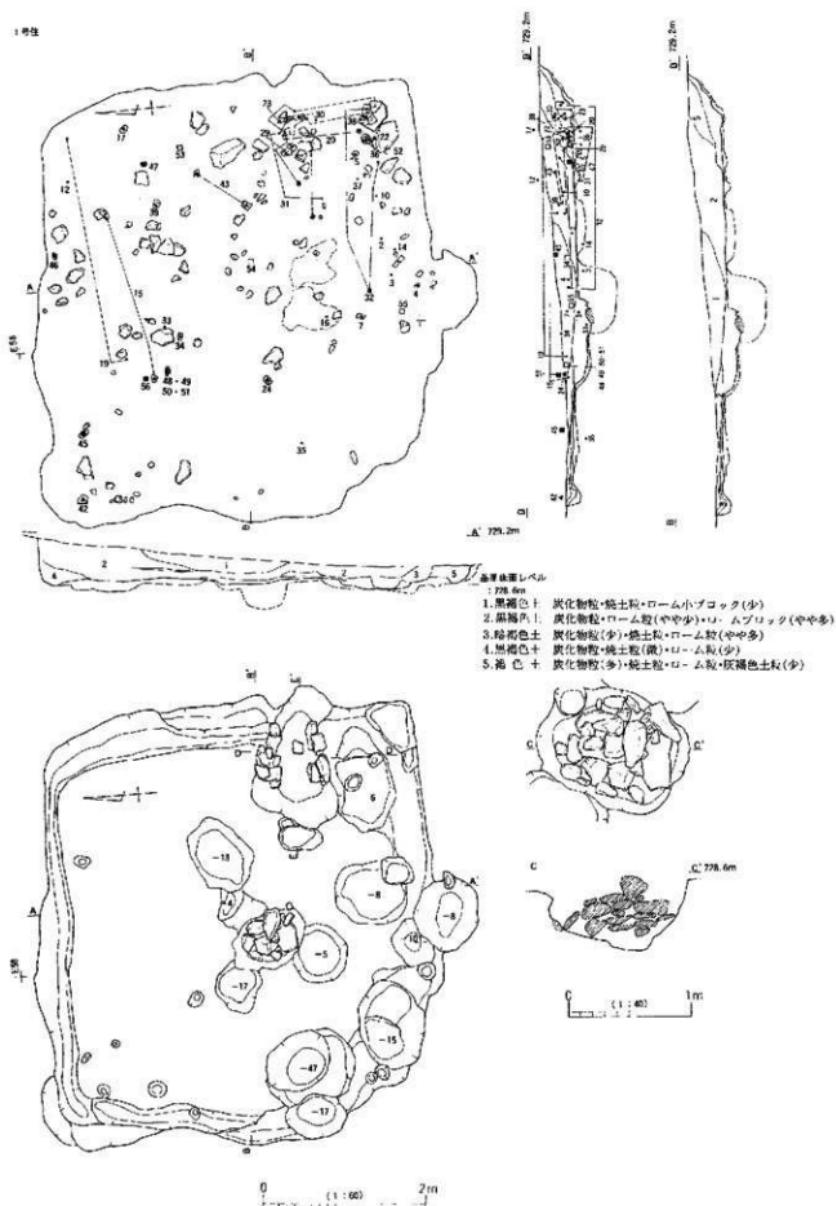


第34図 21号仕実測図

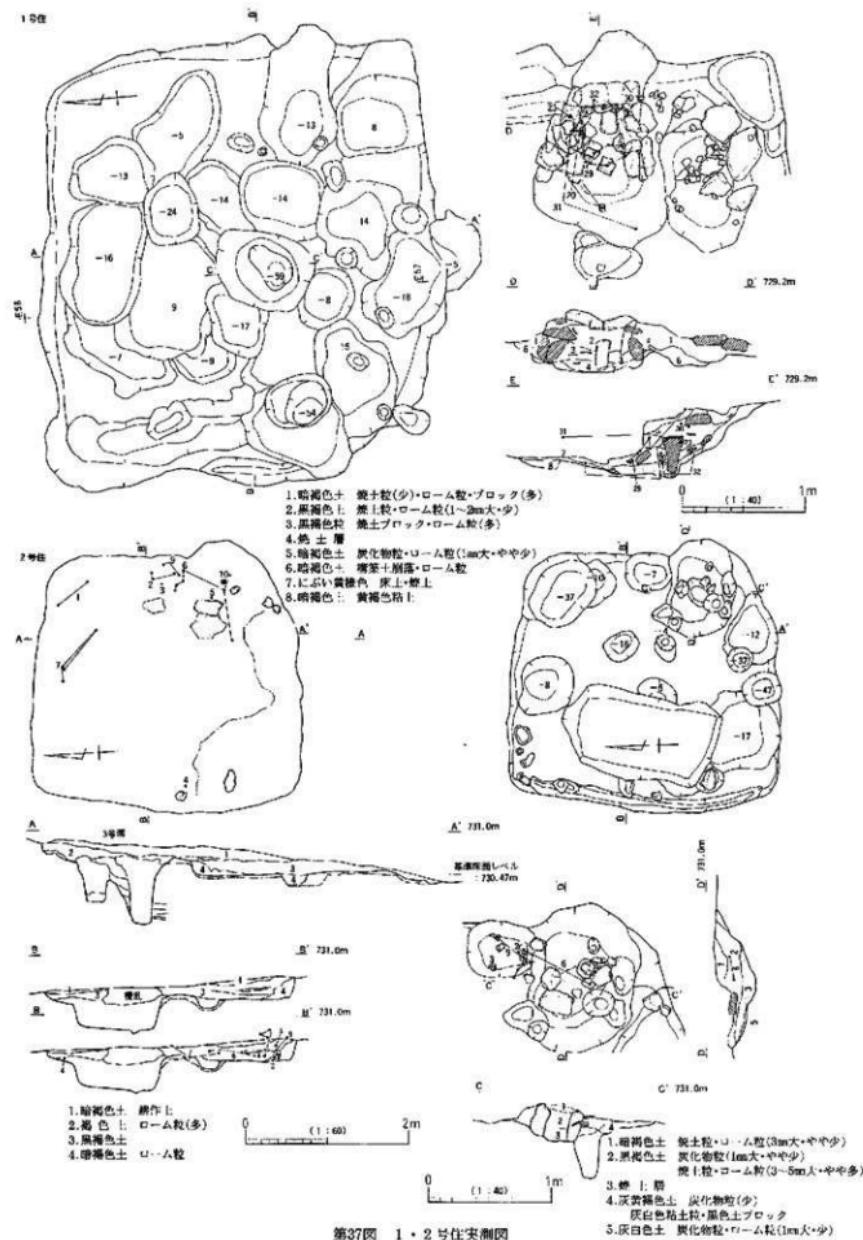


第35図 26・35号柱実測図

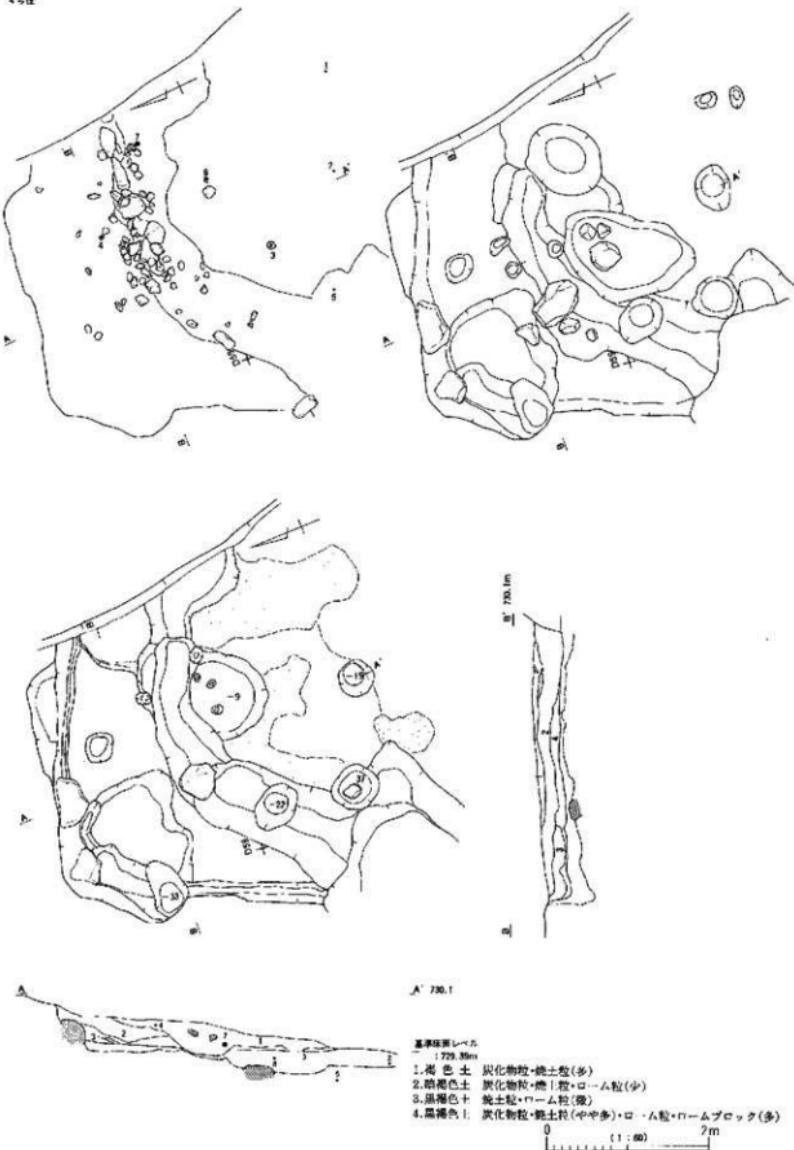
1号住



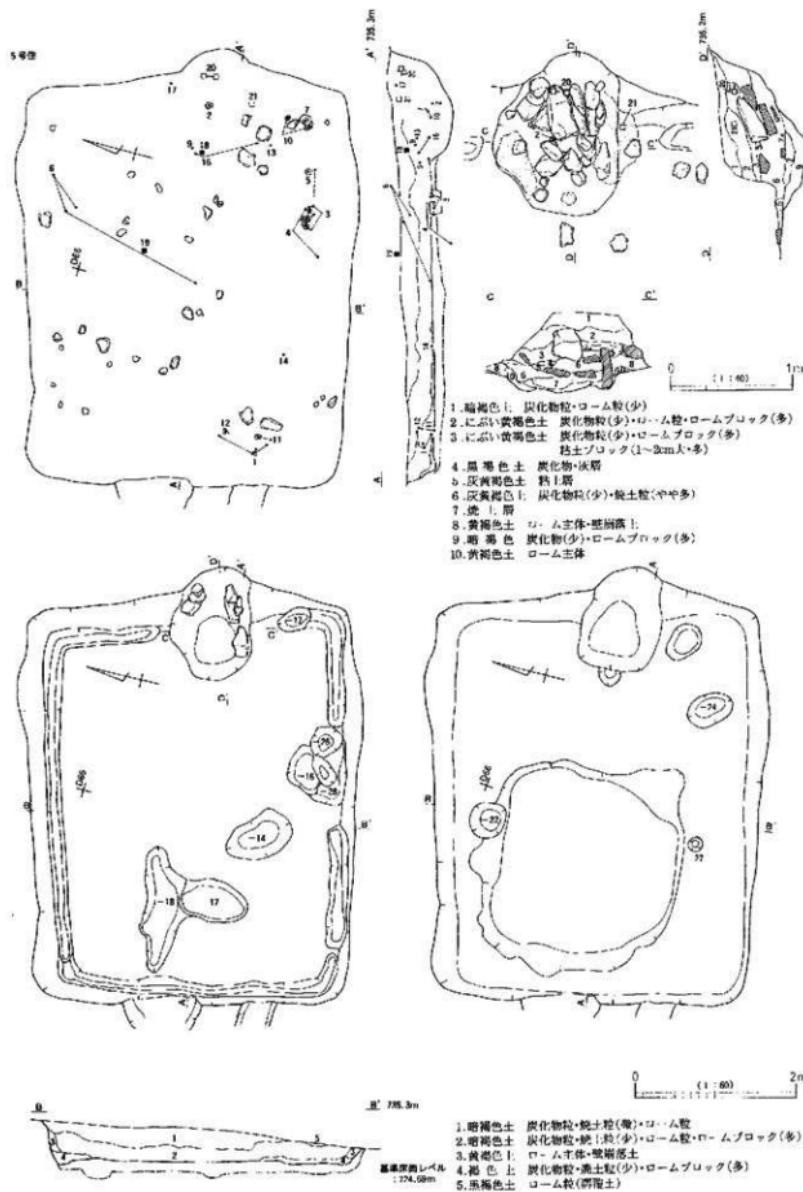
第36図 1号住実測区



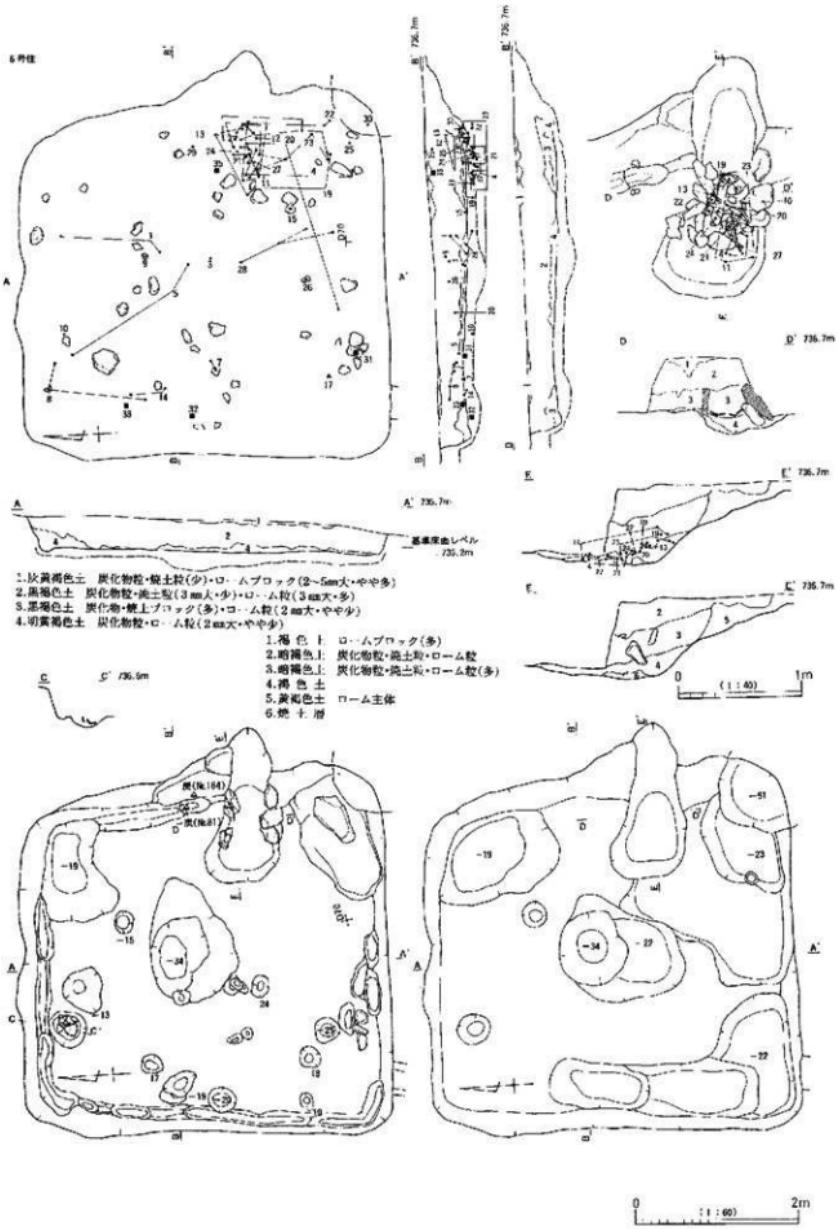
第37圖 1:2長作物測圖



第38図 4号住実測図

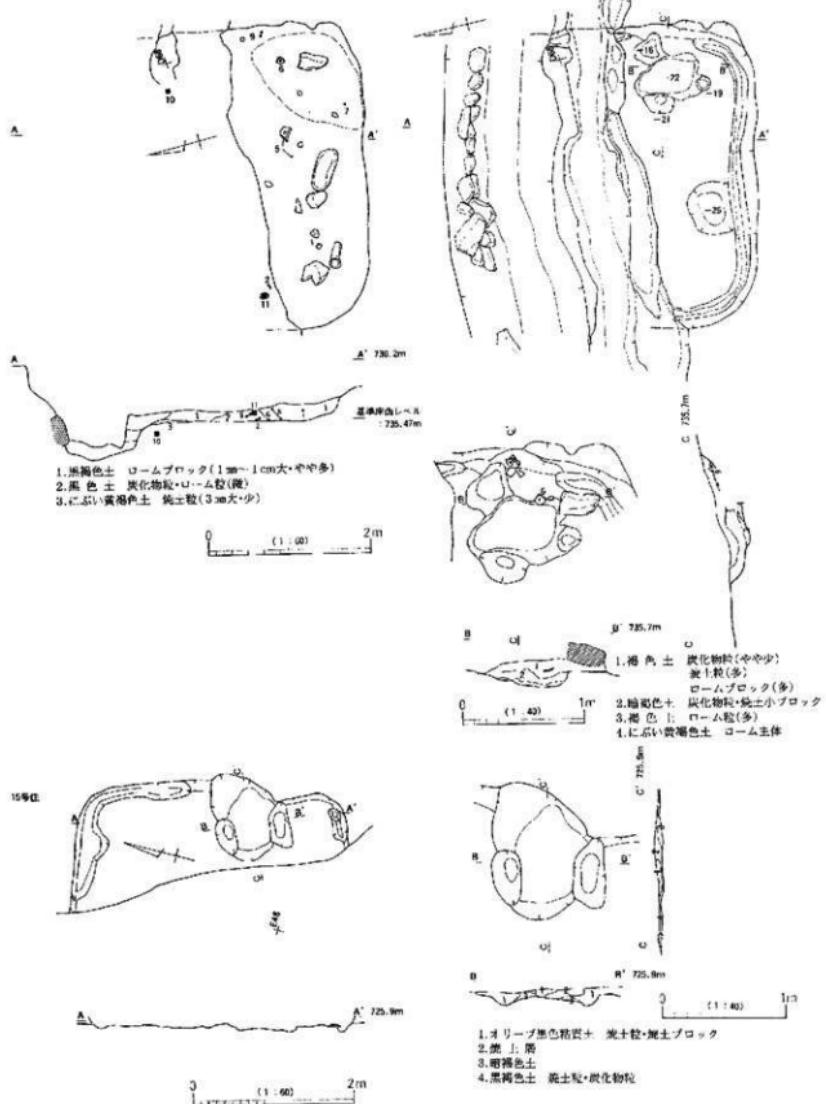


第39図 5号地実測図

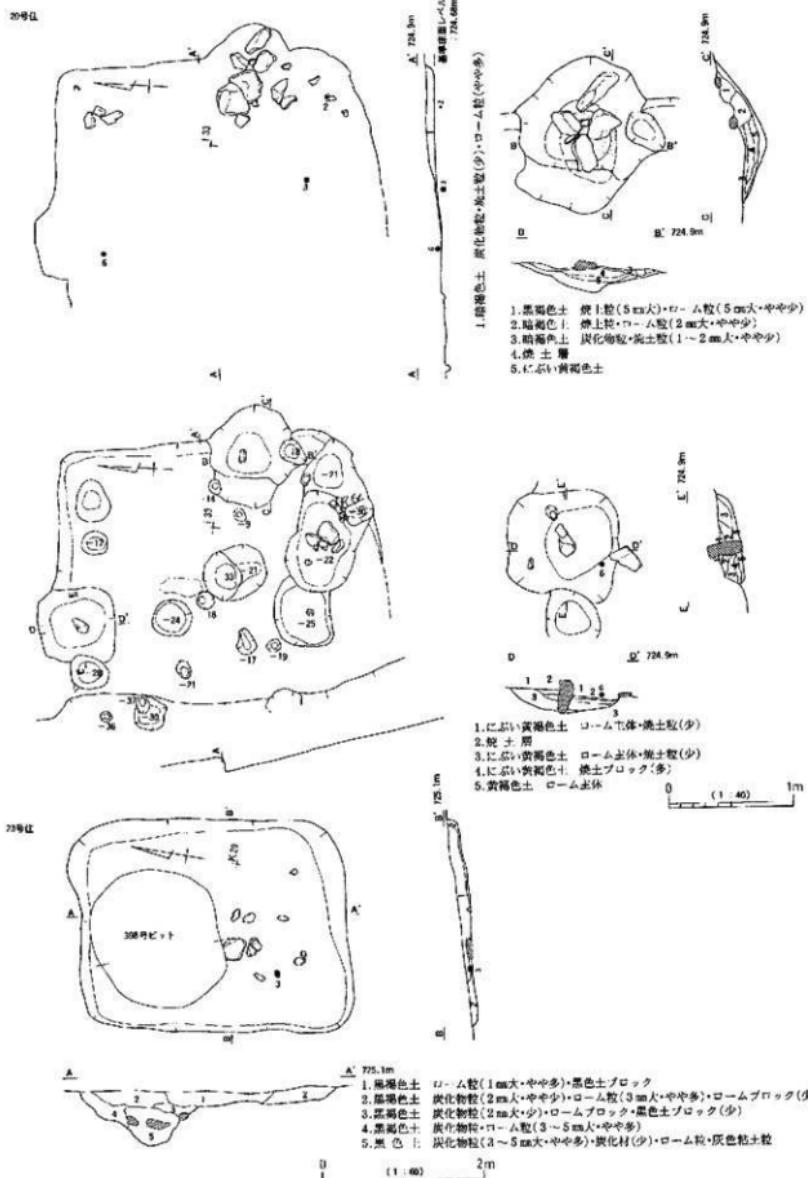


第40図 6号室実測図

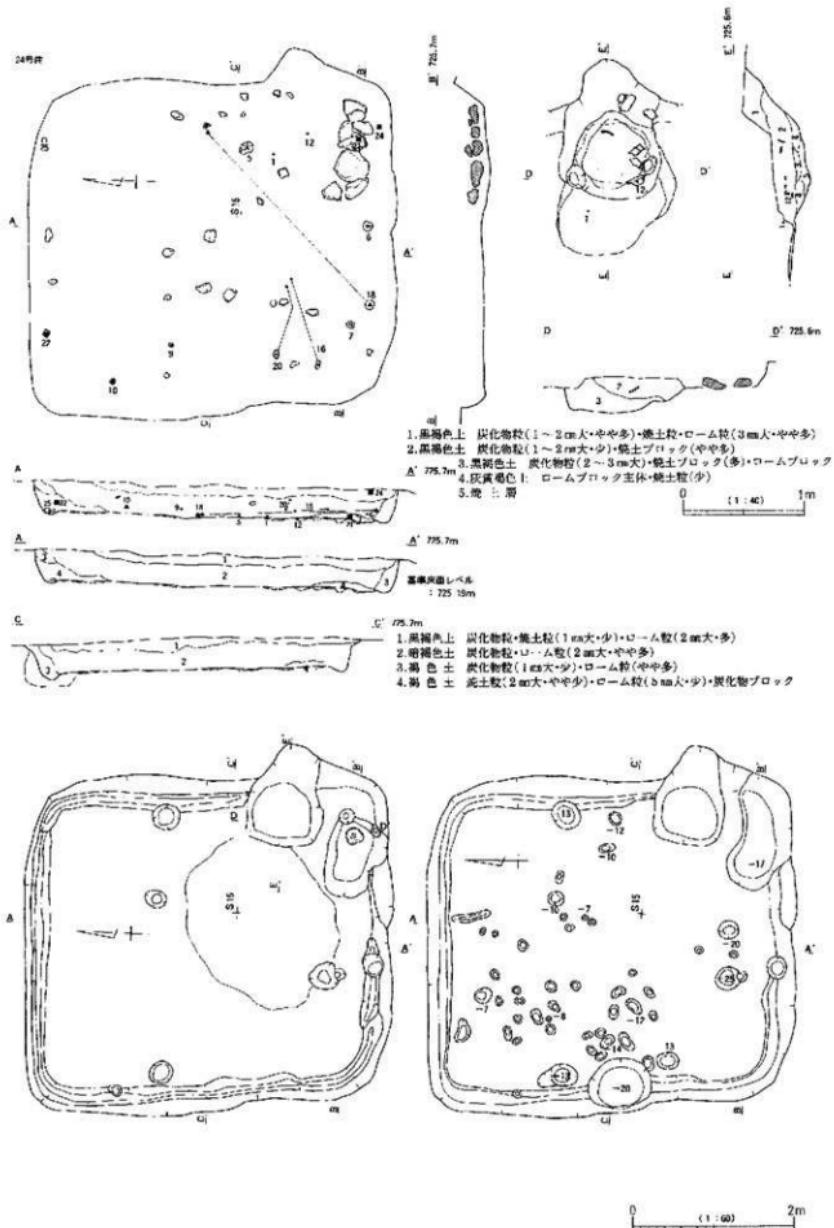
12号住



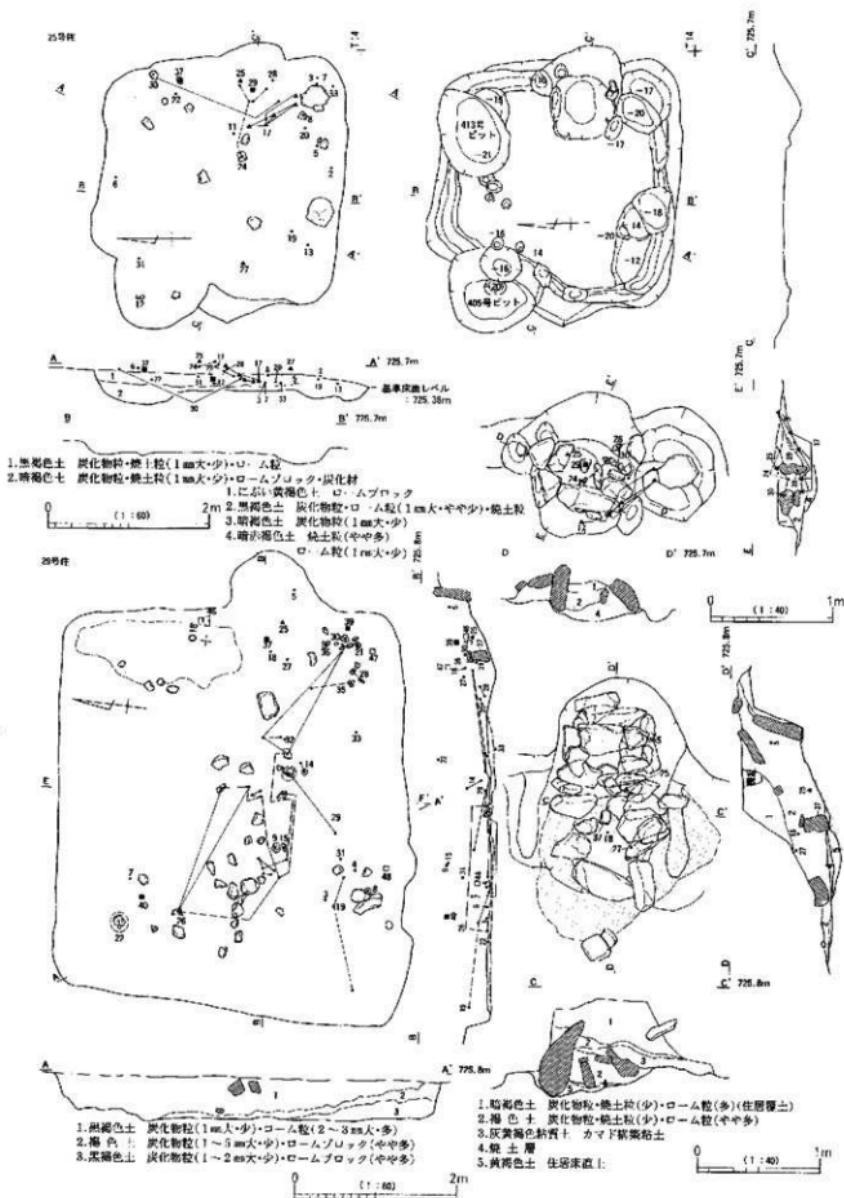
第41図 12・15号住実測図



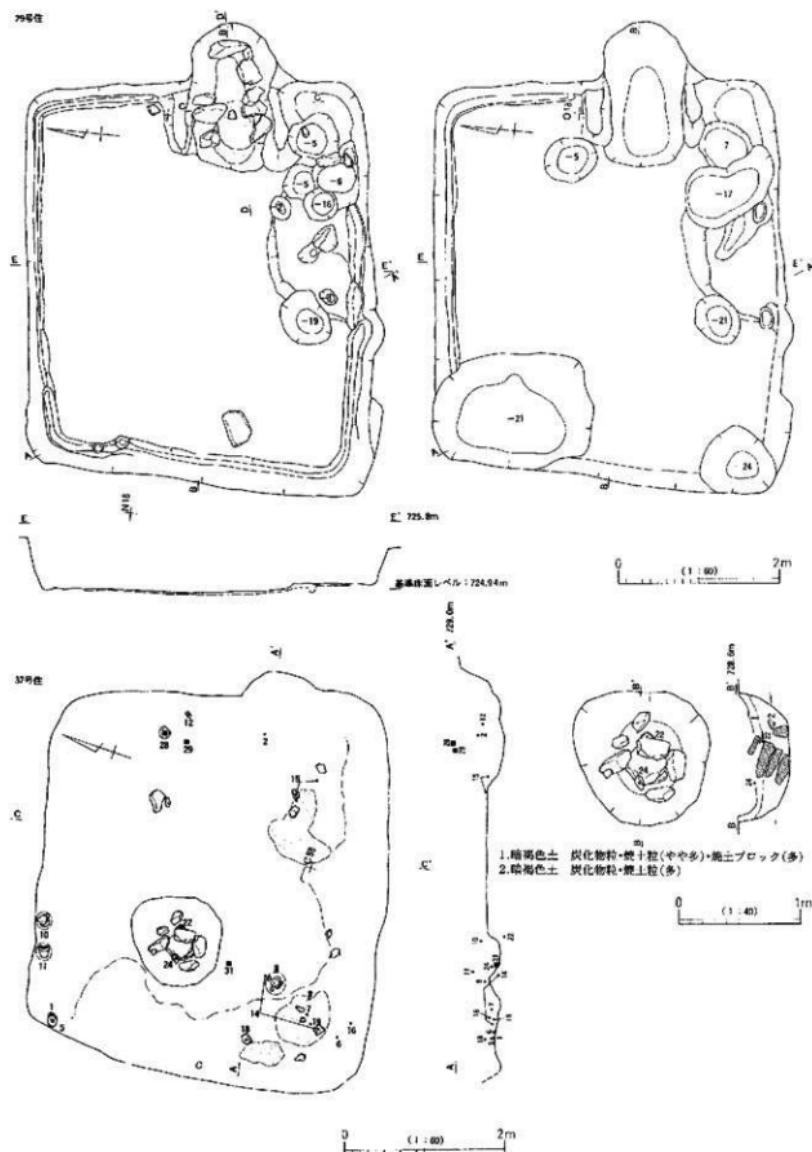
第42圖 20・23号住家測圖



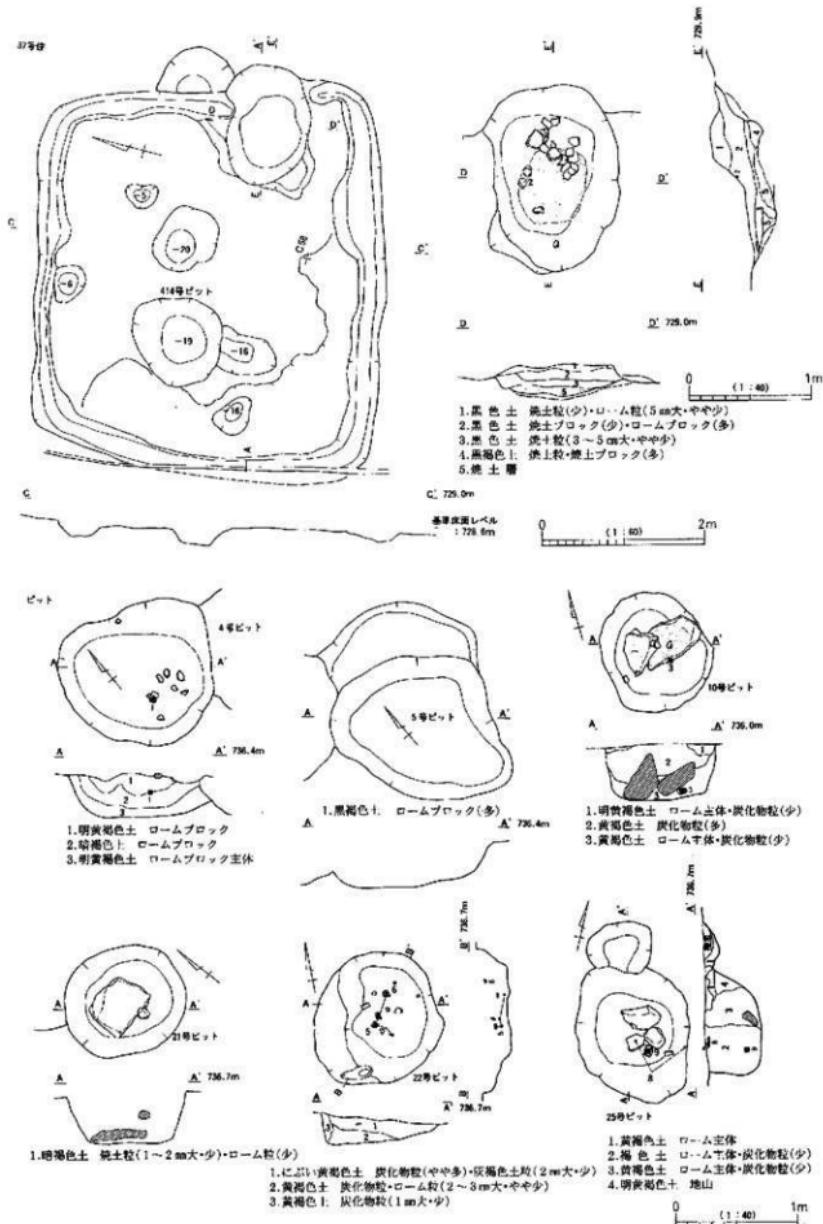
第43図 24号住家測図



第44図 25・29号住実測図



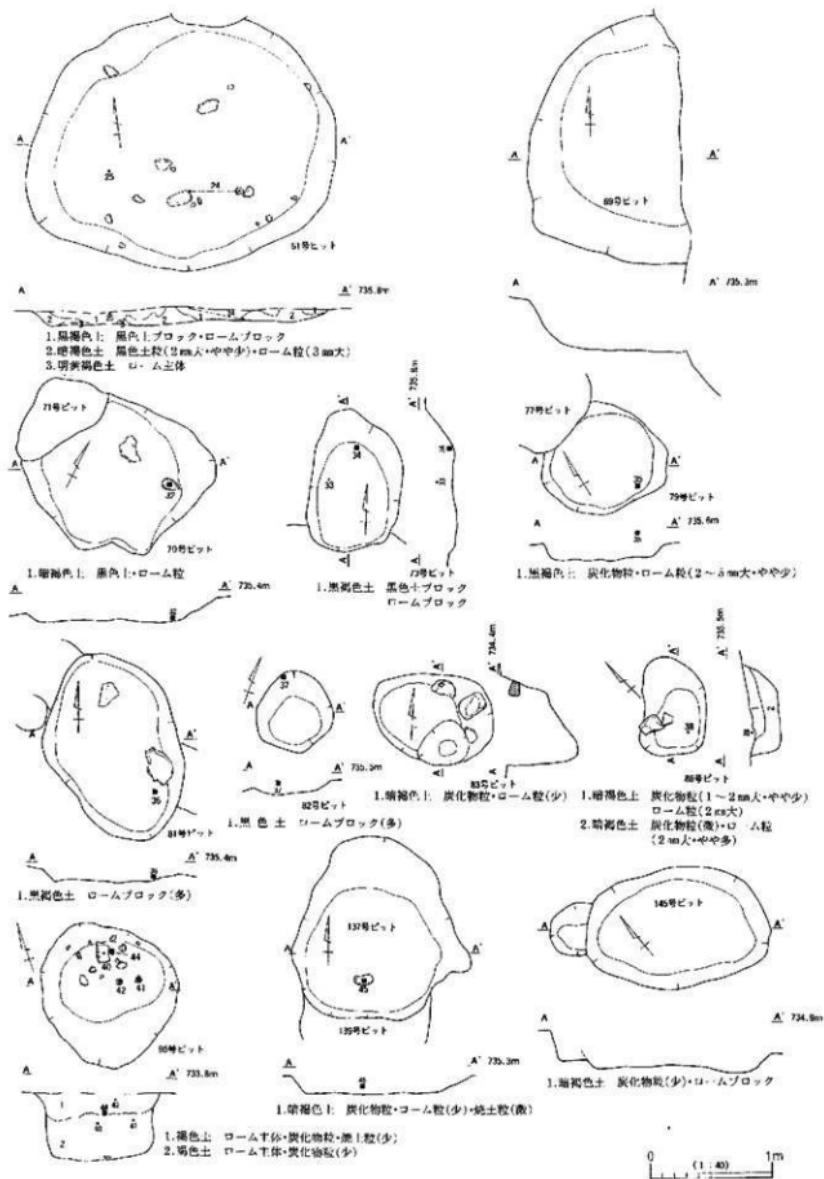
第45図 29・37号住実測図



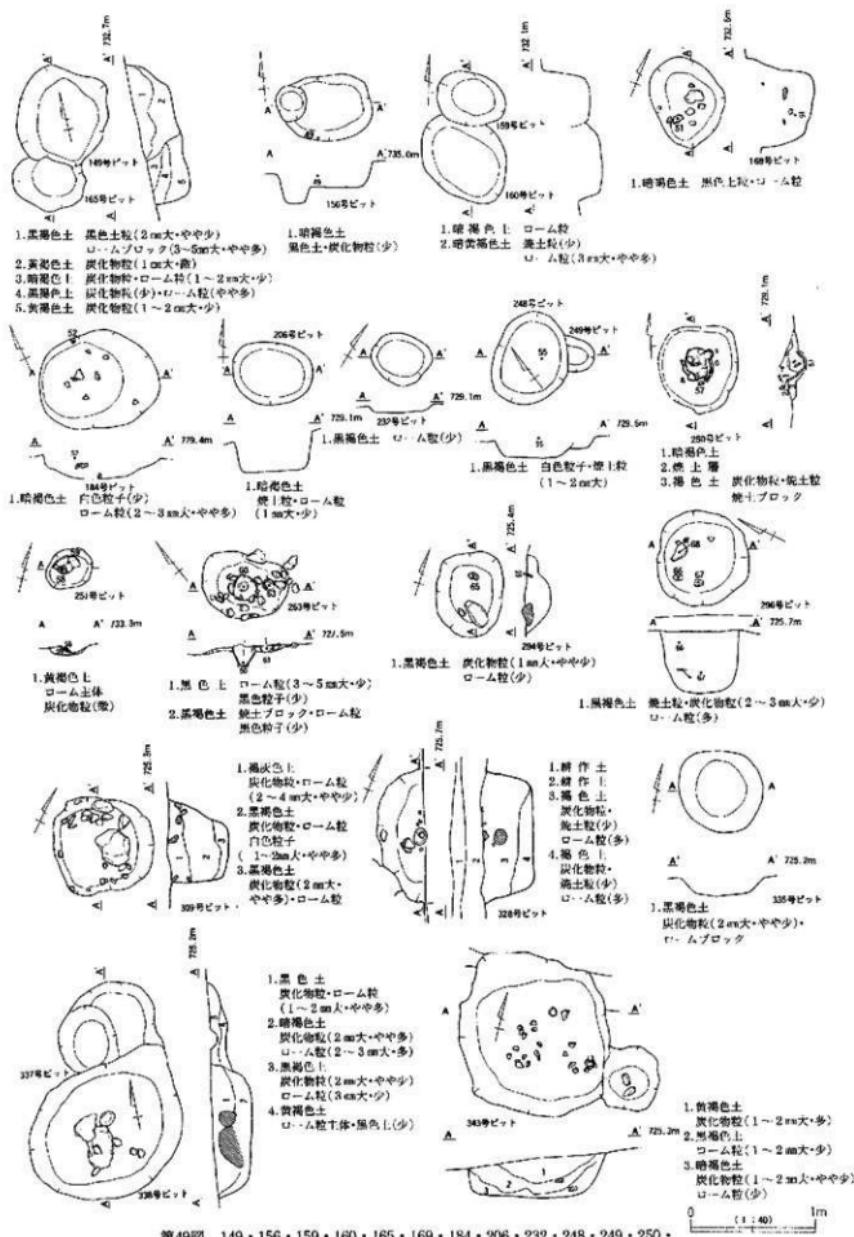
第46図 37号住・4・5・10・21・22・25号ピット実測図



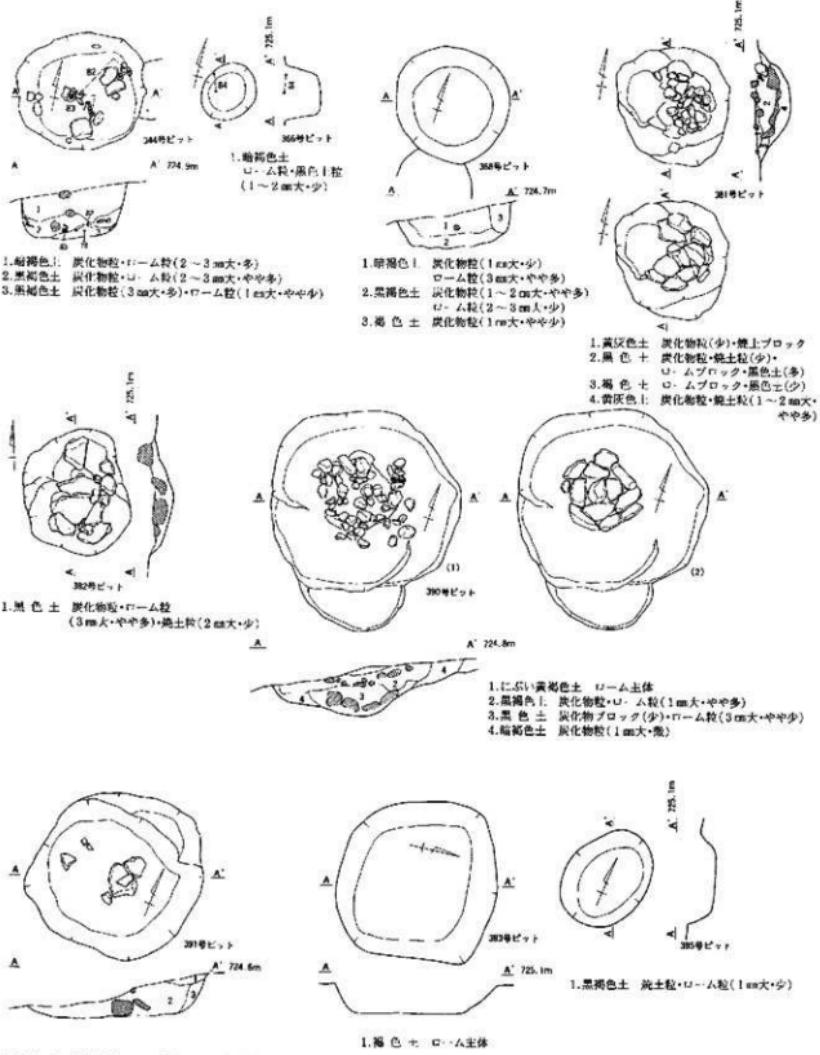
第47図 33・41・45・52・53・55・56・63号ピット実測図



第48図 61・69・70・73・79・81・82・83・86・95・137・145号ピット実測図

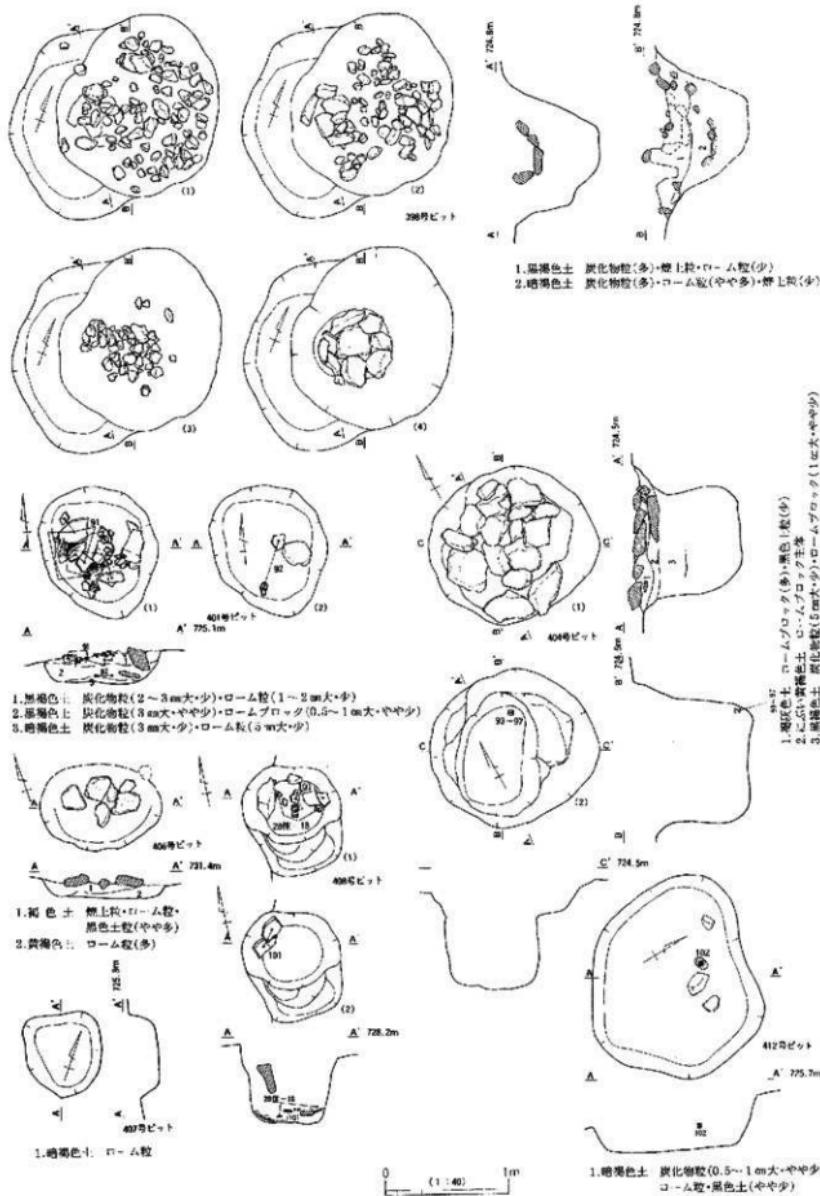


第49図 149・156・159・160・165・169・184・206・232・248・249・250・
251・263・294・296・309・328・335・337・338・343号ビット実測図

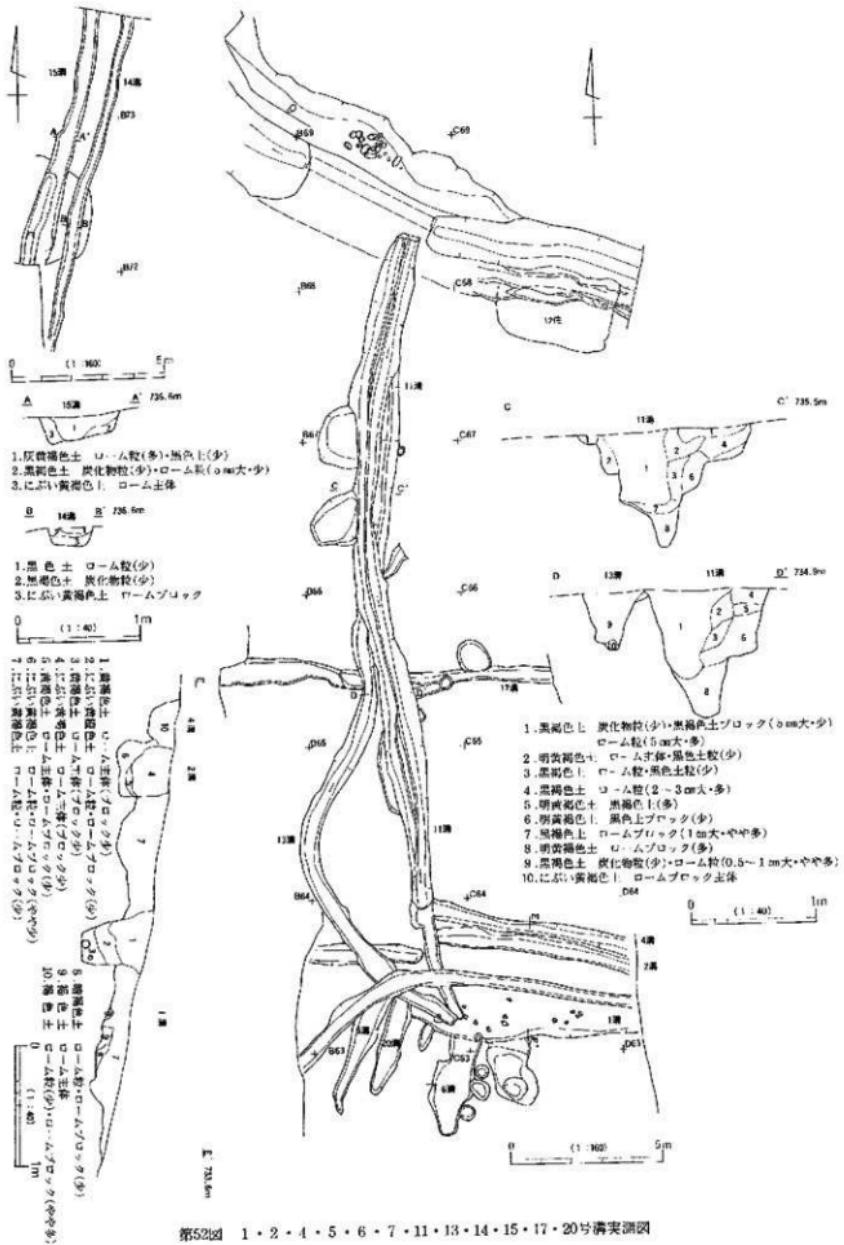


0 (1:40) 1m

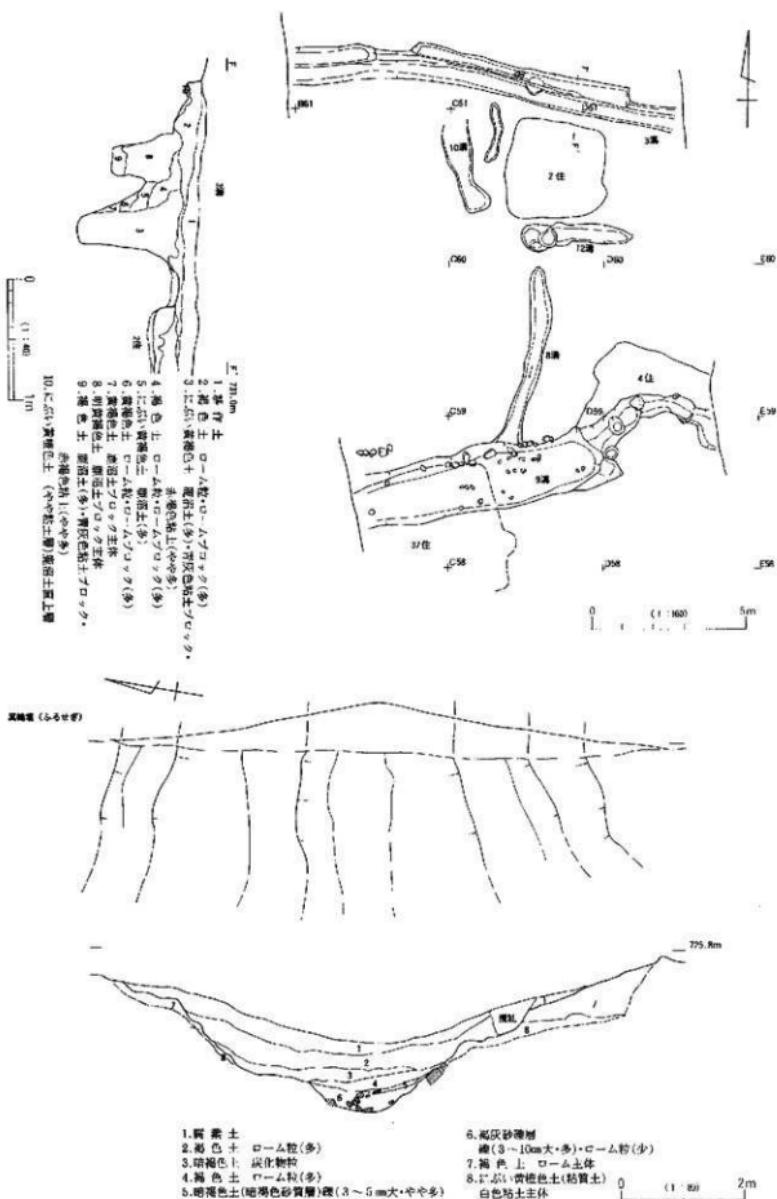
第50図 344・366・368・381・382・390・391・393・395号ピット実測図



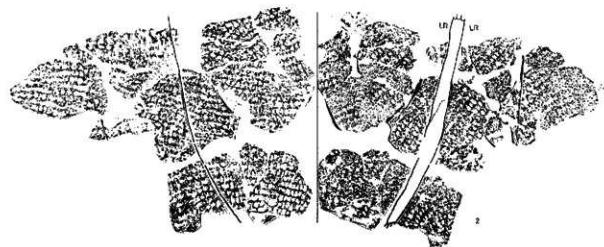
第51図 398・401・404・406・407・408・412号ピット実測図



第52図 1・2・4・5・6・7・11・13・14・15・17・20号溝実測図

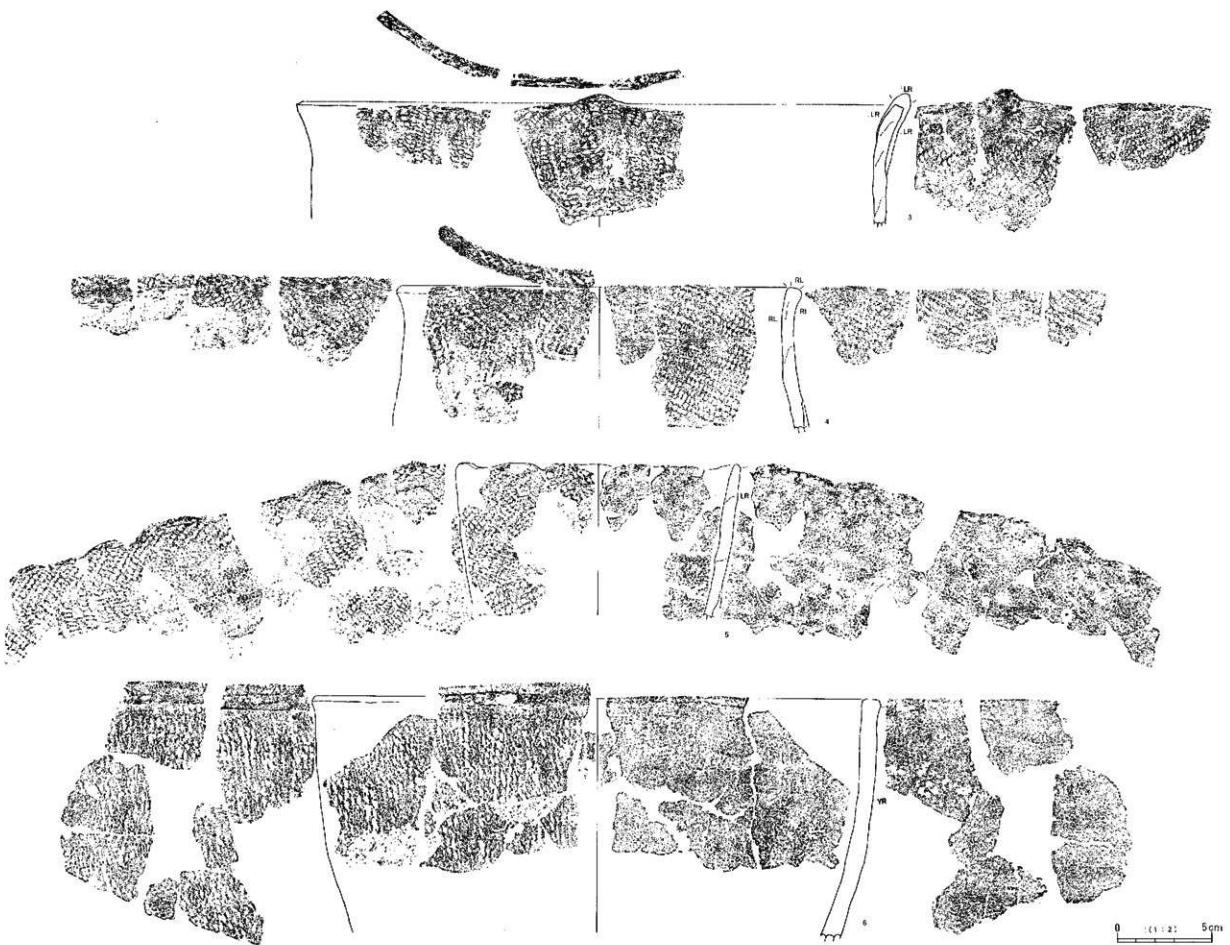


第53図 3・8・9・10・12号溝・箕輪原(ふるせぎ)実測図

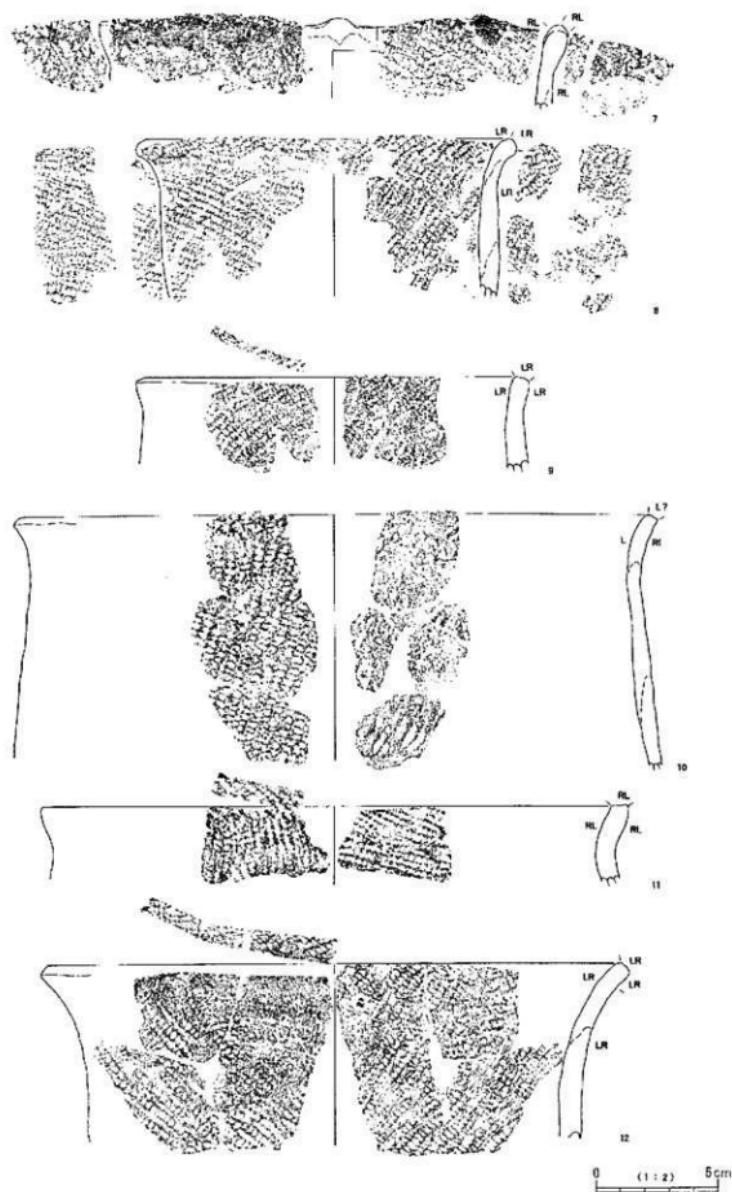


0 (1 : 2) 5cm

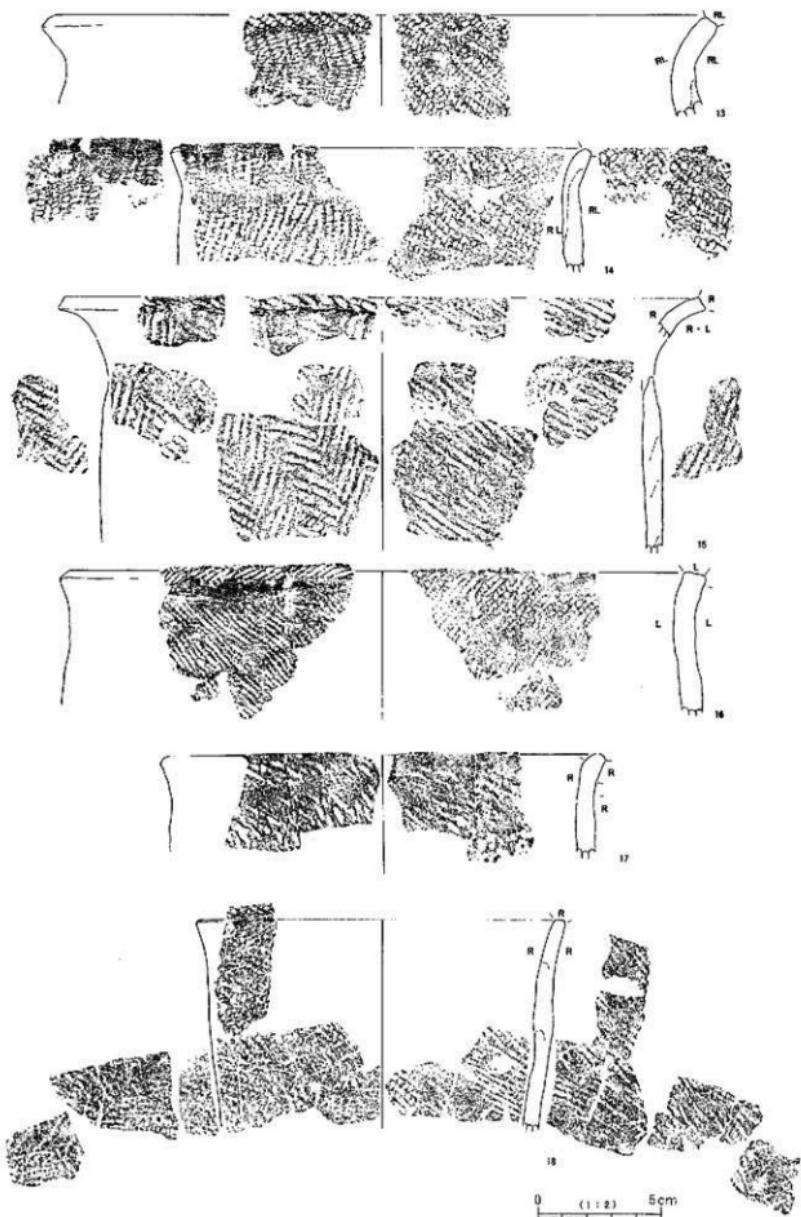
第54图 草创～早期土器类图



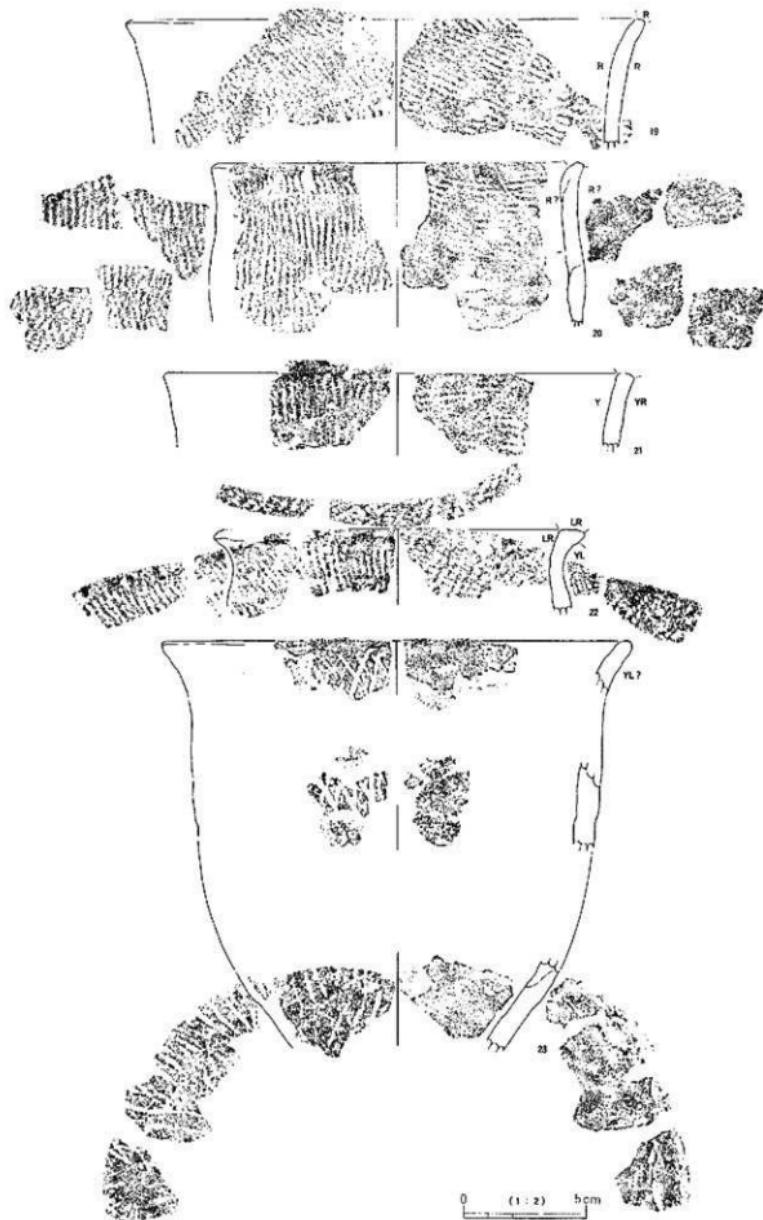
第55図 草創～早期土器実測図



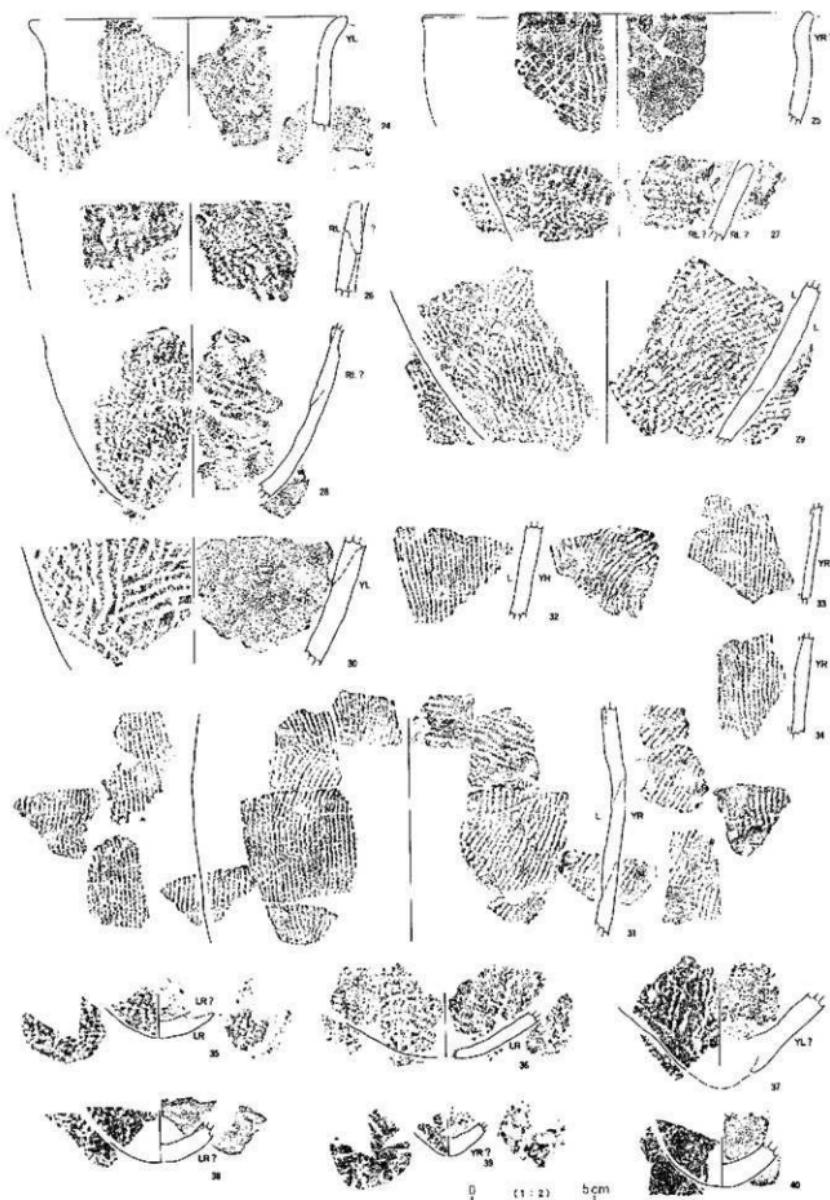
第56図 草創～早期土器実測図



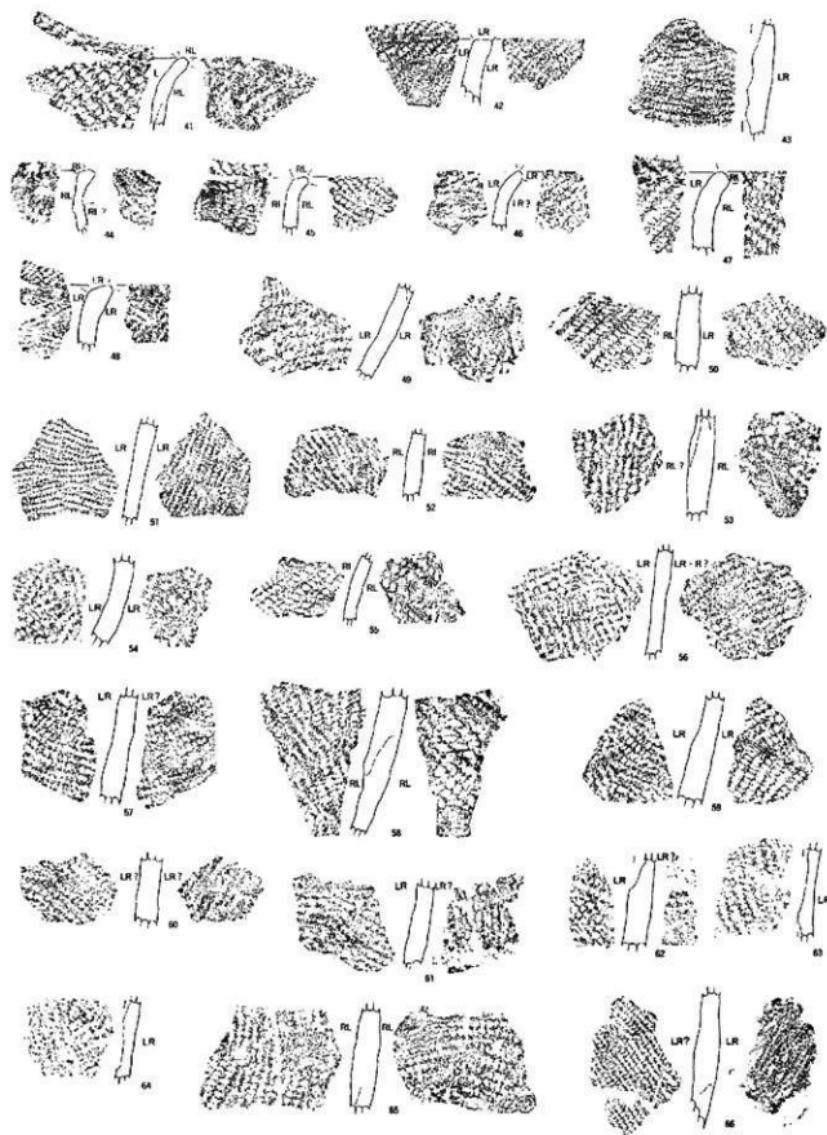
第57図 卵創～早期土器実物図



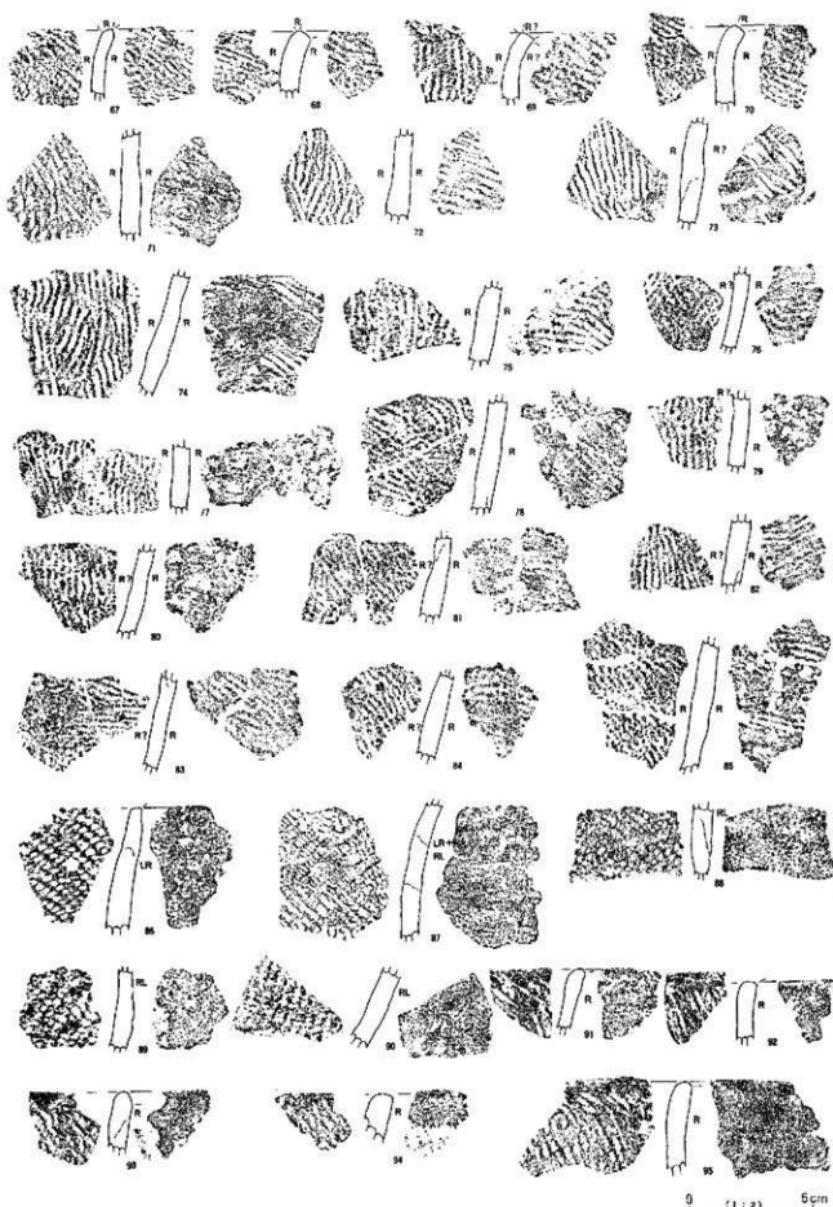
第58図 卓創～早期土器実測図



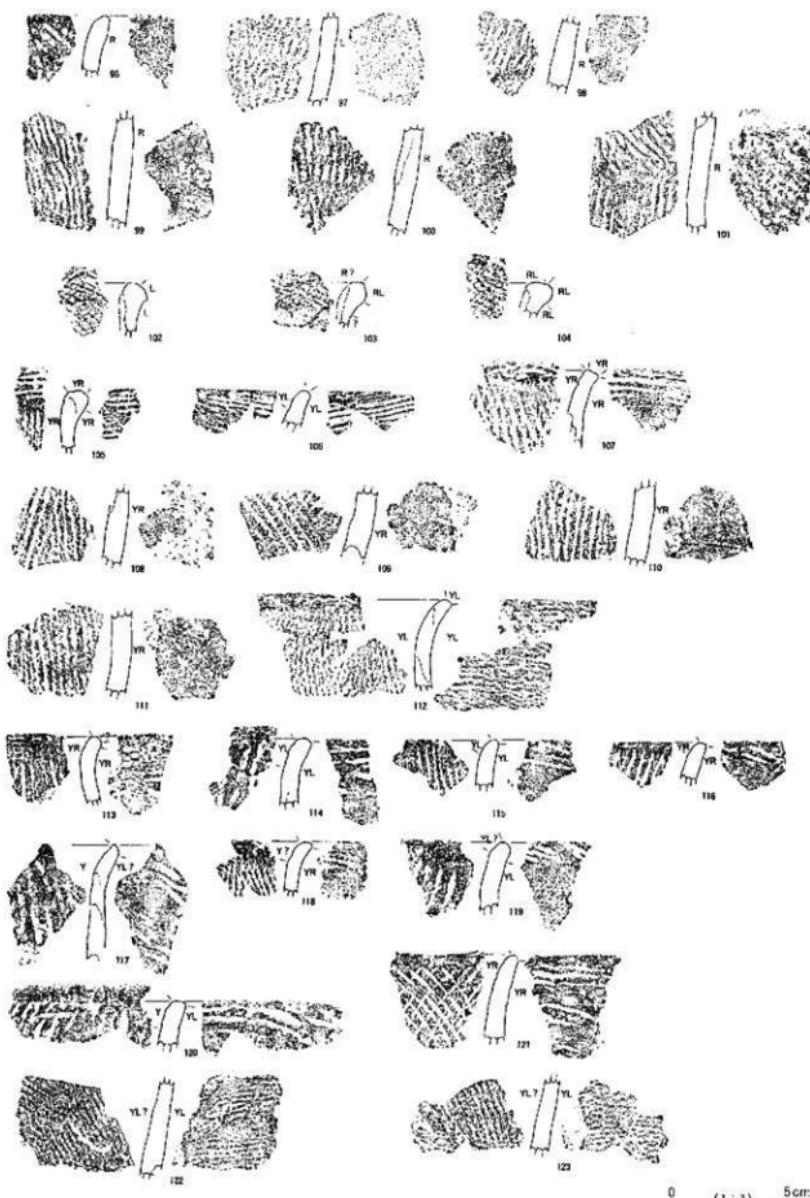
第59圖 草原～早期 I：著生圖



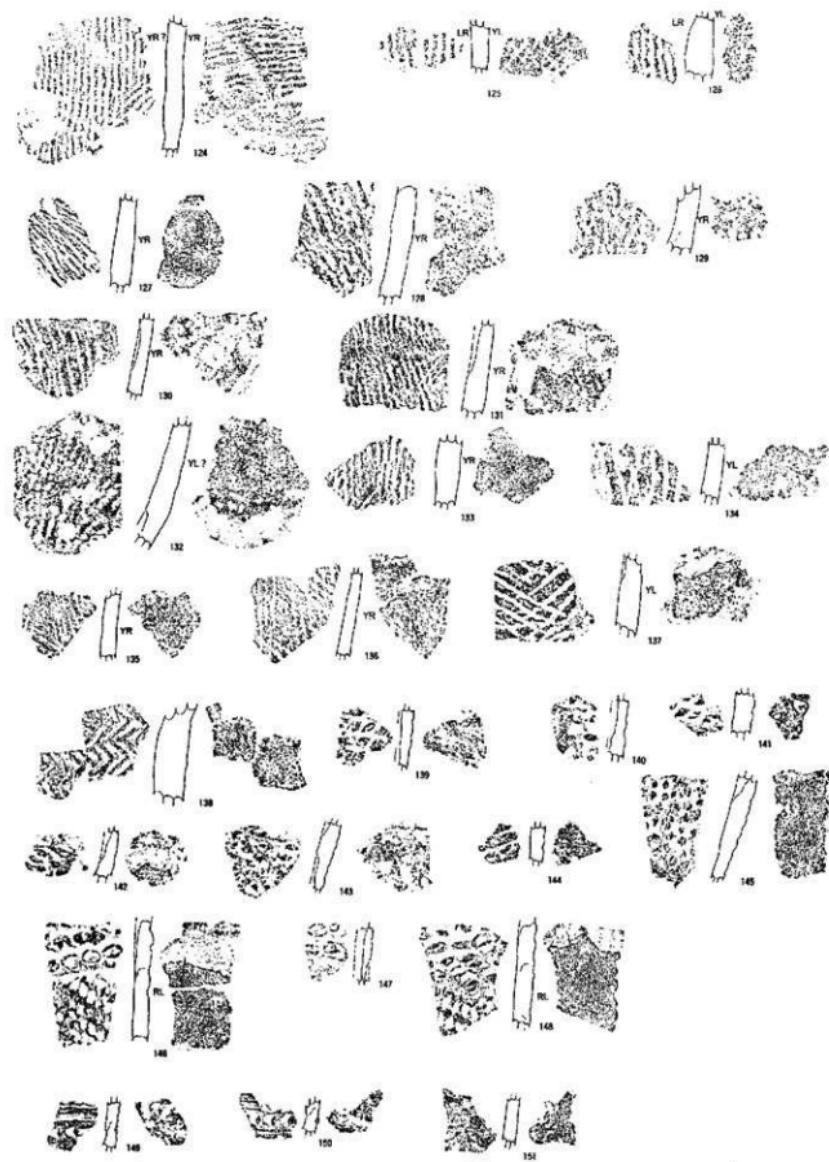
第60圖 莫創～星期十器審判圖



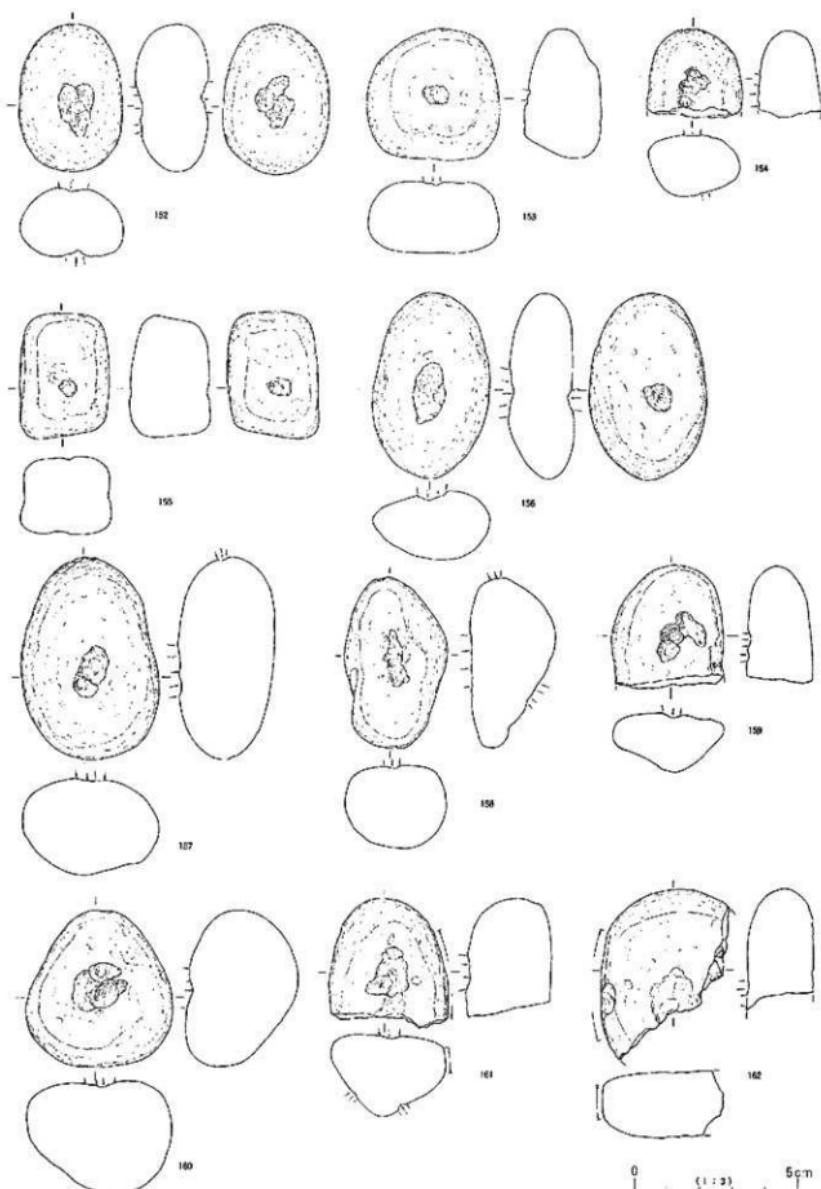
第61図 草創～早期上器実測図



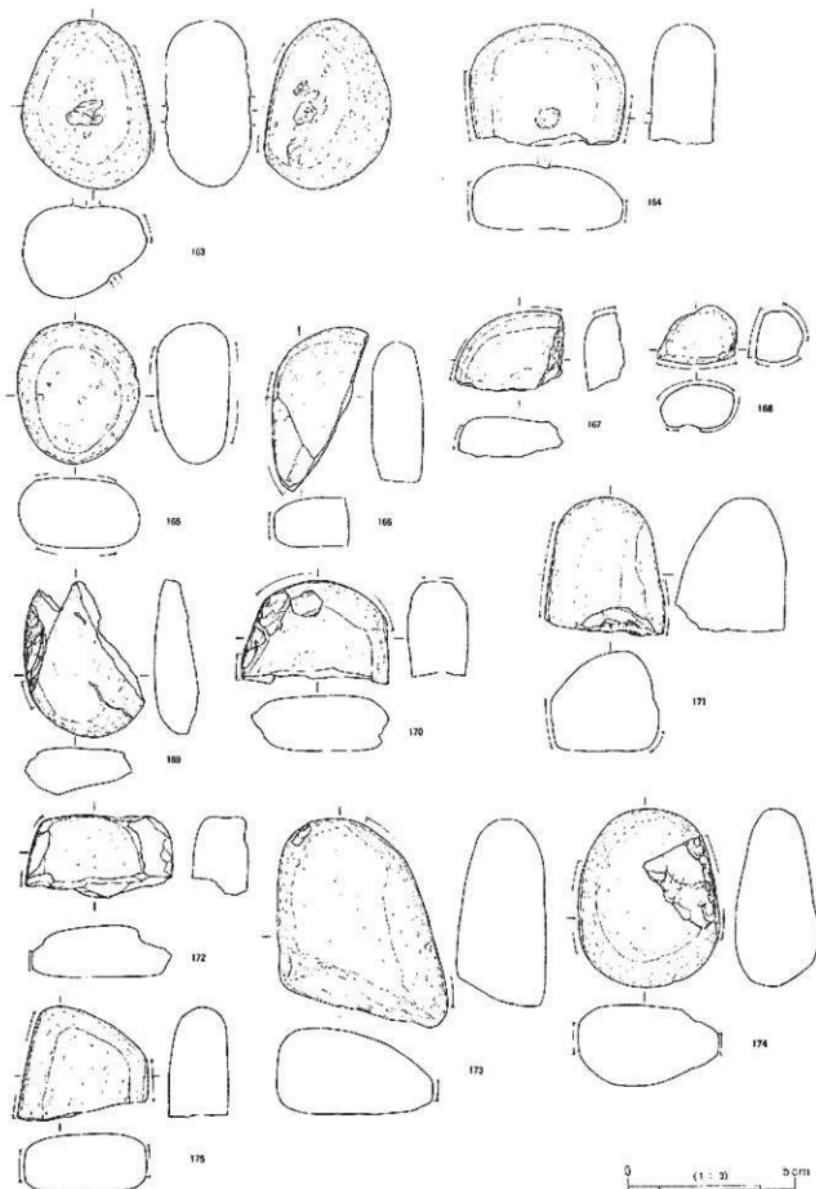
第62図 草創～早期土器実測図



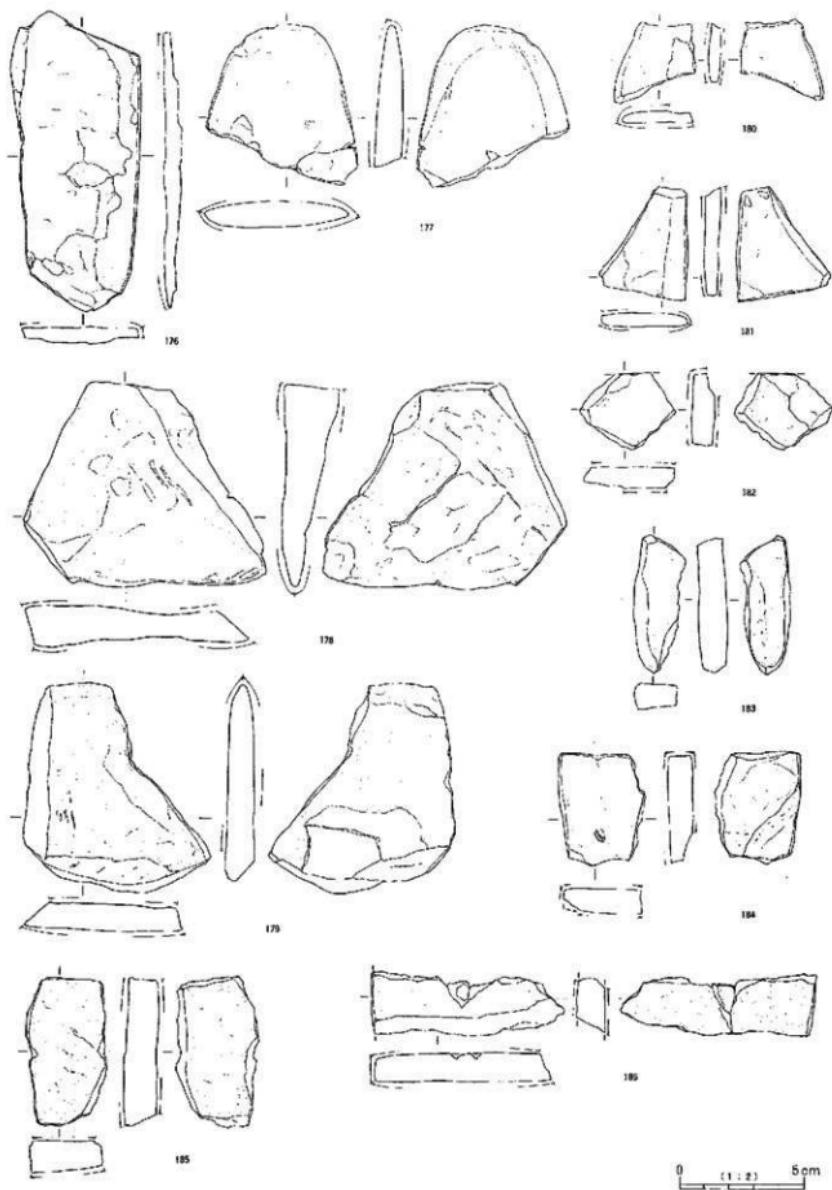
第63図 草創～早期土器尖端図



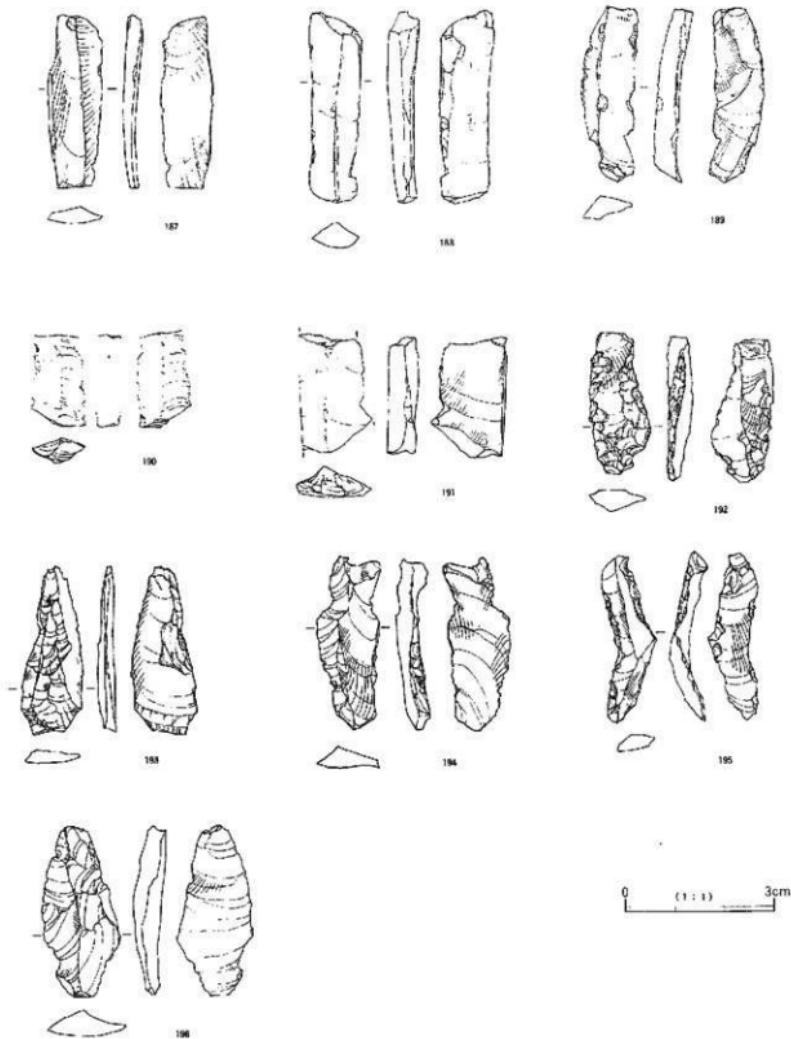
第64図 原始～早期石器実測図（円石）



第65図 草創～早期石器実測図（凹石・磨石）

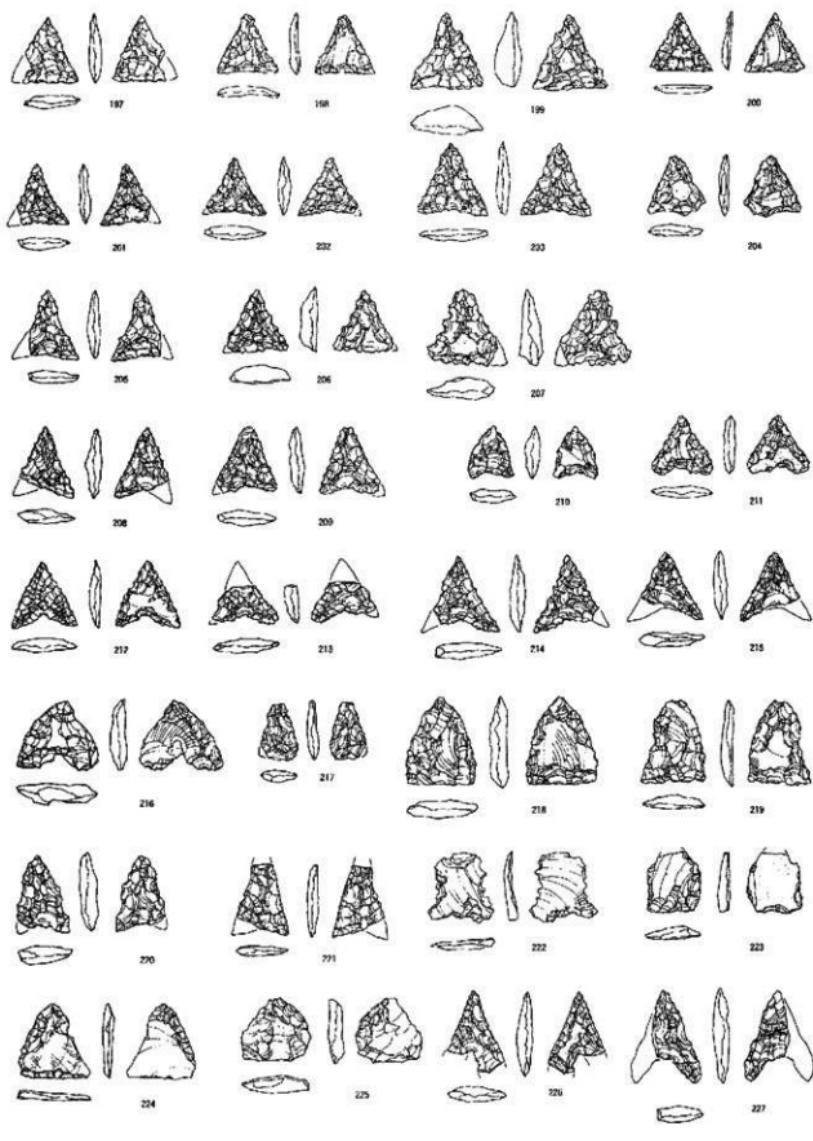


第66図 草創～早期石器実測図（底石）

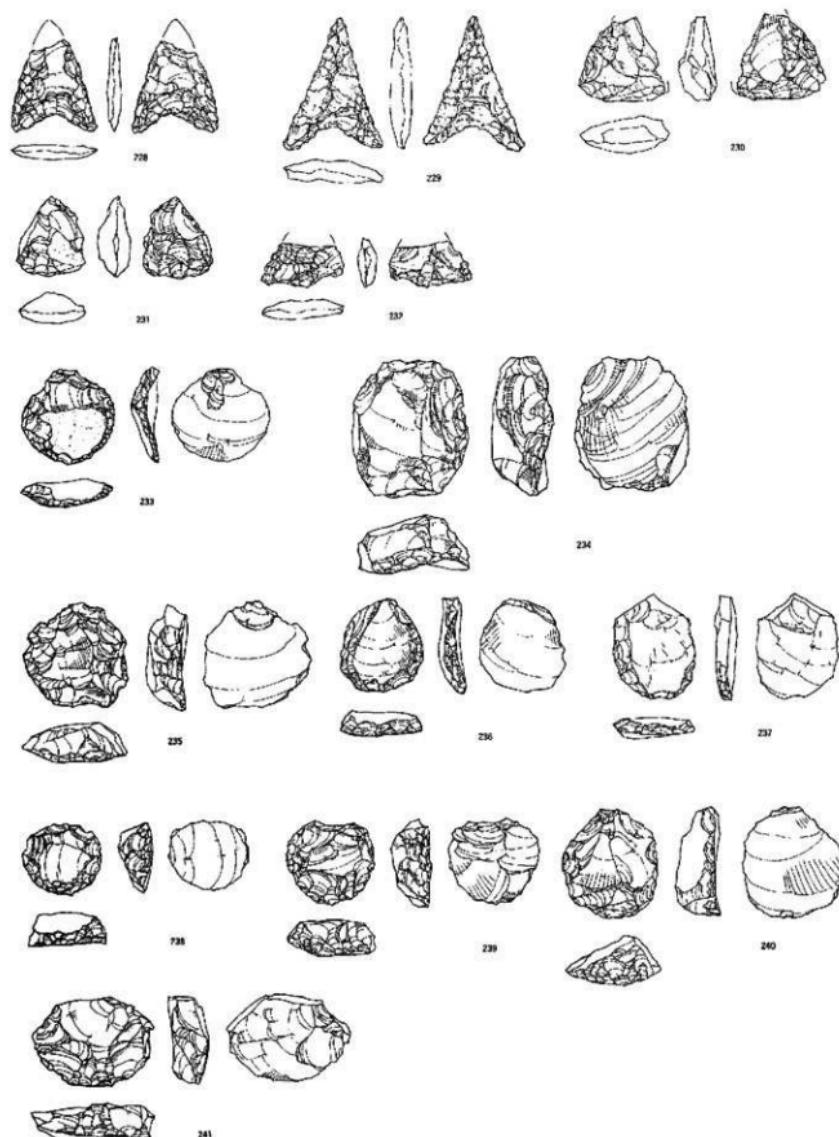


0 (1 : 1) 3cm

第67圖 草創—早期石器實測圖（縱長剖片）

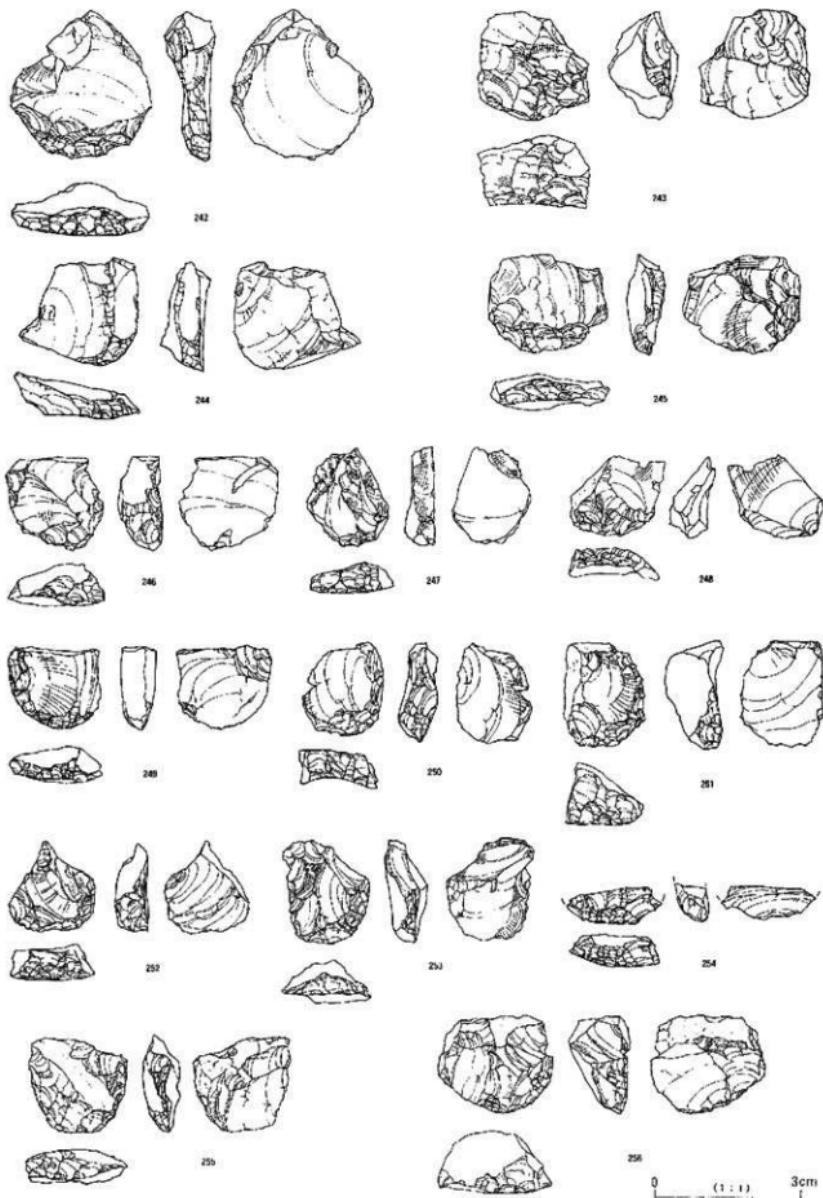


第68図 草創～早期石器実測図（石器）

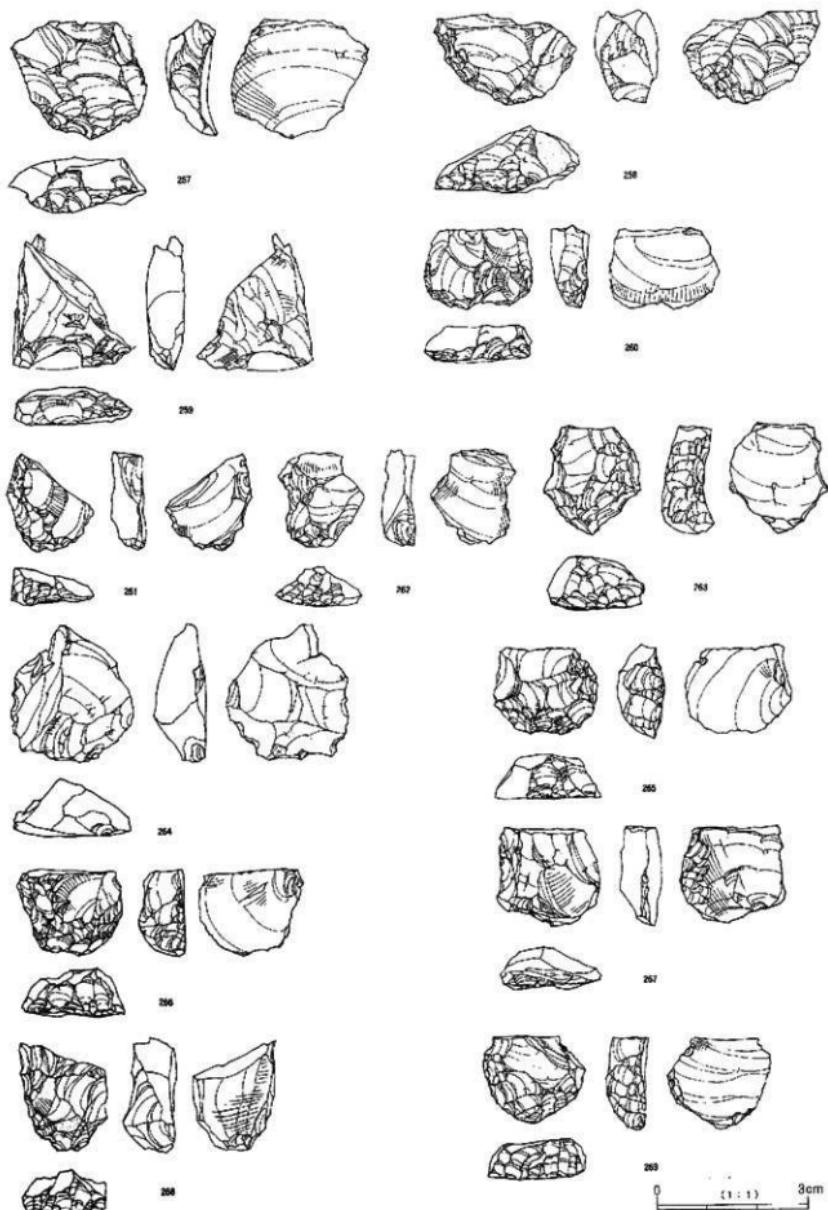


0 (1 : 1) 3cm

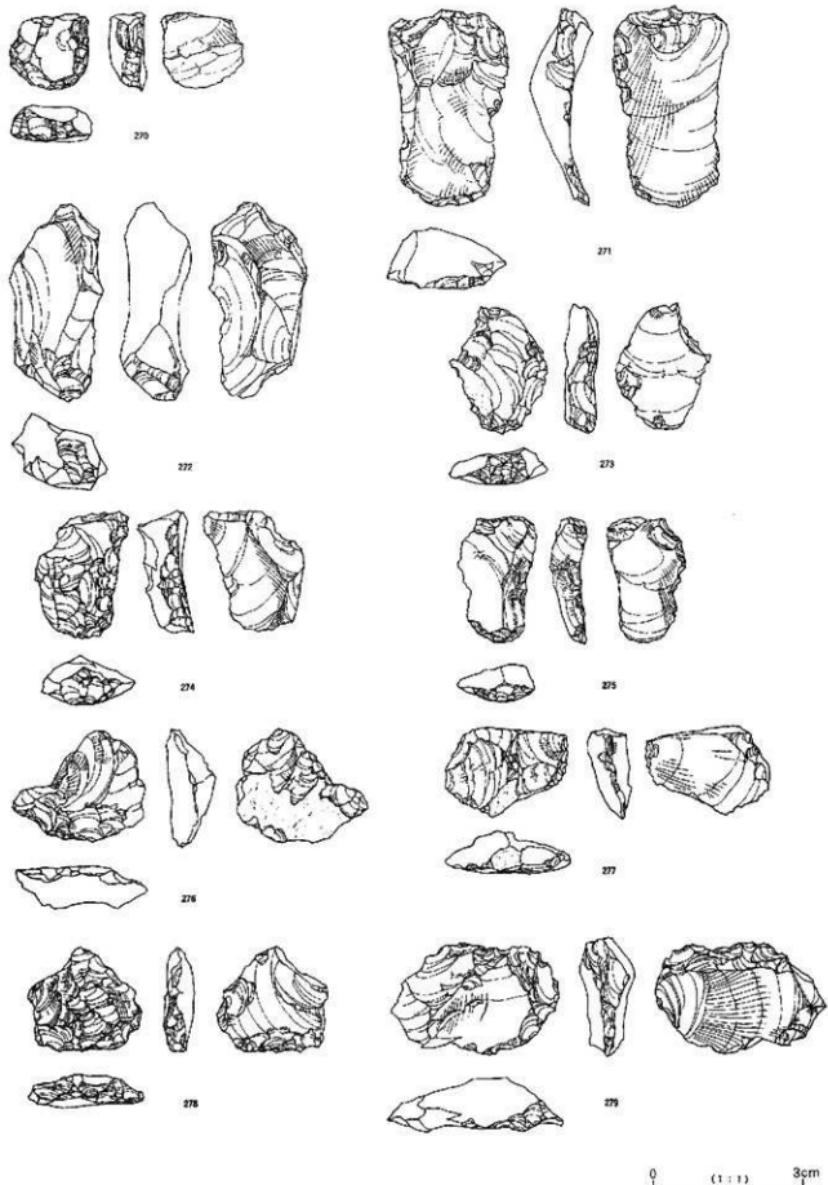
第69図 草創～早期石器実測図（石核・核器）



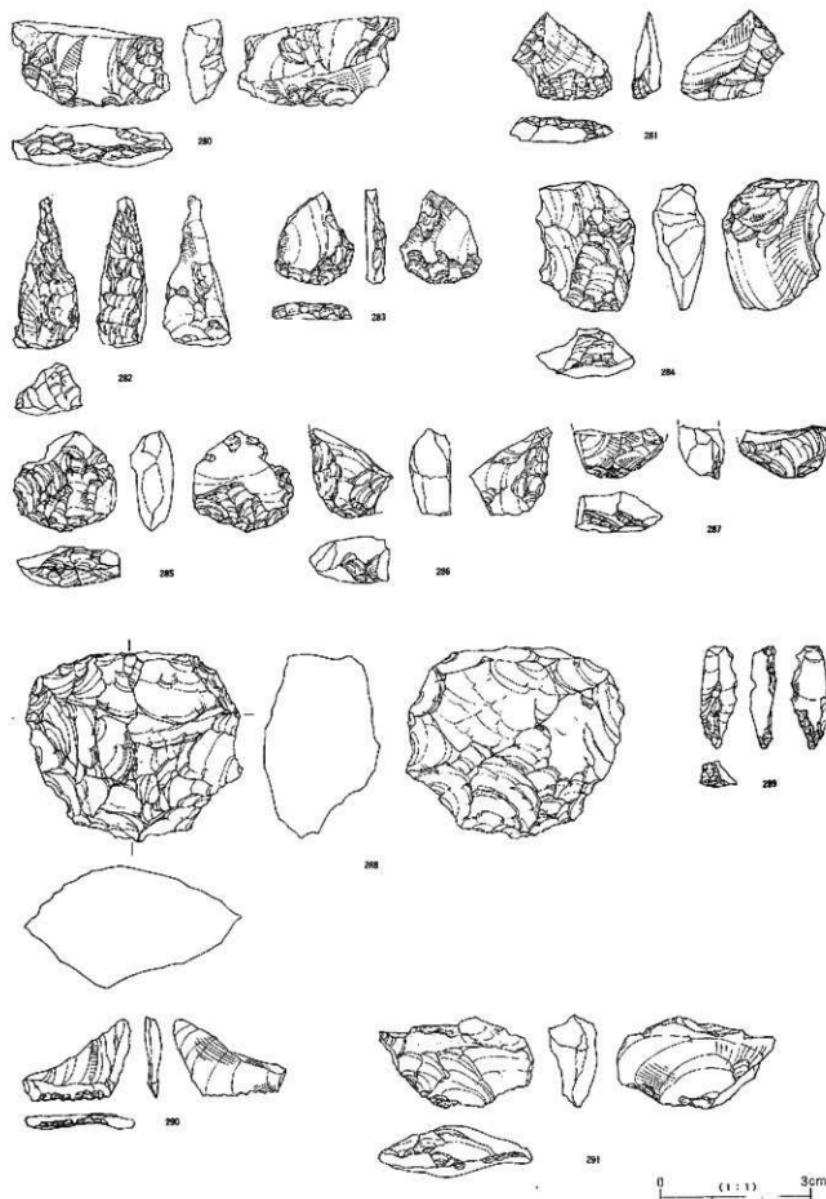
第70図 草創～早期石器実測図（擦器）



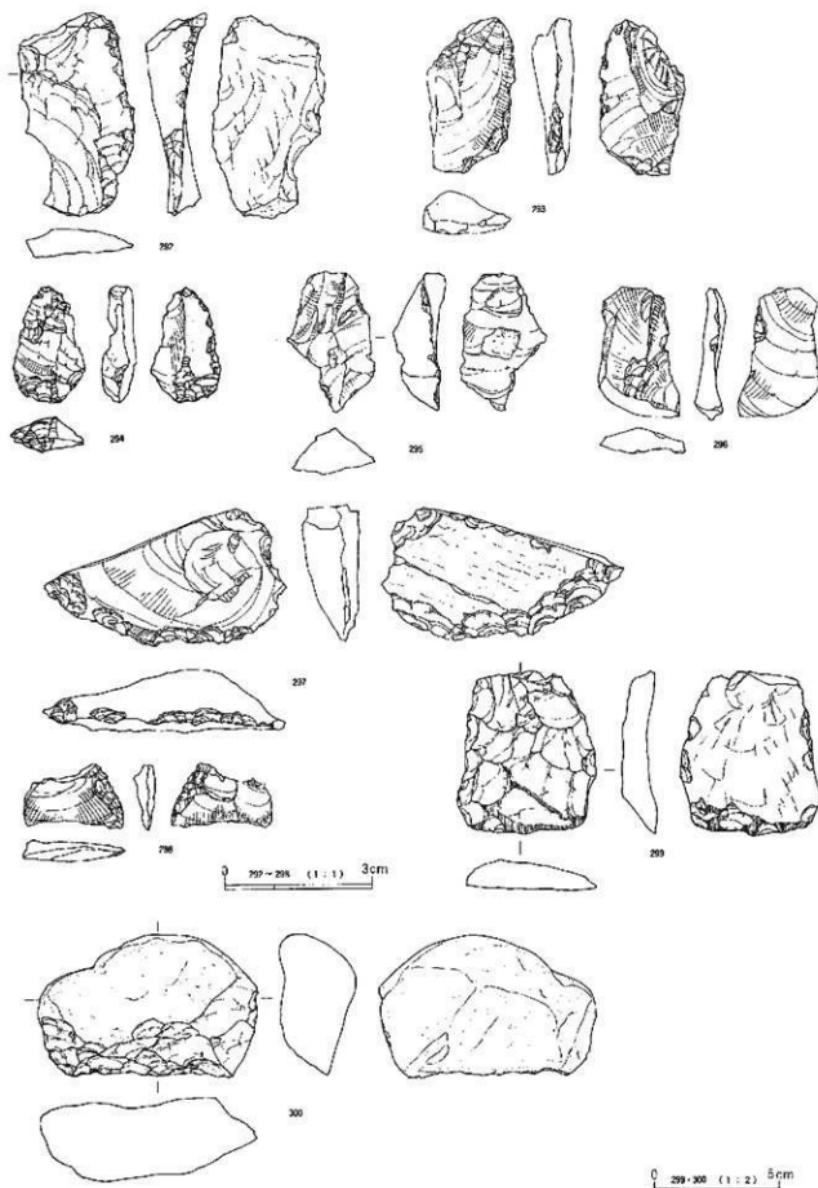
第71図 草創～早期石器実測図（掻器）



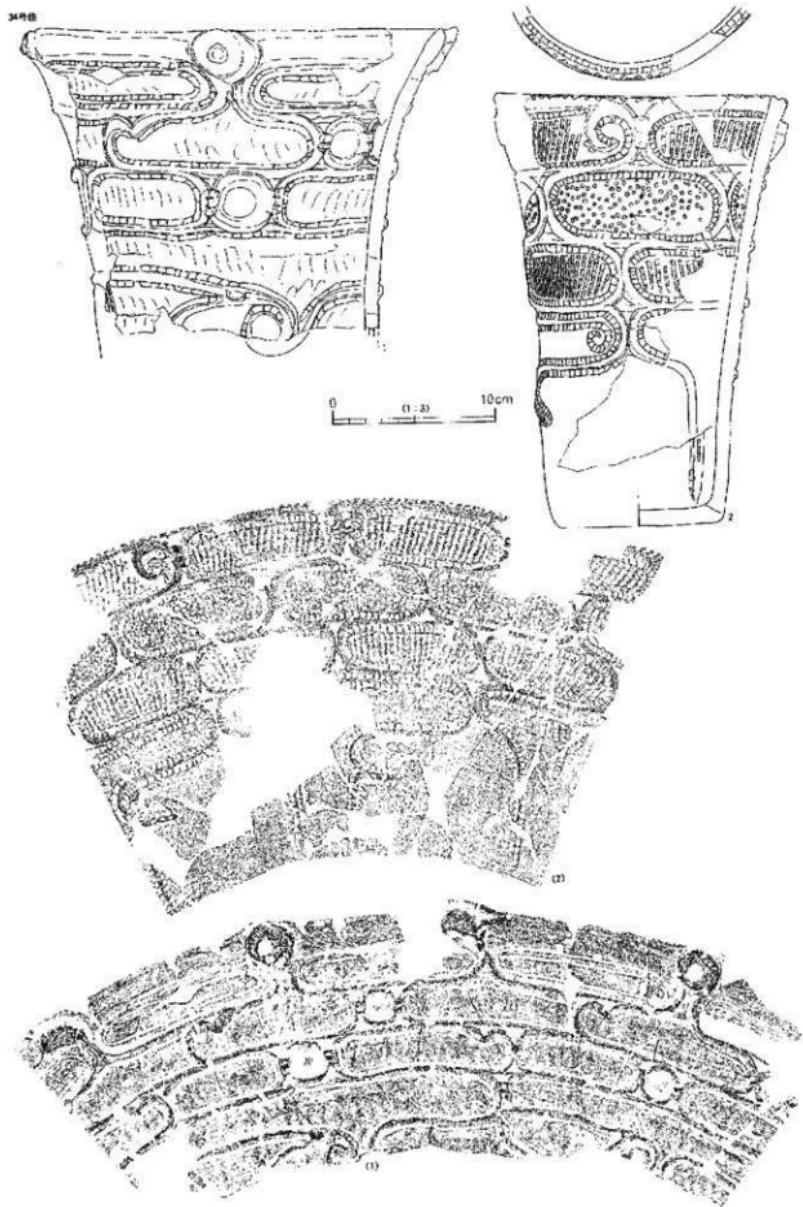
第72図 草創～早期石器実測図（様器・複形石器）



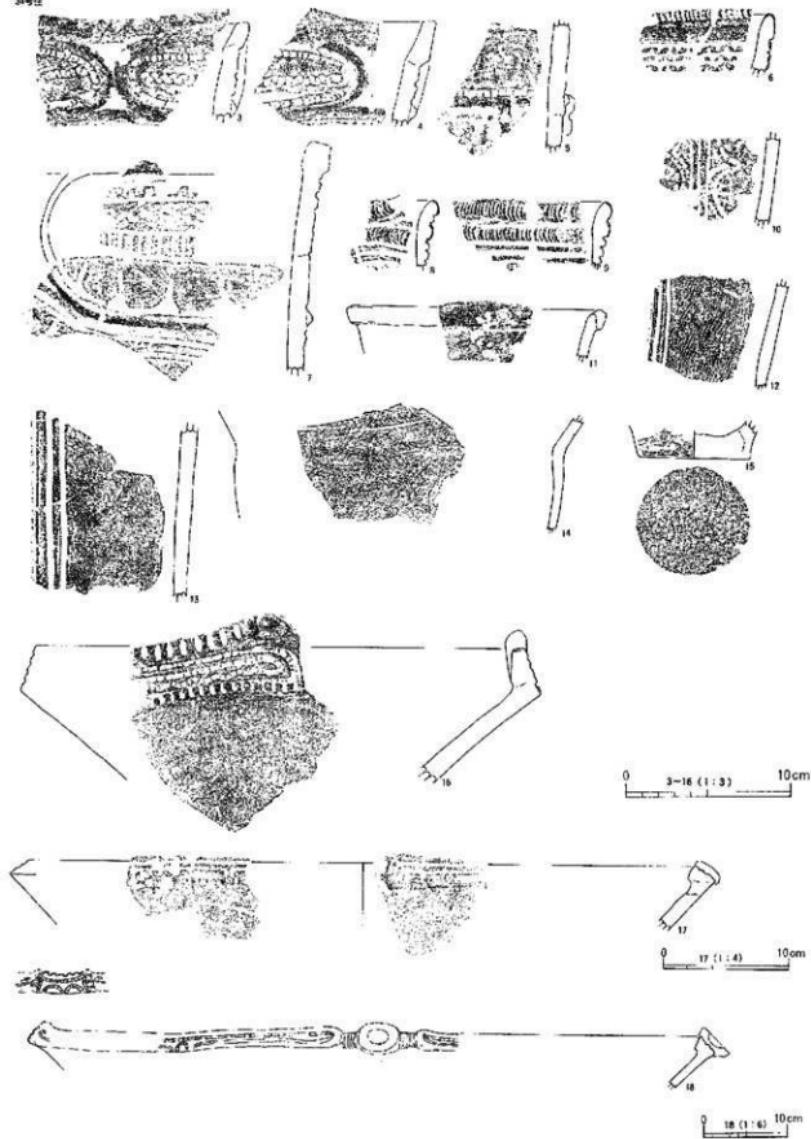
第73図 草創～早期石器実測図（軸形石器・撲器・石錐など）



第74図 草創～早期石器実測図



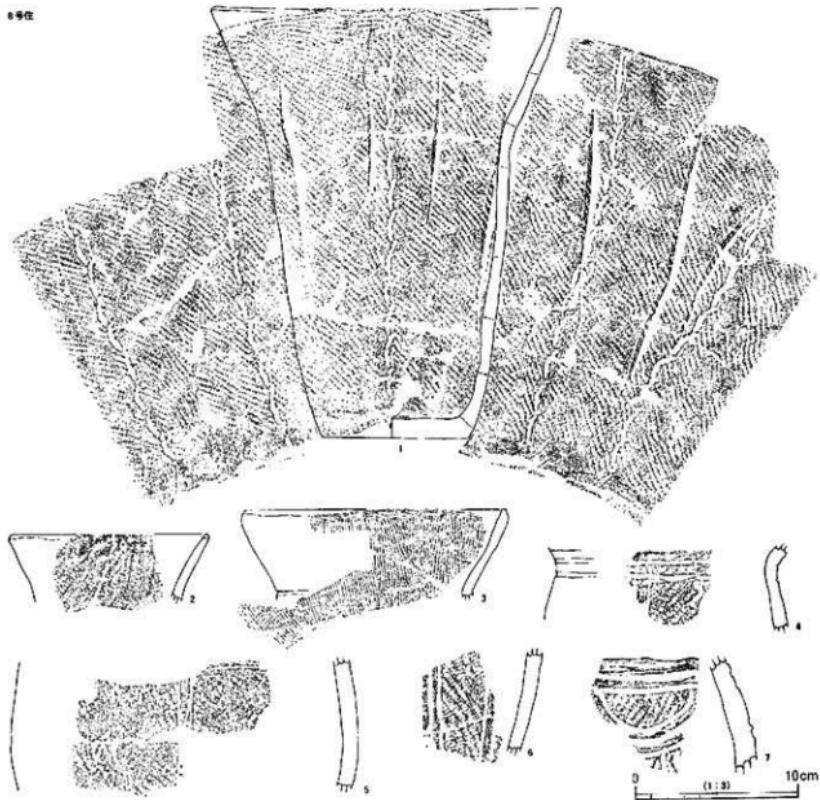
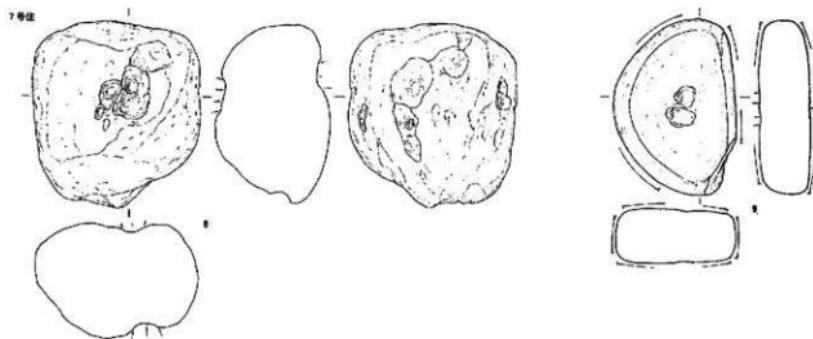
第75图 34号住出土遗物实测图 (1·2)



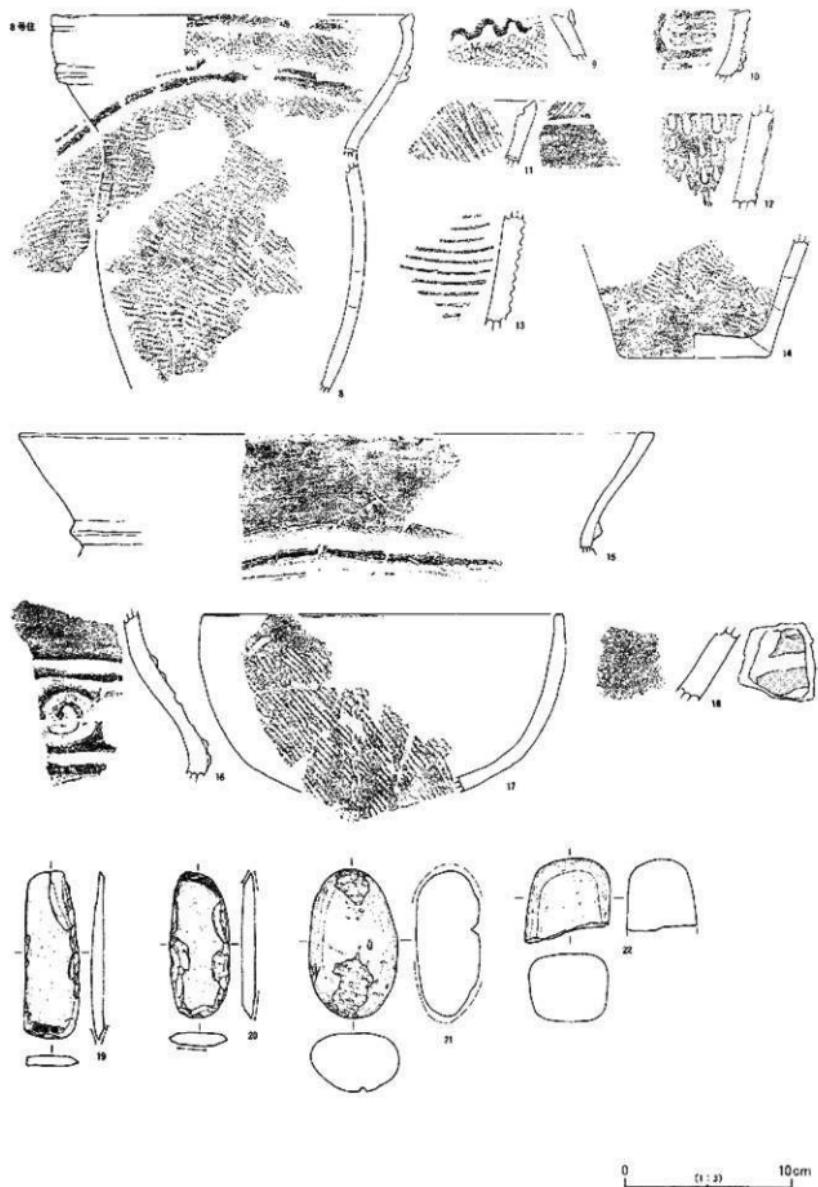
第76図 34号住出土遺物実測図 (3~18)



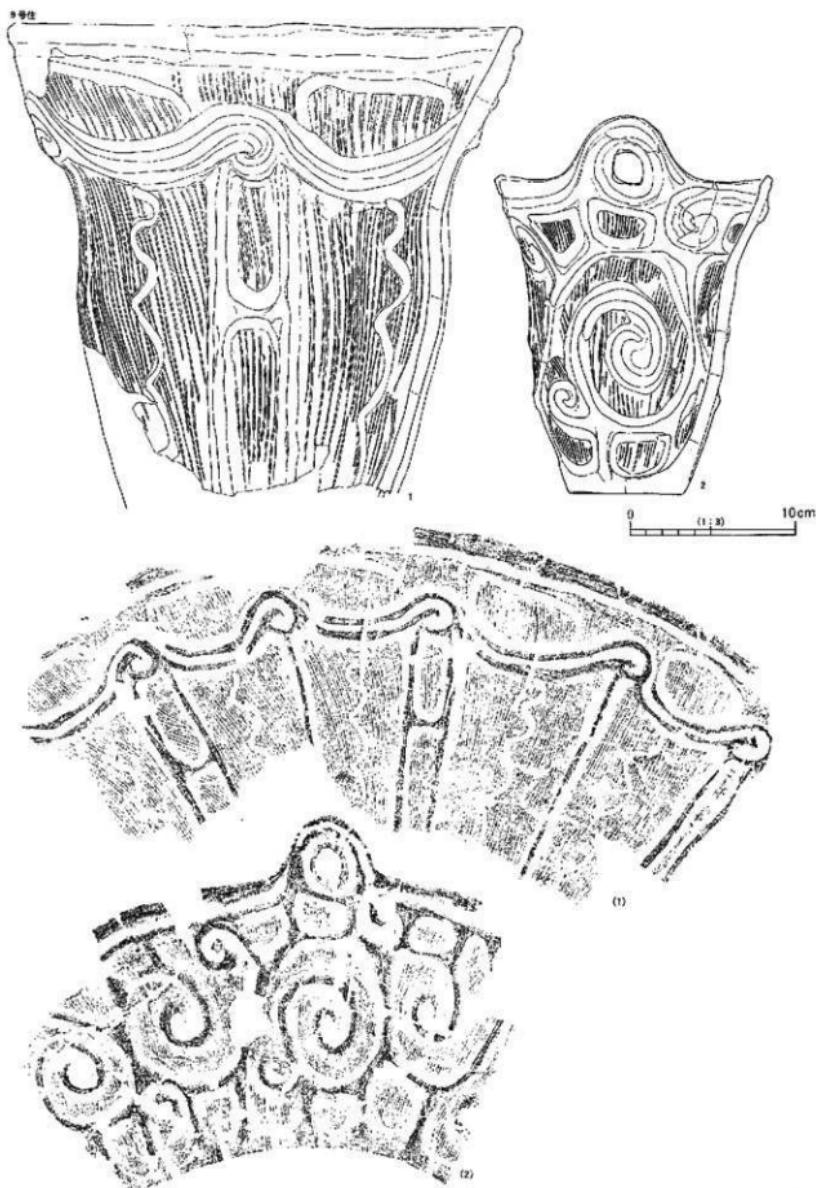
第77図 34号住 (19~24)・3号住 (1~4)・7号住 (1~7)出土遺物実測図



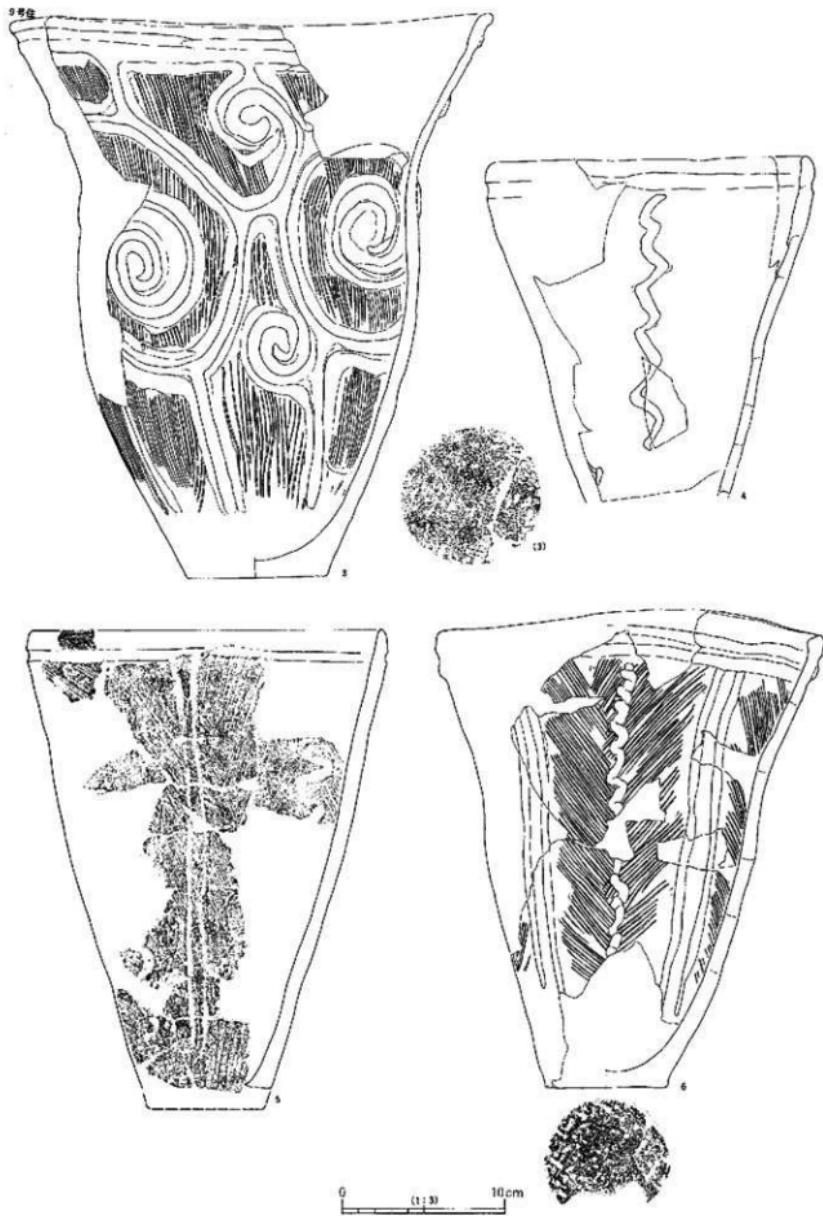
第78図 7号住(8・9)・6号住(1~7)出土遺物実測図



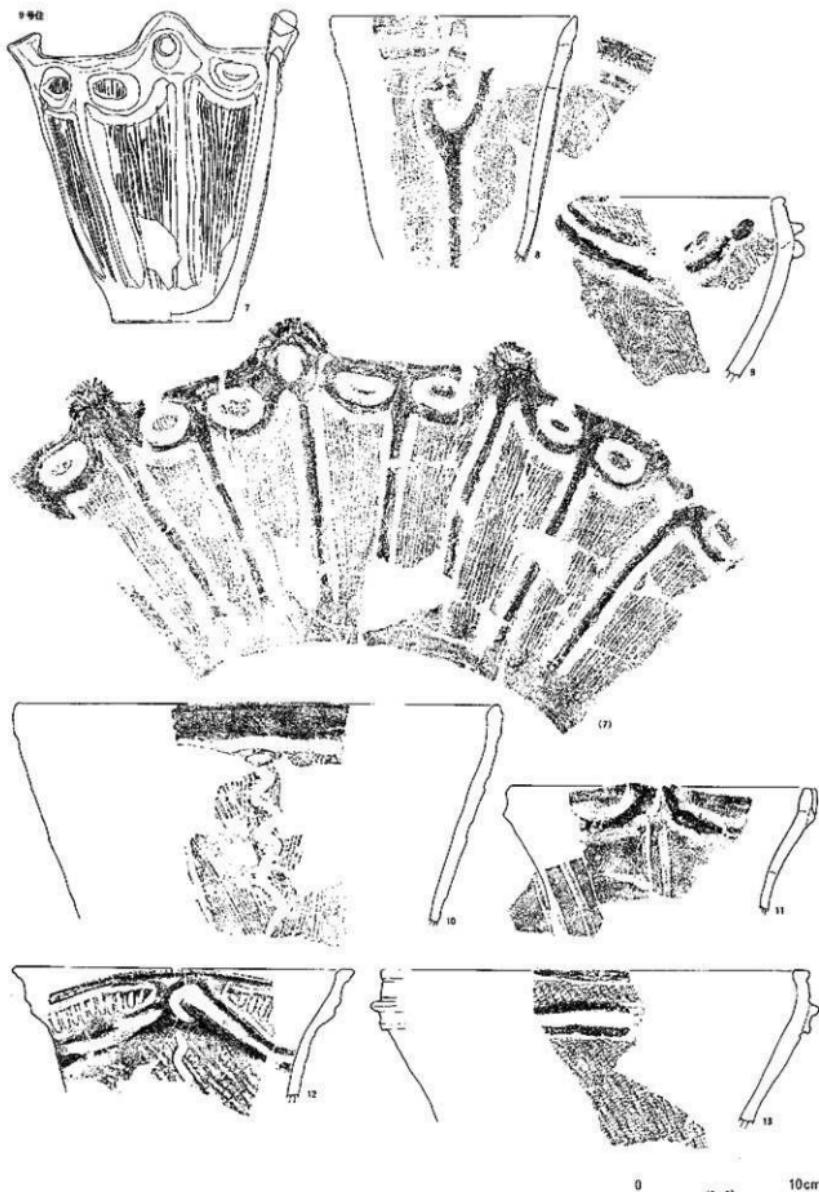
第79図 8号住出土遺物実測図 (8~22)



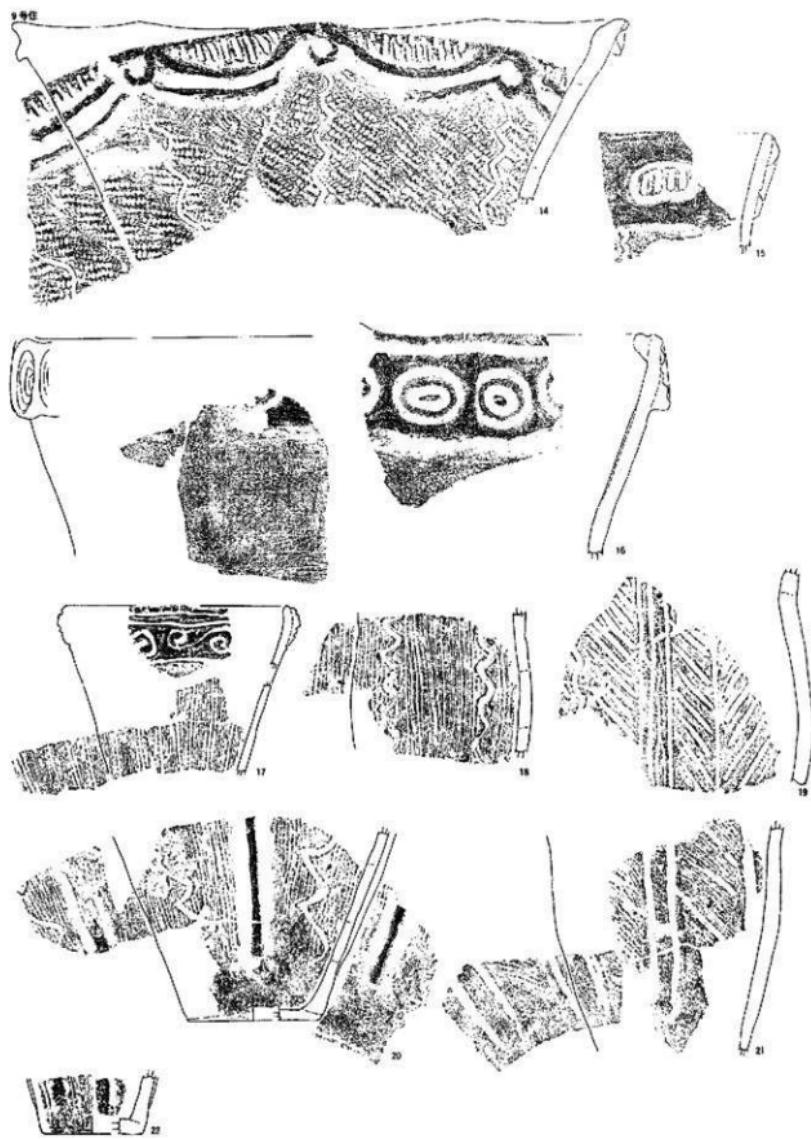
第80図 9号住出土遺物実測図 (1・2)



第81図 9号住出土遺物実測図(3~6)



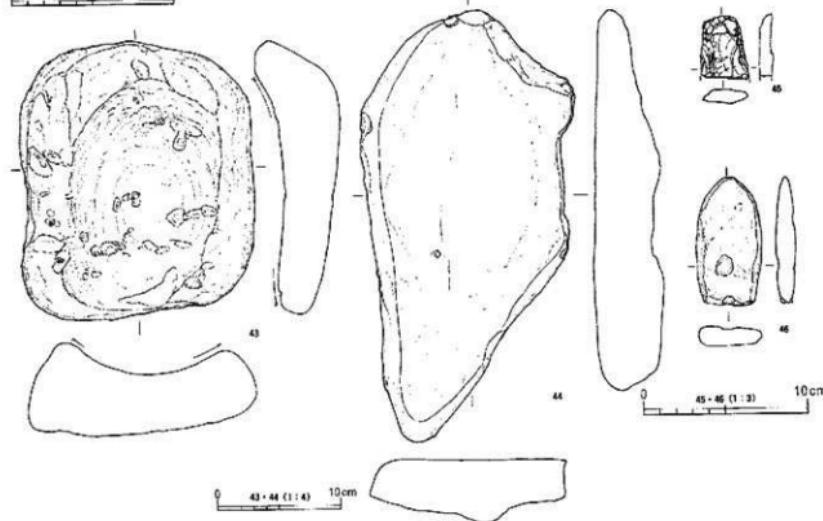
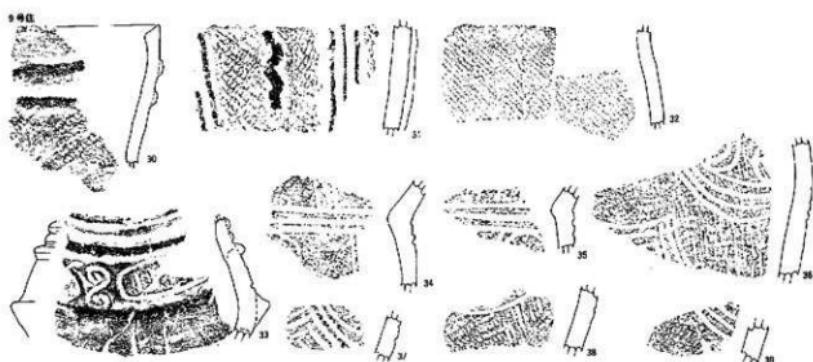
第82圖 9號住出土遺物實測圖 (7~13)



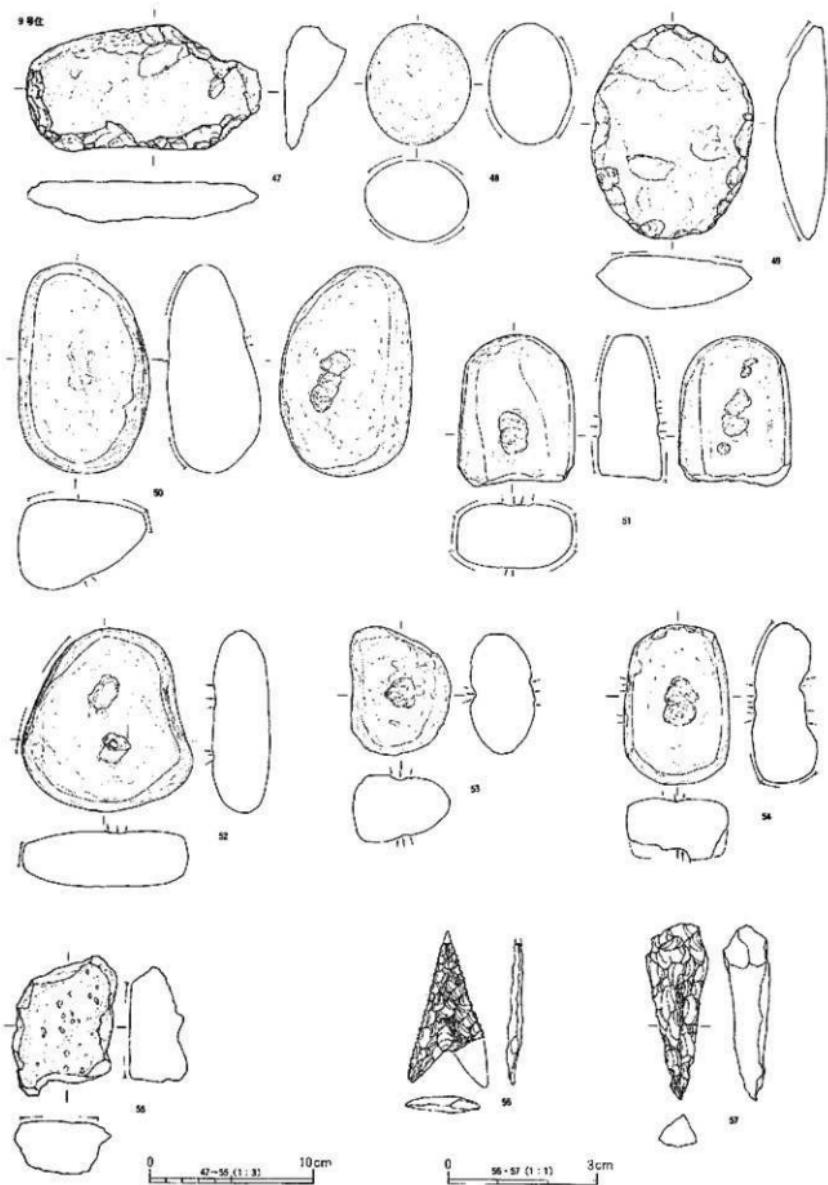
第83図 9号住出土遺物実測図 (14~22)



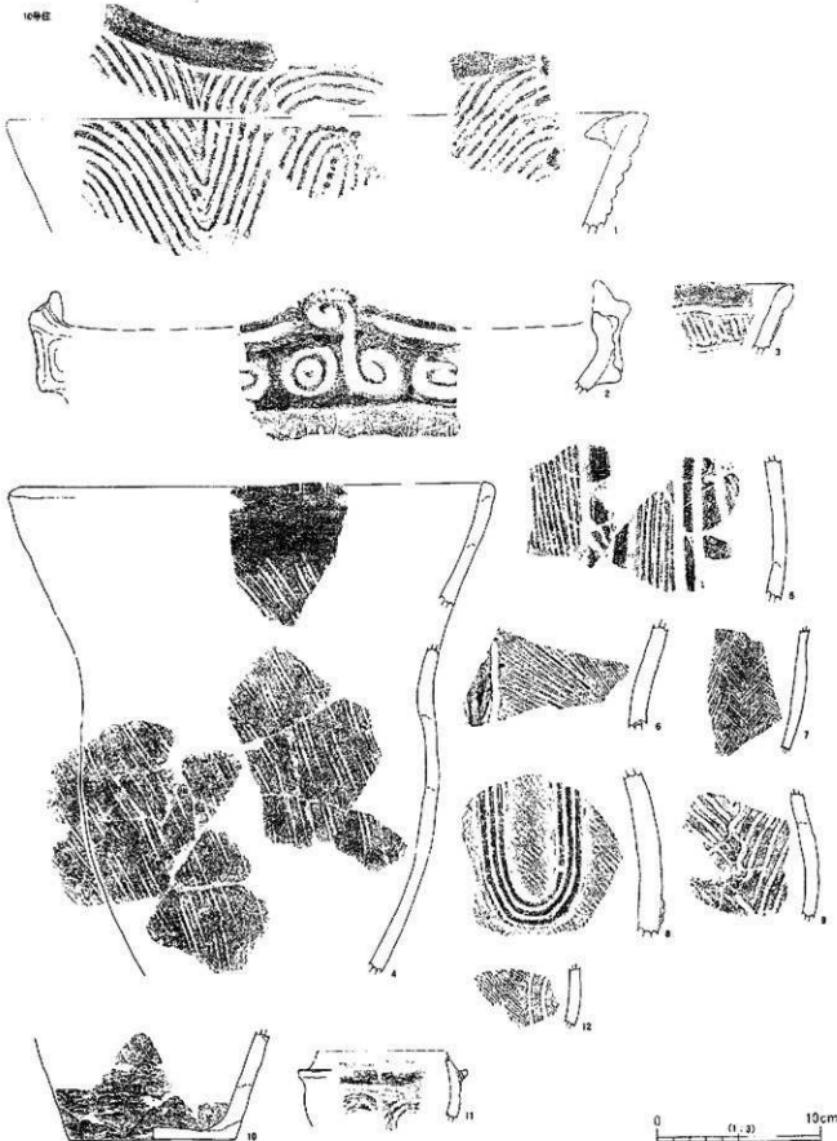
第84図 9号住出土遺物実測図 (23~29)



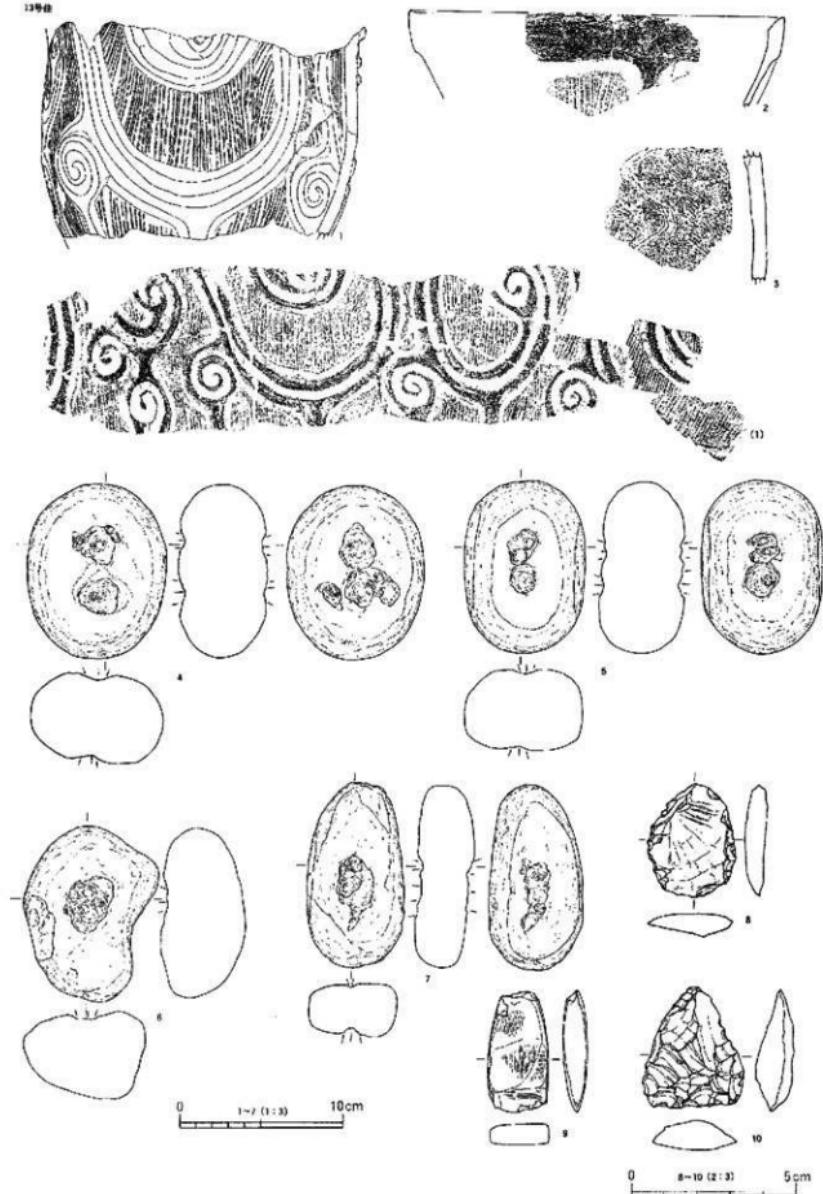
第85図 9号住居上遺物実測図(30~46)



第36図 9号住出土遺物実測図(47~56)

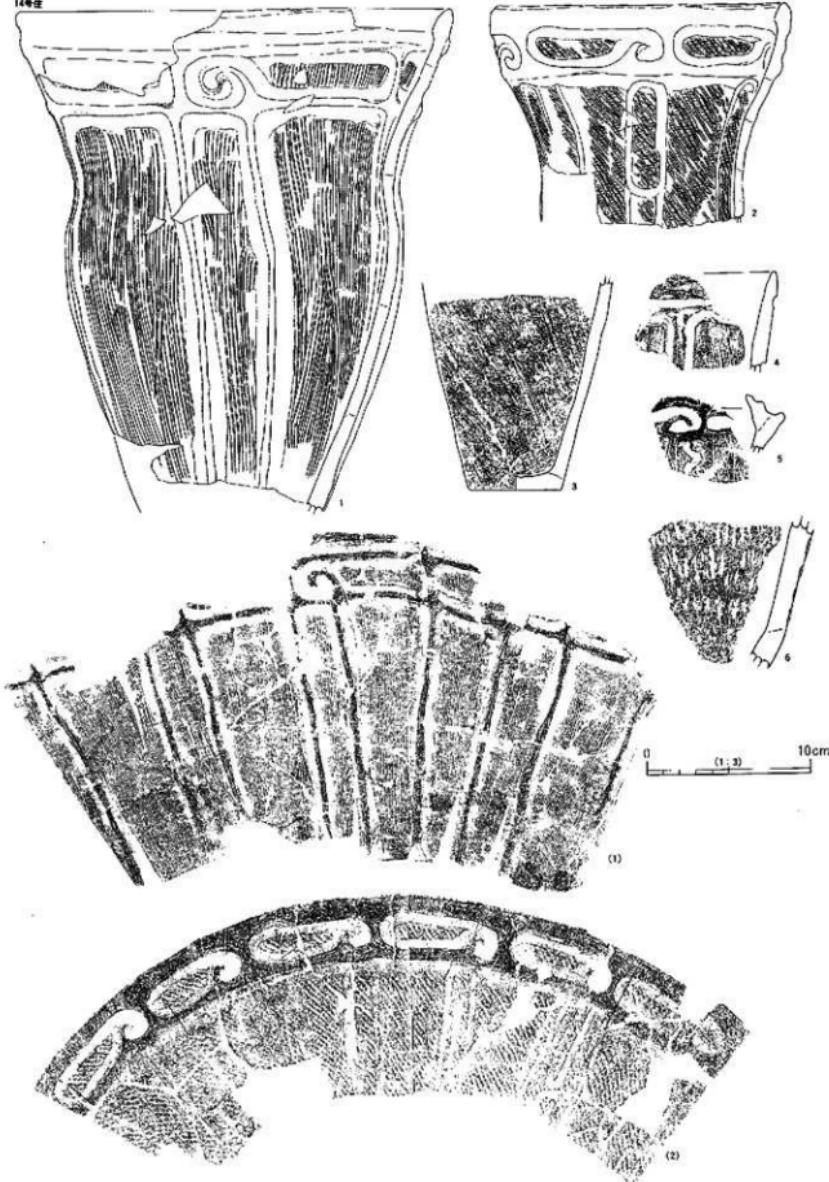


第87图 10号住出土遗物实测图 (1~12)

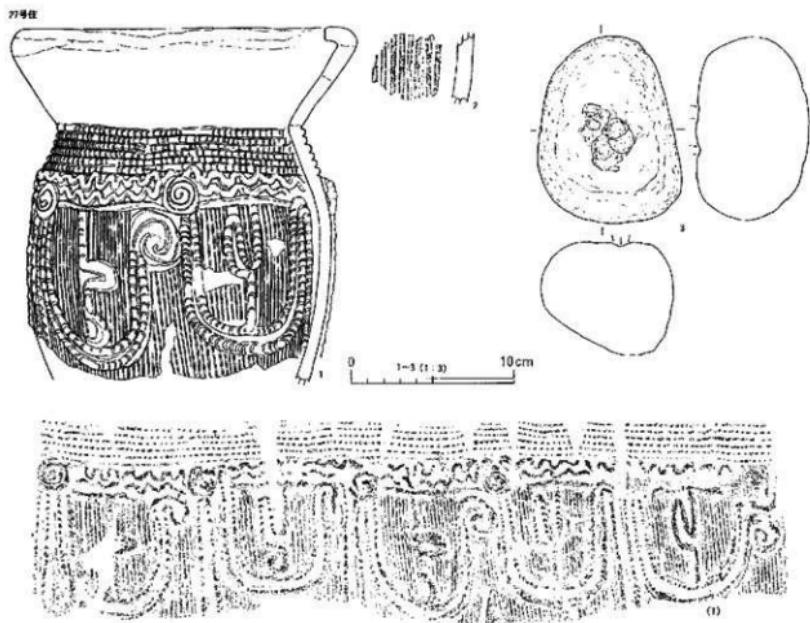
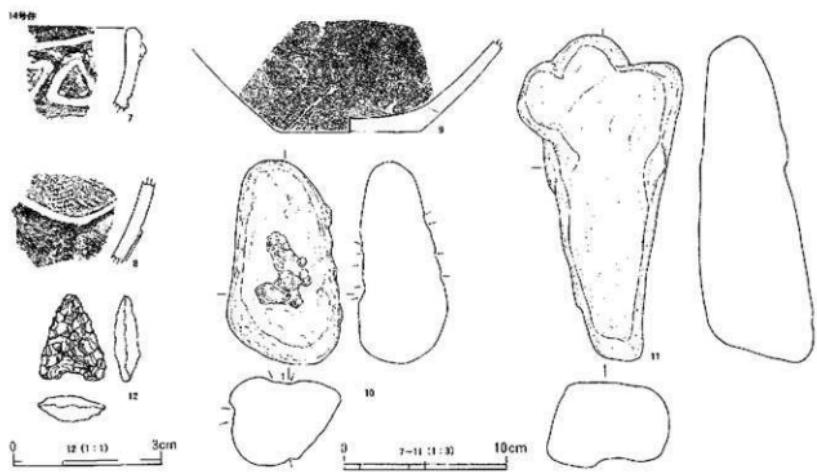


第88図 13号住出土遺物実測図 (1~10)

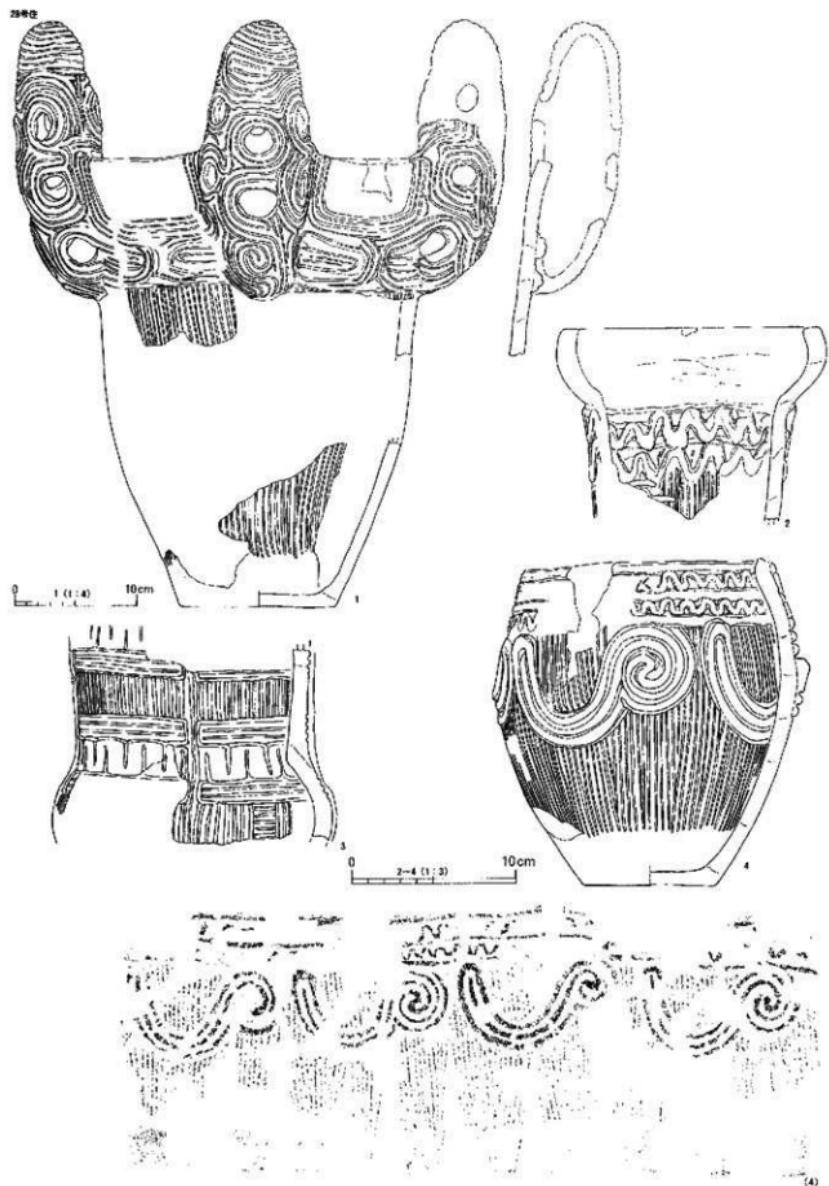
14号



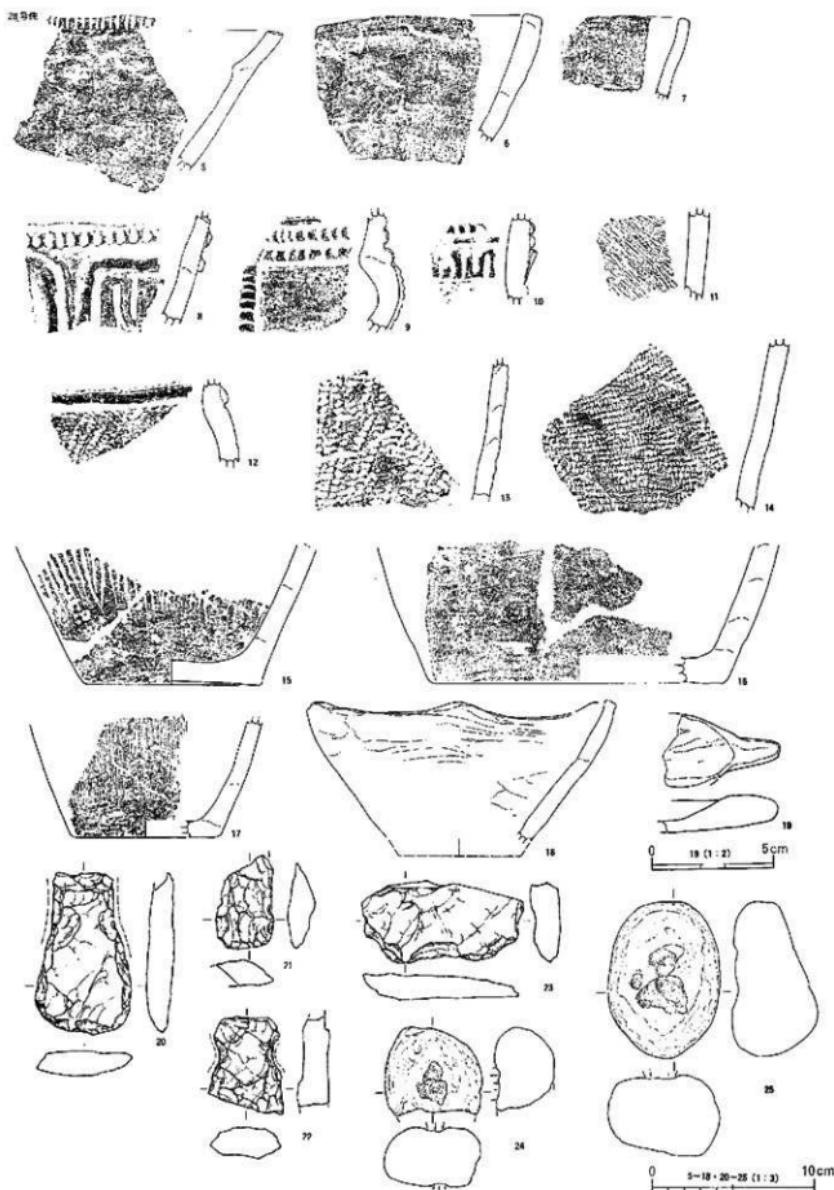
第89图 14号住出土陶物实测图 (1~6)



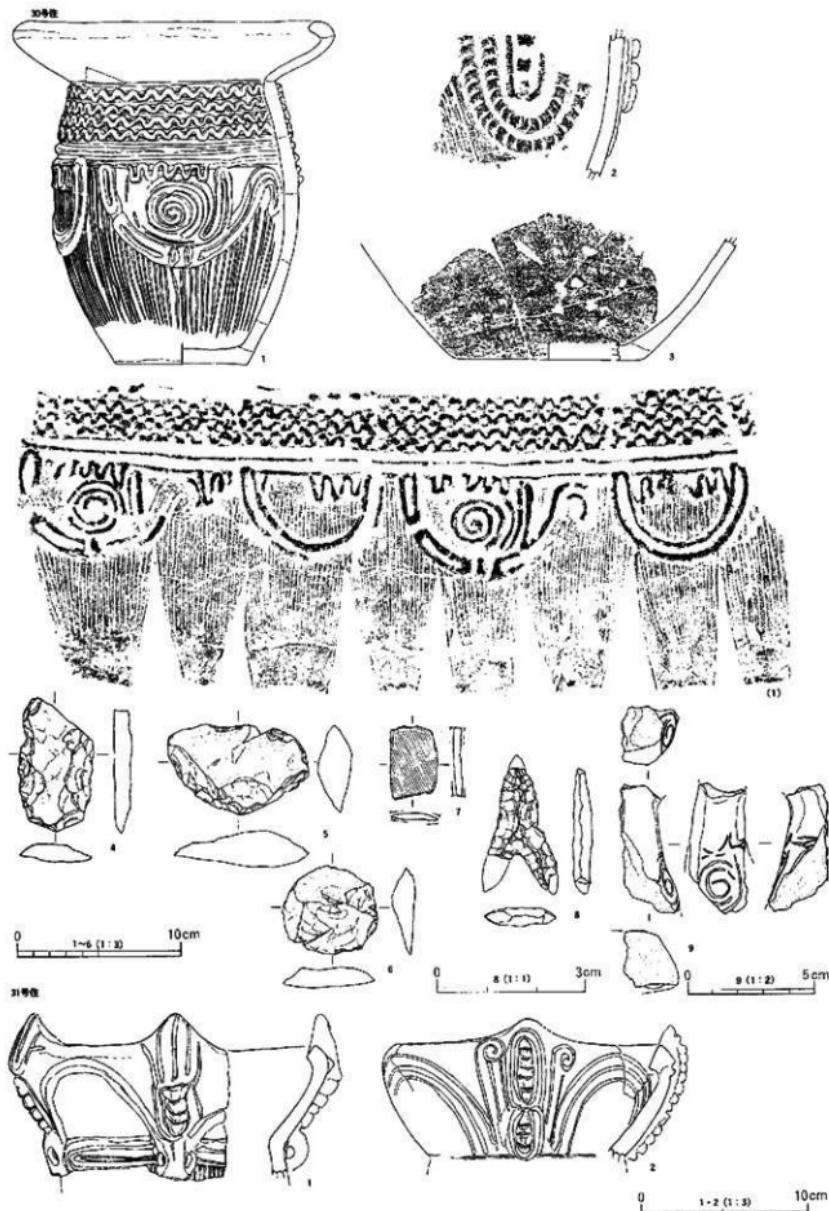
第90図 14号住 (7~12)・27号住 (1~3)出土遺物実測図



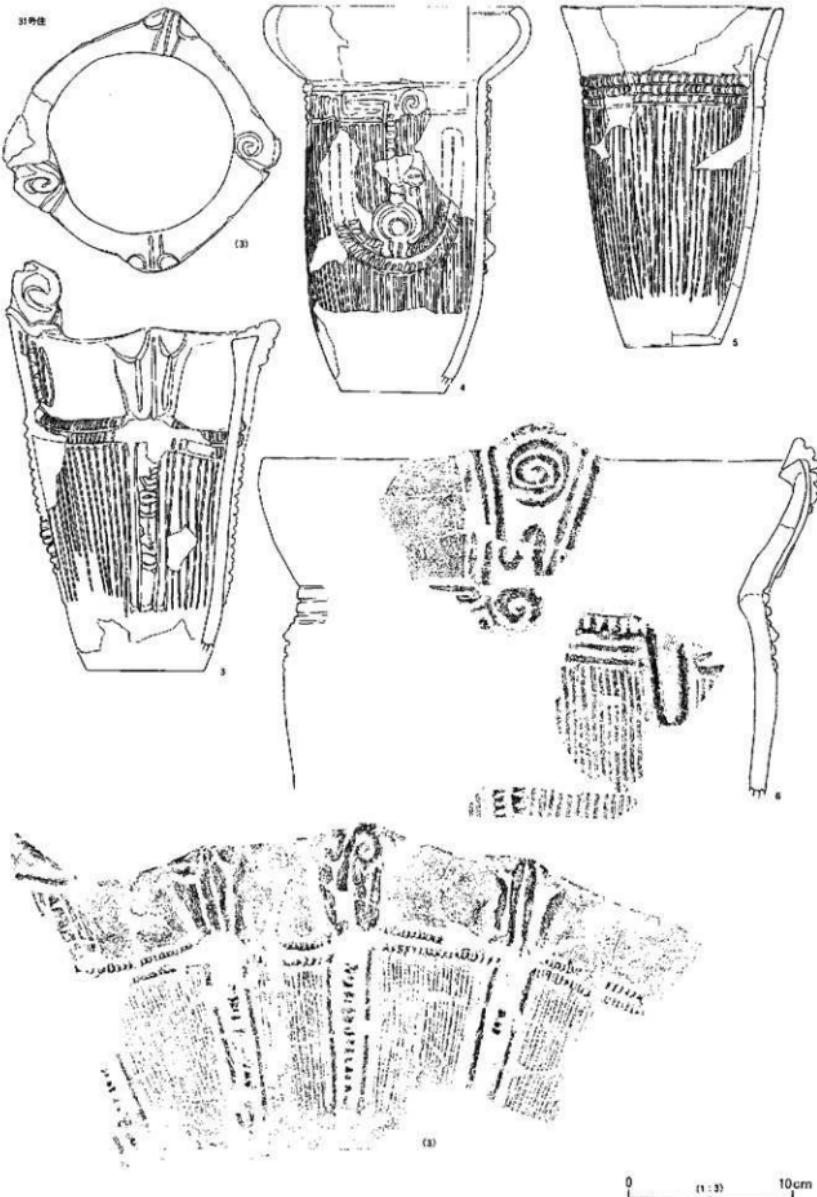
第91図 28号住出土遺物実測図 (1~4)



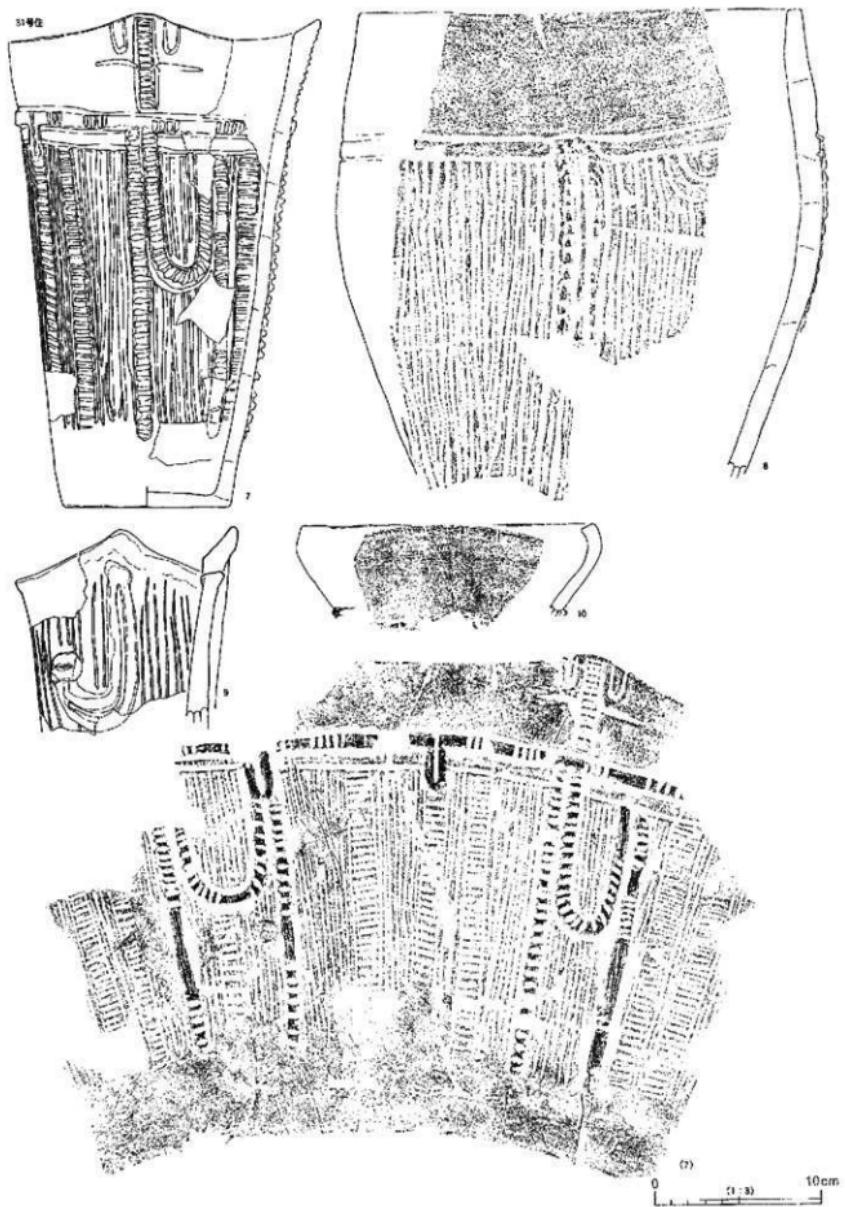
第92図 28号住出土遺物実測図 (5~25)



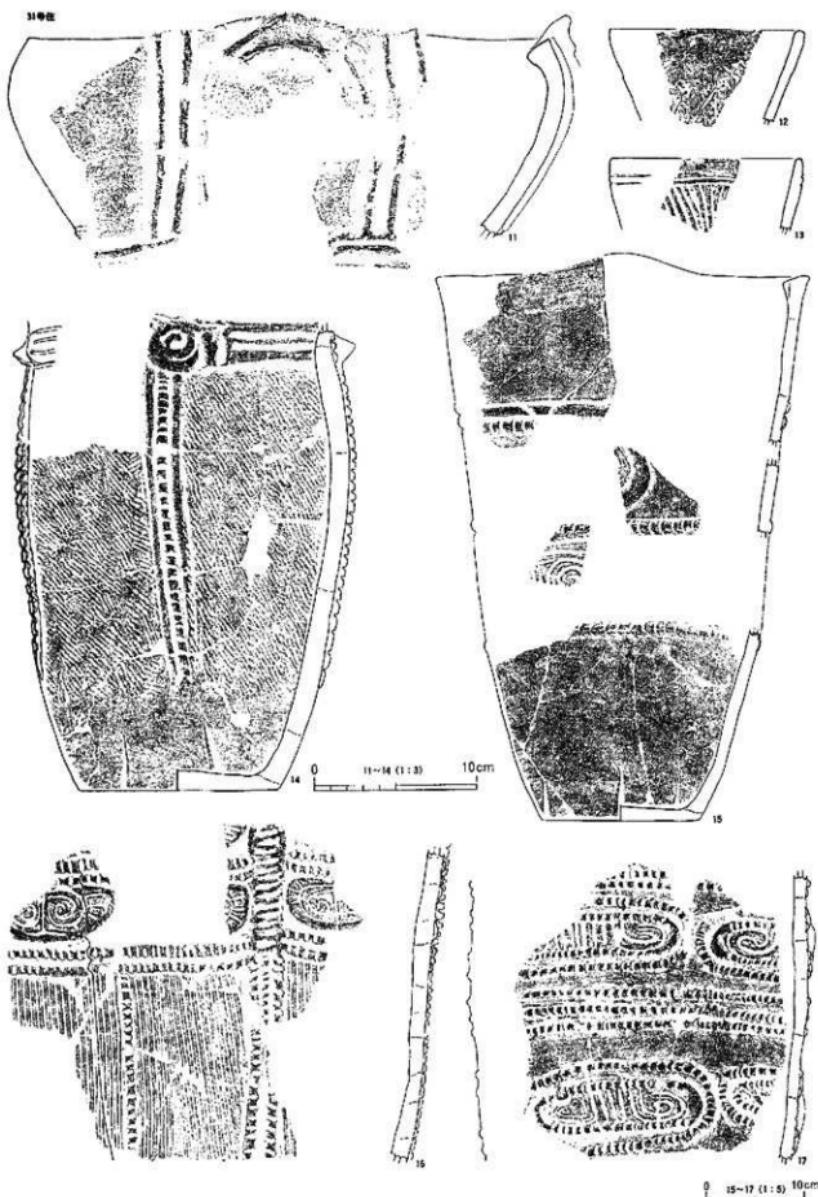
第93图 30号住(1~9)・31号住(1~2)出土遺物実測図



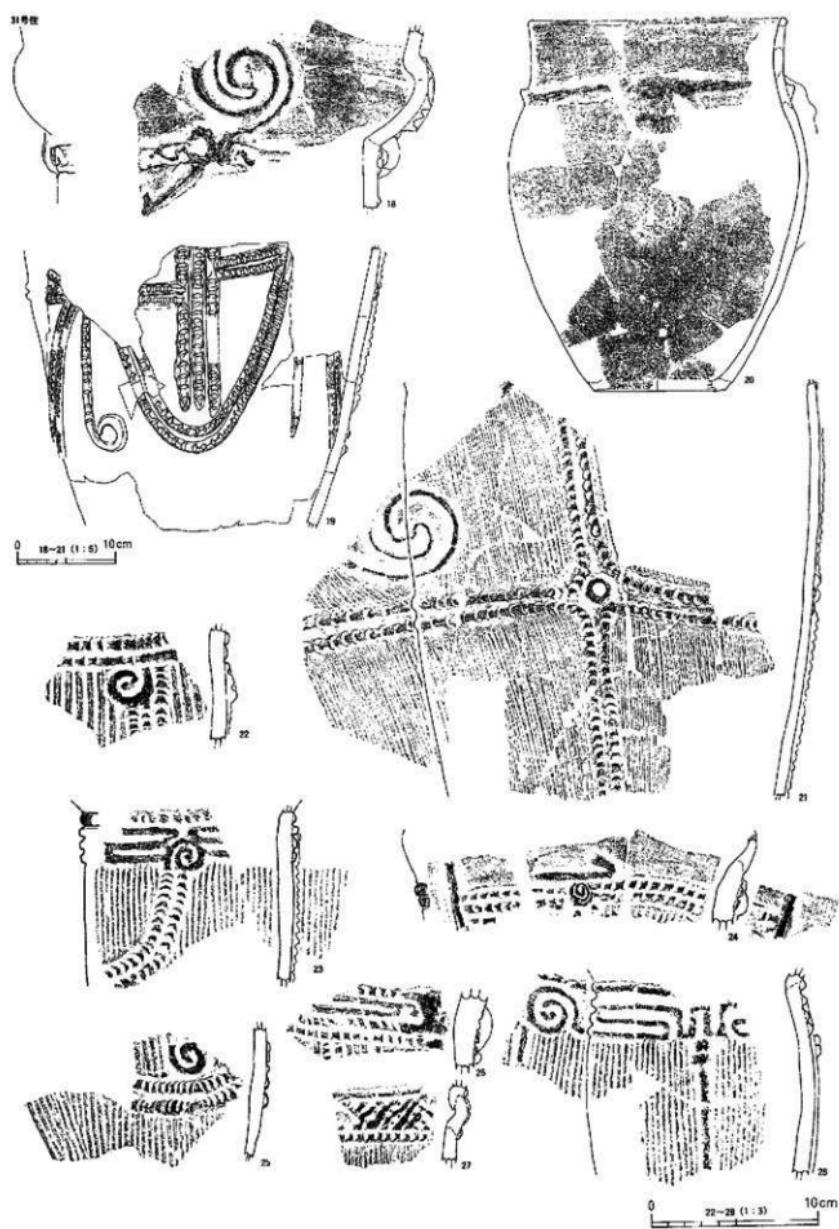
第94図 31号住出土遺物実測図 (3~6)



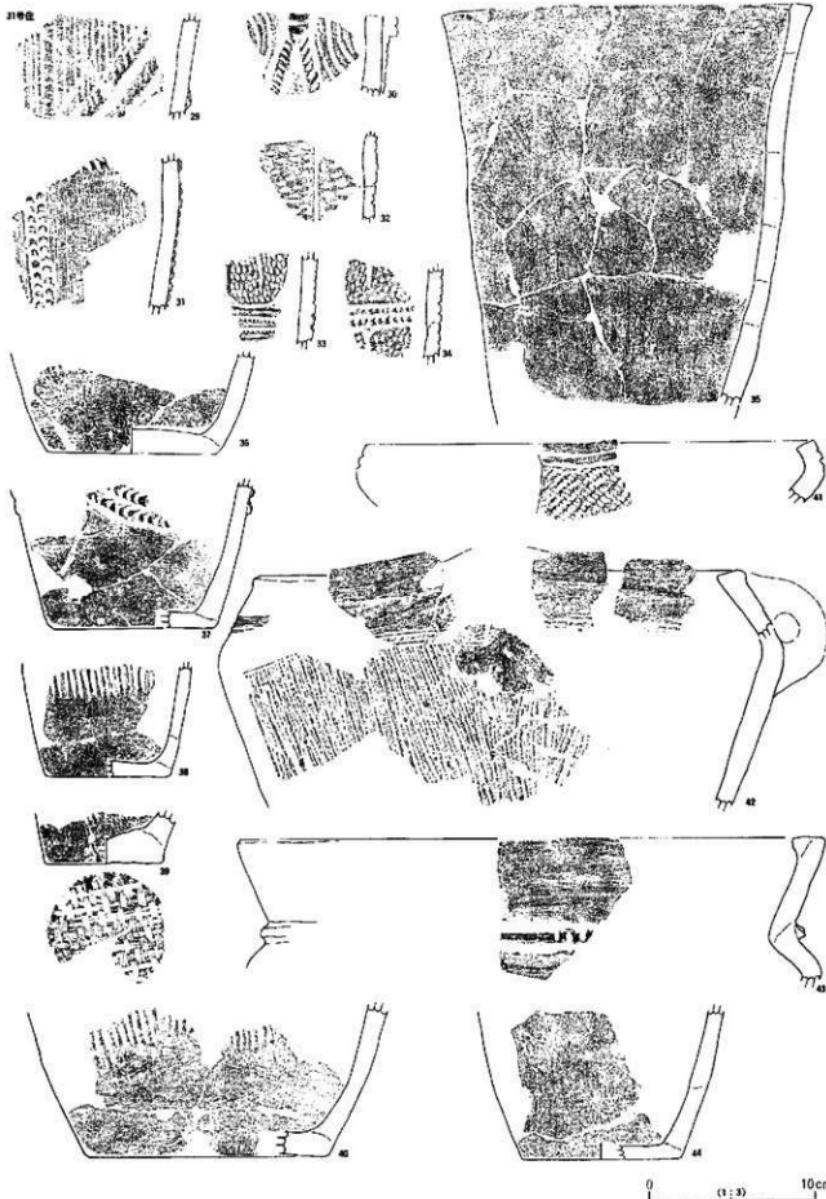
第95図 31号住出土遺物実測図 (7~10)



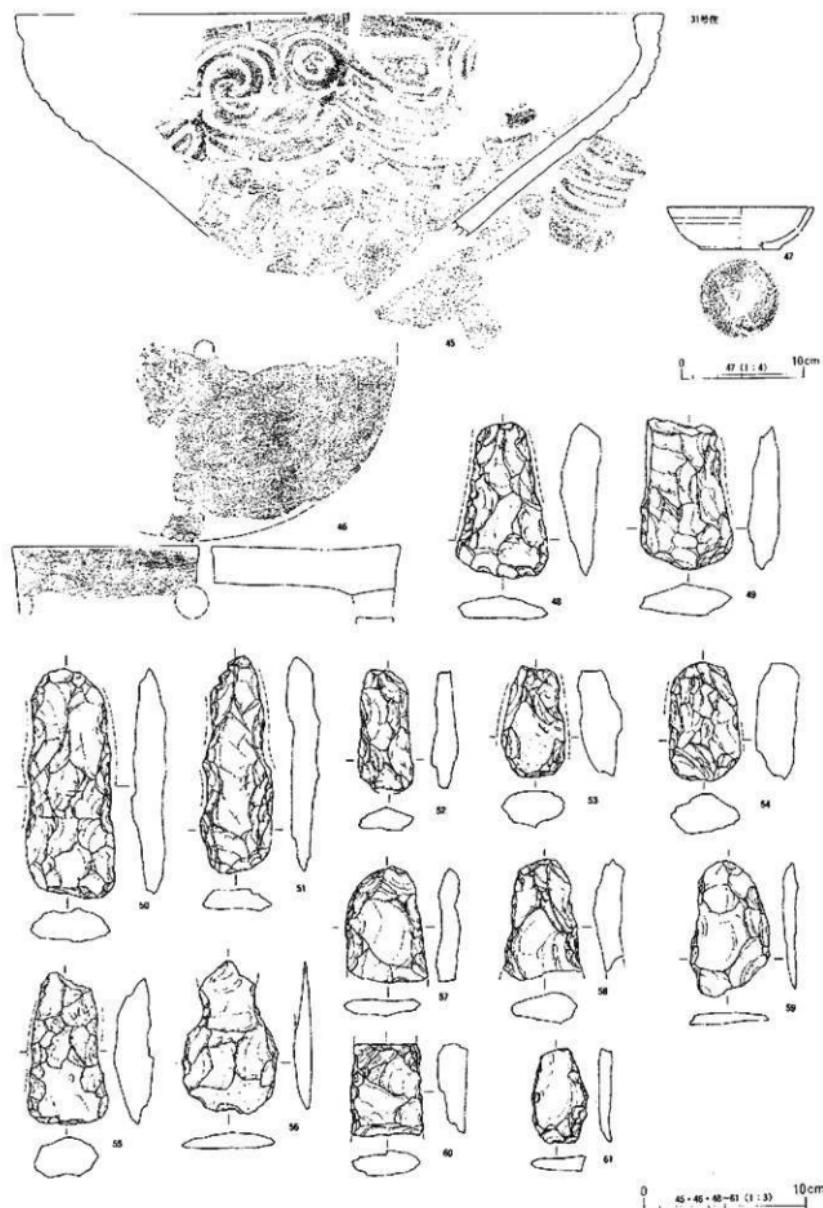
第96图 31号住出土遗物实测图 (11~17)



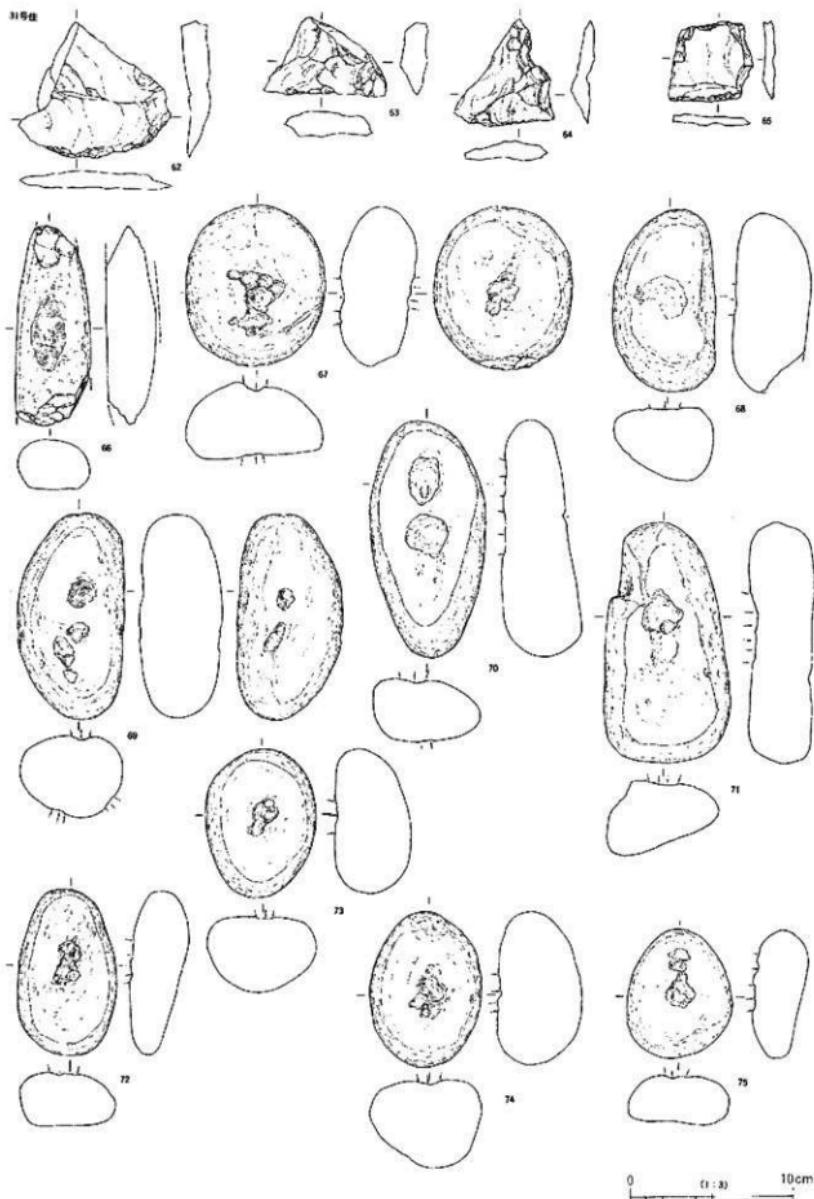
第97图 31号墓出土文物复原图 (18~28)



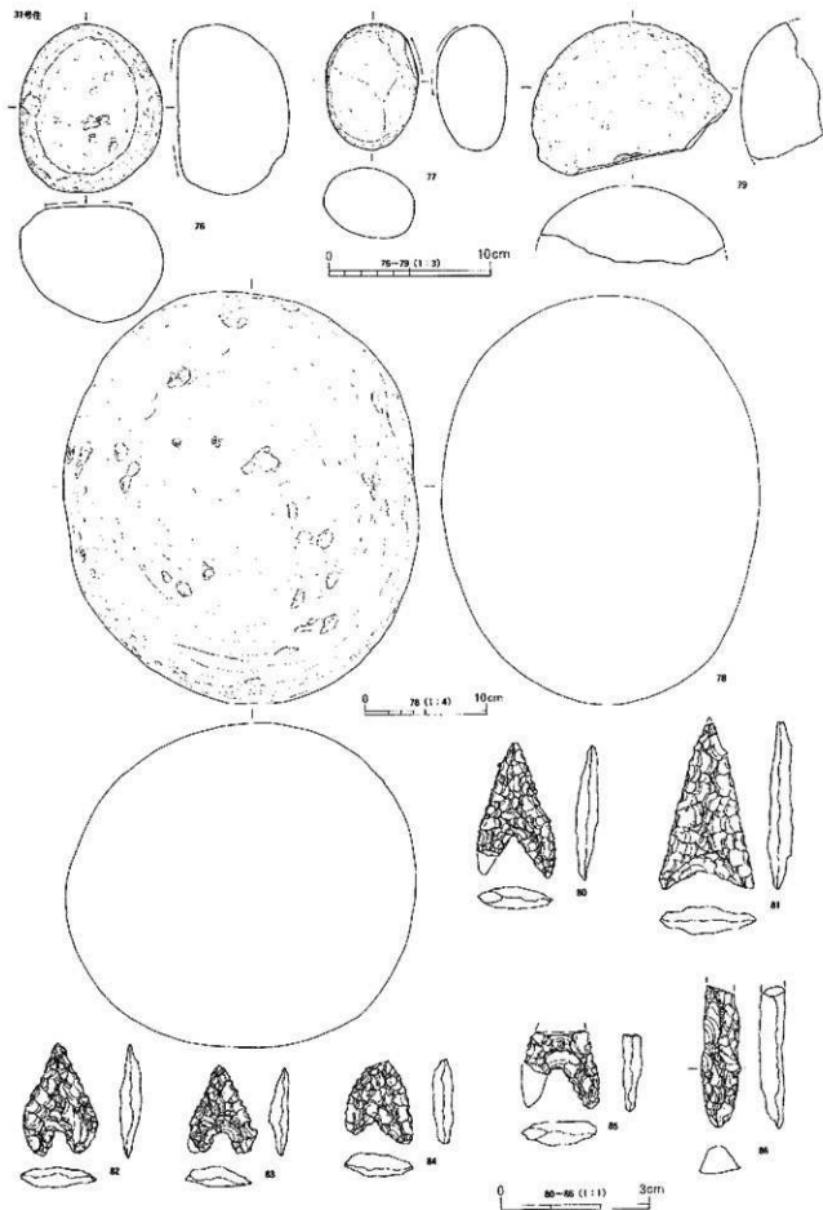
第98図 31号住出土遺物実測図 (29~44)



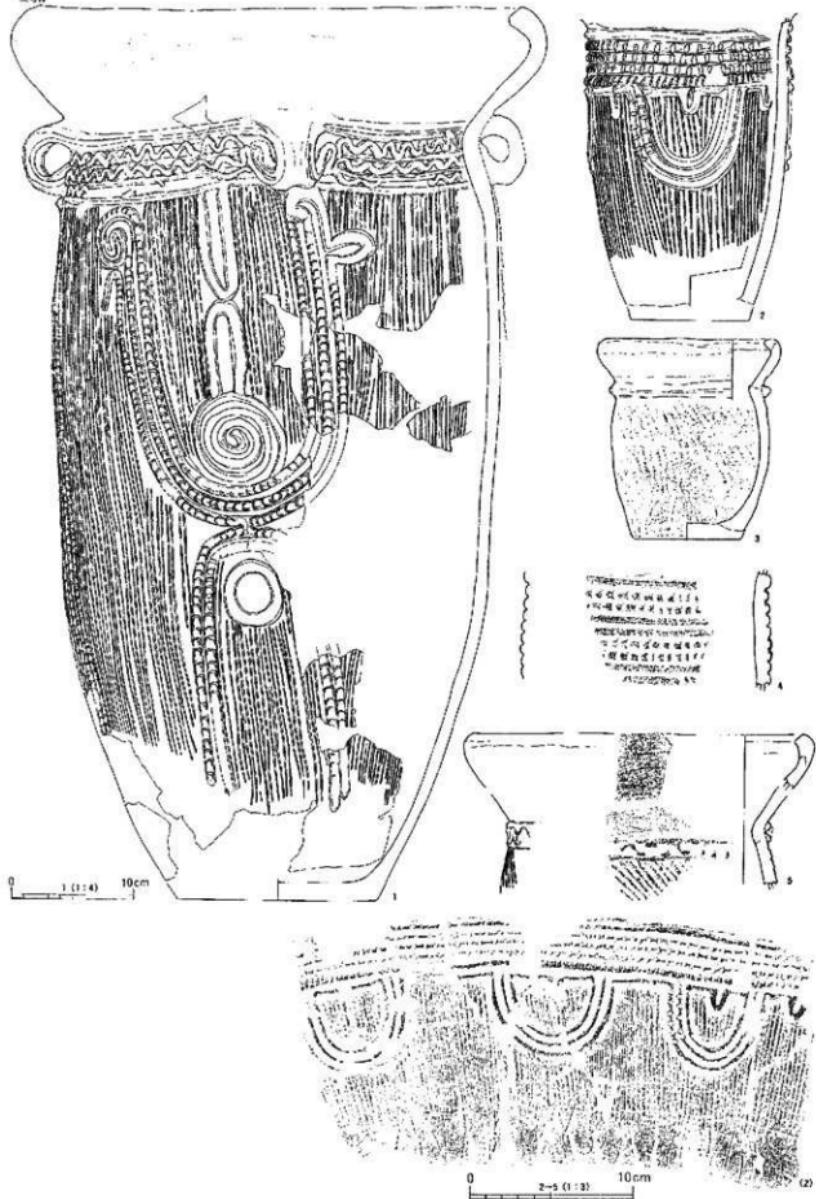
第99図 31号住出上遺物実測図(45~61)



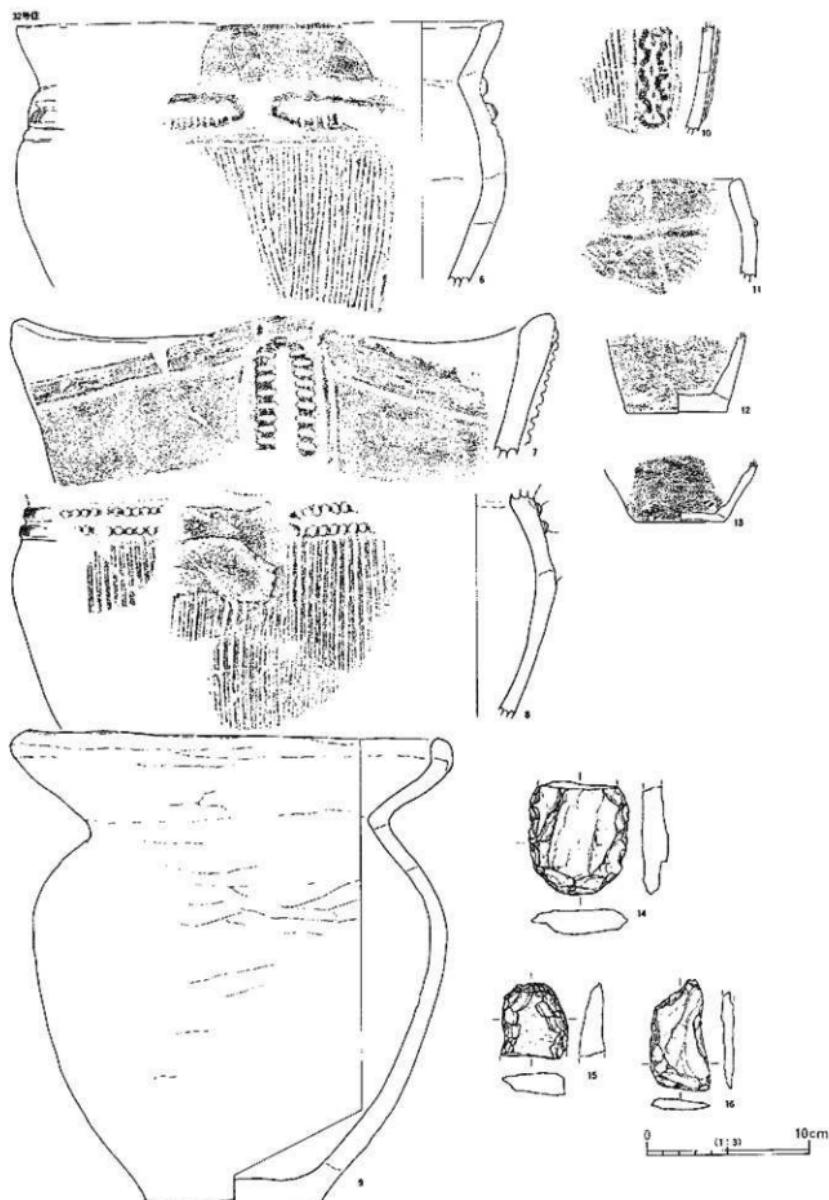
第100図 31号住出土遺物実測図 (62~75)



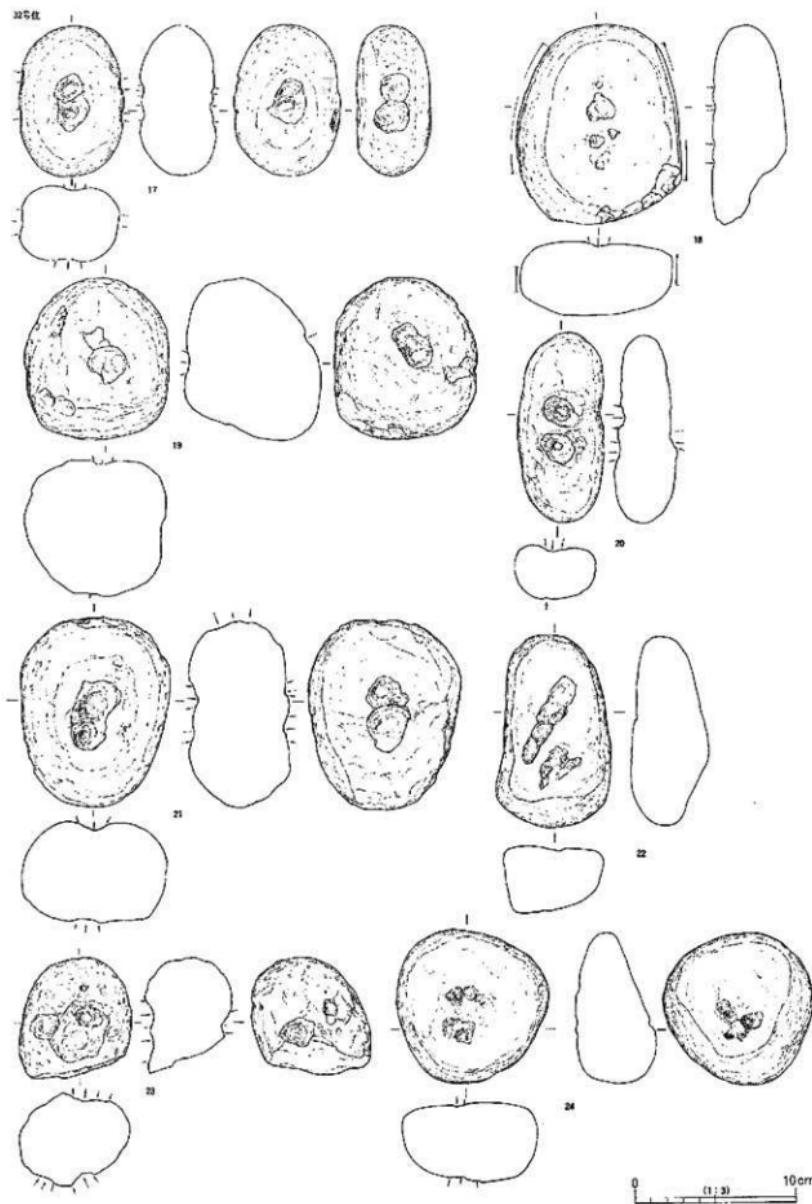
第101図 31号住出土遺物実測図 (76~86)



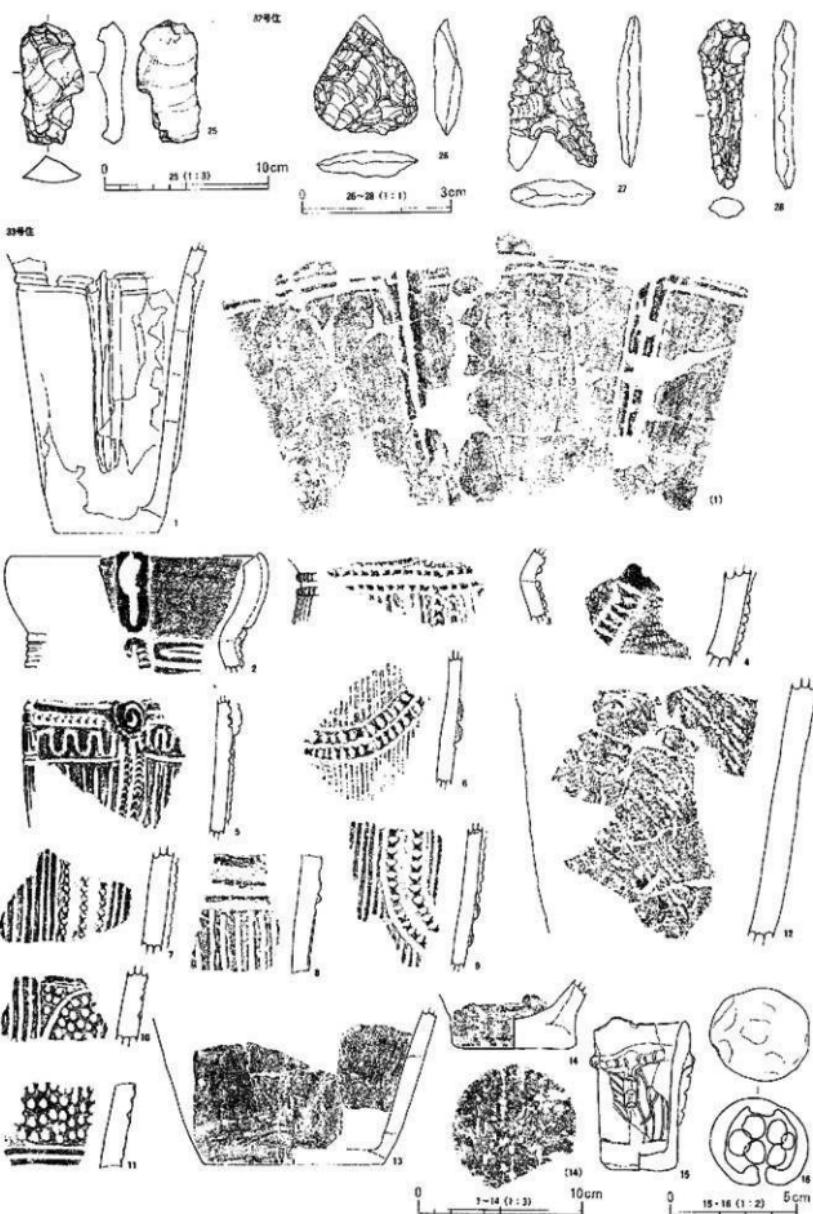
第102圖 32號出土遺物素面圖 (1~5)



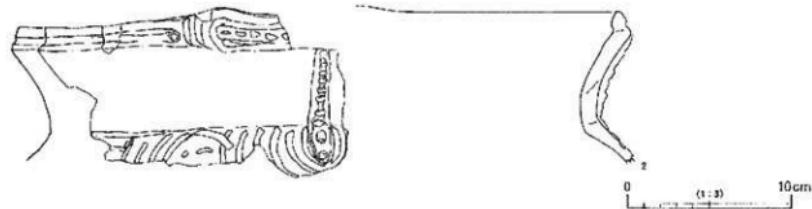
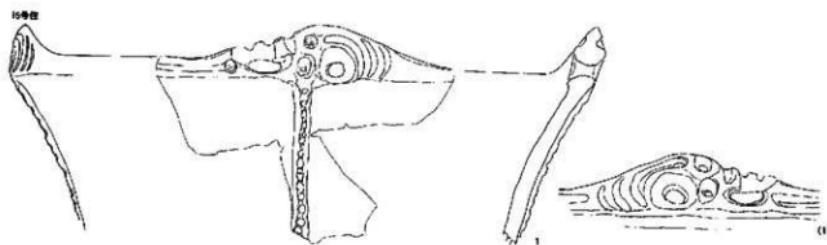
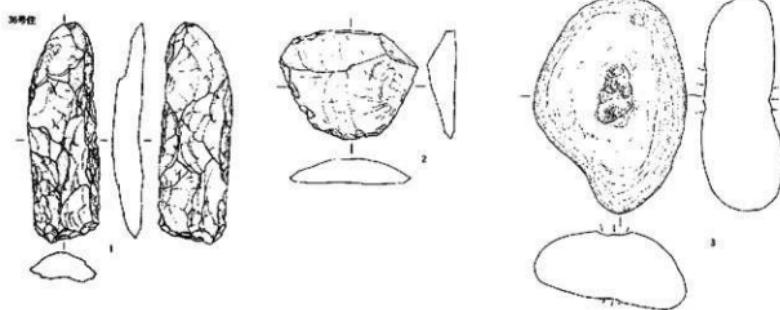
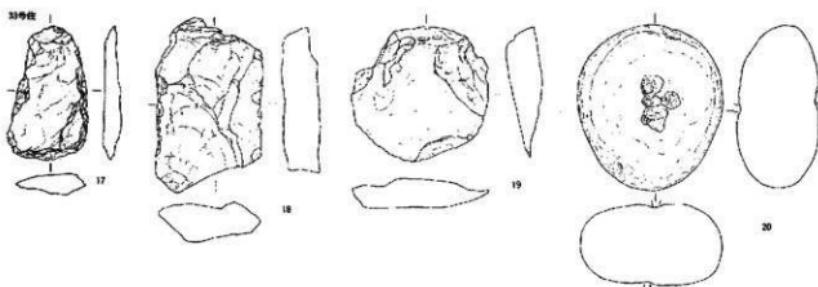
第103圖 32號住出土遺物實測圖 (6~16)



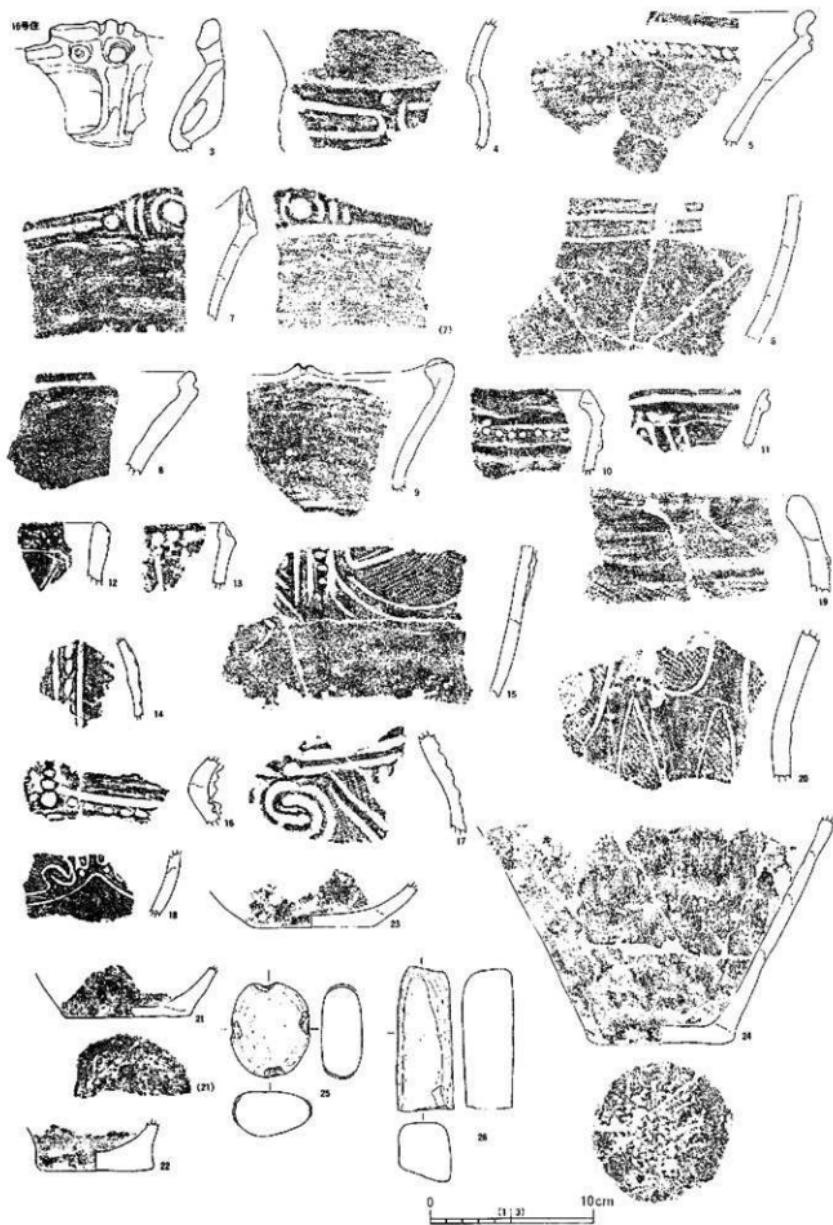
第104図 32号住出土遺物実測図 (17~24)



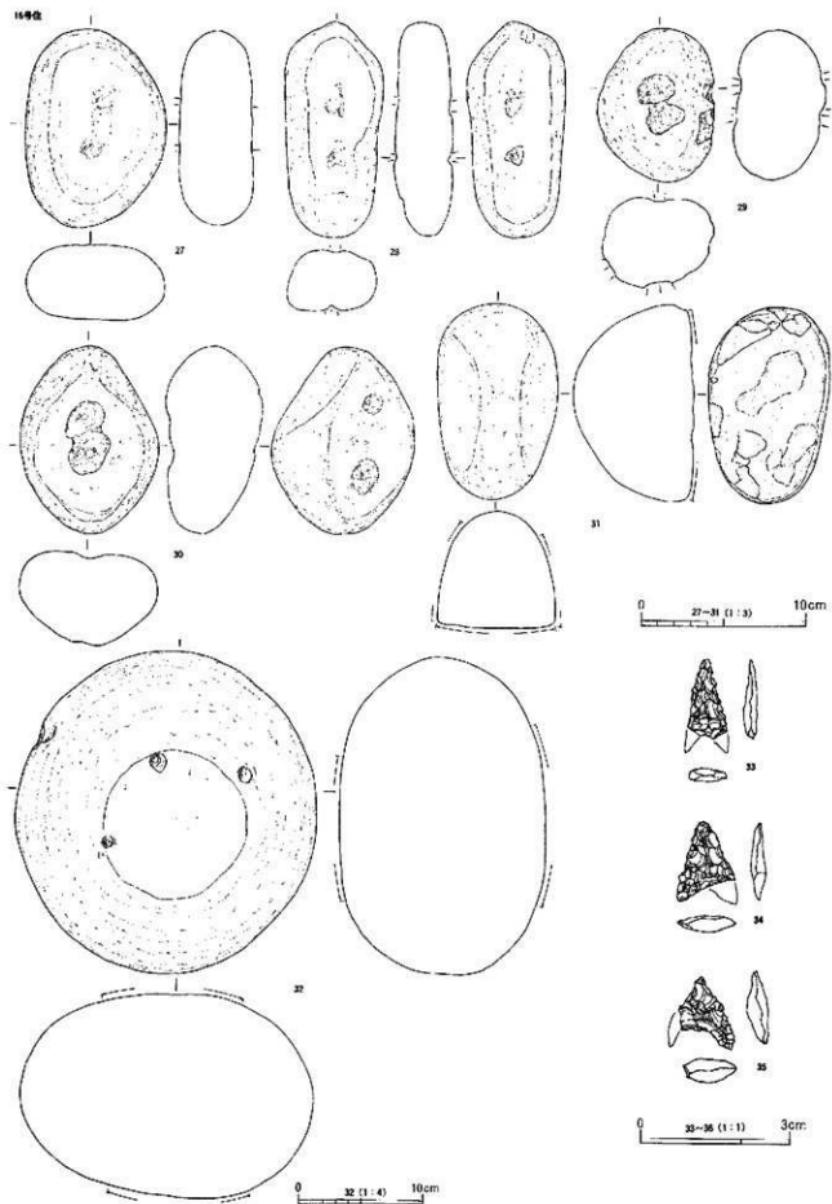
第105図 32号住 (25~28)・33号住 (1~16)出土遺物実測図



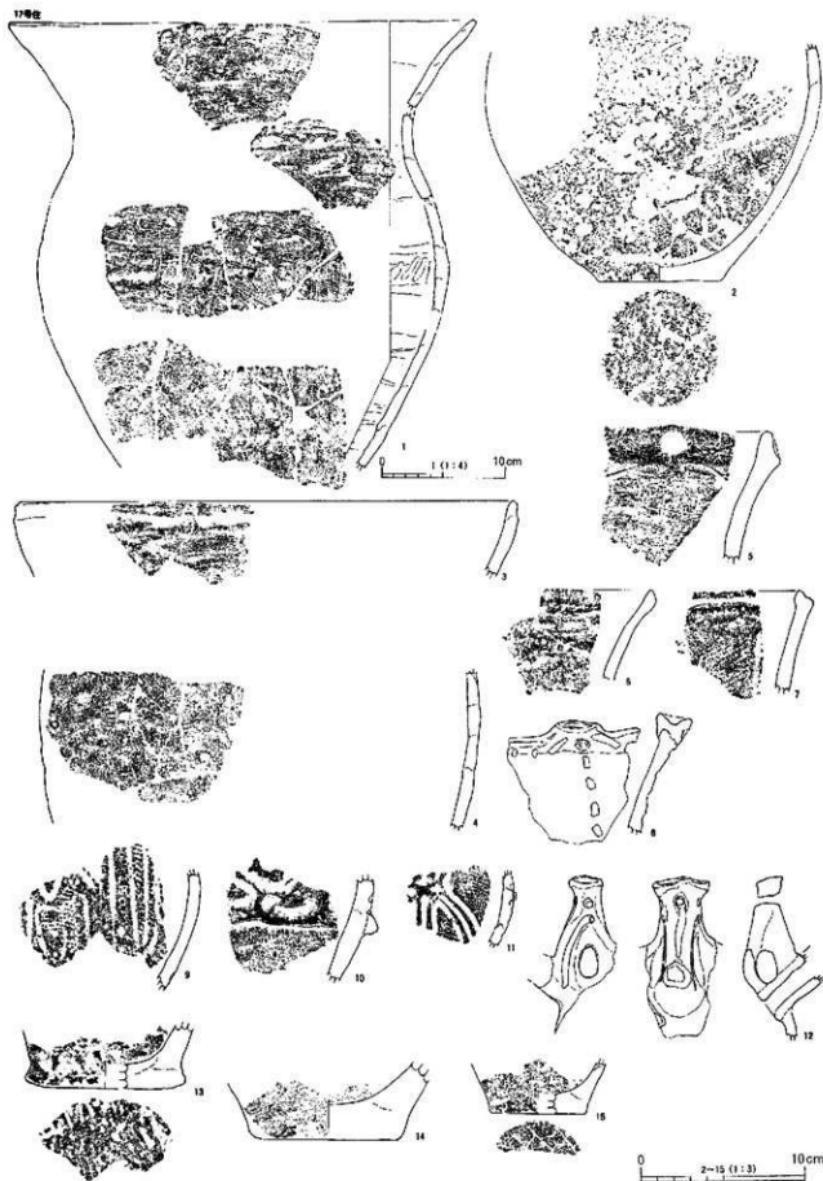
第106図 33号住 (17~20)・36号住 (1~3)・16号住 (1・2)出土遺物実測図



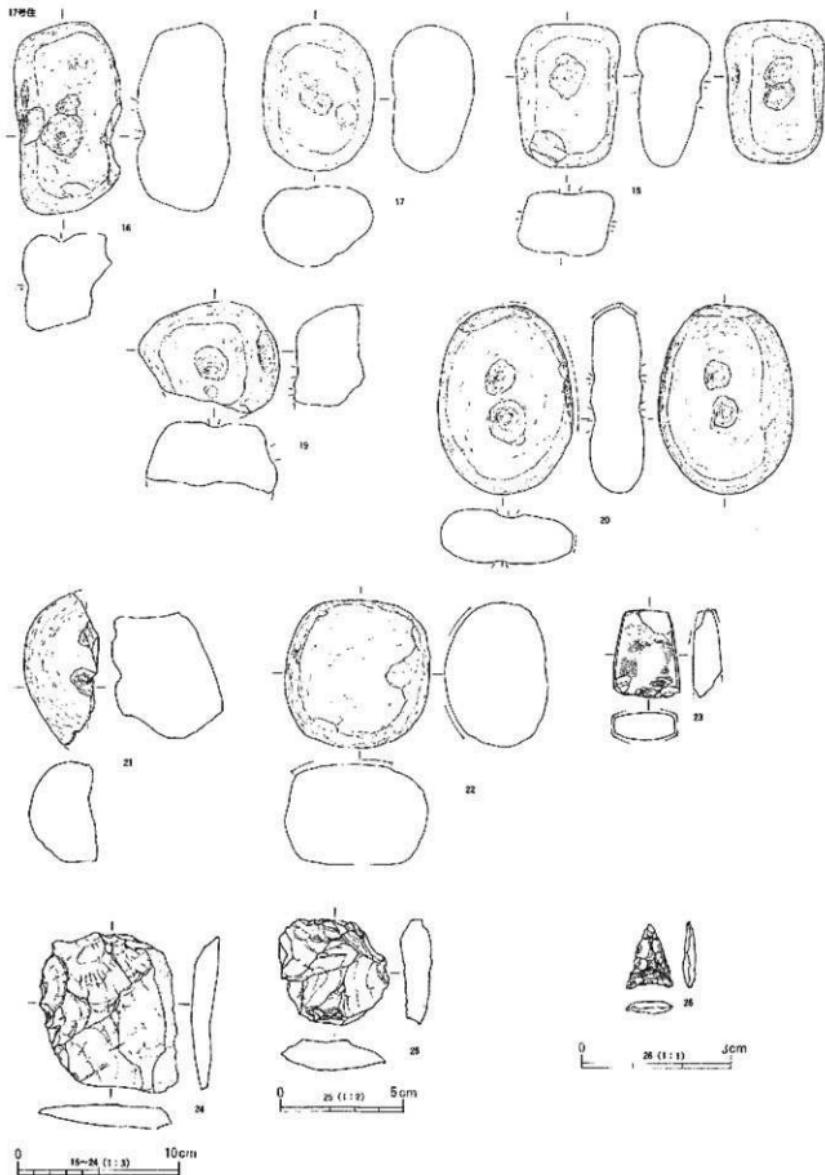
第107図 16号住出土遺物実測図(3~26)



第108図 16号住出土遺物実測図 (27~35)

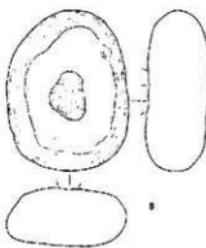
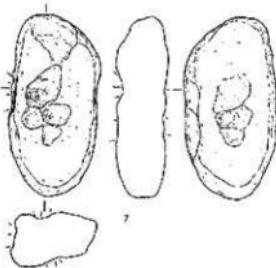
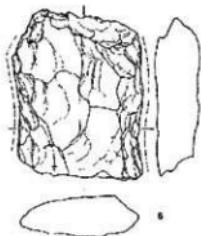
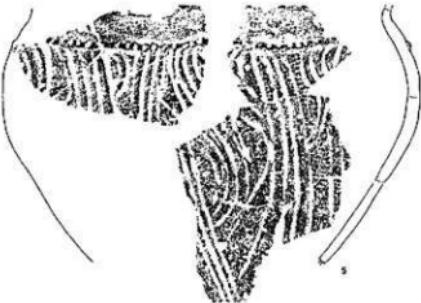
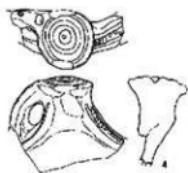
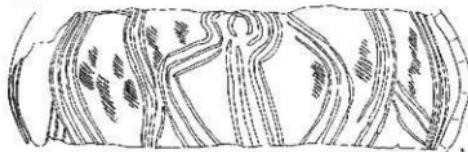


第109圖 17号住出土遺物実測図 (1~15)

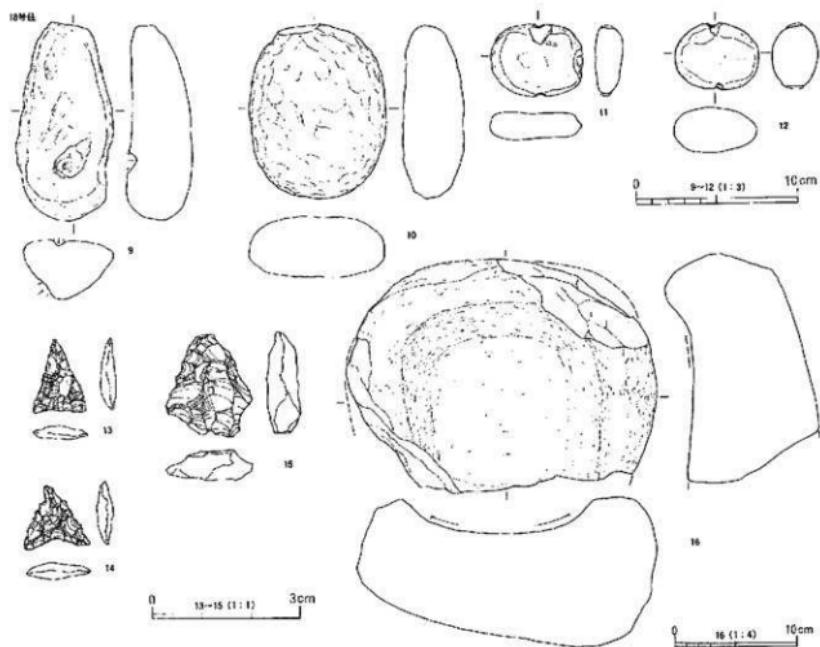


第110図 17号住出土遺物実測図 (16~26)

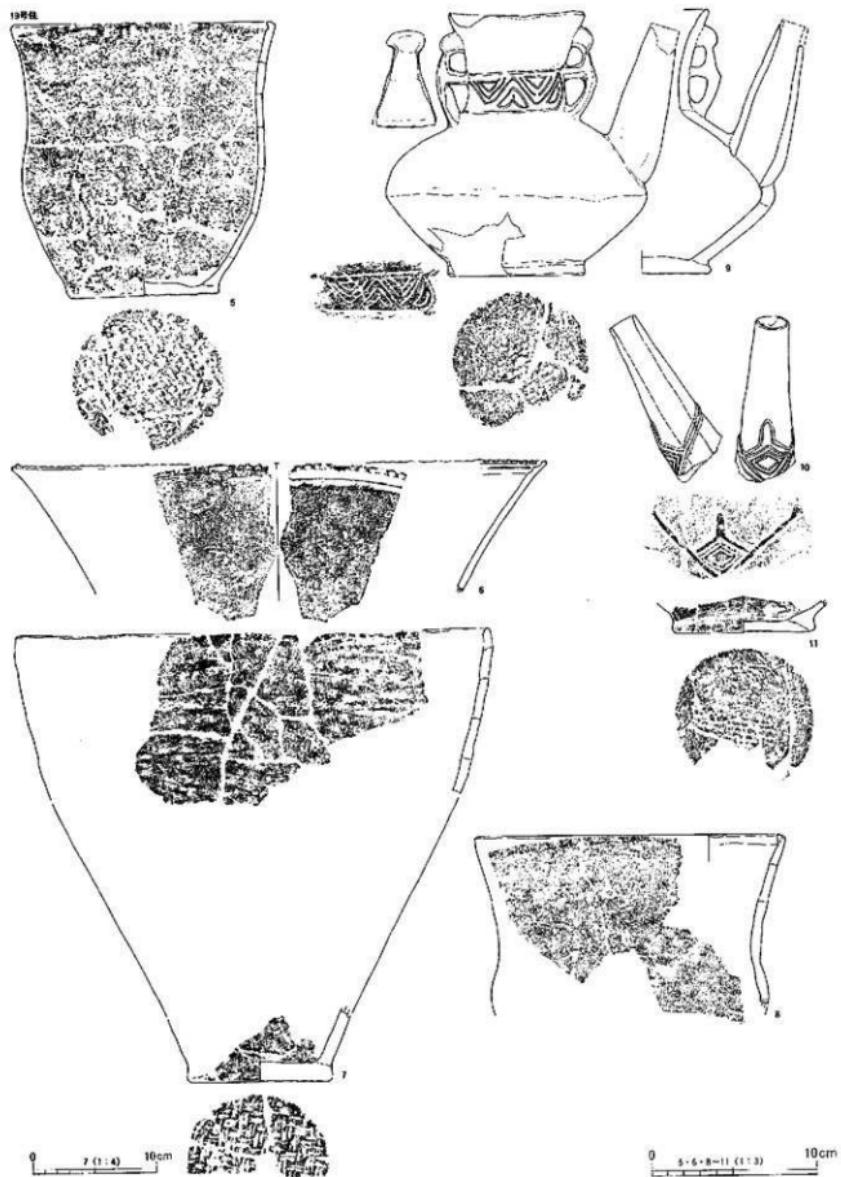
119a



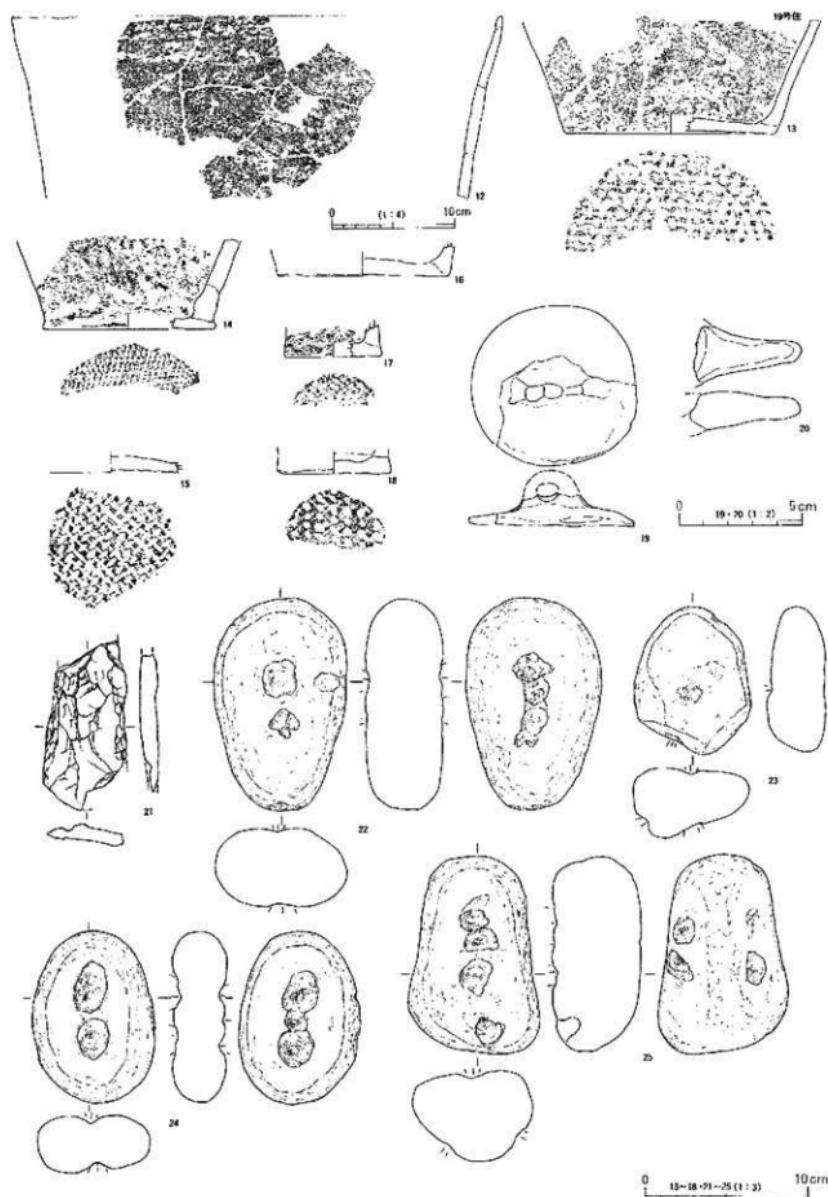
第111図 18号住出土遺物実測図 (1~8)



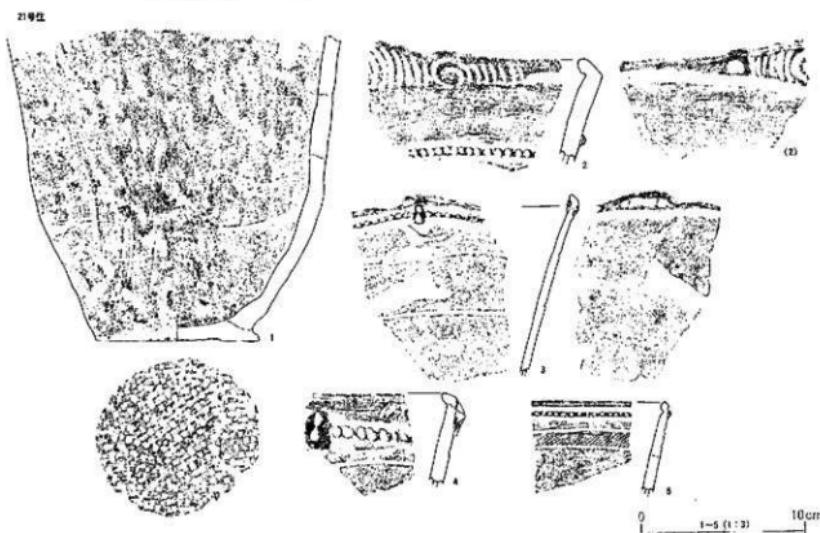
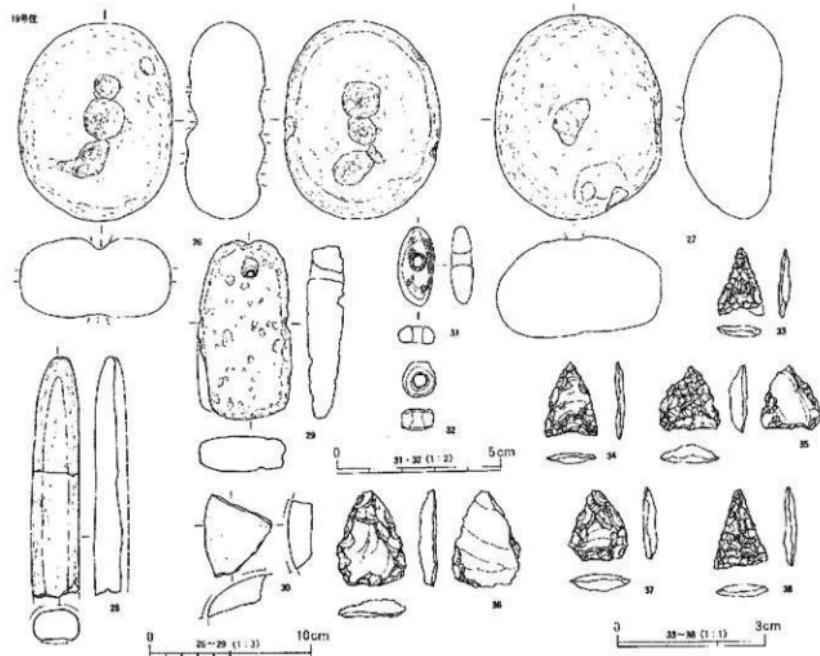
第112図 18号住 (9~16)・19号住 (1~4)出土遺物実測図



第113圖 19號住三遺物実測図(5~8)

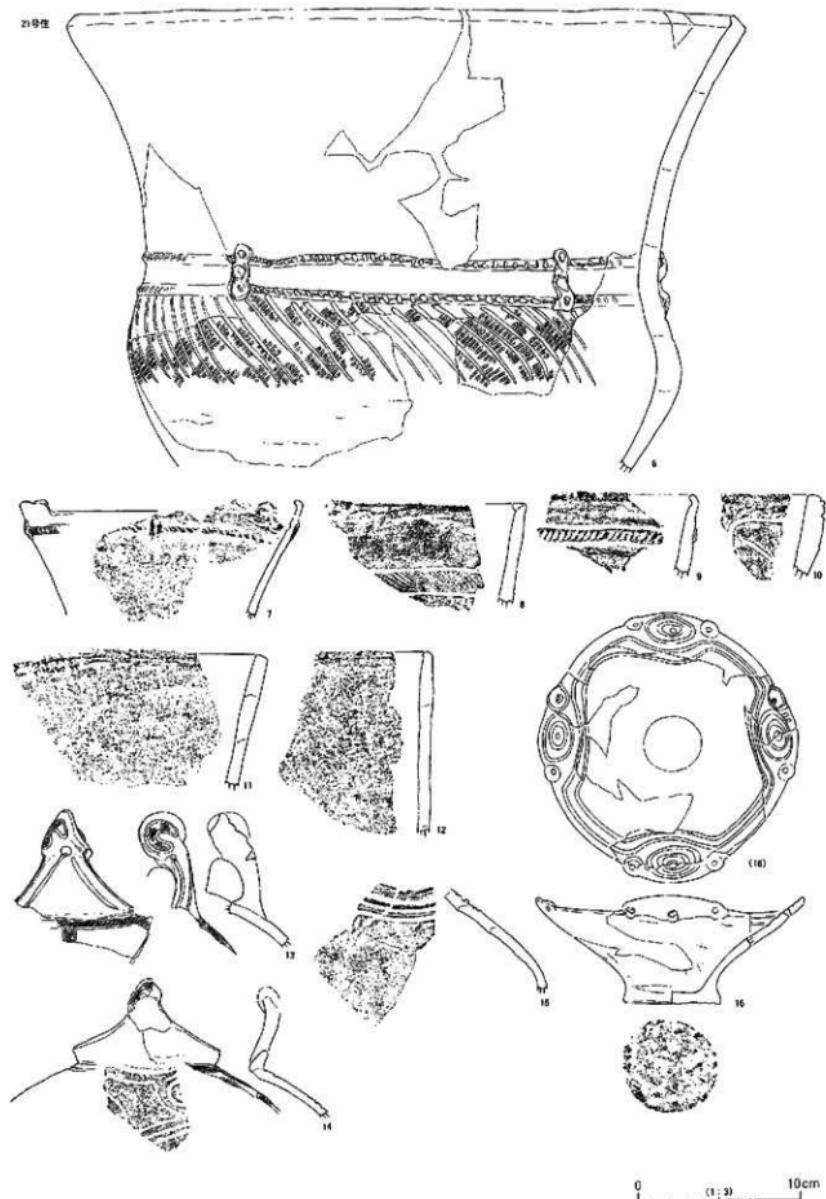


第114図 19号住出土遺物実測図 (12~25)

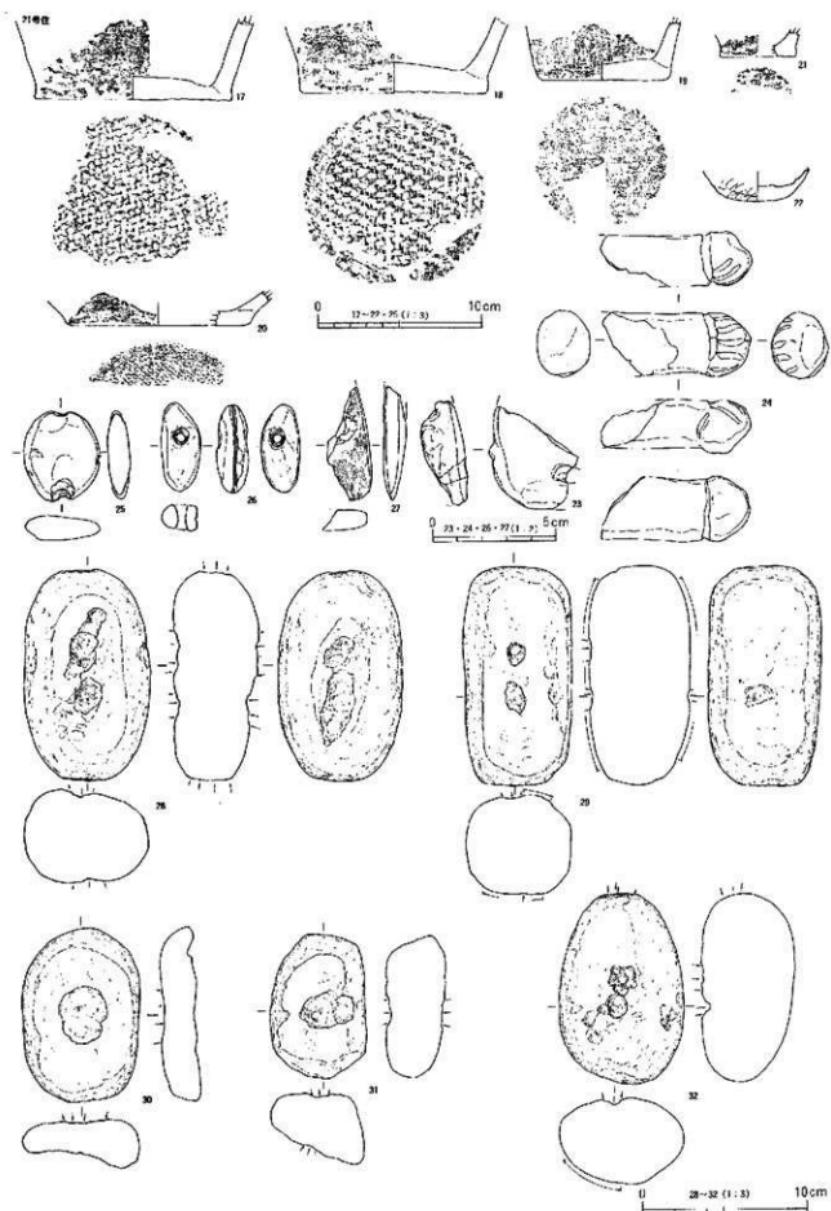


第115図 19号住 (26~38)・21号住 (1~5)出土遺物実測図

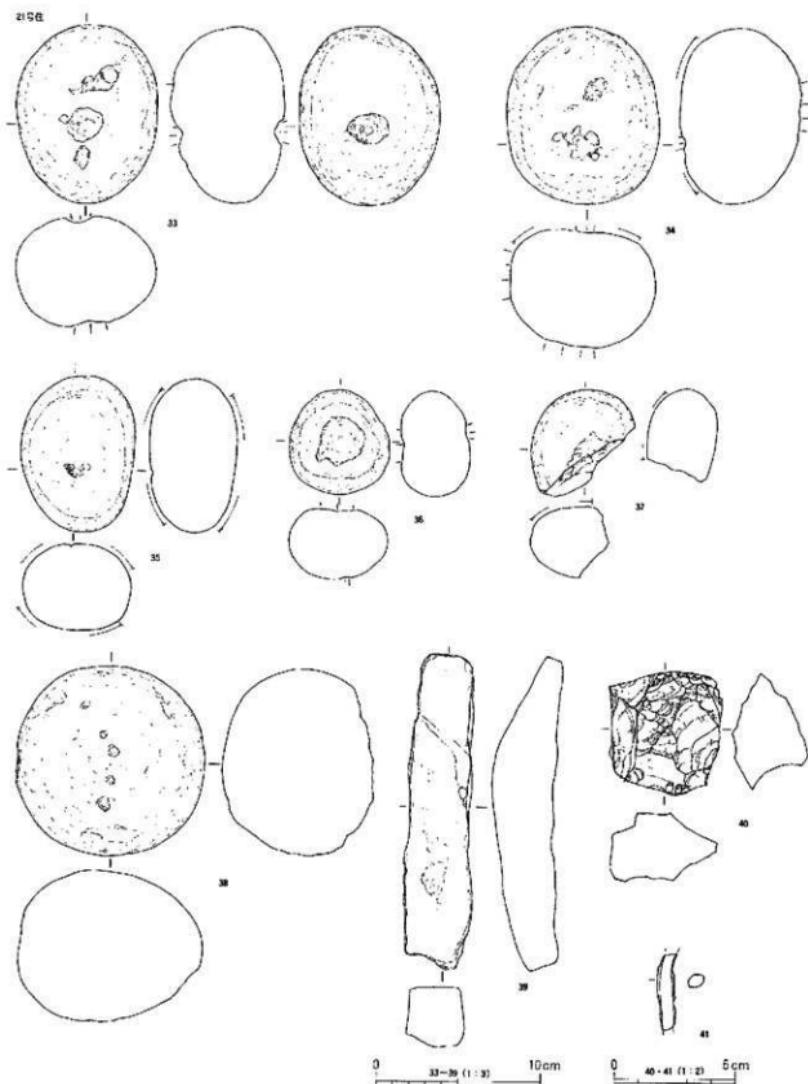
21号生



第116図 21号生出土遺物実測図 (6~16)



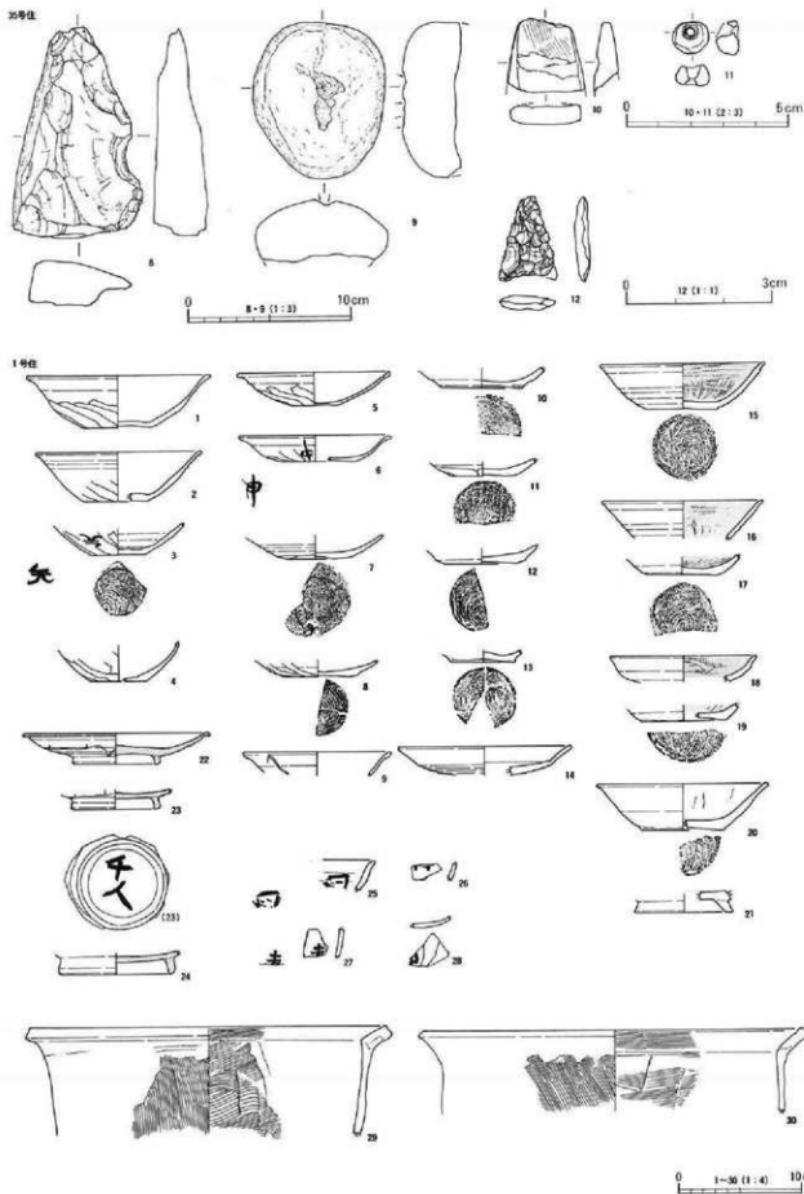
第117図 21号住上遺物実測図 (17~32)



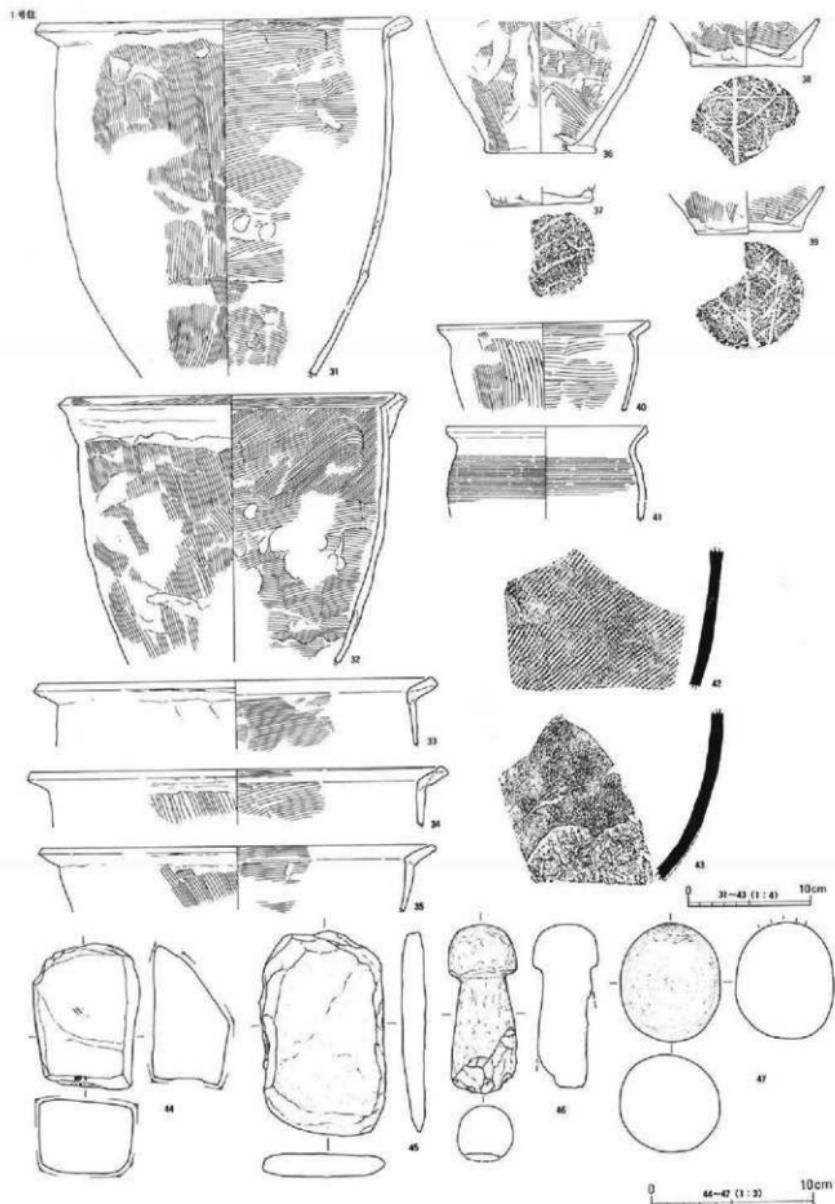
第116図 21号住出土遺物実測図 (33~41)



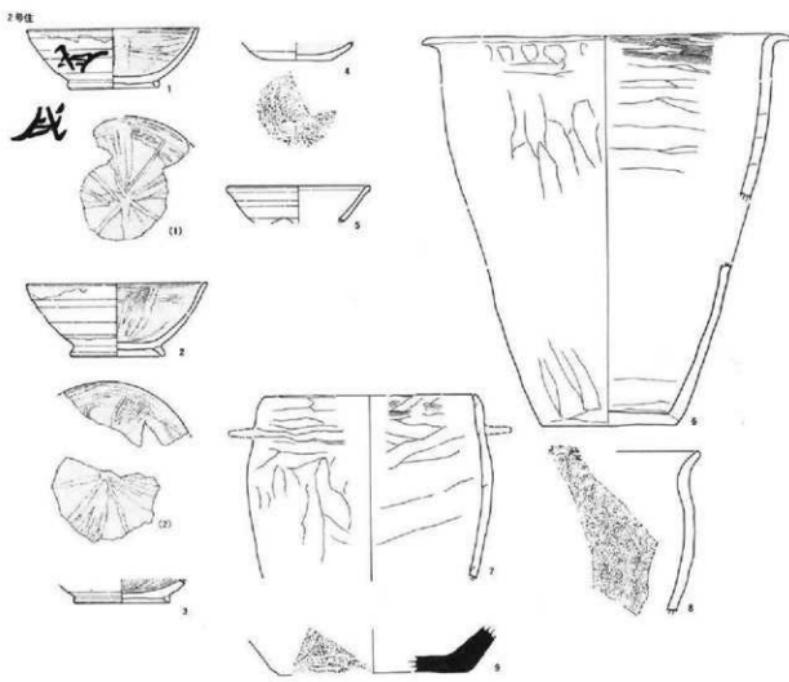
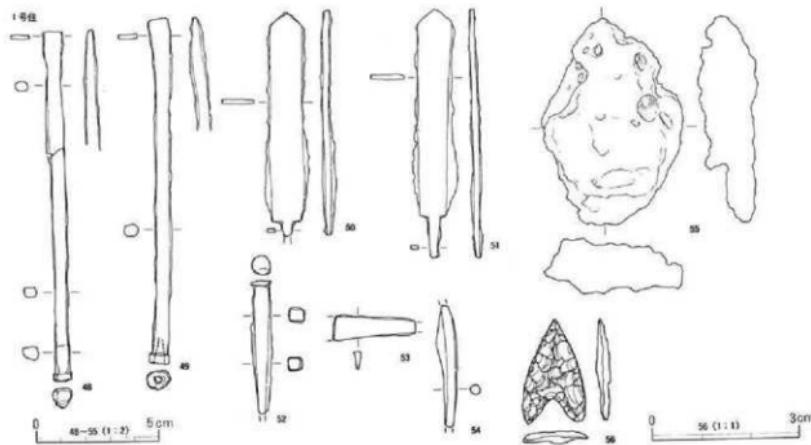
第119図 26号件 (1~7)・35号件 (1~7)出土遺物実測図



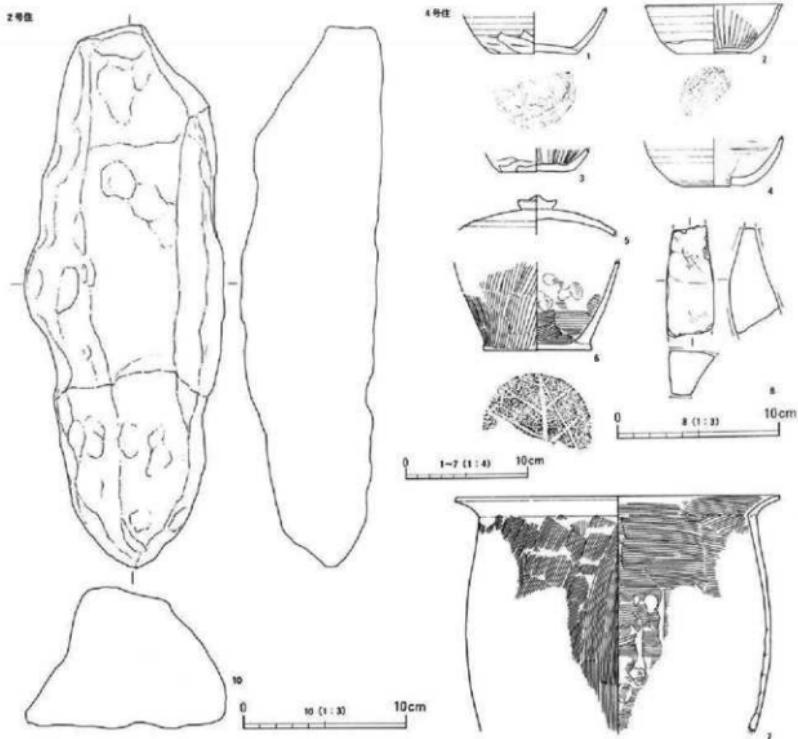
第120図 35号住 (8~12)・1号住 (1~30)出土遺物実測図



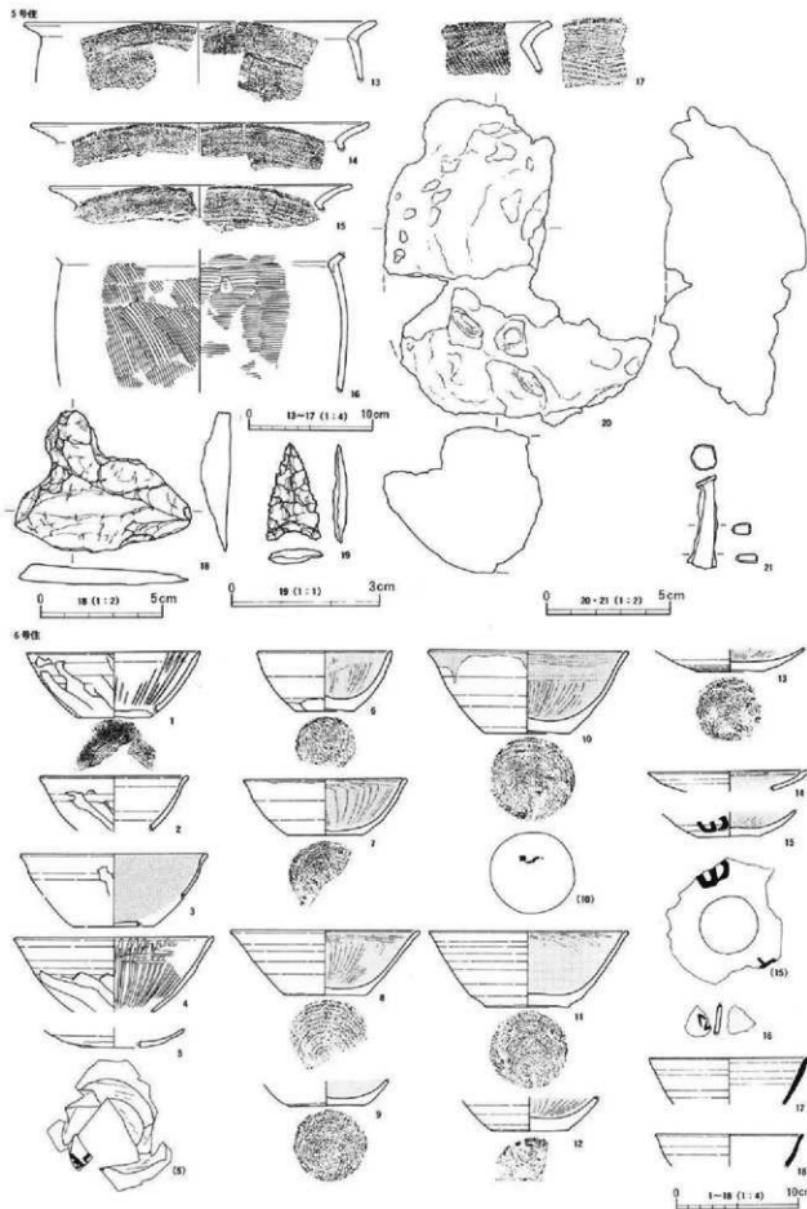
第121図 1号住出土遺物実測図 (31~47)



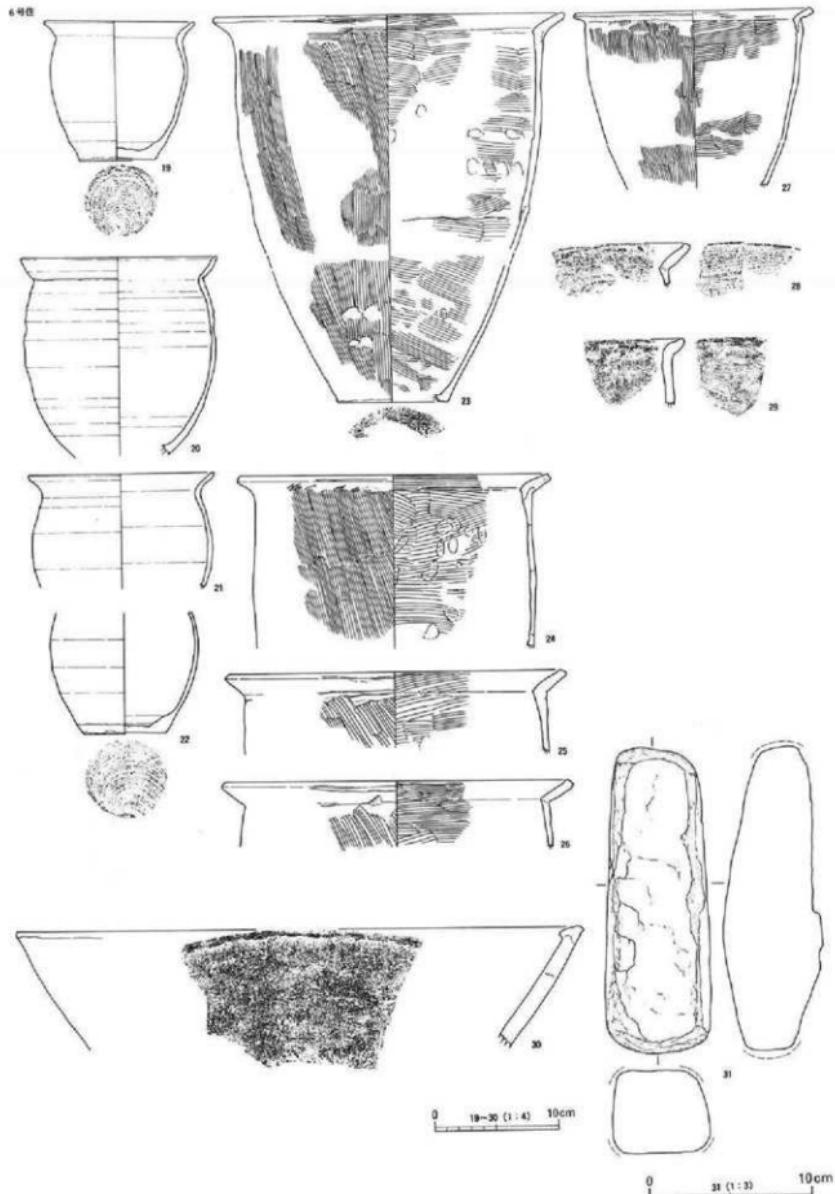
第122図 1号住(48~56)・2号住(1~9)出土遺物実測図



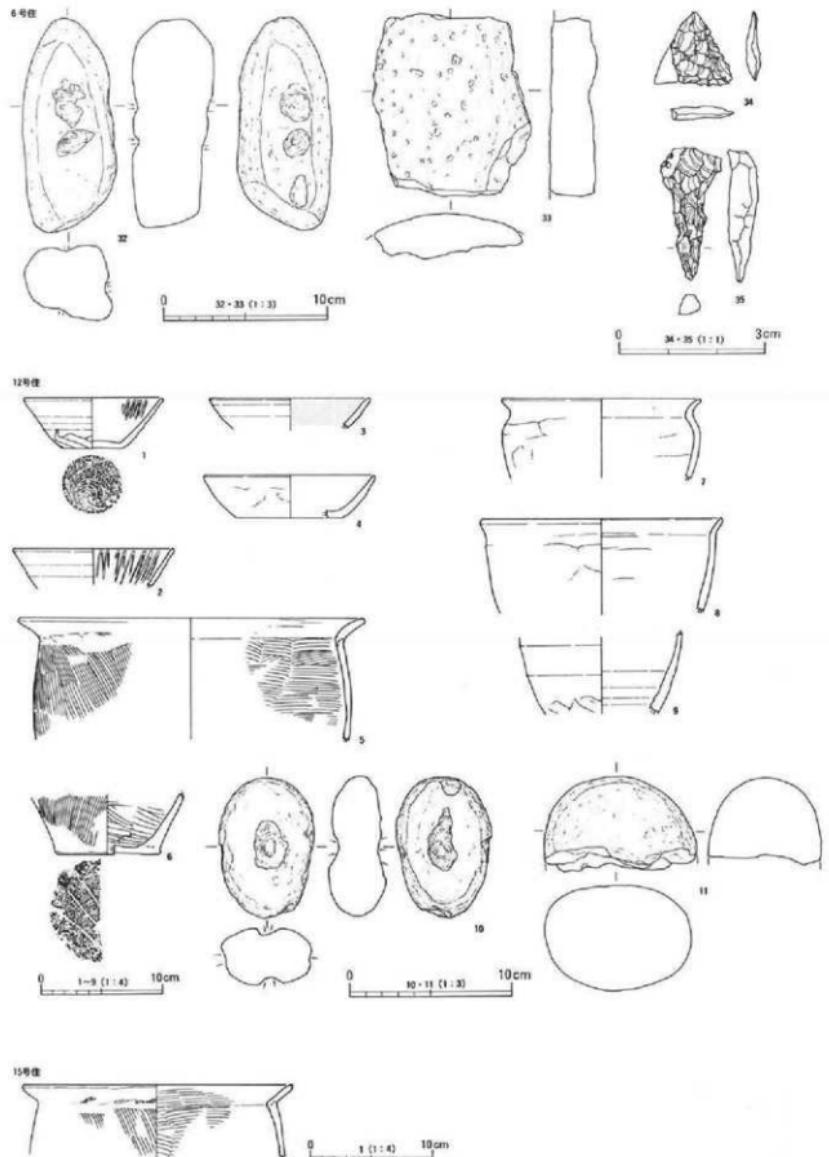
第123圖 2号住 (10) • 4号住 (1~8) • 5号住 (1~12)出土遺物実測図



第124図 5号住(13~21)・6号住(1~18)出土遺物実測図

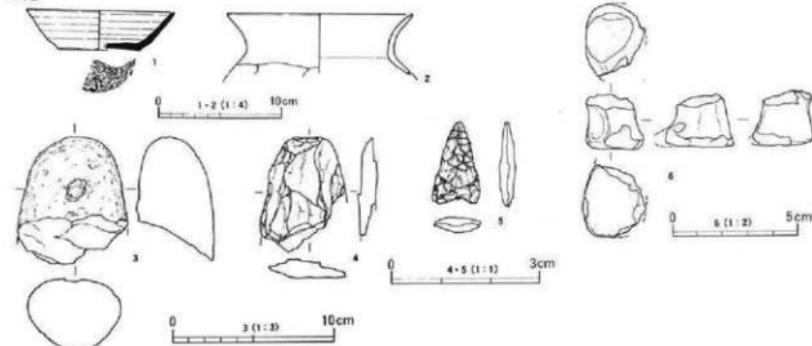


第125図 6号住出土遺物実測図(19~31)

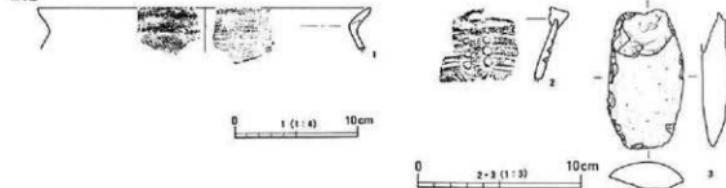


第126図 6号住(32~35)・12号住(1~11)・15号住(1)出土遺物実測図

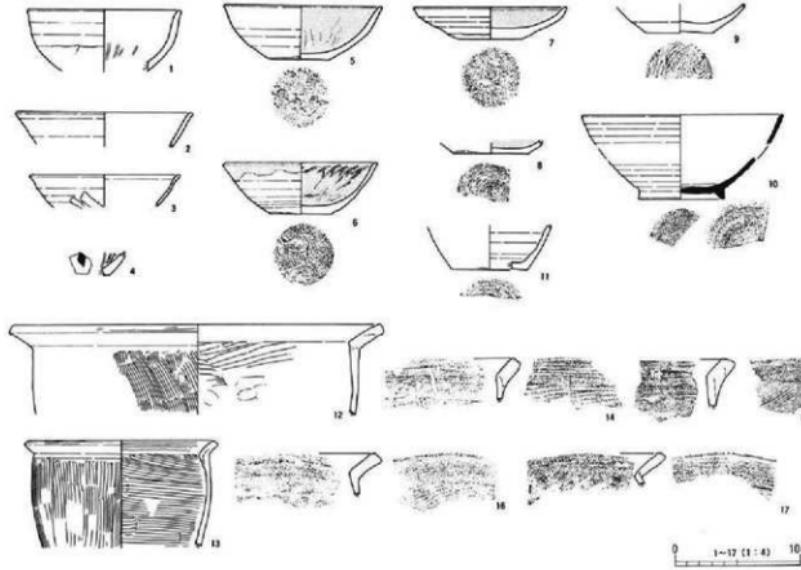
20号住



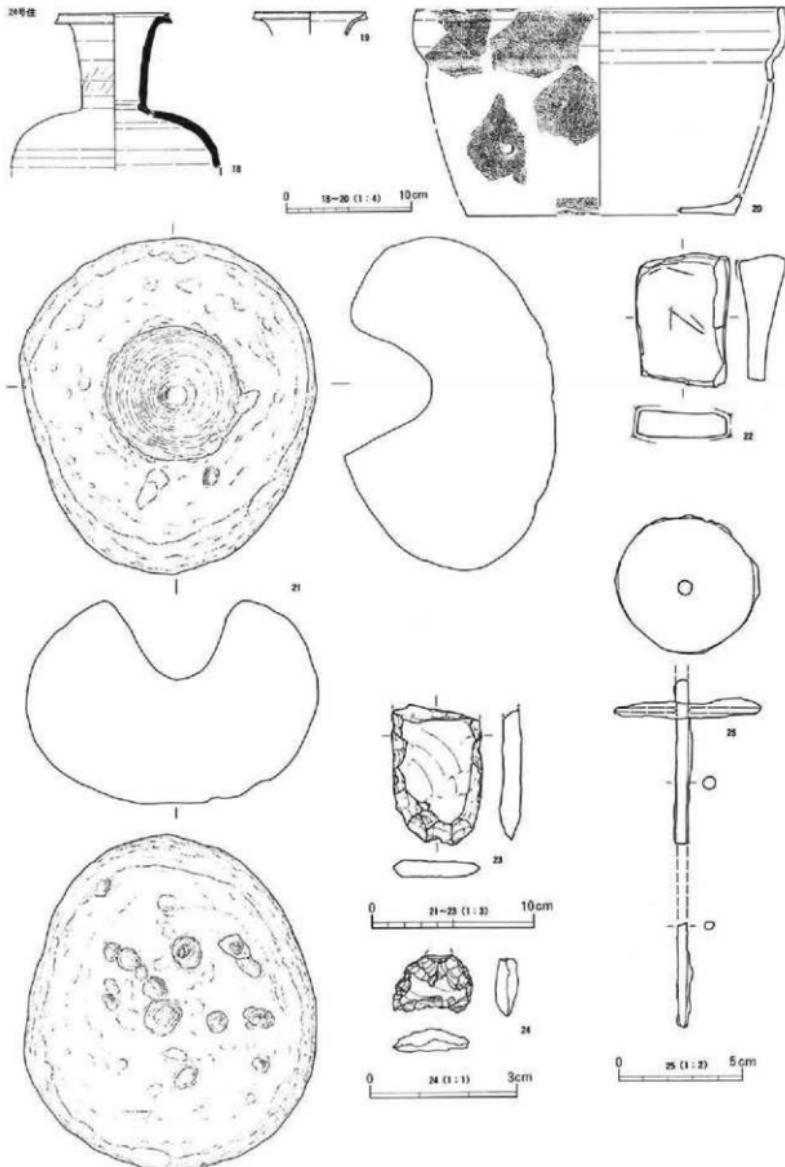
23号住



24号住

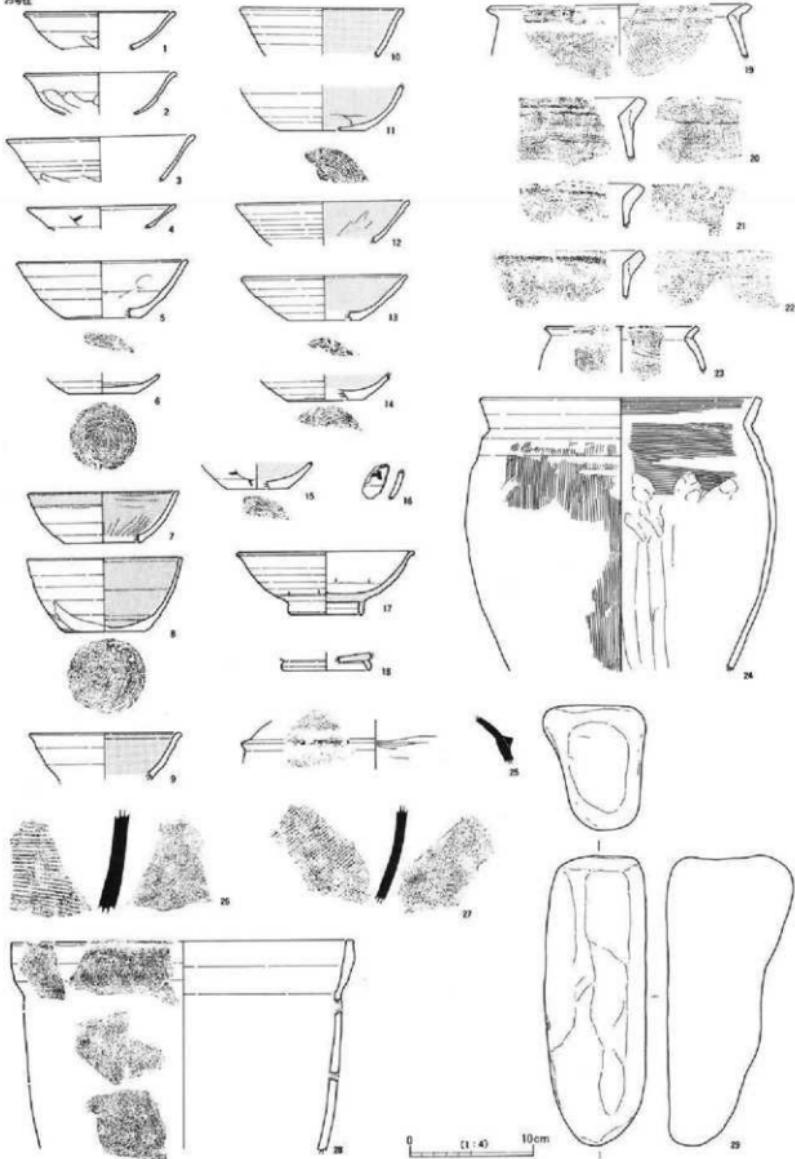


第127図 20号住 (1~6)・23号住 (1~3)・24号住 (1~17)出土遺物実測図

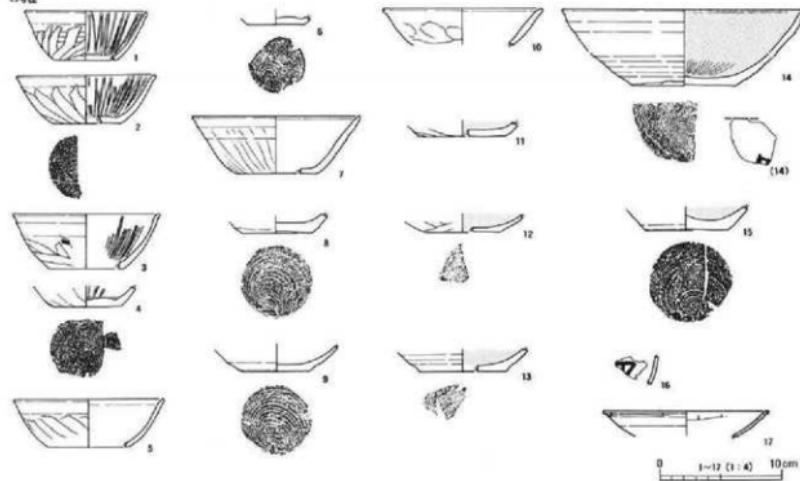
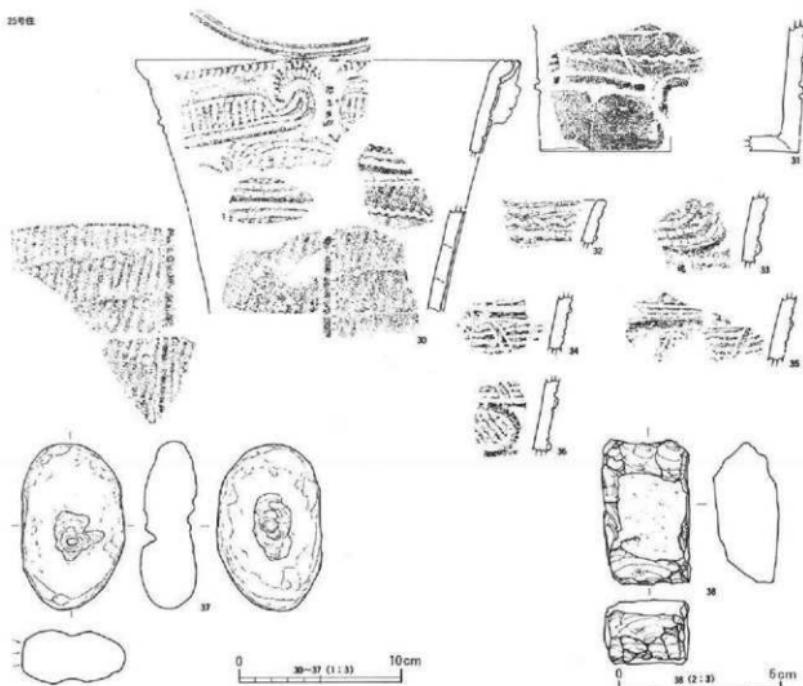


第128図 24号住出土遺物実測図 (18~24)

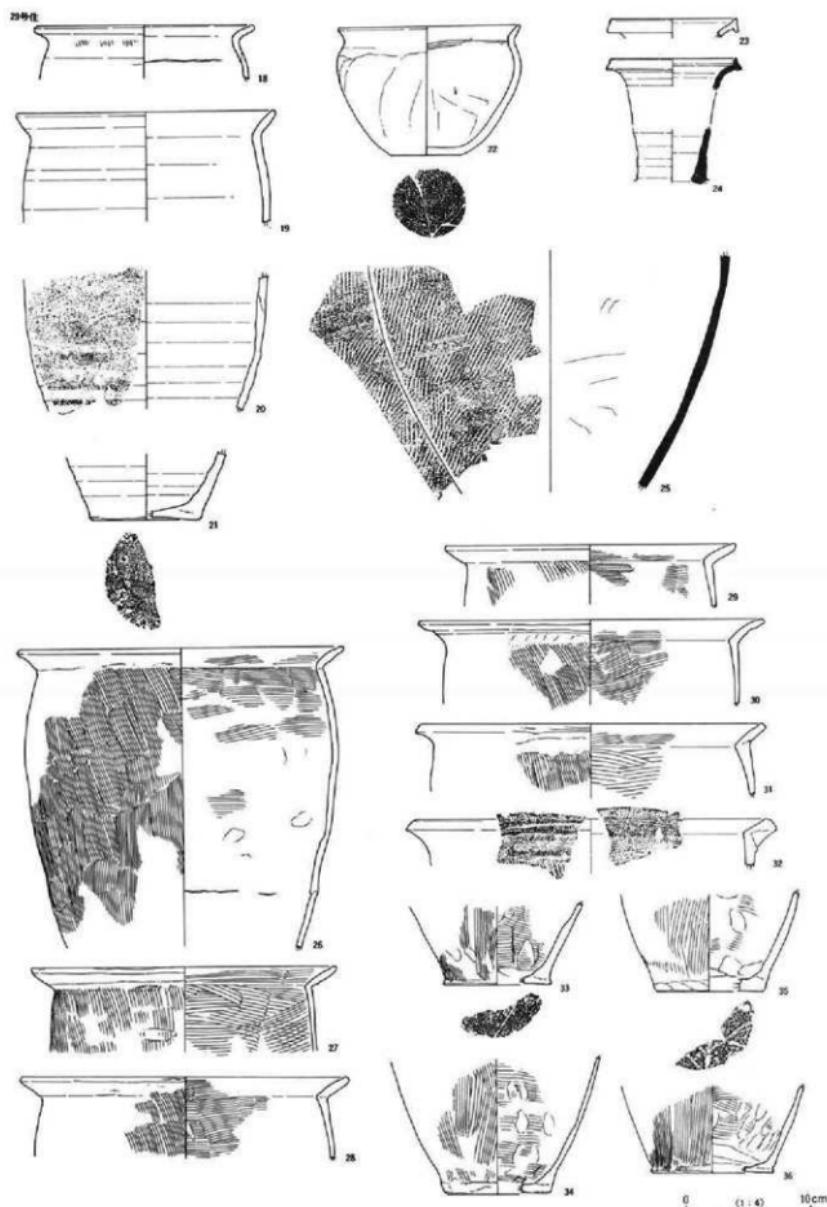
25号住



第129図 25号住出土遺物実測図 (1~29)

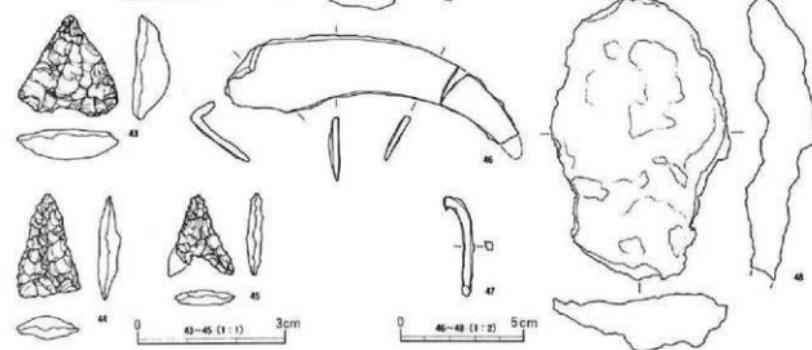
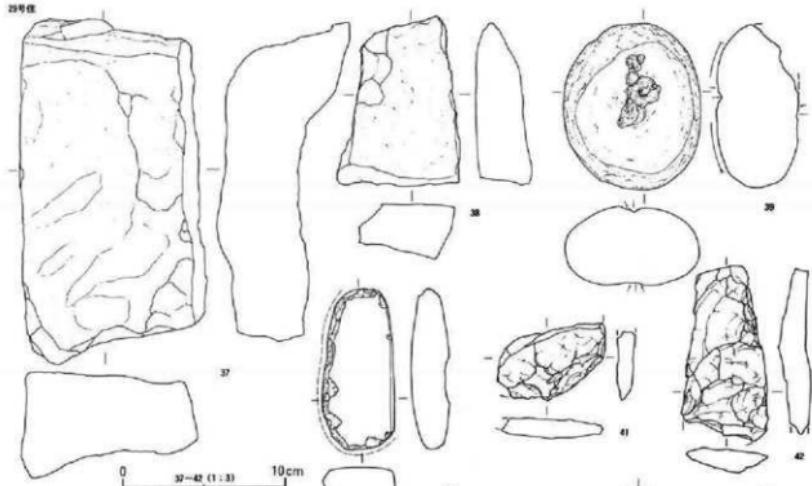


第130図 25号住 (30~38)・29号住 (1~17)出土遺物実測図

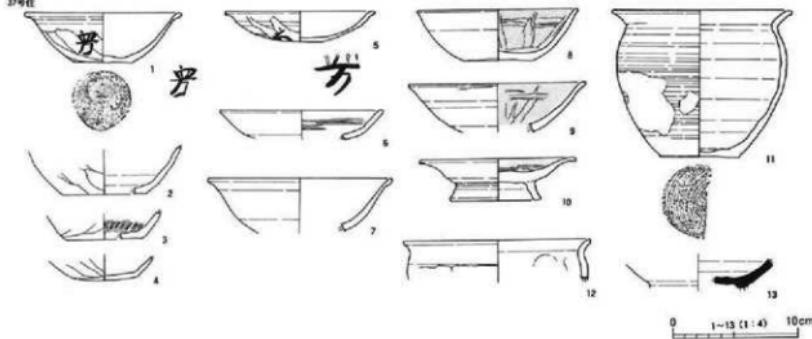


第131図 29号住出土遺物実測図 (18~37)

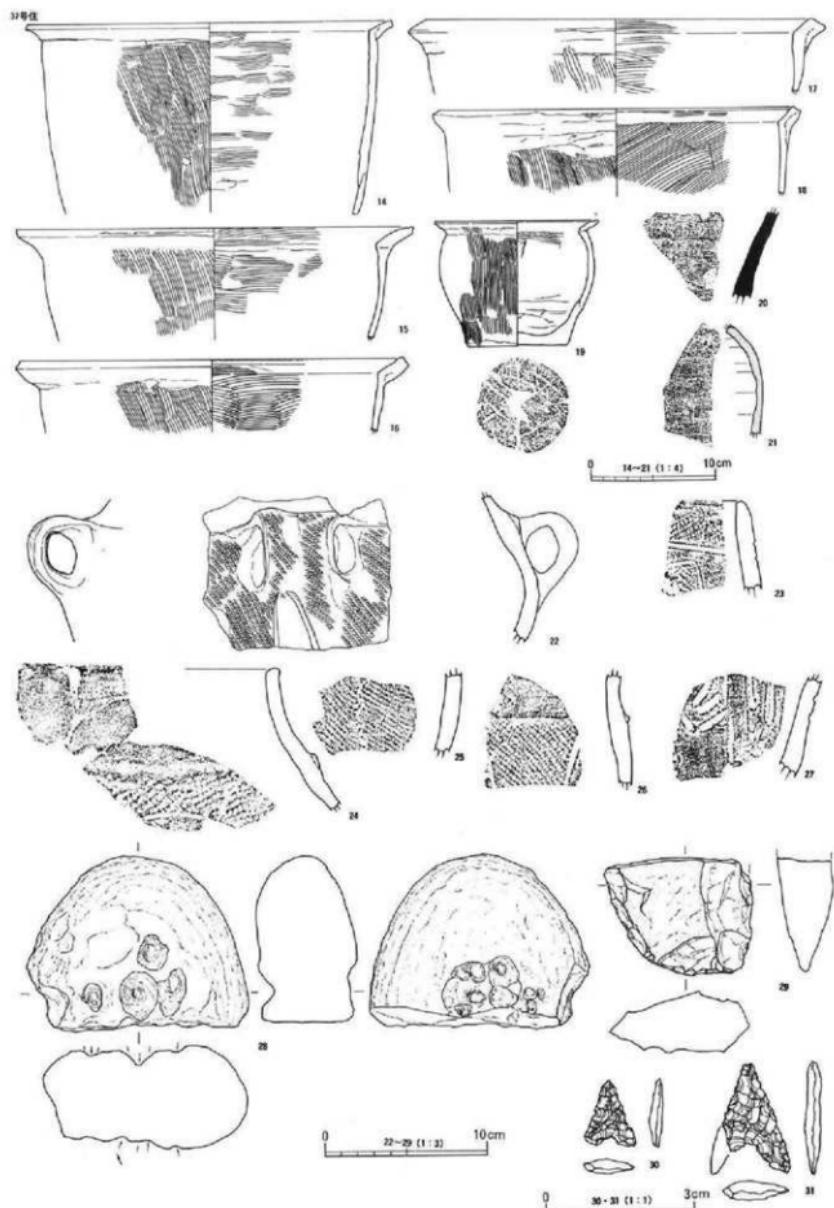
29号住



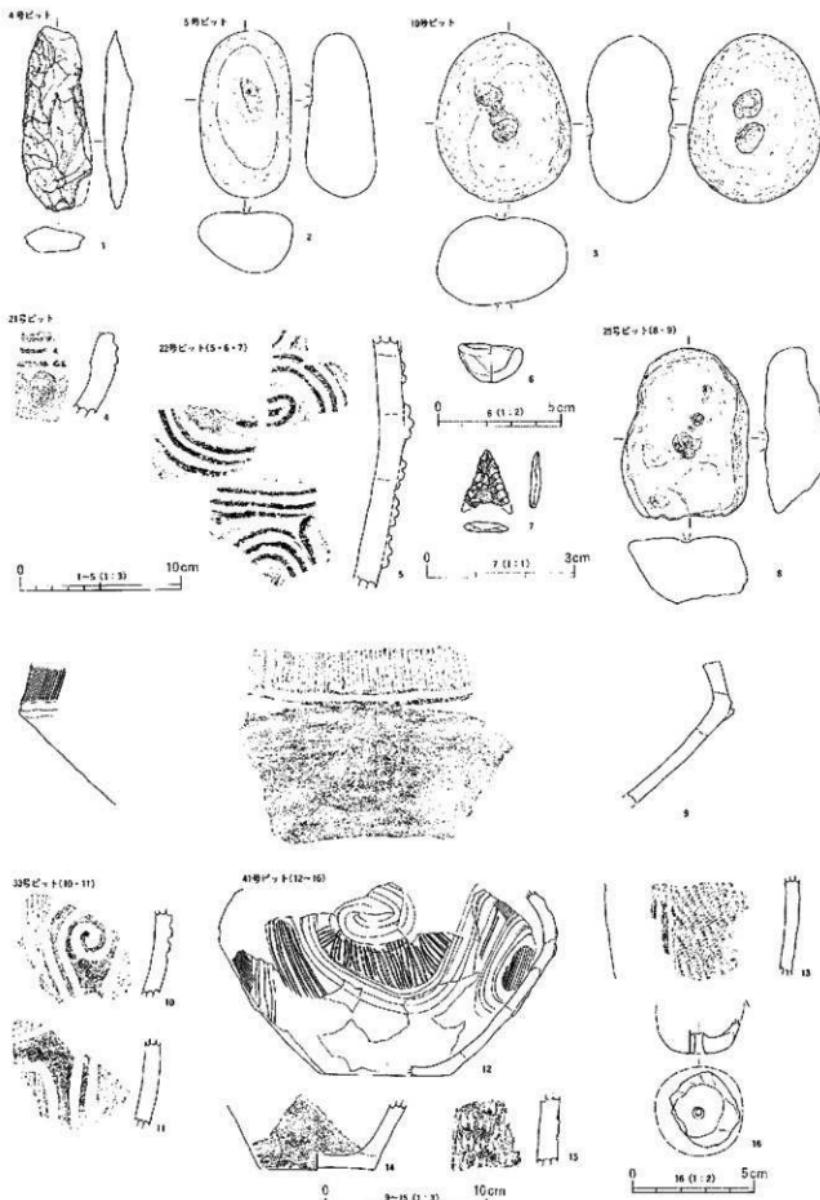
37号住



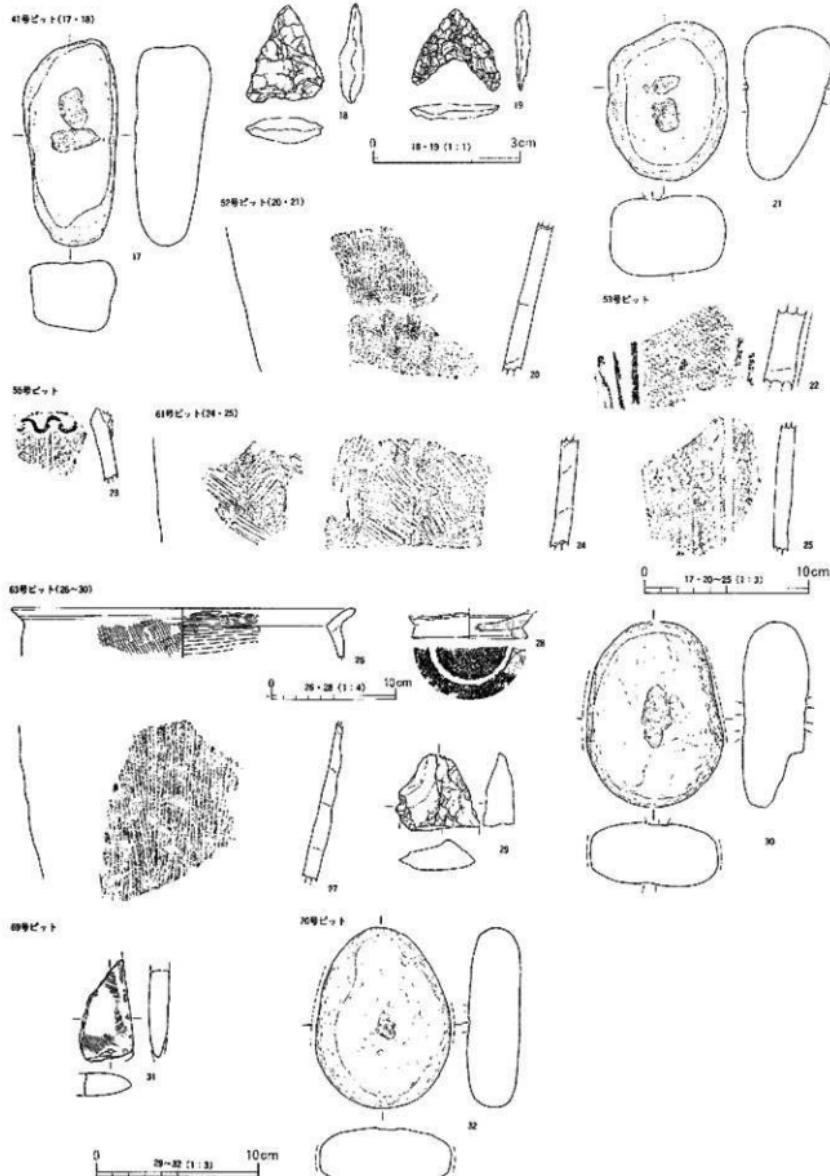
第132図 29号住 (38~49)・37号住 (1~13)出土遺物実測図



第133图 37号住出土遗物实测图 (14~31)

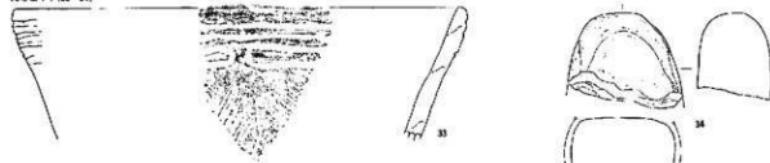


第134図 4・5・10・21・22・25・33・41号ピット出土遺物実測図

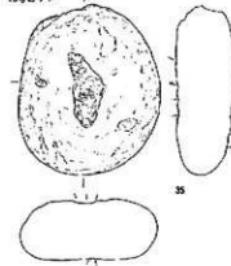


第135図 41・52・53・55・61・63・69・70号ピット出土遺物実測図

29号ピット(33・34)



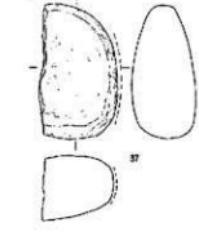
79号ピット



81号ピット



82号ピット

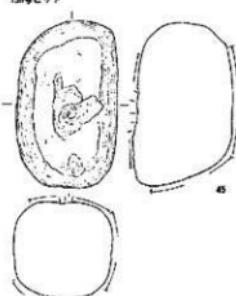


83号ピット(38-39)

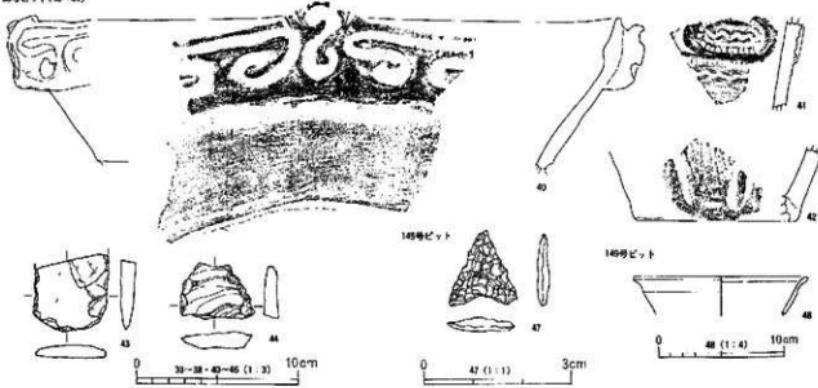


30 (1:1) 3cm

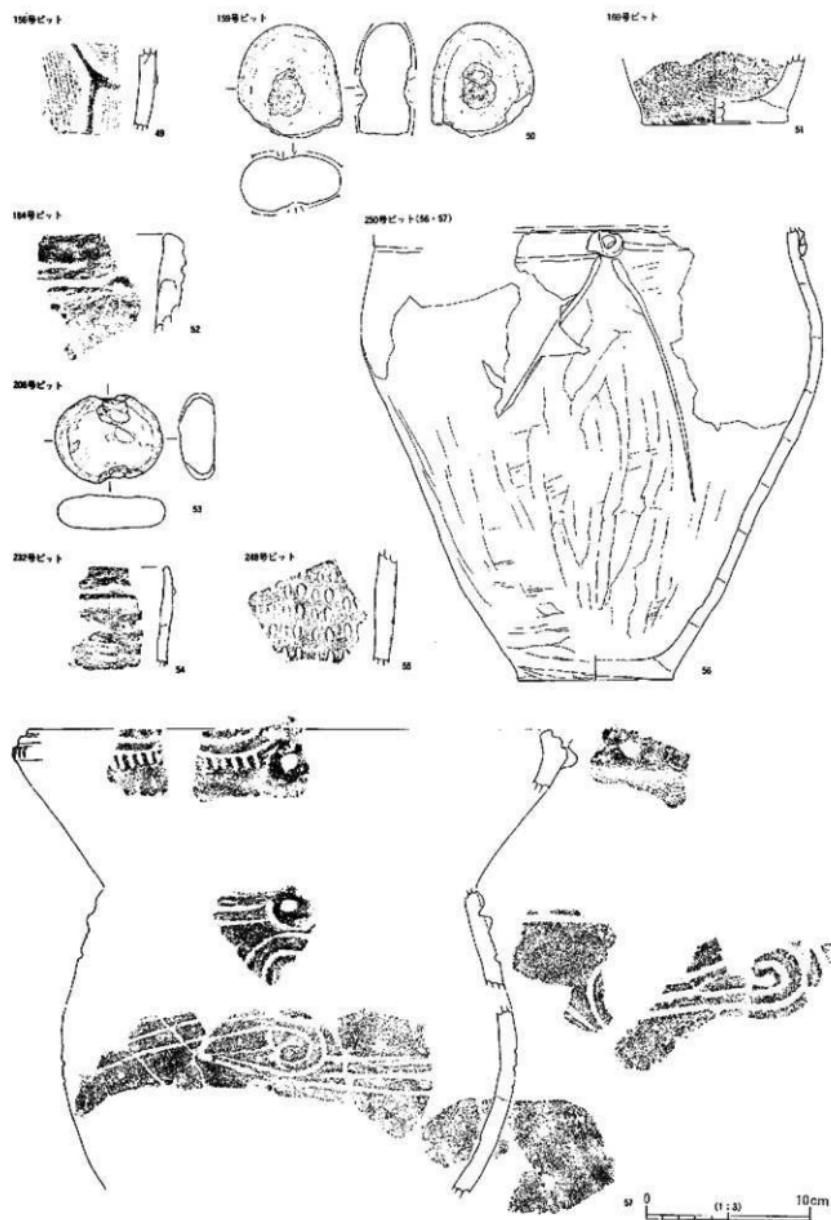
136号ピット



35号ピット(40-44)



第136図 73・79・81・82・86・95・136・137・149・156号ピット出土遺物実測図

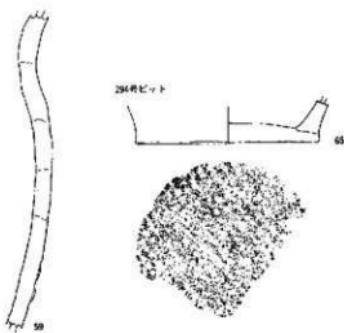


第137図 159・169・184・206・232・248・250号ピット出土遺物実測図

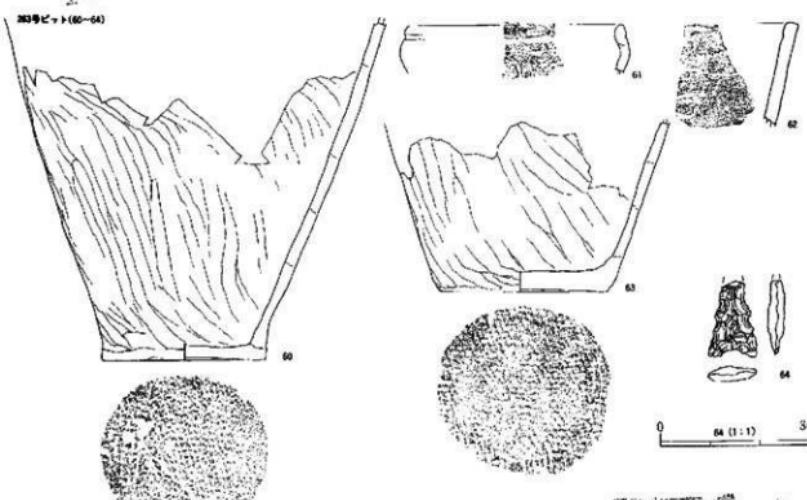
251号ピット(58-59)



294号ピット



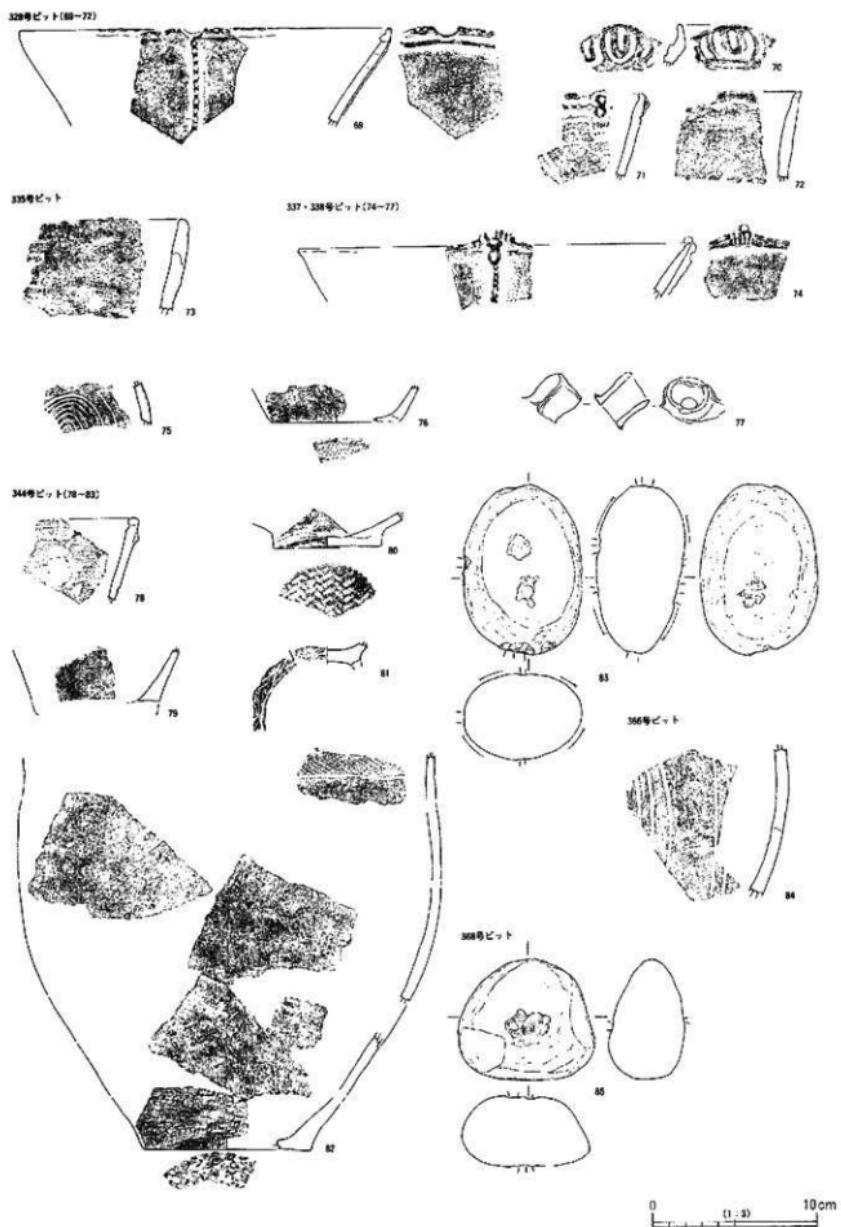
303号ピット(60-64)



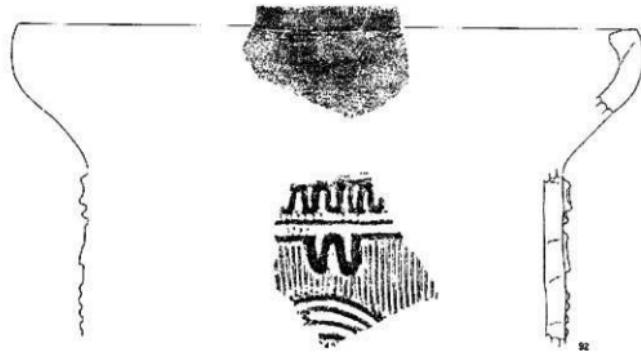
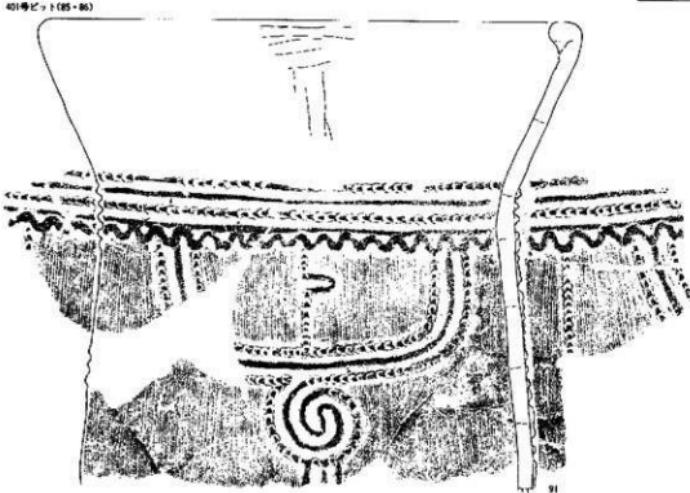
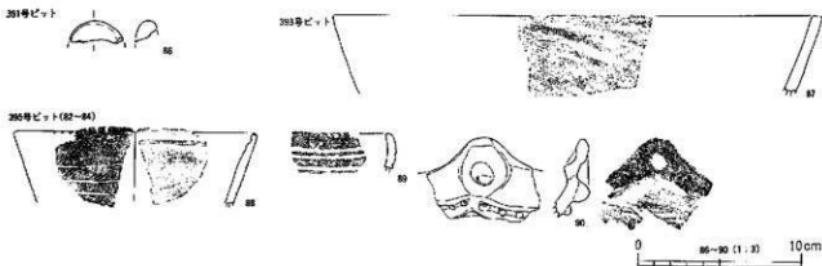
296号ピット(66-68)



第138図 251・263・294・296号ピット出土遺物実測図

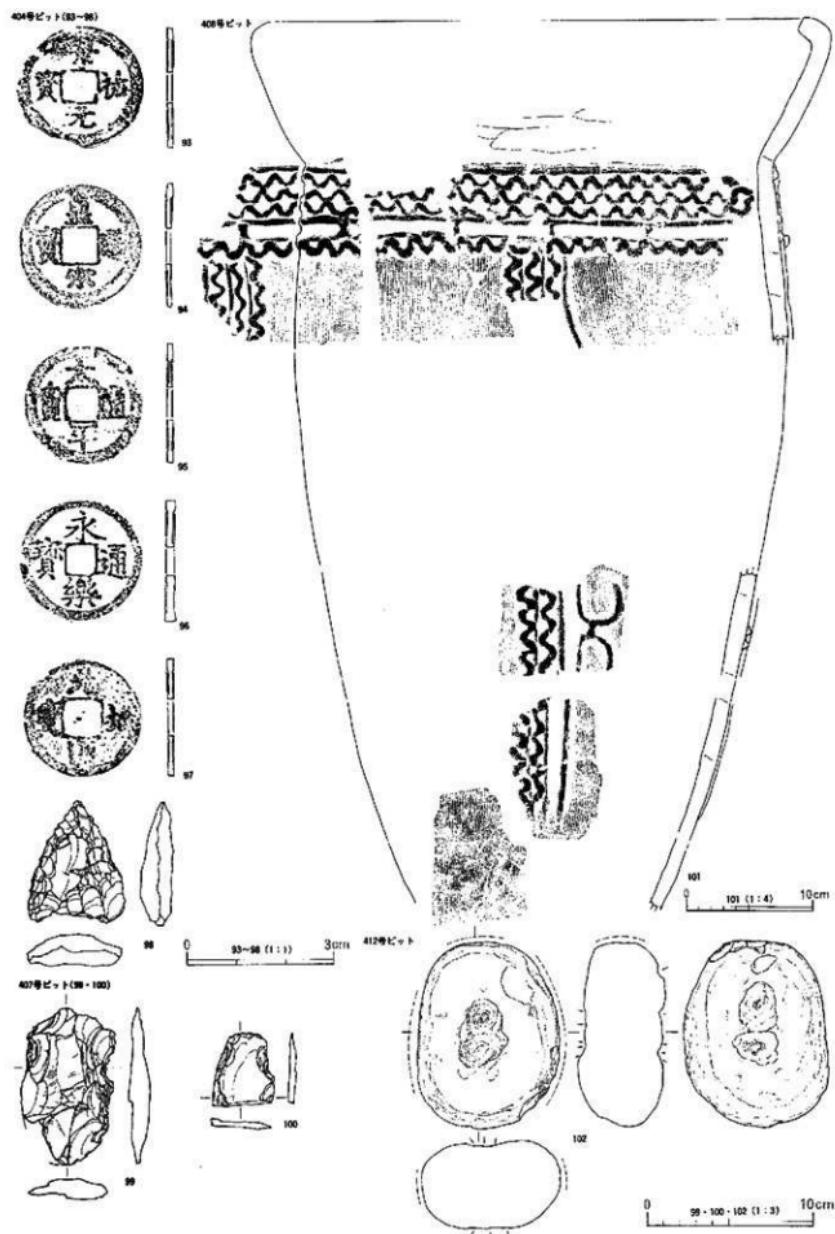


第139図 328・335・337・338・344・366・368号ピット出土遺物実測図



0 391・392 (1:4) 10cm

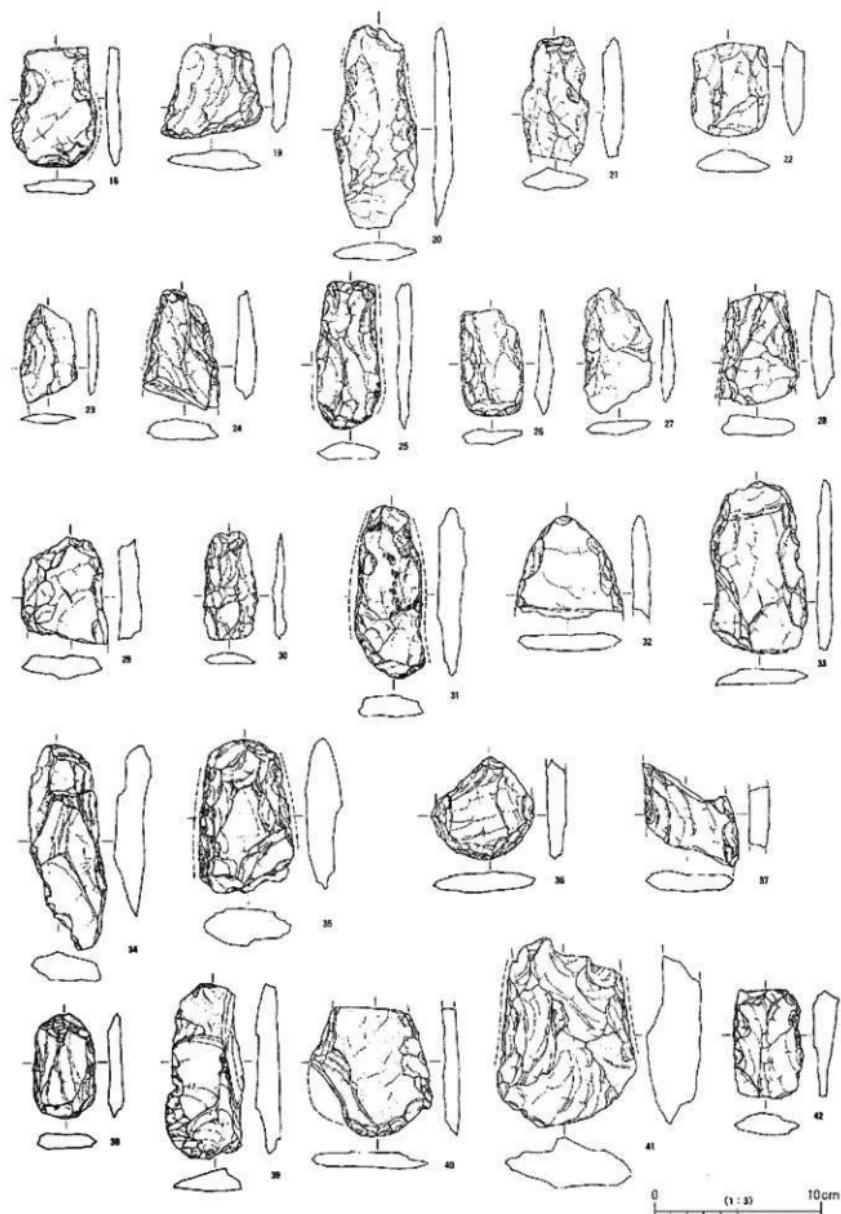
第140図 391・393・395・401号ピット出土遺物実測図



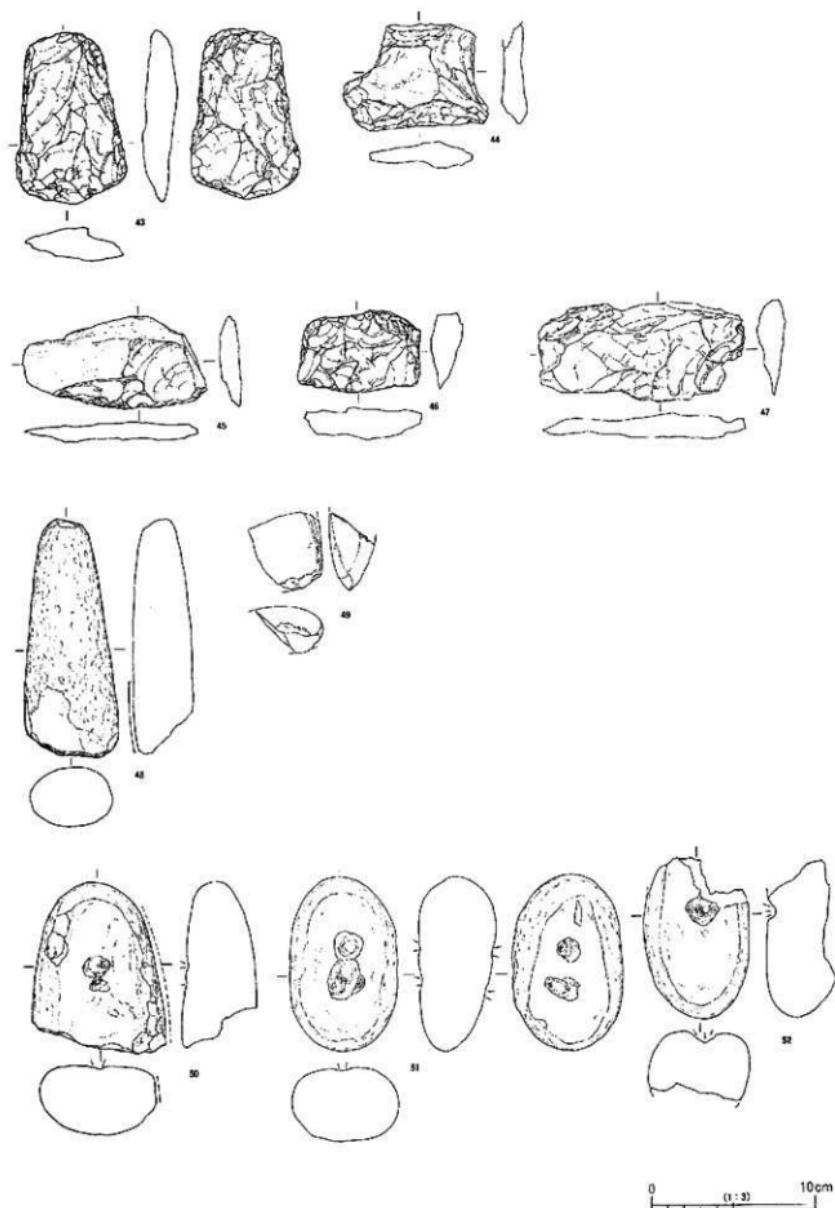
第141図 401・407・408・412号ピット出土遺物実測図



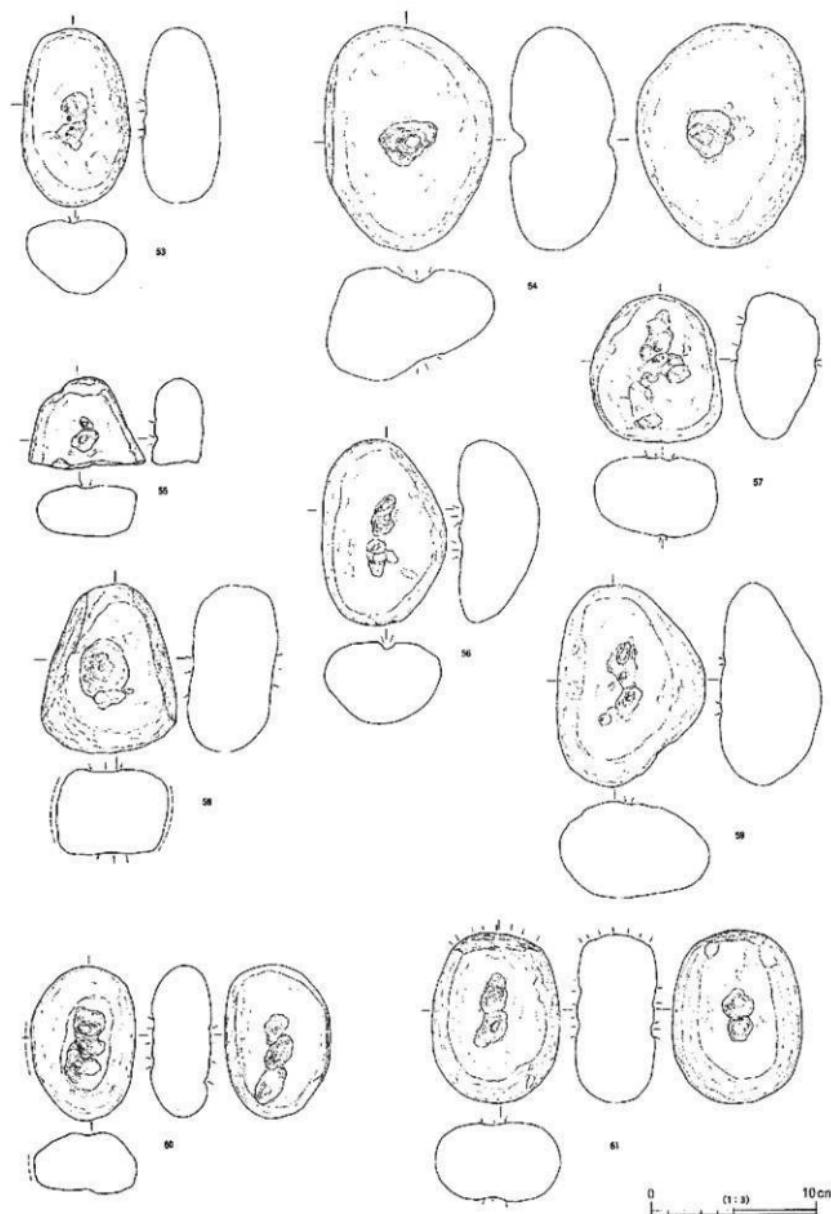
第142圖 遺構外出土遺物（1）



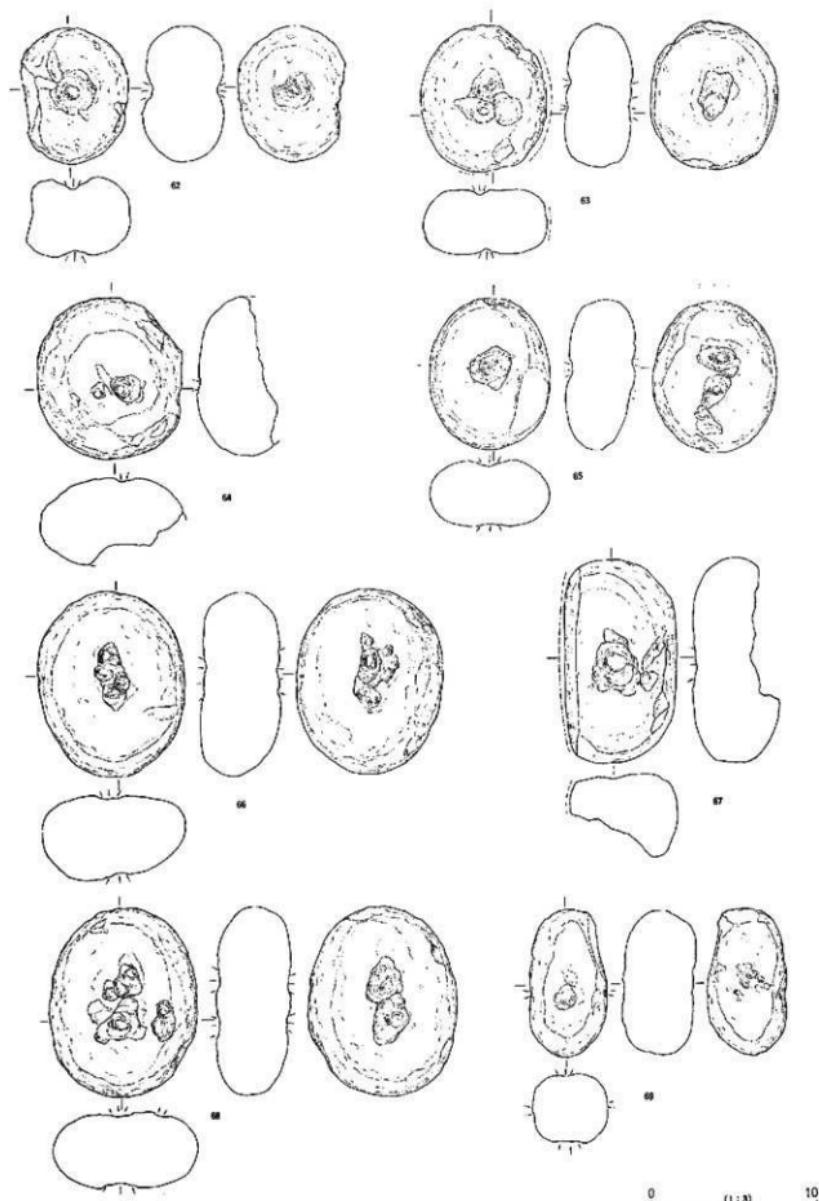
第143図 遺構外出土遺物(2)



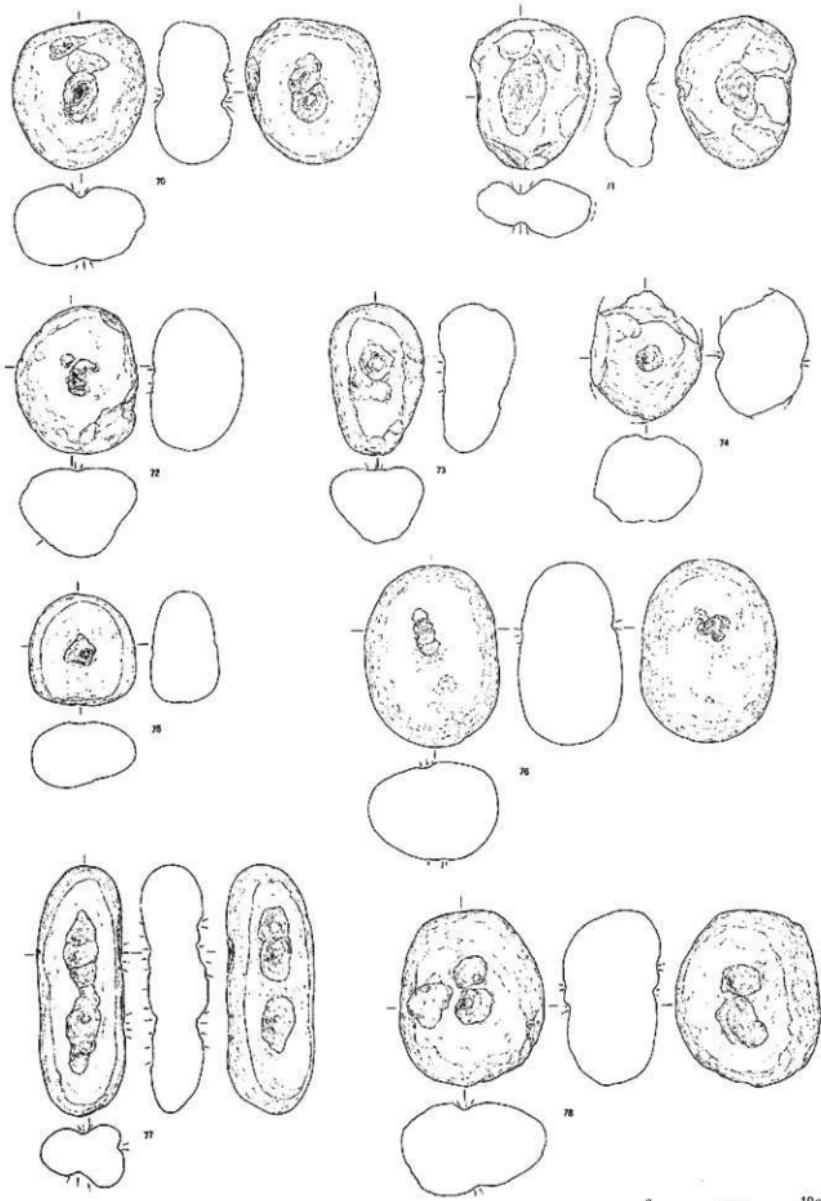
第144図 遺構外出土遺物(3)



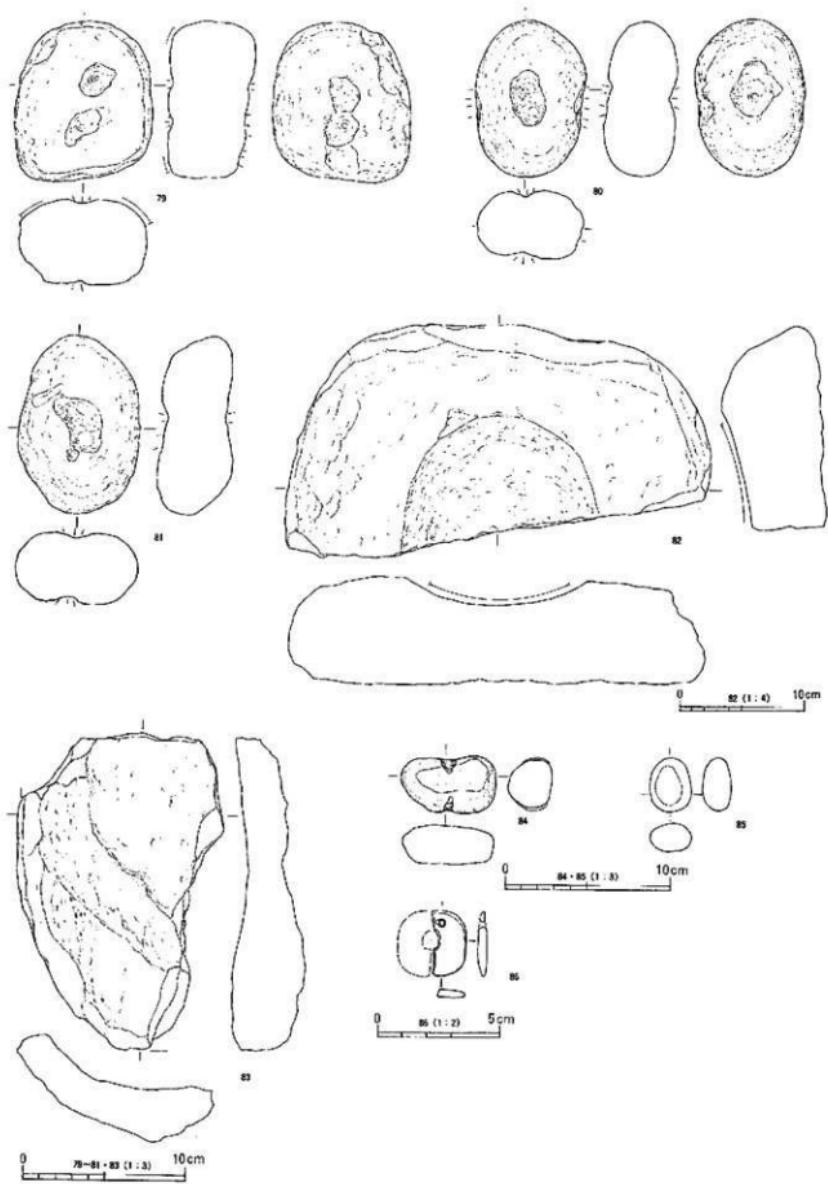
第145図 滝撰出土遺物(4)



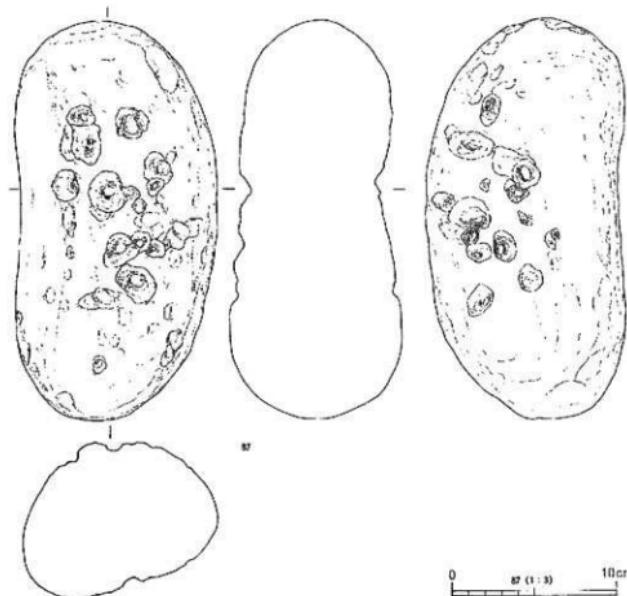
第146図 遺構外出土遺物(5)



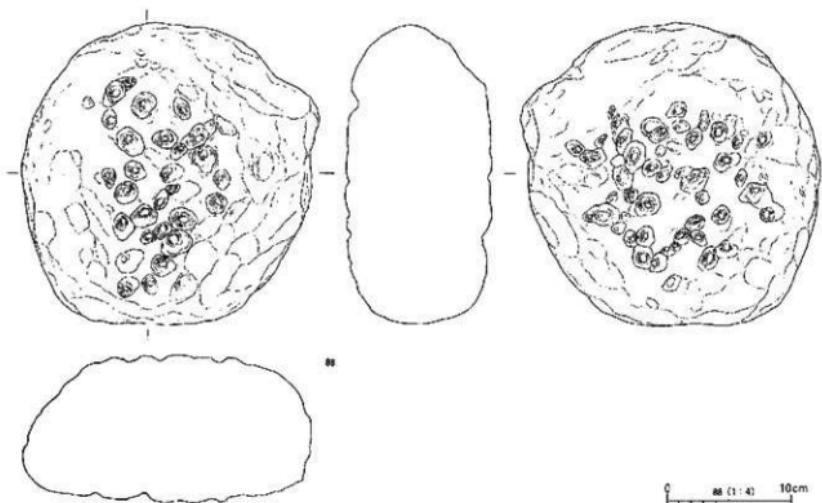
第147図 遺構外川土遺物(6)



第148図 遺構外出土遺物(7)



0 87 (1:3) 10cm



0 88 (1:4) 10cm

第149圖 遺構外出土產物(8)



第150図 遺構外出土遺物（1）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と現況

社口遺跡は、山梨県の北西部にある北巨摩郡高根町山北割・東割字社口に位置する(第1~5図)。ハケ岳南麓の中腹、標高720m付近にあり、ハケ岳泥流によって形成された七里岩台地、通称「古上」とよばれる台地上の東部に位置する。遺跡からは北側に赤岳(標高2899m)を主峰とするハケ岳の巻を間近に眺めることができ、東側には金峰山を中心とする秩父連峰を、また西側には甲斐駒ヶ岳はじめとする南アルプスの連峰を望み、南は甲府盆地を見下ろし、御坂山地の上に富士山を望む、緩やかな南向き傾斜地である。位置は国道141号線を韮崎から渋川方面へ北上途中、高根町箕輪交差点で西へ曲がり、県道万年橋・長坂線を約800mほど過ぎた北側のやせ尾根付近である。現在、県道と高根町民グラウンドとの間に広域農道が出来上がっているが、その道路の位置が社口遺跡である。こうしたやせ尾根はハケ岳南麓に通有な南北方向に伸びる細長い尾根状台地で、多くは林や畠地、集落となっている。社口遺跡周辺ではカラマツやナラ・クスギ等の落葉樹林が広がり、その中には別荘が点在し、牧草地や畠、果林が入り混じった土地利用が行われている。尾根の西側は水田地帯で、近年開墾整備が完了し広々とした圃場となっている。このやせ尾根上と圃場脇の低地に広域農道建設が予定され、調査が行われた。

第2節 地質・自然環境

八ヶ岳は本州中央のホッサマグナに噴出した火山群である。洪積世後期には古八ヶ岳火山群の活発な活動があり、とくに末期の火山活動では多量の火山泥流が噴出し、沖積世初期になると新八ヶ岳火山の活動があったとい。韮崎市中心部へ伸びる七里岩台地は、韮崎泥流と呼ばれる堆積物からなるが、これは火山活動のさかんであった洪積世末期(8~15万年前)に起こったハケ岳の山体崩壊で形成されたもので、甲府盆地に流れ込んだ上石流は中道町の曾根丘陵あたりまで達している。その後矢無川・塩川による東西方向からの浸食で七里岩と呼ばれる断崖を形成し、比高差30~100mの屹立した台地が出来上がった。したがって高根町周辺では磐石安山岩類を主とする溶岩粉砕物からなる基盤上に御岳などの火山灰層や黒色土が堆積した地質である。台地上は緩やかな南斜面で、東側の縁は赤岳東南から流れる大門川が川俣川と合流して須玉川、塩川となって南流する深い谷である。

ハケ岳山麓一帯では、少水流が標高1000~1500m付近と700~800m付近で豊富に湧き出して小河川が発達している。それらは南流して南北方向に開拓谷を刻み、谷と谷の間に残った細長い尾根状台地が南北に形成される。湧水は生活用水として、また農業用水として使われており、現在の高根町内の集落はちょうど泉の分布と重なるように營まれている。台上一帯は夏は涼涼しく、冬は降雪量が少ないもののハケ岳下ろしと呼ばれる北風が厳しく、寒冷地となる。高根町での年平均気温は攝氏10.4度、降水量は年間1,100mm程度で(浅川1990)、標高が高く冷涼な気候のため、高原野菜に適した地域であり、また水稲栽培も盛んに行われてきた。

遺跡周辺は、尾根から南へのびた尾根続きの地形上にあり、その周囲は谷戸田として水田化されている。現在は圃場整備によって微地形や小河川の状況がわからなくなっているが、かつて尾根筋に小河川が流下し、また遺跡北西付近には泉もあった、という話を聞いている。

第3節 歴史環境

高根町は山梨県北西部に位置し、長野県佐久地方と接することから山梨県の北の玄関口となっている。江戸時代には甲州街道韮崎宿と中山道岩村田宿を結ぶ脇往還である佐久往還(現在の国道141号線付近)が設定され、町内には長沢・浅川口留番所が置かれた。西側の長野県諏訪地方とはハケ岳山麓の隣接した地域として、織文時代以来交流が盛んであった。また古代には、高根町付近は甲斐国巨摩郡内に位置づけられ、甲府盆地東部方面の中心地域との結びつきがより強固なものになっていた。このように北・西・南からの様々な流れが交差する地域にあたり、遺跡出土の上器や土器類、遺構のあり方にもそうした特質が表れている。

古代以前における高根町周辺の遺跡を列記すると(第1~3図・第1表)、先土器時代では矢出川遺跡群(長野県南牧村)、織文時代草創期~早期では、橋原岩陰遺跡(長野県北佐木村)・神取遺跡(山梨県明野村)、前期

では阿久遺跡（長野県原村）・大伴遺跡（山梨県大泉村）、中期では大深山遺跡（長野県川上村）・普利遺跡・井戸尻遺跡（長野県富士見町）・与助尾根遺跡・尖石遺跡・棚畠遺跡（長野県茅野市）・甲ツ原遺跡（山梨県大泉村）・坂井遺跡（山梨県笛崎市）、後期～晚期では金生遺跡（山梨県入泉村）・上ノ原遺跡（山梨県須玉町）・長坂上条遺跡（山梨県長坂町）、古墳時代では坂井南遺跡（山梨県笛崎市）、奈良～平安時代では宮ノ前遺跡（山梨県笛崎市）がある。このように八ヶ岳山麓には縄文時代を中心とした著名な遺跡が数多く集中している。

高根町内では、清里高原で近年先上器時代の遺跡が集中して見つかっており、近くにある矢出川遺跡群とともに濃密な分布域となっている。縄文時代では中期を主とした遺跡が数多く分布し、遺跡数は中期後半に爆発的なピークをもって推移している。後期以降は遺跡数としては減少傾向にあるものの、後期から晚期にかけて金牛遺跡のように石を多用した大規模な配石遺構を作り石堂遺跡・青木遺跡が存在し、八ヶ岳南麓地域の核的な集落と考えられている。ところが弥生～奈良時代になると、高根町周辺の南麓台上地域（高根町・長坂町・大泉村・小瀬沢町）では遺跡が極端に少なくなる。古墳時代の集落がわずかに知られてはいるものの、それ以外の時期では無人化したのではないかと思われるほどである。やがて平安時代になると集落が各地で一齊に再出現し、遺跡数としては縄文時代に次ぐか、あるいは同程度である。一集落には堅穴住居に加えて小銀治窪穴や掘立柱建物を併せ、開墾的な性格が窺える。また北巨摩地方に定住される牧との関連も指摘されるところである。その後の11～13世紀の遺跡は非常に少ないものの、その頃定着したと言われる初期甲斐源氏の伝承をもつ社寺や城館が数多くあり、甲斐源氏にとって何らかの重要な役割を担った地域であろうと思われる。

社口遺跡周辺はもともと山林であり、昭和24・25年頃開墾されて畠地となたといわれる。遺跡西側の水田地帯では、1981年以降の景営圃場整備事業にともない、南側から青木遺跡・青木北遺跡・東久保遺跡・旭東久保遺跡といった遺跡が次々と連なって見つかっている。また町内詳細分布調査では、数多くの遺跡が周辺地域に分布する状況が明らかにされた。これらの調査以前にも社口遺跡付近は遺跡として地元の方には知られていたらしく、戦後、昭和20年代後半、北巨摩郡下で考古学研究が盛んになった時に、岐北農業高校の教員2名が牛糞を引き連れて調査を行ったことがあった。残念ながら詳しい内容や、出土遺物などの成果は全く不明であるが、今回の調査参加者で当時も調査に参加した小林種晴氏によれば、調査箇所はB70グリッド付近であったという。

社口という小字名に関しては、諏訪神社の信仰圏にみられる「シャグチ」という祭神名から転化した地名であろうと思われ、類例として県下には二神社（さんこうじん）等の地名がある。今日、付近にはそうした祭神を祀る神社・社等はないものの、J25・26グリッド付近の農道脇に、かつていくつかの石造物があった、との話があり、現在までに失われてしまったのかもしれない。社口地内の小名としては「ゑの木のはた」が箕輪堰西側にあり、櫟木の大木があったという伝承がある（高根町郷土研究会編 1990）。その他、O21グリッド付近の尼根上には塚が3基ほどあったといい地元の方の話がある。調査時点で31号住戸東側の調査区外にそれらしい低い高まりが1カ所あった。直径約2m、高さ1m足らずである。付近は数年前に行われたカラマツ伐採時にトランクが踏み荒らした状況のため、その1基以外は現状では確認できなかった。今回の調査で検出した中世墓の一基、またはムラ境に構築されたという十三塚の頃かもしれない。しかし、いずれにせよ古墳時代の高塚とは性格の異なるものである。

調査区南端に現在「箕輪堰」が流れている。また調査区内にも尼根を横切る堤跡らしい川状の跡地が1カ所あり、箕輪堰の旧流路「ふるせぎ」ではないかといふ話を地元の方から伺った。この村山東割・北割一帯は水田灌漑のための堰や堤がよく発達した地域で、泉や小河川以外の大規模な河川等の水源がないため、江戸時代以前から盛んに掘削されてきたといわれ、今日では社口遺跡周辺地域を灌漑する用水としては村山六ヶ村堰と箕輪堰がある。村山六ヶ村堰は川俣保川東沢の水を「吐龍の滝」下流で取水し、いくつかの隧道を経て多数の流路に分かれて堤・村山北割・村山西割・村山東割・小池・嵐原の旧六ヶ村に流域をもつ灌漑用水で、寛永16年（1639）ころ竣工したといわれる。また明暦3年（1657）ころ竣工したといふ箕輪堰は箕輪新町・箕輪を灌漑するものであり、一部六ヶ村堰と合流している（野牛嶋 1990）。社口遺跡を横切る箕輪堰は箕輪新町方面から村山東割方面への用水路となっており、今でもかなりの水量がある。

今までに調査された町内の遺跡を時代順に挙げておく（第3回・第1表参照）。

先土器時代 金堤原の川俣川岸線近くに丘の公園遺跡群（清里）がある。中でも丘の公園第2遺跡ではナイフ形石器約60点などが出土し、本県最大の先土器時代集落址といわれている（保坂 1989a）。そのほか湯沢遺跡（下黒沢、雨宮 1983）や次郎構遺跡（下黒沢）でも石器が出土している。

縄文時代 縄文早期として丘の公園第5遺跡で押切文土器・糸貫文土器の鶴ヶ島台式土器が出土し、前期末十三世紀式土器などもある（保坂 1990）。中期では持井遺跡（村山北割）に五領・台I式期の住居1軒と、中期前葉の土坑がある（雨宮 1992）。土坑出土の土器には胴部に木口状撲糸文をもち、北陸の新保式との関連が窺え、

る。住居の炉には小形の石窯い炉が採用されており、石窯い炉の出現としては早い段階である。旭東久保遺跡(村山北割)では五領ヶ台式期を中心とする土器が土坑などから出ている(雨宮 1985)。また日影田遺跡(下黒沢)では五領ヶ台II式期の住居址2軒、曾利I式期の住居1軒が出土している(山本ほか 1995)。物の木遺跡(箕輪)には新道・藤内式期の住居址1軒がある(森 1992)。海道前C遺跡(箕輪)には藤内式期~中期後半の住居址約20軒があり、土坑中から顔面把手付土器の優品が出土した。西ノ原遺跡(村山西割)には中期前葉~中葉の土器捨て場がある(雨宮 1986)。湯沢遺跡(下黒沢)では曾利式期の住居址8軒、東久保遺跡では曾利V式期の住居址1軒、当町遺跡では曾利IV式期の住居址1軒が出土している。野添遺跡(東井出)では学術調査により中期中葉~後半の住居4軒が検出され、微細炭化物の全点取り上げによって自然科学的な考察が行われた(市川ほか 1987)。次郎構遺跡では中期末、曾利V式期を中心とした住居址10数軒からなる集落址が調査され、中期末の良好な資料を提供した。後期以降として青木・石堂遺跡がある。青木遺跡(村山北割)は社口遺跡の西側約100mに位置するもので、加曾利B式期中心の後期住居址15軒、大型配石3、石棺20基などが出ている(雨宮ほか 1988)。石棺は死状に2群に分かれ、それぞれ主軸方向を異にしている。石堂遺跡B地区は後期~晚期の大規模な配石遺構で、住居址8軒以上、石棺14基以上などが出ており、方形を意識したと思われる配石北側に石棺墓群が東西に展開する(雨宮 1986, 1987b)。耳飾り200以上のほか、十隅、石棒などさまざまな遺物もある。

弥生時代 丘の公園第5遺跡(済渠)で弥生後期とみられる壺形上器片が出土している程度である(雨宮 1990)。

古墳時代 西ノ原遺跡(村山西割)では五頭期の住居址1軒が出土している(雨宮 1986)。また丘の公園第5遺跡では古墳時代前期の高环片が、また小池地区ト取り場遺跡では古墳時代後期(7世紀初)の遺物が多く採集されている。この時期の集落址は長坂町内で数箇所が知られているが、台地上域では全体に少ない。

平安時代 湯沢遺跡(下黒沢)では堅穴住居27軒、掘立柱建物13棟、棚列があり、掘立柱建物には柱数の多い大型のものがある。掘立柱建物群はコの字状配置に近く、齊衛の性格も想定され、牧経営に関わる施設ではないかともいわれている(雨宮 1983)。東久保遺跡(村山北割)は本遺跡西側にあり、堅穴住居33軒、掘立柱建物址7棟が出土している(雨宮 1984)。うち3・22号住は小銀治遺構で、多量の鉄滓・ふいご羽口が出土した。また全体的に墨書き土器も多い。本遺跡の西、約250m離れた青木北遺跡(村山北割)には堅穴住居址12、掘立柱建物址5がある(森 1992)。墨書き土器には「上:が多いほか、社口遺跡と同一書体の「四万」があり、集落の広がりと同時性、墨書き土器の意味を考える上で興味がもたらされる。また4号住は一辺6.5mの大きな堅穴で、その一辺に4カ所づつ礎石が置かれていた。当時の住居構造を窺わせる重要な発見である。ほかに石堂遺跡A地区(東井出)では住居址1軒(雨宮 1986)、大林上遺跡で住居址5軒、掘立柱建物址1棟が出土している。

中近世 当町遺跡(村山北割)で13世紀代の青磁や滑甕などが出土している(雨宮 1987c)。青木北遺跡では上部に配石をもつ七塗墓1基があり、内部から磁器1振りが出土した。旭東久保遺跡ではピット群が出ており、建て替えを伴う多數の掘立柱建物群が想定されている。日影田遺跡では上部に配石をもつ人骨をともなう近世初期の墓坑があり、草袋が副葬されていた。古瀬遺跡(箕輪)では箕輪の旧墳跡が調査されており、社口遺跡の墳址同様に断面V字形の溝であった(萩原・田口 1996)。

このほか多数の遺跡が調査されているが、報告書が未刊のため詳細は不明である。遺跡の分布状況に関しては『町内遺跡詳細分布図表』(雨宮 1987a)で分布図と、調査された遺跡が明記されているので参考になる。中近世では十里を巡らした土豪屋敷や城館跡が多数知られており(第3図)、それらは『山梨県の中世城館跡』(山梨県教委 1986)や『高根町誌』(第二章第三節 城址・館跡)(八巻 1990)の詳細な報告がある。

遺跡名	時期	特征	位置	遺跡名	時期	特征
12 上の原A	縦・中	53 土の山C	縦・中	120 三の山A	戦	173 丹波
13 上の原B	縦	54 穴持A	平・中	121 朝日A	戦	174 仁王
14 山の神、室堂	縦	55 穴持B	平・上・後	122 室代B	戦	175 仁王
15 室堂A	縦	56 穴持C	平・中	123 宮の山	戦	176 室代B
16 室堂B	縦	57 穴持D	平・中	124 朝日B	戦	177 仁王
17 室堂C	縦	58 穴持E	平	125 朝日C	戦	178 仁王
18 室堂D	縦	59 穴持F	平	126 朝日D	戦	179 仁王
19 室堂E	縦	60 穴持G	平・中	127 朝日E	戦	180 仁王
20 室堂F	縦	61 穴持H	平・中	128 朝日F	戦	181 仁王
21 室堂G	縦	62 穴持I	平・中	129 朝日G	戦	182 仁王
22 室堂H	縦	63 穴持J	平・中	130 朝日H	戦	183 仁王
23 室堂I	縦	64 穴持K	平・中	131 朝日I	戦	184 仁王
24 室堂J	縦	65 穴持L	平・中	132 朝日J	戦	185 仁王
25 室堂K	縦	66 穴持M	平・中	133 朝日K	戦	186 仁王
26 室堂L	縦	67 穴持N	平・中	134 朝日L	戦	187 仁王
27 室堂M	縦	68 穴持O	平・中	135 朝日M	戦	188 仁王
28 室堂N	縦	69 穴持P	平・中	136 朝日N	戦	189 仁王
29 室堂O	縦	70 内田B	中	137 朝日O	戦	190 仁王
30 室堂P	縦	71 穴持Q	平・中	138 朝日P	戦	191 仁王
31 室堂Q	縦	72 穴持R	平・中	139 朝日Q	戦	192 仁王
32 室堂R	縦	73 穴持S	平・中	140 朝日R	戦	193 仁王
33 室堂S	縦	74 穴持T	平・中	141 朝日S	戦	194 仁王
34 上の山B	縦	75 穴持U	平・中	142 朝日U	戦	195 仁王
35 室堂T	縦	76 穴持V	平・中	143 朝日V	戦	196 仁王
36 室堂U	縦	77 穴持W	平・中	144 朝日W	戦	197 仁王
37 室堂V	縦	78 穴持X	平・中	145 朝日X	戦	198 仁王
38 室堂W	縦	79 穴持Y	平・中	146 朝日Y	戦	199 仁王
39 室堂X	縦	80 穴持Z	平・中	147 朝日Z	戦	200 仁王
40 室堂A	縦	81 仁王A	中	148 別屋B	戦	201 仁王
41 室堂B	縦	82 仁王B	中	149 別屋C	戦	202 仁王
42 室堂C	縦	83 仁王C	中	150 別屋D	戦	203 仁王
43 室堂D	縦	84 仁王D	中	151 別屋E	戦	204 仁王
44 室堂E	縦	85 仁王E	中	152 別屋F	戦	205 仁王
45 室堂F	縦	86 仁王F	中	153 別屋G	戦	206 仁王
46 室堂G	縦	87 仁王G	中	154 別屋H	戦	207 仁王
47 室堂H	縦	88 仁王H	中	155 別屋I	戦	208 仁王
48 室堂I	縦	89 仁王I	中	156 別屋J	戦	209 仁王
49 室堂J	縦	90 仁王J	中	157 別屋K	戦	210 仁王
50 室堂K	縦	91 仁王K	中	158 別屋L	戦	211 仁王
51 室堂L	縦	92 仁王L	中	159 別屋M	戦	212 仁王
52 室堂M	縦	93 仁王M	中	160 別屋N	戦	213 仁王
53 室堂N	縦	94 仁王N	中	161 別屋O	戦	214 仁王
54 室堂O	縦	95 仁王O	中	162 別屋P	戦	215 仁王
55 室堂P	縦	96 仁王P	中	163 別屋Q	戦	216 仁王
56 室堂Q	縦	97 仁王Q	中	164 別屋R	戦	217 仁王
57 室堂R	縦	98 仁王R	中	165 別屋S	戦	218 仁王
58 室堂S	縦	99 仁王S	中	166 別屋T	戦	219 仁王
59 室堂T	縦	100 仁王T	中	167 別屋U	戦	220 仁王
60 室堂U	縦	101 仁王U	中	168 別屋V	戦	221 仁王
61 室堂V	縦	102 仁王V	中	169 別屋W	戦	222 仁王
62 室堂W	縦	103 仁王W	中	170 別屋X	戦	223 仁王
63 室堂X	縦	104 仁王X	中	171 別屋Y	戦	224 仁王
64 室堂Y	縦	105 仁王Y	中	172 別屋Z	戦	225 仁王
65 室堂Z	縦	106 仁王Z	中	173 仁王A	戦	226 仁王
66 室堂A	縦	107 仁王A	中	174 仁王B	戦	227 仁王
67 室堂B	縦	108 仁王B	中	175 仁王C	戦	228 仁王
68 室堂C	縦	109 仁王C	中	176 仁王D	戦	229 仁王
69 室堂D	縦	110 仁王D	中	177 仁王E	戦	230 仁王
70 室堂E	縦	111 仁王E	中	178 仁王F	戦	231 仁王
71 室堂F	縦	112 仁王F	中	179 仁王G	戦	232 仁王
72 室堂G	縦	113 仁王G	中	180 仁王H	戦	233 仁王
73 室堂H	縦	114 仁王H	中	181 仁王I	戦	234 仁王
74 室堂I	縦	115 仁王I	中	182 仁王J	戦	235 仁王
75 室堂J	縦	116 仁王J	中	183 仁王K	戦	236 仁王
76 室堂K	縦	117 仁王K	中	184 仁王L	戦	237 仁王
77 室堂L	縦	118 仁王L	中	185 仁王M	戦	238 仁王
78 室堂M	縦	119 仁王M	中	186 仁王N	戦	239 仁王
79 室堂N	縦	120 仁王N	中	187 仁王O	戦	240 仁王
80 室堂O	縦	121 仁王O	中	188 仁王P	戦	241 仁王
81 室堂P	縦	122 仁王P	中	189 仁王Q	戦	242 仁王
82 室堂Q	縦	123 仁王Q	中	190 仁王R	戦	243 仁王
83 室堂R	縦	124 仁王R	中	191 仁王S	戦	244 仁王
84 室堂S	縦	125 仁王S	中	192 仁王T	戦	245 仁王
85 室堂T	縦	126 仁王T	中	193 仁王U	戦	246 仁王
86 室堂U	縦	127 仁王U	中	194 仁王V	戦	247 仁王
87 室堂V	縦	128 仁王V	中	195 仁王W	戦	248 仁王
88 室堂W	縦	129 仁王W	中	196 仁王X	戦	249 仁王
89 室堂X	縦	130 仁王X	中	197 仁王Y	戦	250 仁王
90 室堂Y	縦	131 仁王Y	中	198 仁王Z	戦	251 仁王
91 室堂Z	縦	132 仁王Z	中	199 仁王A	戦	252 仁王
92 室堂A	縦	133 仁王A	中	200 仁王B	戦	253 仁王
93 室堂B	縦	134 仁王B	中	201 仁王C	戦	254 仁王
94 室堂C	縦	135 仁王C	中	202 仁王D	戦	255 仁王
95 室堂D	縦	136 仁王D	中	203 仁王E	戦	256 仁王
96 室堂E	縦	137 仁王E	中	204 仁王F	戦	257 仁王
97 室堂F	縦	138 仁王F	中	205 仁王G	戦	258 仁王
98 室堂G	縦	139 仁王G	中	206 仁王H	戦	259 仁王
99 室堂H	縦	140 仁王H	中	207 仁王I	戦	260 仁王
100 室堂I	縦	141 仁王I	中	208 仁王J	戦	261 仁王
101 室堂J	縦	142 仁王J	中	209 仁王K	戦	262 仁王
102 室堂K	縦	143 仁王K	中	210 仁王L	戦	263 仁王
103 室堂L	縦	144 仁王L	中	211 仁王M	戦	264 仁王
104 室堂M	縦	145 仁王M	中	212 仁王N	戦	265 仁王
105 室堂N	縦	146 仁王N	中	213 仁王O	戦	266 仁王
106 室堂O	縦	147 仁王O	中	214 仁王P	戦	267 仁王
107 室堂P	縦	148 仁王P	中	215 仁王Q	戦	268 仁王
108 室堂Q	縦	149 仁王Q	中	216 仁王R	戦	269 仁王
109 室堂R	縦	150 仁王R	中	217 仁王S	戦	270 仁王
110 室堂S	縦	151 仁王S	中	218 仁王T	戦	271 仁王
111 室堂T	縦	152 仁王T	中	219 仁王U	戦	272 仁王
112 室堂U	縦	153 仁王U	中	220 仁王V	戦	273 仁王
113 室堂V	縦	154 仁王V	中	221 仁王W	戦	274 仁王
114 室堂W	縦	155 仁王W	中	222 仁王X	戦	275 仁王
115 室堂X	縦	156 仁王X	中	223 仁王Y	戦	276 仁王
116 室堂Y	縦	157 仁王Y	中	224 仁王Z	戦	277 仁王
117 室堂Z	縦	158 仁王Z	中	225 仁王A	戦	278 仁王
118 室堂A	縦	159 仁王A	中	226 仁王B	戦	279 仁王
119 室堂B	縦	160 仁王B	中	227 仁王C	戦	280 仁王
120 室堂C	縦	161 仁王C	中	228 仁王D	戦	281 仁王
121 室堂D	縦	162 仁王D	中	229 仁王E	戦	282 仁王
122 室堂E	縦	163 仁王E	中	230 仁王F	戦	283 仁王
123 室堂F	縦	164 仁王F	中	231 仁王G	戦	284 仁王
124 室堂G	縦	165 仁王G	中	232 仁王H	戦	285 仁王
125 室堂H	縦	166 仁王H	中	233 仁王I	戦	286 仁王
126 室堂I	縦	167 仁王I	中	234 仁王J	戦	287 仁王
127 室堂J	縦	168 仁王J	中	235 仁王K	戦	288 仁王
128 室堂K	縦	169 仁王K	中	236 仁王L	戦	289 仁王
129 室堂L	縦	170 仁王L	中	237 仁王M	戦	290 仁王
130 室堂M	縦	171 仁王M	中	238 仁王N	戦	291 仁王
131 室堂N	縦	172 仁王N	中	239 仁王O	戦	292 仁王
132 室堂O	縦	173 仁王O	中	240 仁王P	戦	293 仁王
133 室堂P	縦	174 仁王P	中	241 仁王Q	戦	294 仁王
134 室堂Q	縦	175 仁王Q	中	242 仁王R	戦	295 仁王
135 室堂R	縦	176 仁王R	中	243 仁王S	戦	296 仁王
136 室堂S	縦	177 仁王S	中	244 仁王T	戦	297 仁王
137 室堂T	縦	178 仁王T	中	245 仁王U	戦	298 仁王
138 室堂U	縦	179 仁王U	中	246 仁王V	戦	299 仁王
139 室堂V	縦	180 仁王V	中	247 仁王W	戦	300 仁王
140 室堂W	縦	181 仁王W	中	248 仁王X	戦	301 仁王
141 室堂X	縦	182 仁王X	中	249 仁王Y	戦	302 仁王
142 室堂Y	縦	183 仁王Y	中	250 仁王Z	戦	303 仁王
143 室堂Z	縦	184 仁王Z	中	251 仁王A	戦	304 仁王
144 室堂A	縦	185 仁王A	中	252 仁王B	戦	305 仁王
145 室堂B	縦	186 仁王B	中	253 仁王C	戦	306 仁王
146 室堂C	縦	187 仁王C	中	254 仁王D	戦	307 仁王
147 室堂D	縦	188 仁王D	中	255 仁王E	戦	308 仁王
148 室堂E	縦	189 仁王E	中	256 仁王F	戦	309 仁王
149 室堂F	縦	190 仁王F	中	257 仁王G	戦	310 仁王
150 室堂G	縦	191 仁王G	中	258 仁王H	戦	311 仁王
151 室堂H	縦	192 仁王H	中	259 仁王I	戦	312 仁王
152 室堂I	縦	193 仁王I	中	260 仁王J	戦	313 仁王
153 室堂J	縦	194 仁王J	中	261 仁王K	戦	314 仁王
154 室堂K	縦	195 仁王K	中	262 仁王L	戦	315 仁王
155 室堂L	縦	196 仁王L	中	263 仁王M	戦	316 仁王
156 室堂M	縦	197 仁王M	中	264 仁王N	戦	317 仁王
157 室堂N	縦	198				

第3章 遺構と遺物

第1節 繩文時代

編文時代に関しては、古い順に大きく草創・早期包含層、中期前半住居址、中期後半住居址、後期住居址に分けられるので、それぞれ項を分けて報告し、各項目内の順番については遺構番号順とする。またピット・遺構外出土遺物は第4・5節で報告する。

1 細文時代墓創～早期包含層と出土遺物

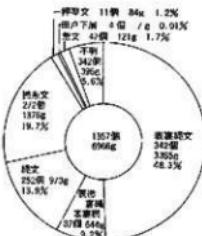
(1) 包含層の検出状況・層序・遺物出土状況（第16～19図、図版11・12）

A61~62・B59~63・C61~63グリッドの台地南斜面が中心的な包含層で、約14°の勾配をもつ急傾斜地である。また北台地上の近現代の溝やピットの覆土中からも遺物が少量出土した。台地斜面（遺物包含層）では遺構確認時点での調査区内に南西向きの暗褐色の層が検出され、数片の表裏繩文土器が出土した。またその部分で確認されたピットの調査時に多数の表裏繩文土器片が見つかり、暗褐色土は草創期～早期の包含層であることが予想された。そこで調査区境の西側縁に沿って南北トレチを設定し、また直交する東西トレチをB・C61杭付附近に設定した。南北トレチは約24mあり、低地から斜面にかけて断面をみている。傾斜変換点付近に近現代の3号溝が横切るため、斜面と低地面の層位関係が分断されているが、斜面上には1～6・11層、また低地面では1・2・10・4～6層が確認され、4～6層はおよそ4～6'に対応している。これらのうち1・2層は耕作土・表土層で、3～5・4・5'層が包含層である。斜面中心に堆積する3層は傾斜変換点付近まで及び、4'層上部に堆積する。また10層は4'層上に堆積し、平安時代以降の包含層と思われる。4・4'層は低地面全面にはなく、傾斜変換点から10m付近で止まっていることから、3層とともに斜面にともなう限定的な層位であろうと思われる。おそらく北台地上の縁辺部に存在した上層が削落して再堆積したものであろう。

土器・石器のはかに礫が多数分布し、多くは被焦・赤変していた。また焼土ブロックが斜面下部～低地面に3ヵ所で見られた。焼土は4～5層中の堆積であり、焼土のまとまりが維持されていることから、近距離で形成されたものか、または原位置を保っている可能性がある。5層はいわゆる黒ボク上で、ハッカ南詫ではよく発達している。5層から移行するもので、5層中では5層上層で黒味がより強くなっている。包含層の厚さは斜面上部で表土から5層までが約30cm、傾斜変換点付近で約60cm、低地面（斜面下方）で約110cmである。斜面中間部の覆土が厚い箇所を漫て火山灰分析を行ったところ、2層から3層上部でアカホヤ火山灰が出ており、約6400年前に3層間に火山灰が降下したたらしく、アカホヤ降下以後は地形が安定的なことがわかる。台地上と斜面での土器接合事例が1例あり（第57図17）、一応3・4層は台地上または斜面上部からの堆積土で、遺物の多くも二次堆積したものと考えておくが、層位判断の認証も予想され、削面での归属の可能性も残しておきたい。

遺物はB61グリッドに最も集中している。包含層全域での草創～早期土器は全体で1357点（同一個体と判断した複数片は1点とする）6966 gで全て無織維土器である。土器の内訳は第151図のとおりで、重量で割合を出すと、表裏編織上器・表裏糸文土器・表裏織編文土器など、表裏施土土器が約6割、糸文土器が約2割、表縞文が約1割で、そのほか押型文土器・山円下唇式土器が1%程度存在する。この図では裏面不明の織文土器を表縞文に含めているので、表裏編織上器の割合が実際にはもう少し多い。表裏縞文のうち、表に単縞縞文を施したものは170点（2107 g・30.2%）、無縞縞文を施したもののは172点（1258 g・18.0%）、表裏捺糸文は32点（178 g・2.5%）、表裏表縞文は56点（604 g・8.6%）。また表縞文のうち単縞は108点（447 g）、無縞は144点（526 g）、いずれも縞細化した小破片で、調査が歓楽期であったことから、土器片が凍結・解凍を経て取り上げ時に崩れたり、整理段階でも水洗によって溶けたりするものがあった。

石器は右鉋37点、砥石22点、縱長削片13点、搔器51点、二次加工のある削片27点以上、突形石器15点以上、磨石・凹石21点、礫器2点のはか、黒曜石チップ388点、種などがあり、土器と同様な分布状況を示し、南北方向への広がり 第151図 爪創→早越土器の重量比



- 165 -

をみせている。種別ごとの分布に差異はないが、B61グリッド中央付近で振器が集中する箇所が存在した。なお前期以降の混入も若干予想され、すべてが中期前半以前の資料であると断定できない。ただ前期以降の土器の混入が微量（第61図86・87）であることから、石器においても混入は少ないとと思われる。

そのほか、焼成粘土塊が3点以上出土した。径1.5~2.5cm程度の小さなもので、土器胎土とは異なり、混和材がほとんど見られない。炭化物には大形の炭化材はないが、微小な炭化粒は多数見られた。

(2) 草創～早期の遺物

a 土器（第54~63図、図版49~55）

表裏縄文土器（表 無筋縄文）：15~20・29・67~85 15は口縁と胴部の接点が潰れていたため器形が確定ではないが、縦やかに屈曲する角頭状口縁で、口唇1部位施文。口縁直下から2原体による継位施文の縦羽状縄文とする。雲母を非常に多く含みもらい、厚さ7mm。16は緩く外反する角頭状口縁部で、口唇1部位施文、継位施文の斜縄文。厚さ8mm。17はB62グリッド内154号ピットとC65グリッド内112号ピットの接合資料で、わずかに肥厚した丸頭状口縁部が緩く外反し、外面は一部横位施文の斜縄文であるが、縦縄文を意識するようにも見える。厚さ7mm。口唇施文なし。18は直立に近い形でわずかに外反する角頭状口縁で、口唇1部位施文。外面の施文方向は不規則であるが、頸部文様を横羽状、あるいは格子状とするよりも見られる。薄手で厚さ7mm。19は丸頭状口縁部が緩やかに外反し、口唇は1部位施文、外面は横位施文の斜縄文。20は丸頭状口唇で口唇施文ではなく、継位施文の縦縄文であるが、燃糸文の可能性もある。内面は幅4cmほどの横細文となり、内面全周施文ではないらしい。

表裏縄文土器（表 単筋縄文）：1~4・7~14・26・27・35・41~66 1は同一個体片が最も多く存在した資料で、口縁～底部直上付近までが断片的にある。出土状況は約10m内に接合関係をもち、広範囲に散在する。厚さ8mmで、表裏とも褐褐色で、焼成は良いが粉っぽい。直立ぎみに立ち上がり、丸頭状口縁が緩く屈曲し、口唇1部位施文。口縁から4~6cm幅で頸部文様帶（第II文様帶）を意識したらしい継位施文の横縄文があり、それより下では継位施文の斜縄文となっている。口縁部には不確定ではあるが粗状貼付がある。内面は縦文施文しながら積み上げ、粘土帶の接合部を指頭で押圧する。胴部の張りは弱く、底部はやや尖っている。2は1カ所でまとまって出土した土器（図版12~3）。継位施文による斜縄文で、もらい。厚さ7mm。3は口縁部外間に長さ4.5cmの縦長瘤状貼付文をつけ、口縁から5mmほど突出させ、口縁部は角頭状でゆるく屈曲する。口唇1部位施文。口縁から2cm幅で部分的に1段の斜縄文をし、それより下を継位施文の縦縄文としている。厚さ7mm。4は口縁が丸頭状で弱く屈曲し、外面は同一原体の横位施文で横羽状縄文とする。胴下半が不明であるが、形態化した頸部文様帶と思われる。厚さ6mm。焼成良好、硬質で、雲母が特徴的である。7は口縁部に瘤を強く貼付した瘤状貼付文をもち、丸頭で、横位施文による斜縄文。口唇1部位施文。厚さ8mm。8は屈曲・丸頭状口縁で、口唇2部位施文する。外面は部分的に幅4cmの頸部文様帶を継位密接施文の斜縄文、胴部文様帶（第I文様帶）を継位施文の横縄文としているようにも見えるが、胴下半の様子が不明で、基本的に継位施文の斜縄文かもしれない。厚さ7mm。黒味が強く、硬質。9は弱い外反、角頭状口縁で、横位施文の斜縄文。厚さ8mm。10は弱く屈曲した口縁部で、口唇1部位施文し、継位施文による縦縄文である。雲母を非常に多く含み、太い縄文を施文する。厚さ6mm。11は口唇1部位施文で、角頭口縁であり、外面は継位施文による縦縄文。厚さ8mm。12は緩やかに外反した丸頭状口縁で、やや肥厚し、口縁直下に一部横縄文、他は継位施文の斜縄文。雲母を多量に含み、厚さは7~9mm。13は強く屈曲した角頭状口縁で、外面は同一原体で継位施文による横羽状縄文、もしくは縦縄文とする。厚さ8~10mm。14は口縁直下が一部縦縄文、下を縦に近い斜縄文としたもので基本的には縦縄文かと思われる。屈曲・丸頭状口縁で、口唇施文はない。厚さ7mm。

表裏燃糸文：21・105~126 21は外同継位施文、内面横位施文する。角頭状口縁で口唇施文ではなく、弱く外反し、厚さは6mm。

表裏裏縄文：22・31~34 22は口縁が強く屈曲し、角頭状で肥厚し、口唇1部位施文である。外面に継位施文するが、純粋的ではない。31~34は同一個体で、内面に2種の無筋縄文を施文した削部片。外面の燃糸文は細く密で、井草II・大丸式～夏島式的な燃糸文である。厚さ6mmと薄手。

縄文（無筋縄文）：91~102 91~95は丸頭状口縁で、口唇施文はない。横位施文の斜縄文で、粗い原体である。102は口唇が肥厚した井草式的な土器。

縄文（単筋縄文）：5・28・36・38・88~90・103・104 5は厚さ5mmの薄手土器で、直立口縁。口縁部には単位不明な複数の小波状が付き、内面には指頭痕を多数残す。外面は横位施文の横羽状縄文とし、文様帶を意識しているようである。雲母を多く含み、硬質。103・104は口唇部が肥厚し、2部位施文した井草式的な土器である。

撫糸文：6・23～25・30・37・39・127～137 6は角頭状口縁で直立し、外側に粗大撫糸文を浅く施し、裏面は平らなヘラ状工具で滑削に調整する。縦荷台式十器の模倣かと思われる。胎土には結晶片岩が含まれ、県外からの散入品らしい。(第4章第3節参照)。厚さ8～10mm、斜面や上部から集中破壊を離れて出土している。23は外反口縁で、丸頭状。厚さ7mmで、同一原体により調目状施文する。24は口縁が細長くのが、緩く屈曲し、丸頭状で、口唇施文はない。雲母を非常に多く含み、あるいは。25は緩く外反した丸頭状口縁で、口唇施文はない。

無文：40・151 40は丸底の底部、151は時期不明の無文上器。

押型文：138～148 138は厚さ1.2～1.4cmの厚い十器で、幅幅の大きな山形文が継ぎ施文される。いわゆる立野式かと思われる。同程度の破片がもう1片あり、同一個体と思われる。146～148は同一で、下部に非常に太い單筋縞文を、上部に椎円押型文を施文した異種施文上器で、厚さ7mm。焼成は良好で、硬質。ともに5層上層で出土している。

田戸下層式：149・150 149・150は同一個体で、部位も同じである。頭の平らな棒状工具で、器面が軟らかな時点で浅い沈線を描き、沈線の両脇がわずかに降起する。草創期の微隆起線文上器に類似した雰囲気をもっている。沈線間を半截竹管状工具で斜めに連続刻穴する。厚さ5mm。ほかに2点の小破片がある。

これらの変遷案については第5章第2節に記す。

b 石器(第64～74図、図版55～57)

四石：152～164 1面にのみ凹部をもつもの(153・154・157～162・164)、2面に凹部をもつもの(155・156・163)、3面に凹部をもつもの(161・163・164)、周縁部・後に磨り部をもつもの(161～164)、端部に敲打痕をもつもの(157・158)がある。石材は安山岩円礫で、凹部は中期の凹石に比べると浅い。総数13点。

磨石：165～175 磨り面をもつもの(165)、周縁部・後に磨り部をもつもの(166～175)がある。円礫素材で、横磨りを主とし、面的な磨り石は165のみである。磨石・凹石が相当数あるにもかかわらず、石皿・台石は確認されていない。石材は安山岩円礫が主で、ほかに砂岩がある。総数11点。

砥石：176～186 細緻・荒砥があり、176・178が最も細かく滑らかで、182～186が最も粗い。177・179～181は中間的な粗さであるが、細緻に近い。厚さ0.4～2.1cmで、183を除きいずれも両面を底面とする。全て小型・板状の平砥石で、有溝低石はない。石材は花崗岩の1例(185)を除き、すべて砂岩である。擦痕は177に長軸方向にかすかに認められるものの、それ以外では肉眼的にはわからない。なお176・178・179・181・183には被熱・赤変が認められる。また186は黒変し、脆弱になっている。示した以外に11点の砥石小破片があり、総数は22点。

縱長剝片：187～196 幅1～1.4cmで、側縁が平行に近く、一面に1本の緩縫をもつ石刃状の剥片(187～191)とそうでないもの(192～196)がある。いずれも黒躍石製。いずれも連続的に作り出した縱長剝片ではなく、石刃ではない。示した他に167号ピットに向側縁二次調整した原石利用剥片1点、B64グリッドに1点、129号ピット内に右核状の剥片1点がある。総数13点。

石鏃：197～232 正三角形に近い無茎平基二角鏃(197～207：11点)、弱い抉りをもつ無茎凹基二角鏃(208～216：9点)、縦長で抉りがない無茎半基鏃(217～219：3点)、縦長で弱い抉りがある無茎凹基鏃(220・221：2点)、剥片鏃(222～225：4点)、縦長で抉りが大きな無茎凹基鏃(226～229：4点)、基部が丸い円基鏃(230～232：3点)があり、三角鏃・凹基三角鏃が最も多い。このうち226は諺形鏃になるかと思われる。また228・229は他に比べ人形で、前期以降の混入の可能性がある。石材は229を除き黒躍石。ほかに10号件に無茎平基三角鏃1がある(第171図8)。総数37点(228・229を含む)。

搔器：233～275・282・288・299 円形で、素材側縁に調整痕が及ぶ拇指状搔器(233～241)、円形に近い不整形で刃部調整が部分的な不整形圓形搔器(242～270)、縦長で長軸端部に刃部をもつ縱長搔器(271～275)がある。不整形搔器には刃部の反対側に平らな・辺をもつものがあり(245・246・249・260・263・266・267・269・270)、刃側が厚く、打点側である場合が多い。またほとんどが片面調整で、湾曲した素材を用いている。縦長搔器は素材端部を刃部とし、側面にも二次加工痕をもつものがある(274・275など)。282は搔器片で、形態は不明。299は黒色緻密安山岩の大形搔器で、刃部両面に磨耗痕をもつ。刃部の反対側(基部側)に打点があり、湾曲した素材で刃部側が広く基部側が狭い挟基である。なお264は搔器類似の原石。ほかに63号ピットに不整形圓形搔器1・搔器片1、167号ピット・1号溝・6号溝・表珠資料に不整形圓形搔器各1の計6点がある(第171図1～5・7)。総数は251点。石材は、黒躍石49点、硅質頁岩1点、黒色緻密安山岩1点。

石核状搔器：288 周縁部に両面加工した石核状(亀甲形)を呈す。珪質頁岩製で、この石材を素材とした製品はあまりなく、石核状の両面撓器と思われる。1点のみ。

石錐：289 素材端部を錐先とする。1点のみ。

楔形石器：276～280・285・294、第171図6 図示したほかに7点以上の楔形石器があり、総数は15点以上。
 二次加工ある剥片：281・283・284・287・290～293・295～298 ほかに14点以上あり、総数は27点以上。
 磨器：300 貝岩円盤を用い、長軸方向の一辺に片刃を形成した片面磨器で、他は自然面のまま。1点のみ。
 その他の剥片類：図示していないが多数あり、黒曜石チップ388点(320.7g)のはかチャート・貝岩チップ17点(31.2g)などがある。

2 繩文時代中期前半の住居址(34号住)

34号住(第20・75・76図、図版13・58・59) (位置) O・P17・18グリッド。南台地上。(重複) 北西隅をわずかに30号住に切られる。(検出状況) 遺構検出面が表上直下であったため、当初住居プランは見えなかった。いくつかのピット状の黒色部を半蔵したところ、貉沢式期の土器(2)が出土した。そこで住居を予想し、改めて精査しておおよその見当をつけ、ベルトを設定したところ、ベルト中から炉体土器(1)が出土し、住居として確定した。床面には木の株がいくつもあり、根による擾乱が多い。(形状・規模) 長軸長5.54m×短軸長5.10m。隅丸五角形に近い円形。中央や北寄りに炉体土器が埋設され、その周囲に5本の柱穴がある。(覆土) 大きく2層に分けられるが、2層直上面付近に炉体土器口縁部が同一レベルで遺存していたこと、また遺物の多くは1層出土したことから、2層上面が生活面と思われる。(遺物出土状況) 炉体土器(1)以外に炉周辺からは横位で小型深鉢形土器(2)が出土し、また人形の浅鉢形土器の小破片が炉北側に散在していた(18)。いずれも床面として完掘した面より深くが、2層上面を床面と推定した場合、床面からやや浮上した位置出土となる。(床) 硬化面がなかったため、柱穴確認のために掘り方まで下げている。(柱穴) P1～5を主柱穴とみた。そのうちP3は焼却部にあたり、不確実である。深さはP3・4を除き47～55cmと一定している。P3～5の柱穴は壁から大きく離れているが、P1・2はやや壁に接して存在する。柱穴間の距離はP1～P2間2.0m、P1～P5間2.7mである。奥壁側にあたるP4には、覆土中にクルミの炭化核が見いだされた。(炉) 深鉢形土器の洞下部を欠く上器を正位に埋設した埋甕炉。口縁部が破損しているが、本来その分だけ床面上から突出していたのであろう。焼土・炭化物層はなかった。(壁溝) 床を掘り方付近まで下げてしまったため、壁溝は南側のみ確認された。ただし不明瞭である。(壁) 確認面から床までは30cm程度であり、だらだらした立ち上がりである。(その他の施設) なし。(遺物) 1は炉体土器、2は横位出土。どちらも平縁で、3段の帯状縫合区画をもつ類似した文様構成の上器であるが、幣円区画内の充溝文様のあり方が違う。また18は炉北側に散在した浅鉢である。そのほかに五領ヶ台式土器が数片(6・8・9・12・13)出土した。14は脛部に羽状沈線文をもつ後期土器であろう。右器は打斧片が6点出土した。いずれも欠損品である。(時期) 褐沢式期。

3 繩文時代中期後半の住居址(3・7～10・13・14・27・28・30～33・36号住)

3号住(第21・77図、図版14・59) (位置) B・C59・60グリッド。草創～早期包含層上層にあたり、低地に移行しつつある南向き傾斜面に位置する。(重複) なし。(検出状況) じょれんかげ中に弧状の小砾群が検出され、中期末～後期散石住居と予測された。また中心あたりから土器底部が出土し、炉体土器底部かと思われた。砾を取り上げ後、ピットを探したが、遺構底が褐色土のためよくわからなかった。全体を随分下げる感触を手がかりに掘ってみたところ、柱穴らしきピットが確認された。(形状・規模) 円形と思われるが、南壁が斜面のためにない。推定主軸長3.9m×推定交軸長4.2m。(覆土) わざかに中央から北側に浅く遺存し、南側ではない。(遺物出土状況) 築中に混じって土器片や石器がみられ、砾の一部に混ぜられたようである。(床) ほとんど遺存しない。(柱穴) 5本程度の主柱穴らしいピットがある(P1～5)。一応、正五角形に配置し、中期的な柱穴構造である。うちP3・4には建て替えを示すようなピットがある。柱穴間隔はP1～P5間1.7m、P1～P2間1.6m、P2～P3間1.6m、P3～P4間1.8m、P4～P5間2.2mである。(炉) 土器底部が炉体土器の残存と推定した。石甕い、焼土はないが、炉体土器ならば方形石甕埋甕炉であろう。(壁溝) 北側の柱穴をつなぐように弧状の溝が壁際に出ており、砾群の内側に巡っている。(壁) ゆるやかに立ち上がる。壁の高さは北壁で18cm程度。(その他の施設) 砥群は直径10cm程度の安山岩礫を約120個用いている。その基部には長軸長40cmほどの大きめの礫が一部弧状に並んでいた。それらの礫も円錐安山岩で、平石ではない。なお礫は全て遺物番号を付けて取り上げた。(遺物) 1は炉体土器と思われる底部。その他の遺物は築中に混じて出土した小片である。4の低石は平安以降のものとは異なる。(時期) 2の土器や柱穴配置から推定すると中期末かと思われるが、不

明である。後期初頭の可能性も強い。

7号住（第21・77図、図版14・59・60）（位置）A・B67・68グリッド。北台地上。（重複）11号溝に東側を切られる。また炉前面に住居より古い土坑状のピットが重複する。（検出状況）重複での表土剥ぎ中に炉石正面（南側）の石を持ち上げて確認された。炉石の奥壁には大きな株があり、炉石は木によって操作などから保護されてきたようである。住居プランはほとんど不明であったが、かろうじて柱穴2本（P1・2）が出土したため、残る柱穴を探した。柱穴を探す段階で床面を相当下げている。（形状・規模）隅丸方形で、柱穴は壁のコート寄りに4本出土した。しかしP3・4はあやしい。炉は中央突竊寄りにある。（覆土）上層が黒褐色土、下層が黄褐色土である。（遺物出土状況）推定床面上・複上中に少量散在。（床）硬化面がなく不明。（柱穴）柱穴がP1～4と思われるが、柱穴配置からすると炉裏にもう1本あった可能性がある。ただ株のため調査不能であった。柱穴間隔はP1～P4間1.9m、P1～P2間2.2m、P2～P3間2.0m。（炉）4枚の安山岩平石による方形石曲炉で、82×72cm、深さ30cm。奥壁側の東北隅と西北隅には小蝶が添えてあった。（壁溝）検出していない。（壁）明確ではない。（その他の施設）なし。（遺物）曾利II式期を中心とする破片がある。7号掘り内2式期の灶口上器であり、混入品。（時期）上器から判断すると曾利II式期であるが、方形石曲炉の形態はIII式期以降に多い。

8号住（第22・79図、図版15・60）（位置）C68・69グリッド。北台地上。（重複）なし。（検出状況）調査区外にかかり約半分ほど調査。炉を中心とした黒褐色のシミを確認し住居と認定したが、当初プランが不明確であった。柱穴・壁溝を見つけ、プランがはっきりした。また調査区間に設定したキャッシュ面の再精査中に、断面中に埋設土器を検出した。位置的には埋甕らしい。（形状・規模）推定長軸長5.7m×短軸現存長3.3m・推定5.4m。推定円形プランで、中央奥寄りに炉がある。（覆土）1・2層が覆土で、4・5層は床部分であろう。覆土中には炭化物粒が多く散っていた。（遺物出土状況）炉内から1・8・17など繩文・結節繩文の土器が出土した。中でも1は炉底面に横位に接している。炉以外では小破片のみである。特殊な出土状況としては、P3覆土上層に打製石斧2点を合わせて立てたような状況で出土した（19・20）。（床）硬化面があまりはっきりしなかったので、柱穴を探すために下げた。（柱穴）調査区内では3本の主柱穴が出土している（P1～3）。五角形配置を示すものである。柱穴の深さは57～75cmと深い。柱穴間隔はP1～P2間3.4m、P2～P3間2.3m。（炉）100×100cm、深さ48cmの炉で、本来方形石曲炉と思われるが、方形の掘り方のみ遺存し、炉石は撤去された状況であった。ただ正面側の一辺に詰め石とともに思われる種群が並んでいた。覆土には炭化物が多く堆積し、また炉底は非常によく赤変し、硬化していた。炉内出土の炭化材を同定したところクリで、“C年代測定では4,350±110BP”という結果が得られた。（壁溝）柱穴に接して全周すると思われる。幅広で、浅い。（壁）壁溝の立ち上がりを整とした。南側では傾斜の関係でほとんど遺存していない。（その他の施設）埋甕が南側にある。ピット覆土中に斜位に底部のみ遺存し（14）、底部に接して別個体の口縁部片が出土した（3）。3の埋設後に14に埋設した状況である。14は耕作等で上半が欠損したと思われるが、4層直上面を床面とみなすと、埋甕にしては埋設位置がやや高いように思われる。（遺物）繩文施文の土器が主体である。加曾利E式的な8や、結節繩文を伴う1・17、連弧文土器（7）がある。また18は浅鉢内面に赤色塗装している。石器は打斧2・磨石・凹石2で、19・20が接して出土した打斧である。自然面を残す薄い削片を使用し、一部磨いている。実用的ではなく、また石材も通常の打斧とは違っており、儀器的なものであろう。ほかに黒曜石製石錐1（未固化）あり。（時期）曾利II式期。

9号住（第23・80～86図、図版15・16・61～64）（位置）B・C70・71グリッド。北台地上。（重複）東側をわずかに6号住（平安）によって切られる。またほぼ中央部に近現代の浅い溝がかかる。（検出状況）褐色のシミを住居と認定し掘り始めたが、当初プランは不明であり、柱穴を確認した後に壁が確定した。（形状・規模）隅丸方形に近い円形で、主軸長5.0m×推定交軸長5.5m。中央奥寄りに炉がある。（覆土）浅い。（遺物出土状況）炉周辺、炉南側を中心に覆土中から小破片が多く出土。特殊な出土状況としては、北壁面の向かって右側に完形のミニチュア土器が、また北壁左側壁溝上に石皿と磨石がセットで出土した。石皿はやや斜めに上向きで、磨石は石皿に接して出土した。また南側の推定出入り口部に石蓋状の平石をともなう埋甕（1）があった。（床）硬化面はない。（柱穴）5本柱穴（P1～5）で、深さは45～64cmと一定している。配置は横向方に長く、P1～P5間3.2m、P1～P2間2.2m、P2～P3間1.8m、P3～P4間2.1m、P4～P5間2.7mである。P3を除きいずれも同じ位置での柱穴の掘り直しが行われたらしく、柱穴の重複がある。とくにP2は40cmほど内側に建て替えている。P1からはクリの炭化材が出土した。（炉）125×120cm、深さ22cmの炉で、方形石曲炉で

あったと思われるが、炉石は遺存しない。ただ炉石設置時の掘り方の穴が残り、また詰め石状の礫が炉中にあった。炉底はローム質の褐色土が非常に良く赤変・硬化していた。(壁溝) 住穴の外側20cm程度の位置に狭く浅い溝が全周する。(壁) 緩やかに立ち上がる。(その他の施設) 剥下半を欠く坪甕が1個、壁溝の内側15cmのところに正位で埋設されていた。内外面に煮沸痕がある深鉢形土器で、土器内に長さ35cmの安山岩平石が斜めに入っていた。蓋石と思われ、埋甕内に空洞部があったために石蓋が落ち込んだのであろう。ただ、幅が狭い石なので蓋をする隙間ができてしまう。また坪甕とともにならう蓋は県内では非常に少ない。(遺物) 全点尖測で606点ある。坪甕(1)をはじめとする曾利III式期の上器(12・14・15・17)、曾利IV式期の土器(2・7・8・10)、加曾利E式的な土器(13・34・39)がある。また曾利II式期(16・31・32)も混じる。とくに34・39は胴部に劍先状線文をもつ上器であり珍しい。石器は打斧1、横刃形石器1、石皿1、磨石1、凹石5、砥石1、石錐1、石錐1がある。(時期) 坪甕が住居の時期を示すのであれば、曾利III式期であり、曾利IV式期にかけて土器発見が行われたらしい。

10号住(第24・87図、図版17・65)(位置) C71・72グリッド。北台地上。(重複) 21号ピットが重複する。(検出状況) 調査区外にかかる約半分確認。プランは不明確で、一応、十色の違いで確認した当初のラインを住居プランとしたが、もっと大きい可能性が高い。(形状・規模) 円形で、炉が奥壁寄りにある。長軸長は4.0m、現存短軸長は2.8m。柱穴らしいものがいくつか出ているが、確認できるものは2本(P1・2)である。

(覆土) 耕作の影響で覆土は薄く、覆土中には炭化粒がやや目立った。(遺物出土状況) 住戸内に小破片が少量散在する。(床) 硬化面はなく不明確。(柱穴) P1・2がそれらしものであり、4本主柱かと思われるが定かではない。柱穴間距離はP1-P2間が2.6mである。(炉) 92×87cm、深さ48cmの石四脚で、石は2辺に部分的に残る。4枚組の方形石圓いではなく、複数の縁を用いた円形石圓いらしい。炉石は斜めに立てている。焼土層はなく、炉底も赤変していない。なおオニグルミ12片が検出されている。(壁溝) ないらしい。(その他の施設) なし。(遺物) 曾利II式(1・2・8)のはかIII式期以降と思われるものもある(4~7)。4は竹管施文による地紋のみの上器。12は後期か。ほかに草創~早期の小型三角錐1(第171図8)。(時期) 炉形態から曾利II式期以前と思われるが、はっきりしない。

13号住(第24・88図、図版17・66)(位置) A・B70・71グリッド。北台地上。(重複) 29号ピットが重複。また西壁は畠境の溝に切られ、また崖状に内へ向かって下がるため、床は遺存していない。なお岸畠文調査の14号試掘坑が炉裏に位置する。(検出状況) 炉中心に土色の異なる部分を住居址とし、調査を始めた。東壁と南壁が不明であったが、ピット・坪甕・壁溝の検出で確定した。(形状・規模) 四方形に近い円形。主軸長4.5m、推定交軸長4.6m。炉が中央奥壁寄りにあり、柱穴(P1~4)が長方形に配置する。主軸線上に坪甕が1個埋設されている(1)。(覆土) ごく浅く、北側では土器の厚さが20cmほどあるものの、炉から南ではほとんどない。

(遺物出土状況) 小破片が散在。(床) きわだつた硬化面はないが、全体に床らしくしている。(柱穴) 主柱は4本(P1~4)で、深さは51~66cmと安定する。P1はだるま状で、建て替えが予想されるが、他は単独である。奥壁側の2本(P2・3)は豊満に接して存在し、P4は15cmほど離れている。9号住と同様に主軸ラインに対して交軸方向に長い。柱穴間距離はP1-P2間2.4m、P2-P3間2.7m、P3-P4間2.3m、P4-P1間2.8mである。柱穴中には褐色土が入り、しまりは弱い。(炉) 110×100cm、深さ37cmの切りこたつ状の方形石圓い、正面と東側の2枚の石以外はない。掘り方には炉石を設置した凹みが残る。また炉底はドーナツ状に良く赤変・硬化していた。(壁溝) 床のない南西側以外は全周する。坪甕の位置が壁溝中か、あるいは坪甕両脇で壁溝が途切れるのかは微妙である。(壁) 壁溝から緩やかに立ち上がる。(その他の施設) 壁甕が推定出入り口部の周溝中にある。口縁及び胴部を欠く深鉢形土器。(遺物) 坪甕(1)をはじめ、曾利IV式期の上器片が少量ある程度。石器は凹石4、小形磨斧1、攝器? 2がある。(時期) 曾利III~IV式期。

14号住(第25・89・90図、図版17・18・66)(位置) A72グリッド。北台地上で調査区内では最北端。西側は深く落ちる崖となっている。(重複) 近現代の溝と思われる14号溝と15号溝が2本平行して住居東側に通っている。溝底面は床面下まで達するため、溝の部分では床面が遺存していない。(検出状況) 15号溝調査中に東側炉石にあたり、住居址の存在が判明した。拡張して住居全体の把握に努めたが、西側は表土から没する、また崖となって落ちているため、床は残っていない状況であった。また炉北側に大きな株があり根が床面まで達していたため、炉北側は擾乱状態である。(形状・規模) 楕円形か。炉が中央奥壁寄りに位置し、また南側正面に坪甕1個がある

(1・9)。柱穴は2本確認。(覆土) 中央から西半分は住居址巻上がほとんどないと思われる。炉南側に焼土が薄く堆積した面があった。炉石レベルから考えて、この焼土面直下が当時の床面と思われる。(遺物出土状況) 東側半分を中心に上器が出土した。2・3がそれそれまとまって床面付近から出土。(床) 西半分では軟弱。その他も硬化した部分はない。(柱穴) P1・2が主柱であろうと思われるが、P2はやや疑問である。その他の柱穴は遺存していないが、4本主柱であろう。(伊) 107×98cm、深さ55mmの切りごたつ状の方形石門炉である。南・東側は残るが、西・北側はない。正面の炉石には上が平坦で大きな石を用いている。東側炉石に接して11の異形自然石が出土。炉底はドーナツ状に赤変・硬化していた。また炉石をはずして炉掘り方を調査したところ、炉の東側にもう1ヵ所のドーナツ状変形があり、旧炉であろうと思われた。また炉正面の焼上は地床炉か。(壁溝) なし。(その他の施設) 墓葬が1箇埋設されている。底部付近を欠く深鉢形土器を正位埋設したもの(1)で、内部に別個体の鉢形十器底部付近を入れ子にする(9)。調査時点では別個体とはわからなかった。(遺物) 曽利田式期が主で、加曾利B式をともなう(2)。石器は凹石1、石礫1のほか、手のような形をした異形自然石がある(11)。加工痕はないものの滑らかで、祭祀的な感じを受ける。(時期) 曽利田式期。

27号住(第26・90回、図版18・67)(位置) P14・15グリッド。南台地上。(重複) 南東側に現代の林道が通過しているため、のり面で深く削られている。(検出状況) 土表剥ぎ中に炉の石組みを発見。切り株が炉北側にあり、炉石だけはよく保護されていた。(形状・規模) 圓形プランと思われるが、約3分の2を欠損しており、また地表から床までがごく浅いため、確定ではない。現存主軸長4.2m×推定交軸長4.8m。(覆土) ごく薄い。(遺物出土状況) 炉体土器以外はほとんど土器片が出ていない。(床) 西側は立木の根等による攪乱で荒れた状態であり、床面はほとんど遺存していない。(柱穴) P1・2が生柱穴と思われるが、あまり明確ではない。他の小ピットは根などの穴である。全体では6本柱穴か。(伊) 87×97cm(炉石を含む)、深さ25cmの方形石廻い炉窯炉。炉は4個の安山岩を土に使用して組んでおり、奥壁側の右は平板な石を立てているが、それ以外は棒状の滑らかな石を平置きして用いる。方形石門炉の事例としては曾利I式期では珍しく、曾利II式期以降につながる炉形態の先駆例であろう。とくに奥壁のみ立てている点は興味深い。炉中央に胴下半を欠く埋甕炉(炉体土器)が正位で設置されている(1)。炉底より浮いており、また土器内外には焼土層・炭化物層などはない。炉石側面(北側の炉石では上から8cm程度)・炉石上面は良く赤変していた。(壁溝) 西側に一部幅広の埋溝がある。北側では確認できなかった。(壁) 明確なものではない。(その他の施設) なし。(遺物) 5単位の胴部文様をもつ炉体土器(1)、十器片のほか、凹石1があるのみ。(時期) 曽利I式期。

28号住(第26・27・91・92回、図版18・19・67・68)(位置) 南台地上。N・O14・15グリッドで、27号住西に隣接。(重複) 東南側に林道が通り、住居の壁の一部をのり面で削られている。また住居内炉西側に408号ピットが重複している。ただし、住居内出土遺物と408号ピット内出土遺物との接合事例が数例認められるので、408号ピットは住居と一緒に可能性がある。(検出状況) 重複による表土剥ぎの段階で遺物が多く出土したため、上色の違いで住居と認定し調査を始めたところ、切石がでて確定した。しかし柱穴・礫がなかなかわからずに苦心した。(形状・規模) 圓丸六角形に近い円形。推定主軸長4.1m×推定交軸長4.8m。炉は中央奥壁寄りにある。(覆土) ごく浅い。(遺物出土状況) 住居内全体に散在して出土した。接合状況は408号ピット+住居内側のはか、距離のある接合が多数認められる。そのほか西側周溝付近から14が横位で出土した。(床) はっきりしない。炉石ののる面が床であろうが、柱穴探しのために相当床を下げている。(柱穴) 柱穴としてP1~7がある。P1・3・4・5・7が主柱で、おそらく6~7本主柱であろう。ただ炉裏にはカラマツの根があり、炉裏の柱穴の有無は不明である。(伊) 線3個が並んでいるが、本来は円形、あるいは梢円形石門炉であろう。炉石は平置きしたもので、炉内掘り方は浅い。(壁溝) 北側・西側にかけて壁溝がある。浅く、不明確である。(壁) 北側には壁がかろうじて遺存しているが、南側にはほとんど残っていない。なお炉内よりオニグレル・炭化核6片が出ている。(その他の施設) 408号ピットは住居内貯蔵穴などの特殊施設の可能性がある。(遺物) 破片では井戸尻式かと思われるものがあるが、土体は曾利I式期。1は水差把手付深鉢で、正面の把手を左側面にして固定化した。おそらく4単位の把手をもつ。把手部はなぎ状を呈し、中空で、正面に2孔、両側面に3孔づつ、内面に1孔が開く。調節部が少ないため、高さは不明である。一般に、この手の上器が住居内から出土することは希で、1遺跡から出土する個体数も多くはなく、また把手だけが单独で出ることがある。3も変わった器形である。特殊遺物として十製スプーンがある(18)。石器は打斧3、横刃形石器1、凹石2がある。(時期) 曽利I式期。

30号住（第27・93区、岡版19・20・69）（位置）N・O17・18グリッド。南側台地上。（重複）29号住（平安）に切られ、34号住を切る。（検出状況）じょれんがけの際に炉が出たため、プランを後から探した。当初プランはわからなかったが、炉石面を床とみなして柱穴探しをし、壁を決めた。（形状・規模）円形で、炉は中央奥寄りにある。炉裏の柱穴と炉を通るラインを土軸とみなすと、炉も主軸方向を向く。土軸長4.9×推定交軸長4.7m。重複によって約3分の1は欠失している。（覆土）浅い。（遺物出土状況）全体に少ないが、P 4脇には完全な深鉢形土器が斜位で出土した（1）。壁溝の浅い凹みに置かれた状況である。重複したビット中の埋置土器の可能性もないわけではないが、住居に伴うものと考えてよからう。土軸線からは多少ずれているものの、埋甃的な機能も想定できる。（床）硬化面はない。（柱穴）壁溝中の多数のビットのうちP 1～5を主柱とみなした。P 1・4・5については柱穴として安定しているが、P 2・3はやや浅く、またP 2の場合、柱穴としては内側に寄りすぎた感じがある。全体では7本主柱の住居であろう。（炉）7個の炉石を平置きした横円形、あるいは長方形石垣炉。炉内に焼土層はないものの、炉石は良く被熱していた。炉の規模は100×88cm、深さ27cmで、住居の主軸方向に長いという特徴がある。想像をたくましくすれば、7個の様が仕掛けプラン、柱穴配置と対応しているように見え、炉自体が住居構造を象徴するように見える。（壁溝）柱穴をつなぐように幅広の壁溝が全周する。ただ通常の壁溝とは違い、漠然としたものである。（壁）壁溝から緩やかに立ち上がる。（その他の施設）P 3脇に立石状の石が出土した。（遺物）1は壁溝中出土の上器。石器は打斧1、横刃形石器1、剝片1、磨斧片1、石鎌1である。また十隅鶴部片が1点出土している（出土地点は不明）。（時期）曾利I式期。

31号住（第28・93～101区、岡版20・21・69～75）（位置）N・O18・19グリッド。南台地上。（重複）なし。（検出状況）じょれんがけ中に土器が多量に出土し、土色の違いで住居を設定、調査を開始。上器の集中域を当初住居プランと考え、柱穴を確認しながら確定していった。（形状・規模）横に長い横円形。P 1・7間に中心とP 4を結ぶラインが土軸線である。土軸長5.8×交軸長6.4m。炉は中央奥寄りにある。主柱穴は7本。（覆土）浅い。P 7北側には焼土が床面からやや浮上して堆積していた。（遺物出土状況）住居中央を中心に5.2×4.0mの範囲で土器が集中。とくに炉の南側に多い。炉南側では床面近くに、また北東・北西側では浮上して出土し、個体ごとにまとまって出土したものが多いた。炉内からは炉にはめ込まれたように丸石が出土した。住居廃絶時に炉・住居の使用停止を意味するために炉を封鎖したのか、あるいは丸石祭壇の中で意味があつて入れたのかはわからない。偶然でないことは確かで、たいへんおもしろい出方であり、類例も知らない。（床）硬化面はない。（柱穴）P 1～7の7本主柱。柱穴間距離はP 1～P 2間2.8m、P 2～P 3間2.2m、P 3～P 4間2.0m、P 4～P 5間2.1m、P 5～P 6間1.8m、P 6～P 7間2.1m、P 7～P 1間1.6m。深さは51～69cmと安定している。P 2・3にはそれぞれ建て替えかと思われるビットが重複するが、他には見られない。（炉）炉石6個を平置きした円形、あるいは方形石垣炉。炉の規模は100×99cm。炉内よりオニグルミ炭化核6片が出土。（壁溝）主柱穴の外側10cm位のところ、あるいは柱穴に接して今周する。壁溝はあまり明確ではなかった。また壁溝中にはほぼ一定の間隔で小ビットがある。12～13本ほどが1.1m～2.1m間隔で並んでいる。深さは10～35cmと浅いものである。（壁）壁溝から緩やかに立ち上がる。（その他の施設）P 8からは石鎌2（82・83）、凹石1（74）、珪質頁岩フレイクが出土しており、貯蔵穴等の施設である可能性がある。（遺物）土器は多量で、岡化した上器は46点。梢円区画の多段構成をもつなど井戸尻式深鉢形土器（15～17・19）、曾利I式期の縦位条線文深鉢形土器（1～9・21～31・38・40）、繩文地紋土器（14・41）、無文土器（35）、鉢形土器（43）、車形土器（20）、浅鉢形土器（45）、台形土器（46）がある。大形上器に井戸尻式土器が多く見られる傾向があり、器種によつて古手の文様を残すものがあるのか、または貯蔵用土器は煮沸用土器よりも寿命が長いためこうした現象が起つたのだろうか。45は胎土中に地元ではみられない結晶片岩を多く含み、評馬方面からの流入が想定できる。石器は40点あり、打斧14、四石10、磨石2、横刃形石器が4、丸石2、石鎌6、石鎌1である。（時期）曾利I式期。

32号住（第29・102～105区、岡版22・23・75～77）（位置）N・O21・22グリッド。南台地上。（重複）なし。（検出状況）十色の美しい、遺物の広がりで住居プランを設定し、柱穴・壁溝を検出しながら設定し直した。西側約半分は岡化区外のため未調査。（形状・規模）全掘していないので形状・規模ともに明らかではないが、主軸長6.0m×推定交軸長5.4m（現存交軸長3.9m）の横円形、あるいは隅丸八角形に近い梢円形であろう。炉の向き、および炉とP 4を通るラインを主軸線と考えることができる。（覆土）深さ58cmと同時期のはかの住居に比べると深い。全体的に炭化壁が多く認められた。（遺物出土状況）炉南西に曾利I式の大形深鉢が床面上に伏せ

た状態で出土し(1)、胴～底部は東側へ倒れていた。炉南には小形深鉢が出土した(3)。また炉の北側には深鉢が(2)、北東コーナー部からは無文の深鉢が出土している(9)。このように点数は少ないものの復元可能な個体がまとまっていた。それら以外は小破片である。(床)全体に硬化面がなく、炉石面レベルを床面と考えた。

(柱穴)深めのビットが多数あり、十柱穴の認定は難しいが、P 1～4 が主柱穴で、全体では P 4 を炉裏の主柱として 7 本であろう。P 1～4 はいずれも 58～61cm と安定した深さである。また柱穴間距離は P 1～P 2 間 2.0 m、P 2～P 3 間 2.3m、P 3～P 4 間 2.3m である。(炉)主に炉石 7 個を長方形に平置きした石四炉。主軸方向に炉の主軸を合わせ、30・31号住と同様に正面には 2 個の礎で焚き口部をしている。規模は 124×77cm、深さ 20cm。炉底には焼土層が、また炉南側には床面上に焼土が堆積していた。床面で地床炉的に燃焼して生じた感じではなく、炉から撒き出したような状況であった。また炉石は東西两侧と南側炉石がよく被蒸・赤変していた。また北側の炉石は表面が全体によく磨かれていた。(壁溝)柱穴をつなぐように幅広で浅い壁溝が全周する。30・31号住に類似した構造である。(その他の施設)炉裏に貯蔵穴状のビットがあり、覆土中から大形の炭化材が出ている。ビット自体が住居と同一時期かどうか不明ではあるが、そばの床面からも炭化材が出ており、一応同時期の住居内遺構とみなした。また炭化材の樹種判定を行っている。火災住居の可能性もある。(遺物)13点図化しているが、II・III は夏期である。縦位条線文上器(1・2・6・8・10)のはか、繩文地紋上器(3)、無文土器(9)がある。9 の器形は曾利 I～II 式期のものであり、文様を完全に省略した珍しい土器である。1 は長胴で、胴部文様に人体文を 2 単位持つ。また頭部文様帯には X 字把手の初剖的な小把手が 4 単位付けられているのが注目される。石器は打斧 3、凹石 8、フレイク 1、石錐 2、石錐 1。(時期)曾利 I 式期。

33号住(第30・105・106図、図版23・78)(位置)N・O15・16グリッド。南台地上。(重複)28号住とわずかに接する。(検出状況)28号住調査中に、壁外からも上器片が出ることがわかり、再度遺構確認を行った。シム部を半截したところ炉石にあたり、住居の存在がわかった。当初プランは全くわからなかったが、柱穴を確認していく中で確定した。(形状・規模)円形で、主軸長 5.5m × 外輪長 5.2m。主柱穴は 7 本。炉は中央奥壁寄りにある。(覆土)浅い。(遺物出土状況)住居内周辺部に散在。P 8 は現代の擾乱および小動物の巣穴による擾乱を受けたビットで、カラマツの丸太が埋められていた穴であるが、その北壁に貼り付くように 1 個体の土器があつた(1)。それ以外は小破片である。(床)硬化面はない。(柱穴)P 1～7 が土柱である。深さは 47～65cm と安定している。柱穴間隔は P 1～P 2 間 1.6m、P 2～P 3 間 1.6m、P 3～P 4 間 1.5m、P 4～P 5 間 1.6m、P 5～P 6 間 1.6m、P 6～P 7 間 1.6m、P 7～P 1 間 1.5m で、ほぼ 1.6m の梁間をもっている。柱穴は壁面より 10～40cm ほど内側に配置している。(炉)5 個の石を円形に平置きした石四炉。規模は 90×90cm、深さ 15cm。石は全体によく被蒸している。(壁溝)全周する。(壁)壁溝下端から緩やかに立ち上がる。(その他の施設)なし。(遺物)上器は少ない。主に縦位条線文土器であるが、1 は地紋の条線を略した土器である。特殊遺物としてミニチャウ(15)が北東壁隣付近から、土鉢(16)が南側から出土した。土鉢は無文完形で、孔が 1 つ開く。X 線観察で 6 個程度の土塊が入れられていることがわかった。石器は打斧 2、フレイク 1、凹石 1。ほかに黒曜石製石核状石器 1(未図化)あり。(時期)曾利 I 式期。

36号住(第30・106図、図版24)(位置)Q16・17グリッド。南台地上。(重複)ビットが西壁に接し、林道が南側を通過しているため、のり面で切られている。また北東側は調査区外となっており、住居としたら全体の 3 分の 1 程度であろう。(検出状況)土色の違いで設定したが、住居として確認できない。(形状・規模)不明。(覆土)きわめて浅い。(遺物出土状況)上器は床面近くからはほとんど出でていない。丸石状の礎が 2 個寄り合って出ているが丸石ではない。(床)硬化面はない。(柱穴)柱穴らしいビットは 1 カ所のみ(P 1)。(炉)なし。(壁溝)西壁の一部でそれらしい溝が出ている。(その他の施設)なし。(遺物)土器は少量で、石器は打斧 1、剝片石器 1、凹石 1。(時期)不明。

4 繩文時代後期の住居址(16・17・18・19・21・26・35号住)

16号住(第31・106～108図、図版21～26・78～80)(位置)F42・43グリッド。木田面に面した西向き斜面で、現状ではかなりの傾斜面である。(壁)なし。(検出状況)土色の違いと、一度見えていた鉄平右の敷石で敷石住居と判断。農道に西側を切られるため、推定出入り口部付近は崖上が薄く、床面付近まで擾乱されていた。(形状・規模)主体部は円形で、ほぼ中央に石四炉窯がある。また壁溝中に柱穴が配置する。農道による擾乱

で出入り口部の施設の有無が不明確であるが、短い突出部があると思われる。推定主軸長4.4m×交軸長4.0m。土礫繩は、通常いわれるように斜面の低い方向（等高線と直交する低い側）を向く。（覆土）褐色粘質土中の構築であり、繩は非常に硬くしまる。壁面には地山中の繩が多數露出する。覆土は山側では良好に残り、奥壁部では深さ45cmもある。しかし西側は浅い。（遺物出土状況）柱上中から多量の上器片が出上している。また丸石が敷石面から約5cm浮上して出土した。また敷石の一部も原位置から移動して覆土中に存在した。（床）壁面の内側に、壁溝に接するようにして鉄平石を主に用いた敷石が敷設されている。本米は全面に敷設された可能性があるが、現状では左右の壁近く、奥壁へ炉、炉の両脇である。炉の左右空間を無敷石部として意図的に敷設しなかった可能性もある。出入り口付近には散乱のせいもあって遺存していない。主な敷石は安山岩の鉄平石であるが、積み石的な繩は安山岩円錐などを主に用いている。敷石表面を観察すると、全体的に研磨されたものが多いことに気づく。研磨の多くは表面のみで裏面は自然面であるが、裏面研磨した繩もある。詳しくは第5章第4節を参照。（柱穴）壁溝内および出入り口部付近に多数の小ビットがあり、主体部で柱穴と考えられるものはP2~11、山入り口部ビット（対ビット）と思われるものがP12・13である。主体部柱穴は直径15~20cmと細い。深さ30~50cm程度のP3・5・6・7・8は柱穴で間違いないが、P4は浅く不確定である。また北壁の柱穴は明確でない。柱穴は全体に垂直に掘られていた。（炉）4枚の石を組んだ方形石四埋葬炉で、内部に深鉢底部を埋設した炉体十器がある（24）。炉石は南側を除き被熱し、炉体十器周囲には焼かれたドーナツ状にみられた。炉の規模は85×76cm、深さ42cm。炉体土器の大きさは直径22cm、高さ11cm。右門炉中の土壌を採取して洗浄したところ、サザゲ藻の炭化種子片が2点あり、栽培種である可能性が指摘されている（第4章第1節1参照）。（壁溝）壁直下に幅の狭い壁溝が土体部をほぼ全周する。北側を除き明確に検出された。（壁）壁溝からの立ち上がりは急である。ビット外側を空間利用する余裕は全くない。（その他の施設）出入り口部施設に関わるかと思われる横にのびた溝が右側にある。左側では支縫の金具が打ち込まれるなどの搅乱のためによくわからない。（遺物）土器は無文破片が主である。中期末（19・20）、後期初頭（10）のほかは後期前半である。全体に土色が悪く、ぼろぼろする。石器は11点あり、石錐1、砾石1、凹石4、磨石1、丸石1、石礫3。（時期）堀之内1式期。

17号住（第32・109・110図、図版26・80・81）（位置）E・F40・41グリッド。水田に面した西向き斜面で、農道に半分程度切られている。16・18号住の間に位置し、16号住から7m、18号住から5mの近接した場所にある。これらの住居はいずれもほぼ同じ等高線上に直線的に並び、等高線に直交する低い方向へ主軸方向を向けるという立地である。（重複）農道に切られる。（検出状況）遺構確認の際に繩を伴う半円形の暗色のプランが確認でき、住居と判断した。（形状・規模）円形の主体部を持ち、壁柱穴に沿って繩を並べた敷石住居である。炉から出入り口側にかけては農道のために遺構は消滅していた。主体部は現存主軸長2.3m、推定主軸長3.5m、交軸長4.5m。（覆土）黄色粘質土中の構築である。16・18号住同様、山側では厚いが谷側では薄い。壁際に並べられたと思われる繩が炉付近まで散乱して広がっていた。大小不揃いの安山岩礫を用い、いくつかの凹門も見られた。それらを取り上げたところ床面とと思われるレベルで鉄平石を中心には平坦な繩を柱穴間に並べた部分敷石が見つかった。柱穴を直線的に結んでいるため、全体では多角形的な配置である。（遺物出土状況）繩と同レベルで小破片化した土器片があった。量はさほど多くない。（床）硬化した床面はないが、部分敷石が柱穴を結ぶように並んでおり、床面レベルを知ることができる。敷石は南側と北側に鉄平石を並べ、東側では小繩を並べている。（柱穴）ビットは大小あわせて計17本あるが、うち柱穴と考えられるものはP2・3・6・8で、P1も可能性はある。炉とP8を組んだ主軸線を中心に左右対称的に並ぶものと思われ、本来7~9本程度の柱が考えられる。径は25~30cm、深さは33~47cmで、40cm台が多い。P6をはじめ、内傾するものがある。壁柱のひとまわり内側にビットがあり、逆に替えて並ぶ可能性もある。（炉）方形石四埋葬炉で炉体土器をもつ。炉石は東・北に遺存し、4枚の板状の繩を垂直に立てて組んでいる。炉体七繩は炉底に繩を出すようにして正位埋設された深鉢底部付近で、被熱のために内外ともに脆弱であった。炉内覆土の西側大半は農道で削除されていたが、東側の炉体土器周囲および炉石を越えた掘り方内には焼上が多く堆積していた。炉の改修を示すものであろう。（壁溝）なし。（壁）上端から柱穴に向かって緩やかに移行する。（その他の施設）なし。（遺物）図示した上器は2の炉体上器を除きいずれも小破片である。I・2は外面無文で荒い調整痕をもつ粗製土器である。石器は凹石6、磨石1、磨斧1、剥片石器2、石礫2（うち1点は木炭化、黒墨石製）。23の磨斧は身近な安山岩を用いたもので、当磨斧としての機能を果たし得たか疑問である。（時期）堀之内1式期。

18号住（第33・111・112図、図版27・81・82）（位置）E・F38・39グリッド。17号住の南側に位置する。やはり

農道によって東半分を切られ、かろうじて炉体十器が残っていた。(重複)なし。(検出状況)やや大形の礫のまとまりを伴う暗色の半円形フランが確認でき、住居と認定した。(形状・規模)円形土体部の半分で、16・17号住と同じく主軸方向(出入り口方向)を斜面の低い西側へ向けた住居であろう。主体部は現存主軸長2.4m、推定主軸長4.0m、交軸長1.5mで、17号住とほとんど同規模である。(覆土)粘土質の礫層中に掘り込んだ堅穴住居で、周囲には礫が多数露出している。覆土は山(東)側がやや厚く、西側では炉体土器を境に削られている。炉の東側に径30~40cmの大形礫が数個まとまっており、被熱・赤変したものが多い。また壁際には小砾をまとめた配石が広がり、それらの中には円石を中心ぐ右器が7個ほど見られた。さらに床面に並べられたと思われる配石が北東側の壁際に一部見られた。鉄平石を含む平たい安山岩小砾で、柱穴を結ぶように検出された。(遺物出土状況)覆土中を中心に小破片化した土器が見つかっている。(床)硬化面はない。(柱穴)5本のピットが出ている。そのうちP2・3・5が壁柱と思われ、P1も可能性がある。多くが内傾する。柱穴配置は奥壁主軸線上に1本、左右に複数の壁柱を配した7本程度の構造であろう。柱穴は径30~40cm程度、深さ36~77cmで、P2・5は60cm台と同規模である。P2・3間、やや内側に直線的に小砾を並べた配石がある。(炉)農道のために炉中央付近まで撤去が及んでいる。素掘りの炉内に径30cm、高さ10cmの深鉢脚部を埋設した埋甕炉であるが、本来は他の住居同様に方形石脚埋甕炉と思われる。ただ炉石の抜き取り痕はない。また焼土は掘り方内壁土中に多く見られた。炉体土器は通常底部付近を用いるものが多いが、底のない輪切りの胴部を使用する点が特徴的である。なお炉内2層中からは焼骨片が少量検出されたが、小片のため同定は不可能であった。(壁溝)ない。(壁)緩やかに傾斜した壁で、下端は柱穴付近に達している。(他の施設)なし。(遺物)1は炉体土器で、被熱のために脆弱である。2は小形の深鉢で、細片化した破片がまとまって接合した。右器は打斧1、円石3、磨石?1、石鉗2、石皿1、石礫3である。(時期)掘之内式期。

19号住(第33・112~115図、図版27~29・82・83)(位置)G・H26・37グリッド。16~19号住と同地形の西向き斜面。(重複)北壁に接して395号ピットがあり、壁の一部に重複する。(検出状況)黒色上の広がりが確認でき、敷石が一部露出したため住居とした。(形状・規模)隅丸方形に近い稍凸形の土体部で、炉から出入り口部に向かって廊下状の敷石をもつ敷石住居。藍柱穴が巡る。出入り口付近は柄鏡状に短く突出する。さらにその先に浅いピットが対になり、ハの字状に出入り口部を構成するようにも見えるが、住居との関係は確実ではない。主軸長3.9m、交軸長3.7m。(覆土)覆土上には炉と奥壁の間に、床面から浮上した礫がまとまっていた。18号住などで見られた礫の出土状況とはほぼ同じである。(遺物出土状況)炉東側の礫直下、ほぼ床面直上に完形の注口土器(9)が正面で出土した。礫の圧力で潰れていたが、礫を直接土器に載せたような割れ方ではなく、ある程度の覆土堆積を経て礫が投棄された状況である。また炉北側には同じく床面直横位に潰れた深鉢(5)が出土した。このほか円口十唇周囲には四石2、小形石縁片1が床直通として存在した。生活時の土器類のあり方、1軒の住居が保有する土器数を小窓する方面である。そのほか出入り口部対ピット中には、向かって右(南)側に左(北)側に浮子状石製品が覆土上層中から出土している。(床)粘土質で乾燥すると非常に硬くなる。しかし床面としての硬化面は見いだせなかった。床面には焼土粒・炭化粒を多く含んだ黒色土が厚く広がり、焼土は出入り口部左右の空間、特に左(南)側に多く、炭は炉奥(東側)に多い。掘り方の上に床上あるいは貼り床として焼土を敷いたか、あるいは床面を人為的に焼いた後に上層を構築した状況と推定できるものの、調査過程でははっきりしなかった。なお床面上や柱穴中には建築材としての焼成材ではなく、火災住居とは考えにくい状況であった。敷石は炉と出入り口を結ぶ幅40~60cm、長さ1.4mの敷石で、鉄平石の平石を並べて、隙間に礫を充填している。壁際には特に配石・敷石はない。なお東壁寄り周辺付近の炭化材を同定したところトリニコ属で、“C年代測定の結果、3,740±110BPという結果が得られた。(柱穴)土体部には壁柱が壁下端に巡り、浅い壁溝が連絡する。主軸線上の炉裏に1本あり(P5)、主軸線を中心に左右に4本を配し、計9本がある(P1~9)。いずれも怪の小さな小規模のもので、計15~40cm、深さ19~41cm。また出入り口施設として敷石の両脇に対ビットがある。連結した2・3本の柱穴であり、径は藍柱穴よりも大きい。(炉)方形石脚埋甕炉で、炉体土器は口縁の大半を欠損する深鉢形土器である。上器の口径は27.8cm、高さは21.8cm。炉内上部を洗浄したところ焼骨片が少量出ている。(壁溝)床面精査時には一巡するごく浅い壁溝を確認したが、焼化した床面を下げていくなかで次第に消滅した。(壁)非常に緩く立ち上がりしており、特に東・南側では段状になっている。(他の施設)なし。(遺物)1は炉体土器で、被熱のために器面は脆弱である。3は加普利B1式と思われる土器で、横帯文や内面の沈線が成立している。5・9は床直の深鉢と注口土器で、両者とも器面が被熱したような形跡をもつ。5は粗製で、器面の調整は荒い。表面は黒色処理された感じがある。9は丁寧に作られており、内

外面には黒色処理が施されているが、胎土・焼成が悪く、脆弱である。口縁と同じくらいに立てた注口部、靴窓状把手、鋸歯状の簡素な沈線文に特徴がある。7は粗製土器。また蓋(19)、土製スプーン(20)も出ている。石器には打斧1、凹石6、磨石1、浮子状石製品1、玉2、小型石棒1、石錐6がある。(時期) 堀之内2式期。

21号住(第34・115~118図、図版29・30・84・85)(位置) H・131・32グリッド。西向きの緩やかな傾斜面。
(重複)なし。(検出状況) 焙への取り付け道路が北側にかかり、上層は硬くしまっていたため、当初は存在に気づくことができなかったが、再度の遺構確認で調査区西端に筋のプランを確認し、調査に入った。西側は調査区外にかかり、さらに農道のり面によって削られているため、住居西側の遺存状態は悪かったが、遺構の残り具合を見ながら調査区を拡張して調査した。(形状・規模) 不整形ないしは橈円形の主体部をもつ数石住居。出入り口部付近は遺構が遺存せず、構造の把握はできていない。現存主軸長は3.52m、交軸長は4.20m。(覆土) 床および壁際には敷石が床面レベルで敷設されており、浮上した覆土中の磚は炉周辺に数個集まっているほかは頗る石礫出上はない。(遺物出土状況) 小破片を中心に、床面に近いレベルに遺物が見られた。また縁石中には凹石・磨石が多数使用されていた。床材として転用されたものと思われるが、一時的な片づけによって、壁際につかれたものもある。また炉裏奥壁寄りの敷石上から小型の丸石が出土し、16号住の出土状況に類似している。ほかに奥壁寄りには、縁石の敷石よりも外側、または敷石に接して特殊遺物である十脚腕片、玉が出土した。

(床) 炉を中心として隅丸方形形状に縁石状の敷石が並べられ、炉裏のスベースに炉から煙まで連続した敷石面がある。19号住の敷石のあり方とは逆転している。機して小形の安山岩自然砾を縁石に用い、奥壁側には中形の鉄平石を用いている。また炉裏には非常に大きな、重量感のある平頭な1枚の安山岩磚(重さ96kg、鉄平石ではない)を敷設し、周囲に砾を充填している。住居内における場のあり方を伺わせる敷設状況である。敷石、炉石の接合事例は5例認められた。また縁の被熱、磨り面はほとんどの敷石で観察されている。敷石のない部分は上層であったと思われるが、硬化した床面はない。(柱穴) ピットが壁際に大小合わせて23本ほど検出されたが、そのうち柱穴と判断できるのは縁石外側に接して検出できたP1・3・4・5・7・8・9・10・11・12であろう。またP1・8は出入り口部に開わる対ピットの可能性がある。ピットの規模は人小あり、架は30~40cmほどであるが、その中でP10は浅く、不確実である。ピットの配列は奥壁主軸上に1本(P5)置き、左右対称に数本配置している。(炉) 主体部中央にある。方形石圍炉であったと思われるが、いくつかの砾が動いており、現状では方形らしくない。他の後期住居が板状の砾を方形に組んでいたのに対し、この炉は丸みのある砾で囲んでいる。中央には無文粗製深鉢の体部下半を埋設した炉体土器がある。上器内外には明確な焼上層の堆積はない。炉体土器は径20.4cm、高さ19.5cm。炉内上部の洗浄によって焼片が少量出ている。(壁溝) 奥壁側でピットをつなぐように浅い溝が出ていている。ただし明確ではない。(壁) 緩やかに立ち上がる。(その他の施設)なし。

(遺物) 1は荒いца痕が窓に残る粗製土器で、炉体土器。1510g。2~7・9は口縁部・颈部に刺み目のある貼付縫線文が水平に一巡する上器で、7・9を除き丁寧な仕上げである。口縁部はいずれも短く内側に折れ、内面には一条の沈線的な凹みが巡る。3・4・6・7の縫線上には8の字状貼付文がつく。11・12は無文粗製土器口縁部。13~15は注口土器で、13・14は同一個体の把手部。16は小形後鉢で、4単位の波状口縁をもち、それぞれの波状部に3個の孔があく。内面には沈線文を施す。23・24は土偶片で、23はおそらく空中有脚立像の顔面部で、平面的な仮面状のタイプである。24については先端の5本の沈線を指の表現と見て、心臓と見なしておこうが、どのような形態の土偶になるのかわからない。石器は16点固化した。内訳は凹石8、磨石2、丸石1、石錐1、石核1、磨石1、長石1である。また特に使用痕はないものの棒状の安山岩自然砾が出ている(39)。26は玉で、軟質な滑石を用い、片方の側面にのみ縫に筋状の沈線が入っている。紐かけの溝か。(時期) 堀之内2式期。

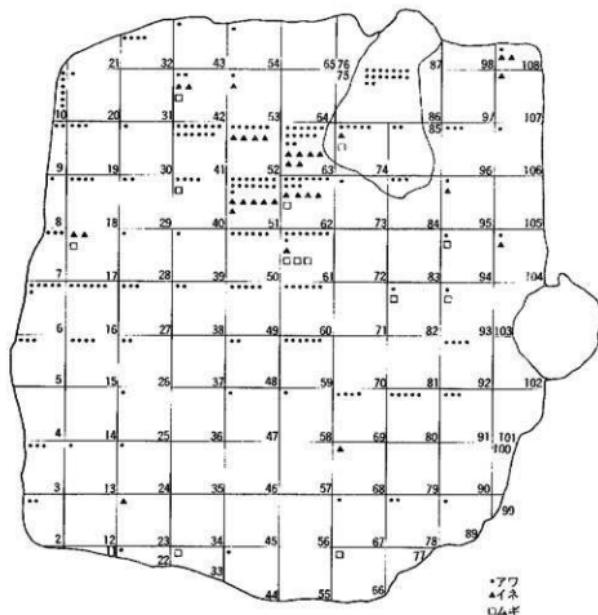
26号住(第35・119図、図版31・86)(位置) I・J 28・29グリッド。21号住の12.6m南側で、西向きの緩やかな傾斜面にある。(重複) 東側に20号住が接し、南側にも390号ピットが接する。(検出状況) 遺構確認中に礫・土器片が出土し、住居址とした。礫の分布域を壁際と考え、また炉体土器と思われる焼土をわずかに伴う土器底部が見つかったため、それらを手がかりに柱穴を探した。壁の立ち上がりは当初わからず、柱穴検出後に柱穴の外側に想定している。(形状・規模) 不整形もしくは半円形的な主体部。西向き斜面のため出入り口は西側と思われるが、耕作等により西側の床面は遺存しない。張り出し部は不鮮明で、それらしいピットがあるのみ。主軸方向は対ピットらしきピット間と炉を結ぶラインに想定できる。主体部主軸長は2.0m、交軸長は2.54m。主軸線は中央より北側に寄っており、南壁の位置が正しくない可能性がある。(覆土) 炉から東側にわずかに覆土

が残る。壁付近に礫が散在し、壁際の敷石が散乱した状況である。（遺物出土状況）双口土器が横位で出土したほか、出土量は少ない。（床）礫の下面付近に想定できるが、硬化面は確認できていない。（柱穴）主体部壁溝中に18本程度、壁溝内側に數ヶ所のピットがある。それらのうち柱穴と思われるものはP1・2の対ピットと、P3～8ぐらいであろう。振り出し部に伴うと思われるピットも対ピット西側にいくつか存在するが、確実ではない。（戸）上器下半部を埋設した炉体十器であるが、底部のみしか遺存していない。焼土もわずかな小ゾックがあるのみである。本来は石窯であったはずだが、そうした痕跡は全く確認できなかった。（壁溝）対ピットから左右にのびる壁溝があり、一心全周している。ただ検出状況では非常に不明確なものであった。（壁）周溝下端からだらだらと立ち上がる。（その他の施設）なし。（遺物）土器を5点、石器を2点回示した。1は炉体上器。2は双口土器で、十個の脚状に2本の断面横円形の脚が直立し、口縁部は欠損している。基部は連結し、結合部には孔が開いている。沈線中に連続刺突を施した文様が巡っており、図の正面、裏面とともに同じ文様が描かれ、どちらを正面として意識しているかはわからない。調整は粗雑で、ナデ仕上げされているのみである。6・7は礫中に混在した磨石・凹石。（時期）堀之内式期。

35号住（第35・119・120図、図版31・32・86）（位置）G・H34・35グリッド。21号住の北、8.7m。西向き斜面の農道脇に位置する。（重複）なし。（検出状況）調査の最終段階で暗色の遺構面と、敷石の一帯と思われる鉄半石を調査区域でからりとして確認し、急遽調査に入った。炉まで調査した後、西側へと遺構が続くことが確認でき、またピットもありそうだったため、調査区を一部拡張して全体の把握を目指した。しかし農道のり面のために西廻の状態は悪かった。（形状・規模）炉を中心で円形の主体部であったと思われるが、3分の2のみ検出した。主軸方向は傾斜方向と思われ、他の住居址例を参考にすると、炉とピット2を結ぶ線と考えられる。現状では主軸長3.4m、交軸長4.4m。（覆土）焼失家屋で、北側～東側にかけて焼上がブロック状に広く見られ、焼付付近には炭化材がやや多く見られた。炭化材は柱穴を連結する方向に遺存した。また敷石の一部や小砾が少數分布している。（遺物出土状況）無文鉢形土器が1点、北側壁付近の床想定レベルで横位に出土した。また炉東側で玉が出土している（11）。（床）焼土直下、敷石面付近が床面であろうと思われる。硬化面はない。なお炉北側よりオニグルミ炭化核39片が出土している。（柱穴）ピットは壁際、壁溝中に14本程度、内側の炉周辺に8本程度見られるが、壁溝中のP1～4が確実な柱穴である。直径20～25cm、深さ23～55cm程度で、小振りである。（戸）方形の振り方に胴下平を埋設した炉体十器が残るが、本来は方形し印埋甕炉であったと思われる。焼土は上器周辺に堆積し、内部にはなかった。炉石は全く残存していない。（壁溝）炉から東側の壁際には幅15～40cmの壁溝が巡っている。（壁）緩やかな立ち上がりを示す。（その他の施設）なし。（遺物）上器7点、石器5点を回示した。1は横位出土の上器で、ほぼ完形。710g。上から見ると、口縁部には5カ所の押圧があり、無文土器ながら5単位を意識している。丁寧なナデ仕上げが行われており、無文ではあるが粗製土器ではない。2は炉体十器。被熱のためひどくぼろぼろに荒れている。底部中央は割れているが、意図的な打ち欠きではなく、本来はあったはずである。（時期）堀之内式期。

第2節 平安時代の住居址（1・2・4～6・12・15・20・21・25・29・37号住）

1号住（第36・37・120～122図、図版32～34・86～88）（位置）D・E57グリッド。斜面から下がった平坦部に位置する。（重複）なし。（検出状況）一部調査区外へ広がって確認されたが、地権者の了解を得て拡張し全体を調査した。西側に向かって覆土が浅くなっていたため、西側のとくに南西隅は覆土が非常に薄く、プランは不明瞭であったが、それ以外は明確であった。（形状・規模）隅丸方形で、東壁中央南寄りに竈が設置されている。竈に対面する東西方向を主軸方向とすると、主軸長5.4m×交軸長4.6m。（覆土）床面中央やや南寄りに、焼土が床面より4cmほど浮上してブロック状に堆積している。床面直上層（2層下層）では炭化物も多く認められたため、床を精査する前に床面に50mmメッシュを組んで土壤採取をした。整理段階で水洗選別し、同定した結果、床面中央から北東にかけた範囲を中心にほぼ全休から穀物類の炭化歴の分布があった（第4章第1節参照）。住居址覆土の遺存状況の良し悪しで左右差しているようにもみえるが、一応数類の貯蔵場所を推定する手がかりとしたい。出土量の割合はアワ207粒（81%）、イネ35粒（14%）、ムギ類（オオムギ・コムギ・ムギ類）13粒（5%）であり、アワが非常に多い結果である。アワは粒径が小さいので、粒数だけでイネなどと単純比較できないものの、食生活の中で大きな割合を占めていたとの推定は可能である。ほかに床面上からササゲ属・マメ科炭化種子が8粒出ている。（遺物出土状況）竈南側に平たい大形の礫がまとまっており、その周辺や壁直上に土器部。



第152図 1号住内炭化穀実出土上状況

灰釉陶器が出土した。また竈内には数個体分の土師器残片があった。その他、床面より浮上して多数の礫とともに土師器頸が散在して出土した。また中央西北寄りに、床面よりわずかに浮上して鉄錐状鉄製品2点と剣状鉄製品2点が東ねたように重ねられて出土した。(床・掘り方) 床面精査の段階でピットがいくつか出ているが、それらは柱穴ではなく、床面上のシミを下げたものである。掘り方は16個ほどのピットの集合体である。ピットの覆土は主に黒褐色土で、施十粒や炭化粒、土師器片を含んでいる。深さは数cm～10数cmのものが多く、長径1～1.5mの梢円形を呈するが多い。ピットは全体にあり、偏在傾向は覗えない。中央には1.2×0.9m、深さ59cmのピットがあり、平たい多数の礫が隙間のないほどに詰められていた。集石内部に石組みはなく、特殊施設というよりは掘り方の一部に礫をまとめて充満した様子である。床面精査時に既に確認されており、いつの時点で作られたものか問題となるが、地山中には礫が含まれているために窓穴掘削の際に出た礫をまとめたものであろう。

(竈) 東壁や南寄りにあり、石組み竈である。焚き口部・煙道部を含めた規模は東西1.75m×南北1.05m、石組み部は東西0.9m×南北0.8m。袖石は一部二重に石列を並べ、煙に向かって3個ほどを立て並べ、さらにその上に平たい小振りの礫を積んで高さの微調整をしている。壁寄りには天井石1枚が遺存していた。焚き口部手前の天井石は遺存していないが、竈南側の東西南隅にまとまっていった礫が天井石などを片付けたものではないかと思われる。ただし現場で被熱度などを確認していない。竈内には長さ28cm、幅17×10cmほどの端部の平坦な礫を直立させた支脚石が遺存していた。水洗選別によって竈内からはアワ16粒が出ている。(壁構) 東・北壁では明瞭であり、北壁では幅18cm、深さ7cm、東壁では幅15cm、深さ6cmである。西から南にかけては不明瞭であり、壁構を探しているうちに掘り方にまで迷ってしまった。(壁) 東・北壁は明確で、周溝から直に立ち上がる壁である。(その他の施設) 東壁の竈寄りの部分が幅1.3m、奥行き12cmほどえぐれて段状になっており、棚状施設の可能性があるが、断定はできない。(遺物) 土師器類(1～4)、土師器皿(5～14)、黒色上器(内黒土器)(15～21)、灰釉陶器皿(22～24)、墨青土器小片(25～28)、土師器壺(29～39)、土師器小型甕(40)、小型ヨクロ甕(41)、須恵器腰岡部片(42・43)、砥石(44)、砥石状石製品(45)、鐵錐状鉄製品(48・49)、剣状鉄製品(50・51)、鐵釘(52)、鐵滓(55)のはか、縄文時代の遺物である石棒(46)、磨石(47)、石鎌(44)などが

ある。土師器壺・皿には通常の甲斐型土器（1～6・9・14）と、体部下半におずかにヘラ削りを行う7・8・11がある。また時期的に1段階後出技法である体部ヘラ削りがなく、底部糸切りのままのもの（10・12・13）が存在する。7・8・10～13は胎土に在地的な特徴をもつものがあることから在地産（北巨摩地方生産）の可能性があり、甲斐型と併存の可能性もある。灰釉陶器は3点とも刷毛塗りであり、美濃窯の光々丘1号様式期のものであろう。以上の食器関係の割合は図化資料だけで分析すると、甲斐型土器8点（33%）、（仮称）在地産土器8点（25%）、黒色土器7点（29%）、灰釉陶器3点（12%）である。土師器壺には厚口縁（29～31）、より厚く、屈折のない肥厚口縁（32）がある。異常土器は7点あり、甲斐型に3点、不明上師器片に3点、灰釉陶器に1点みられる。黒色土器はない。文字には刊読できるものに「申」（6）、「矢」（3）、「千人」（23）がある。灰釉陶器の24は高台部周辺を打ち欠いて高台内部を池部とした転用窓である。また48と49、50と51はそれぞれ良く類似した形態の鉄製品であり、類例を知らない。用途も不明である。刃部（先端）が鋭くなっているらず、48・49はマイナスのドライバー状であるし、50・51は板状のままであることから儀器的なものであろう。2種の異なる製品であるが、組み合って二対一式の製品であった可能性もある。48・49の端部は輪をめたようになっており、49には内部が孔状になっている。（時期）平安4段階（第5章第5節参照）。

2号住（第37・122・123図、図版35・88）（位置）C60グリッド。尾根状台地の南斜面から平坦部へ移行する中間の緩斜面に位置する。北側25cmには3号溝（近現代）がある。（重複）ないが現代の搅乱を受けている。とくに3号溝南側には溝に沿ったあたりに農道があったとのことで、段状に削平され、住居北側半分が影響を受けている。（検出状況）南壁・東壁は覆土が薄く、床面まで耕作が及び、プランは不明瞭であった。また住居西半分は搅乱により不明瞭である。（形状・規模）隅丸方形で、東壁中央南寄り、南東隅に近い位置に窓がある。土軸長3.2m×交軸長3.3m。（覆土）ローム粒を含む黒褐色土が堆積する。（遺物出土状況）東半分から主な遺物が出土した。また、竈北に接するピット（P1）から壁や底部に貼りつくように土師器壺などが数点出土している（2・3）。（床・掘り方）東側では軟弱な床面が確認されているが、西側では搅乱のためほとんど残っていない。数ヶ所の浅いピットが確認されているが、これらは桑などの根による搅乱である。北東隅の土坑状のピットも搅乱ではないかと思われた。（窓）東壁南寄りにあり、石組み窓と思われる。焚き口部・煙道部を含めた規模は東西1.1m×東西0.85m。袖石は北側に1個のみ直立している。天井石かと思われるものが1枚、焚き口部の焼土上面に落ち込んでいた。また、窓内より片断が赤化した焼土が2・3個出土しており、窓の石組みの一部と考えられる。焚き口部の南側には袖石を抜いたと思われる凹みがある。窓内には長さ34cm、幅12cmほどの半生な端面をもつ疊を直立した支脚石が遺存していた（10）。竈覆土は施土粒を含む黒褐色土、厚い焼土層、わずかに薄い灰層が堆積している。焼土層の上面に堆積する黒褐色土を2層に分けて採取し、水洗選別した結果、イネ1、ムギ類1、アワ1が出ていた。（壁溝）全般的に不明瞭で、西側では検出しているが、他はない。とくに北側には全く存在していない。（壁）北・東壁は明確ではほぼ直に立ち上がる。（その他の施設）なし。（遺物）黒色高台壺（1～3）、黒色土器壺（4）、土器壺（5）、上師器壺（6・8）、羽釜（7）、須恵器壺（9）、支脚石（10）などがある。墨書き土器は1に「成」とある。食器は黒色土器壺を中心であり、煮沸具は在地的なナデ調製の甕、羽釜である。甕・甕類に甲斐型が極端に少ないのが特徴である。（時期）平安4段階。

4号住（第38・123図、図版35・89）（位置）D58-59グリッド。南斜面から平坦部への傾斜変換点にある。（重複）9号溝に南側を切られているが、床面はかろうじて遺存している。東側は調査区外に延びており、完全な調査はできなかった。（検出状況）9号溝確認中、東側において不明瞭ながら北・西側のプランを確認した。南側を切る9号溝の完掘後、住居全体の調査を進めた。調査の途中、明確な北・西壁が検出され、プランの修正を行ひながら完掘した。北東コーナーと東壁は調査区外へ続いている。窓は調査区外にあるらしい。（形状・規模）隅丸方形と考えられ、現存する規模は南北5.0m・東西4.7m。（覆土）大部分を9号溝に切られ、多量の焼土が東西方向に一部並んでいた。37号住付近でも同様な石列が見られ、溝に沿って礫を並べて烟焼としたようである。下層（3・4層）にはローム粒・焼土粒・炭化物粒を少量含む黒褐色土が堆積し、住居覆土と思われる。上層のかなり高い位置から施土層が出ており、溝に伴うものであろう。（遺物出土状況）住居南側床面から少量の遺物破片が出土した。全般的に出土量は少ない。（床・掘り方）9号溝の下から非常に硬化的した床面が検出され、床面上は広く焼土化している。とくに南東側に多く見られた。ただし大型炭化材はない。（窓）他の住居址の状況から東側に推定できるが、調査区外のため検出できなかった。焼土分布が東側に濃く、竈が近いように思われた。（壁溝）北・西壁で確認された。北壁幅18cm・深さ3cm、西壁幅20cm・深さ7cmである。東壁・南壁は不明で

ある。（壁）北・西壁は明瞭であり、窓溝からほぼ直に立ち上がる。（その他の施設）北西隅にタスキ穴状のビットがある。掘り方の一部とも考えられるもので、大きな蝶の脇まで掘り下げている。覆土はぼそぼそであった。

（遺物）上師器坏（1～3）、黒色土器（4）、土師器蓋（5）、土瓶器蓋（6・7）、紙石（8）などがある。木造跡内の平安時代遺構中では最古段階の土器群で、甲斐型の杯底部堅が大きいことが特徴的である。（時期）平安1段階。

5号住（第39・123・124図、図版36・89）（位置）C・D65・66グリッド。尾根状台地の南縁辺部に位置する。（重複）細かな溝が上面に重複するが遺構にはほとんど影響していない。（検出状況）一部東側調査区外へ広がって確認されたため拡張し、全体を調査した。全体的にプランは明瞭であった。（形状・規模）東西方向に長軸を持つ隅丸長方形で、東壁中央寄りに窓がある。主軸長5.1m×交軸長4.0m。（覆土）炭化物粒・焼土粒・ローム粒を含む暗褐色土が2層堆積する。また壁際にはロームを主体とする黄褐色土が堆積する。また小礫が全体に見られた。（遺物出土状況）住戸内東側を中心として、ほぼ全域より上師器坏・壺を出土した。遺物は覆土中位より床面上の出上りが目立つ。窓内では崩落した大方石の下から土師器残片などが出土し、上面からは鉄釘・鉄滓が出土した。また窓内からは、黒色土器1点が窓直上に伏せた状態で出土していた。窓内を別にして全体では小破片中心で、出土量はやや少ない。（床・掘り方）床面は不明確ながら確認された。床面確認時においてやや深めの数個のビットと西側に溝状の落ち込みを検出している。掘り方には凹凸があり、中央より西側にかけて広範囲の浅い方形の落ち込みがある。また、数個のビットもあるが柱穴ではない。（窓）東壁やや南寄りにあり、右組み窓である。焚き口部・煙道部を含めた規模は1.45m×南北1.17m。右組み部は東西0.91m×南北0.65m。袖石は壁に向かって3個ほどの縦で一部二重に石列を並べ、さらにその上に半たい小礫を積んでいる。焚き口には、北側の袖石が1個倒れ込んでおり、その東側には天井石が落ち込んでいる。南側袖石には構築粘土が遺存している。支脚石はない。竪構築跡が片付けられずに窓内に崩れた状況を呈しているが、手前の天井石と支脚石は移動されているらしい。窓内覆土を4層に分けて採取し同定した結果、穀物類は検出されなかった。（壁溝）全体に明瞭であるが、他の住居でも同じように南側の壁溝は中央部が途切れ、その両側も明確ではない。出入り口施設の関係であろうか。北壁では幅10cm、深さ7.8cm、南壁では、幅20cm、深さ7.2cm、東壁では幅20cm、深さ6.4cm、西壁では幅17cm、深さ4.2cmである。（壁）全体に明瞭であり、四方とも壁溝からはほぼ直に立ち上がる堅である。（その他の施設）なし。（遺物）上師器坏（1～6）、黒色土器（7）、土師器小皿（8・9）、土瓶器ロクロ壺（10～12）、上師器壺（13～17）、鉄滓（20）、鉄釘（21）などのほか石匙（18）、石砾（19）が混入している。甲斐型土器を主として若干の在地的なロクロ壺を伴う器種構成である。墨書き器は2点あり、1は「水」かと思われる。3も同一文字の可能性がある。また5には見込み部に十字の線刻がある。ほかに黒羅石製石錐1、楔形石器1（木製化）。〔時期〕平安2段階。

6号住（第40・124～126図、図版37・38・90・91）（位置）C・D70グリッド。（重複）9号住の西壁を切る。また東南隅に绳文時代の遺構（ビットあるいは住居址の一部）が重複し、曾利1式期かと思われる深跡口縁部が出ていている。（検出状況）調査区東端において、一部調査区外へ広がって確認されたため拡張し、全体を調査した。プランは明瞭であった。（形状・規模）隅丸方形で東側中央南寄りに窓が設置されている。主軸長4.3m×交軸長4.4m。（覆土）炭化粒・焼土粒・ローム粒を含む黒褐色土が全体に堆積する。窓北側に人気めの炭化材があつた。（遺物出土状況）窓南側のビットより上師器坏・壺の小破片が多く出土し、その直上から篠大井石と思われる人型の礫が1枚出土している。北壁やや西よりの床面のビット：中から黒色土器杯が一個体分出土している（10）。床下埋納遺構とみてよいだろう。窓内には焼土層上から数個体分の上師器杯や壺の破片が非常に多く出土した。（床・掘り方）床面は比較的明瞭であった。中央のビット北側に広く硬化面があり、また南側には部分的に硬化面があった。床面精査の段階でやや軟弱な床面より10箇ほどの小ビットと中央部分より広めの落ち込みが確認され、これらは掘り方方まで通っていた。中央のビット覆土は褐色土で、ぼそぼそであった。掘り方面は全体に床よりも10cm程度下がり、北西隅を除く各隅に落ち込みをもつ状況であった。（窓）東側やや南寄りにあり、右組み窓である。焚き口部・煙道部を含めた規模は東西1.98m×南北0.9m。右組み部は東西0.83m×南北0.8m。袖石は左右3側づつの縦を立て並べている。平坦な小断りの縦が窓内部や窓辺に散在し、袖石上に用いたものが崩落したのであろう。遺物上に礫が崩落し、壺の底面（あるいは祭祀）段階では袖石部は完存していたことを窺わせる。天井石は遺存してはいないが住居南東隅にビット上面に礫が片付けられていた。ただ現場で被熱痕などの確認はしていない。窓内には支脚石は遺存しなかった。これらの状況から竪廓棄にあたっては、支脚石と窓の大井

石全部をはずし、1枚のみ住居南東隅に置き、竈内に焼類を投票する、という過程が想像できる。なお竈内覆土を2層に分けて採取し水洗した結果、般物類は検出されていないが、燃料材と思われるクリ・モモ・コナラ節が出ている。(壁溝) 北・東・西壁では明瞭であり、北壁では幅18cm、深さ7cm、東壁では幅19cm、深さ5cm、西壁では幅18cm、深さ10cmである。南壁には一部溝状のビットが出ているが、壁溝はない。(壁) 全体に明瞭であり、壁溝からほぼ直に立ち上がる壁である。(その他の施設) 以下凹面ビットが北西隅に近い場所にある。径40cm、深さ19cm程度の小ビットである。(遺物) 土師器壺(1・2・4)、土師器皿(5)、黒色土器壺(3・6～12・15・16)、黒色土器皿(13・14)、須恵器壺(17・18)、土師器ロクロ甕(19～22)、土師器甕(23～26・28・29)、土師器小甕(27)がある。甕類は17点中甲斐型十器5点(29%)、黒色十器10点(59%)、須恵器2点(12%)で、黒色土器が約6割と多い。甕類は11点中北口摩呂と思われるロクロ甕が4点(36%)、甲斐型甕6点(55%)、ナゲ調整の在地甕1点(9%)で、甲斐型甕が約半数を占めている。縄文時代の深鉢(30)は東南隅に重複した遺構内出土。ほかに凹石(32)、石棒(33)、石簾(34)、石錠(35)などが混入している。叩き石(31)は平安期のものであろう。墨書き土器は甲斐型土器皿に1点(5)、黒色土器壺に3点確認できたが(10・15・16)、いずれも判読はできない。ほかに黒曜石製石鎧1(未同化)あり。(時期) 平安3段階。

12号住(第41・126区、図版38・39・92)(位置) C・D67・68グリッド。(重複) 北側半分を東西方向に走る近現代の溝に切られている。(検出状況) 溝付近の結合時にプランを確認した。北側半分は溝により切られており、東側は調査区境のため、また西側は木の株の影響や覆土が浅いために不明瞭であったが、南側は比較的明瞭であった。(形状・規模) 隅丸方形で、西は東壁南寄りに設置されている。主軸長3.7m×現存交軸長1.6m。(覆土) 全体的に浅く、溝による搅乱の影響でフカフカした黒褐色土が土全体的に堆積する。(遺物出土状況) 瓢がある南東部から十輪器壺・甕を中心とした遺物破片が少量出土している。南側床直上からは4個ほどの大さの礫が出土している。瓢は棒状のもので、竈天井石とは形状が異なる。(床・掘り方) 溝や木の株の影響であまり明瞭な床面はない。竈を中心に拂土が広がっていた。礫が出土した直下付近には直径70cmほどのビットがあった。掘り方調査では溝状の落ち込みと数個のビットを確認した。ただし床面同様に溝や木の根の影響を受けている。(竈) 東壁南寄りにあり、石組みはほとんど残っていないが、南側に袖石らしき礫が1個倒れていた。残存規模は東西1.1m×南北0.8mであるが、竈の掘り方・煙道部は明瞭ではなかった。竈内土壤を水洗選別した結果、コムギ2粒が出ていた。(壁溝) 竈底残存部直下には全て確認できた。南壁では幅18cm、深さ5cm、西壁では幅15cm、深さ3cm。(壁) 南壁と東北壁の一部が明瞭に確認でき、壁溝からほぼ直に立ち上がる壁である。(その他の施設) なし。(遺物) 土師器壺(1・2・4)、黒色土器壺(3)、土師器甕(5～9)のはか、縄文時代の遺物である凹石(10・11)などがある。甲斐型壺・甕のはか、在地的なナゲ調整の甕(鉢)と壺、北巨摩産らしいロクロ甕がある。(時期) 平安3段階。

15号住(第41・126区、図版39・92)(位置) D・E47・48グリッド。(重複) 西側の大半は水田地帯へと続く低地のへりにあり、溝状落ち込みに大きく切られている。(検出状況) 重機による掘削時に竈と思われる土師器片とともにならぬ土上を確認した。西側の大部分は落ち込みのために遺存していない。(形状・規模) 隅丸方形を呈し、東壁やや南寄りに竈が設置されている。現存主軸長0.8m×交軸長1.6m。(覆土) 検出時にはすでに覆土の大半を重機によって掘削しており、観察することはできなかった。(遺物出土状況) 竈覆土内と周辺より少量出土するのみであった。(床・掘り方) 床面は掘り方が一部露出した状態で検出された。(竈) 東壁やや南寄り。竈掘り方に礫の抜き取り痕があり石組み甕と思われる。残存規模は東西1.2m×南北0.8m、竈覆土は、燒土粒・焼土ブロックが薄く堆積する層が土全体となっている。(壁溝) 北東壁でわずかに確認でき、幅18cm、深さ5cm。(壁) 立ち上がりがほとんど残存していない。(その他の施設) なし。(遺物) 土師器甕(1)のみ。ほかにも數片ある。(時期) 不明。

20号住(第42・127区、図版39・92)(位置) II・I32・33グリッド。(重複) とくになし。(検出状況) 竈の石組みが露出し、東壁が明確に確認できた。住居西側はすでに消失しており、北・南壁の半分・西壁は現存していない。また、調査中、北壁にもう一基の竈を検出した。(形状・規模) 西側半分以上は不明であるが、隅丸方形を呈すと思われる。現存主軸長3.3m×交軸長4.0m。(覆土) 東壁付近でわずかに確認できるだけであり、炭化物粒・燒土粒を少量含む暗褐色土である。中央西側は床面よりも下がっている。(遺物出土状況) 遺存状態が悪く小破片が出土するのみである。(床・掘り方) 東側のみで軟弱な床面を残している。掘り方面にはいくつか

のピットが確認された。南側より確認された0.6m×0.4mのピットからは縁が数個検出され、籠構築材の可能性も考えられる。（竈）北壁中央（？）と東壁やや南寄りに各1基づつ確認された。ともに遺存状態は不良である。北竈の残存規模は東西0.84m×南北0.94m。袖石・天井石はなかったが、竈内には長さ27cm、幅12cmほどの端部が平坦な縁を直立させた支脚石が遺存していた。東竈は東壁南寄りに設置された石組み竈である。残存規模は東西1.32m×南北1.17m。袖石は焼土層直上に倒れ込む状態で検出されたが、支脚石は現存していない。また确实な天井石もない。東竈南側のピットからは数個の大型縁が出土し、竈の天井石などを片づけたものとも考えられるが、これも確実ではない。2基の竈の新旧関係については、東竈に多くの構築材が遺存していたことから東竈が新しいと思われ、北から東へ竈を移動した考え方ができるが、北竈には支脚石が遺存したことから同時使用の可能性も十分ある。なお北・東竈覆土上はともに焼土層が厚く堆積していた。現場において焼土下層の土塗を探取し、水洗選別したが、炭化種実は出ていない。（盤溝）確認できなかった。（壁）ほぼ直に立ち上がる壁である。（その他の施設）なし。（遺物）須恵器壺（1）、土師器甕（2）のほか、縄文時代の凹石（3）、打製石斧（4）、石鎌（5）、土偶（6）などがある。2は腹部を薄くヘラ削りした武蔵型要に類したもので、東信地方の土器であろう。（時期）甲斐型坏がないため時期判断は難しいが、須恵器壺の形態から平安2段階としたい。

23号住（第42・127図、図版39）（位置）J・K28・29グリッド。（重複）26号住・398号ピットを切る。（検出状況）住居の掘り下げを開始した直後、多量の縁を埋設する398号ピット（朱石炉）が床面上に確認された。398号ピットは23号住竈認面には確認されていないものの、断面観察時には先後関係の把握が容易ではなかった。ピットからの中の出土はなく時期判断には悩んだが、覆土中から検出された炭化材で年代測定を行ったところ縄文中期と推定された。したがって、23号住がピットを切っている。竈がないため、住居ではなく竈穴状遺構といふ方が適切である。（形状・規模）南北方向に長軸をもつ隅丸方形を呈す。竈がないため主軸方向は不明。東西2.7m×南北3.3m。（覆土）ムク・炭化物粒を含む黒褐色土が土体となって堆積する。（遺物出土状況）住居内からの遺物の出土はほとんどない。建物とピットとは時期差をもつと考えるのが自然であるが、両者が同じ時期の遺構である可能性もわずかに残されている。ただ建物址の掘り方が方形であり、軸方向も平安期の住居とはほぼ同じであることから、建物址は平安期の所産と考えておきたい。（床・掘り方）軟弱な床面であった。（竈）なし。（盤溝）なし。（壁）ほぼ直に立ち上がる壁である。（その他の施設）なし。（遺物）土師器甕（1）のほか縄文時代の深鉢（2）、打製石斧（3）がある。（時期）不明。

24号住（第43・127・128図、図版40・92・93）（位置）R・S14・15グリッド。調査区最南部の南台地上。（重複）ないと想われるが、竈南側に長方形の配石がある。下部が土坑状を呈し、中世墓の可能性がわざかにある。（検出状況）地面の凍結のため南竈が不明であり、修正を行なながら調査を進めた。（形状・規模）南北方向に長軸をもつ隅丸方形で、東側南寄りに竈がある。主軸長4.2m×交軸長4.5m。（覆土）炭化物を少量含む黒褐色土が全体に堆積している。（遺物出土状況）床面に近い位置から、土師器の杯・甕を中心として須恵器・鉄製品などが出土した。全体ではやや少ない。竈内からは焼土層上面を中心として土師器壺破片などが数点出土した。竈南側には縁が長方形に並べられ、その下部には「つき臼」が1点正位で出土した。下部には土坑状の掘り方があり、配石土坑の復元の可能性もあるが、一心仕崩施設時の籠構築材を片付けたものと理解したい。しかし、覆土上層で出土した内耳土器片との関連も予想され、中世の構築の可能性もわずかにある。そうした2通りの想定ができるので、内部から出土したつき臼の時期も確定しにくい。ただ、つき臼は苗崎市宮ノ前遺跡など数遺跡から平安時代住居址に伴って出土しているし、長野県佐久地方・松本盆地でも平安時代の出土例を見出すことができ、平安時代に存在していたことは確実で、中世になると多く出土する石製品である。（床・掘り方）やや軟弱ではあるが比較的明瞭であり、特に、竈前面から中央付近にかけては非常に堅くしまった床が確認された（破線部分）。掘り方にはあまり荒削りの痕跡はない、多数の小ピットが確認できた。また西壁中央に壁にもぐり込むピットが出ている。覆土は褐色土で織文的であり、袋状土坑の可能性もわずかにあり、住居に伴うものか否か未定ではない。（竈）東壁南寄りにあり、焚き口部・煙道部を含めた規模は東西1.6m×南北0.96m。竈の石組みはほとんど残っていないが、焚き口の南北には袖石を外したあらう凹みが確認されている。また竈南側の配石は竈縁を用いた可能性が十分ある。竈内からは支脚石は検出されなかつた。竈内覆土には最下層に焼土層が堆積した。竈覆土を採取し水洗選別したところ、炭化種実は検出されなかつた。（盤溝）南壁最寄りを除きはほぼ全周した盤溝が明瞭にある。北壁は幅20cm、深さ5cm、南壁は幅20cm、深さ5cm、東壁幅23cm、深さ7cm、西壁幅20cm、深さ10cmである。（壁）壁溝から直に立ち上がる。（その他の施設）西壁中央のピットは何らかの壁施設の可能性が

ある。(遺物) 上師器壺(1~4)、黒色土器壺(5~6)、黒色土器皿(7~8)、土師器皿(9)、須恵器高台壺(10)、小型ロクロ甕(11)、土師器甕(12~14~17)、土師器小型甕(18)、須恵器長颈甕(19)、つき臼(21)、砥石(22)、鉛錠車(25)のほか中世の内耳上器(20)、縄文時代の打製石斧(23)、石鏡(24)などが出土している。杯皿類は黒色土器を主に、甲斐型土器、在地的な土器、須恵器がある。つき臼(21)は、縄文の多凹石を転用したらしい片頭に凹みを数個もつもので、径8.4cm、深さ5.5cmの孔が途中まであけられ、孔内には旋回した同心円状の痕跡が認められる。墨書き器は1点ある(4)。(時期) 平安3段階。

25号住(第44・129・130図、岡版41・93・94)(位置) S・T14グリッド。24号住の1.1m。調査区南端の台地上。(重複) 東壁に405号ピットが重複し、また北東隅に縄文時代の413号ピットが重複する。(検出状況) 当初、24号住同様に地面の凍結のため壁のラインは不明瞭なものであったが、調査途中で修正を加えていった。(形状・規模) やや歪んだ隅丸方形で、台形状。東壁南寄りに竈がある。土軸長3.1m×交軸長3.0m。(覆土) 炭化粒・焼土粒を少量混入する黒褐色土が主体。(遺物出土状況) 覆土中位から竈を中心に東側を中心として少量出土した。竈の天井石かと思われる石が竈南側にあった。(床・掘り方) 軟弱な床である。(竈) 東壁南寄りにあり、石組み竈である。焚き口部・煙道部を含めた規模は東西1.25m×南北0.85m。北側袖石は長さ50cmほどの縁を2個並べ構築し、南側袖石は1個のみが内側に倒れ込むような形で遺存している。天井石は焚き口部手前に1枚遺存した。竈内には長さ23.5cm、幅8cmほどの端部の平坦な礎を直立させた支脚石が遺存していた。竈内覆土は炭化粒・焼土粒を混入する黒褐色土が主体となって堆積しており、その下に厚い焼土層が堆積している。黒褐色土を採取・水洗選別した結果、その中の炭化核が4片検出された。(壁溝) ほぼ全周するようであるが、北・西壁においてはピットなどの影響により不明瞭で、東・南壁では幅15cm、深さ5cmを確認した。(壁) 南・東壁はほぼ直に立ち上がる壁であり、北・西壁は残りが悪く、緩やかに立ち上がっている。(その他の施設) なし。(遺物) 土師器壺(1~3・5)、十師器皿(4~6)、黒色土器壺(7~16)、灰釉陶器甕(17)、灰釉陶器皿(18)、十師器甕(19~22)、土師器小型甕(23)、土師器ロクロ甕(24)、須恵器凸底甕(25)、須恵器甕(26~27)、支脚石(29)がある。壺皿類は図示した17点中、甲斐型土器4点(23%)、黒色土器(黒色処理のない土器も含む)11点(65%)、灰釉陶器2点(12%)で、黒色土器が非常に大きな比率を占めている。甕類は甲斐型甕のほかに信州系と見られるロクロ・ハケ調整の甕がある(24)。中世の内耳上器(28)、縄文時代の猪沢式土器(30~36)、凹石(37)、右核状右器(38)がある。猪沢式土器は北東隅の413号ピット付近出土である。墨書き器は土師器皿に1点、黒色土器に2点あるが判別はできない。(時期) 平安4段階。

29号住(第44・45・130~132図、岡版42・94・95)(位置) N・O17・18グリッド。南台地上。(重複) 30号住東壁を切る。(検出状況) 黒褐色土上のプランを確認し調査を始めた。10cmほど掘り下げたところで明確な壁が検出され、大幅にプランを変更して調査を進めた。床面まではたいへん深く、遺存状態の良好な住居であった。(形状・規模) 東西に長軸を持つ隅丸方形で、東壁やや南寄りに竈が設置されている。土軸長4.8m×交軸長4.2m。(覆土) 床面までは約70cm。黒褐色土が主体であり、床面上には南壁側からの流入・堆積が認められた。(遺物出土状況) 床面直上からは多くの十師器甕の破片が出土した。竈内からは土師器甕破片や須恵器片が覆土上層より少量出土している。また、北側の焼土が散在する範囲から鐵鎌1点が、また竈南には鐵鎌が1点出土している。(床・掘り方) 硬質の明瞭な床面が検出された。竈北側の床面直上には焼土が東壁寄りにまとまって分布している。南壁は中央部には地山を掘り残して作られた段状の高まりがある。掘り方調査でも地山から続いていることがわかり、入り口部に関わる段状土間の可能性がある。掘り方は西北隅・南北隅が落ち込んでいる。(竈) 東壁やや南寄りに非常に良好な状態で遺存した。石組み竈で、焚き口部・煙道部を含めた規模は東西2.1m×南北1.6m、石組み竈は東西1.8m×南北0.97m。竈両脇は地山を掘り残して蓋の一部とし、その内側に袖石を壁に向かって3~4個立て並べている。この地山を掘り残すやり方は、南壁の段のつくりと同一である。また竈周囲には白色粘土が比較的良好な状態で遺存した。竈の奥壁には1個の大型礎を立てており、煙道の構造を示すものと思われるが、普通この部分に配石をした例はなく非常に珍しい。大井石の遺存状態も良好で、焚き口部の天井石は焼土上面に崩れ落ちているが、煙道部付近の天井石は袖石上面の小礎上に載ったまま検出され、竈内には支脚石が遺存していた。支脚石は長さ22.7cm、幅11.6cm×4.5cmほどの、上面が平坦で下部がし字状の屈曲をもつ礎を直立させたもので、支脚石上面に10.3cm×6.8cm、厚さ3cmほどの小振りの平石が重ねられていた。蓋を平らに正しく固定するための工夫であり、杯を伏せる例などは他跡跡例にはある。竈内覆土は下層に薄い焼土が堆積し、その上に白色粘土を混入する褐色土の層が堆積している。それらの2層を採取し水洗選別したが甕類は検出

されなかった。この竈は片付けられなかった例であり、こうした竈には竈内から壺類破片が多量に出ることはないようである。（壁溝）全周する。北壁では幅10cm、深さ4cm、南壁では幅12cm、深さ3cm、東壁では幅14cm、深さ4cm、西壁では幅14cm、深さ5.6cmである。南壁上間ににも壁溝は確認された。（壁）全体に明瞭であり、壁溝よりほぼ直に立ち上がる。（その他の施設）南壁に確認された段状の高まりは住居の山入り口に関係する施設であろう。（遺物）土師器杯（1～10・16）、黒色土器杯（11～15）、土師器皿（17）、土師器クロ妻（18～22）、灰陶陶器瓦類（23）、須恵器長頸壺（24）、須恵器甕（25）、土師器甕（26～36）、支脚石（37）、支脚石蓋（38）、鉄鎌（46）、鉄釘（47）、鉄滓（48）がある。环皿類には甲斐型上器、黒色土器、在地のナゲ調整の坏がそれぞれ同程度の割合で存在する。甕は甲斐型甕が主体のほかクロ甕などがある。繩文時代遺物としては、凹石（39）、打製石斧（41・42）、石鎌（43～45）、時期不明の遺物として町引き石（40）などがある。墨書き器は3点あるが判読はできない。（時期）平安2段階。

37号住（第45・46・132・133図、図版43・95・96）（位置）B・C57・58グリッド。早期包含層から続く傾斜面が平坦部に移行した最初の面にあり、1号住西6.2mに位置する。（重複）9号溝に上面を切られている。また250号ピットが竈に隣接してあり、本住居が切っている。また床面には縁を詰めた414号ピットがあり、繩文土器が出土している。当初、1号住との類似性から掘り方内土坑と判断したが、繩文中期末のピットであろう。（検出状況）9号溝底部より一個体の土師器クロ妻（11）が出土したため住居の存在が推定され、標と忘れるラインが一部確認されたが、それ以上の連続はないため調査しなかった。しかし全体の調査がほぼ終了し、念のため37号住付近を重複で全体的に掘り下げたところ、方形にもかい上師器坏や集中した焼土が確認され、急遽住戸と判断し調査を行った。住居は黒色土壇中の構築であったため、黄色縁層上面に掘り込まれたレベルまで全体を下げてようやく確認できたのである。西壁はわずかに調査区境にかかり検出できなかった。また南壁は上面の掘り下げのため不明瞭であるが、北・東壁は明瞭であった。（形状・規模）隅丸方形で東塀南寄りに竈がある。土軸長4.7m×交轍長4.3m。（覆土）重複で床上上層を削除したため覆土は浅い。覆土は炭化粒を多く含む暗褐色土で、床面上には広範囲に焼上が分布していた。（遺物出土状況）床底・床面に近い部分から遺物が出土した。北西壁付近からやはり方形遺物が4点ほど出土し、うち北西隅の壁溝中には上師器杯と皿が重なって正位に出土し（1・5）、ともに同様の文字が墨書きされていた。また、竈全面や南西隅には焼土が散在し、その上面に遺物の破片が散在している。竈内からは同一個体とみられる上師器甕の破片が多く出土している。（床・掘り方）中央から北東では3ヶ所ほど横円状に床面がとがれる場所があったが、その他は全面的に硬化した床面が検出できた。床面の中央よりやや西側に径約110cm、深さ42cmの414号ピットがあり、平たい縁が10個ほど詰められていた。そのほか掘り方には深いピットが数個検出された。（竈）東塀南寄りにあり、石網みは遺存していない。東西1.57m×南北1.0m。支脚石は確認されなかった。竈内覆土は1～5層に分層でき、うち焼土を含む4層について土塊を採取・水洗調査を行ったが、殻類は検出されなかった。（壁溝）西・南が不明瞭ではあるが、ほぼ全周している。東西・北壁では幅25～30cm、深さ8cm。南壁の壁溝はとくに不明瞭であった。（壁）壁溝からほぼ直に立ち上がる壁のようであるが、立ち上がりはほとんど検出していない。（その他の施設）なし。（遺物）土師器不（1～4・7）、土師器皿（5・6）、黒色土器杯（8・9）、黒色土器高台皿（10）、十師器クロ妻（11）、土師器甕（12・14～18）、須恵器甕（13）、土師器小型甕（19）、須恵器甕（20）、灰陶陶器甕（21）がある。盆皿類は甲斐型土器が主で、3割程度の黒色土器をもつ。甕類はやはり甲斐型が主で、クロ妻、ナゲ調整坏が少量伴っている。繩文時代の遺物としては、414号ピット出土の鉢（22～27）のはか、多凹石（28）、横刃型石斧（29）、石鎌（30・31）などがある。墨書き器は重なって出土した1と5にあり、「四万」と判読できる。この文字は吉木北邊跡5号住の皿体部外側に正位で書かれたものと同一文字・同一書体で、突き合わせは行っていないものの同一人物による筆記と推定される（森 1992）。（時期）平安4段階。

第3節 近世～近・現代

1. 溝（第52・53図）

1号溝（位置）B～D63グリッド。（方向と傾斜）東から西へ向かって大きくカーブしている。西傾斜。（規模・形態）幅40～60cm、深さ57cm、長さ11.5m。内部にエンビの水道管が埋設されている。（切り合い）11・13号溝

を切る。(出土遺物) 繩文土器片、黒曜石製搔器1(第171区4)。(時期) 現代。(機能) 調査区東側にある別生地と、西側の農道脇にあるボンブ小屋とを結ぶ水道管埋設溝。

2号溝(位置) B・C63グリッド。少し前まで使用されていた道に沿った溝で、斜面の中間に位置する。(方向と傾斜) E-9°W。西傾斜。(規模・形態) 幅50cm、深さ53cm、長さ10.5mで、11号溝に切られるところで溝が分かれている。(切り合い) 11号溝と重複し、切られるようである。また13号溝に切られている。(出土遺物)なし。(時期) 現代か。(機能) 道の側溝、あるいは地境溝か。

3号溝(位置) H-D61グリッド。(方向と傾斜) E-7°W。わずかに西傾斜。(規模・形態) 幅0.7~1.2m、深さ50m、長さ12.8m。調査区外へとさらにびいている。断面形はH-13号溝と同一で、箱状。二重に重複し、南側に重複する溝の方が新しい。(切り合い) なし。(出土遺物) 繩文土器片、土師器片、灰釉陶器片、鐵部陶器片、瓦片。(時期) 現代か。(機能) 現在の地境と一致し、地塊溝であるとともに上からの雨水の排水溝か。

4号溝(位置) B・C63グリッド。2号溝に平行する。(方向と傾斜) E-9°W。(規模・形態) 幅50~60cm、深さ25cm、長さ6.5m。11号溝に接して止まっている。(切り合い) 11号溝に切られる。(出土遺物) なし。(時期) 現代か。(機能) 2号溝同様に道の側溝か、あるいは地境溝か。

5号溝(位置) B62・63グリッド。南斜面。(方向と傾斜) N-20°E。南傾斜。(規模・形態) 幅30~80cm、深さ16cm、長さ4m。(切り合い) 1号溝に切られる。(出土遺物) なし。(時期) 現代か。(機能) 不明。

6号溝(位置) B62・63グリッド。5号溝の東側。(方向と傾斜) N-13°E。南傾斜。(規模・形態) 幅70~1.2m、深さ13cm、長さ3.2m。北側にある11号溝の延長線上にあり、また南側にも10号溝など不連続につながっていくようである。(切り合い) かつての道に切られている。(出土遺物) 繩文土器片、黒曜石製搔器1(第171区5)。(時期) 現代か。(機能) 不明。

7号溝(位置) C62グリッド。(方向と傾斜) 南傾斜。(規模・形態) 溝というよりはピット状である。(切り合い) ピットが重複する。(出土遺物) 繩文土器片、土師器片。(時期) 不明。(機能) 不明。

8号溝(位置) C58・59グリッド。斜面にあり、9号溝に接続する。(方向と傾斜) N-9°E。南傾斜。(規模・形態) 幅50~70cm、深さ8cm、長さ6m。(切り合い) 9号溝との前後関係は不明。(出土遺物) 繩文土器片、灰釉陶器片。(時期) 近世以降か。(機能) 排水のための溝か。

9号溝(位置) B-D58グリッド。(方向と傾斜) 東西方向に蛇行しながらびている。西傾斜。(規模・形態) 幅1.8m、深さ38cm、長さ12mほど確認した。さらに調査区外へのびている。(切り合い) 4・37号住を切る。溝内北側に人頭大の標による右列が不連続にあり、かつての地境溝か。(出土遺物) 繩文土器片、灰釉陶器片、丸耳土器片。(時期) 近世以降か。(機能) かつては地境溝であったと思われるが、現在の地境ではない。

10号溝(位置) C50グリッド。(方向と傾斜) N-3°E。(規模・形態) 幅20~30cm、深さ11cm、長さ1.9m。(切り合い) なし。(出土遺物) なし。(時期) 不明(機能) 不明。

11号溝(位置) B63-68グリッド。北台地南斜面。この溝の北端は、現在でも使われている東西方向の溝にT字形に接続している。(方向と傾斜) 南北方向の溝で、南傾斜。(規模・形態) 幅1.2m、深さ95~105cmで、25.5mほど弓なりにびている。断面形は箱状である。2時期の掘削により、底面には段がある。(切り合い) 13号溝と詰み合う。13号溝と断面形が類似し、同時期あるいは11号溝の方が新しい。(出土遺物) 繩文土器片、黒曜石製石器1(未図化)、フレイク、土師器片、近世陶器片。(時期) 現代か。(機能) よくわからないが、畑中の排水のためのものか。

12号溝(位置) C60グリッド。2号住南側。(方向と傾斜) E-3°W。傾斜はとくにない。(規模・形態) 幅60cm、深さ10cm、長さ3.6m。(切り合い) なし。(出土遺物) 土師器片。(時期) 不明。(機能) 現代の擾乱。

13号溝(位置) B63-67グリッド。斜面にびる。(方向と傾斜) 南北方向に大きく弓なりにびている。(規模・形態) 幅60~70cm、深さ46cm、長さ24.5m。断面形は11号溝同様に箱状。(切り合い) 11号溝に切られ、B66・67グリッドでは11号溝の東側に重複して存在する。(出土遺物) 繩文土器片、灰釉陶器片、セリロイドの動物の頭。(時期) 現代か。(機能) 地境、あるいは排水溝か。

14号溝(位置) A72・73グリッド。第2次調査でこの溝の続きが出ている。台地の縁辺部にあたる。(方向と傾斜) N-13°-E方向の溝で、南に傾斜する。(規模・形態) 長さ10.5m、幅30~40cm、深さ17cm程度。断面は鍋状。(切り合い) 14号住を切る。(出土遺物) 繩文土器片。(時期) 近世以降か。(機能) 地境溝、あるいは根切り溝と思われるが、15号溝と平行してびることから、道の側溝かもしれない。

15号溝(位置) A72・73グリッド。14号溝と平行するようにびており、14号溝との間隔は40~70cm。(方向と傾斜) 14号溝と同じ。(規模・形態) 長さ5.5m、幅40~80cm、深さ28cm。断面は鍋状。(切り合い) 14号住を

- 切る。(出土遺物) 繩文土器片、土師器片。(時期) 近世以降か。(機能) 14号に同じ。
- 16号溝(位置) B69~72グリッド。北へのぼる道の延長線上にある。(方向と傾斜) N-5° E。南傾斜。(規模・形態) 幅1m程度、深さ8cmで、16mにわたり不連続にのびる。(切り合い) 9号住上層を切る。またいくつかのビットと重複する。(出土遺物) 繩文土器片。(時期) 現代か。(機能) 道の延長線上にあるので、溝ではなく道のわだち、あるいは地墻溝であろう。
- 17号溝(位置) A~C65グリッド。(方向と傾斜) E-3°-W。西傾斜。(規模・形態) 幅30~50cm、深さ1.1cm。長さ10.5mであるが、5号住上面にものびるのを確認している。(切り合い) 11・13号溝に切られ、5号住上層を切る。(出土遺物) 繩文土器片。(時期) 不明。(機能) 不明。
- 18号溝(位置) C69グリッド。(方向と傾斜) N-16°-Eか。(規模・形態) 長さ90cm、幅40cm、深さ16cm程度で、6号住上面での状況は捉えていない。(切り合い) 6号住上層を切る。(出土遺物) なし。(時期) 不明。(機能) 不明。
- 19号溝(位置) B70グリッド。9号住東側。(方向と傾斜) 東西方向。西傾斜か。(規模・形態) 幅40cm、長さ1.2m。溝というよりビットに近い形態。(切り合い) 9号住上層を切っているらしい。(出土遺物) 繩文土器片。(時期) 不明。(機能) 不明。
- 20号溝(位置) B62・63グリッド。5号溝と平行してのびる。(方向と傾斜) N-18°-E。(規模・形態) 幅60~70cm、深さ14.9cm、長さ3.2m。(切り合い) 13号溝に切られる。(出土遺物) 繩文土器片。(時期) 現代か。(機能) 不明。

2 箕輪堰(ふるせぎ)(第53図、図版48)

(位置と現状) J26グリッド付近にあり、農道脇に東方向へ窪地化した痕跡が残る。一見、山道のようでもあり、雑木に覆われて荒れていた。断面観察したあたりでは、現状で幅8m、深さ1.1m程度のくぼみとなっている。この場所が一般的に「ふるせぎ」という呼称で広く認知されているかどうかは定かではない。県埋文調査の箕輪新町地内の旧堰も「ふるせぎ」であり、こうした堰跡の頃はすべて「ふるせぎ」と呼ばれるようである。ここでも現在の箕輪堰に対して使用されていない堰という意味で「ふるせぎ」と呼びたい。猿玉川から水を引いた箕輪堰は複雑に枝分かれして各地区に水を配分しており、そうした支流のひとつと思われる。(方向) 東北方向から水田地帯へ向けて台地を斜めに掘削して構築されている。(調査状況) 主に断面観察を主眼として2m幅程度のトレンチを堰に対し直角方向に入れ、その範囲で溝底面を検出した。(規模・形態) 幅は広く見ると9m程度、狭く見ると6.3mで、深さは台地のへりから2.3mである。底部は掘り鉢状で、段がついてさらに深くなっている。(土層堆積状況) 底部付近の段から下の堆積土(6層)は、疊を多く含む砂礫層で、その範囲が水流の範囲であろう。(出土遺物) なし。(時期) 箕輪堰の完成は、記録では明暦3年(1657)といわれるが、このような支流のすべてがその頃に完成したとは思われない。出土遺物があったとしても時代決定は大変難しい。なお、箕輪バイパスに伴う古堰跡で検出された堰の断面形とよく類似する(萩原・田口 1996)。古堰跡例は幅15m、深さ約7mで、断面V字形であり、社口例よりもはるかに大規模である。断面形の類似から時代的に同じ頃の開削であろう。(機能) 用水を引いた堰。

第4節 ピット(第46~51・134~141図、図版44~48・96・97)

現場でNo.を与えたビットは414ある。うち搅乱、歴穴、シミ状のものは117ほどあり、そのほかにも遺構ではないと思われる小穴が多数含まれている。また集石炉や埋甕をもつものもあるが、掘り込みをもつ遺構をすべてビットとした。本書には出土遺物のあるビット実測図を掲載しているが、それらの中には時期・性格不明の遺構も含まれている。ここでは出土遺物や検出状況から時期が推定できるものを掲げて概要を記す。他のビットを含めて詳細なデータに関しては第13表に譲るが、このうち遺物が出土していないビットはシミ状のものあるいは現代の搅乱であり、表から除外した。

1 繩文時代草創期～早期

406号ピット(第51図) 草創期～早期包含層の斜面上部にあり、長径15~25cm、厚さ8cmほどの安山岩平石

(鉄平石ではない) 6枚をさらに數いた配石遺構で、右の表面は4枚が被磨・赤変していた。ピットの掘り込みは不明確で、あつたとしても非常に浅いものであり、長径1mの橢円形と思われる。断面図1層が掘り方で2層は地山(包含層)である。出土遺物は皆無で、本ピットをこの時期に位置付ける根据はない。そばに中期土器を出した251号ピットなどがあることから、中期の可能性もある。ほかに63号ピットに搔器2(第171図1・2)、115号ピットに楔形石器1(第171図6)、167号ピットに搔器1(第171図3)・縦長削片(末國化)1がある。いずれも混入品と思われる。

2 繩文時代中期

(1) 猪沢式期

413号ピット(第44・130図) 25号住北壁に重複するピットで、住居調査時に周辺から猪沢式期を中心とした土器片や石器が出ている。付近の34号住との関わりがあろう。

(2) 曽利I式期

401号ピット(第51・140図) 径1m、深さ25cm程度の鍋底状のピットで、上面に曾利I式期の長胴深鉢片が多く出ている。上器は1個体にまとまらず、その場で割ったのではなく、ピット上面を封鎖するために破片で覆ったような状況であった。東壁寄りに礫が出ていている。

408号ピット(第51・141図) 28号住居内の西壁にある。径80cmほどの円形ピットで、断面錐状。壁際に礫があり、その下の底付近くから深鉢の無文口縁部片を主とする大形土器片が出ている。出土土器は同時期で、住居址内出土土器との接合関係をもつ。同時併存、または住居直後の時期想定ができる。

(3) 曽利II式期

4号ピット(第46・134図) 径1.2m、深さ35cmほどの円形ピットで、断面は鍋底状。小破片と打斧が出ているのみ。

21号ピット(第46・134図) 径1m足らずの円形ピットで、深さ約40cm、断面錐底状。底部に50cm近い平石がある。図示した猪沢式期の土器の他に曾利II式上器が数点出ている。

22号ピット(第46・134図) 径1.1mの皿状のピットで、深さ20cm。土器の小片が少量あり、完形のミニチャアト器1点出土。

25号ピット(第46・134図) 径90cm、深さ45cmほどの円形ピットで、断面は鍋底状。礫が2個入っている。

41号ピット(第47・134図) 径1.7mほどの円形ピットで、深さ20cm足らずの皿状。曾利IV式頃の鉢ないし壺形土器(12)のほか、小片が出ている。また十鉢と思われる破片が1点ある(16)。

55号ピット(第47・135図) 径1.1mの円形ピットで、断面は鍋底(円筒形)。土器の小片が少量出土。

86号ピット(第48・136図) 径50×80cmほどのピットで、深さ30cm、断面は鍋底形。

(4) 曽利III・IV式期

33号ピット(第47・134図) 径1.2m程度の不整円形ピットで、深さ約30cmの鍋底状。曾利III・IV式中心に土器小片が少量出土。

95号ピット(第48・136図) 径1.1mの円形ピットで、深さ55cm、断面形は鍋底状。曾利III式期を主とした土器片が中位から上部で出土。

251号ピット(第49・138図) 径40cmほどの皿状ピットで、上面に曾利III式期の深鉢片が2個体分出土。早期包含層の傾斜面にあり、掘り方は不明瞭。

(5) 曽利V・中期末期

414号ピット(37号住内ピット、第45・133図) 径110cmの円形ピットで、深さ42cm。礫が多数重なっており、その上面や壁間に中期末の土器片が出土。

(6) 中期後半期(時期不明)

10号ピット(第46・134図) 径0.8~1mの円形ピットで、断面は鍋底状。中期後半代の土器片が少量出ているが小破片ばかりで、時期が不明瞭である。ピット中には赤変した長径40~50cmの安山岩板状角礫が2個入っている。これらの礫は形態から炉石であった可能性が高い。位置的には8・9号住(炉石は全くない)・13号住(炉石は2辺のみ存在)が近く、どれかの炉石をはずして埋設したのであろう。確實に炉石であったとみる証拠もないけれども、炉石転用の1例として、今後の類例を待たい。

61号ピット(第48・135図) 曽利II~V式期の土器片が出ているが、時期を特定できない。

(7) 集石炉 (第50・

51図、図版45~47)

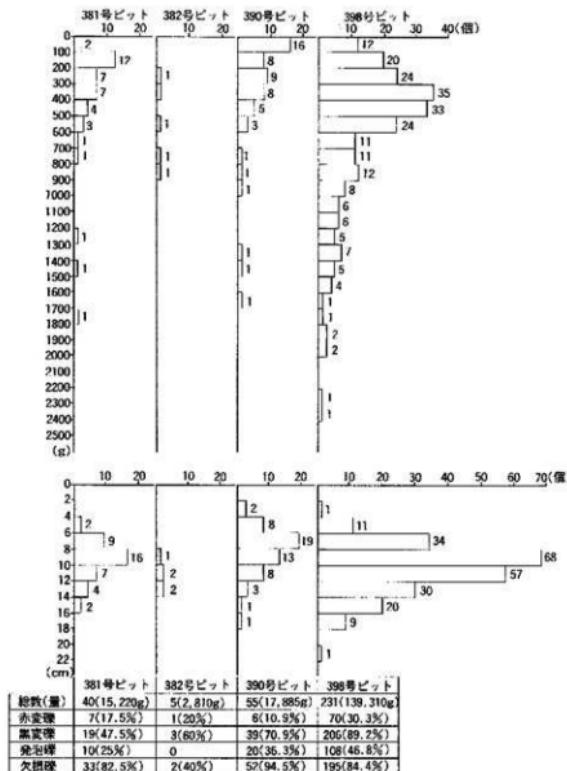
381・382・390・398号ビットは集石炉である。時期を確定する土器がほとんど皆無であり、当初は集石炉中に表面が高温で発泡したものも多数含まれていたことから平安時代以降に属するのではないかと思われたが、398号ビット出土炭化材の¹⁴C年代測定で4,470±120BPという結果が判明し、同時に8号作（曾利II式期）が4,300BP頃であったため、曾利I式期又は中期初頭の所産だらうと推測するに至った。4基の集石炉は9m内の範囲に集中し、同時期あるいは近接した時期であることが想定できる。仮に南側台地上にまとまっている曾利I式期の集落に伴うものと予想した場合、集落の北側約30m離れた位置になる。集落とやや離れており、より近接した場所に居住域が存在することも考えられる。なお集石炉および発泡礫の温度については第5章を参照。

381号ビット（第50図） 現状では径1m足らずの小さな円形ビットであるが、上面が削平されているため、本来はもっと大きなビットと思われる。集石は長径4~15cm、40~1720gの

礫が40個集中しており、赤変礫（被熱による赤変）7個（18%）、黒変礫（被熱によるスヌ状の付着などによる黒変）19個（48%）、発泡礫（表面が高温のために発泡した礫）は10個（25%）、欠損礫（一部欠けた礫）33個（83%）であり、多くが被熱して変色していた。坑底からやや浮いて、径60cmほどに配石して平らな面を設けた石組みがある。長径15~25cmほどの平坦な面をもつ礫を11個用い、中心に5個程度を据えて周間に縁石状に並べている。それらの礫表面にも一部赤変が見られた。覆土は炭化材を含んだ黒色土で、焼土粒もある。

382号ビット（第50図） 坑底の石組みとわずかな集石の一部が見つかっている。径1m足らずであるが、上面は削平されている。石組みは25~40cm程度の礫5個程度を組んだもので、平たい安山岩礫を用いる。礫表面はいずれも被熱・赤変している。覆土は炭化材を多く含んだ黒色土。集石は赤変礫1個、黒変礫3個、発泡礫0個であった。

390号ビット（第50図） 径1.5mの凸形ビットで、深さ40cm。上面に径70cmの範囲で集石があり、長径4~17cm、50~1660gの礫55個が集中していた。集石は赤変礫6個（11%）、黒変礫39個（71%）、発泡礫20個（36%）である。集石の堆積状況は、断面でみると上面が窪んだ形である。集石は被熱し黒変したものが多い。集石の直下、ビット底面の中心部には径60cmの範囲で10~30cm程度の細長い礫を組んだ石組みがある。中心に5個の礫を据え、周間に縁石状に並べている。石組みの礫表面の被熱はあまりない。覆土は大きな炭化材や炭化粒を含む黒色土である。



第153図 集石炉の統計表

398号ピット（第51図） 23号住（平安期か）と重複する。4基の集石炉の中では最も高い位置にあり、深い掘り込みで遺存状況もよい。ピットは、径1.5mの2基の掘り込みが重なり、全体では1.7mほどのピットとなっている。調査では2基の重複に気付かず同時に掘ったため、集石を上ド一括で取り上げた。2基は上下の重複で、下部集石炉は深さ70cm、坑底よりやや浮いて深さ40cm付近に石組みがあり、径30cmほどの平石周囲に8個の礫を並べている。礫はほとんどが被熱している。覆土は炭化粒を多く含む暗褐色土である。上面の集石炉は深さ25cmで、石組みは長径15~25cmの砾6個程度で組んでいる。断面が深めの箱状である。集石は上面に多く伴っているが、一括であげたため上下の区別ができなくなっている。覆土は炭化粒を多く含む黒色土である。集石は総数では231個あり、大きさは6~22cmのうち8~12cmのものが圧倒的に多い。個々の砾重量は50g~1960gで、300~500gが多い。総重量139.31kg。231箇中赤変砾70個（30%）、黒変砾206個（89%）、タール状付着砾31個（13%）、焼付着砾63個（27%）、充泡砾108個（47%）、欠損砾195個（84%）である。安川井環で、円環ではなく角張ったものを多く用いている。充泡砾は人半がごく一部の発泡で、安山岩のためガラス質がほとんど含まれていないにもかかわらず、細かな気泡が抜けたような小孔が礫表面に見られ、やや軽い感じである。ピット中で燃焼した場合、簡単な焼構造のため内部は予想以上に高温になった可能性がある。なお覆土の土壤水洗を行ったが、炭化物以外の動植物遺体は出でていない。

3 繩文時代後期

(1) 堀之内1式期

250号ピット（第49・137図） 径70cmの円形ピットで、深さ5cm程度の断面圓形を呈し、ピット中央部に深鉢型下半を正位埋設する。ピットは西側を37号住に切られる。土器のまわりに一部焼上ブロックがあり、炉体土器と思われる。住居であれば周囲にピットを伴うはずであるが、遺構は黒色土~暗褐色土中の掘り込みであり、炉周辺にあったと思われるピットは確認できなかった。また炉であれば方形の石四いや敷石を伴うであろうが、検出面にはそうしたものはなかった。したがって住居No.を付けるべきであったが、ピットとして処理した。土器は沈線文をもつて下半の土器の上面に別個体の胴上半の破片を巻くように置いている。なお土器内部からモミ属の炭化材が出ている。

296号ピット（第49・138図） 径75cm程度の円形ピットで、断面は鍋底状。土器が数片出ており、明らかに掘り之内1式期と思われるもののほか、66など時期不明のものが混じる。

391号ピット（第50・140図） 径1.4mほどの円形ピットで、断面は皿状。堀之内1式期の土器片がやや多く出土している。

以上のほかに309・314・368号ピットでも堀之内1式期の土器片を伴っている。

(2) 堀之内2式期

338号ピット（第49・139図） 径1.1mほどの円形ピットで、断面は鍋底状。337号ピットを切っている。25~35cm大の砾2点がピット中央に置かれている。堀之内式期の小片がやや多く出ており、時期のわかる資料では堀之内2式期がある。

343号ピット（第49図） 径1.2mほどの円形ピットで、断面は鍋底状。堀之内2式期を主とした土器細片がやや多く出土。

344号ピット（第50・139図） 径1mほどの円形ピットで、断面は鍋底状。堀之内2式期の土器片、土偶片、凹石が出土。

以上のほか、367・373・393・395号ピットでも堀之内2式期の土器片が出ており、それらは21号住や26号住など同時期の住居址周辺にある。

(3) 加曾利B式期

143号ピット 台地傾斜面上部で出ている椭円形のシミ状ピットで、加曾利B2式期かと思われる口縁部片が出ていている。台地上には同期の遺構は検出されていないが、台地下に存在した青木遺跡では加曾利B式期は主体的な時期であり、集落周辺が台地上も含めて何らかの土地利用が行われていたことを示す資料である。

(4) 後期（時期不明）

263号ピット（第49・138図） 50×70cm程度の稍円形ピット中に土器の胴下半を正位埋設したもので、おそらく炉体土器である。土器周囲のピット底面は焼上化し、炉体土器の隣にも小形の土器底部が焼土面に正位で置かれていた。周囲には住居に伴う可能性があるピットがいくつか存在するが、とりあえずピットで処理した。炭化

材が少量作っており、炉体上器からはモミ属・クリまたはコナラ節、小さい土器からはモミ属が出ている。時期は無文土器のみではっきりしないが、堀之内式期頃であろう。

ほかに295・299・303・304・305・306・310・312・313・320・328・335・336・341・352・376・377号ピットで後期と思われる無文土器を中心とした土器細片が出ており、いずれも堀之内式期の範囲に収まるものと思われる。

4 平安時代

63号ピット（第47・135図） 長さ3.5m、幅2・3mの大きな落ち込みで、深さ約50cm。段切り溝のような形態で、30~45cmの大きな礫が斜面に置かれ、一部積み上げられている。西側へ細長く続いているように見られ、溝状である。通常のピットや住居ではない。土器器・須恵器や縄文の凹石などが出でており、平安あるいは近現代の所産であろう。

以上のはか、17・147・225号ピットから十郎器片が出ており、平安時代のピットかと思われる。

5 中世～近世

404号ピット（第51・141図） 南台地の端、水田地帯を見下ろす見晴らしの良い場所にある。単独で存在するが、調査区間に塚が数基あったらしいこと、24・25号住居上層から内耳上器片が見つかるなど、墓域となる可能性もある。本址は上面の掘り方では凸形に見えるが、下部の形状では 1.25×1 mの横円形もしくは長方形の掘り方で、深さは約1m。坑底より60cm上面に長径30~40cmほどの縁20個以上を平らに2層ほど詰めている。器は安川岩の削石を主とした角砾である。主軸方向はN-23°-E。坑底に近い位置から六道鏡とみられる鏡貨5枚が重なって出土した。出土位置は北側の坑底である。錢幣は景祐元宝1、皇宋通宝1、太平通宝1、永樂通宝1、元祐通宝1。現場では骨類は見あたらなかったが、坑底付近の土を水洗したところ、微細な骨片がやや多く検出された。数mmの白色微細片であり、原形をとどめるものは皆無で、被熱の有無ははっきりしないものの焼骨ではない。人骨かどうかの鑑定は微細片のため行っていないが、六道鏡の伴出状況から土坑墓であることは確実である。他遺跡例を参考にすれば北枕頭葬と推定でき、錢の出土位置は頭部付近となろう。覆土堆積状況は止しく固化できていないが、黒色土と黄色土の互層を示しており、埋葬後、直ちに埋め戻されたような状況であった。他の遺跡例との比較については第5章を参照。時代は永樂錢を含むことから15世紀以降であろう。

第5節 遺構外出土遺物（第142~150図、図版97）

1 縄文土器 第162図に分布を示すように、本遺跡には草創期（表裏縄文土器段階）から後期中葉（加曾利B2式期）までの遺構外出土土器がある。ここではいくつの土器片のみ提示する。中期後半では曾利式土器（1~6）、加曾利B式土器（7・8・10）がある。後期では称名寺式土器（11）、堀之内式土器（13~15）、加曾利B式土器？（16）がある。9は堀之内式期の粗製土器であろう。

2 石器・石製品 打製石斧（18~44）、横刃形石器（45~47）、磨製石斧（48・49・100）、凹石（50~81）、石皿（82・83）、石錘（84）、磨き石（85）、块状耳飾り（86）、多孔石（87・88）、石鎌（89~99）、石匙？（101）がある。凹石の多くはA68グリッドの溝中から採集されたものが多い。おそらく現代の操作に伴って北台地上の遺物が隣とともに溝中に投棄されたものである。

3 土製品 土偶（102~105）、土製蓋（106）、ミニチュア土器（107・108）がある。102は土偶の胴部片で、中央に接合面があり、2本の粘土棒を接合して脚部を形成している。中期後半の製作技法であるが、形態・文様的には後期と思われる。103は後期土偶脚部片で、脚を強く踏ん張った形であり、堀之内式期の所産と思われる。104は中期後半の下半身の土偶片で、本来は腕を左右に伸ばした形態である。脚部から脚が突き出たようになってしまっており、脚の裏側に尻がついた形である。加曾利B式に伴う土偶に類似した曾利III~IV式期の所産であろう。105は104と同時期頃の頭部片で、後頭部の文様は中期中葉のものに般べ素文・簡略化が著しい。はかにO16グリッドで後期堀之内2式期の中空土偶背骨部片らしきものが1点出ている（第171図9）。

4 その他 磁書土器（109）、墨書き土器（111~113）、鉄製品（114）がある。110の墨書き土器は甲斐型皿の渦巻き状暗文が施文された内面見込み部に「不」と書かれており、墨書きの位置としては珍しい。「不」は青木北遺跡4号作の暗文のある杯底部にもある（森 1992）。

第4章 自然科学分析

第1節 炭化物の分析

1 社口遺跡から産出した大型植物化石

新山雅広(株)パレオ・ラボ)

(1) はじめに

社口遺跡は山梨県高根町に所在し、標高約720mの八ヶ岳南麓に立地する。今回は、本遺跡付近における栽培状況および周辺植生を明らかにする目的で大型植物化石の検討を行った。

(2) 産出した大型植物化石

大型植物化石の検討を行った試料は計169試料であり、時代については平安時代、繩文時代の試料が含まれる。これら各試料から産出した大型植物化石の一覧を第2表に示す。

全試料から産出した大型植物化石は木本5分類群、草本18分類群、その他虫えい、菌核を産出した。木本で産出したのは針葉樹のヒノキ、落葉広葉樹のオニグルミ、カバノキ属、クワ属、モモである。草本で産出したのはイネ、オオムギ、コムギ、ムギ類(オオムギあるいはコムギ)、エノコログサ属、アワ、スゲ属、カヤツリグサ属、ホタルイ属、カナムグラ、クリクサ、タデ属A、タデ属B、タデ属C、シロザ近似種、ナデシコ科、ササゲ属、メメ科、エノキグサである。菌核は多数の試料から産出しており、特に6生カマド3層、12住カマドの試料では極めて多産する。菌核は腐った樹木の表面などにつく菌の集合であるが、生態や種類が不明のためここでは検討の対象から省いた。

(3) 考察

a. 栽培状況

産出したもののうち、栽培植物と考えられるものは木本ではモモ、草本ではイネ、オオムギ、コムギ、ムギ類、アワ、ササゲ属(アズキ、リョクトクの類)である。このうちアワは68試料から産出しており、最も多数の試料から産出している。イネも17試料と比較的多数の試料から産出している。これら栽培植物は平安時代と考えられる試料から産出しており、平安時代には既に遺跡付近で栽培されていたものと思われる。ササゲ属に関しては繩文時代後期とされる試料(16住垢)からも産出しており、繩文後期には既に栽培されていた可能性が考えられる。

栽培されていた可能性のあるものとしては、タデ属A、タデ属B、シロザ近似種があげられる。タデ属A、タデ属Bとしたものは炭化した状態でイネやムギ類(オオムギやコムギ)などの穀類と共に遺跡から産出することがしばしばあり、それらと共に栽培されていた可能性が考えられるものである。本遺跡においてもイネ、オオムギ、コムギなどと共に産出しており、栽培されていた可能性が考えられる。しかし、雑草として生育していた可能性や肥料として用いられていたために、イネなどと共に産出した可能性もある。シロザ近似種は、栽培され若葉を食用にするアカザと畠地などに雑草としてみられるシロザがある。

b. 周辺植生

繩文時代の試料から産出したのは木本ではオニグルミ、草本ではタデ属A、タデ属C、シロザ近似種、ナデシコ科、エノキグサである。オニグルミは遺跡周辺の川沿いなど浸った所に生育していたものと思われる。オニグルミの核(破片)は多数の試料から産出しており、食用とされていたのであろう。シロザ近似種、ナデシコ科、エノキグサなどは畠地ないし路傍の雑草として遺跡付近に生育していたのであろう。

平安時代の試料からは針葉樹のヒノキ、落葉広葉樹のオニグルミ、カバノキ属、クワ属が産出しており、周辺にはこれらが生育していたものと思われる。オニグルミは多数の試料から産出しており、ヒノキも比較的目立った産出状況である。オニグルミ、ヒノキは遺跡周辺に普通にみられ、オニグルミは食用とされていたのであろう。一方、遺跡付近には畠地ないし路傍の環境にはエノコログサ属、カナムグラ、クリクサ、シロザ近似種、ナデシコ科、エノキグサなどが生育しており、湿地の環境にホタルイ属などが生育していたのであろう。

(4) 大型植物化石の記載(図版99)

ヒノキ *Chamaceyparia obtusa* (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc. 小枝

第2表-1 産出した大型植物化石 数字は個数、()は破片の数

第2表-2 産出した大型植物化石 数字は個数、()は標本の数

小枝には鱗片状の葉が十字対生に付き、葉は鈍頭で先端は茎に密着する。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核

産出したものは全て細かな破片であるが、完形であれば核は側面観は卵形から円形、先端は鋭頭、上面観は円形。表面は縦に不規則な隆起があり、明瞭な1本の縫合線が縱に走る。

クワ属 *Morus* 種子

種子は淡褐色ないし黄褐色、側面観は扁橢円形、上面観は扁三角形。表面はややざらつく。

モモ *Prunus persica* (Linn.) Batsch 核

産出したものは破片であるが、完形であれば核は扁平な橢円形。一方の側面には縫合線が発達する。表面には不規則な流れのような溝と穴がある。

イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化胚乳

扁平な橢円形。炭化したもののみ産出した。1件104から産出したイネは頸が少し貼り付いていた。

オオムギ *Hordeum vulgare* Linn. 炭化胚乳

扁平な橢円形。側面観は菱形に近い縦長の橢円形。

コムギ *Triticum aestivum* Linn. 炭化胚乳

やや扁平な橢円形で丸くオオムギに比べ、小粒である。側面観は円形に近い橢円形。

ムギ類

保存状態が悪くオオムギとともにコムギとも区別し難いものをムギ類とした。

アワ *Setaria italica* Beauv. 炭化胚乳

扁平な円形に近い橢円形。背面の胚の部分の長さは果体の2/3程度あり、腹面のへそは細く橢円形。側面観からみた先端部は平底である。1件-62, 63, 84, 92, 93, カマド1層の試料中には頸が少し貼り付いていたものが各試料1点ずつ産出した。

カヤツリグサ属 *Cyperus* 果実

果実は三稜形で側面観は倒卵形。

カナムグラ *Humulus scandens* (Lour.) Merril 種子

種子は黒灰色、二面の円形でへそは白く心形。

タデ属A *Polygonum A* 炭化果実

果実は一面の倒卵形、上面観は円形。

タデ属B *Polygonum B* 炭化果実

果実はかなり丸みを帯びた三稜形で側面観は卵形。

タデ属C *Polygonum C* 果実

果実は三稜形で側面観は橢円形。

シロザ近似種 *Chenopodium album* (cf.) Linn. 種子

種子は黒色で鈍い光沢がある。側面観は円形、上面観は橢円形。1本の不明瞭な筋が中央付近まで入る。

ササゲ属 *Vigna* 炭化種子

産出したものは破片であるが、完形であれば扁平な橢円形。へその周囲はやや隆起する。産出した破片は子葉内面が確認できるが、幼根と初出葉が残っていないためこれ以上の同定には至らない。

エノキグサ *Acalypha australis* Linn. 種子

種子は側面観は先端が尖る倒卵形、上面観は円形。表面は微細な網目模様がある。

菌 核

黒色で球形、割れた断面は種実の構造ではなく、均一である。

2 社口遺跡から出土した炭化材の樹種

植 四 弥 生 (株)バレオ・ラボ)

(1) はじめに

山梨県高根町に所在する社口遺跡から出土した炭化材の樹種同定を報告する。当遺跡は八ヶ岳南麓の標高約720mに位置する。試料は遺構ごとにその堆積物を洗い出し取り上げたもので、これらは約5mm角の破片が大多数であった。このほかに現地で取り上げられた試料が少数ある。ここでは複数の住居跡から出土した縄文時代と平安時代の遺跡から出土した炭化材の樹種を報告する。

安時代の炭化材、P390・P398・P404から出土した炭化材の樹種を報告する。

樹種同定は炭化材の3方向の破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し行った。横断面(木口)は炭化材を手で削り新鮮な面を出し、接線断面(板目)と放射断面(径目)は片刃の義刀を方向に沿って軽くあて引くように割り面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面ケーブルで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗り試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し走査電子顕微鏡(日本電子製JSM-T-100型)で観察、写真撮影をした。

(2) 同定された分類群の組織記載(図版98・99)

モミ属 *Abies* マツ科 図版98 1a.-1c.(P250埋葉)

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞をもたない針葉樹材。P250の試料には横断面に接線状に並ぶ障害樹脂道がある。放射断面において放射柔細胞の細胞壁に数珠状肥厚がみられる。分野壁孔は小型で1分野に1~4個、炭化材では孔口の大きさ・傾きが不揃いである。P250は放射柔細胞がやや大きめ、2細胞幅になることから節部の組織かも知れない。

モミ属は常緑高木で暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの5種がある。材はやや軽軟で腐朽しやすい。組織は類似しており識別はできない。

カバノキ属 *Betula* カバノキ科 図版98 2a.-2c.(16牛乳)

小型の管孔が単独または2~数個が複合し放射方向に配列する散孔材。年輪界で管孔は小さくなる。道管の壁孔は小型で交互状に密在し壁孔がつながり間隔の詰まつたらせん状にみえ、穿孔は横棒数が5~10本ほどの階段穿孔。放射組織はほぼ同性、1~3細胞幅、道管との壁孔は小型で交互状に密在。

カバノキ属は陽地に生育する落葉性の高木または低木である。岩手県以南の温帯から温帯の山地に生育するミズメ、北海道から四国のかながわから温帯上部に生育するダケカンバ、岐阜県以東の温帯から温帯上部の崩壊地や向陽適潤地に生育するシラカンバなど約8種がある。材は重硬・強靭、切削・加工は容易なうである。樹皮は板状に剥がれる。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus*, subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版98 3a.-3c.(3住No.2内上)

年輪の始めに人型の管孔が1~2層配列し、晚材部では薄壁・多角形の小型の管孔が火炎状・放射状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は單一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと複合状のものがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

材は加工がややにくく乾燥すると割れや狂いが出やすい欠点はあるが建築材・燃料材によく利用される。堅果は食用となる。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版98 4a.-4b.(6住 寄4層) 5.(6住 No.81) 12.(8住炉内 PLD-170)

年輪の始めにやや人型の管孔が密に配列し序々に径を減じてゆき、晚材部は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。6住寄4層からは中心部に巻を持つ2年生の小枝が出土し、これは1年目は小型の管孔が放射方向や樹枝状に配列し散孔材的であり、晚材部に僅かに非常に小型の管孔が火炎状に配列するのがみられ、2年目の始めは中型の管孔が接線状に密に配列している。道管の壁孔はやや大型で交互状、孔口も水平に大きく開き、穿孔は單一、内腔にはチロースがある。放射組織はほぼ単列異性、道管との壁孔は孔口は大きく交互状。

北海道西南部以南の寒帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は耐朽性・耐水性にすぐれ、織文時代の遺跡からよく出土する樹種である。

クリまたはコナラ節 *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. or *Quercus* sect. *Prinus*

小形から非常に小型の管孔が火炎状に配列し、放射組織は単列で、晚材部の一部分の材である。1年輪分がなく接線方向の幅も狭い試料のため、孔縁部の管孔配列や複合放射組織の有無が確認できず、クリまたはコナラ節の可能性があることしかいえない。洗い出したによる試料にはこのような材が大部分を占めていた。

クワ属 *Morus* クワ科 図版98 6a.-6c.(クワ裏 17住 植)

年輪の始めに中型の管孔が配列し、除々に径を減じ、晚材部では小型で大きさの不揃いな管孔が複合し、斜状・波状・塊状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は單一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、2細胞幅の筋鉢形、上下端に方形細胞がある。現在の分布からヤマクワの可能性が高い。

クワ属は落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布するヤマグワと、和歌山県・中国地方・四国・九州の暖帯の山中にまれにあるケグワがある。果実は食用となり、材は硬質・強靭で心材は特に保存性が高いので有用材である。

モモ *P. persica* Batsch. または ウメ *Prunus mume* Sieb. et Zucc. バラ科 図版98 7a, 7c. (6住 穴4

第3表 繩文時代の住居跡から出土した炭化材の樹種

遺構名	検出位置(層位)	時期	樹種
7住 炉3層		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
8住 炉		縄文時代中期	クリ(PLD-170 4,350±110yrBP)
9住 炉		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
9住 黒堀		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
9住 ピット1柱穴		縄文時代中期	クリ
10住 炉1・2層		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
13住 炉3層		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
13住 埋甕		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
14住 炉		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
16住 炉		縄文時代後期	クマシデ属 クワ属
17住 炉		縄文時代後期	クワ属
18住 炉2層		縄文時代後期	クリまたはコナラ節
19住 炉		縄文時代後期	クリまたはコナラ節
19住 19住9土器内		縄文時代後期	クリまたはコナラ節
19住 19住5土器内		縄文時代後期	クリまたはコナラ節
19住 №333		縄文時代後期	トネリコ属(PLD-169 3,740±110yrBP)
21住 炉		縄文時代後期	クワ属
27住 炉		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
27住 炉体土器内		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
28住 炉		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
30住 30住1土器内		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
31住 炉1層		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
31住 炉2層		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
32住 炉1層		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
32住 炉2層		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
32住 炭		縄文時代中期	クリ
33住 炉		縄文時代中期	クリまたはコナラ節
34住 34住2土器内		縄文時代中期	コナラ節 クリまたはコナラ節 クマシデ属
34住 34住14		縄文時代中期	コナラ節 クリまたはコナラ節
35住 炉1層		縄文時代後期	コナラ節 クリまたはコナラ節
P250	250号ビット56土器内	縄文時代後期	モミ属
P263	263号ビット60土器内	縄文時代後期	モミ属
P263	263号ビット63土器内	縄文時代後期	クリまたはコナラ節 モミ属

第1表 平安時代の住居跡の窓から出土した炭化材の樹種

遺構名	検出位置(層位)	時期	樹種
6住 窓4層	平安時代	クリ モモまたはウメ(2年枝) クリまたはコナラ節	
6住 窓3層	平安時代	モモまたはウメ クリまたはコナラ節	
6住 No81	平安時代	クリ(直徑5cm以上)	
6住 No164	平安時代	クリ(直徑6cm以上)	
12住 窓	平安時代	コナラ節 クリまたはコナラ節 広葉樹(当年枝) イネ科	
20住 北窓	平安時代	コナラ節 クリまたはコナラ節	
29住 窓	平安時代	クリまたはコナラ節	
29住	平安時代	コナラ節	
37住 窓2層	平安時代	コナラ節 クリまたはコナラ節	
37住 窓3層	平安時代	環孔材A	
37住 窓4層	平安時代	環孔材A	

層) 11.(6住 窓4層)

年輪の始めにやや小型の管孔が密に配列し、徐々に径を減じながら単独または2~数個が複合し散在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は單一、内腔にはば水平のらせん肥厚がある。放射組織は異性、1~5細胞幅、背が高い。

モモまたはウメの材は平安時代になると遺跡からしばしば出土し、核も多数出土するようになる。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科

年代測定用試料で量が少ないので、実体顕微鏡下で観察した。環孔材で晚材部は小型の管孔が主に2個複合して分布し、放射組織は2~4細胞幅である。

トネリコ属はおもに温帯の山地から低地に生育する落葉高木で、シオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種がある。材は重硬で弾力性があり折れ難いので棒・柄などによく利用されている。

環孔材A ring-porous wood 図版99-8a.-8c.(37住 窓3層)

年輪の始めに中型の管孔が2層以上あり、晚材部は丸い非常に小型の管孔が単独または2~数個が複合し分布する。道管の壁孔は交互状、穿孔は單一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、おもに4細胞幅の筋形。

広葉樹 broad-leaved tree 図版99-9a.-9c.(12住 窓)

直徑5mmほどの小枝で中心部に瘤がある。小型の管孔が分布し晚材部に木部柔組織が塊状にある。道管の壁孔は交互状、穿孔は單一、放射組織は単列と3細胞幅、異性で背が高く直立細胞が目立つ。1年輪目は管孔配列や放射組織の型がその樹種の特徴を十分に示さないことが多いので分類群を特定することはできなかった。

イネ科 Gramineae 図版99-10.(12住 窓)

直徑約2mmの桿で中心部は一部壊れているが空ではないことから、タケ・ササ類やヨシ属ではないことがわかる。維管束は厚壁細胞からなる厚い層に囲まれ、桿の外周にある維管束ほどその層は厚い。草本性と思われるがイネ科の種類は多く、現生種の組織もまだ充分には調べられていないので分類群を特定することはできない。

(3) 結果

同定結果は時代別にまとめ、第3表に縄文時代の結果を、第4表に平安時代の結果を示した。

1) 縄文時代の炭化材

明らかにクリと識別できた材は8住・9住・32住から、コナラ節と識別できた材は34住と35住から出土した。「クリまたはコナラ節」と同定された材はほとんどの住居跡の炉・埋甕・土器内から認められた。炉から出土した材は燃料材の可能性が考えられ、「クリまたはコナラ節」が圧倒的に多い。またクマシデ属とクリ属は縄文時代後期の16住・17住・21住の炉からのみ出土し、中期からは検出されていない。埋甕から出土した材は「クリまたはコナラ節」とモミ属であった。

2) 平安時代の炭化材

5つの住居跡の竈から出土した炭化材はクリ・コナラ節・「クリまたはコナラ節」・「モモまたはウメ」・不明環孔材A・不明広葉樹・イネ科であった。不明広葉樹は当年枝であり、「モモまたはウメ」は2年枝が含まれていた。これらは竈から出土していることから燃料材と思われる。クリ・コナラ節・「クリまたはコナラ節」の材はすべての竈から認められる量的にも多かったことから、主要な燃料材であったと思われる。

3) P390・P398・P404の樹種

P390はコナラ節、P398はクリ、P404は「クリまたはコナラ節」であった。なおP398は放射性炭素年代が測定がされ、その結果は $4,470 \pm 120$ yrBPであった。

4) 炉と竈から出土した炭化材の特徴

上記の結果から、クリとコナラ節は縄文時代と平安時代の両時代から多数が検出され向時代に共通した主要な燃料材であったと言える。クマシデ属とクリ属は縄文時代から、「モモまたはウメ」と環孔材Aは平安時代から出土し、これらの樹種はそれぞれの時代性を示しているのかも知れない。

3 放射性炭素年代測定

山形秀樹(株)バレオ・ラボ)

試料は、アルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、炭化リチウム(カーバイド)の生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。

測定は、約一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを比例計数管(400cc)を用いて、 β -線を計数した。その結果は下記に示す。

なお、代値の算出には ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5570年を使用した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差(Onc sigma)に相当する年代である。

曆年代の補正是、CALIB3.0(Stuiver and Reimer, 1993; IBM-PC用: Reference(Stuiver and Pearson, 1993))を使用した。

第5表 年代別測定結果

測定No.	試 料	^{14}C 年代値(1950年よりの年数)	曆年代 (1σ)
PLD-168	炭化材 (クリ) Pit 398	$4,470 \pm 120$ yrBP (BC 2,520年)	BC 3,250年 (BC 3,350 - 2,920) BC 3,100年
PLD-169	炭化材 (トネリコ属) 19住 No.333	$3,740 \pm 110$ yrBP (BC 1,790年)	BC 2,140年 (BC 2,290 - 1,970)
PLD-170	炭化材 (クリ) 8住炉	$4,350 \pm 110$ yrBP (BC 2,400年)	BC 2,920年 (BC 3,100 - 2,880)

引用文献

Stuiver, M. and Reimer, P.J. (1993) Extended ^{14}C database and revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program.

第2節 高根町社口遺跡のテフラ

河西 学（財山梨文化財研究所）

社口遺跡は、八ヶ岳南麓の火山麓扇状地上に位置する。周囲には御岳第一軽石O n - P m Iを含むローム層が堆積し、遺跡の地形を構成している。本遺跡からは縄文時代草創期～早期の土器が出土している。これらの土器の出土地点は、南向き斜面で褐色土～黒褐色土が発達している。ここでは広域テフラを識別し、遺物包含層の層位を検討することを目的として以下のテフラ分析を行ったので、報告する。

1. 試料および分析方法

試料は、A61グリッド内の断面から採取された堆積物10点である。試料は、湿重約20gを秤量後、超音波装置で分散させ、分析盤で泥分を除去した。乾燥後、分析盤(#60・#250)で $>1/4\text{mm}$ および $1/4\sim1/16\text{mm}$ の粒径に分離別・秤量し粒径組成を算出した。なお試料の乾燥重量は、別に同一試料約5~10gを秤量ビンにとり秤量後、乾燥器で105°C、5時間放置して得られた乾燥重量から算出した。粒子観察は、 $1/4\sim1/16\text{mm}$ の粒径砂をスライドグラスに封入し偏光顕微鏡下で行なった。試料ごとに火山ガラス・風化物その他の粒子を含めた合計が1000粒になるように計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木(1980)の方法に従った。細粒結晶を包有するF型はF'型として区別した。火山ガラスの屈折率の測定は、位相差顕微鏡での浸没法(新井, 1972)による。

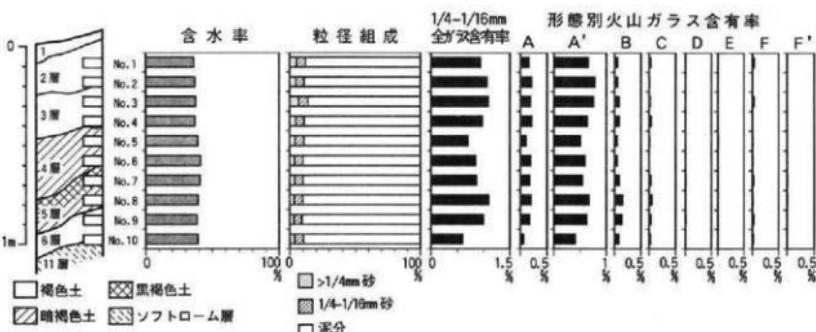
2. 分析結果

偏光顕微鏡下での火山ガラスの計数結果を第6表に示す。これをもとに湿重基準の含水率、粒径組成、 $1/4\sim1/16\text{mm}$ の全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率を算出し第154図に示す。なお $1/4\sim1/16\text{mm}$ 全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率は、試料単位重量当たりの $1/4\sim1/16\text{mm}$ 粒径の火山ガラスの割合で表示した(注1)。火山ガラスの屈折率測定値を第7表に示す。

含水率は、全試料を通じて36.1~41.3%と安定した値を示す。粒径組成では、 $1/4\text{mm}$ 以上の砂粒子が3.1~6.6%、 $1/4\sim1/16\text{mm}$ の砂粒子が6.0~7.1%とあまり大きな変化を示さない。なおNo.3において $1/4\text{mm}$ 以上砂粒子および $1/4\sim1/16\text{mm}$ 砂粒子が最大値を示す。 $1/4\sim1/16\text{mm}$ の全火山ガラス含有率は、No.3(1.09%)とNo.8(1.10%)の2層準で極大値を、No.5(0.70%)で極小値を示す滑らかな曲線を描く。形態別ではA'型がもっとも多く、No.3(0.75%)とNo.8(0.67%)の2層準で極大値を、No.5(0.51%)で極小値を示す。A型は、No.1~10で0.06~0.21%と低率で検出される。B型は、全試料で0.05~0.16%と検出される。

甲府盆地から八ヶ岳地域のテフラ分布から本遺跡で始良Tnテフラ(AT)以降に降灰が予想される広域テフラは、立川ローム上部ガラス質テフラ(UG, 約12000年前)、鬼界アカホヤ火山灰(K-A h, 約6300年前)、カワゴ平野石(K g, 2900~2800年前)などである。ATとK-A hは泡壁(ペブルウォール)型のA・A'型火山ガラスで、UGはB・C型火山ガラスで、K gはE・F型火山ガラスでそれぞれ特徴づけられる。

No.8におけるA・A'型火山ガラスは、屈折率が1.498~1.501(モード1.4995)を示すことから、約2.2~2.5万年前に噴出したATに対比される。さらにA・A'型火山ガラスを屈折率の差によってAT型とK-A h



第154図 社口遺跡A61地点での火山ガラス含有率

第6表 計数火山ガラス粒数（+は計数以外の検出を示す）

試料番号	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10
A 無色	23	34	27	34	17	31	28	32	26	10
A' 褐色										
火 A' 無色	95	127	106	102	78	95	88	103	102	64
山 B 無色	9	10	12	14	8	8	14	25	23	12
ガ C 無色	4	2	3	6	2		5	8	5	4
ラ D 無色							1			
ス E 無色							1			
F 無色	5	5			1	1	4	1	5	3
F' 緑褐色			1	1			1	1		
その他	864	825	845	842	893	865	859	829	835	907
合計	1090	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000

第7表 火山ガラスの屈折率

地点	試料番号	火山ガラスの形態	色調	屈折率(モード)	対比されるテフラ
B62地点	No.8	溶岩型(A-A'型)	無色	1.496-1.501(1.4995)	始良Tnテフラ AT

h型と区別してみた(第155図)。低屈折率のATと高屈折率のKA-h(主要レンジ1.509~1.511)との中の屈折率をもつ浸液(今回は屈折率1.5055を使用)と比較し、火山ガラス周縁部は厚さ約5μmのハイドレーション(水和)層を示し浸液屈折率より高いA-A'型をKA-h型火山ガラス、浸液より屈折率が低いA-A'型をAT型火山ガラスとした。測定の結果、すべての試料でAT型が優勢であることがわかった。KA-h型の明瞭なピークは認められない。しかしNos.1,2でKA-h型がやや安定して検出されることから、KA-h型のピークは確認できないものの、2層がKA-h降灰層準に近い可能性が推定される。なおNo.5とNo.8で検出されるKA-h型の水和層をもつ火山ガラスは、微量でかつ連続性に欠けることからKA-hからの二次的混入と判断される。したがって繩文草創期~早期遺物包含層は、KA-hよりも下位となり、従来の層位的事実と一致する。なお大市外ガイド遺跡では繩文早期押型文土器および茅山下層式土器を覆う富士黒土層中からKA-hの降灰層準が確認されている(河西, 1996)。

B-C型火山ガラスは、特にNos.8~10付近のものは、UGに由来する火山ガラスの二次堆積物である可能性が高い。八ヶ岳山麓のクロボク土中からは、長坂町中込遺跡・高根町の公園地域において、カワゴ平野石Kgが検出されている(河西, 1989, 1990)。今回Kg型の火山ガラスが検出されなかったことから、今回の分析試料はKgよりも下位であると考えられる。第155図に示されるように今回検出された火山ガラスの大部分がAT起源の二次堆積火山ガラスから構成されていることが明らかになった。ATの降灰層準はNo1よりも下位層準に推定される。したがって遺物包含層を含むこの地点の完新世の地層は、周辺地域に分布しているATを含んだローム質堆積物を母材とした風塵が、風成堆積することによって形成されたものと考えられる。

分析によって繩文草創期~早期遺物包含層とKA-hとの層位関係が明らかになった。また包含層は、AT火山ガラスを多く含むローム質の二次堆積物から形成されていると推定された。

注1 形態x型の火山ガラスの含有率Axは、 $Ax(\%) = (C/B) \times (E_x/D) \times 100$ で算出される。ただし、B:試料の乾燥重量(g)、C:1/4~1/16mm粒径砂分の重量(g)、D:計数した1/4~1/16mm粒径粒子の総数、Ex:計数したx型火山ガラスの粒数。

文 献

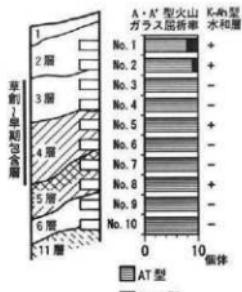
新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究、11、254~269。

遠藤邦彦・鈴木正章(1980)立川・武藏野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学、13、19~30。

河西 学(1990)長坂町中込遺跡試料のテフラ分析。『中込遺跡』、山梨県埋蔵文化財センター調査報告、第52集、36~40。

河西 学(1989)丘の公園地層のテフラと地形。『丘の公園第2遺跡』、山梨県埋蔵文化財センター調査報告第46集、165~184。

河西 学(1996)外ガイド遺跡のテフラ。『外ガイド遺跡』、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書、第117集。



第155図 A-A'型火山ガラス屈折率

第3節 社口遺跡出土土器の胎土分析

河西 学（徳山梨文化財研究所）

1. はじめに

高根町社口遺跡では、縄文時代草創期～早期の表裏縄文土器を中心として燃系土器・縄文土器などが出土している。これらの土器の产地を解明する目的で胎土分析を行った。さらに平安時代の29号住居址から出土している甲斐型土器・信州系黒色土器・ロクロ整形土器等などの土器についても产地推定を行った。

2. 分析試料・分析方法

分析試料を第8表および第158図に示す。分析方法は河西ほか(1989)、河西(1992)と同じである。

3. 分析結果

分析結果を第9表に示す。試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリックスの割合(粒子構成)、および砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を第158図に示す。重鉱物組成では右側に基数を表示した。

(1) 縄文時代草創期～早期の土器

粒子構成における砂粒子の含有率(含砂率)は、試料ごとに14.5～50.7%と多様であるが、全体的に含砂率が高い傾向がある。文様ごとの含砂率は、表裏縄文(Nos.5,8,9,19,30,37,112)で14.5～37.5%、表燃系裏縄文(Nos.18,27)で19.4～24.5%、燃系文(Nos.6,14,21)で14.6～50.7%、斜縄文(No.28)で32.8%を示す。表燃系裏縄文では2試料間で大差はないが、他の文様では文様ごとの含砂率の傾向性は認められない。

岩石鉱物組成では、大きく三分できる。Nos.5,6,8,18,27,112は、デイサイト・安山岩・変質火山岩類・泥岩・斜長石などで特徴づけられ、重鉱物組成では角閃石が主体をなし、斜方輝石・单斜輝石・不透明鉱物などが含まれる。Nos.9,19,21,28,30,37は、花崗岩類・重鉱物・石英などで特徴づけられ、重鉱物組成は黒雲母・角閃石から主として構成される。No.14は、変成岩(80.6%)が極めて多く、重鉱物・斜長石などが含まれ、重鉱物組成は黒雲母・綠簾石・不透明鉱物・角閃石などから構成される。その他の特徴を以下に記す。

No.5 斜長石は累層構造が顕著。安山岩とデイサイトが区別しにくい。安山岩は斜長石・不透明鉱物斑晶を伴う。デイサイトは新鮮なものと脱ガラス化したものがある。前者の方が多く含まれ、角閃石・斜方輝石斑晶を伴い、角閃石斑晶はときに周辺がオパライト化している。変質火山岩類はデイサイト質～安山岩質。植物珪酸体を含む。

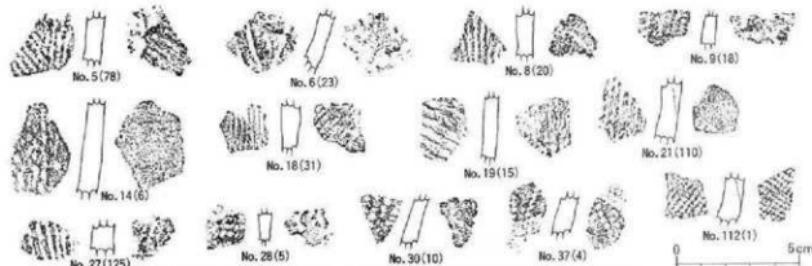
No.6 安山岩とデイサイトが区別しにくい。変質火山岩類はデイサイト質～安山岩質。植物珪酸体が多い。植物纖維が部分的に残存。

No.8 安山岩とデイサイトが区別しにくい。デイサイトは角閃石を伴い、脱ガラス化しているものが多い。変質火山岩類は第四紀火山岩の風化変質と推定される。植物珪酸体を含む。

No.9 多結晶石英は部分的に粒状の孔隙をもつ。おそらく長石が風化によって溶脱した痕跡と考えられ、本来は花崗岩類であったと予想される。本試料中には斜長石が他に比して少ないのはこれらの風化作用の影響かもしれない。角閃石はまれに反晶する。植物纖維を含む。

第8表 試料表

分析番号	遺跡番号	時代	源地	参考(考古学的観察に基づく)
No.5	78	縄文時代草創期～早期	表裏縄文	
No.6	23	縄文時代草創期～早期	燃系	底面削正
No.8	29	縄文時代草創期～早期	表裏縄文	燃系文脈
No.9	18	縄文時代草創期～早期	表裏縄文	
No.14	6	縄文時代草創期～早期	透光	斜面削式
No.18	31	縄文時代草創期～早期	表燃系裏縄文	
No.19	15	縄文時代草創期～早期	表裏縄文	羽状風磨文
No.21	1'0	縄文時代草創期～早期	透光	口唇部風磨文
No.27	125	縄文時代草創期～早期	表燃系裏縄文	
No.28	5	縄文時代草創期～早期	斜面	在地的セミ土器
No.30	16	縄文時代草創期～早期	表裏縄文	
No.37	4	縄文時代草創期～早期	表裏縄文	
No.112	1	縄文時代草創期～早期	表裏縄文	
A	29E26	平安時代	土師器	甲斐型
B	29E13	平安時代	土師器、黒色土器	いわゆる復刻系
C	29E21	平安時代	土師器、黒色土器	いわゆる復刻系、底部下部に手捺ちへタツリ
D	29E12	平安時代	土師器、黒色土器	いわゆる復刻系、底部下部に手捺ちへタツリ
E	29E10	平安時代	土師器	外部外面に指捺痕もつ
F	29E32	平安時代	土師器	甲斐型
G	29E19	平安時代	土師器	クロ口質
H	29E23	平安時代	土師器	外部外面上に凹き日もつ



第156図 繩文時代草創期～早期分析試料の拓影図（括弧内は遺物番号）

第9表 土器試料中の岩石礫物（数字はポイント数、十は計数以外の検出を示す）

No14 変成岩は、緑簾石・カルシウム角閃石片岩で、曹長石斑状変晶を多く含む点紋片岩である。カルシウム角閃石は、土器の焼成あるいは使用時の加熱のためか褐色を呈する。斜長石として計数した粒子のはほとんどは、曹長石斑状変晶が分離したものである。曹長石斑状変晶中には緑簾石・カルシウム角閃石などの細粒包有結晶が平行に配列してヘリサイト組織を示す(第15図)。また波動消光を示す石英・角閃石、および自形のザクロ石を含む石墨化岩などもわずかに含まれる。

No18 安山岩の一部はデイサイトと区別が困難なものがある。デイサイトは角閃石・斜長石・不透明鉱物斑晶をもち、ときに角閃石斑晶は部分的にオパサイト化している。角閃石は新鮮でときに双晶する。変質火山岩類はデイサイト質～安山岩質、植物形跡産生、植生地塊を含む。

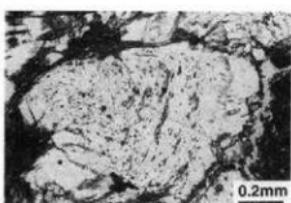
No.19 花崗岩類の斜長石は溶脱している可能性が強い。植物珪酸体がわずかに含まれる。

No21 デイサイトの石基は変質しカリウム染色反応あり。変質火山岩類は
アーバイト等、玄武岩類、輝石岩類等。

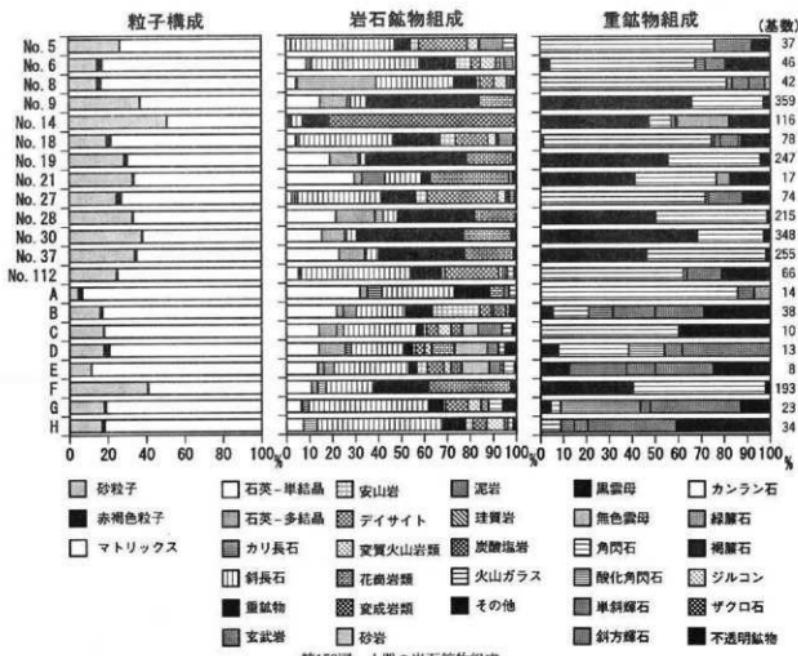
No27 デイサイトは、斜長石・角閃石・斜方輝石などの斑晶をもつ。変質火山岩類はデイサイト質～安山岩質。角閃石はデイサイト起源と思われる。

No28 花崗岩類の多くは、斜長石が溶脱している可能性が高い。植物珪酸

体をわざわざに含む。



1996-1997 學年上學期



第158図 土器の岩石鉱物組成

No.37 花崗岩類の斜長石は溶脱している可能性が強い。極めてまれに植物纖維質が含まれる。

No.112 石英の一部に新鮮な清澄なものあり。斜長石には累帶構造・アルバイト双晶が顕著なものあり。デイサイトは、新鮮なものも脱ガラス化したものもあり、角閃石・斜長石斑晶のほか斜方輝石・不透明鉱物を伴い、角閃石はときにオパサイト化する。斜方輝石は多色性がやや強く、淡緑色～ピンクがかった褐色を呈する。砂岩中に花崗岩類粒子が含まれる。

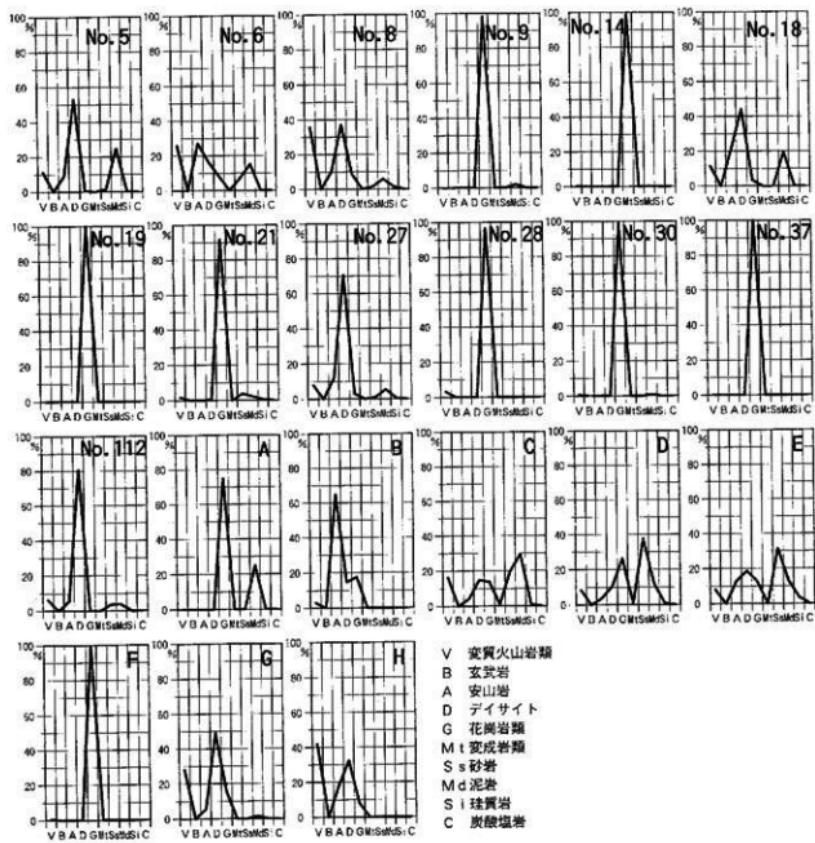
(2) 平安時代の土器

含砂率は、器種ごとに明確に異なり、同一器種内での規則性も認められる。器種ごとの含砂率は、甲斐型壺Aで4.7%、信州系黒色壺B・C・Dで16.2~17.8%、土器壺Eで11.4%、甲斐型甕Fで40.5%、ロクロ甕G・Hで17.0~18.1%を示す。

岩石鉱物組成では、本遺跡の縄文土器に比較して石英・斜長石・カリ長石などがやや多い傾向がある。甲斐型壺Aは、斜長石・石英・重鉱物が多く、花崗岩類・泥岩・火山ガラスなどを伴い、重鉱物組成では角閃石が卓越し、单斜輝石・綠簾石が含まれる。信州系黒色壺B・C・Dは、石英・斜長石・花崗岩類・デイサイト・安山岩・火山ガラスに着目すると二分され、Bは安山岩(20.7%)が特徴なのにに対し、C・Dは砂岩(6.7~14.0%)・泥岩(4.5~10.1%)が検出で特徴づけられる。重鉱物組成では、斜方輝石・单斜輝石・角閃石・酸化角閃石・黒雲母・不透明鉱物などから構成される。土器壺Eは信州系黒色土器のC・Dと極めて共通性の高い組成を示す。甲斐型甕Fは花崗岩類と重鉱物が多いことで特徴づけられ、重鉱物組成では角閃石・黒雲母が卓越する。ロクロ甕G・Hは、斜長石が(52.2~54.7%)と多く、デイサイト・安山岩・変質火山岩類・花崗岩類・火山ガラスなどが検出され、重鉱物組成では斜方輝石が多く、单斜輝石・酸化角閃石・角閃石・不透明鉱物などを伴い、互いに類似性の高い組成を示す。その他の特徴を以下に記す。

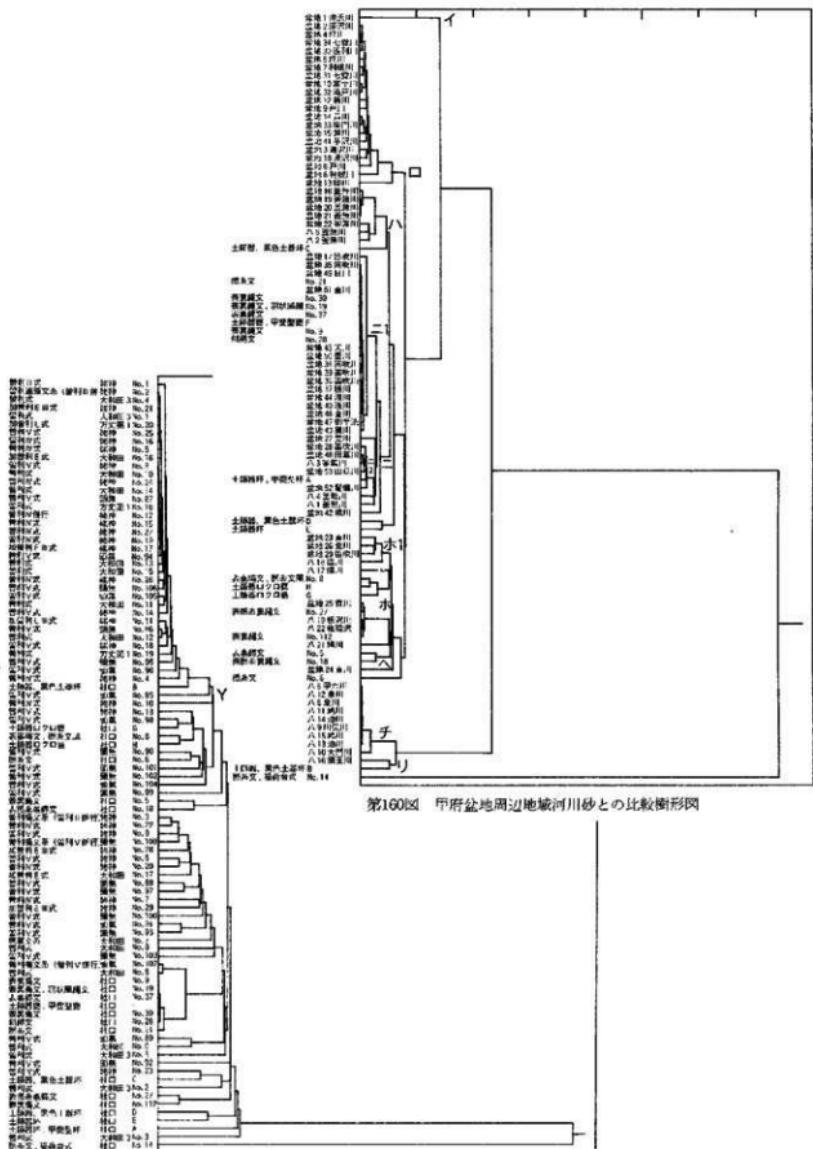
A 砂分が極めて少ない。植物珪酸体がわずかに含まれる。

B 石英は火山岩源と推定される清澄なものが含まれる。安山岩は、斜長石・斜方輝石・单斜輝石・不透明鉱物などの斑晶をもつ。デイサイトは角閃石・酸化角閃石・斜方輝石・斜長石斑晶をもつ。変質火山岩類は安山岩質～デイサイト質。花崗岩類の一部にマイクログラフィック組織が認められる。植物珪酸体を含む。



第10表 岩石組成による土器の分類

折れ線グラフによる分類	試料番号	クラスタ分類
変質火山岩類の第1ピーク デイサイトの第2ピーク	H	ホ・ト
安山岩の第1ピーク 変質火山岩類の第2ピーク	No. 6	ヘ・ホ
花崗岩類の第2ピーク	B	リ
デイサイトの第1ピーク 顯著な第1ピーク	Nos. 27, 112	ホ
変質火山岩類の第2ピーク	No. 8, G	ホ・ト
泥岩の第2ピーク	Nos. 5, 18	ホ
花崗岩類の第1ピーク 顯著な第1ピーク	Nos. 9, 19, 21, 28, 30, 37, F	ニ1
泥岩の第2ピーク	A	ニ2
変成岩の第1ピーク 顯著な第1ピーク	No. 14	?
砂岩の第1ピーク デイサイトの第2ピーク	E	ハ・ニ?
花崗岩類の第2ピーク	D	ハ・ニ?
泥岩の第1ピーク 砂岩の第2ピーク	C	ハ



第160図 甲府盆地周辺地域河川砂との比較樹形図



- C 砂岩中に花崗岩顆粒が含まれる。ホルンフェルスは蒸発母が生じている。植物珪酸体を含む。
- D 砂岩中に化巖岩顆粒が含まれる。ホルンフェルスは黒雲母が生じている。半斜長石は双晶する。安山岩岩脈はデイサイト質が多い。植物珪酸体をわずかに含む。
- E 砂岩中に花崗岩顆粒が含まれ、砂岩の基質は珪質である。マトリックス中に植物珪酸体と珪藻類を含む。
- F 植物珪酸体を含む。花崗岩類は、ジルコン・黑雲母・角閃石・石英・斜長石・カリ長石などからなる。
- G 変質火山岩類はデイサイト質～安山岩質である。火山ガラスの一部は、カリウム染色反応を示す。植物珪酸体を含む。
- H デイサイトは斜長石斑晶をもち、一部は脱ガラス化している。変質火山岩類は、デイサイト質～安山岩質。デイサイト質質火山岩類には、カリウム染色反応がある。植物珪酸体を含む。

4. 岩石組成折れ線グラフおよびクラスター分析による土器の分類

変質火山岩類（含む「緑色凝灰岩」）・玄武岩・安山岩・デイサイト・花崗岩類・変成岩類（含むホルンフェルス）・砂岩・泥岩・珪質岩・炭酸塩岩のポイント数の総数を基準とし、各岩石の構成比を折れ線グラフに示した（第159図）。折れ線グラフの類似性から第10表のように便宜的に分類される。同じ10種の岩石データを用いてクラスター分析を行なった。クラスター分析での非類似度は、ヨークリッド平均距離を用い、最短距離法によって算出した。甲府盆地および八ヶ岳南麓地域の河川砂との比較を第160図に、八ヶ岳南麓縄文中期末土器との比較を第161図に示す（河西ほか, 1989; 河西, 1989, 1990）。第160図のクラスター群の呼称は河西（1992）と同様である。

5. 產地推定

(1) 縄文草創期～早期土器

在地的上器が存在しない。

変成岩で特徴づけられるNo14は、稻荷台式撚糸文土器で、明らかに撒入土器である。稻荷台式土器は、関東地域に分布の中心があり、社口遺跡は分布帯の縁辺部に位置する（原田, 1991）。関東地域での変成岩には、関東山地三波川帯の変成岩、丹沢山地の丹沢変成岩、筑波山周辺の筑波変成岩などがある。No14の変成岩は、曹長石斑状変晶をもつ点状片岩であることから、高圧型の三波川帯起源の岩石と考えられる。さらに変成岩以外の岩石の混入が極めて少ないとから変成岩露出山地域が隣接地域で土器原料が採取された可能性がある。No14の產地は、埼玉県北部～群馬県西南部の三波川帯分布地域周辺に推定される。

花崗岩類を主体とするNos.9,19,21,28,30,37は、花崗岩類を流域にもつ笛吹川およびその支流の奥東地域河川砂と類似性が高いことから、甲府盆地では奥東地域が産地である可能性が高い。ただしそれより遠方の花崗岩類地域でつくられ撒入された可能性も高いと考えられる。なお縄文土器No28は、考古学的観察で在地的とされたが、分析結果からは職人上器であることが判明した。

デイサイト・安山岩を伴う土器Nos.5,6,8,18,27,112は、塩川・荒川地域の河川砂組成と類似性が強いことから、これらの地域で製作された可能性がある。ただし北八ヶ岳を含む長野県方面でも同様の地質条件が存在することから、より遠方地域からの搬入も検討する必要がある。なお、第161図のクラスターYに含まれる大部分の上器は、安山岩を主体とし八ヶ岳南麓地域において在地的上器と推定されているが、社口遺跡草創期～早期土器との類似性は乏しい。

縄文中期では、八ヶ岳南麓地域およびこれに隣接する塩川地域・釜無川地域において、各地質を反映した在地的胎土をもつ土器が出土することから、各地域で土器を生産していたことが推定されている（河西ほか, 1989）。これに対し社口遺跡の縄文草創期～早期土器には、在地的土器が含まれていない。富士吉田市古屋敷遺跡の縄文早期後半の土器においても、遺跡が緑色変質した変質火山岩類からなる第三系分布地域に属することから在地的と判断された土器はあるが、富士山火山起源噴出物で特徴づけられるような顯著な在地的土器はなかった（河西・中村, 1990）。この状況は社口遺跡とやや類似する。土器の生産や移動に関する縄文草創期～早期の状況と縄文中期末のそれとは異なっていた可能性が暗示される。

社口遺跡に土器を残した人々が、直接外部から八ヶ岳南麓へ移動してきて、八ヶ岳南麓内の交渉がないと仮定すれば、今回のような胎土組成が想定される。この場合、八ヶ岳南麓内には在地的土器が製作されている可能性が残される。これに対し本遺跡の土器組成が八ヶ岳南麓における複雑な移動の結果生じたものであるとすると、当時八ヶ岳南麓で土器が製作されていた可能性はかなり低いことになる。もしそうであれば、縄文中期末のように八ヶ岳南麓内で土器がつくられるようになったのはいつからか、興味深い。いざれにしてもこの地域のこの時代のデータが充分とはいえないで、今後継続的調査が必要であろう。

(2) 平安時代土器

八ヶ岳南麓でつくられたと推定される土器はない。

甲斐型坏Aは、笛吹川とその支流の田草川・磐梯川および釜無川河川砂などで構成される=2群に含まれる。甲斐型坏Fは、笛吹川とその支流の河川砂からなる=1群に含まれる。一宮町孤原遺跡の分析結果は、甲斐型坏がニ群と二群との間に位置し、甲斐型坏はニ群に属する点で社団遺跡と極めて類似性が高い。(河西、1996)。甲斐型坏Fの产地は、笛吹川流域に推定される。甲斐型坏Aの产地は、細粒で含有岩石粒子が少ないことから推定精度は低いと思われるが、笛吹川流域および釜無川流域に可能性が推定される。

信州系黒色土器は、Bが須玉川河川砂との類似性が強く、Cは釜無川地域の河川砂ハ群と融合し、Dは土器器坏Eとが類似性が高くハ群と二群とが融合したクラスターに融合している。これらの上部器は、甲府盆地周辺の河川砂と直接類似性が高いわけではない。Bと融合する須玉川河川砂は、須玉町穴平産で、花崗岩類が検出されていない点でBとは異なる。Cは泥岩・砂岩が多い点で釜無川の河川砂とは異なる。CおよびD・Eは第160回で離れて位置するが、岩石組成が似ていることから、ほとんど同一の产地のものと推定される。山梨でこのような岩石組成が得られる可能性がある地域は、須玉川下流域から塩川流域があげられる。しかし信州系黒色土器の分布の中心が長野県側にあることから長野地域の調査をもって、产地について再検討する必要があるだろう。なお三辻(1994)・三辻ほか(1994)は、北巨摩地域の信州系黒色土器について蛍光X線分析での胎土分析を行っているが、在地的か搬入かの判断基準として消費遺跡のデータ(山梨県須玉町大小久保遺跡、長野県松本市小原遺跡)だけを使用している点で問題が残る。

ロクロ形H・Gは、塩川・荒川地域河川砂から構成されるホ・ト群に含まれる。ト群をなす塩川河川砂は、須玉町東向産で、変質火山岩類が特徴である。変質火山岩類は、デイサイト質・安山岩質で、一部カリウムに対する染色反応が認められる。II・Gは、保坂(1988)のロクロ形十節器窯の火炎に相当する。ロクロ形の大要は、藤井平を中心に律令時代の巨麻郡内にのみ分布し、八ヶ岳南麓にはロクロ形十節器窯の小窯が分布するとされている(保坂、1988)。社団遺跡は從来小窯が分布するされる地域に属する。保坂(1988)は、製作技法の特徴からロクロ形十節器窯は須玉器工人によって製作されたものであり、それらの工人集団は8世紀後半に「ロクロ形土器窯のはとんどの類型がみられる藤井平周辺地域にまで定着した可能性があろう」としている。今回の結果はこの推定に肯定的なものとなっている。変質火山岩類がH・Gに多いことは、風化による変質を反映している可能性がある。藤井平に近接する塩川河川砂試料(八21)は、デイサイト・安山岩が多く、変質火山岩類が少ない。河川砂粒子には風化殻が急速にいくが、段丘化した河床の堆積物はその場にとどまり段丘堆積物として風化・土壤化が進行していくと考えられる。藤井平付近の塩川河川砂組成とH・Gの岩石組成とは関連性があると考えられる。今後藤井平周辺での堆積物を分析対象にすることが有効かもしれない。

【謝辞】文末ながら地質調査所の奥山(橋瀬)康子氏には変成岩について懇切にご教示いただきました。記して感謝いたします。

注1) 平安時代土器試料の拓影写は報告書本文を参照のこと。

注2) ここではデイサイト・流紋岩を含む近長質火山岩の総称としてデイサイトを使用する。

文 献

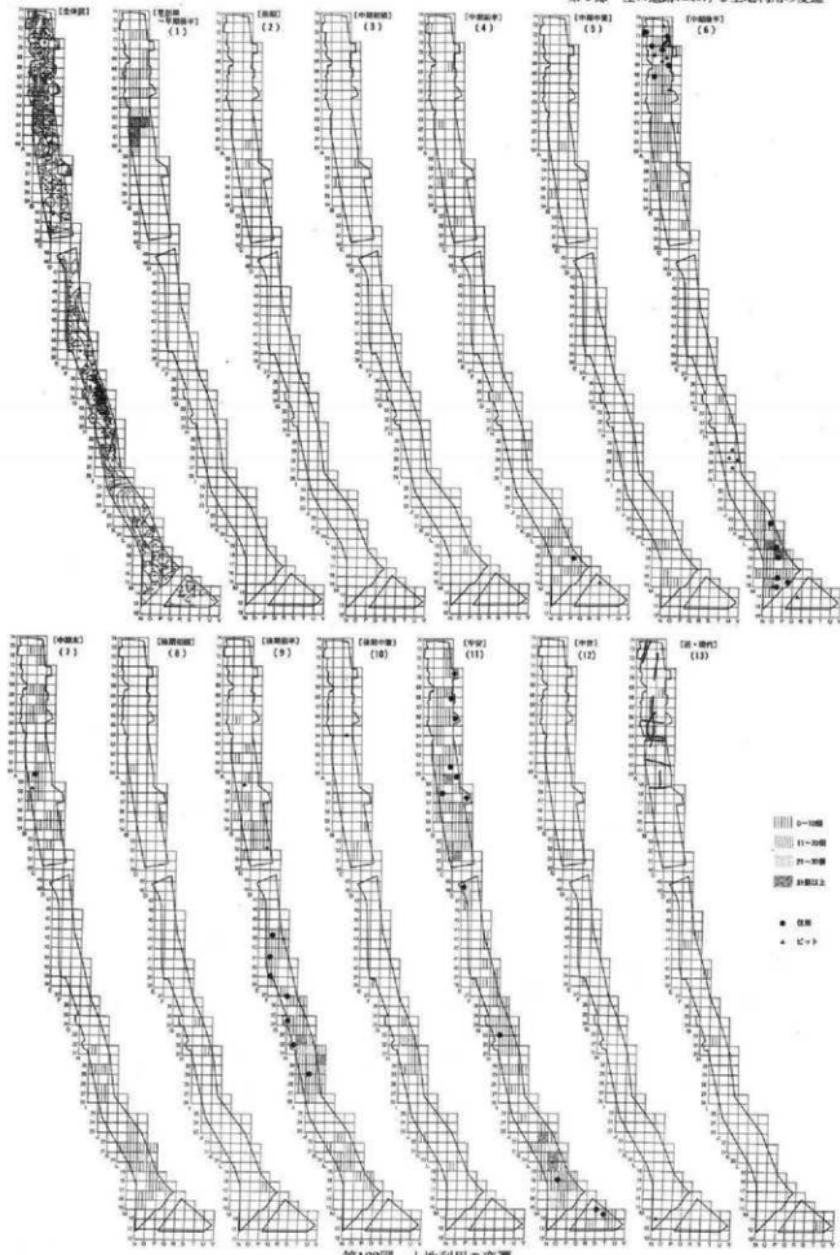
- 原田昌幸(1991)『信州系土器様式』考古学ライブラリー、61、134p.、ニューサイエンス社。
 保坂康夫(1988)山梨県下における古代前半のロクロ形土器窯をめぐって。山梨県考古学協会誌、2、60-89。
 河西 学(1989)甲府盆地における河川堆積物の岩石組成・土器胎土分析のための基礎データー。『山梨考古学論集』II、山梨県考古学協会、505-523。
 河西 学(1990)人和田第3遺跡出土馬文土器の胎土分析。『大和田第3遺跡』、大泉村埋蔵文化財調査報告書、8、19-29。
 河西 学(1992)岩石組成からみた編目土器の产地推定-山梨県积迦堂遺跡・那藏地遺跡・柳坪遺跡の場合-。帝京大学山梨文化財研究所研究報告、4、61-90。
 河西 学(1996)孤原遺跡出土甲斐型土器の胎土分析。『孤原遺跡』、山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告第120集、91-93。
 河西 学・柳原功一・人村昭三(1989)ハヤカワ南麓地域とその周辺地域の編文時代中期末土器群の胎土分析。帝京大学山梨文化財研究所研究報告、1、1-64。
 河西 学・中村哲也(1990)古層遺跡早期第IV群土器の胎土・製作技法の特徴。『古層遺跡発掘調査報告書』、富士吉田市史史料叢書、8、98-124。
 三辻利一(1994)健康村遺跡出土の信州系土器の蛍光X線分析。『長坂町健康村遺跡』、新宿区区民健康村遺跡調査団、129-142。
 三辻利一・板倉恵之・山田真一・瀬田正明(1994)山梨県における長野系土器の蛍光X線分析。日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集、85-86。

第5章 遺構・遺物の分析

第1節 社口遺跡における土地利用の変遷

時期の明確な住居址・ピット類の分布状況と、遺構外土器類（陶磁器を含む）の出土状況を通して、社口遺跡での土地利用状況の変遷を大づかみに把握する。時期細分は土器の時期細分に応じ、より細かくすべきであるが、ここでは草創期～近・現代までを13段階に粗く分け、遺構と上器類の分布を重ね合わせた（第162図）。なお土器類の出土量について、遺構外グリッド出土資料中の文様・器形で時期が明確な点数を合計し、色分けしたもので、カウントに際しては口縁など部位を限定していない。また遺構内からは遺構に伴わない時期の資料が多く出ているが、それらは考慮していない。また平安時代土器類や草創期～早期についても小破片でも識別が容易であるため厳密な点数となり、それらと他の時期の点数比較は単純にはできない。

- (1) 草創期～早期前半 59グリッドから北側の北台地斜面から北台地上にかけて遺物分布がある。詳細については第3章第1節を参照。表裏陶土器群・燃系土器群が台地上からB59グリッドまで広範囲に散布するのに対し、やや新しい押型文・沈線文（戸田下層式）は59～60グリッド付近の斜面下部～低地に狭い範囲で見られ、わずかに分布範囲を異にしている。これらの地区より南側では、この時期の遺物の散布は石器を含めて皆無である。なお早期後半では早期末かと思われる土器が232号ピット（D55グリッド）で、また試掘時にO14グリッド付近で鐵縫を含んだ条痕文系上器片1点が出土している。早期までの段階では遺構としては確実なものはないが、斜面に構築された被熱痕のある配石（406号ピット）は中期以降の可能性が十分あるものの、この段階に伴う可能性も残されている。おそらく67グリッドより北側の北台地上に主な居住域があり、南側斜面を含む一帯を日常的な行動域としていたのではないかと想像される。
- (2) 前期 前期前半～中葉頃と思われる破片が数点、54～60グリッド付近で出土。遺構はない。関連遺跡として本遺跡に近接する青木北遺跡で諸磯c式の出土があり、天神遺跡（大泉村）で諸磯b・c式期を主とした人集落址が出ている。諸磯式期以前の居住痕跡となると、八ヶ岳南麓では全体的に稀薄である。
- (3) 中期初頭（五領ヶ台式期） 五領ヶ台II式期の土器が56～59グリッド付近とO18グリッドにある。遺構はない。周囲の遺跡では青木北遺跡、加東久保遺跡、持井遺跡、当町遺跡などに見られ、高根町内では五領ヶ台末から洛附式期にかけての良好な資料が散見される。
- (4) 中期前半（落沢式期～藤内式期） 中期前半のうち落沢式のみ分布する。南台地上P17グリッドに34号作、25住に重複して413号ピットがあり、それらの周囲では遺物が集中して出土した。またそのほか52グリッドから北側に散在するほか、29・34グリッド付近にも分布する。時期は多摩・武藏野編年（1996 黒尾・小林・中山）でいうと5b期で、三角の印記文を残すやや古手のものも見られる。
- (5) 中期中葉（井戸尻式期～曾利I式直前段階） N18・19グリッドの31号住に曾利I式直前段階の資料が多くあり、それに関連して15～19グリッドにまとまりがある。また他地点でも少數が散在する。本遺跡西側の青木遺跡でも井戸尻式期の遺物が出土している。
- (6) 中期後半（曾利式期） 曾利II～IV式期を主とする北台地上と、曾利I式期の南台地に大きな分布範囲がある。北側の集中域は台地上にある6軒の住居址（7・8・9・10・13・14号住）とピット（4・21・22・25・33・41・55・86・95）に関わるもので、曾利II～IV式期を中心とする。土器は台地南斜面から55グリッド付近の低地にも広く及んでいる。南台地の集中域は曾利I式期の6軒の住居址（27・28・30・31・32・33号住）とピット（401・408号ピット）に関わるもので、遺物範囲は台地上に集中している。これらも本来土器細分に応じて細別すれば、より動きが明確になるだろう。また南台地の曾利I式期集落に伴うと推定された4基の集石炉（381・382・390・398号ピット）周辺にはわずかな上器散布があるのみで、曾利I式土器の散布は少ない。南台地上から北台地上への住居変遷が推測されるところではあるが、1・2次調査で中期中葉の遺構が北台地上でも出ており、北台地上で中期中葉から後半にかけての動きが連続する可能性がある。そうであれば南台地の曾利I集落を北台地からの拡散と解釈できるし、あるいは北台地と南台地では全く無関係にそれぞれの時期に集落が成立した、とみることもできる。
- (7) 中期末（曾利V～加曾利IV式期） B59グリッドに3号住があり、3号住から南側の低地に散布域が見られる。また北台地上にも散布する。また遺構は確認されていないものの31グリッド以南、とくに南台地上に集中



第162図 土地利用の変遷

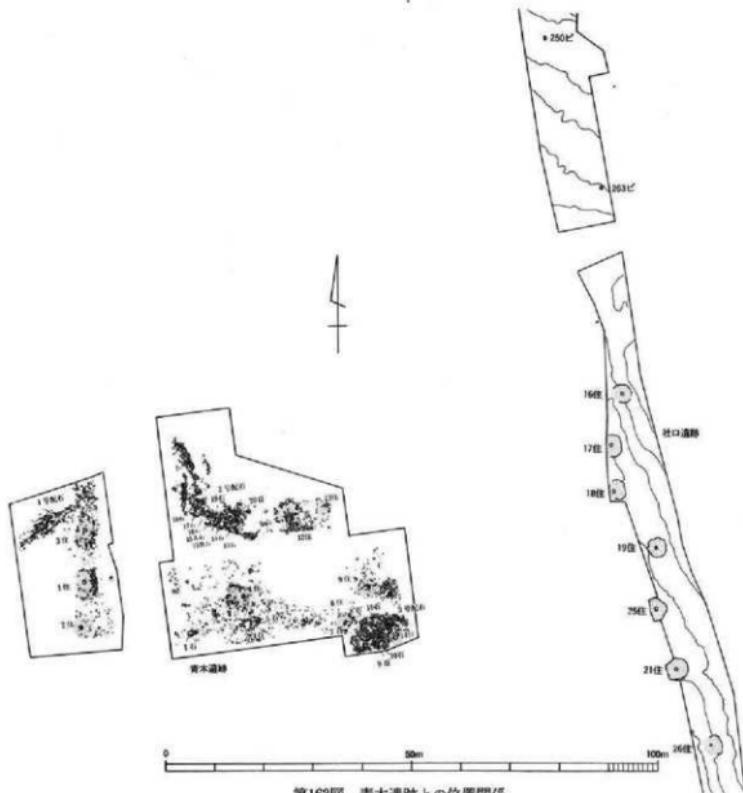
域がある。このように中期後半からの傾向として、低地への活動域の進出が顕著になりつつある。

(8) 後期初頭（加曾利E末～称名寺式期） 低地～南台地に少量が散在するのみ。遺構はない。

(9) 後期前半（堀之内式期） 住居址（16・17・18・19・21・35号住）・埋甕炉（250・263号ピット）のある低地を中心に土器が分布し、遺構の検出されていない。南台地上にも多くの遺物が散布する。青木遺跡が低地の西側50mに位置し、青木遺跡と同一集落、または青木遺跡に先行する集落と思われる。青木遺跡が堀之内2式期～加曾利B式期中心で、後期後半まで存続する集落であり、加曾利B式期頃に大規模な石棺墓や配石が構築されたらしいが、住居址の時期認定が明確にできていない。今後、青木遺跡の各住居址の時期細分を行った上で、青木・社口の集落景観を復元する必要がある。社口遺跡は青木遺跡とはやや距離がある感もあるため、青木遺跡とは別の周辺集落とみるべきなのかもしれない。仮に同一集落であるならば幅120mに及ぶ集落域となり、その中心付近に3号配石が位置する（第163図）。いずれにせよ、本時期になると低地面が居住域として利用され、中期後半とは集落立地が大きく異なっている。

(10) 後期中葉（加曾利B式期） 後期前半の分布域を踏襲するように低地を中心に散布し、21号住周辺など集中箇所が限定されている。遺構には143号ピット（C63グリッド）で小破片が出ている以外には明確なものはない。

(11) 平安時代 北台地上（5・6・12号住）・低地面（1・2・4・20・24・37号住）・南台地上（24・25・29号住）に9世紀中～10世紀後半頃の居住域があり、それらの周辺を中心としてはほぼ全域にわたり土器類が分布している。西側には青木北遺跡・東久保遺跡・旭東久保遺跡が存在し、本遺跡37号住の墨書き土器は青木北遺跡出土



第163図 青木遺跡との位置関係

例と文字内容・書体共に一致しており、現時点では低地面集落の広がりの中で本遺跡での分布状況を理解したい。ただ平安時代集落も4段階程度の時期細別ができるので、住居の消長・遺物や遺構内容の検討をしたうえで、改めて台地上や低地面に分布する居住域の違いを含めたマップの形態のあり方を考える必要がある。なお、後期後半以降9世紀中頃までの間、遺物は全く存在せず、土地利用が停止されていたのではないかと思われる。

② 中世 主に内耳上器片が低地面・南台地上で少量出土し、遺構としては南台地上の401号ビットが唯一である。おそらく15・6世紀代のものであり、平安時代以降15世紀までの間は土地利用の痕跡が認められない。南台地上には中・近世頃の城もあり、付近の集落の城として、あるいは屋敷地の後背地として城等に利用されたのであろう。

③ 近・現代 ほぼ全域から少量出土している。茶碗・瓦片などが出ており、地墳と思われる溝などが北台地上から南斜面にかけて多数見られ、屋敷地ではなく畠地としての土地利用が行われている。

第2章 繩文時代草創～早期の土器

(1) 土器群の分類・細別 (第164図)

社口遺跡の表裏繩文を中心とした土器群は、燃糸文土器との並行関係を解明する上で絶好の資料であったが、残念ながら二次堆積中の出上のため遺構内での共伴関係・層位的な上下関係を正しく確認することができなかつた。したがって局地遺跡での事例や燃糸文土器の変遷過程を参考にしながら、土器群の変遷を推定したい。なお、本稿執筆にあたっては、谷口康浩・広瀬昭弘両氏からのご教示を大いに参考にしている。

1 群土器 直行口縁の上器 第55図5の土器1個体のみ。薄手の直行口縁で小波状を呈し、外側に横位施文の文様帯をもち、内側は無文で指痕が残る。

2 群土器 表裏繩文(系) 土器 表裏ともに斜繩文を主とする。

2 a - 強い肩部口縁の表裏繩文土器 角頭状口縁で、口唇に1部位施文をもつ。外側は15では縦位施文で綫羽状繩文であり、13は2段の斜位施文により横羽状の文様帯とする。内側は横位施文の斜繩文となる。羽状繩文をもつものに56があり、この類の可能性がある。

2 b - 肥厚・屈曲口縁の表裏繩文土器 口縁は角～丸頭状で、口唇1～2部位施文する。不明瞭な頸部文様帯をもつ。1・4・8はいずれも口縁はやや強く屈曲し、頸部文様帯は幅広である。施文方向は縦・横あり、1では頸部を斜位・肩部を横位とし、4では頸部を横位の横羽状とする。また8では頸部を縦位回転の斜繩文とし、肩部を斜位回転の横繩文とする。内側は横位全面施文らしい。なお1には瘤状貼付文がつくようである。

2 c - 外反口縁で口唇施文のある表裏施文土器 12・16・19は角頭状口縁で、口唇1部位施文し、外側は縦位施文による斜繩文(12・16)と、横位施文による斜繩文(19)がある。内側は横位の全面施文のようである。

2 d - 弱い外反口縁で口唇施文のない表裏施文土器 17は口縁が丸頭状で、口唇施文はない。外側は粗い無筋繩文。

2 e - 非常に弱い外反口縁の繩文土器で裏面施文なし 裏面施文はないが、2群の流れをくむ一群である。91～95は丸頭状口縁で、口唇施文はなく、裏面は無文。外側は粗い無筋繩文である。

3 群土器 燃糸文系土器・模倣土器(裏面施文土器を含む)

3 a - 井草I式類似土器 102～104の土器。惜しくも裏面が剝離した口縁部小破片のため全体像は不明。肥厚口縁で繩文施文し、口唇は2部位施文と思われる。

3 b - 井草II・大丸式類似土器 22は表裏糸文繩文で、口縁が屈曲・肥厚し、口唇1部位施文する。内側は単節繩文で横位施文しており、全面施文の可能性がある。105は口縁が肥厚し、口唇1部位施文をもち、内側にも燃糸文を施文する。107・112は口縁が外反し、口唇1部位施文をもつ土器。107は太く粗い燃糸文であるに較べ、112は細く密。内側は107では横位1段施文し、112ではさらに下方まで施文するようである。113も口唇施文があり、外側はかなり粗い施文である。31は表裏施文した胴部片で、表面の燃糸は細く密で、井草II・大丸式～夏島式に類似する。

3 c - 夏島式類似土器 21は口唇施文なく、外反が弱く直行口縁に近い。内側も施文するが、同一原体の燃糸文で施文するため、胴下半には及んでいないだろう。24は口唇が長くのびた丸頭状である。内側施文はない。114～120は粗い燃糸文で、網目状になる可能性もある。口唇施文はなく、丸頭状で、外反は非常に弱い。内側施文は口縁直下に1段のみ行う。

3 d - 稲荷台式類似土器 6は直立した角頭状口縁で、口唇上・内側の平らなナデが特徴的である。



第164図 繩文草創期～早期の土器変遷図（破線で囲んだ土器は位置付けが不明）

4 群土器 織文をもつ燃糸文模倣の表裏織文土器 織文又は燃糸文を縦位施文した燃糸文系上器様式（第2様式期以降）の影響と推定した。

4 a - 屈折・角頭状口縁で、口唇1部位施文 11は胴部下半の状況が不明であるが、内面は全面施文だらうと思われる。

4 b - 外反・角頭・丸頭状口縁で、口唇1部位施文 3は口縁部に瘤状貼付文をもつ上器で、内面は全面施文かと思われる。7は丸頭状でやや肥厚し、口唇1部位施文があり、瘤状貼付文がある。10は胴部中ほどまでの破片で、内面は全面施文らしい。

4 c - 弱い外反・丸頭状口縁で、口唇施文なし。14は口縁が稍曲がり、内面は全面施文かと思われる。20は燃糸文の可能性もある無筋縄文で、内面は胴部上半程度に内面施文する。97～100の胴部片もこの類であろう。

5 群土器 網目状燃糸文土器

5 a - 内面施文をもつ弱い外反の網目状燃糸文土器 121は丸頭状口縁で、外面に交互施文による網目状燃糸文を、内面に横位施文の燃糸文をもつ。口唇部施文はない。

5 b - 弱い外反の網目状燃糸文土器 23・25は丸頭状口縁で内面施文がなく、外面に粗い燃糸文を交互に網目状に施文する。口唇部施文はない。

6 群土器 押型文土器

6 a - 立野式系の土器 138は縦位施文した山形文をもつ胴部片で、他に同一個体が1片あるのみ。

6 b - 細久保段階の土器 139～145は細かな梢円押型文を施文する。

6 c - 太い縄文！梢円押型文土器 胴部片で、上方に径8mmほどの大粒の梢円文を施文し（施文方向は不明）、下方に径4～5mmの太い扁筋縄文を縦位施文し、斜縄文とする。非常にゆるやかに外反した破片で、口縁部に近い部位の可能性がある。

7 群土器 沈線文系土器・川口下層式土器 149・150で、沈線間に刺突文を加えた川口下層式類似の小破片。

(2) 草創期末～早期土器群の段階設定

表裏織文土器は文様の変化に乏しく、器形もまた人気な変化を示さない十器群である。時期に関する論議は近年活発であるが、資料が充実しつつある今日においてもまだ意見がさまざまに分かれている。本選跡でも確実な時期設定の根拠がなく、しかも口縁部片など一部による土器全體像の推定に依っているため、いろいろな解釈が可能となっている。ここでは関東の燃糸文系上器様式の変遷概を基準とするとともに、周辺の遺跡例、近年の論議を参考にして段階設定案を提示したい。

1期 井草I直前段階 2 a群段階。1群土器もこの段階か、あるいは前段階、もしくは1～2期に位置づけられると思われる。井草I式の肥厚口縁出現直前段階には屈曲・外反した口縁で、頸部文様帶の未充達な上器群が存在するといわれ（原田 1991）、2 a群は本段階と考えられる。15のような綫羽状縄文類似例として長野県柄原岩陰遺跡では深度の深いところから出土したものがあり、柄原の表裏織文土器群中では古く考えられている。1群上器は草創期の峯谷下層式・鳥浜貝塚・三の原遺跡の直行口縁からの系譜が考えられるところではあるが、本資料のみ突出して古いとするのは不自然であろう。口縁部文様帶が2期の頸部文様帶につながることも予想でき、屈曲した口縁部を備えない土器としてみた場合、頸部文様帶をもつ土器として2期とすることもできる。

2期 井草I式併行段階 3 a・3 b群段階。頸部文様帶をもつ表裏織文土器が生じ、少量ではあるが井草I式的な十器があることから井草式からの影響を受けた、あるいは井草式に影響を与えた段階であろう。県内では上野原町仲大遺跡に近接して井草I式的な上器と表裏織文土器が出土し、表裏織文土器は口縁部が屈曲した内外全面施文土器で、本期の口縫形態に類似する。山形真理子氏が井草I式として積極的な評価をするのに対し（山形 1991）、戸山哲也氏は後出すると考へている（戸山 1994）。

3期 井草II・大丸併行段階 3 b・2 c群段階。4 a・4 b群上器は紙縄文、または紙縄文を意識した施文があり、燃糸文第II様式の模倣、あるいはその影響によると思われるものである。口縁部形態の変遷が2群土器と同一方向をたどると予測し本段階とする。屈曲口縁の4 a群を3期でも前半に、また外反口縁の4 b群を後半としたい。県内では富士吉田市池之元遺跡住居址（阿部 1988）で表裏織文土器（口縁が弱く外反、口唇1部位施文、外面横・縦位施文の斜縄文、内面口縁部付近に施文）、燃糸文土器（口唇1部位施文し、内面口縁部付近に1段程度施文、外面は縦位・斜位施文）、山形押型文土器（厚さ1cmほどの厚手）が伴っている。燃糸文土器は大丸式併行と思われ、また押型文は立野式系の上器である。この中で表裏織文土器と燃糸文土器が器形・施文手法とともに同調する点、古手の押型文土器が伴う点は重要である。報告者の阿部芳郎氏はそれらを燃糸文末期に位置づけているが、施文技法から燃糸文第2様式併行ではないだろうか。池之元の押型文土器は本遺跡出土の6 a

群と厚さ・原体文様が類似し、同一型式であると判断されるならば6a群も3期段階である可能性がある。1b群土器にある病状貼付文の類例は、群馬県石畑岩陰遺跡、長野県お宮の森裏遺跡、埼玉県宮林遺跡に存在する。それらの遺跡例では4b群よりも口縁部屈曲が強く、いずれも古く考えられている。2c群は「小佐原段階」とされる土器群に外反の仕方が類似する。

4期 夏島式併行段階 3c・2d群段階。4c群も2d群口縁との類似から本段階とする。5a群は口縁形態、内面施文手法の類似性から本時期とする。

5期 稲荷台併行段階 3d群土器段階。2e群もこの段階である。4群で内面施文のない土器群が本期に予想されるが、確認できなかった。もし存在すれば「4d群」を設定するところである。5b群上器は内面施文がない、という点でこの段階か、6期にかけての時期であろう。稲荷台式には施文手法の類似や山十状況から埴溝式土器、あるいは平坂式土器が伴うとされているが、本遺跡には両者はない。

6期 沈線文系土器段階 6b・6c群段階で7群が伴うものと思われる。なお5期とは数段階の時間差が想定される。

第3節 繩文時代中期

1 土器の分類と段階（第165・166図）

住居址・ピット出土の繩文土器を細別し、段階設定を行いたい。

中期1段階 34号住、413号ピット出土土器。中期前半沼沢式期にあたり、「多摩・武藏野編年」（黒尾・小林・中山 1996）5b・c期に相当する。深鉢では横帯文が多段化し、区画内には多条化した幅の狭い角押文を施文する。34件1は炉体上器であり、区画内が無文のままで古手の様相がある。また25住31は30との同一個体の可能性ある底部であるが、二角印刻文があり、やはり古手である。しかしこれらをさらに細別するには至らない。

中期2段階 井戸尻式期末、曾利I式直前段階。31住の土器群中から直前段階の様相をもつものを抜き出したが、3段階と併行するものも多いと思われる。器形はわざかに口縁が開いた円筒形で、口縁部は無文帯とし、胴部から口縁部まで直線的に立ち上がる。口縁は2または4単位の小波状を呈し、加飾されている。胴部は垂下線文以上にヘラでキザミを入れるものが多いようであるが（31住3・7・16・19）、半截竹管で連続押し引きをしたり（31住5・15）、無文のままとするもの（31住9）がある。モチーフは輪円の横帯区画文を残すもの（31住15・16）、J・U字状の懸垂文と縦位条線文（31住7・9）がある。懸垂文は1・2条である。条線は半截竹管とヘラ沈線がある。そのほか特殊な施文法として、31住3のように垂下線文上に短い粘土紐を横方向に貼付して連続キザミの効果をもつものがある。頸部は1・2条の降線文であり、文様帶としては木奈達である。

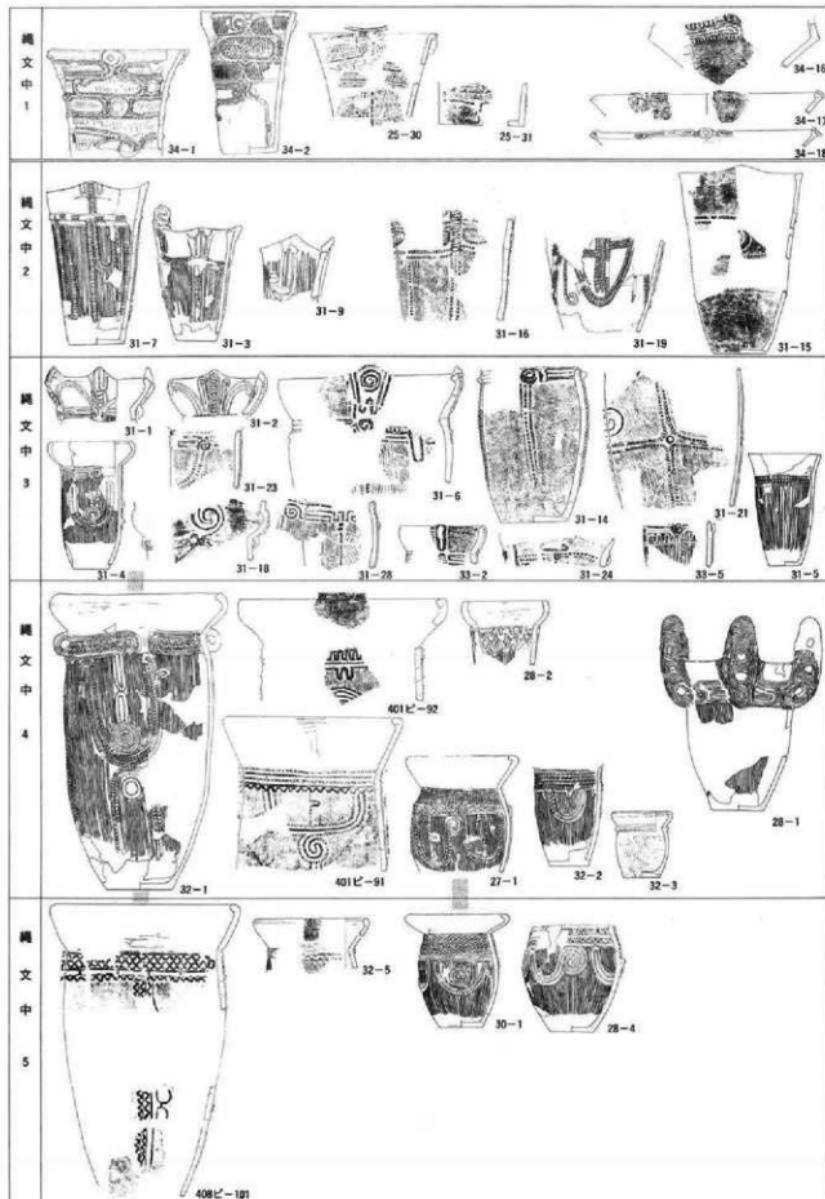
中期3段階 曾利I式古段階、または曾利古式1段階。31住の上器群を中心とする。口縁部は内湾した無文帯で、胴部との接点は屈曲する。口縁部に単位文としての加飾があり、渦巻文などにつき、波状を呈するものがある。31住1・2には3と同技法の垂下線文がある。頸部は文様帶として3~4条と多条化し、渦巻文などにつく。波状隆線文もあるが少ない（31住18）。胴部にはU字状の懸垂文があり、キザミ・半截竹管文で連続押し引きされている。懸垂文は2・3条で、2条が多い。

中期4段階 曾利I式中ないし新段階、または曾利古式2段階。28住、32住、401号ピットの土器群。口縁部は無文半縁となり、頸部文様帶は4~7段とさらに多条化し、波状（蛇行）降線文が1・2条貼付される。また胴部懸垂文も2~4条と増え、懸垂文の途中や頸部文様帶にU字状文様をもつ例がある（27件1・32住1・2・401ピ91・92）。懸垂文の多くは半截竹管押し引き文である。縦位条線は半截竹管文のほか櫛齒状条線文も現れる。

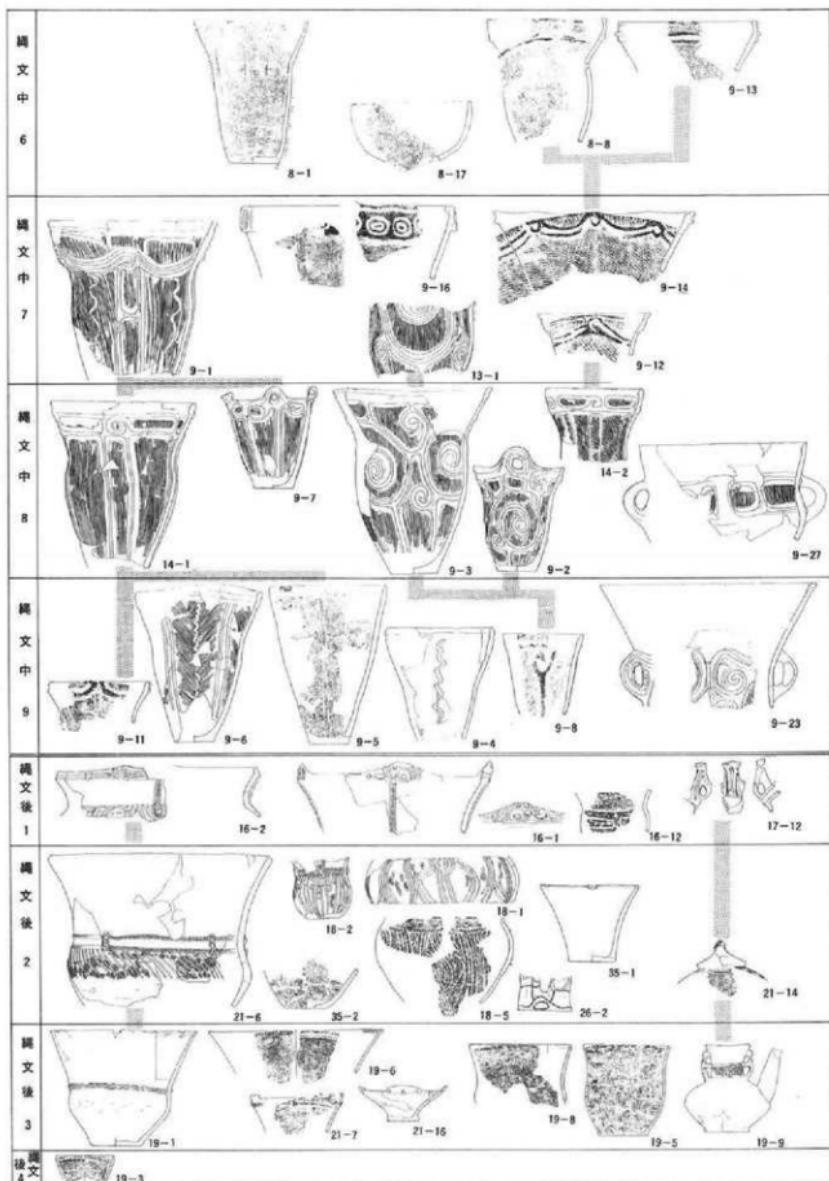
中期5段階 曾利I式新→曾利II式古段階、または曾利古式2・3段階。多摩・武藏野編年10c期。長胴のはか胴部の丸い器形が増える。頸部文様帶は幅広で、波状隆線文は2~4条と増え。胴部懸垂文にも波状降線文やヒゲ状隆線で加飾するものがある（408ピ101）。懸垂文自体は無文であり、U字の形は縦長から横長になっていく。

中期6段階 曾利II式期。8住の曾利繩文系と呼ばれる土器と加曾利E2（多摩・武藏野編年11b・c期）相当の土器の段階で、8住1・17は縦に結節繩文が施文されている。

中期7段階 曾利III式期。多摩・武藏野編年11c・12a期。9住の中から古手のものを抽出した。胴部渦巻き文が2条の隆線文で施文されるもの（13住1）、口縁部に弧線つなぎ文をもつもの（9住1）がある。条線は櫛齒



第165図 繩文中期土器の変遷



第166図 縄文中～後期土器の変遷

決条線文、9件1は新しくも見えるが、埋葬に使用されており、弧線つなぎ文が2条単位であること、H状文をもつことからここに位置づけた。大木式の影響といわれる口縁部横幅内連続文や、頭部無文帯をもつもの（9件16）も6段階から本段階にかけてであろう。

中期8段階 曽利III・IV式期。多摩・武藏野編年12b期。口縁部文様帶をもつ上器（9件7・14件1）、胴部唐草文で口縁部文様帶のない土器（9件2・3）があり、後者の陰線は1条である。条線は櫛歯状条線文。口縁部には環状小把手がつくものがある。

中期9段階 曽利IV式期。9件のうち新しい様相の上器群である。深鉢は頭部のくびれが弱く、口縁部文様帶を失い、V字の区画が成立する（9件5・6）。また口縁部を残す土器も存続すると思われる（9件11）。区画内には櫛歯状条線で綾形状沈線文を施し、中心に蛇行垂下沈線文がつく。また無文のままのものもある（9件4）。

曾利I式の細分については、曾利式の中心地域とされる甲府盆地の上器群を細かく観察した山形真理子氏の段階設定（山形 1996）と流れにおいては大差はないが、社口遺跡が長野県寄りの甲府盆地西部にあたり、若干の地域性もみられる。积迦堂遺跡と比較した場合、3・4段階の頭部文様帶中に入る渦巻文は积迦堂遺跡にはあまり存在しない。また31件1や32件2にみられるような頭部の把手は积迦堂では少ない。また波状文による加飾の仕方は、408号ピット101が积迦堂例に近いともいえるが、北口摩から長野方面の特色としてあまり加飾しないのが一般的である。またエチーフとしては人体文系譜をもつ32件1のような土器は积迦堂では少なく、北口摩地方ではよくみられる。

2 石組みを伴う集石炉について

398号ピットからは、出土炭化材（クリ）の¹⁴C年代測定によって4,470±120年前という結果が得られた。当初、覆土のあり方や、縁表面の著しい発泡・被熱・変色状況から中近世以降の所産ではないかと考えた。しかし類例には繩文時代早期をはじめとして屋外集石炉としての例が知られており、本遺跡の398号ピット等の屋外炉群は、年代測定の結果を重視して繩文時代中期後半と考えたい。8号件（曾利II式期）の炉内クリ材が4,350±110年前ということであるから、398号ピットは曾利I式期頃に推測され、ピット群南側に展開する曾利I式期集落址との関連が想定できる。ただし、年代測定の年代幅を考慮すると中期初頭から前半ころと考えることもでき、五領・台式期、あるいは猪俣式期の可能性もあるだろう。

土坑中に集石をもつ集石炉は繩文時代を通じて見られ、とくに早期に多い傾向がある。中でも土坑中の底面に圓状の右組みの配石（敷石）を施した例は、小糸氏のいう焼石遺構「A-1型」に含まれるもの（小糸 1979）、「土壇内のはば全面に焼石が密集した状態で検出されているもので、擴底に敷石をもつものもある」とされる。また谷口康浩氏の分類（谷口 1986）では（1類）十抗を作り「集石土坑」→a種（充填型）→（ア）坑底部に板石・組石・敷石等の付属施設を持つもの、→b種（被覆型）→（イ）坑底部に板石・組石・敷石等の付属施設を持つもの、に相当する。谷口氏が関東・中部地方で集成した表を参考に1aア・1bアを抜き出して時代順に列記すると次のようになる。

早期 静岡県若宮遺跡第1号集石土壇跡・7号（押型文・1aア）、長野県三ツ木遺跡（押型文・1aア）・頭殿式遺跡集石1（押型文・1aア）・赤坂遺跡1号集石炉・3号（押型文・1bアイ）・同2号（押型文・1aア）、神奈川県向原遺跡17号集石土壇（只詠沈線文・1aア）、埼玉県宮林遺跡第4号集石（条痕文・1aア）、東京都神明上第81地点第3号集石炉（撲糸文・1aア）

前期 東京都小山田遺跡No.23遺跡J S-2（諸磯）、埼玉県宮林遺跡第2号集石（諸磯）

中期 長野県判木川西遺跡上壠32（中期・1bア）、神奈川県三の丸遺跡（五領・台・1bア）、蟹ヶ沢・鎌鹿遺跡石積構（加曾利B・1aア）、埼玉県宮林遺跡第1号集石（加曾利E・1aア）、東京都馬場遺跡・7号・集石跡（中期・1aア）、神谷原遺跡S X39-41・74（中期前半・1aア）、同S X32・40・72・75・77（中期前半・1bア）、山根坂上遺跡13II-1-2号・13J1-1号・13J2-1号・13J2-3号・23A1-1号・23A3-1号・23A3-2号・23B2-2号・23B3-1号・23C4-1号・23C4-4号・23E5-3号・33D9-1号・33D9-2号・33D9-4号・33D9-5号・33D10-2号・33E10-1号（加曾利E・1aア）、同23A2-1（加曾利E・1bア）、羽ヶ田山上遺跡76B2-3・86D9-2・97A1-1・86A7-1（中期・1aア）、多摩ニ・タウンNo.46遺跡（勝坂・1aア）、日野吹上遺跡第1号集石炉（勝坂・1bア）、人和山遺跡SD1号土壇・3号（中期・1bア）

このように早期撲糸文・押型文期以降中期全般にわたりみられる中で、とくに中期の増加傾向が著しい。ここでは谷口氏集成以来、管見に触れた山梨県～長野県の石組みをもつ集石炉を挙げておく。

西原遺跡（山梨県高根町村山西割、南宮 1987c）2号土坑 径1m、深さ25cmの円形土坑で、上部に拳太の礫による集石があり、底部には配石がある。遺物の出土はない。なお4m離れた場所に曾利IV式期の住居址がある。また遺跡内からは五領ヶ台式・堀之内式・晩期条痕文の土器が出土している。

大洞遺跡（長野県岡谷市、市沢 1987）1・2・3・4・5号集石炉 5基の集石炉が集中している。1は径1m、深さ35cmで遺物はない。2は径1.3~1.5m、深さ45cmで、安山岩礫442個が出土した。^{14C}年代測定で4,410±100yrBPという測定結果が出ている。3は径1.2m、深さ50cmで、564個の礫が出土した。集石上面に五領ヶ台I式土器があった。^{14C}年代測定結果は4,410±100yrBPである。4は径0.9~1.2m、深さ20cmで、156個の礫が出土した。^{14C}年代測定結果は8,880±350yrBPである。5は径1.2m、深さ80cmで、五領ヶ台I式土器を伴う。^{14C}年代測定結果は5,130±105yrBPである。

甲六遺跡（長野県富士見町、唐木 1974）4号土坑 1.25~1.5m、深さ39cmで、焼土・炭化物を多量に出土した。五領ヶ台I式土器数片が出土している。

金山沢北遺跡（長野県茅野市金沢、小林ほか 1981）集石2 径1.5m、深さ70cmで、385個の礫を用いている。底部には5枚の板状の石による配石がある。

竜神平遺跡（長野県塩尻市片丘、上田 1988）1・2・4号集石炉 1は径1.7m、深さ50cmの鉢鉢状で、坑底に13個の石で配石を行い、内部に2110個の礫がぎっしりと詰まっていた。東側壁に焼土・木炭の集中があり、東側から火が焚かれたらしい、また上面に焼土が存在したことから、火焚きの最中か最後に石が入れられたことが推測されている。2は径1.2~1.3m、深さ50cmの鉢鉢状で、坑底中央に一段深く掘りくぼめられた中に6個の石が組まれている。礫は約800個あり、中心より東側に厚く堆積している。焼土が南壁側に厚くなるなど、特定の場所に焚き口があったのではないかと推測されている。4は径1.2mの円形で、深さ50cmの台形断面である。坑底に5個の石が敷かれ、壁にはびっしりと木炭が堆積している。とくに東側は焼上化し、焚き口と推定されている。約470個の礫が詰まり、集石上面はやや斜面で、それらの他の集石炉に間わる集石や焼土（灰床）12カ所が検出され、石蒸しに間わる行動復元がなされている。直接時期を示す遺物はないが、周辺の土器分布状況から1・4号集石炉は諸穂C式期、2号集石炉は中期初頭～沼沢式期と推測され、1号集石炉北および2号集石炉北にはそれぞれ數m離れて同期の住居址（竪穴造構）がある。

以上のはか、中谷遺跡（山梨県都留市）でも中期末～後期の散石住居址に近接して14基の集石炉が出土している。土器はなく時期不明であるが、後期の可能性もあるという（笠原みゆき氏御教示）。また山梨県塩尻市下小田原で発見された市史跡として保存されている京之京鍛冶遺跡（上野 1972）は、土坑底面に平石を据え、集石を入れた集石炉である。報告では、発見者である地主の方が集石上付近から鉄滓4点を見つかったといふ話をもとに、周囲に残る鍛冶関連地名などに鑑みて古代～中世の鍛冶遺構と判断しているが、形態的には縄文時代の集石炉と全く同一である。上坑の断ち割りでも鉄滓・鍛冶関連の遺物は付属せず、また今日まで鍛冶遺構としての類似遺構は出ていない。周囲には五領ヶ台型の遺跡もあり（小野正文氏御教示）、縄文時代中期初頭の遺構と考えた方がよいだろう。そのほか1995~6年に調査が行われた西田町遺跡（山梨県一宮町）でも2基の石組を伴う集石炉が出ている（西田町遺跡発掘調査団調査、未報告）。

配石をもつ集石炉は単独で存在する例もあるが、3~5基が集中する傾向をもち、土器を伴う例があまりない。ことから時期不明とされることが多い。時期のわかるものは中期初頭～前半の事例が多いようである。そうしたなかで^{14C}年代測定が人頭遺跡や本遺跡で行われ、両遺跡で中期初頭から中期後半の年代が出ており、中期初頭に限らず中期全般を通して見られる屋外炉と考えられる。集落との位置関係に関しては、住居に近接して存在する例がある一方、本遺跡のように居住域から一段下がった斜面の例、周囲に同時期と思われる住居址がない例などがあり、竪穴住居とは離れて存在することは注目すべきである。竪穴住居が冬の居住形態であると仮定した場合、竪穴住居を周囲に伴わない集石炉は夏季を中心とした調理形態である可能性があり、土器を用いない調理方法が夏季を中心に存在したことが予想され、周囲に居住痕跡を残さない居住形態であったかもしない。

礫表面に見られる発泡について、鈴木稔氏（山梨文化財研究所・保存科学研究室）の御協力により簡単な予備的実験で被熱温度を探った。集石中の発泡礫のうち、同一礫の発泡のない部分をハンマーで欠き、3cm程度の破片を蒸発皿に入れて電気炉に入れて加熱して出上資料と比較した。温度を800度程度に上げた結果発泡しなかったため、a-1,000°C(30分)、b-1,000°C(90分)、c-1,100°C(60分)、d-1,200°C(10分)、e-1,200°C(30分)の5種類の加熱をした。その結果a~cでは表面の赤変があり、またdではわずかな溶融が、eでは著しい変形・溶融が見られた。ただし出土礫面に見られた細かな発泡はいずれにもなく、外見はいずれとも出土資料とは違っている。おそらく1,000°C未満の温度下で、付着物などの外的要因も加わって発生したのであろう。

第4節 繩文時代後期

1 土器の分類と段階（第166図）

住居址出土資料で時期細分する。

繩文後期1段階 16・17住の土器群で堀之内1式新段階。深鉢は胴部が強くくびれ、屈曲した口縁部に1条の沈線文による口縁部文様帯がある。また屈曲部内面にも沈線文がある。単位文の起点となる部分には把手状の波状部があり、そこからキザミを加えた垂下陸線が胴部文様帯に連結する。胴部文様は口縁部垂文を起点に沈線による曲線文を施している。

繩文後期2段階 18・21・26・35住の土器群で堀之内2式古段階。短く屈折した口縁部で、内外に沈線文はない。胴部のくびれは1段階よりも弱い。肩部に1・2条のキザミ降線を貼付し、2条巡らすものには2条を連結する8の字状貼付文が数カ所につく。胴部には繩文地文に曲線文が施される。斜行した沈線文（21住6）やラフな由線文がある。

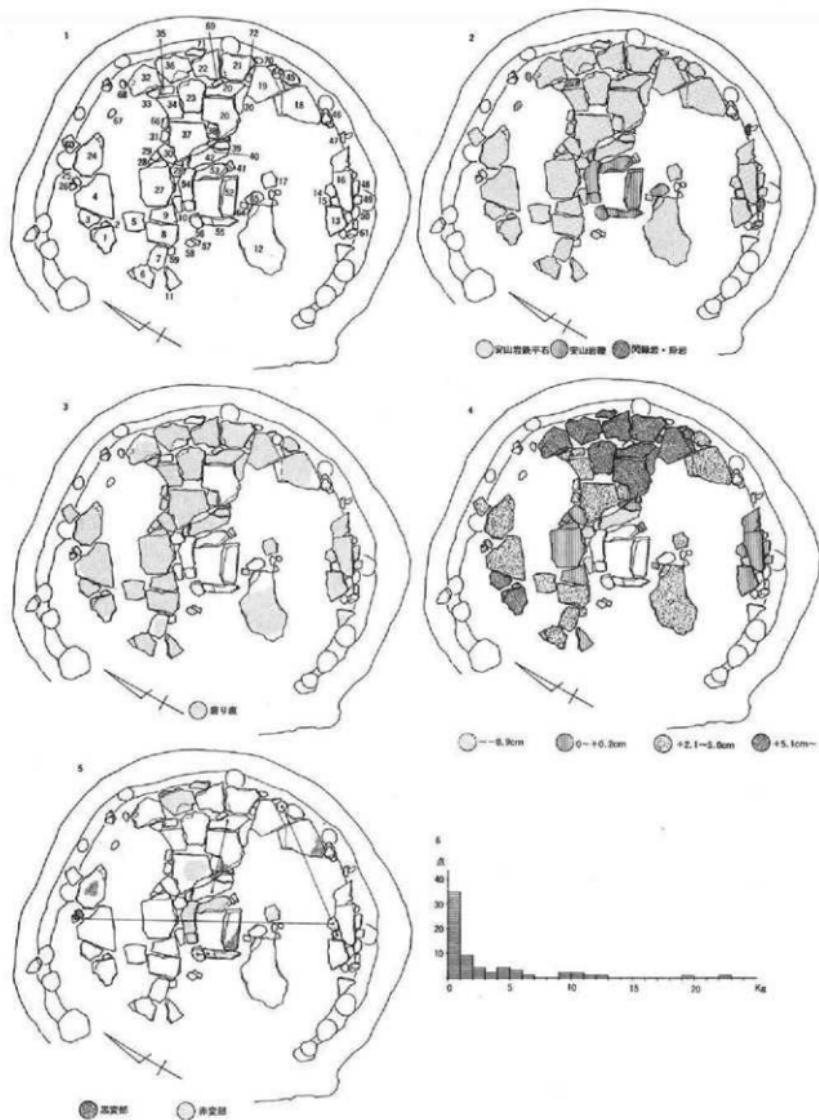
繩文後期3段階 19・21住の土器群で、堀之内2式新段階、あるいは加曾利B1直前段階。口唇部は短く屈折するか、屈折せずに直線的にのびたものがある。後者には内面に2条の沈線文が巡り、キザミや村室文も加えられ、加簡化する。とくに浅鉢には顯著である。内外面は磨きにより光沢をもつものがあり、黒色処理した土器がある（19住5・9など）。磨き技法の出現に伴い、外面の文様は簡素化し、無文とするものもある。外面のキザミ降線は頸部に巡るもの（19住1）、口縁部に巡るもの（21住7）がある。注口土器（19住9）は有頸注口土器と呼ばれるもので、把手は輪笠状把手である。有孔形でも完成段階のもので、堀之内2式期、加曾利B1式注口土器成立直前段階といわれており（秋田 1994）、他の上器群の様相と一致している。

繩文後期4段階 19住で加曾利B1式土器片が1点出土し、他にも遺構外で数片出土している。青木遺跡で加曾利B式土器が多数出ていることを考えれば、井戸遺跡にもっと存在してもよさそうである。なおB2式期と見られる土器片が143号ピットで出土している。

2 16号住の敷石に関する観察（第167図・第10表）

16号住（堀之内1式期）の敷石には、調査時点で表面の磨り痕や赤穴部が確認でき、また敷石の多くは鉄平石であったため敷石どうしの接合関係も予想された。そこで全ての敷石（敷石面から間層をはさんで浮上するものは除く）に関して、取り上げて室内で観察することとした。観察項目は1～7の7項目である。この作業は、敷石住居から可能な限りの情報を引き出すこと、敷石住居構築に関する行動パターンをつかむことを目的とする。また、ここでは多摩川流域の調布市上布田遺跡S114（称名寺1式期）、八王子市深沢遺跡S B02（堀之内1式期）、秋川市前田耕地遺跡1号住（堀之内1式期）の3軒の敷石住居の分析を行った赤城高志氏の先行的な研究成果（赤城 1992）との比較を行ってみたい。

(1) 石材・石質 ほとんどが板状節理の発達した鉄平石で、輝石安山岩もしくは輝石角閃石安山岩であり、他に玢岩・閃緑岩が少數含まれる（第166図2）。总数73個に対し、玢岩・閃緑岩の数は3個、4%である。鉄平石には輝石・角閃石の粒子の大きさ、その密度、色調などに違いが見られたため、A～Fの6種に原石類別した。採取地点の違いを予想したもので、それぞれの原石が別地点で採取された可能性があるが、同一地点でも複数の違いは予想されるということであり（河西学氏御教示）、分類が必ずしも意味を持たないかもしれない。分類の結果、ほとんどがAとした類であり（59%）、同一地点から多くの石材を調査した可能性が考えられる。玢岩・閃緑岩は円礫の河床礫で、周縁部ないしは鉄平石間の詰め石として用いられている。赤城高志氏によると、多摩川流域では転用された石皿などを除く礫は、ほとんどが最寄りの河川の河原で採取したと考えられるという。本遺跡16号住の鉄平石は、角が鋭利であることから河原中の転石ではなく、露頭での採取であろう。東へ約1kmの距離にある須玉川付近の露頭での採取と予想されるが、現段階ではまだ產地を特定できていない。露頭確認、產地推定は今後の課題である。一方、玢岩・閃緑岩は円礫であり、台上地城には存在しないと考えられるので、須玉川河床礫の採取であろう。須玉川上ノ原遺跡（櫻川 1996）の敷石住居では鉄平石間の詰め石として、須玉川の本流、塩川の河原にある青色を呈した粘板岩などが好んで用いられていた。色のある滑らかな円礫を詰め石と



第167図 16号住居址の敷石磨り底・レベル・変色部・重量分布図

第11表 16号住の敷石観察表

番号	G番	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	赤土陶の有無	有無の有無	有無の有無	有無の有無	重量(g)	盛合レバ(m)	基準レベム(m)	接合関係	取り付け番号
1	安山岩斜平石A	35.8	22.0	4.7-5.7	-	表	-	-	1025	725.860	+6.0	m1	221
2	安山岩斜平石B	11.0	5.0	0.7-2.2	-	表	-	-	145	725.845	+4.5	-	222
3	安山岩斜平石C	22.7	16.5	1.4-5.3	-	表	-	-	295	725.836	+5.6	-	223
4	安山岩斜平石D	51.5	38.3	2.0-5.9	-	表	-	-	12100	725.844	+4.1	-	224
5	安山岩斜平石E	25.3	20.0	0.7-1.9	-	表	-	-	1340	725.829	+2.9	-	225
6	安山岩斜平石F	26.0	19.0	3.9-6.1	-	表	-	-	4595	725.838	+3.8	-	226
7	安山岩斜平石G	23.0	15.7	0.5-2.6	-	表	-	-	1280	725.829	+2.9	-	227
8	安山岩斜平石H	35.5	29.0	1.7-3.8	-	表	-	-	4820	725.825	+2.3	-	228
9	安山岩斜平石I	26.0	19.2	2.2-2.7	-	表	-	-	2365	725.819	+1.9	-	229
10	安山岩斜平石J	17.5	10.3	1.4-2.4	-	表	-	-	755	725.771	+2.9	-	230
11	安山岩斜平石K	21.1	12.5	3.3-4.5	-	表	-	-	1012	725.812	+1.2	-	231
12	安山岩斜平石L	72.6	35.5	0.7-7.7	-	表	-	-	22000	725.838	+3.8	-	232
13	安山岩斜平石M	30.7	20.8	1.4-3.0	-	表	-	-	2335	725.830	+0.0	-	233
14	安山岩斜平石N	14.6	12.8	1.0-2.2	-	表	-	-	479	725.819	+1.0	-	234
15	安山岩斜平石O	14.2	9.5	0.7-1.1	-	表	-	-	160	725.799	-0.1	-	235
16	安山岩斜平石P	65.9	17.5	0.2-4.5	-	表	-	-	3890	725.817	+1.7	-	236
17	安山岩斜平石Q	11.0	12.5	2.1-3.9	表	表	-	-	983	725.831	+3.1	-	237
18	安山岩斜平石R	20.5	34.5	0.6-4.6	-	表	-	-	9060	725.847	+4.7	-	238
19	安山岩斜平石S	45.5	36.7	2.3-5.4	-	表	-	-	10899	725.858	+5.8	-	239
20	安山岩斜平石T	57.9	35.0	2.7-6.2	表	表	-	-	9549	725.861	+5.1	-	240
21	安山岩斜平石U	40.5	33.3	0.7-4.8	-	表	-	-	9845	725.863	+6.3	-	241
22	安山岩斜平石V	42.9	28.0	1.1-3.2	-	表	-	-	3370	725.858	+5.6	-	242
23	安山岩斜平石W	34.5	29.8	1.1-4.5	表	表	-	-	9810	725.856	+5.6	-	243
24	安山岩斜平石X	46.0	25.5	1.7-3.9	表	表	-	-	6310	725.831	+3.1	-	244
25	安山岩斜平石Y	8.5	4.8	0.6-1.0	-	表	-	-	55	725.837	+3.7	-	245
26	安山岩斜平石Z	7.5	7.0	1.3-2.2	-	表	-	-	176	725.846	+3.0	-	246
27	安山岩斜平石AA	54.5	40.0	0.9-3.5	表	表	有	有	9149	725.862	+6.2	-	247
28	安山岩斜平石AB	14.2	20.2	1.4-1.9	-	表	-	-	530	725.790	+1.0	-	248
29	安山岩斜平石AC	12.7	7.7	1.5-1.8	-	表	-	-	250	725.835	0	-	249
30	安山岩斜平石AD	20.0	14.0	0.6-2.1	-	表	有	有	780	725.802	+0.2	-	250
31	安山岩斜平石AE	14.5	8.0	2.2-2.7	-	表	-	-	245	725.817	+1.7	-	251
32	安山岩斜平石AF	36.7	31.5	1.6-3.1	表	表	-	-	4600	725.816	+5.9	-	252
33	安山岩斜平石AG	12.3	8.5	1.7	表	表	有	有	300	725.833	+3.3	-	253
34	安山岩斜平石AH	31.9	19.5	1.6-2.7	-	表	-	-	2350	725.835	+3.5	-	254
35	海苔	13.5	9.5	1.4-5.2	-	表	有	有	845	725.845	+4.5	-	255
36	安山岩斜平石AI	34.0	26.4	0.4-4.8	表	表	表	表	3860	725.867	+5.7	-	256
37	安山岩斜平石AJ	47.0	38.0	2.9-5.9	表	表	有	有	2290	725.821	+2.4	-	257
38	安山岩斜平石AK	19.0	12.5	2.4-2.8	表	表	表	表	2005	725.838	+3.6	-	258
39	安山岩斜平石AL	17.5	7.3	1.6-2.3	-	表	-	-	490	725.808	+0.8	-	259
40	安山岩斜平石AM	9.4	6.3	0.8-1.3	-	表	-	-	65	725.817	+1.7	-	260
41	安山岩斜平石AN	10.5	6.5	1.4-2.7	-	表	-	-	309	725.829	+2.0	-	261
42	安山岩斜平石AO	44.0	33.0	1.9-4.9	表	表	-	-	4200	725.791	+0.9	-	262
43	安山岩斜平石AP	16.5	7.3	1.8-2.7	-	表	-	-	515	-	-	-	263
44	安山岩斜平石AQ	11.2	11.0	0.8-1.2	-	表	-	-	210	2.0.852	+5.2	-	264
45	安山岩斜平石AR	19.5	12.0	0.7-3.3	-	表	-	-	154a	725.818	+4.8	-	265
46	-	-	-	-	-	-	-	-	222	725.838	+4.8	行方不明	266
47	内田石	12.5	10.5	1.5-5.8	-	表	-	-	1250	-	-	-	267
48	安山岩斜平石AS	19.2	7.3	2.0-2.3	-	表	-	-	620	725.813	+1.3	-	268
49	安山岩斜平石AT	9.5	8.5	1.5-2.2	-	表	-	-	280	725.818	+1.8	-	269
50	内田石	15.5	6.8	3.6-4.7	-	表	-	-	1440	-	-	-	270
51	安山岩斜平石AU	12.0	10.0	1.5-1.9	-	表	-	-	205	-	-	-	271
52	安山岩斜平石AV	36.0	21.0	7.9-14.2	-	-	-	-	18000	-	-	-	272
53	安山岩斜平石AW	34.5	21.0	7.7-14.5	-	-	-	-	19900	-	-	-	273
54	安山岩斜平石AX	65.5	20.5	7.8-19.6	-	-	-	-	4000	-	-	印心	274
55	安山岩斜平石AY	20.5	14.0	3.2-7.9	-	-	-	-	9900	-	-	印心	275
56	安山岩斜平石AZ	24.0	16.5	3.2-7.7	-	-	-	-	1335	-	-	-	276
57	安山岩斜平石BA	11.4	5.6	0.9-1.2	-	表	-	-	115	725.796	-0.4	-	277
58	安山岩斜平石BC	10.1	5.6	0.7-1.3	表	表	-	-	90	725.796	-0.4	-	278
59	-	-	-	-	-	-	-	-	725.322	+2.2	-	行方不明	279
60	安山岩斜平石BD	19.7	15.0	2.7-3.7	-	表	-	-	1370	725.848	+4.8	-	280
61	金星石	16.5	8.0	0.5-2.8	-	-	-	-	235	-	-	-	281
62	安山岩斜平石CE	11.7	6.0	3.5-4.2	-	表	-	-	530	-	-	-	282
63	海苔	6.2	5.3	0.3-1.3	-	-	-	-	20	-	-	-	283
64	安山岩斜平石CH	7.7	2.5	1.4-2.0	表	表	-	-	135	725.839	+0.5	-	284
65	金星石	15.4	10.5	0.5-3.4	表	表	-	-	225	-	-	-	285
66	安山岩斜平石CI	13.4	6.1	3.3	-	-	-	-	474	725.827	+2.7	-	286
67	安山岩斜平石CJ	6.9	4.0	2.5-4.4	-	-	-	-	300	-	-	印心?	287
68	安山岩斜平石CK	6.9	6.5	2.3-3.1	-	-	-	-	240	-	-	-	288
69	安山岩斜平石CL	6.5	6.0	0.3-1.6	-	表	-	-	130	725.850	+5.0	-	289
70	安山岩斜平石CM	9.4	5.3	2.3-4.8	-	-	-	-	235	725.861	+6.0	-	290
71	安山岩斜平石CN	20.0	8.1	1.7-2.2	-	-	-	-	655	725.870	+7.0	-	291
72	安山岩斜平石CP	18.5	5.3	1.6-1.9	表	-	-	-	185	725.855	+5.5	-	292
73	安山岩斜平石CR	7.9	4.7	0.8-1.1	表	表	-	-	50	725.814	+1.4	-	293

して意図的に採取・使用するという傾向はあろう。

- (2) 敷石の敷設レベル 敷石面上での居住によって敷石面がどのように沈下しているか、あるいは本来どのような高さで敷設されていたのかを探るものである。その際、住居施設以降現在までの間の斜面方向への敷石のずれや、地形変化の影響による移動も考慮する必要がある。ただ16号住の場合、構築上（地山）がしまりある躰毎じりの粘質上で、地盤は安定的であり、敷石には影響していないと思われた。

レベルは各敷石中央付近で測定したものである。その結果、敷石面のレベル高低差は最大7cm程度で、炉周辺が低く、奥壁側が高い。測定値を炉周辺のレベルを基準に2cmごと4段階の色分けをしたのが第166図4である。敷石作居の敷石裏面は通常凹凸であり、表面を平らにして敷設するためには掘り方面にそれぞれの石に応じた量の土を投入して据えている。つまり土で石の平面を保とうとしているので、上から重量がかかるとそれだけ沈下する。したがって普段頻繁に出入りする出入り口や炉周辺は沈下が著しいと予想されるわけである。16号住は全面敷石ではなかったため、限られた敷石面での推定ではあるが、炉周辺、炉左右空間、奥壁側の頭に敷石の沈下が弱い。これは敷石住居内の空間使用頻度をよく示しているのではないかと思われる。ただし、水平な敷設が本来的な方かどうか。奥壁側の敷石レベルが高いのは、当初から高く敷設したためという予想もできる。分析事例の増加をまって検討すべきであるが、単純に考えるならば、閉じた空間では出入り口側を通過する度合いが高く、出入り口と反対側（奥壁側）では通過頻度は低い。上布田例でも同様に壁寄りの空間から戸の左右空間に向かってレベルが低く、赤城氏は「土体部の掘り方の傾斜に沿って敷石が施されているため、それが意識的になされたものかは判然としない」とし、深沢例でも同様な傾向があることを指摘している。敷石レベルの状況は、住居内空間の利用を考えるうえで有効な材料と考えられる。

- (3) 大きさ・厚さ・重量 どの空間にどのような大きさの石を用いているのか。空間の使用頻度、使用目的などを関わるもので、座の想定も可能であろうと思われる。16号住では150g程度の小礫から、最大では22kgまであり、1kg未満が最も多い（第166図6・第11表）。9kgを越える石は8枚で、住居内でも炉を中心とした主要な場所に敷設されており、炉を囲んだ座を重視した敷設状況が予想される。また1kg未満の小礫は主に周縁部を詰め石として用いられている。敷石・炉石の総重量は216.3kg。なお、21号住の炉裏の敷石は1枚で96kgもあった。

多摩川流域の事例は、いずれも100mの小礫を5~7割程度用いており、また2~10kg未満、200m~500m未満の礫が多いという。また10~20kgのものもあり、前田耕地例では20~50kg未満の巨大な礫も8点ほど見られる。重量のあり方は本跡とも類似した傾向を示しており、20kgを越えるような重量の礫をどのように選んだのか興味深い。ちなみに上布田は多摩川まで500m、前田耕地は秋川まで850m、深沢は北浅川まで500mである。とくに30kg以上、40kgを越える礫となると巨木運搬と同様の共同作業が不可欠となってくる。多摩川流域例では土体内部の底に対応した敷石の敷設は看取しにくいか、上布田例では炉右脇に比較的大形の敷石を1枚用い、また前田耕地・深沢例では連結部から張り出し部分にかけて大型礫を並べている。赤城氏は張り出し部分に大きな石を用いる必然性について、祭的な場としての性格から理解を試みている。鉢半石という、海で大きくなじみは敷石に好都合の石材であり、場の利用の仕方、機能を想定した上で石材を選択的に調達できる。したがって、敷石の大きさから場（座）の機能を推定することも可能な能である。

- (4) 被熱痕（赤変・黒変部の有無） 赤変部のあるものを被熱痕、また薄く黒変したものをスヌ付着によるものと考え、それらの分布状況を調べた（第166図5）。その結果、赤変部のある敷石は全体の19%（13個）、黒変部のある敷石は全体の17%（12個）であった。赤変・黒変の両者が認められるものは5個あり、赤変部をもつものは黒変部をもつという傾向はある。また表面に被熱痕をもつもののか、裏面にもつものがある。また裏面のみもある。これは磨耗痕のあり方にも共通している。また被熱痕のある敷石の分布は集中しているわけではなく、分散している。なお本住居は火災生居ではなく、床面に焼土・炭化材の分布は見られなかった。この被熱痕のあり方から予想されるのは、石材採取時の加熱・敷石の転用である。前者は、あくまでも想像ではあるが石材を採取する際に薄い石材を獲得するため、鉢半石のある露頭で焚き火を行い、加熱して削れ口を入れて採取した可能性を想定するものである。後者は他の住居で使用した敷石を転用したと考える想定で、炉石の場合も抜き取り、転用が古くから指摘されており、敷石にも同じ行為が行われている可能性がある。そうした仮説の検証のため、また住居の前後関係の把握のために、今後住居間での敷石の接合関係を調べてみると必要であろう。

赤城氏も前田耕地で「焼失住居ではないのになぜ被熱痕がみられるのか」という問題に対して、他の焼失住居からの転用を想定しつつ、住居廃絶における「火入れ行為」の可能性も否定できないとしている。ただし、火入れ行為で住居を焼失させた場合、あるいは敷石面上のある場所で焚き火をした場合、被熱痕はいくつかの右にまとめて見られるであろう。16号住では被熱痕をもつものが点在して存在したり、裏面にもあること、磨耗

痕が裏面にも認められるものがあることから、やはり転用の縁が強いと考えたい。

(5) 磨耗痕 磨耗痕は敷石面を碌で磨て滑らかにした痕跡である。石の表面を触って比較すると明瞭であり、土に突出した部分や後の部分を磨っている。磨耗の程度には若干の差があり、細かな凹凸が残るもの、完全に滑らかにしたものがある。通常表だけを磨っているはずであるが、本例では裏面にも磨耗痕がある石が多数認められた(第166図3)。経数に対する磨耗痕をもつ石の割合は約9割で、詰め石やもともと滑らかな石に磨耗痕のないものがある。磨耗痕を持つ例のうち、裏面にある例は約3割であった。また裏面にのみもある。これは先の被熱痕のあり方に類似し、この現象からは敷石の転用、あるいは住居内での敷石の反転行為、または反転を伴う移動が想定される。なお、赤城氏の分析では磨耗痕の観察は行われていない。もともと滑らかな面をもつ河原石を利用した場合磨く必要性はないので、磨耗痕が顯著ではないのだろう。鉄平石の場合は、こまかな凹凸が無数にあり、それらを碌で磨くと容易に滑らかになるという性質があり、磨きが顯著に行われたらしい。ただ河原石の右側の場合も磨耗痕をもつ可能性が予想され、観察する必要はある。

(6) 敷石の接合関係 住居内において接合事例は4例見つかった(第166図5)。近くの接合と、距離を隔てた接合があり、後者は小さな鉄平石どうしの接合である。大きな石材には接合例が少ないと、これは大きな敷石を數く目的で運搬した石材を、意図的に割ることがなかったことを示している。また優先的に敷設し、一度固定してしまうと動かしにくい大きな石材とは違って、小さく軽い石材は詰め石、周縁壁として二次的に敷いていくものであり、設置位置を自由に選択して敷設することができる。接合事例の存在は、意図的あるいは意図に反して細分化した小塊を詰め石などに使う事例が多いことを意味する。

多摩川流域の事例分析では、接合事例の存在と被熱痕の存在を関連づけて、まず欠損痕の高さを調べている。そして接合事例については被熱原因で割れた磚もあるものの、「敷石を構築するにあたって磚を適当に加工しながら並べた」状況を想定している。

(7) 二次調整痕 鉄平石の縁に二次的な調整痕をもつ敷石がある(第II表)。敲打による剥離をもつもので、石材の採取・運搬時に角をとる目的での加工、あるいは敷設時に石をはめ込む際、余分なところ、出っ張りを打ち欠いたものの可能性がある。全体の10%、7箇にあり、一辺あるいは二辺に認められる。小塊ではなく、大形のものにときどきある。赤城氏は、この点に関してよくに着目していないが、欠損痕の周縁部に細かな調整が加えられただけの磚が多いことは指摘されている。

以上、16号住についての敷石の観察を行い、多摩川流域との比較によって敷石住居の一般性(普遍性)および地域性が明らかになった。一般性として把握できたことは、炉周辺での敷石面のレベルの沈下、被熱痕の存在、接合事例の存在、敷石の重量分布、二次調整の存在であり、地域性とみたのは表面の磨き、座を考慮した人形石材の敷設状況である。多摩川流域と大きく違うのは石材および石材採取地で、多摩川流域が河原中での採取であるのに対し、16号住を含めた八ヶ岳南麓では露頭から鉄平石を調達したらしく、凹凸のある表面を使用して磨くという特徴的な行為が派生していることがわかった。今後も微視的な視点からの分析により、仮説の検証を行っていただきたい。

第5節 平安時代土器類の分類と編年

社口遺跡から見つかった12軒の竪穴住居址出土の土器は、大きくは9世紀代の着文をもつ甲斐型窓の段階と、10世紀代の暗文がなく玉縁状口縁をもつ甲斐型窓と信州系黒色土器を伴う段階の2人群に分けられる。それらを中心としたながら須恵器、灰釉陶器類も加わり、さらには地元の北巨摩地域内で製作されたと思われる上師器窓・鉢・甕(仮称: 北巨摩タイプ)を伴っている。それらの細分により時期設定を行い、各時期ごとの土器のあり方を探ることで、土器を中心とした物流の様相を考えたい。

(1) 器種分類

甲斐型土師器(「甲斐型」と略) …… 窓・皿類は赤褐色の独特な胎土をもち、暗文や手持ちヘラ削りなど特有の調整技法をもつ。窓は外面タテ刷毛、内面ヨコ刷毛が特徴である。窓A(いわゆる甲斐型窓)・B(内面黒色処理を施した甲斐型窓)、皿A(出筋のある皿)・B(玉縁口縁の皿)、蓋、甕A(口径25~30cm、高さ38cmほど)の継刷毛口をもつ長刷窓)・B(継刷毛口をもつ小形の甕)がある。窓・皿・蓋類については川府市東部付近、窓については東山梨郡方面に製作地が想定されている。

黒色土器……内面黒色処理を施した食器類で、胎土は褐色で小粒子をやや多く含んでいる。内面はヘラナデによって磨きが施され、つやをもつ。窓A・B(口径・高さとも大きな窓)・C(窓Aと同形であるが、内面の黒

色処理がない、あるいは薄い杯)、皿、碗(短い高台をもつ)、高台皿がある。製作地は長野県東信・中信・南信(諏訪地方)が予想できる。ミガキと黒色処理による水漏れ防止が行われ、汁用の器ともいわれている。

ロクロ甕……回転台によるヨコ方向のロクロ目をもつ甕。甕A(ロクロ目のある甕)・B(ヨコ方向に細かなカキメをもつ甕)がある。保坂康夫氏が古巨摩郡(北巨摩・中巨摩郡)に多いことを指摘し(保坂 1988)、在地産と思われる。

信州系甕……2種ある。Aは綻削毛目をもつ甕で、口縁部付近にロクロ目を残し、内面にはタテトテを行う。甲斐型甕よりも口縁部の傾きが立ち、底部付近の作りも違う。Bは武藏型甕に似た胴部にヘラ削りを多用し、器壁は薄い。東信地方の甕であろう。

北巨摩タイプの土師器(「北巨摩タイプ」と似称)……上記以外の技法をもつ土師器で、表面にナデを行っている。甲斐型模倣の杯や甕もときどき見られるが、甲斐型に比べて器壁が厚く、踏文は粗雑で、胎土も異なる。杯、鉢、甕、羽釜がある。北巨摩郡内の遺跡でときどき見つかるもので、量は少ない。

灰釉陶器……瓶・糞・美濃方面からの搬入品。碗、皿、長颈甕などがある。

須恵器……杯、碗、甕、長颈甕、凸沿壺などがある。製作地不明で、信州方面からの搬入品、又は在地産と考えられる。

(2) 甲斐型土師器甕Aの変遷と段階設定(第168図)

山梨県では「甲斐編年」(「坂本編年」、坂本・末木・加内 1983)が奈良・平安時代の十器編年とされて長い間用いられており、今日でも大枠の流れに変更がないといわれている。しかし、平城京二条四坊十一坪の井戸からの甲斐型甕の発見を機に年代的な見直しの動きが高まり、甲斐型土器研究グループを中心として年代観の変更案が提起された(仮称「瀬田編年」瀬田 1992)。また同じ頃調査が行われた:青梅市宮ノ前遺跡の報告書でも段階区分の見直しと年代観の提示が行われた(「宮ノ前編年」、櫛原 1992)。ここでは主に宮ノ前編年に基づき甲斐型甕Aの変遷を時期設定の基準とし、段階設定を行って各住居址の時期を決めておきたい。

1段階 4号住の杯が最も古い様相をもつ。底径が6~6.5cmと大きく、内面に放射状暗文のあるもの、ないものがある。外面体部下半は通常手持ちヘラ削りを行うが、4号住のような回転ヘラ削り例もある。底部は回転系切り後に手持ちヘラ削りが行われる。宮ノ前編年のⅥ期、坂本・瀬田編年のⅧ期に相当し、年代は宮ノ前編年により9世紀中頃、850年前後としておきたい。

2段階 5・12・29号住が相当。整形技術は前段階となんら変化はないが、前段階よりも底径が小さく、底径/口径比がL/2程度になり、器壁の傾きが大きくなる。3軒の住居の中でも、底径のやや大きな杯を含む29号住は古手の様相を残しており、1と2段階の中間的な様相である。宮ノ前編年のⅦ期、坂本・瀬田編年のⅨ・Ⅹ期に相当し、年代は9世紀後半としたい。

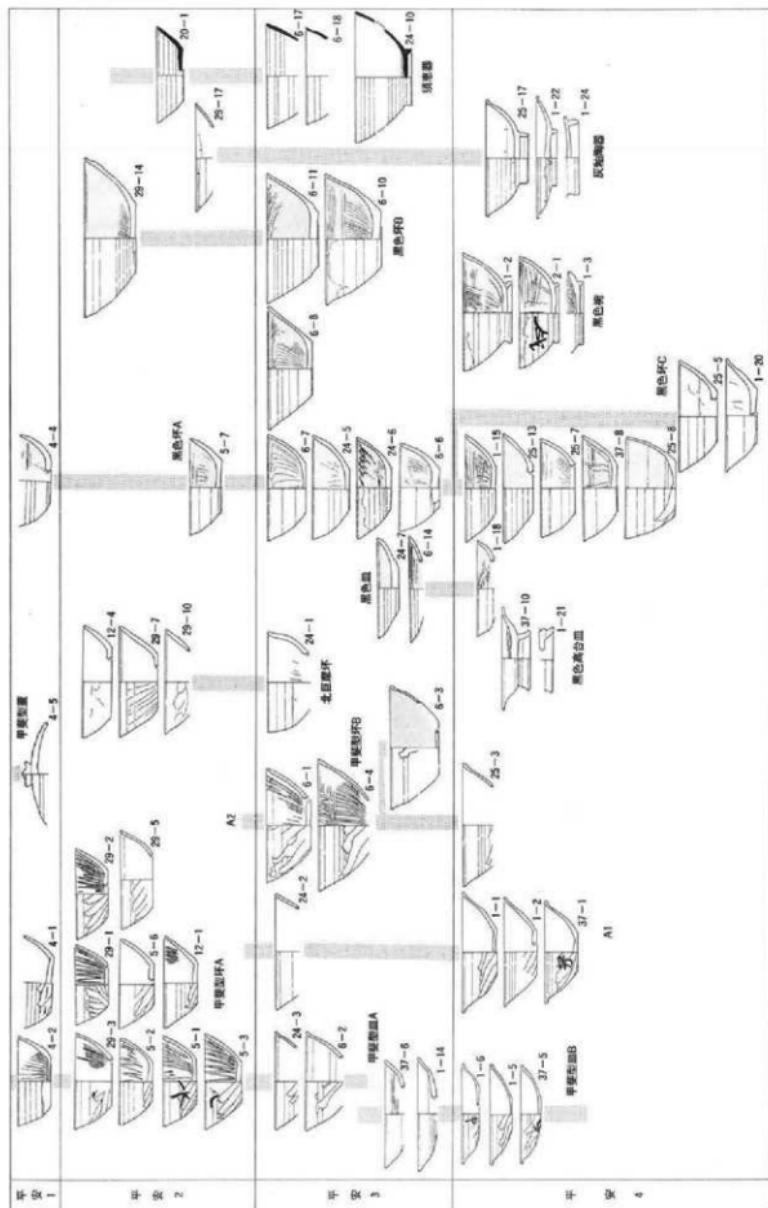
3段階 6・24号住が相当。前段階までの大きさの杯に加えて、口径・器高ともに大きな杯が出現する。前者(A1)は器形的には器壁の立ち上がりに丸みがあり、内面には暗文がない。口縁部はわずかではあるが玉縁状を呈しつつある。後者(A2)には踏文があり、踏文上にヨコナデしたものもある(6号住)。なおこの段階には内面黒色処理を施した杯Bが伴う。黒色土器と違い、内面の黒色処理の前処理としてのミガキは行われず、通常の杯A2を黒色化している。宮ノ前編年のⅧ期、坂本・瀬田編年のⅨ期に相当し、年代は宮ノ前編年により9世紀末~10世紀初頭としたい。

4段階 1・25・37号住が相当。口縁部は隆玉縁化し、底径はさらに小さくなる。口径がやや大きなものと、口径・器高ともにやや大きなものがあり、前者はA1の、また後者はA2の流れであろう。底部は手持ちヘラ削りの他に糸切り痕を残すものがある。宮ノ前編年のⅨ期、坂本・瀬田編年のⅩ期に相当し、年代は10世紀前半から中頃としたい。

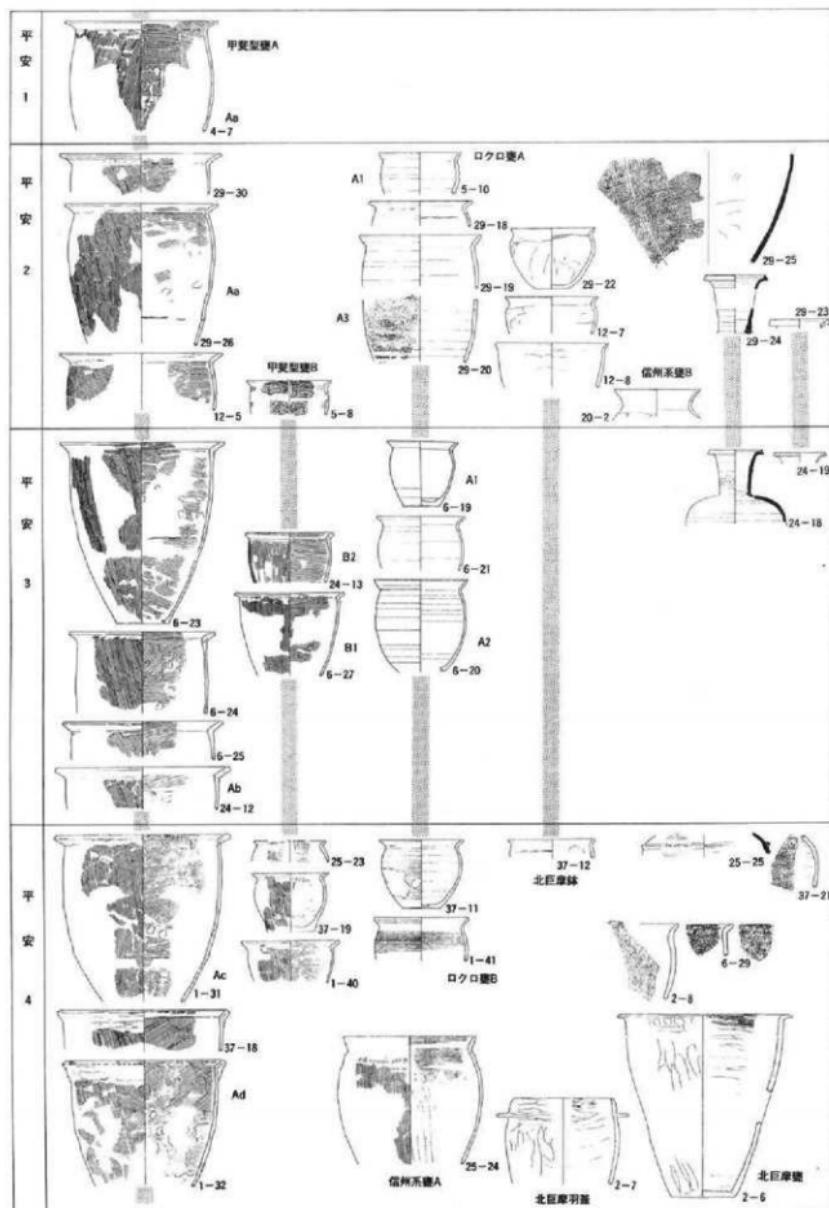
(3) 各段階の土器・陶器の様相(第168・169図)

1段階 甲斐型甕A・蓋・甕A、黒色土器杯Aがある。甕Aは口縁部が胴部器壁と同じくらい薄く、やや長く、緩く反っている。胴部内面にはタテナデ痕がわずかにある。黒色土器杯Aは内面のナデは丁寧で、ヘラ痕があまり残らない。器壁は丸く立ち上がっている。

2段階 甲斐型甕A・甕A・B、黒色土器杯A・B、ロクロ甕A、北巨摩タイプ杯・鉢、信州系甕、灰釉陶器皿・長颈甕、須恵器・甕・長颈甕がある。甲斐型甕Aは、1・2段階の中間的な様相をもつ29号住では、4号住と同様に薄く緩やかに反りをもつ口縁部がある(29号30)。また5号住にも存在する(5号住14・15)。12号住5などは器壁よりも幾分厚い。いずれにせよ3段階のものに比べると薄い。これは口縁部の製作技術と関わっており、1・2段階では胴部と同程度の厚さの粘土帯を積んで口縁部としているのに対し(Aa技法)、3段階で



第168図 平安時代土器・附器編年(1)



第169図 平安時代土器・陶器編年(2)

は胴部より倍程度厚めの粘土紙の1～2段積み上げ（A b技法）を行っている。甕Bは小形のタイプである。黒色土器A・Bは、内面に丁寧なヘラミガキを行っており、ヘラミガキ痕はかすかである。器壁の立ち上がりは3段階に比べるとやや危である。ロクロ甕Aは大（A 3）、小（A 1）の2種あり、A 1では外面の整形として平行の叩き痕を残すものがある（29住20）。これは粘土帶を繰り上げていく際に叩きしめをし、最後にロクロナデをしたものであり、A 1に普遍的な技法かもしれない。北巨摩タイプ甕はナデを主に整形したもので、12住4・29住10にはヨコの指頭状のナデ痕が、また29住7には斜めのナデ（ヘラナデ）痕がある。ロクロナデを十分に行わないのが特徴であり、内面も手持ちナデで仕上げている。北巨摩タイプ鉢もナデの仕方に特徴があり、小形と中形の2種がありそうである。須恵器杯・信州系甕Bはともに20号作出土であるが、共伴する中型型杯がないため、ここに置く。須恵器杯は3段階に比べ器壁が厚く直線的であり、古い様相がある。

3段階 甲型型杯A・B・皿A・甕A・B、黒色土器杯A・B・皿、ロクロ甕A、北巨摩タイプ杯、灰釉陶器長颈瓶、須恵器杯・碗・長頸壺がある。甲型型杯としたものは1・37号住から見つかったA 1で、37住6には内面に渦巻き状模文もある。甲型型甕Aは口縁が肥厚し、口縁端部にもヨコ刷毛調整を加えている。甲型型甕Bは大（B 1）、小（B 2）があり、甕Aとはほぼ同じ調整技術を施し、口縁部も肥厚している。黒色土器杯Aは器壁の立ち上がりが次第に直線的になり、内面のミガキは放射状のヘラミガキ痕を残すようになる。また6住6のように東状に隙間を空ける花弁状のミガキもある。さらに口縁部寄りにはヨコミガキ痕を加えている（6住8・6住10など）。これらにも大小がありそうである。ロクロ甕Aは中（A 2）、小（A 1）がある。A 1には外面のロクロナデ痕がない。両者とも叩き痕はない。北巨摩タイプ杯には21住の甲型型模倣杯がある。内面に粗い放射状輪文がかすかに残る。須恵器杯・碗は器壁がやや薄く、丸みをもって立ち上がるるものである。

4段階 甲型型杯A・皿B・甕A・B、黒色土器杯A・C・碗・高台皿、ロクロ甕B、信州系甕B、北巨摩タイプ鉢・甕・羽釜、灰釉陶器碗・皿・蓋、須恵器凸底甕がある。甲型型甕は玉縁の発達した、底部の小さな皿。甲型型甕Aは、口縁部の整形技術で2種に分けられる。A c技法は口縁部に2重の粘土帶を巻き付け貼付して厚みを増しているもの、A d技法も2重の粘土帶を巻く点では同じであるが、巻く位置が胴部にもかかり、外面から見ると口縁部から胴部へ滑らかに移行するものである。こうした甕口縁部の技法の時間差はaからdの順であろうが、A cとA dは一緒に出す事例が多く、時間差は小さいと思われる。なお保坂康夫氏はこうした口縁部の変化を「薄口縁型」→「厚口縁型」、「末広口縁型」と呼称し、区別している（保坂 1989b）。ここでは接合状況の観察によって保坂氏のものをさらに細分化することになる。甲型型甕Bは小（B 2）がある。口縁部は甕Aの変化とは呼応せず、3段階とあまり変わらない。黒色土器杯Aは、口径は3段階とはほぼ同じであるが、器高は短くなる。内面のミガキは瓦状を意識したものが多く、幅広のヘラナデを粗く行っている。器壁は直線的で、傾きは3段階よりも大きい。黑色甕Bは内面を黒色にしていない傾向であり、器形はAと同じである。碗は器形・技法的にはAと同じであるが、口径・器高ともに大きい。皿としては、1住18号が可能性があるが、底部欠損しており不明である。高台皿は口縁部が横に長くのびた器形で、内面のミガキはヨコミガキである。ロクロ甕Bは中型があり、ロクロ甕Aの器形にカキメを加えたタイプである。北巨摩タイプ甕は、外面タグナデ、内面ヨコナデで粗雑に調整したもので、器壁は厚く、口縁部は屈曲している（2住6など）。プロボーションやヘラナデ調整の方向は甲型型に似ており、甲型型甕の模倣とみてよいだろう。羽釜は2住7のみで、これもナデによる調整を外面タグ・内面ヨコに行っており、甲型型の羽釜の模倣であることは東信地方からの搬入品であろう。灰釉陶器は刷毛洗浄による施釉を行なう光々丘・黑窯窓式期である。

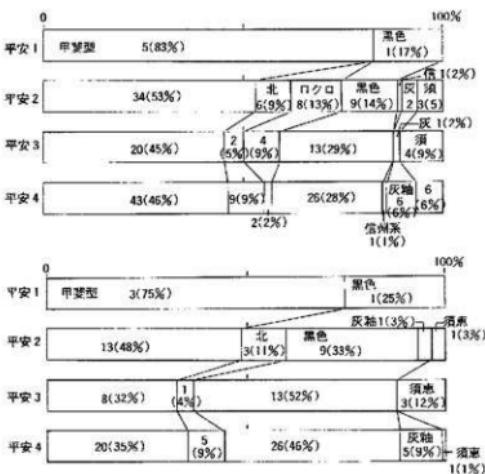
（4）各段階の土器群のあり方

本遺跡の各段階の上器構成（組成）をみるとために、各時期ごとに住居出土の土器を集計して各土器群の割合を出したところ、第170図上のようになった（ここでは國化資料のみを計算し、前後した段階のものが含まれていても集計している）。図を作成するにあたり、大胆かとも思われたが推定製作地ごとにまとめて甲府盆地（甲斐型）、北巨摩（北巨摩タイプ・ロクロ甕）、信州（黒色土器・信州系甕）、灰釉陶器、須恵器の5大別を行った。

まず1段階では集計数が少なく、参考にはならない。2段階では甲府盆地・北巨摩・信州は53%：22%：16%、3段階では45%：14%：28%、4段階では46%：11%：29%であり、甲府盆地は約5割を維持しているのに対し、信州は2段階で2割足らずであったのが3・4段階で約3割と増加している。北巨摩は2割から1割へと減少している。この数値には甕なども含まれているため、次に主要な食器類である杯・皿・碗だけに限定して比較すると（第170図下）、2段階では甲府盆地・北巨摩・信州は48%：11%：33%、3段階では32%：4%：52%、4段階では35%：9%：46%である。このデータからもわかるように、2段階で3割程度であった信州差（黒色土器）が、3段階には5割を越えて甲府盆地差よりも多くなり、4段階でもほぼ同じ割合で推移している。

このように食器だけみると3・4段階に信州産の割合は急増し、大きな存在となっている。つまり壺など、大きな焼き物である調理具類の流入は少ないものの、小形の食器類は非常に多く流入していることが明らかになった。これは本道跡が甲斐国内でも信州寄りに位置することが最大の要因であろう。同じ旧臼杵郡でも遺跡によって異なると思われ、それぞれのムダの事情（交通事情、自然環境、官衛との結びつきなどの要因）で異なるはずであり、同じ郡、国内だからといって上器の様相は決して一律ではなく、場合によっては本道跡例のように盛んな盛岡からの食器の流入がある。食器類に限らずあらゆる物質、情報、人間も盛んに交流したはずで、そうした状況が土器の動きから予想できるのである。

なお1軒の住居における十割の保有数は、仮に出土遺物がその住居で保有した土器であり、しかも実測数が出土数の最小個体数を示すと仮定して導くと、3段階では甲斐型壺・皿4個、壺A5個、要B1個、黒色土器壺・皿・碗3・4段階ではほとんど同じような數値を示すので、黒色土器が分の食器が構成されていたと思われ、1軒



第170図 食器類の割合の変遷

第12表 平安時代住居出土の土器数

第6節 配石土坑と中世墓

404号ピットは、十坑形態と六道鏡（景弘元宝1、皇宋通宝1、太平通宝1、永乐通宝1、元祐通宝1）。骨片の出土から墓坑と推定された。とりわけ上面に詰め込まれたような状態で検出された配石が特異な印象を与えた。こうした配石を上面にもつ墓坑の類は、本遺跡周辺には散見される。ここでは北巨摩郡を中心に類例を集成し、404号ピットの墓葬これまでについて見てみたい。

- (1) 青木北遺跡（高根町羽山北割）15号土坑 79×55cm、深さ39cm、北向きの長方形～横円形の土坑。上面には計48cmの礫を中心に周囲に礫が置かれ、十坑底面には刃を下に切先を南にして埋納した脇差が一振あった。長さ63cm、身幅は28mm。男性的墓坑と思われ、頭位方向は北と推定できる。時期は刀の形状から中世末～江戸初期と推定されている（森 1992）。

(2) 日影田遺跡（高根町下黒糸）11号土坑 165×115cm、深さ86cmの長方形の掘り方をもつ北向きの土坑である。壁の立ち上がりは直で、上面に径30～50mm大の11個の礫による配石があり、底面に人骨が遺存した。北頭位西向き仰臥屈位で、両手は折りたたんで胸の位置にある。胸付近に鍔管と6枚の六道鏡（古實永通宝2、新實永通宝3、札元重宝1）、胡桃、火打ち石が金具付の漆草袋に入れた状態で副葬されていた。近世前期後半代の牛半期

前半の女性人骨とされる（沢登 1995）。

- (3) 東姥神B遺跡（大泉村西井出）S K63 100×65cm、深さ10cmの北向き、長方形の土坑。径40cm人の磚4個の直下から北頭位西向き屈葬人骨1体が出土した。両手は折りたたんで胸の位置にあり、胸附近から六道銭3枚（皇宋通宝1、熙寧元宝1、水楽通宝1）が重なって出土した。時期は水楽通宝から1408年以降とされる。なお周囲には地下式坑や六道銭を作ら中世墓が存在し、屋敷遺構もある（柳原 1985）。
- (4) 持井遺跡（高根町村山北割）11号土坑 120×105cm、深さ30cmの北向き、長方形の土坑。底面には20~50cmの大の磚が敷き詰められ、表面は赤変していた。覆土中には焼土、炭化材、灰、骨片が出土し、磚上には中央付近に六道銭（水楽通宝1、宣德通宝1、紹聖元宝1、聖宋元宝1、嘉祐元宝1、治平元宝1）がまとまって出土している（雨宮 1992）。
- (5) 上野遺跡（三殊町上野）14号中世墓 160×110cm、深さ60~70cm、北向きの長方形土坑である。上面に最大50cmほどの比較的扁平な角礫が敷き詰められ、底面から人骨と六道銭（天禧通宝1、元豐通宝1、熙寧元宝1、元祐通宝1、不明銭1）が出土した。埋葬形態は不明であるが、北頭位屈葬ではないかと思われる。なお周囲には中世墓が14基集中し、14号だけはやや離れて存在し、一番人気な掘り方である。また14号を含めた15基中、8基で頭位方向が確認でき、うち6基が北頭位であった。さらに3基は左半身を下にした東向きの側臥である可能性があり、ほかのものも同じ埋葬姿勢であった可能性があるといふ。中世墓群全体の時期として15世紀中葉～後半代を想定している（清水 1989）。

以上のように、配石をもつ土坑には次のパターンがある。

- A類：社口・青木北・日影田・上野遺跡例。深めの長方形土坑下部に屈葬で土葬し、上面に配石を行う。
- B類：東姥神B遺跡例。長方形の浅い掘り方に屈葬で土葬し、直上に配石を行う。
- C類：持井遺跡例。土坑中に平らに石を詰め、その上で直接火葬したか、火葬骨を埋葬したもの。
- C類はかなり特殊事例のようにみられるので、ここではA類を中心に配石をもつ墓坑（配石墓坑）について整理したい。まず副葬品としては、青木北遺跡例以外は3枚~6枚の六道銭をもつ。そのほか吉兆北遺跡では胎糸を、日影田遺跡では煙草袋が見られた。六道銭や煙管をもつ点は一般的な土坑墓にみられることだが、脇差は珍しい。ただし、この事例はわずか1例に過ぎず、この類に普遍的ではない。年代の上限は六道銭の時期から東姥神B遺跡では水樂通宝（明代、初筋年は1408年、国内でも15~17世紀前半に模倣銭が作られている）を伴うことから15世紀以降としているが、A類に限定した場合定かではなく、16世紀以前とするにとどめたい。下限は日影田遺跡例の新寛永（文政、鋳造年代は1668~1683年）から17世紀後半と考えられる。したがって16~17世紀代前とということになる。埋葬形態はいずれも北頭位側臥屈葬あるいは仰臥屈葬で、掘り方の形状から木棺に入れられていた可能性がある。通常西向きとするが、上野遺跡例は周辺の中世墓の多くが東向きということことで、14号墓は東向きであった可能性が指摘されており、地域・amuraによって頭位方向に地域差が存在するのかかもしれない。被葬者は成人女性（日影田遺跡）、成人男性か（青木北遺跡）があり、男女問わずいずれも成人である。土坑の掘り方の大きさから推定しても、いずれも成人墓であることが予想できる。立地（埋葬場所）は中世墓の墓域内例（上野遺跡・東姥神B遺跡）、周囲に開墾遺構があり見られない例（社口遺跡・日影田遺跡など）があり、社口遺跡例は後者の典型である。また同類の墓坑を近接して見いだすことができず、墓域内にあっても配石をもつ墓は1基のみである。

このように管見に触れた例をあげ、A類を中心とした若干の検討を加えたが、これらのはかに配石を持たない墓坑の例は圧倒的に多く、集中して発見された例としては須川塩川遺跡が著名である（森原 1992）。104基以上の十界墓があり、17世紀以前・17世紀代は3基、18世紀代は55基、18世紀末~19世紀代は22基が確認されているが、配石をもつ例は数基であるらしい。各時期の埋葬形態の変遷は寝葬から座葬へという傾向があり、17世紀代まではいずれも北頭位屈葬となっており、上部配石を除けば配石をもつ墓坑との埋葬形態は同じである。ではどういった要因で配石をもつ墓坑がつくられたのだろうか。配石墓坑の場合、配石は歴史による掘り返しを防ぐという意味で棺の保護といった性格が強いと思われる。同時に埋葬地の表示的な意味も考えられる。磚による封鎖という状況に開墾する遺構として、地下式坑の堅坑に磚を詰めて封鎖する事例がある。地下式坑の場合は人骨検出例が極めて少なく、堅坑と同一視することはできないが、もがりの場とする説が有力であるなど、埋葬関連施設であろうといわれている。いずれにせよ中世から近世前半の埋葬形態として注目しておく必要があろう。

第7節 調査の反省と今後の課題

(縄文時代草創期～早期) 表裏繩文土器は近年多くの研究者が注目する土器群であるだけに、調査時点より厳密な層位の観察をすべきであって、果たして本当に斜面包含層が再堆積であるのか、斜面での居住痕跡はなかったのか、徹底的な調査が必要であった。とくに北台地上での居住痕跡の調査は不十分であり、ピットなどからの破片の出土状況を見れば、当然造構が存在したはずと考えられる。ハッサウエーでは縄文中期でもコーム色の土器を壁上とすることが多々あり、早期包含層の認識が十分ではなかったといえる。調査の反省は過ぎたるは及ばざるものであるが、調査区間にまだ良好な包含層が残っているとみられるので、今後機会があれば再調査するのも一案であろう。第5章では表裏繩文土器を中心とした土器群の編年に重点を置き、早期燃系文系土器様式との対比で段階設定案を提示した。この検証が今後の大きな課題であり、他遺跡の表裏繩文土器にも同様な変遷觀を与えることができるのか比較検討したい。表裏繩文土器に燃系文土器的な変遷の方向性が見られるのは関東西部の隣接地域であるからか、そうした状況を中部高地と関東地方の中間地帯としての地域性と理解すべきなのか、あるいは単なる見当違いなのか、各方面から批判していただければ幸いである。また今回石器に関する検討は全く不十分なものとなってしまった。草創期的な石器が少なく、本遺跡の表裏繩文土器の多くが早期段階の所産と考える傍証資料となるのはそのためである。とくに右端や彌器の形態には特徴的なものがあり、それらからの時期検討のアプローチも可能であろう。石器組成も上器同様に比較検討すべきで、黒曜石のチップ類中にも石器と認定できるものが多數含まれていると思われるところから、石器専門の方に再検討していただきたい。

(縄文時代中期) 十器の投げ設定と集石炉の検討のみとなってしまったが、曾利I式の住居形態・炉形態の検討はぜひ行いたい。柱穴配置が特徴的で、炉裏に1本を左置き左右対称とする7本柱穴配置が多いように見られたが、どういう系譜をもつのか、そして中期後半の住居形態にどうつながっていくのか、炉形態も関連させて検討したい。曾利I式を中心とした土器変遷も確定したものではなく、とくに曾利II・III式期の縦位条線文土器のあり方が不鮮明である。中期後半の上器群も同じで、ハッサウエーを中心とした周辺遺跡のあり方をみながら、今回の段階設定に対する是非を検証していただきたい。石器形態には曾利I式期の特徴かと思われるものがあるなど、石器についても早期同様に組成や形態面から分析する必要があろう。集石炉については、手筋的な実験を行うにとどまったが、発泡磚の形成に関しては温度の推定のほか、発泡部の顕微鏡観察などを通じて原因追究を行いたい。

(縄文時代後期) 敷石住居の徹視的分析は16号室のみ詳細に報告する形となつたが、19・21号室でも同様な視点から観察を行っているので、何らかの機会に報告したい。住居形態については、近年資料が増加しつつある茅野市方面との比較を通して、ハッサウエー～西脇麓での敷石住居の消長をまず明らかにすべきである。とくに茅野市内では敷石のない柱穴列も多數見つかっており、独特の柱穴配置が明らかになっている。また須ノ町上ノ原遺跡では掘之内式期を中心に100軒ほどの住居址が検出されており、茅野市方面との類似性がうかがえる。そうした資料との比較が必要であろう。ハッサウエー～甲府盆地では敷石住居の発生が中期末の曾利V式期ではなく、加曾利E・IV式の土器が出現をみてからであり、敷石住居の出現が周辺地域に較べ1段階遅れる傾向がある。また住居形態も典型的な納縫形が少なく、矧く突出するか、あるいは柄のない住居が多い。第5章では鉄平石を使用した敷石住居のあり方について徹視的な観察から地域性を見出そうとしたが、住居形態からも地域性を指摘できそうである。また集落形態の分析も不十分となつたが、等間隔に同じ等高線上に並ぶかのような配置は上ノ原遺跡でも認められ、掘之内式期の特徴ともいえる。また斜面に好んで立地する傾向もある。敷石住居や配石造構の構築は、定住性の高まりとも関連するはずであり、集落の立地や生業形態の分析から縄文後期の集落論を考えていきたい。

(平安時代) 上器編年のみを考察するにとどまつたが、黒色土器の由来に関しては佐久方面ばかりではなく諏訪地方の土器群も十分考慮しなければならない。たまたま社口遺跡が佐久地方に近いということで七器を比較し、類似性を確認したが、黒色土器が社口遺跡あたりで見られる時期に佐久地方には甲斐型土器はほとんどないということであった。逆に諏訪地方(長野県富士見町等)では黒色土器の時期に玉緑化した甲斐型土器は珍しいものではないので、どの地域の黒色土器が来ているのか、あるいは南麓地域でも生産している可能性はないか検討したい。また作地タイプと考えたナデを多用する土器群や甲斐型模倣坏に関してても、分布域の確認、產地の検討は必要であろう。今回は胎土分析を行い産地を探ったが、生産地の特定にまでは至っていない。その他、炭化穀実の水洗選別では竈内からの出土は多くはなかったものの、1号住居床面からはアワを土とした分布を確認するなど良好な検討材料が得られた。上ノ原遺跡(須玉町)や一宮町内遺跡群でも興味深い結果が得られており、今後も資料の蓄積を継続したい。ただし、作業効率の問題があり、より効率的な水洗方法の開発が求められよう。

引用参考文献

- 上野晴朗 1972『原之京銀治遺構報告』 塩山市教育委員会
- 廣木孝雄 1974『甲六遺跡』『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—御訪郡富士見町その1—』 長野県教育委員会ほか
- 小葉一夫 1979「編文時代における焼石遺跡」『小田原考古学研究会会報』8 小田原考古学研究会
- 加藤晋平・鶴丸俊明 1980『灰縁 石器の系譜知駆I 先土器(上)』 柏書房
- 小林秀夫ほか 1981『金山沢北遺跡』『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 勝野市・原村その3—』 長野県教育委員会ほか
- 南宮正樹 1983「高根町湯沢遺跡」「山梨考古」10 山梨県考古学協会
- 坂本美夫・木本龍・堀内真 1983『半斐地域』『神奈川考古(シンボジウム 奈良・平安時代土器の議論版)』14 神奈川考古同人会
- 南宮正樹 1984『東久保遺跡』 高根町教育委員会
- 南宮正樹 1985『旭東久保遺跡』 高根町教育委員会
- 櫛原功一 1985『東尾神B遺跡』 大泉村教育委員会
- 山梨県教育委員会 1986『山梨県の中世城館跡』
- 南宮正樹 1986『西ノ涼遺跡 石堂遺跡』 高根町教育委員会ほか
- 谷口康浩 1986「編文時代：集石遺構」に関する試論—関東・中部地方における早・前・中期の事例を中心として—『東京考古』4 東京考古談話会
- 南宮正樹 1987a『河内遺跡分布調査報告書』 高根町教育委員会
- 南宮正樹 1987b『石堂B遺跡』 高根町教育委員会ほか
- 南宮正樹 1987c『西原遺跡 当町遺跡』 高根町教育委員会ほか
- 市河三次ほか 1987『山梨県高根町野添遺跡発掘調査報告書』 ハツヨウ南麓遺跡学術調査団
- 市沢英利 1987『大洞遺跡』『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』 長野県埋蔵文化財センターほか
- 阿部邦郎 1988「夷糸織文系土器群の再検討—富士吉田市山池之元遺跡出土土器群の位置づけをめぐってー」『富士吉田市史研究』3 富士吉田市史編さん室
- 上田典男 1988「集石炉をめぐって」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2—塩尻市内その1—』 岩神平遺跡 関長野県埋蔵文化財センターほか
- 南宮正樹・山下孝司・拂原功一 1988『山梨県高根町青木演跡・調査概報』『山梨県考古学協会誌』2 山梨県考古学協会
- 保坂康夫 1988『山梨県下における古代前半のミクロ整形土器型をめぐって』『山梨県考古学協会誌』2 山梨県考古学協会
- 清水 博 1989「中世墓について」『上野遺跡』 三珠町教育委員会
- 保坂康夫 1989a『丘の公園第2遺跡』 山梨県教育委員会ほか
- 保坂康夫 1989b『古代の甲斐型墓をめぐって』『甲斐の成立と地方的展開』 角川書店
- 新津 健 1990『大輪寺東遺跡』 山梨県教育委員会
- 保坂康夫 1990『丘の公園第5遺跡』 山梨県教育委員会ほか
- 浅川二六 1990「気象」『高根町誌』 高根町
- 八巻与志夫 1990「城址・館跡」『高根町誌』 高根町
- 野牛鶴章二 1990「水」『高根町誌』 高根町
- 高根町郷土研究会編 1990『高根町地名誌』
- 原田昌幸 1991『撫条文系土器様式』 ニュー・サイエンス社
- 山形真理子 1991「多機能土器編年に関する考察—「至谷下層式直後、井草式以前」を中心として—」『考古学研究室研究紀要』10(下) 東京大学文学部考古学研究室
- 赤城高志 1992「編文時代柄輪形敷石住居の微視的分析」『人間・遺跡・遺物—とが考古学論集』2-1 発掘者論叢会
- 森 和敏 1992『青木北遺跡 榎の木遺跡』 山梨県教育委員会ほか
- 南宮正樹 1992『持井遺跡』 高根町教育委員会ほか
- 森原明廣 1992『塩川遺跡』 山梨県教育委員会ほか
- 拂原功一 1992「宮ノ前遺跡における奈良・平安時代の土器・陶器」『宮ノ前遺跡 本文編』 宮ノ前遺跡発掘調査団ほか

- 瀬田正明 1992 「甲斐型土器の年代」『甲斐型土器—その編年と年代—』 山梨県考古学協会
- 橋原功一 1993 「曾利1式土器の再検討」山梨県大泉村紀念遺跡の資料をもとに 『縄文時代』 4
- 新津健・三田村美也 1993 「川又坂上遺跡」 山梨県教育委員会ほか
- 戸田哲也 1994 「表裏模文土器研究の現状と課題」『縄文時代』 5 縄文時代文化研究会
- 佐野 隆 1994 「神社」 明野町教育委員会
- 秋田かな子 1994 「加曾利B1式注口土器の成立(予察) —王子ノ台遺跡出土の注口土器から—」『東海人学校地内遺跡 調査報告』 4 東海人学校地内遺跡調査委員会ほか
- 黒尾和久・小林謙一・中山真治 1996 「多摩丘陵・武藏野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」「シンポジウム 縄文中期集落研究の新地平」 縄文中期集落研究グループ・宇津木地区考古学研究会
- 山本茂樹・沢岸正仁・野代幸和ほか 1995 「日影田遺跡」 山梨県教育委員会ほか
- 沢登正仁 1995 「墓坑(第11号土坑)」「H形田遺跡」 山梨県教育委員会ほか
- 広瀬昭弘 1995 「基調報告3 表裏模文土器研究の現状と課題」『長野県考古学会誌』 77・78 長野県考古学会
- 新谷和季 1995 「縄文時代草創期の土器に関する考察」『お宮の森高麗遺跡』 上松町教育委員会ほか
- 南宮正樹 1995 「社口遺跡」 高根町教育委員会ほか
- 原田昌幸 1995 「撫系文系土器様式「西への祝点」—高市江名子高麗遺跡の「撫系文土器」をめぐって—」『宗教と考古学』 滝澤考古学公
- 永井久美男編 1996 「日本出土地図鑑」1996年度版 兵庫県考古調査会
- 萩原孝一・田口明子 1996 「古墳遺跡」「年報」12 山梨県埋蔵文化財センター
- 柳原功一 1996 「上ノ原遺跡—縄文後期の人集落—」『中史路』 86 山梨郷土研究会
- 山形真理子 1996 「曾利式土器の研究(上)」『考古学研究室研究紀要』14 東京大学文学部考古学研究室

第13表 住居址一覧表(一)は現状値、(二)は復元値

住居番	時期	形態	主軸方向	主軸長m	交轍長m	面積m ²	電・ガス	柱穴	備考
1 平	第一	第九方形	N-9°-S	5.4	4.6	21.6	石組み・東窓	なし	
2 平	第一	第九方形	N-9°-S	7.2	3.5	25.7	石組み・東窓	なし	
3 南北中	内形	N-3°-E	(3.9)	3.2	—	—	柱子十基(本末右開き)	5本?	柱穴は小破壊
4 平	第九方形	E-23°-W	(5.0)	(4.7)	(14.3)	小窓	なし		
5 平	第九方形	E-15°-W	5.1	4.0	20.0	石組み・東窓	なし		
6 平	第九方形	N-93°-S	4.3	4.4	16.4	石組み・東窓	なし		
7 南北中(後壁直立?)	第九方形	N-13°-S	(3.5)	(3.55)	(10.2)	三方形石垣・一部	4本		
8 南北中(後壁直立?)	円形か	N-3°-W	(6.7)	(5.4)	(12.5)	三方形石垣(右は塗付されていて)	推定5本	年代測定3,350±110P	
9 南北中(後壁直立?)	内形	N-11°-S	5.0	5.51	(20.3)	石垣か(右は塗付されていて)	6本		
10 南北中(後壁直立?)	内形	N-49°-W	—	—	—	三方形石垣(右は塗付)	4本か		
11 平	第九方形	E-16°-W	3.7	(1.6)	(4.7)	石組み・東窓	なし		
12 南北中(後壁直立?)	内形	N-18°-S	4.5	(14.6)	(37.3)	三方形石垣(右は塗付)	6本		
13 南北中(後壁直立?)	内形か	N-5°-S	4.5	4.6	(12.0)	三方形石垣(右は塗付)	4本		
14 平	第九方形	E-25°-W	(0.8)	1.6	(3.9)	東窓	なし		
15 南北後(「廻之内」)	内形	N-50°-S	(4.1)	4.0	8.5	三方形石垣(右は塗付)	5本		
16 南北後(「廻之内」)	内形	N-49°-S	3.5	5.5	(16.6)	三方形石垣(右は塗付)	7~9本か		
17 南北後(「廻之内」)	内形	N-51°-S	4.0	[4.5]	(6.2)	三方形石垣(右は塗付)	7~9本か		
18 南北後(「廻之内」)	内形	N-57°-S	2.0	2.54	7.6	三方形石垣(右は塗付)	6本以上か		
19 南北後(「廻之内」)	内形	N-72°-S	3.9	3.7	8.7	三方形石垣(右は塗付)	9本		年代測定3,740±110P
20 平	第九方形	E-24°-W	(3.3)	4.0	(11.4)	東・北窓(右は塗付)	なし		
21 南北後(「廻之内」)	内形	N-55°-S	4.0	4.0	16.0	三方形石垣(右は塗付)	10本以上		
22 南北後(「廻之内」)	内形	E-10°-W	2.0	2.7	(5.3)	三方形石垣(右は塗付)	5本以上		
23 平	第九方形	N-5°-S	4.2	4.5	15.3	東窓	なし		
24 平	第九方形	N-1°-S	3.1	3.0	6.9	石組み・東窓	なし		
25 南北後(「廻之内」)	内形	N-67°-S	2.0	2.54	7.6	三方形石垣(右は塗付)	6本以上か		
26 南北後(「廻之内」)	内形	N-67°-S	—	—	—	三方形石垣(右は塗付)	6本以上か		
27 南北中(「齊得」)	内形か	N-0°-E	[1.2]	[4.8]	[10.8]	右側に傾いた櫛窓か	6本か		
28 南北中(「齊得」)	内形	N-5°-E	[4.1]	[4.8]	13.7	右側に傾いた櫛窓	6本か		
29 平	第九方形	E-9°-N	4.8	4.3	18.5	石組み・東窓	なし		
30 南北中(「齊得」)	内形	N-2°-E	4.9	[4.7]	[11.7]	右側に傾いた櫛窓	6本か		
31 南北中(「齊得」)	内形	N-12°-E	4.8	4.8	19.0	右側に傾いた櫛窓	7本		
32 南北中(「齊得」)	内形か	N-20°-E	5.0	[5.1]	[14.7]	右側に傾いた櫛窓	7本		
33 南北中(「齊得」)	内形	N-25°-E	5.5	5.2	18.8	右側に傾いた櫛窓	7本		
34 南北中(「齊得」)	内形	N-3°-S	5.5	5.4	20.5	櫛窓か	8本		
35 南北中(「廻之内」)	内形	E-23°-S	—	4.4	[10.2]	櫛窓切(右は塗付)	6本以上		
36 南北中?	不明	—	—	—	—	不明	不明	住居でない可能性あり	
37 平	第九方形	E-8°-N	5.7	4.3	17.9	東窓	なし		

第14表1 ニット二首表

番号	位置	形態	直脚長mm	直脚幅mm	直脚厚mm	出土場所	備考
1	C73	不規則形	1.40	1.20	0.20	御前原・日井片	
2	B-C72-73	神明両	1.22	1.20	0.36	御前原・日井片	土器
3	C72	近現代	1.59	1.20	0.39		
4	C72	?	2.00	0.90	0.50	1.00m 長さ大文字片、山田1片	
5	C72	?	2.00	0.90	0.50	中期上部 1片、早原1片	
6	B69	肩付	1.00	0.84	0.46	利野丘・日井片、舟見1片、西石1片	土器
7	C72	?	0.27	0.25	0.07	平安堀1片	
8	C72	?	0.65	0.52	0.35	中期上部	
9	B71	直脚円脚	0.52	0.30	0.14	伊勢里1片	
10	B71	直脚円脚	1.60	1.20	0.38	御前原・日井片	
11	B71	平安上・中期	0.67	0.65	0.28	平安坏・重4片	
12	B71	直脚円脚	0.30	0.18	0.08	伊勢里1片	
13	B71-72	近現代	0.60	0.52	0.22	伊勢里など1片	
14	B71	?	0.55	0.55	0.23	伊勢里など7片	
15	B71	?	0.57	0.50	0.23	近原・菅原など1片	
16	C71	?	1.00	0.80	0.43	伊勢里1片、舟見1片、早原1片など	土器
17	C71	管付	1.16	1.00	0.25	伊勢里1片、舟見1片、早原1片など	上塙
18	C71	?	0.55	0.55	0.23	15片、ミニチュア1片種類	
19	C71	?	0.55	0.55	0.23	15片、ミニチュア1片種類	
20	C71	?	0.55	0.55	0.23	15片、ミニチュア1片種類	
21	C71	?	0.55	0.55	0.23	15片、ミニチュア1片種類	
22	C71	管付	0.55	0.55	0.23	15片、ミニチュア1片種類	
23	C71	?	0.55	0.55	0.23	15片、ミニチュア1片種類	
24	C71	?	0.55	0.42	0.14	伊勢里1片	
25	C70-71	直脚直	1.20	0.95	0.45	伊勢里3片、西G1	近ビットを切る
26	C71	?	0.59	0.67	0.13	如E1・直など3片	上塙
27	A70	近現代	1.20	1.30	0.19	菅原1片	
28	A52	近現代	0.60	0.55	0.03	菅原1片	
29	B-A69	近現代	0.52	0.52	0.12	菅原1片	
30	B-E69	近現代・古	1.74	1.1	0.59	菅原1片	
31	E69-72	近現代	1.1	0.95	0.38	菅原1片	
32	B-C69	骨付脚	1.98	1.78	0.24	菅原1片、Vなど5片、上柳片1片右	土器
33	B-C69	不蓋付脚	1.98	1.78	0.24	菅原1片、Vなど5片、上柳片1片右	土器
34	J-C68-69	?	1.30	0.90	0.14	早期2片	
35	C68	?	1.08	0.90	0.39	菅原1片	
36	B71	近現代	0.65	0.64	0.23	菅原1片	
37	B72	近現代	1.59	1.25	0.35	遺文5片	
38	B-D71	?	0.50	0.32	0.16	菅原など7片	
39	B71	近現代	1.18	0.84	0.29	菅原など2片	
40	C69	?	1.10	0.90	0.11	中脚左	
41	C69	?	1.10	0.90	0.11	中脚左	
42	J-C68-69	?	1.30	0.90	0.14	早期2片	
43	C68	?	1.08	0.90	0.39	菅原1片	
44	B71	近現代	0.65	0.64	0.23	菅原1片	
45	B72	近現代	1.59	1.25	0.35	遺文5片	
46	B-D71	?	0.50	0.32	0.16	菅原など7片	
47	B71	近現代	1.18	0.84	0.29	菅原など2片	
48	C69	?	1.10	0.90	0.11	中脚左	
49	C69	?	1.10	0.90	0.11	中脚左	
50	C69	?	1.10	0.90	0.11	中脚左	
51	C69	?	1.10	0.90	0.11	中脚左	
52	C69	?	1.10	0.90	0.11	中脚左	
53	C69	?	1.10	0.90	0.11	中脚左	
54	C69	?	1.10	0.90	0.11	中脚左	
55	C69	?	1.10	0.90	0.11	中脚左	
56	C69	?	1.10	0.90	0.11	中脚左	
57	C69-67	骨付脚?	1.08	0.90	0.11	中脚左	
58	C69-67	骨付脚?	1.08	0.90	0.11	中脚左	
59	C69-67	骨付脚?	1.08	0.90	0.11	中脚左	
60	C69-67	骨付脚?	1.08	0.90	0.11	中脚左	
61	C69-67	骨付脚?	1.08	0.90	0.11	中脚左	
62	C69-67	骨付脚?	1.08	0.90	0.11	中脚左	
63	A-B66-65	平安?	1.30	0.90	0.14	中脚左	
64	A-B66-65	古墳時代	1.30	0.90	0.14	中脚左	
65	A-B67	古墳時代	1.13	1.14	0.35	中期上部 1片、下側脚部1片	
66	A-B66	古墳時代	1.58	1.30	0.21	中期2片、足石1片	
67	C57	?	1.16	0.75	0.26	無頭直1片、菅原N-31片	
68	B-C66-67	菅原N-7	0.60	0.45	0.12	中期2片、足見1片	
69	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	シミ状、81号ピットと重複
70	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
71	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
72	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
73	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
74	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
75	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
76	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
77	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
78	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
79	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
80	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
81	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
82	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
83	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
84	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
85	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
86	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
87	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
88	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
89	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
90	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
91	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
92	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
93	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
94	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
95	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
96	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
97	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
98	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
99	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
100	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
101	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
102	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
103	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
104	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
105	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
106	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
107	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
108	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
109	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
110	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
111	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
112	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
113	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
114	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
115	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
116	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
117	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
118	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
119	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
120	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
121	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
122	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
123	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
124	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
125	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
126	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
127	C66-67	菅原N-7	0.50	0.34	0.11	中期2片、足見1片	81号ピットと重複
128	D55	?	0.99	0.60	0.29	平安時代	
129	D55	?	0.95	0.37	0.21	平安時代	
130	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
131	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
132	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
133	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
134	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
135	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
136	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
137	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
138	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
139	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
140	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
141	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
142	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
143	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
144	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
145	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
146	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
147	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
148	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
149	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
150	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
151	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
152	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
153	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
154	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
155	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
156	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
157	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
158	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
159	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
160	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
161	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
162	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
163	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
164	D55	?	0.95	0.37	0.21	後醍醐2片	
165	D55						

第14表2 ピット一覧表

番号	位置	時期	形態	長軸cm	幅軸cm	深さcm	頂上地質	地質
244	D57	平安2期?	楕円形	0.33	0.25	0.12	平安1期	シミ状
245	E57	神代Ⅲ?	楕円形	0.75	0.69		平安4期	シミ状
246	D56	?	楕円形	0.26	0.62	0.18	楕円形	249号ビットと重複
247	E56	?	楕円形	(0.28)	0.28	0.10	楕円形	248号ビットと重複
248	E55	?	楕円形	0.72	0.64	0.13	楕円形(内2周切), 後削切, 平安3期	後削切
249	E53	?	楕円形	0.55	0.49	0.06	楕円形	後削切
250	E54	?	楕円形	0.55	0.49	0.17	中削切, 後削切	シミ状
262	E54	?	楕円形	0.43	0.33	0.07	上層方	シミ状
263	E52	?	楕円形	0.73	0.54	0.18	後削切(底上部), はがき状, 石礫	後削切
267	E52	?	楕円形	1.26	0.62	0.17	後削切	シミ状
268	E52	?	楕円形	0.71	0.58	0.09	上層方	シミ状
277	L52	?	楕円形	0.40	0.30	0.07	後削切1片	シミ状
293	G38	平安?	楕円形	1.36	0.72	0.09	椭円形, 平安2片	
294	G37	?	楕円形	0.70	0.54	0.22	椭円形1など2片	
295	G135	後削?	楕円形	0.40	0.34	0.15	後削切片	
296	I36	?	楕円形	0.77	0.74	0.33	解之2柱など5片	
297	I35	?	楕円形	0.54	0.44	0.22	解之2柱など5片	
299	I35	?	楕円形	0.35	0.25	0.12	後削切片	
301	I35	?	楕円形	0.65	0.56	0.29	後削切片	
303	I35	?	楕円形	0.35	0.50	0.11	後削切片	
304	H35	後削?	楕円形	0.38	0.30	0.08	後削切片	
305	G38	後削?	楕円形	0.60	0.59	0.16	後削切片	
306	G138	後削?	楕円形	1.34	[1.30]	0.15	後削切片	305・307号ビットと重複
307	G138	後削?	楕円形	2.75	1.53	0.14	後削切片, 平安5片	
308	H38	?	楕円形	1.64	1.07	0.17	後削切片, 平安3片, 漆器要1片	調査区外へのびる
309	H35	?	円形	0.82	0.76	0.50	中削切~後削切など5片	
310	I35	?	楕円形	0.63	0.54	0.14	後削切片	
312	H35-36	後削?	楕円形	0.43	0.33	0.10	後削切片	
313	J36	?	楕円形	0.38	0.24	0.20	後削切片	
314	J32	?	楕円形	0.38	0.26	0.20	後削切片	
315	H35	?	楕円形	0.70	0.51	0.07	後削切片	
317	J33	?	方形容	0.86	0.82	0.65	解之2柱など5片	
320	I32	?	円形	0.56	0.54	0.43	解之2柱など17片	
325	J32	?	楕円形	0.60	0.55	0.28	南北2片, 極限15片	
325	J32	?	楕円形	0.56	0.50	0.38	南北2柱など10片	
326	J32	?	楕円形	1.10	[0.40]	0.40	解之2柱など31片以上	調査区外へのびる
329	J32	?	楕円形	0.55	0.52	0.18	後削切片	
332	J33	?	楕円形	0.87	(0.85)	0.16	解之2柱など10片	
333	J32	?	楕円形	0.41	0.40	0.12	後削切片	
334	J32	?	楕円形	0.50	0.40	0.14	後削切片, 平安1片	
335	J32	?	楕円形	0.56	0.49	0.14	後削切片	
336	J31	?	楕円形	0.57	0.51	0.14	後削切片	
337	J31	?	楕円形	0.86	(0.60)	0.17	326・327号合わせて射之内113片	328号ビットと重複
338	J31	?	楕円形	1.46	1.10	0.36	328号ビットと重複	327号ビットと重複
339	J32	?	楕円形	0.64	0.49	0.40	後削切片	
341	J32	?	後削?	0.50	0.45	0.25	後削切片	
343	T39	?	不規方形容	1.36	1.23	0.36	後削切片(解之内2柱)	348号ビットと重複
344	J30	?	楕円形	1.08	0.95	0.45	南北2柱など5片, 円筒1個片?	
353	K30	?	楕円形	0.75	0.67	0.28	後削切片5片	土坑
354	J30	?	楕円形	0.45	0.43	0.46	後削切片5片	縦り過ぎ部分り
355	J30	?	楕円形	0.59	0.66	0.23	後削切片	
356	J30	?	楕円形	0.60	0.62	0.27	後削切片など5片	土坑
357	J30	?	楕円形	0.70	0.70	0.34	後削切片	
366	J36	?	楕円形	0.93	0.92	0.39	解之2柱など14片, 四石1	土坑
373	J30	?	楕円形	0.93	0.54	0.34	解之2柱など33片	
374	J30	?	楕円形	(0.54)	0.45	0.27	南北2柱1片	344号ビットと重複
376	J32	?	楕円形	(0.80)	0.57	0.30	後削切片9片	調査区外へのびる, 327号ビットと重複
377	J32	後削?	楕円形	0.44	(0.34)	0.24	解之内2片	調査区外へのびる, 326号ビットと重複
381	K28	?	楕円形	1.02	0.90	0.25		無石炉
382	J27	?	楕円形	1.04	0.86	0.22		先石炉
384	J29	?	楕円形	0.33	0.26	0.32		
385	J28	?	楕円形	0.33	0.30	0.47		
386	J28	?	楕円形	0.72	0.55	0.12		
387	J29	?	円形容	0.49	0.48	0.36		
389	J28	?	楕円形	1.30	1.04	0.21		
390	J28	?	不規方形容	1.54	1.45	0.46		
391	J28	?	不規方形容	1.36	1.22	0.40		
393	J28	?	不規方形容	1.32	1.31	0.24		
396	J28	?	楕円形	0.84	0.67	0.23		
398	J29	?	楕円形	1.51	1.29	0.74		
401	G13-14	菅原1	楕円形	1.02	0.92	0.28	菅原1人形被覆など14片以上	土坑
404	N14	?	楕円形	1.35	1.28	0.58	人形被覆(12片), 平安1片	土坑墓
405	S14	?	楕円形	1.28	0.95	0.24	楕円形1人形被覆	南北住立と重複
406	K14	?	小形方形容	0.54	0.52	0.21	南北2柱など5片	南北住立
408	神代I	?	不規方形容	0.92	0.70	0.66	神代I大形被覆(10片以上)	南北住立
412	N10.17	?	不規方形容	1.06	1.20	0.45	南北1人形被覆など5片, 平安1片	南北住立
413	S14	?	不規方形容	1.16	0.90	0.26	南北1人形被覆	南北住立
414	P58	中削丸	円形	1.14	1.08	0.42	中削丸跡形2奇数片	17号住立

土器・陶器腹裏表(〔-〕)は現状値、〔-〕は復元値。スコラはスリット状の赤色粒子、胎上は肉眼観察によるもので無記も含まれる)

土器・陶器觀察表(一)は現状値、(二)は復元値、(三)は誤認も含まれる

上巻・脚踏観察表(（-）は現状値、（-）は実元値、スコアはスコリア状の赤色粒三、胎土は均質観察によるもので誤認も含まれる)

上巻・肺器鏡検法(+)は現状値、(-)は復元値。スコリアはスコリア状の赤色粒子、右十は肉眼観察によるもので誤認も含まれる。

土器・陶器類繁多（（-）は現状値、〔-〕は復元値、〔-〕は測定値も含まれる）

第15章 土器・陶器と其の喪失 (一) 現状値

土器・陶器類の表(一)は現状、(二)は復元值、(三)はスコニアは赤色粒子、胎土は肉眼観察によるもので誤認も含まれる)

土器・陶器観察表(—)は現次他、〔—〕は復元他、スコリアはスコリア状の赤色燧石、粘土は内部觀察によるもので誤認も含まれる)

第15表 9 十器・陶器規格表(一)は現状値、(二)は復元値、スコリアはエロリア状の赤色粒子、鉄士は四隅鋸歯によるもので黒鐵も含まれる)

第555号 土器・陶器観察表(一)は現状、(二)は復元。スコリアはセミニアイトの赤色粒子、粘土は陶器類によるもので解説も含まれる。

表12 土器・陶器観察表(一)は現状値、(二)は内蔵観察によるもので誤認も含まれる)

13 土器・陶器觀察天(一)は現状、(二)は復元值、(三)は肉眼観察によるもので解説も含まれる)

第15表15 土壌・陶器製茶灰(—)は現状値、(--)は復元値、スコリアはスコリア灰の赤色粒子、胎土は内眼粗粒によるもので鉄錆も含まれる)

上巻・陶器類新表(一)は復元編、(二)は現状編、(三)は第15表16

第16表1 石器觀察表

第四回 出土地点	番号	物語	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	欠損状況	自然	記述内容	備考
54. B50	152	漫文	四石	9.2	6.3	4.4	312	安山岩	充存	青有	B62n. 30b	凹面は2面
54. B50	153	漫文	四石	8.9	6.9	4.7	458	安山岩	充存	青有	B62n. 222	凹面は2面
61. B61	154	漫文	四石	9.4	5.8	3.9	170	安山岩	半分欠損	青有	B61n. 813	凹面肉は2面。すこぼ
61. B61	155	漫文	四石	7.7	5.8	4.2	130	安山岩	充存	青有	B61n. 814	凹面肉は2面
54. B52	156	漫文	四石	11.3	6.7	4.8	352	安山岩	充存	青有	B62n. 10	凹面は2面
54. B52	157	漫文	四石	12.6	8.4	5.8	666	安山岩	充存	青有	B62n. 199	凹面は2面。斜面側彫り
55. B52	158	漫文	四石	10.5	6.3	5.2	410	安山岩	充存	青有	B62n. 957	凹面は2面。斜面側彫り
61. C52	159	漫文	四石	17.4	7.0	4.0	254	安山岩	約半分欠損	青有	C52n. 263	凹面は2面。
61. C53	160	漫文	四石	6.6	8.9	7.0	618	安山岩	充存	青有	C53n. 6	凹面肉は2面
61. D51	161	漫文	四石	9.0	7.4	5.0	346	安山岩	半分欠損	青有	B61n. 728	凹面肉は2面
64. B51	162	漫文	四石	(10.5)	(7.6)	4.1	452	安山岩	欠損	青有	B61n. 53	凹面肉は2面。斜面側彫り。外側
65. B62	163	漫文	四石	10.5	7.7	5.8	645	安山岩	充存	青有	B62n. 39	凹面肉は2面。一部破片
65. A95	164	漫文	四石	(7.5)	9.4	4.0	514	安山岩	欠損	青有	A95n. 5	凹面肉は2面。斜面側彫り
65. B60	165	漫文	四石	8.3	7.4	4.4	378	安山岩	充存	青有	B60n. 219	凹面肉は2面。
65. B61	166	漫文	四石	(10.0)	(5.7)	3.0	219	安山岩	欠損	青有	B61n. 539	面面修理
65. B61	167	漫文	四石	(4.8)	(6.4)	2.5	110	安山岩	欠損	青有	B61n. 214	面面修理
65. C61	168	漫文	四石	4.7	3.5	2.5	16	マサイト	充存	無	C61n. 49	全面を磨いている
65. B62	169	漫文	四石	(5.5)	(7.2)	(2.5)	214	砂岩	欠損	青有	B62n. 122	一部削除。溝跡有
65. B62	170	漫文	四石	(6.5)	9.0	3.1	350	安山岩	半分欠損	青有	B62n. 979	面面修理
65. B62	171	漫文	四石	(6.5)	8.8	3.2	356	安山岩	欠損	青有	B62n. 980	面面修理
65. B62	172	漫文	四石	(6.1)	8.8	3.2	236	安山岩	欠損	青有	B62n. 715	面面修理
65. C63	173	漫文	四石	12.0	10.3	5.3	1052	安山岩	充存	青有	C63n. 4	均等
65. A66	174	漫文	石斧	11.0	8.5	5.0	634	砂岩	一部削除	青有	A66n. 6	面面修理。表面を磨いている
65. A66	175	漫文	洞石	7.02	7.8	3.7	522	安山岩	欠損	青有	A66n. 7	面面修理
66. B62	176	漫文	洞石	4.9	5.3	0.6	54	安山岩	被覆剥離	青有	B62n. 268	底面は上層
66. C52	177	漫文	洞石	(6.6)	(6.2)	1.1	45	安山岩	欠損	青有	B62n. 67	底面は上層
66. B63	178	漫文	洞石	8.5	5.6	1.0	82	砂岩	充存	青有	B63n. 91	底面は上層
66. B62	179	漫文	洞石	6.3	5.3	2.3	149	砂岩	一部欠損	青有	B62n. 728-95	底面は2面。かすかな継縫拵み
66. B62	180	漫文	洞石	(2.2)	(3.2)	0.4	6	砂岩	欠損	無	B62n. 205	底面は2面。
56. B61	181	漫文	洞石	(3.5)	(3.5)	0.6	12	砂岩	欠損	無	B61n. 705	底面は2面。
66. B62	182	漫文	洞石	(2.1)	(3.8)	0.9	8	砂岩	欠損	無	B62n. 805	底面は2面
66. B62	183	漫文	洞石	(9.6)	(11.4)	1.1	8	砂岩	欠損	無	B62n. 85	底面は2面。斜面側彫り
66. C52	184	漫文	洞石	12.5	12.5	0.9	15	砂岩	充存	無	C52n. 7	底面は2面。
56. B61	185	漫文	洞石	12.5	12.5	1.3	40	安山岩	欠損	無	B61n. 15	底面は2面。
56. B61	186	漫文	洞石	12.5	12.5	1.2	29	砂岩	欠損	無	B61n. 729	底面は2面。
97. B69	187	漫文	洞片	3.47	1.06	0.26	1.15	安山岩	充存	無	B69n. 197	底面
97. B62	188	漫文	洞片	3.87	1.04	0.56	2.1	安山岩	充存	無	B62n. 750	底面。原石
67. B62	189	漫文	洞片	3.54	1.16	0.37	1.45	安山岩	充存	無	B62	底面
57. B61	190	漫文	洞片	(3.87)	(1.16)	0.45	1.90	安山岩	欠損	無	B61n. 67	底面
57. B69	191	漫文	洞片	(3.5)	(3.5)	0.6	12	砂岩	欠損	無	B69n. 12	底面
57. B69	192	漫文	洞片	3.2	3.1	0.5	52	砂岩	充存	無	B69n. 268	底面
57. B69	193	漫文	洞片	3.40	1.76	0.5	134	砂岩	充存	無	B69n. 48	底面あり。斜面
57. D51	194	漫文	洞片	2.59	1.39	0.52	155	安山岩	充存	無	B61n. 746	底面
67. B61	195	漫文	洞片	3.28	0.98	0.32	97	安山岩	充存	無	B61n. 565	底面。裏面彫り
97. B62	196	漫文	洞片	3.46	1.54	0.5	204	安山岩	充存	無	B62n. 47	底面。裏面彫り
57. B69	197	漫文	石核	1.31	(1.95)	0.22	0.33	安山岩	削除	無	B69n. 44	左側彫り。三面彫
68. B61	198	漫文	石核	1.18	1.28	0.18	18	安山岩	充存	無	B61n. 783	左側彫り。角部彫
68. B61	199	漫文	石核	1.18	1.28	0.18	18	安山岩	充存	無	B61n. 413	左側彫り。角部彫
57. C52	200	漫文	石核	1.16	1.27	0.18	17	安山岩	充存	無	C52	三面彫片彫
57. B61	201	漫文	石核	1.18	(1.02)	0.20	16	安山岩	充存	無	B61n. 231	三面彫
68. B62	202	漫文	石核	1.12	1.22	0.25	21	安山岩	充存	無	B62n. 126	-
68. B61	203	漫文	石核	1.44	1.39	0.21	31	安山岩	充存	無	B61n. 171	-
68. B61	204	漫文	石核	(1.38)	(1.16)	0.22	32	安山岩	基部欠損	無	B61	-
68. C52	205	漫文	石核	1.44	1.04	0.24	26	安山岩	削除	無	C52n. 205	-
68. C52	206	漫文	石核	2.27	1.62	0.26	60	安山岩	削除	無	C52n. 892	-。角部彫
68. B62	207	漫文	石核	(1.62)	(1.62)	0.26	56	安山岩	削除	無	B62n. 207	-。角部彫
68. B62	208	漫文	石核	1.36	1.10	0.31	95	安山岩	片側彫	無	B62n. 10	削除。片面彫
68. B61	209	漫文	石核	(1.39)	(1.18)	0.27	93	黑曜石	先端・片側彫	無	B61n. 395	削除後
68. B62	210	漫文	石核	1.05	0.92	0.27	19	黑曜石	充存	無	B62n. 449	微小石核
68. C52	211	漫文	石核	1.16	1.25	0.20	21	黑曜石	充存	無	C52	削片彫
68. B62	212	漫文	石核	1.32	1.39	0.22	24	黑曜石	充存	無	B62n. 116	斜面彫
68. B62	213	漫文	石核	1.07	0.76	0.25	18	黑曜石	充存	無	B62n. 564	斜面彫
68. B62	214	漫文	石核	1.32	1.32	0.25	32	黑曜石	充存	無	B62n. 222	斜面彫
68. C51	215	漫文	石核	1.35	1.23	0.26	33	黑曜石	先端・削除	無	C51n. 45	斜面彫
68. B61	216	漫文	石核	1.35	1.26	0.25	35	黑曜石	充存	無	B61n. 65	斜面彫
68. B62	217	漫文	石核	(1.13)	(0.72)	0.20	13	黑曜石	先端・片側彫	無	B62n. 474	微小石核
68. B62	218	漫文	石核	1.76	1.43	0.35	86	黑曜石	充存	無	B62n. 841	削片彫
58. B61	219	漫文	石核	1.67	1.28	0.25	95	黑曜石	充存	無	-	出土地点不明。削片彫
68. C50	220	漫文	石核	1.48	(1.01)	0.33	95	黑曜石	削除	無	B61n. 53	-
68. B61	221	漫文	石核	(1.42)	(1.35)	0.23	94	黑曜石	充存	無	C50	-
68. B62	222	漫文	石核	1.37	1.34	0.18	31	黑曜石	充存	無	B62n. 22	未完成品か
68. B62	223	漫文	石核	1.20	1.20	0.20	33	黑曜石	先端・欠損	無	B62n. 225	削片彫
68. B62	224	漫文	石核	1.52	1.42	0.19	35	黑曜石	光沢	無	B62n. 203	削片彫
68. B62	225	漫文	石核	(1.25)	1.35	0.33	52	黑曜石	先端・欠損	無	B62n. 392	削片彫
68. B62	226	漫文	石核	(1.68)	(1.12)	0.26	35	黑曜石	先端・欠損	無	B62n. 145	削形彫
68. B62	227	漫文	石核	1.34	(1.63)	0.29	33	黑曜石	片側彫	無	B62n. 147	削片彫
68. C52	228	漫文	石核	1.45	(1.12)	0.20	40	黑曜石	先端・欠損	無	-	145ミリピット。半面彫
68. B62	229	漫文	石核	1.55	2.01	0.21	14	テラコ	充存	無	B62n. 723	右端彫
68. B62	230	漫文	石核	(1.72)	(1.78)	0.74	1.85	黑曜石	先端・種類欠損	無	-	145ミリピット。半面彫
69. C62	231	漫文	石核	1.64	1.38	0.66	120	黑曜石	充存	無	C62n. 120	右端彫
69. B62	232	漫文	石核	(0.95)	0.64	0.36	47	黑曜石	先端・欠損	無	B62n. 119	右端彫
69. B60	233	漫文	石核	1.89	1.94	0.53	1.27	黑曜石	光沢	無	B60	円形
69. B60	234	漫文	石核	2.73	2.33	0.22	82	黑曜石	充存	無	B60n. 293	円形
69. B60	235	漫文	石核	1.76	1.76	0.20	34	黑曜石	充存	無	B60n. 804	裏面に左端彫。円形
69. B60	236	漫文	石核	1.59	1.59	0.41	1.58	テラコ	充存	無	B60n. 692	円形
69. B61	237	漫文	石核	2.11	1.59	0.41	1.58	テラコ	充存	無	B61n. 622	円形
69. B61	238	漫文	石核	1.40	1.58	0.65	1.48	テラコ	充存	無	B61n. 503	円形
69. B61	239	漫文	石核	1.70	1.81	0.71	2.30	テラコ	充存	無	B61n. 747	右端彫
69. B62	240	漫文	石核	2.17	1.99	0.72	92	黑曜石	充存	無	B62n. 102	右端彫

第16表2 石器観察表

序号	記述点	番号	時期	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	欠陥状況	自然 色	出迎内容	備考
59	B52	241	縄文	棒器	1.74	2.40	0.56	2.93	黒曜石	先端	黒	852No. 856	
70	B50	242	縄文	棒器	3.06	2.70	0.52	6.02	黒曜石	先端	黒	850No. 2	
70	B50	243	縄文	棒器	2.22	2.55	1.44	5.27	黒曜石	先端	黒	850No. 215	
70	B50	244	縄文	棒器	2.18	2.58	0.55	3.36	黒曜石	先端	黒	850No. 218	
70	B50	245	縄文	棒器	1.98	2.30	0.52	2.85	黒曜石	先端	黒	850No. 220	
70	B50	246	縄文	棒器	1.94	1.97	0.52	2.89	黒曜石	先端	黒	850No. 9	
70	B50	247	縄文	棒器	1.95	1.58	0.55	1.83	黒曜石	先端	黒	850No. 30	
70	A61	248	縄文	棒器	1.20	1.78	1.00	1.76	黒曜石	先端	黒	851No. 10	
70	B61	249	縄文	棒器	1.60	1.78	1.58	2.04	黒曜石	先端	黒	851No. 815	
70	B61	250	縄文	棒器	1.92	1.51	1.71	1.98	黒曜石	先端	黒	851No. 778	
70	B61	251	縄文	棒器	2.12	1.91	1.05	2.33	黒曜石	先端	黒	851No. 481	
70	B61	252	縄文	棒器	1.62	1.73	0.51	1.86	黒曜石	先端	黒	851No. 462	
70	B61	253	縄文	棒器	1.65	1.75	0.55	1.90	黒曜石	先端	黒	851No. 463	
70	B61	254	縄文	棒器	0.83	1.20	0.50	0.89	黒曜石	先端	黒	851No. 156	
70	B61	255	縄文	棒器	1.85	2.00	0.58	2.23	黒曜石	先端	黒	851No. 801	
70	B61	256	縄文	棒器	1.96	2.25	1.23	4.78	黒曜石	先端	黒	851No. 250	
71	B61	257	縄文	棒器	2.35	2.75	0.58	4.50	黒曜石	先端	黒	851	
71	C51	258	縄文	棒器	1.65	2.78	1.27	5.05	黒曜石	先端	黒	851No. 147	
71	B61	259	縄文	棒器	2.73	2.77	0.60	4.90	黒曜石	先端	黒	851No. 320	
71	C51	260	縄文	棒器	1.62	2.22	0.50	2.84	黒曜石	先端	黒	851No. 60	
71	C51	261	縄文	棒器	1.64	2.25	0.50	2.85	黒曜石	先端	黒	851No. 558	
72	C52	262	縄文	棒器	1.95	1.98	0.58	1.88	黒曜石	先端	黒	149番リスト	
72	C52	263	縄文	棒器	2.15	1.84	0.58	4.48	黒曜石	先端	黒	後各標的の裏石	
72	C52	264	縄文	削片	2.72	2.53	1.11	5.87	黒曜石	先端	黒	852No. 944	
72	B52	265	縄文	削片	1.78	2.08	0.83	3.17	黒曜石	先端	黒	852No. 446	
72	B52	266	縄文	削片	1.69	2.11	0.88	3.75	黒曜石	先端	黒	852No. 766	
72	B52	267	縄文	削片	1.95	2.04	0.79	3.44	黒曜石	先端	黒	852No. 953	
72	C52	268	縄文	削片	1.25	1.75	0.69	3.62	黒曜石	先端	黒	852No. 19	
72	C52	269	縄文	削片	1.47	1.78	0.65	1.57	黒曜石	先端	黒	852No. 24	
72	B61	270	縄文	削片	4.06	2.29	1.10	6.23	黒曜石	先端	黒	851No. 731	
72	B62	271	縄文	削片	4.10	1.95	1.22	9.21	黒曜石	先端	黒	852No. 270	
72	B62	272	縄文	削片	2.56	1.90	0.69	2.73	黒曜石	先端	黒	852No. 193	
72	B62	273	縄文	削片	2.58	1.94	0.56	2.38	黒曜石	先端	黒	852No. 207	
72	B62	275	縄文	削片	2.58	1.58	0.78	2.87	黒曜石	先端	黒	852No. 845	
72	B60	275	縄文	削片	2.82	2.72	0.69	5.98	黒曜石	先端	黒	852No. 302	
72	B61	276	縄文	削片	2.40	1.64	0.68	1.83	黒曜石	先端	黒	850	
72	B61	278	縄文	削片	3.10	2.31	0.58	2.78	黒曜石	先端	黒	851No. 127	刃部付四面
72	B61	279	縄文	削片	2.85	2.39	0.94	6.13	黒曜石	先端	黒	851No. 685	
72	B61	280	縄文	削片	1.86	3.18	0.78	4.56	黒曜石	先端	黒	851No. 745	
73	T61	281	縄文	片手	1.78	2.13	0.51	1.32	黒曜石	先端	黒	851	二次加工あり
73	B62	282	縄文	削片	(3.95)	(1.40)	1.05	3.06	黒曜石	先端	黒	852No. 292	
73	B62	283	縄文	削片	1.80	2.51	0.52	3.28	黒曜石	先端	黒	852No. 441	二次加工あり
73	C52	284	縄文	削片	2.01	2.07	0.78	5.95	黒曜石	先端	黒	852No. 236	二次加工あり
73	C52	286	縄文	削片	(1.38)	(1.50)	0.81	2.35	黒曜石	先端	黒	852No. 249	刃部は両面
73	C52	287	縄文	削片	(1.61)	(1.78)	0.82	1.47	黒曜石	先端	黒	852No. 76	二次加工あり
73	B62	288	縄文	削片	3.06	4.60	2.33	49.57	片手貴賀刃	先端	白	852No. 211	片手貴賀刃
73	C52	289	縄文	削片	2.02	0.70	0.49	0.57	黒曜石	先端	黒	852No. 285	
73	B60	290	縄文	削片	1.63	2.22	0.58	0.52	黒曜石	先端	黒	850No. 162	
73	B60	291	縄文	削片	1.62	2.51	0.58	0.52	黒曜石	先端	黒	850No. 163	
73	B61	292	縄文	削片	2.01	2.11	0.67	0.58	黒曜石	先端	黒	851No. 51	
73	B61	293	縄文	削片	3.16	1.80	0.67	3.42	黒曜石	先端	黒	851No. 456	
74	B51	294	縄文	削片	2.34	1.46	0.67	1.55	黒曜石	先端	黒	852No. 841	
74	B52	295	縄文	削片	2.84	1.65	0.99	2.90	黒曜石	先端	黒	852No. 189	二次加工あり
74	C52	296	縄文	削片	2.66	1.66	0.40	1.57	黒曜石	先端	黒	852No. 129	二次加工あり
74	C52	297	縄文	削片	2.81	4.82	1.21	11.72	黒曜石	先端	黒	852No. 172, 314	刃部付あり、二次加工あり
74	-	298	縄文	削片	1.37	1.95	0.36	0.74	黒曜石	先端	黒	852No. 129	二次加工あり
74	B50	299	縄文	削片	5.7	5.5	1.5	52	日本古墳美術館	先端	白	850No. 319	二次加工前
74	B50	300	縄文	削片	5.8	8.8	3.4	218	青石	先端	白	850No. 221	刃部は片手
74	B50	301	縄文	削片	5.5	6.4	1.3	250	青石	先端	白	852No. 16	
74	B50	302	縄文	削片	12.9	9.5	2.8	205	青石	先端	白	852No. 10	
74	B50	303	縄文	削片	1.36	1.80	0.67	3.42	黒曜石	先端	白	852No. 841	
74	B51	304	縄文	削片	2.34	1.46	0.67	1.55	黒曜石	先端	白	852No. 189	
74	B52	305	縄文	削片	2.84	1.65	0.99	2.90	黒曜石	先端	白	852No. 129	
74	C52	306	縄文	削片	2.66	1.66	0.40	1.57	黒曜石	先端	白	852No. 172, 314	
74	-	307	縄文	削片	9.5	4.9	4.4	115	日本古墳美術館	先端	白	852No. 88	3面を使用
74	B50	308	縄文	削片	10.9	7.5	5.1	149	青石	先端	白	852No. 2	深面及び側面を磨ぐ
74	B50	309	縄文	削片	11.3	20.0	6.9	1290	青石	先端	白	852No. 41	3面を使用
74	B50	310	縄文	削片	10.4	3.3	0.7	45	青石	先端	白	852No. 84	3面を使用
74	B50	311	縄文	削片	8.9	5.6	0.8	51	緑色片岩	先端	白	852No. 83	片面を磨く
74	B50	312	縄文	削片	9.2	5.4	2.8	278	青石	先端	白	852No. 27	片面を磨く
74	B50	313	縄文	削片	14.0	5.9	4.1	172	青石	先端	白	852No. 426	凹凸面
74	B50	314	縄文	削片	22.5	15.5	2.6	1470	青石	先端	白	852No. 604	横斜口
74	B50	315	縄文	削片	17.5	17.5	2.6	1470	青石	先端	白	852No. 512	横斜口
74	B50	316	縄文	削片	(3.9)	6.0	0.8	12	赤玉砂岩	先端	白	852No. 427	横斜口
74	B50	317	縄文	削片	7.6	4.0	1.2	136	赤玉砂岩	先端	白	852No. 519	横斜口
74	B50	318	縄文	削片	13.1	9.7	3.0	475	安山岩	先端	白	852No. 96	表面は4面、片面に磨き跡
74	B50	319	縄文	削片	12.8	8.1	5.6	725	安山岩	先端	白	852No. 56	凹凸面
74	B50	320	縄文	削片	(9.3)	7.0	3.8	435	安山岩	先端	白	852No. 120	凹凸面
74	B50	321	縄文	削片	11.4	19.5	3.4	988	安山岩	先端	白	852No. 167	凹凸面
74	B50	322	縄文	削片	7.7	6.1	3.5	455	安山岩	先端	白	852No. 603	凹凸面は片面
74	B50	323	縄文	削片	9.8	6.5	3.9	382	安山岩	先端	白	852No. 603	凹凸面は片面
74	B50	324	縄文	削片	8.5	6.0	3.5	490	ダイヤモンド	先端	白	852No. 606	模様口
74	B50	325	縄文	削片	(2.74)	(1.56)	0.25	0.57	黒曜石	先端	白	852No. 574	模様口
74	B50	326	縄文	削片	7.6	5.5	1.4	56	黒曜石	先端	白	852No. 294	模様口付背面
74	B50	327	縄文	削片	3.57	1.18	0.52	2.80	黒曜石	先端	白	852No. 294	模様口付背面
74	B50	328	縄文	削片	10.8	8.3	5.5	565	安山岩	先端	白	852No. 134	模様口付背面
74	B50	329	縄文	削片	7.2	7.4	5.1	382	安山岩	先端	白	852No. 72	模様口付背面
74	B50	330	縄文	削片	11.5	5.8	3.4	339	安山岩	先端	白	852No. 71	模様口付背面
74	B50	331	縄文	削片	7.6	5.5	1.4	56	黒曜石	先端	白	852No. 8	模様口付背面

第16表3 石器観察表

発掘番号	出土地点	番号	時期	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	久松版記	自然 面	浮き面	備考	
7		88	13世紀	縄文	小切端石	3.6	1.9	0.8	8	緑色斑状石	火打石	有	13II No. 52	
		89	13世紀	縄文	端石	3.5	3.1	1.2	12	チャート	火打石	有	13II No. 53	石器風
		90	13世紀	縄文	石刀	18.5	6.1	0.4	575	安山岩	火打石	有	13II No. 54	
		91	14世紀	縄文	石斧	20.4	10.6	0.6	179	安山岩	火打石	有	14II No. 55	円み面は?世 紀後半、一品付属
		92	14世紀	縄文	石刀	1.72	1.31	0.47	0.81	安山岩	火打石	有	14II No. 56	
		92	27世紀	縄文	石刀	11.6	8.7	0.9	390	安山岩	火打石	有	27II No. 57	円み面は1面
		92	28世紀	縄文	石刀	10.0	5.9	1.5	116	火打石	火打石	有	28II No. 35	
		92	28世紀	縄文	打斧	(5.0)	3.4	1.6	32	ホルンブリル ス	ホルンブリル ス	無	28II No. 36	
		92	28世紀	縄文	打斧	(5.7)	3.4	1.6	32	ホルンブリル ス	ホルンブリル ス	無	28II No. 37	
		92	28世紀	縄文	打斧	(5.9)	4.5	1.9	32	ホルンブリル ス	ホルンブリル ス	無	28II No. 38	火打石に扱いがある
		93	28世紀	縄文	打斧	(5.0)	3.9	1.6	115	安山岩	火打石	有	28II No. 39	
		92	28世紀	縄文	打斧	(5.9)	6.1	1.6	115	安山岩	火打石	有	28II No. 40	円み面は2面
		92	28世紀	縄文	打斧	9.7	6.8	5.2	452	安山岩	火打石	有	28II No. 41	円み面は1面
		93	29世紀	縄文	打斧	19.3	4.5	1.0	50	粉砂岩	火打石	無	29II No. 42	高風化する
		93	30世紀	縄文	打斧	8.6	5.5	2.0	105	粉砂岩	火打石	有	30II No. 43	
		93	30世紀	縄文	打斧	5.8	5.4	1.5	46	粉砂岩	火打石	有	30II No. 44	
		93	30世紀	縄文	打斧	4.2	2.8	0.4	12	緑色岩	火打石	無	30II No. 45	透視片の両面を磨いている
		93	30世紀	縄文	打斧	(2.4)	(1.40)	0.35	79	碧玉	火打石	無	30II No. 46	
		93	30世紀	縄文	石刀					先端・片刃欠	無	30II No. 47		
		99	31世紀	縄文	打斧	9.7	5.8	2.2	196	粉砂岩	火打石	有	31II No. 48	
		99	31世紀	縄文	打斧	(9.4)	5.7	1.9	116	粉砂岩	火打石	有	31II No. 49	
		99	31世紀	縄文	石斧	14.2	5.4	2.9	196	粉砂岩	火打石	有	31II No. 50	
		99	31世紀	縄文	打斧	13.3	4.4	2.0	134	粉砂岩	火打石	有	31II No. 51	
		99	31世紀	縄文	打斧	(7.5)	3.5	1.7	50	粉砂岩	火打石	有	31II No. 52	
		99	31世紀	縄文	打斧	(6.9)	4.9	2.5	109	粉砂岩	火打石	有	31II No. 53	
		99	31世紀	縄文	打斧	7.4	4.3	2.5	116	粉砂岩	火打石	有	31II No. 54	
		99	31世紀	縄文	打斧	9.5	4.9	2.5	132	粉砂岩	火打石	有	31II No. 55	
		99	31世紀	縄文	打斧	(9.6)	5.6	1.9	56	粉砂岩	火打石	有	31II No. 56	
		99	31世紀	縄文	打斧	(7.3)	5.0	1.3	65	粉砂岩	火打石	有	31II No. 57	
		99	31世紀	縄文	打斧	(7.0)	5.0	1.7	76	粉砂岩	火打石	有	31II No. 58	
		99	31世紀	縄文	打斧	(8.5)	4.8	1.9	47	粉砂岩	火打石	有	31II No. 59	
		99	31世紀	縄文	打斧	(8.7)	4.8	1.7	72	粉砂岩	火打石	有	31II No. 60	風化美しい
		99	31世紀	縄文	打斧	(8.7)	4.4	1.7	72	粉砂岩	火打石	有	31II No. 61	
		99	31世紀	縄文	打斧	6.9	4.9	2.5	109	粉砂岩	火打石	有	31II No. 62	
		99	31世紀	縄文	打斧	7.4	4.3	2.5	116	粉砂岩	火打石	有	31II No. 63	火打石版面
		99	31世紀	縄文	打斧	9.5	4.9	2.5	132	粉砂岩	火打石	有	31II No. 64	表面風化する
		99	31世紀	縄文	打斧	(9.6)	5.6	1.9	56	粉砂岩	火打石	有	31II No. 65	火打石
		99	31世紀	縄文	打斧	(7.3)	5.0	1.3	65	粉砂岩	火打石	有	31II No. 66	
		99	31世紀	縄文	打斧	(7.0)	5.0	1.7	76	粉砂岩	火打石	有	31II No. 67	
		99	31世紀	縄文	打斧	(8.5)	4.8	1.9	47	粉砂岩	火打石	有	31II No. 68	
		99	31世紀	縄文	打斧	(8.7)	4.4	1.7	72	粉砂岩	火打石	有	31II No. 69	
		99	31世紀	縄文	打斧	5.9	3.4	6.8	27	粉砂岩	火打石	有	31II No. 70	フレイク状
		100	32世紀	縄文	打斧	9.5	6.4	1.6	110	粉砂岩	火打石	有	31II No. 71	フレイク状
		100	34世紀	縄文	打斧	7.4	4.3	1.7	56	粉砂岩	火打石	有	31II No. 72	フレイク状
		100	35世紀	縄文	打斧	6.5	6.2	1.7	40	粉砂岩	火打石	有	31II No. 73	フレイク状
		100	35世紀	縄文	打斧	5.9	4.9	0.7	26	粉砂岩	火打石	有	31II No. 74	フレイク状
		100	35世紀	縄文	打斧	(12.0)	4.7	(5.0)	508	緑色片岩	火打石	有	31II No. 75	火打石版面
		100	35世紀	縄文	打斧	11.3	6.2	6.6	428	安山岩	火打石	有	31II No. 76	円孔直2面
		100	35世紀	縄文	打斧	12.9	6.5	5.9	529	安山岩	火打石	有	31II No. 77	円孔直2面
		100	35世紀	縄文	打斧	14.7	7.1	5.9	654	安山岩	火打石	有	31II No. 78	円孔直2面
		100	35世紀	縄文	打斧	14.9	7.5	4.0	760	安山岩	火打石	有	31II No. 79	円孔直2面
		100	35世紀	縄文	打斧	10.4	6.0	3.5	293	安山岩	火打石	有	31II No. 80	円孔直1面
		100	35世紀	縄文	打斧	9.8	6.9	5.3	435	安山岩	火打石	有	31II No. 81	円孔直1面
		100	35世紀	縄文	打斧	9.2	6.8	4.7	375	安山岩	火打石	有	31II No. 82	円孔直1面
		100	35世紀	縄文	打斧	8.6	6.4	3.5	178	安山岩	火打石	有	31II No. 83	円孔直1面
		100	35世紀	縄文	打斧	(7.0)	4.8	3.5	178	安山岩	火打石	有	31II No. 84	圓孔直1面
		100	35世紀	縄文	打斧	10.5	8.3	5.7	870	安山岩	火打石	有	31II No. 85	圓孔直1面
		100	35世紀	縄文	打斧	7.9	9.6	4.3	286	安山岩	火打石	有	31II No. 86	圓孔直1面、一端赤色
		100	35世紀	縄文	打斧	34.1	28.8	35.7	37000	安山岩	火打石	有	31II No. 87	31II No. 100
		101	31世紀	縄文	打斧	(7.9)	(9.5)	4.3	617	安山岩	火打石	有	31II No. 41	表面風化
		101	31世紀	縄文	打斧	2.70	2.70	0.29	1.69	粉砂岩	火打石	有	31II No. 136	円孔直2面
		101	31世紀	縄文	打斧	1.01	1.01	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 137	全体に風化、赤色
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 138	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 139	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 140	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 141	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 142	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 143	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 144	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 145	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 146	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 147	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 148	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 149	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 150	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 151	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 152	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 153	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 154	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 155	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 156	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 157	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 158	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 159	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 160	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 161	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 162	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 163	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 164	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 165	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 166	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 167	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 168	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 169	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 170	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 171	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 172	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 173	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 174	
		101	31世紀	縄文	打斧	1.19	1.19	0.21	0.99	粉砂岩	火打石	有	31II No. 175	

第16表 4 石器製造表

第16表5 石器類概要

番号	出土地点	番号	時間	分類	%	cm	kg	%	cm	kg	石材	欠損状況	通路	往記内容	備考
128	24号地	23	縄文	打斧	(8.8)	5.5	1.2	24	84	1.2	安山岩	柄頭部欠損?	現	24街	
128	24号地	24	縄文	石器	(1.16)	1.62	0.43	0.85	安山岩	先端欠損	現	24街			
129	25号地	25	平安	青銅石	23.8	8.3	16.0	28.20	安山岩	完存	右	25街No.50	全体にやや		
130	25号地	37	縄文	門石	16.3	6.4	3.4	225	安山岩	完存	右	25街No.7	凹み面は2面		
130	25号地	38	縄文	打斧	4.4	2.7	1.9	38	チャート	完存	左	25街			
132	25号地	39	縄文	打斧	21.5	11.2	7.6	2059	安山岩	先端欠損	右	25街No.2	全体		
132	25号地	40	縄文	打斧	10.5	5.5	3.5	316	安山岩	先端欠損	右	25街No.51	全体		
132	25号地	41	縄文	打斧	(4.6)	(6.5)	1.2	45	安山岩	洞鋸削加工	右	25街No.4	本朱麻原		
132	25号地	42	縄文	打斧	(10.9)	5.2	1.7	102	安山岩	月切み	左	25街			
132	25号地	43	縄文	丸棒	2.05	2.02	0.62	1.86	安山岩	刃笠欠損	右	25街			
132	25号地	44	縄文	石器	2.06	1.28	0.44	10.2	安山岩	先端欠損	右	25街			
132	25号地	45	縄文	石器	1.50	1.11	0.28	19.32	安山岩	先端欠損	右	25街			
132	25号地	46	縄文	石器	1.00	0.60	0.20	19.32	安山岩	先端欠損	右	25街			
132	25号地	47	縄文	石器	1.20	0.70	0.20	182	安山岩	先端欠損	右	25街			
132	25号地	48	縄文	打斧	(10.9)	5.2	1.7	102	安山岩	月切み	左	25街			
132	25号地	49	縄文	丸棒	2.05	2.02	0.62	1.86	安山岩	刃笠欠損	右	25街			
132	25号地	50	縄文	打斧	1.36	(1.03)	0.22	10.21	安山岩	先端欠損	右	25街			
132	25号地	51	縄文	丸棒	2.45	(1.61)	0.34	10.62	安山岩	刃笠欠損	右	25街			
134	6号ビット	1	縄文	打斧	11.5	4.3	1.7	194	安山岩	刀削部分欠損	右	17街No.3			
134	6号ビット	2	縄文	四石	16.5	5.5	4.3	303	安山岩	完存	右	17街	刃み面は1面		
134	10号ビット	3	縄文	打斧	10.5	8.2	5.3	564	安山岩	右	17街No.3	刃み面は2面			
134	6号ビット	4	縄文	打斧	11.4	8.0	0.88	10.12	安山岩	先端欠損	右	17街	先端欠損		
134	6号ビット	5	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	安山岩	先端欠損	右	17街	先端欠損		
134	6号ビット	6	縄文	打斧	12.7	5.9	4.5	520	安山岩	先端欠損	右	17街	先端欠損		
134	6号ビット	7	縄文	打斧	1.92	1.30	0.46	11.1	安山岩	完存	右	17街	刃み面は1面		
134	6号ビット	8	縄文	打斧	1.92	1.30	0.46	11.1	安山岩	完存	右	17街	刃み面は1面		
134	6号ビット	9	縄文	打斧	1.58	1.75	0.23	0.42	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	10	縄文	打斧	8.6	7.3	15.6	547	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	11	縄文	打斧	4.5	5.1	1.8	42	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	12	縄文	打斧	4.5	5.1	1.8	42	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	13	縄文	打斧	11.5	8.3	3.7	556	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	14	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	15	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	16	縄文	打斧	12.7	5.9	4.5	520	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	17	縄文	打斧	1.92	1.30	0.46	11.1	安山岩	完存	右	17街	刃み面は1面		
134	6号ビット	18	縄文	打斧	1.92	1.30	0.46	11.1	安山岩	完存	右	17街	刃み面は1面		
134	6号ビット	19	縄文	打斧	1.58	1.75	0.23	0.42	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	20	縄文	打斧	8.6	7.3	15.6	547	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	21	縄文	打斧	4.5	5.1	1.8	42	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	22	縄文	打斧	(4.5)	5.1	1.8	42	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	23	縄文	打斧	11.5	8.3	3.7	556	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	24	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	25	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	26	縄文	打斧	12.7	5.9	4.5	520	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	27	縄文	打斧	1.92	1.30	0.46	11.1	安山岩	完存	右	17街	刃み面は1面		
134	6号ビット	28	縄文	打斧	1.92	1.30	0.46	11.1	安山岩	完存	右	17街	刃み面は1面		
134	6号ビット	29	縄文	打斧	1.58	1.75	0.23	0.42	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	30	縄文	打斧	8.6	7.3	15.6	547	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	31	縄文	打斧	4.5	5.1	1.8	42	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	32	縄文	打斧	11.5	8.3	3.7	556	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	33	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	34	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	35	縄文	打斧	1.92	1.30	0.46	11.1	安山岩	完存	右	17街	刃み面は1面		
134	6号ビット	36	縄文	打斧	(4.4)	5.2	1.3	31	安山岩	半分欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	37	縄文	打斧	8.3	(4.8)	2.8	95	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	38	縄文	打斧	9.2	1.8	0.70	2.26	安山岩	先端欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	39	縄文	打斧	(4.6)	4.4	0.9	26	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	40	縄文	打斧	(7.0)	5.7	1.4	76	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	41	縄文	打斧	5.7	4.7	1.4	76	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	42	縄文	打斧	4.5	3.7	0.31	31	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	43	縄文	打斧	11.5	8.3	3.7	556	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	44	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	45	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	46	縄文	打斧	11.5	8.3	3.7	556	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	47	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	48	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	49	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	50	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	51	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	52	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	53	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	54	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	55	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	56	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	57	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	58	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	59	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	60	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	61	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	62	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	63	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	64	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	65	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	66	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	67	縄文	打斧	(5.8)	4.7	1.4	51	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	68	縄文	打斧	(9.1)	3.7	0.6	16	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	69	縄文	打斧	(7.5)	4.6	1.4	52	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	70	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	71	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	72	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	73	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	74	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	75	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	76	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	77	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	78	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	79	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	80	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	81	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル	刃部欠損	右	17街	刃み面は2面		
134	6号ビット	82	縄文	打斧	10.5	8.0	0.88	10.12	カルンフュル						

第16表 6 石器観察表

序番号	出土地点	番号	時期	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	火打状況	自然 面	造記番号	備考
145	C66	59	绳文	門石	12.4	6.9	6.1	785	安山岩 火打	有	O66-11住 No.22	凹み面は2面	
145	C66	60	绳文	西石	9.5	5.4	3.8	268	安山岩 火打	有	O66-11住 No.24	凹み面は2面	
145	B68	61	绳文	門石	10.4	7.8	4.9	650	安山岩 火打	有	B68-No.11	凹み面は2面	
146	清水沢	52	绳文	門石	8.5	5.4	4.9	322	安山岩 火打	有	-	凹み面は2面	
146	清水沢	53	绳文	門石	9.1	7.7	4.0	395	安山岩 火打	有	O58セギ	凹み面は2面	
146	清水沢	54	绳文	門石	10.0	8.8	5.0	515	安山岩 火打	有	O58セギ	凹み面は2面	
146	清水沢	55	绳文	門石	8.8	7.4	4.0	358	安山岩 火打	有	凹み面は2面	上	
146	清水沢	66	绳文	西石	11.5	6.8	6.3	712	安山岩 火打	有	-	凹み面は2面	
146	清水沢	67	绳文	門石	12.5	5.7	5.2	614	安山岩 火打	有	O58セギ	凹み面は2面	
146	清水沢	68	绳文	門石	11.8	8.9	4.7	696	安山岩 火打	有	O58セギ	凹み面は2面	
146	清水沢	69	绳文	門石	9.0	4.7	4.2	278	安山岩 火打	有	O58セギ	凹み面は2面	
147	清水沢	70	绳文	西石	9.2	8.0	5.1	459	安山岩 火打	有	-	凹み面は2面	
147	清水沢	71	绳文	西石	9.4	7.2	3.5	758	安山岩 火打	有	-	凹み面は2面	
147	清水沢	72	绳文	西石	9.7	7.6	4.5	552	安山岩 火打	有	-	凹み面は2面	
147	清水沢	73	绳文	西石	9.3	6.8	4.0	294	安山岩 火打	有	-	凹み面は2面	
147	清水沢	74	绳文	門石	(8.0)	6.7	5.5	325	安山岩 火打	有	O58セギ	凹み面は2面	
147	清水沢	75	绳文	門石	6.9	6.6	6.2	262	安山岩 火打	有	-	凹み面は2面	
147	清水沢	76	绳文	門石	11.3	8.2	6.1	738	安山岩 火打	有	-	凹み面は2面	
147	-	77	绳文	西石	15.4	5.3	3.8	406	安山岩 火打	有	-	凹み面は2面	
147	-	78	绳文	西石	10.7	9.0	5.7	671	安山岩 火打	有	-	凹み面は2面	
148	-	79	绳文	西石	9.8	8.5	5.3	850	安山岩 火打	有	-	凹み面は2面	
148	-	80	绳文	西石	9.6	6.6	4.4	360	安山岩 火打	有	-	凹み面は2面	
148	-	81	绳文	四口	11.2	7.5	4.4	447	安山岩 火打	有	-	凹み面は2面	
148	B52	82	绳文	石鏡	(10.0)	34.2	8.8	2500	安山岩 火打	有	358No.30	鏡面	
148	F42	83	绳文	石鏡	(19.5)	(12.7)	4.3	3049	安山岩 火打	有	F42	-	
148	B66	84	绳文	石鏡	3.5	5.8	2.7	69	安山岩 火打	有	B66	-	
148	F24	85	绳文	みがき石	3.4	2.6	2.7	20	安山岩 火打	有	124	-	
148	-	86	绳文	火打状牙鑿	2.5	11.4†	5.1	2.08	安山岩 火打	有	火打状 火打	火打状孔、後2mmの複数孔	
149	N12	87	绳文	多角形	7.7	6.5	6.5	529	安山岩 火打	有	-	凹み面は2面	
150	-	88	绳文	多角形	24.6	22.3	11.3	8083	安山岩 火打	有	-	凹み面は2面	
150	L131	89	绳文	石鏡	(1.78)	(1.15)	0.27	0.37	火打石 火打鏡	有	-	凹み面は2面	
150	C53	90	绳文	石鏡	1.44	(1.24)	0.27	0.41	火打石 火打鏡	無	C53	小形三角鏡、底部に凹き、周辺 少	
150	Q16	91	绳文	石鏡	2.05	1.69	0.37	1.13	片剥削石 火打	有	Q16-11内 1-32No.43	兼用火打か	
150	L32	92	绳文	石鏡	(0.60)	(1.13)	0.22	0.18	火打石 火打	無	-	-	
150	A72	93	绳文	石鏡	(1.95)	1.38	0.27	0.52	火打石 火打	無	A72	-	
150	N22	94	绳文	石鏡	(1.50)	(0.87)	0.35	0.30	火打石 火打	無	N22	-	
150	J32	95	绳文	石鏡	2.10	1.54	0.31	0.63	火打石 火打	無	157No.6	-	
150	B58	96	绳文	石鏡	1.70	1.35	0.30	0.45	火打石 火打	無	858No.2	火打か	
150	J32	97	绳文	石鏡	1.68	(1.26)	0.35	0.37	火打石 火打	無	132	火打か	
150	H37	98	绳文	石鏡	(1.44)	(1.22)	0.35	0.37	火打石 火打	無	937	-	
150	C58	99	绳文	石鏡	1.50	0.95	0.25	0.25	火打石 火打	無	C58	-	
150	-	100	绳文	火打鏡	2.05	1.69	0.37	1.13	片剥削石 火打	有	-	-	
150	M23	101	绳文	火打鏡	(5.02)	2.10	0.78	0.47	火打石 火打	無	M23	ポイントの可視性あり	

第17表 生製品銀杏葉

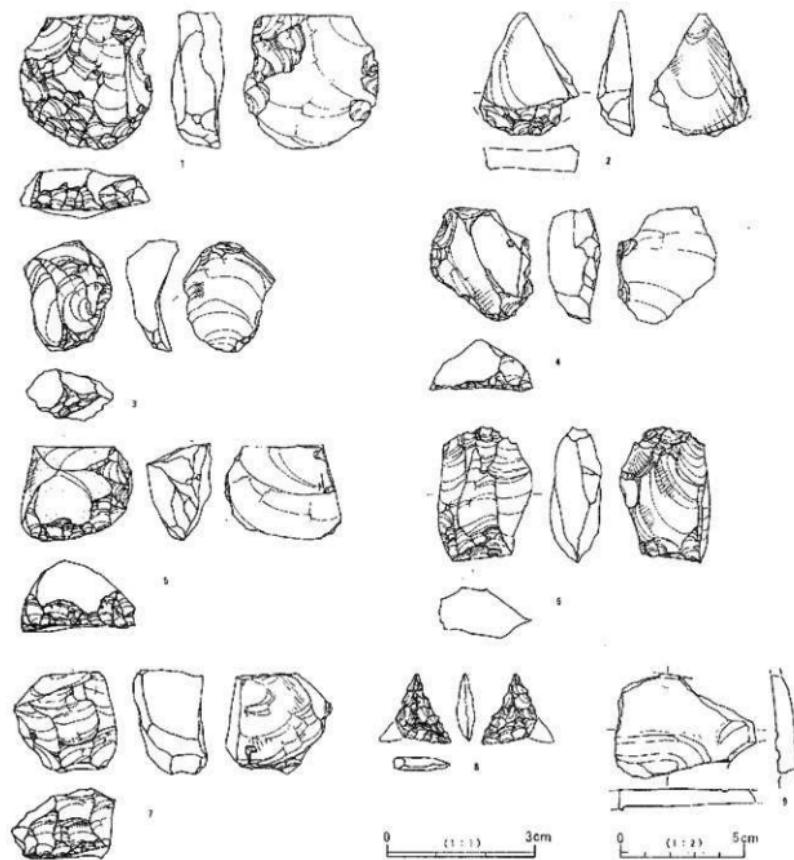
標高 等級	田川 橋	場 所	分類	時代	測定 位置	高さ cm	幅 cm	形態	整形状況	文書	色	地質	地質	欠損状況	記述内容	様子
			土器類	縄文	中段	(4.2)	3.0	1.3	起伏	ナダ	灰褐色	灰岩	山砂岩、スコリア、安山岩	鉢部下分欠損	28件	外れ風化
93	20号右 9	トト 谷	陶器	縄文	中段、 頂(4.3)	2.6	2.1	2.6	斜面崩壊	ナダ	灰褐色	安山岩	安山岩、スコリア	底盤を石以外 は灰岩	30件	
105	33号右 16	トト 谷	縄文	中段、 頂(3.7)	3.5	3.8	3.5	起伏、底に 半球の接着	ナダ	灰褐色	黄土	安山岩、輝石 斑岩	充存	33件13	内部に土玉が埋	
114	19号左 20	土呂 谷	縄文	中段、 頂(4.2)	2.3	1.5	1.5	起伏	ナダ	白色	灰岩	安山岩、輝石、スコリ アラス	底部欠損	19件	特例追加	
117	21号左 25	土呂 谷	縄文	底(4.0)	3.6	1.7	3.6	傾斜崩壊	底面下部分	灰岩	白	スコリア、安 山岩	地盤的分 別、裏側削 除	21件	地包	
117	21号左 26	トト 谷	縄文	底(6.0)	2.7	2.2	2.2	傾斜	底板状化	灰岩	白	輝石、安山岩、長石 斑の込み、風化	左側か ら剥離	16件	外れ風化	
127	20号左 16	土呂 谷	縄文	中～底段(3.0)	1.8	(3.0)	—	ナダ	端部	白	石英岩、雲母 斑	長石、石英、雲母 斑	20件北上			
131	41号 16	トト 谷	縄文	中段	[3.4]	—	—	崎立、底に 丸	名	灰岩、角閃石 斑	灰岩	安山岩、スコリ アラス	4件19	外れ風化		
150	K-25	土呂 谷	縄文	底段?	(4.0)	(2.7)	3.9	脊部、下分	泥炭化、ナダ	灰褐色	白	安山岩、スコリ アラス	4件	外れ風化、中心 層合意		
150	G-36	113	土呂 谷	縄文	底段(1.1)	(3.4)	3.0	ナダ?	泥炭化	灰褐色	白	安山岩、長石、角閃 石	4件9件			
150	B-8	119	トト 谷	縄文	中段、 頂(4.3)	(3.0)	(2.5)	2.6	傾斜	ナダ、沈殿	灰褐色	安山岩、四角石	4件	外漏風化		
150	H-2	105	土呂 谷	縄文	底段?	(1.6)	2.4	2.2	傾斜	泥炭化、ナダ	灰褐色	安山岩、石英、角閃 石	4件6件	ナダは近現代		

第18表 金属器皿空表

御番号	山止地名	番号	材料	規格	長さ	幅	厚さ	仕様	重量	包装仕様	備考
111	立柱	41	不引	板	王平(1.3)	0.5	0.3	無状	(2.7)	箱	20kg
112	立柱	48	鐵	板	平安(14.4)	0.5	0.7	無状	(15.2)	箱	10kg
121	支柱	49	鐵	板	平安(14.2)	0.8	0.8	無状	14.4kg	箱	11kg
122	支柱	50	無引	板	平安(9.3)	1.3	0.3	無状	(9.4)	箱	12kg
123	支柱	51	無引	板	平安(19.2)	1.3	0.3	無状	9.7	袋	10kg
124	支柱	52	角打	板	平安(5.0)	0.8	0.7	無状	(10.7)	箱	16kg
125	支柱	53	角打	板	平安(3.3)	1.0	0.2	刀面無	(2.1)	箱	8kg
126	支柱	54	不引	板	平安(5.0)	0.5	0.4	丸頭無	(3.5)	箱	12kg
127	支柱	55	角打	板	平安(12.7)	11.0	1.5	無頭無	(14.0)	箱	12kg
128	支柱	56	角打	板	平安(3.7)	0.8	0.5	無頭無	(3.0)	箱	6kg
129	支柱	57	角打	板	平安(14.2)	0.8	0.5	無頭無	(34.9)	箱	10kg
130	支柱	58	無引	板	平安(12.0)	3.0	0.3	無頭無	(30)	箱	9kg
131	支柱	59	角打	板	平安(4.1)	0.5	0.4	無頭無	(1.4)	箱	5kg
132	支柱	60	無引	板	平安(11.5)	7.3	2.2	箱形底面	240.0	箱	10kg
141	495ミリ	93	鐵	板	中板(4.4)	0.4	0.15	箱形底面	2.5	紙箱	140kg
141	495ミリ	94	鐵	板	中板(2.0)	0.1	0.15	箱形底面	3.2	紙箱	40kg
141	495ミリ	95	鐵	板	中板(2.0)	0.15	0.15	箱形底面	3.2	紙箱	40kg
141	495ミリ	96	鐵	板	中板(2.0)	0.2	0.15	箱形底面	3.2	紙箱	40kg
141	495ミリ	97	鐵	板	中板(2.0)	0.1	0.15	箱形底面	4.4	瓦盒	140kg
150	135角柱	114	角打	板	7	(5.5)	0.5	無状	(4.2)	瓦盒	40kg

第19表 黑青·刻畫一覽表

番号	通傳考査	回査号	音考	訓讀	文様類似	文字部位	文字向拠	時間	内容	備考
1	1号住	120	3	土居部	坏	修部外側	満	平安4期	失	中甲型環
2	同上	120	6	土加部	道	修部外側	逆	平安4期	失	中甲型混
3	同上	120	23	土居部	道	修部外側	一	平安4期	人	中甲型混
4	同上	120	25	土居部	道	修部外側	?	?	?	?
5	同上	120	26	土居部	松	修部外側	?	?	?	?
6	同上	120	27	土居部	松	修部外側	正	?	?	?
7	同上	120	28	土居部	直	修部外側	?	?	?	甲型混直
8	2号作	122	1	土十部	高台合	修部外側	港	平安4期	或	信雨系
9	5号住	123	1	土十部	所	修部外側	平平2跨	水?	?	川安型环
10	同上	123	3	土十部	所	修部外側	?	?	?	中甲型环
11	同上	123	5	土居部	环	修部外側後綴	内凸又見み語	平安2期	十	中甲型环
12	5号住	124	5	土居部	置	修部外側	?	?	?	年鑑混直
13	同上	124	10	黑色上唇	坏	修部外側	?	?	?	豪蓋か
14	同上	124	15	黑色上唇	坏	修部外側	?	?	?	豪蓋か
15	同上	124	16	黑色上唇	坏	修部外側	?	?	?	豪蓋か
16	21号作	127	6	土居部	坏	修部外側	?	?	?	?
17	25号住	129	6	土居部	直	修部外側	?	?	?	中甲型环
18	同上	129	15	黑色上唇	坏	修部外側	?	?	?	?
19	同上	129	16	黑色上唇	坏	修部外側	正?	?	?	?
20	29号住	130	5	土居部	坏	修部外側	?	?	?	中甲型环
21	同上	130	14	黑色上唇	坏	修部外側	?	?	?	?
22	同上	130	16	土居部	坏	修部外側	?	?	?	?
23	27号住	132	1	土居部	坏	修部外側	正	?	?	?
24	同上	132	5	土居部	坏	修部外側	正	?	?	?
25	麦表	150	109	土居部	坏	修部外側後綴	?	?	?	中甲型混
26	灰表	150	110	土居部	直	修部外側	?	?	?	甲型混直
27	麦表	150	111	土居部	坏	修部外側	?	?	?	甲型混直
28	N16	150	112	土居部	坏	修部外側	?	?	?	?
29	O20	150	113	土居部	亂	修部外側	?	?	?	?

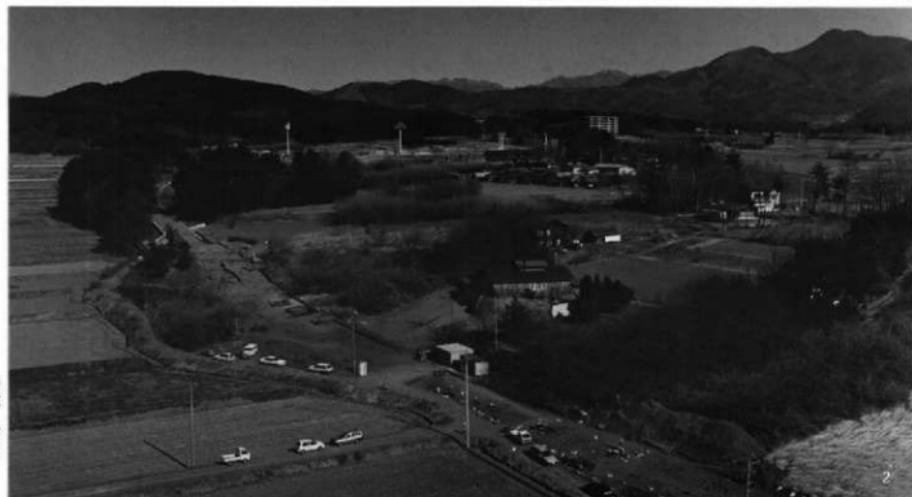


第171図 適加資料図

第20表 適加資料表

番号	出土地点	番号	時間	分類	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	名前	石材	欠損状況	自然	出迎内容	備考
171	53.25°+b	1	越文	器盤	2.72	2.70	0.92	7.71	黒曜石	麥舟	圓	S.145	
171	53.25°+b	2	越文	器盤	0.92	0.92	0.41	2.00	黒曜石	圓舟	圓	146	
171	53.25°+b	3	越文	器盤	1.18	1.18	0.77	1.93	黒曜石	圓舟	圓	147	
171	53.25°+b	4	越文	器盤	2.28	2.00	0.94	3.85	黒曜石	定舟	右	148	
171	53.25°+b	5	越文	器盤	1.92	2.40	1.22	5.15	黒曜石	文舟	右	149	
171	53.25°+b	6	越文	器盤	2.72	1.88	0.92	4.93	黒曜石	文舟	左	150	
171	—	7	越文	器盤	2.0	2.08	1.49	7.03	黒曜石	定舟	無	151	
171	60分後	8	越文	山頭	1.28	(1.03)	0.28	0.33	黒曜石	圓舟+方舟組	無	152	小帶三角邊

番号	地土地	番号	分類	時間	長さ	幅 cm	厚 cm	名前	性質	整形技術・文様	色調	断土	欠損状況	出迎内容	備考
171	0.16	9	土輪	越文	鏡面	(4.2)	(3.6)	(0.8)	中空	板状	ナゲ、記述無	褐色	秀力石、青石、石英	右側の一部のみ	0.16





1. 北から見
た遺跡
(1996年3
月19日、垂
崎方向を見
る、正面に
富士山がか
すむ)



2. 西から
見た遺跡
(後期集
落を併置、
中矢雪を
頂く山は
金峰山、
標高2595
m)



1. 南から見た遺跡（八ヶ岳を見る、中央には整備終了した圃場が広がる、東久保・青木遺跡等の現状）



2. 西から見た遺跡（調査区南端の曾利Ⅰ集落を見る）



1. 53~74
グリッド
付近（上
から）



2. 36~43
グリッド
付近（上
から）



3. 28~37
グリッド
付近（上
から）



1. 22~28
グリッド
付近（上
から）



2. 13~23
グリッド
付近
(上から、調査区南端に箕輪堰が直角に折れて流れる)



1. 調査前景観（1995年10月16日、51~53グリッド付近のレタス畑、奥の林は早期包含層付近で、桑が野生化している）



2. 調査中景観（1と同じアングルで撮影、1996年1月30日、左側の点々が早期包含層、遺構は白紐で示している）



1. D52付近
から北を見る
(尾根状
大地から低
地へ下る傾
斜面)



2. C67付近
から南西を見る
(台地
縁部の状
況)



3. B68付近
から南見る
(中央の
深い溝は11
号溝)



1. 50~74グリッドを西から見る
(中央部が早期包含層、テントを設置して調査中)



2. F 43付近から南を見る(手前から16・17・18・19号住等が斜面に並んでいる)



3. J 27付近から北を見る(霜柱のために荒れつつある調査区内)

1. 横雪の朝 (L
24付近より北を
見る。土をまいて
雪を溶かそう
としている。
1996年1月9日)



2. 019付近から
北を見る (28・
29・32・34号住
等、カラマツの
切り株が点在す
る)



3. R14付近から
北を見る (深い
溝は山道)





1. C61付近から
西南を見る（早
期包含層上層の
ピット、方形の
ピットは試掘坑、
溝は3号溝）



2. 早期包含層調
査風景



3. 早期包含層下
層の調査状況
(ほぼ遺物が出
尽くしたところ)



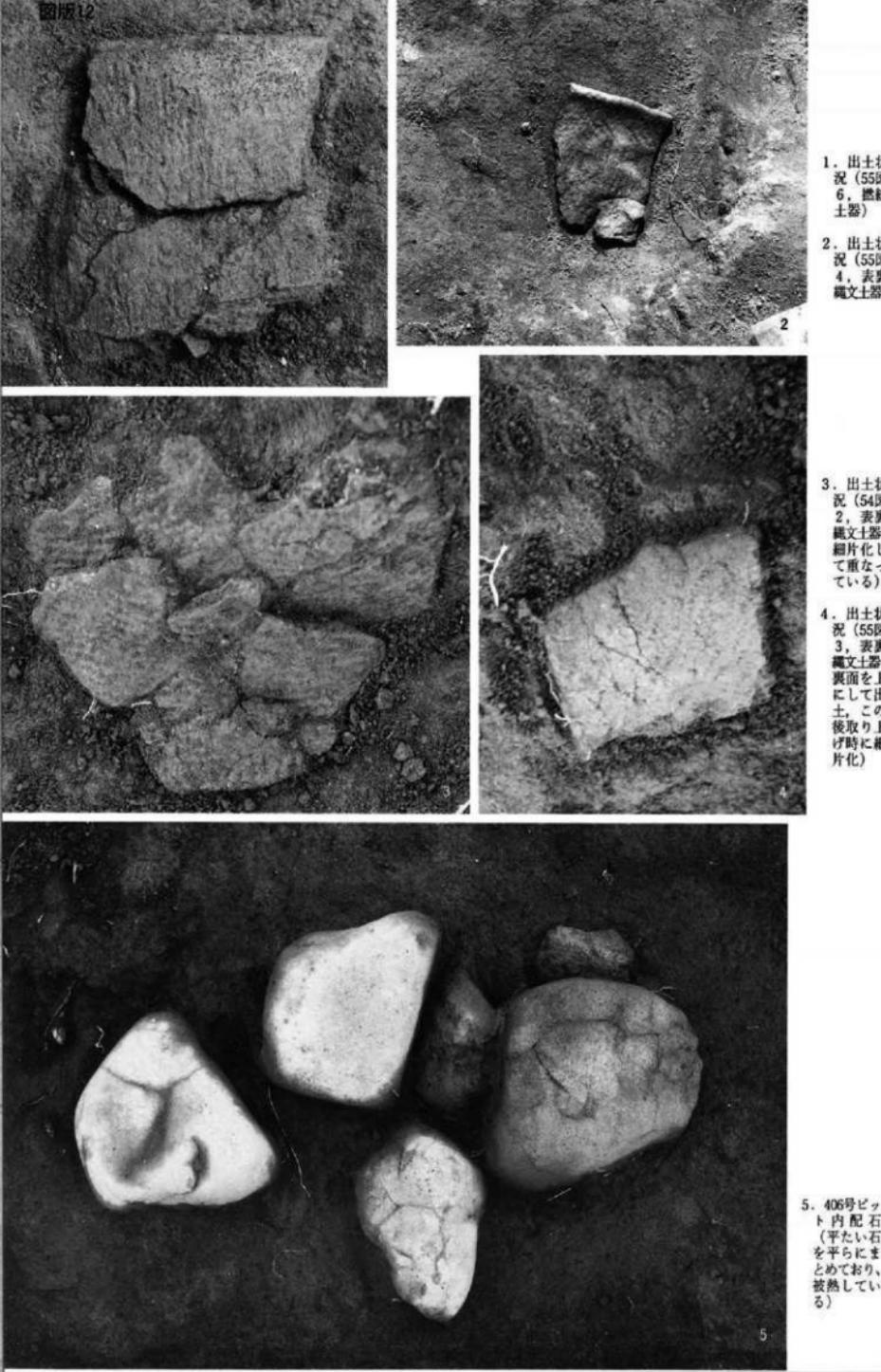
1. 早期包含層(南北七ヶショゾン、作業風景、遺物出土状況、東から)



2. 早期包含層(東西七ヶショゾン、作業風景、遺物出土状況、南から)



3. 早期包含層(作業風景、遺物出土状況、東から)





1. 34号住室
掘状況（南
から、炉体
土器取り上
げ後）



2. 34号住内
遺物出土状
況（東から、
炉周辺に点
在する）

3. 34号住深
鉢出土状況
(75図2、
横位で出土)

4. 34号住炉
体出土状況
(床面レベ
ルに口縁部
片が平らに
広がってい
る。75図1)

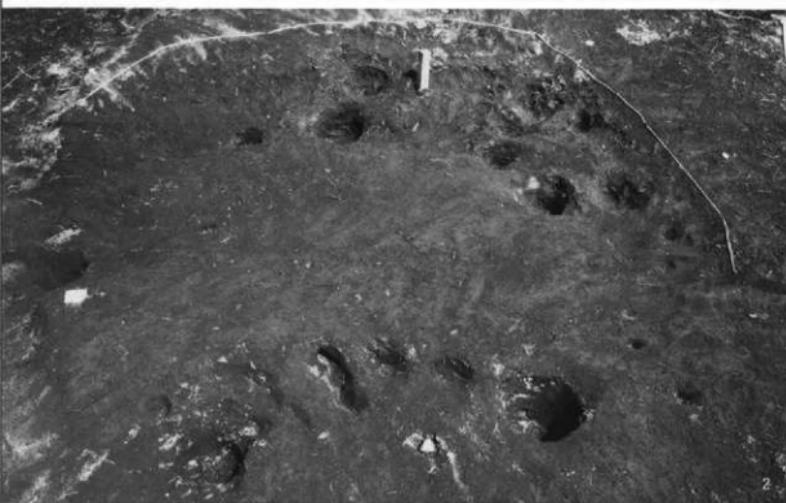


3





1. 3号住居・
遺物出土状
況(南から)



2. 3号住居完掘状
況(南から、磚
面より随分下げ
たが、柱穴はは
っきりしない)



3



4

3. 7号住居完掘状況(西から)

4. 7号住居完掘状況(南から、手前の石は一度もち上げて
しまっている)



1. 8号住居完
掘状況(西
から、この
時点では埋
礫は見つかっ
ていない)



2. 8号住居
(西から、
石はすべて
抜かれてい
た)



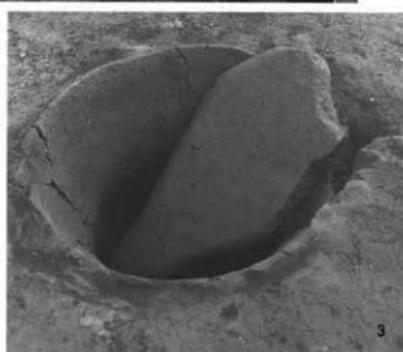
3. 8号住居
発(調査区
境の南北セ
クション中
に検出され
た)



1. 9号住
遺物出土
状況(南
から)



2



3

2. 9号住内石器・磨石出土状況(北壁に接し
て、磨り面を上にして立てかけたような状況。
セット関係とみられる。85図43・86図48)



4

4. 9号住炉内鍋・遺物出土状況(東から、炉
石はすべて抜かれている)



1. 10号住居断面(東から)



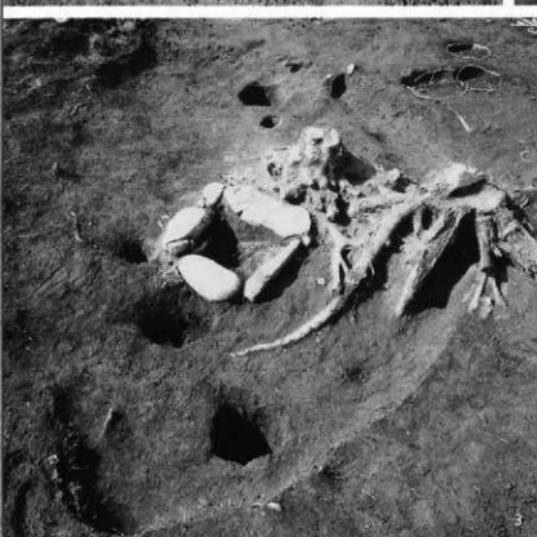
2. 10号住居完掘状況(南から、プランが明確でない)



3. 13号住居完掘状況(南から)

4. 14号住居完掘状況(東から、埋甕取り上げ後)





1. 14号住埋甕(東側掘り方を截ち割る、東から、89図1)

2. 14号住炉(南から)

3. 27号住完掘状況(東南から)

4. 27号住炉(炉体土器が置かれている、東から)



5. 28号住完
掘状況(南
西から)



1. 28号住居遺物出土状況(南から)



2. 28号住居完掘状況(南から)

3. 30号住居遺物出土状況(南東から、南側ピット中に土器がある)





2

1. 30号住内
出土土器
(横位、西
から、93回
1)



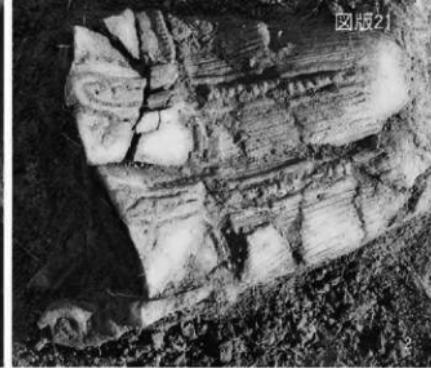
3. 31号住完
掘状況(南
東から)



4. 31号住
物出土状況
(南から)



1. 31号住内
(丸石が入っ
ている状況,
101図78)



2. 31号住内
土器出土状
況(94図3)



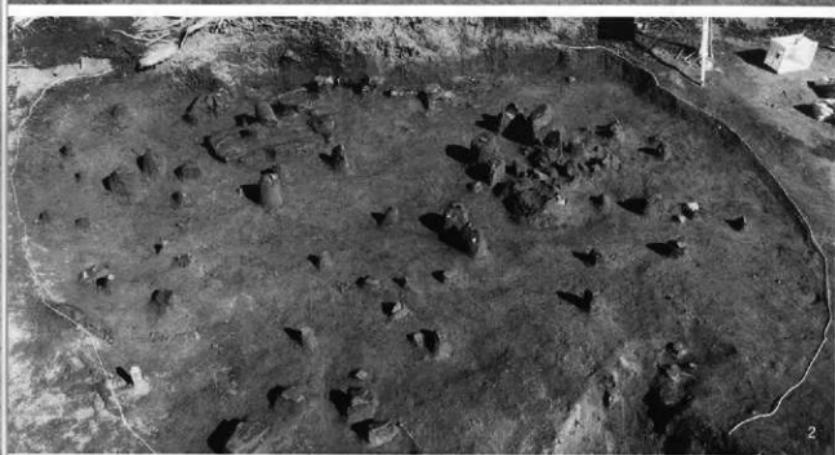
3. 31号住内
土器出土状
況



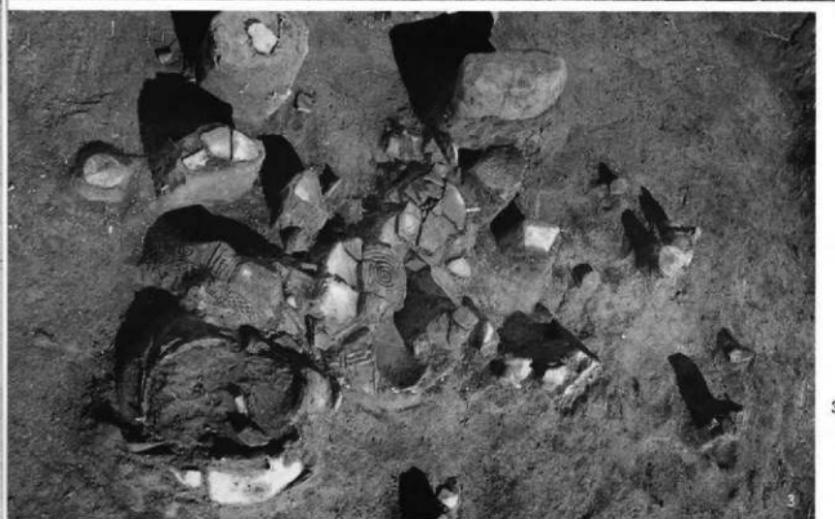
4. 31号住内
土器出土状
況(97図19
等)



1. 32号住完
掘状況(西
から)



2. 32号住遺
物出土状況
(西から、
当初プラン
がよくわから
なかつたため
西側が広くなっ
ていて)



3. 32号住内遺
物出土状況
(床直に伏せ
られた深鉢、
102図1他)



1. 32号住炉
(東から)



2. 32号住内
土器出土状
況(102図3、
底が口縁側
にある)



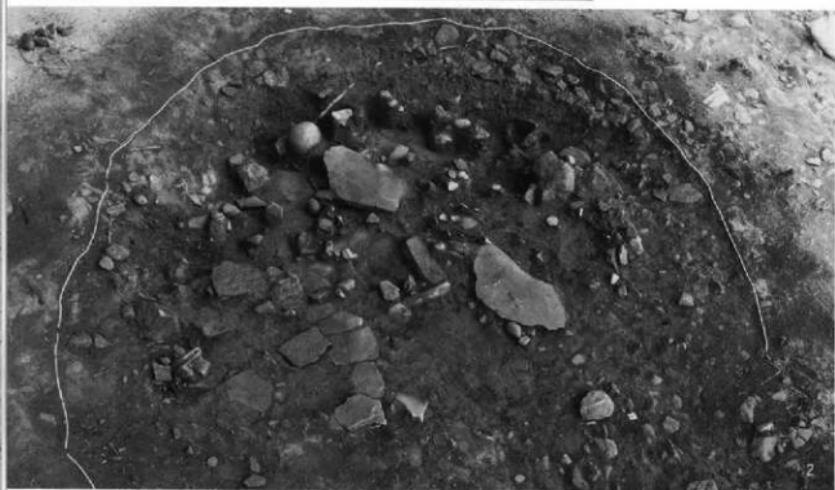
3. 33号住
掘状況(南
から)



4. 33号住炉完掘状況
(南から)



1. 36号住居掘状況(西から)



2. 16号住居
出土状況
(西から、
丸石が東壁
寄りにある)

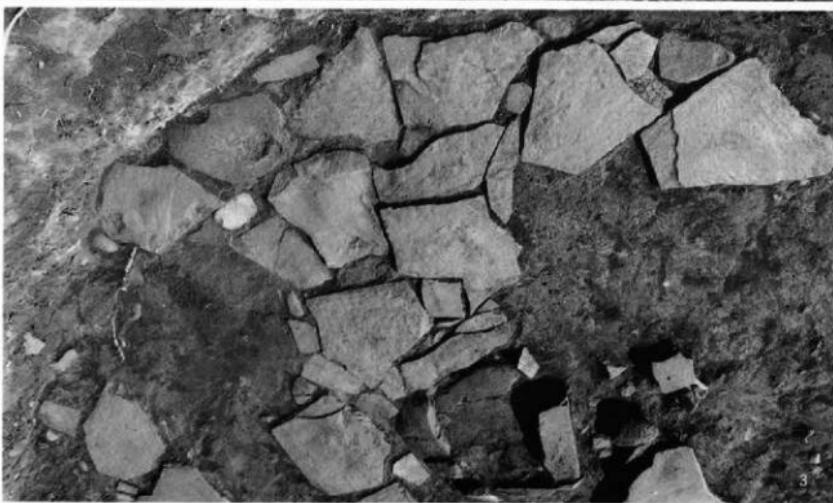


3. 16号住居
石状況(主に
鉄平石を
使用、壁中
の礫は地山
礫)



1. 16号住内
丸石出土状況(西から、
下面の敷石
より浮いて
いる点に注
意)

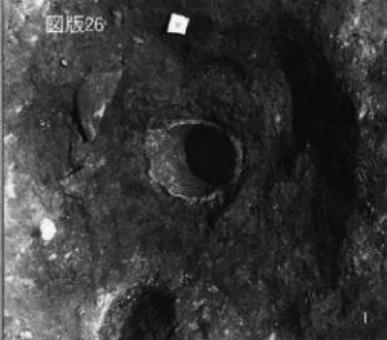
2. 16号住遺
物出土状況
(北から、
西向きの傾
斜地である)



3. 16号住敷
石設置状況



4. 16号住完
成状況(西
から)



1. 16号住炉(炉石撤去後炉体土器が現れる)



2. 17号住遺物
出土状況



3. 17号住敷石・柱穴配置状況
(壁寄りに礪・鉄平石が進る)



4. 17号住炉体土器

1. 18号住遺物・礎出土状況(西から)



2. 18号住完掘状況(西から、柱穴を結ぶように
縄や鉄平石が並ぶところがある)



3. 18号住炉体土器出土状況(南から)



4. 19号住遺物出土状況(平石の下に正位の注口
土器・四石等がみられる。また手前左側には小
形石棒がある)





1. 19号住床
面遺物出土
状況(西から、
住口土器、深鉢等
がみられる)



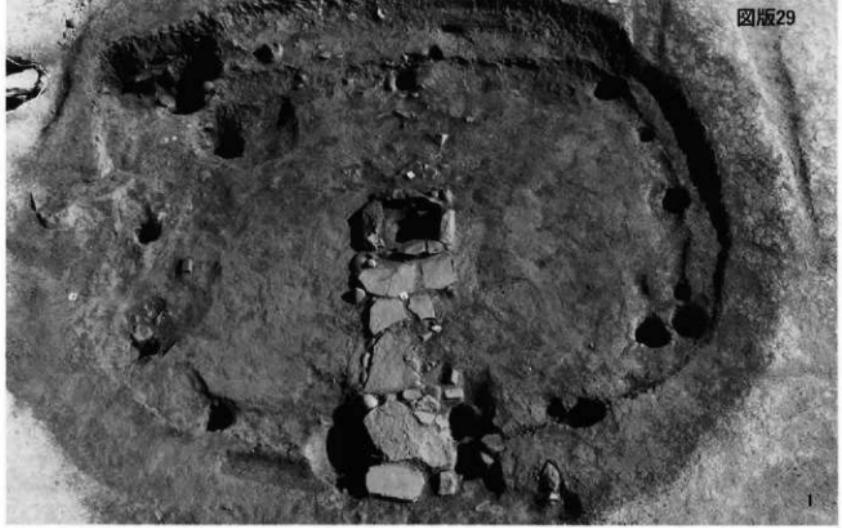
2. 19号住床
面上の住口
土器・四石
(床は燒土
化する)



3. 19号住
床の深
鉢(横位
出土)

4. 19号住
炉と炉体
土器(北
から)

1. 19号住居
掘状況・敷
石敷設状況
(西から)



2. 19号住居
掘状況(敷
石撤去後,
対ビット檢
出状況)



3. 21号住居
出土状況
(西から)





1. 21号住
石敷設状況
(西から)



2. 21号住
掘状況(西
から。敷石
取り上げ後)



3. 21号住炉
内炉体土器
出土状況
(西から)

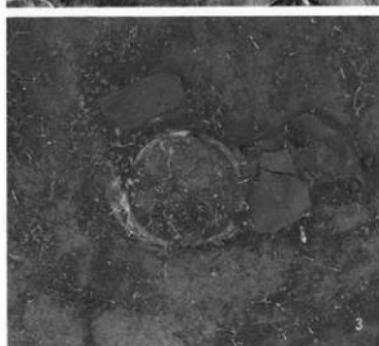
1. 26号住遺
物出土状況
(西から)



2. 26号住完
掘状況(南
から、ピッ
トは不明確)



3. 26号住炉
体土器(119
図1)



4. 26号住内
双口土器出
土状況(119
図2)



5. 35号住遺
物出土状況
(東から)





1. 35号住居
掘状況(東
から)



2

2. 35号住居
内炉休土器
(東から、1
19図2)



3

3. 35号住
内深鉢出土状
況(119図1)



4. 1号住遺
物出土状況
(南から、カ
マドは右側)



1. 1号住竈
内 鉄製品出土
状況(122件
48~51が東
ねたよに
出土)



2. 1号住竈
南側付近で
の出土状況
(焼・灰粒
陶器など出
土)



3. 1号住竈
内・竈周辺
遺物出土状
況(西から、
2を更に下
げた状況)



4. 1号住竈内支脚石の状況(西から、奥壁側に天井石が残る)



5. 1号住竈袖石の状況(西から)



1. 1号住宅
掘り方完掘状
況(西から)



2. 1号住掘
り方完掘状
況(西から、
土坑状の凹
みが集合す
る)

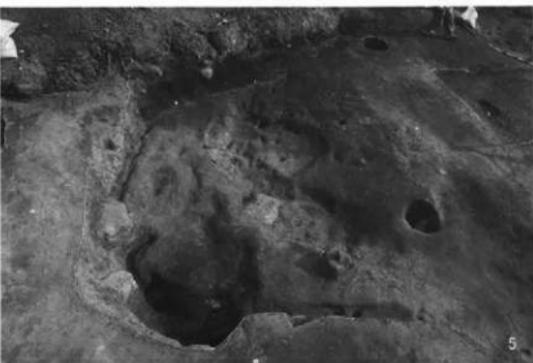


3. 1号住内
中央のピッ
ト(礫が詰
め込まれた
集石土坑)

1. 2号住居掘状況(西から)
2. 2号住居内出土状況
(西から)
3. 2号住居支脚石と抽石(右側が支脚石)



4. 4号住居遺物・礎出土状況(南から、礎は9号
溝に伴うものが主)



5. 4号住居完掘状況(南から)



1. 5号住
物出土状況
(西から)



2. 5号住
坑状况(西
から)

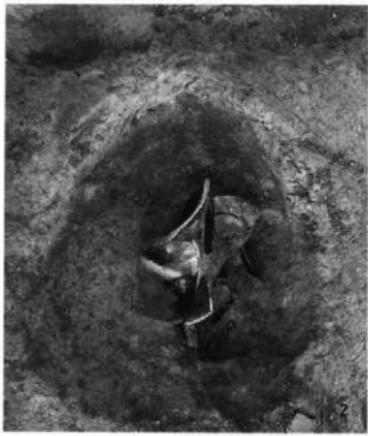
3. 5号住
出土状況
(右袖に白
色粘土が残
る。西から)

4. 5号住
袖石状況
(西から)





1. 6号住遺
物出土状況
(西から)



2. 6号住杯出土
状況(124図10)



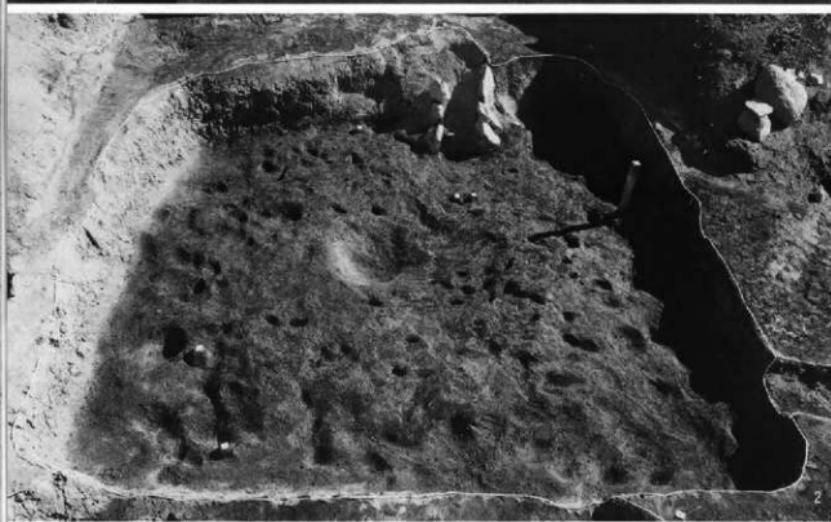
3. 6号住籠油石
状況



4. 6号住籠
内遺物出土
状況(北か
ら)



1. 6号住
掘状況(西
から)



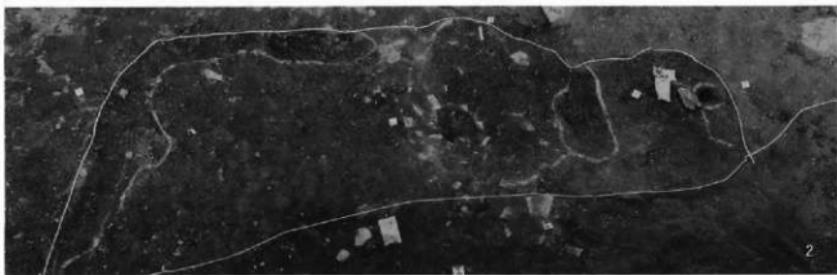
2. 6号住
掘り方完
状況(西から)



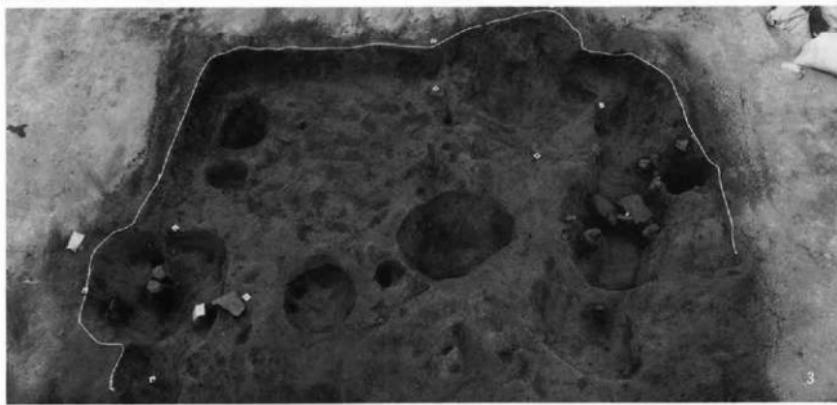
3. 12号住
掘状況(北
から、北半
は霧でこわ
されている)



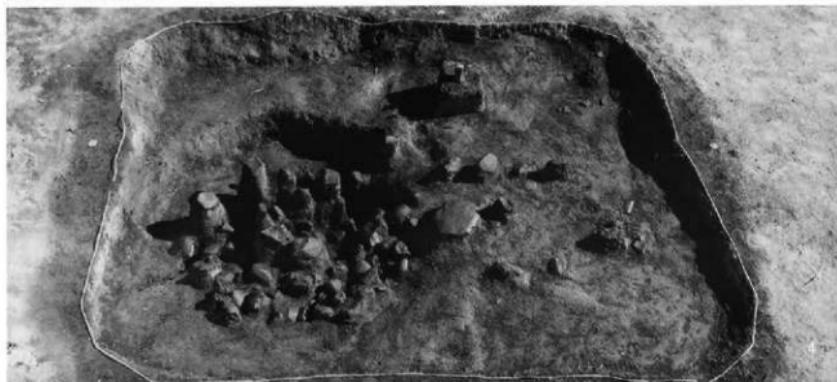
1. 12号住廬
(西から)



2. 15号住完
掘状況(西
から)



3. 20号住完
掘状況(西
から、東・
北2ヶ所に
竪をもつ)



4. 23号住遺
物出土状況
(西から、
398号ビッ
トが重複す
る)



1. 24号住遺
物出土状況
(西から、
竈南側の配
石は竈石を
片付けたも
のの可能性
がある)



2. 24号住完
掘状況(西
から。配石
下から出土
したつき臼
がみられる)

3. 24号住竈
遺物出土状
況

4. 24号住竈
とつき臼



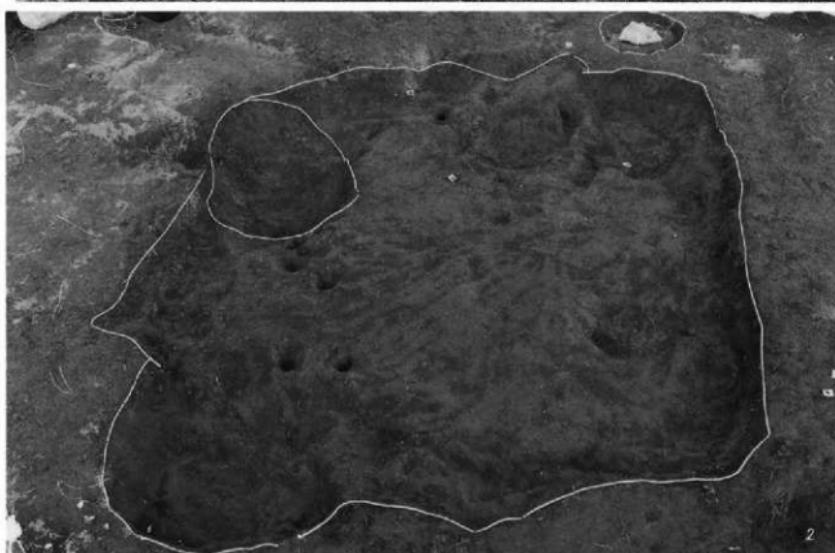
3



4



1. 25号住遺
物出土状況
(西から)



2. 25号住遺
物出土状況
(西から)

2



3. 25号住遺
物出土状況
(西から,
手前の天井
石、支脚石
が残る)

3



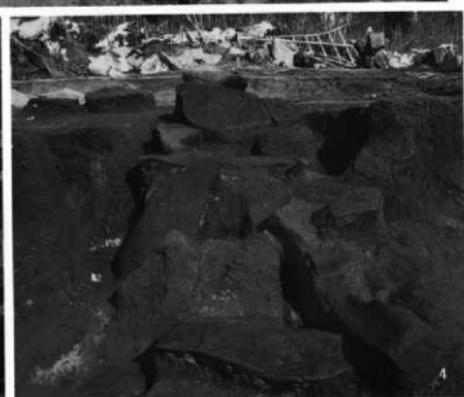
1. 29号住遺物出土状況(西から)



2. 29号住完掘状況(西から、写真では不鮮明であるが、南壁寄りに出入口状の床の高まりがある)



3



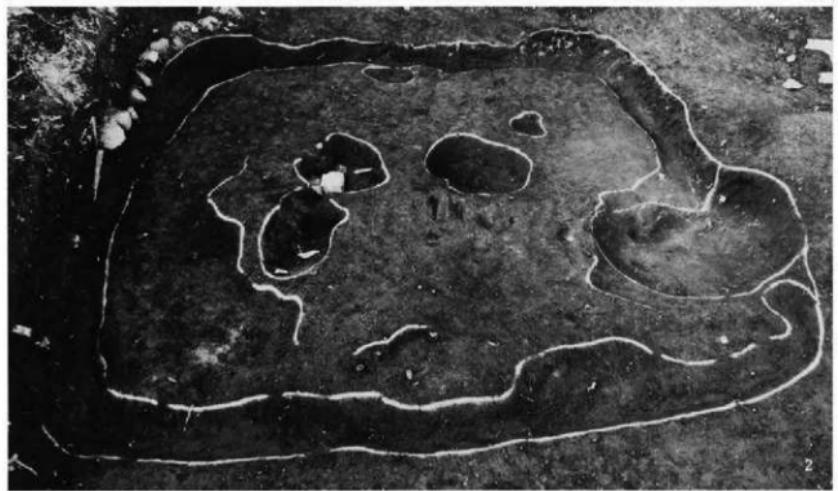
4

3. 29号住
竪(上から)

4. 29号住
竪(上から)



1. 37号住遺
物出土状況
(南から、
右上コーナー
に2枚重ね
の皿がある)



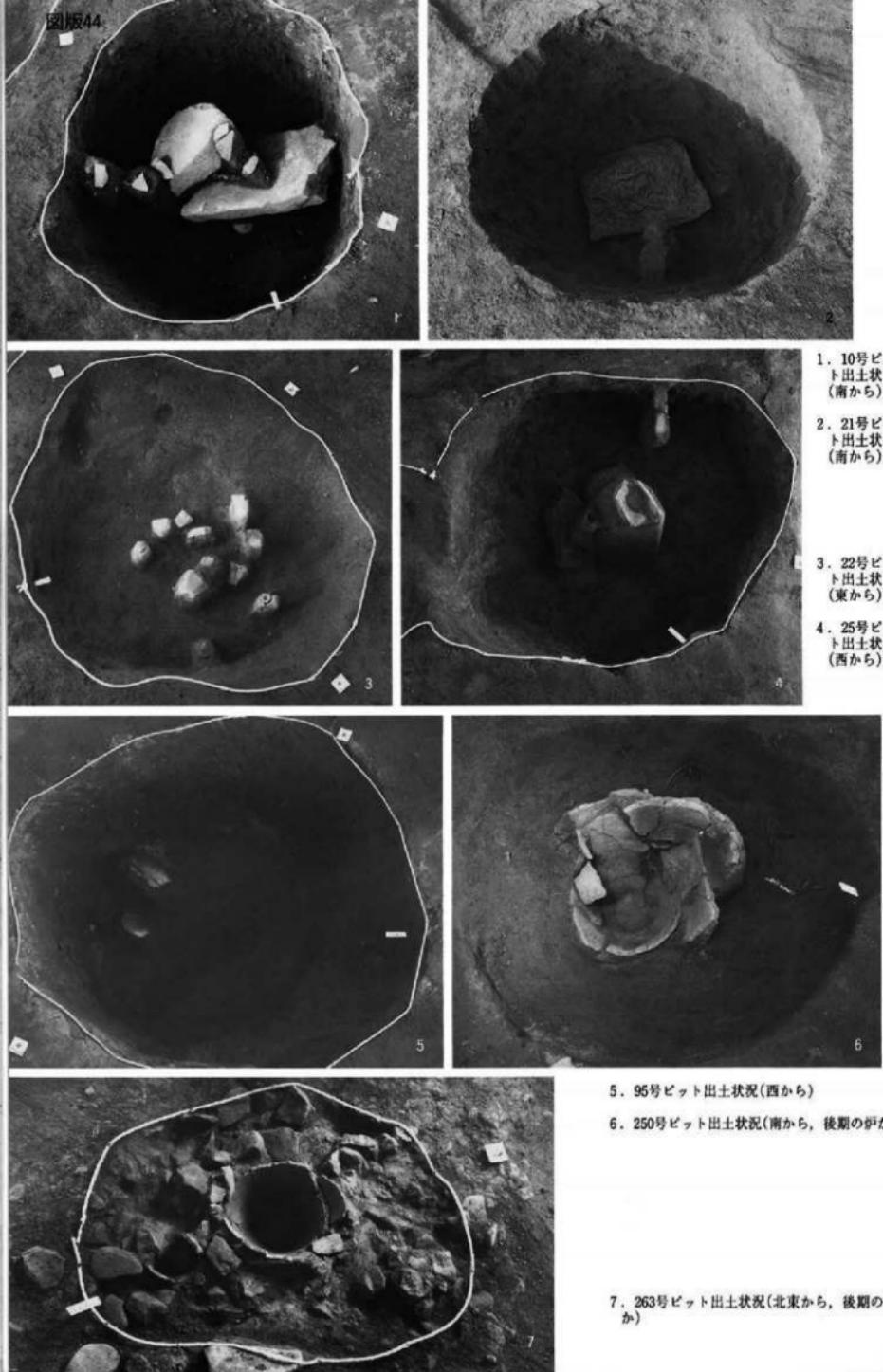
2. 37号住完
成状況(南
から、白ス
プレーで上
端ラインを
表示)



3. 37号住内ロクロ
甕出土状況(住居
確認前に取り上げ
る。132図11)



4. 37号住内出土2
枚重ねの皿出土状
況(132図1・5)



1. 10号ピット出土状況
(南から)

2. 21号ピット出土状況
(南から)

3. 22号ピット出土状況
(東から)

4. 25号ピット出土状況
(西から)

5. 95号ピット出土状況(西から)

6. 250号ピット出土状況(南から、後期の炉か)

7. 263号ピット出土状況(北東から、後期の炉
か)



1. 343号ピット出土状況
(北から)



2. 344号ピット出土状況
(北から)

3. 381号ピット内集石出土状況(西から)

4. 381号ピット下部石組出土状況(西から)

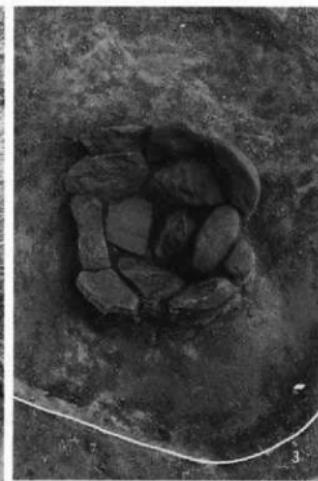




1. 382号ピット内石組出土状況(東から)



2. 390号ピット内集石・石組出土状況(北から)



3. 390号ピット内石組出土状況(西から)



4. 398号ピット内集石出土状況(東から、23号住内に存在)

1. 398号ピット内上部集石・石組取り上げ後の下層集石状況(東から)



2. 398号ピット内下層石組状況(東から)

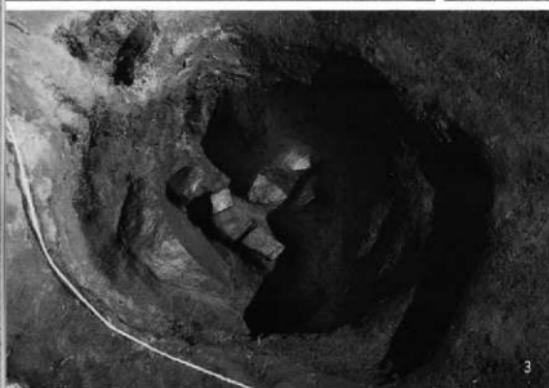
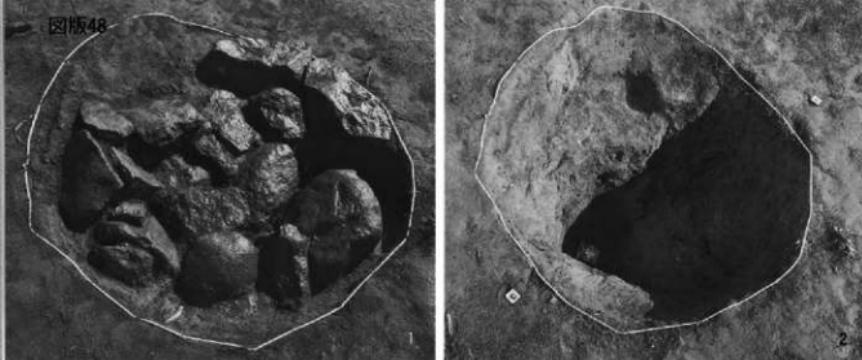


3. 381~398号ピット全景(南西から、石組をもつ集石炉が集中)



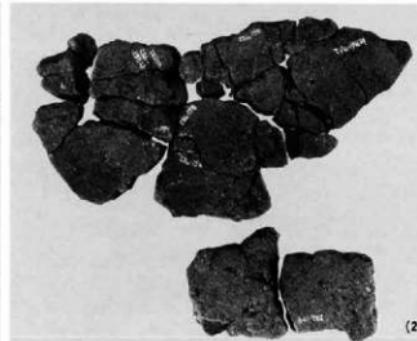
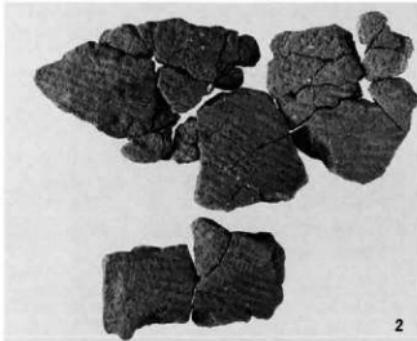
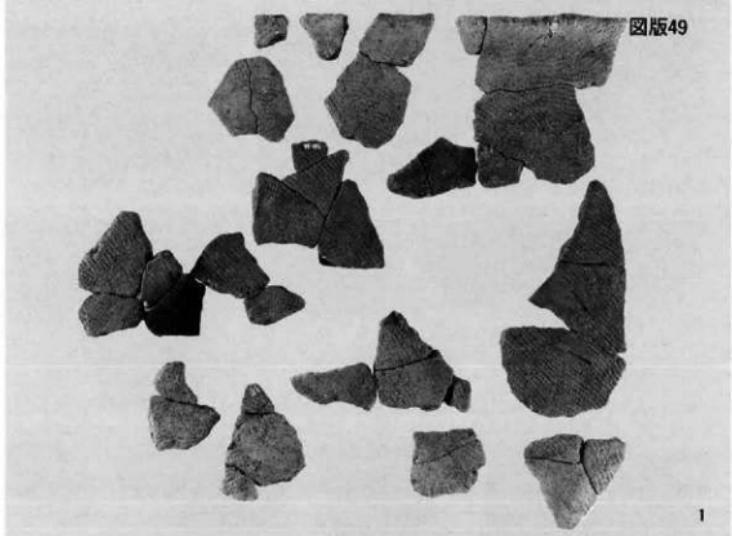
4. 401号ピット内出土状況(西から)

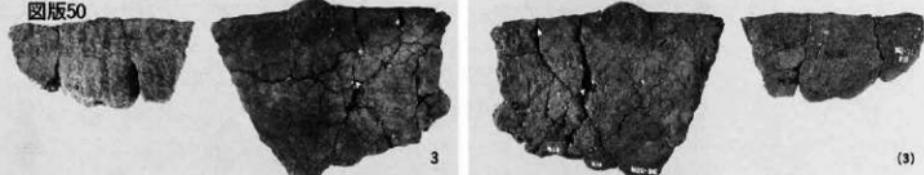




1. 404号ピット上面配石出土状況(北から、この時点では下部に土坑があることは想定しなかった)
2. 404号ピット完掘状況(東から、墓坑状のピットとなる)
3. 408号ピット出土状況(28号住内、西から)
4. 筋輪堀(ふるせぎ)断面(西から、現況上に腐土を盛り上げている)







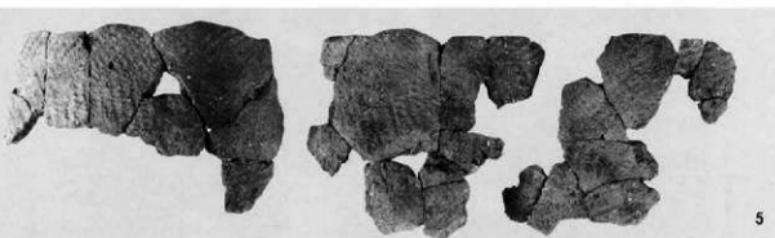
草創期～早期土器



4



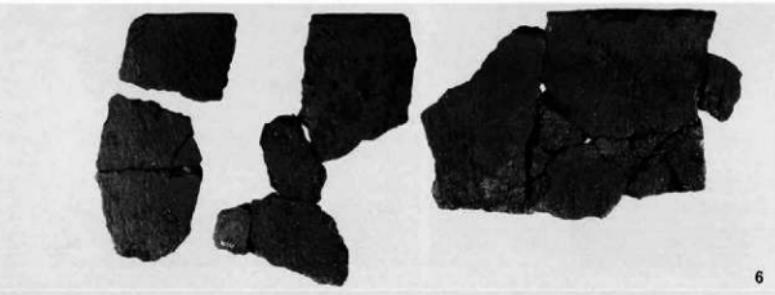
(4)



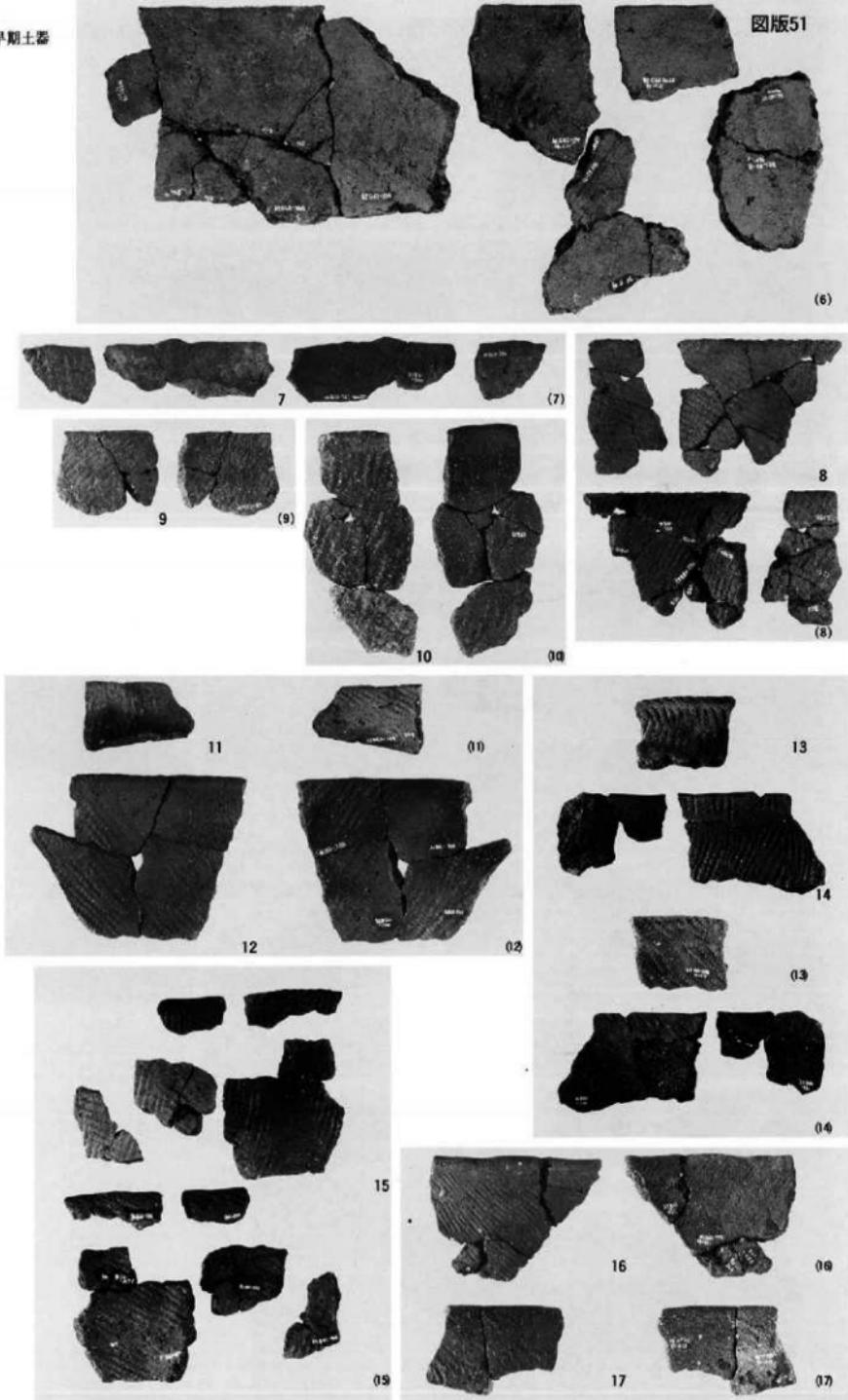
5

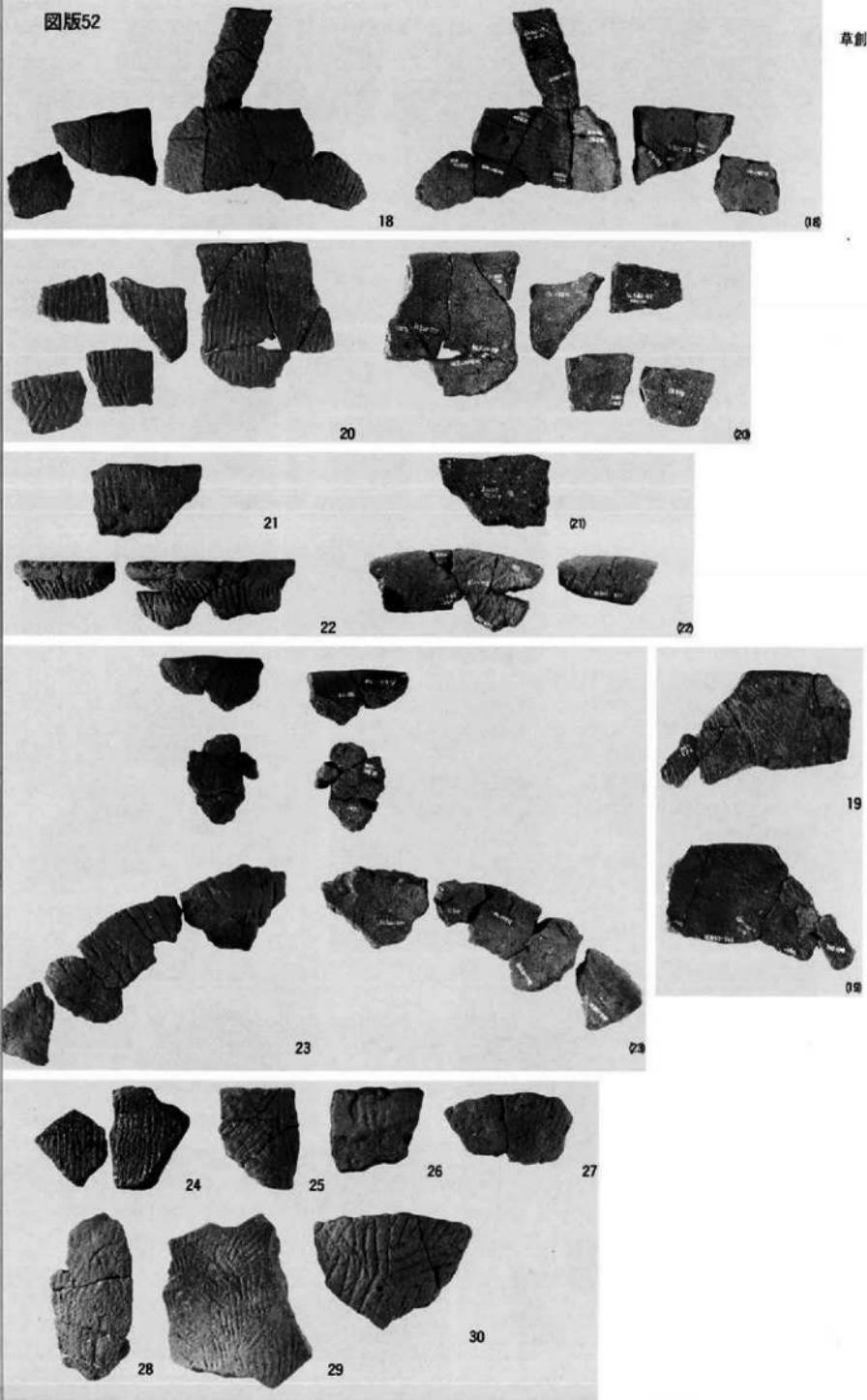


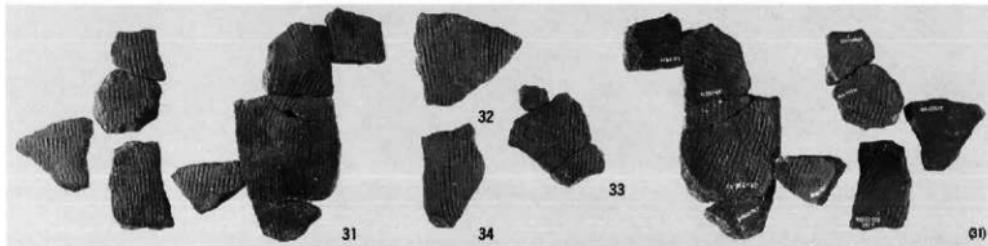
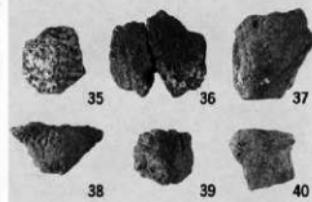
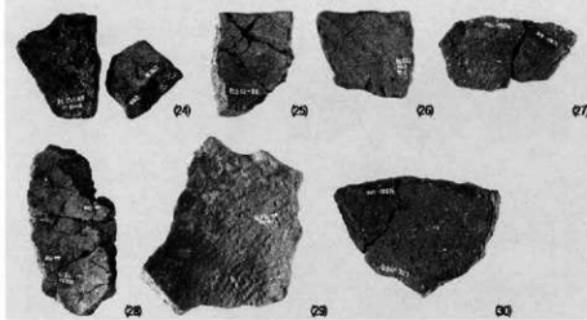
(5)



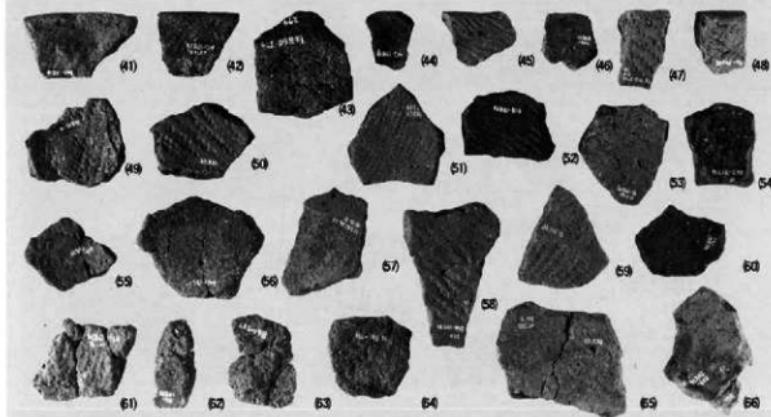
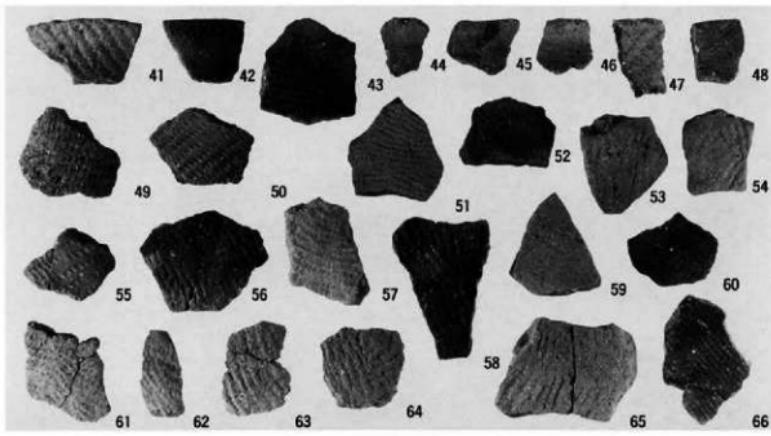
6

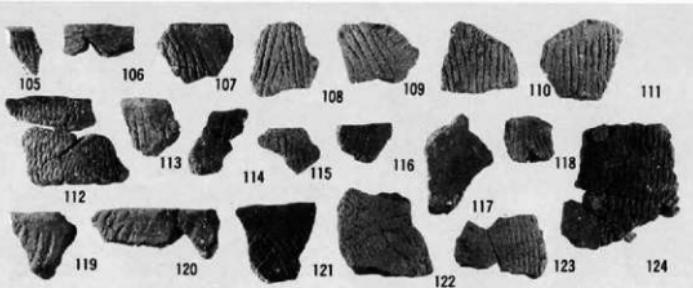
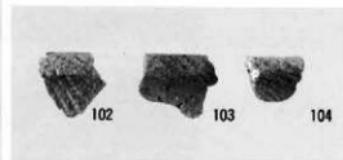
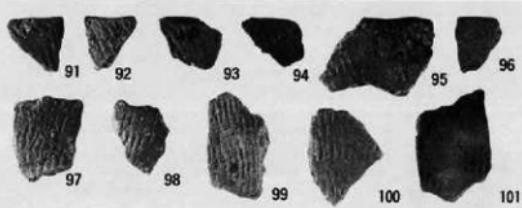
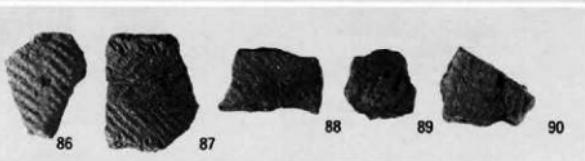
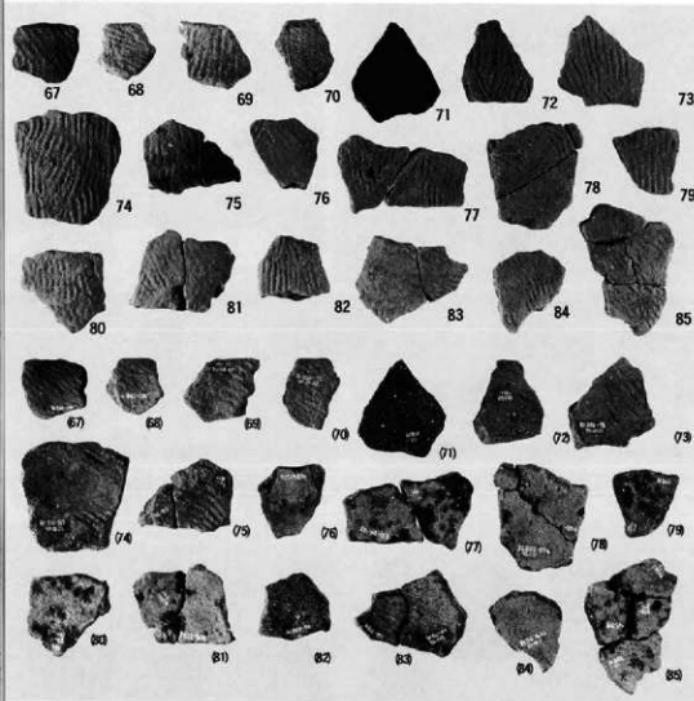


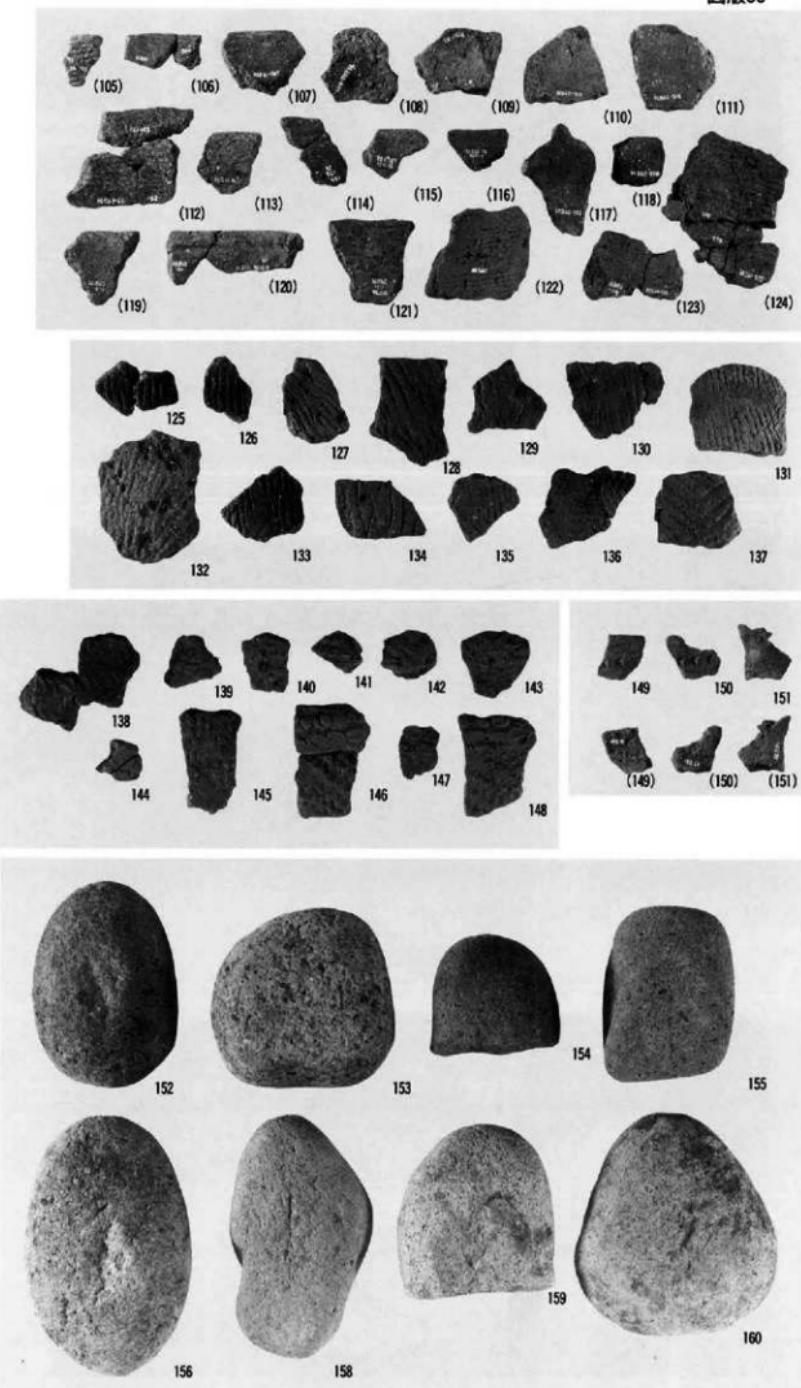




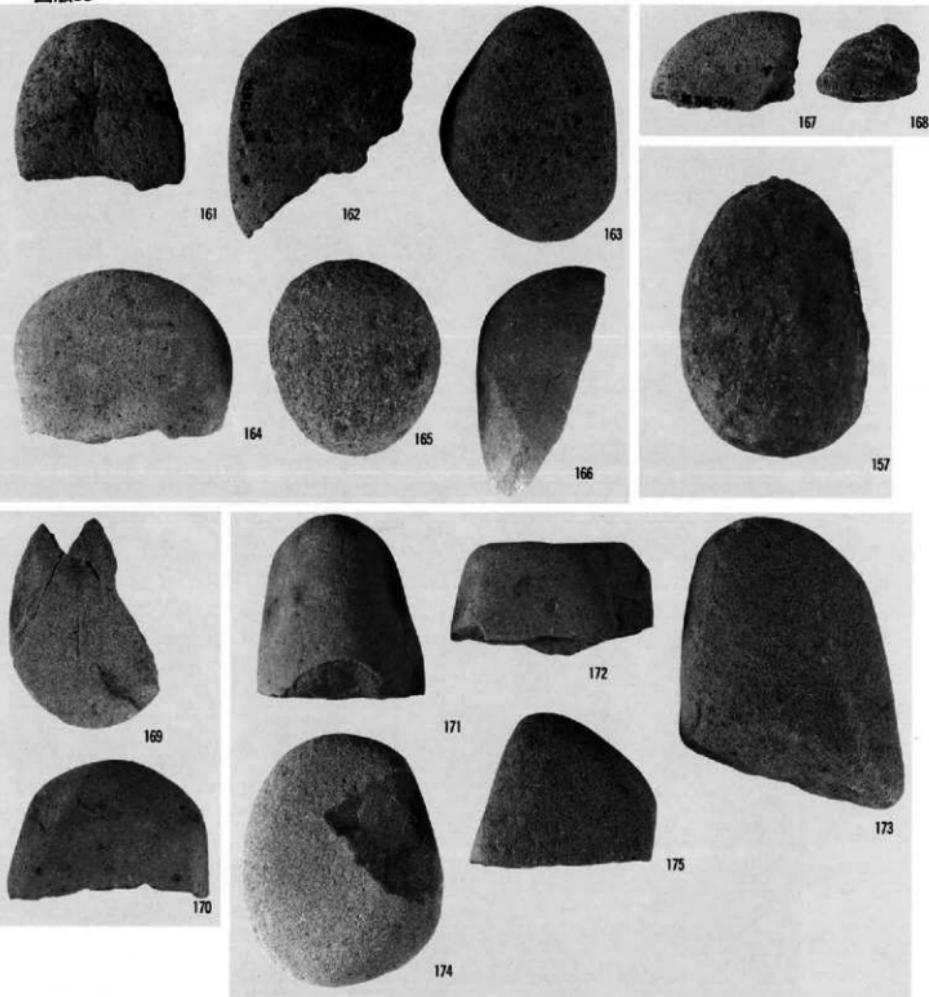
草創期～早期土器



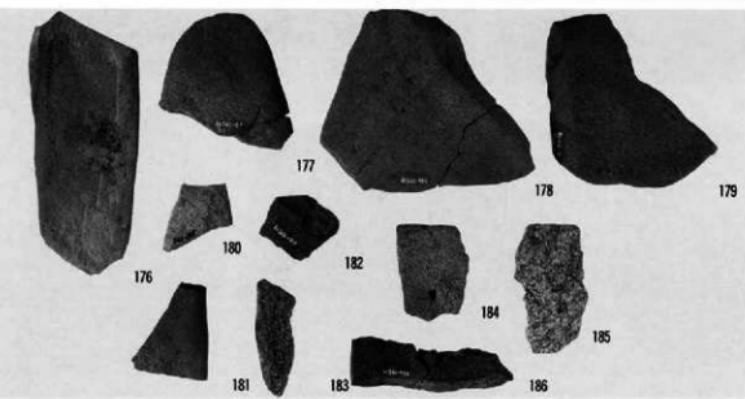


草創期～早期
土器・石器

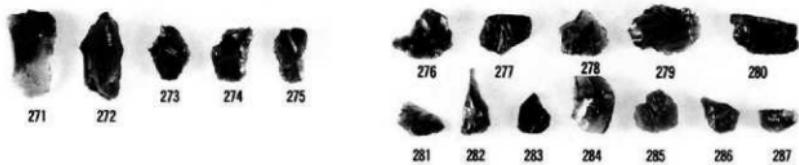
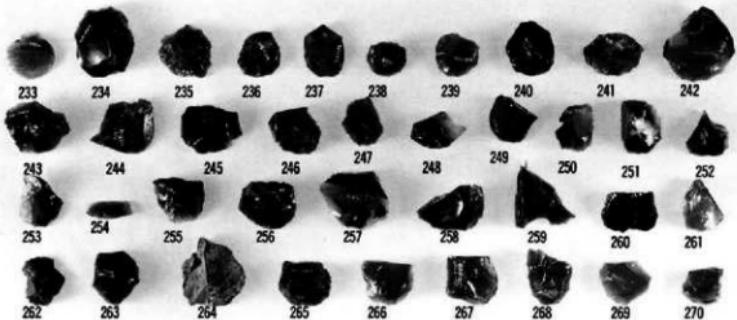
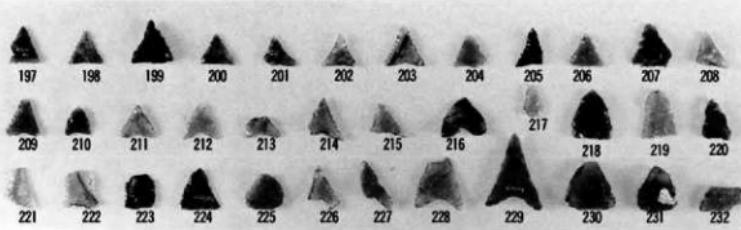
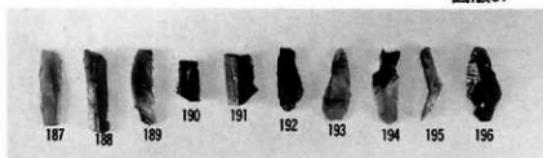
圖版56

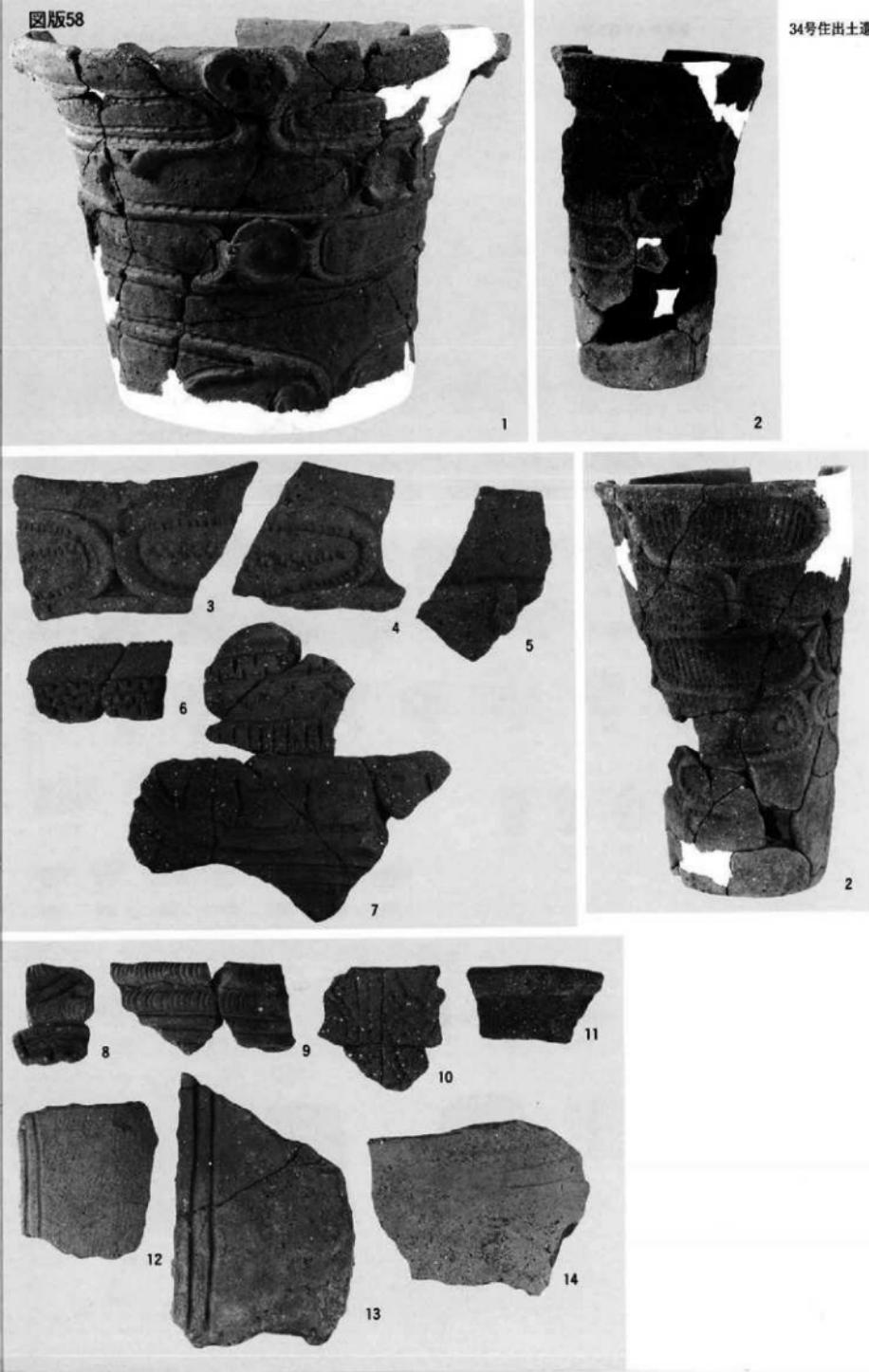


草創期～早期石器

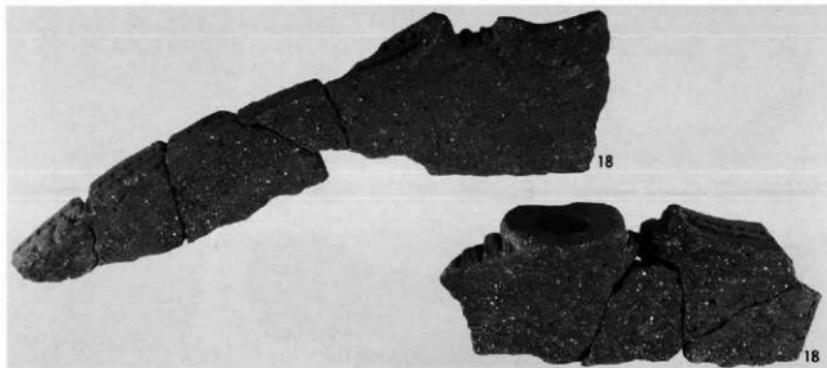


草創期～早期石器

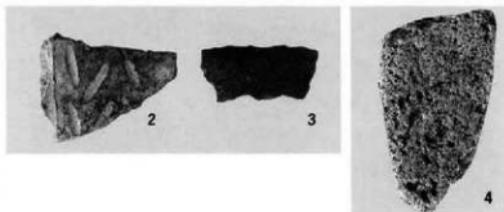




34号住出土遺物

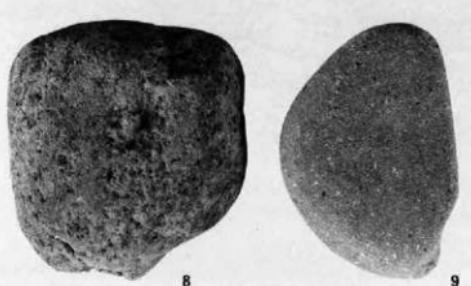


3号住出土遺物

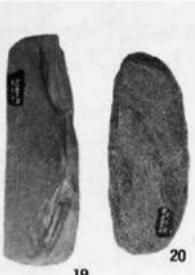
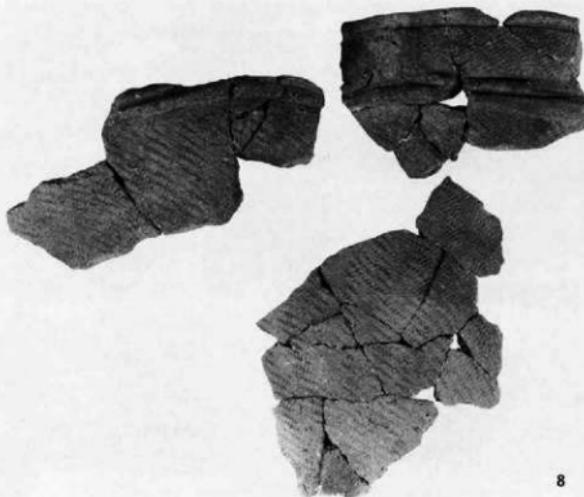
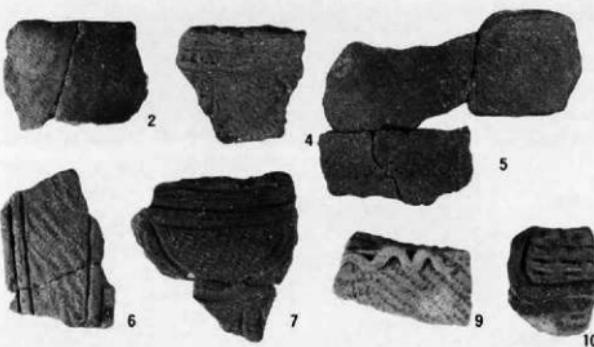


7号住出土遺物

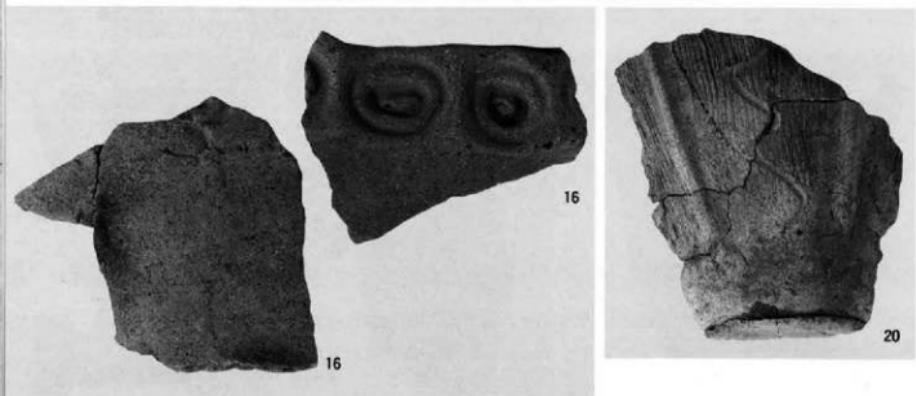
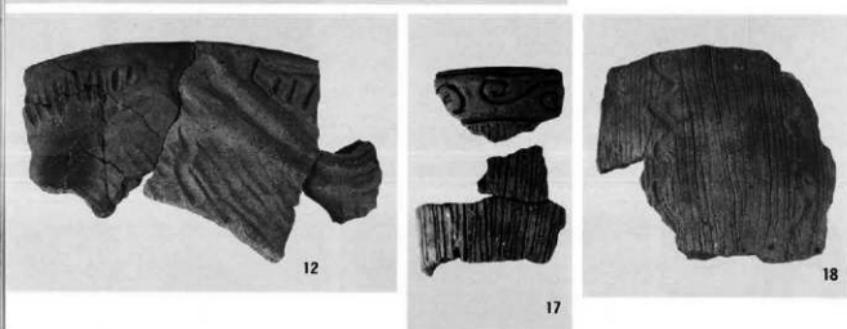
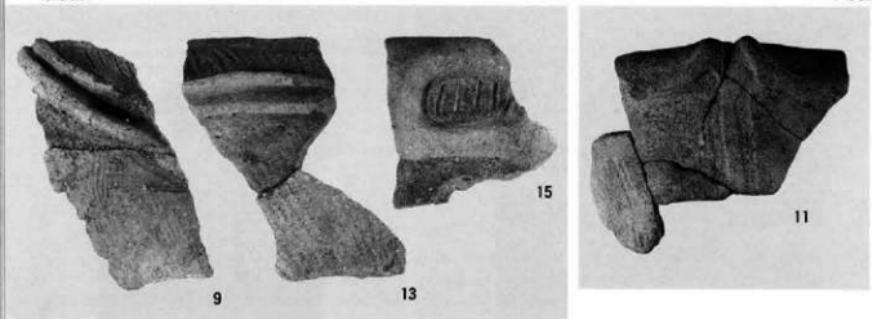


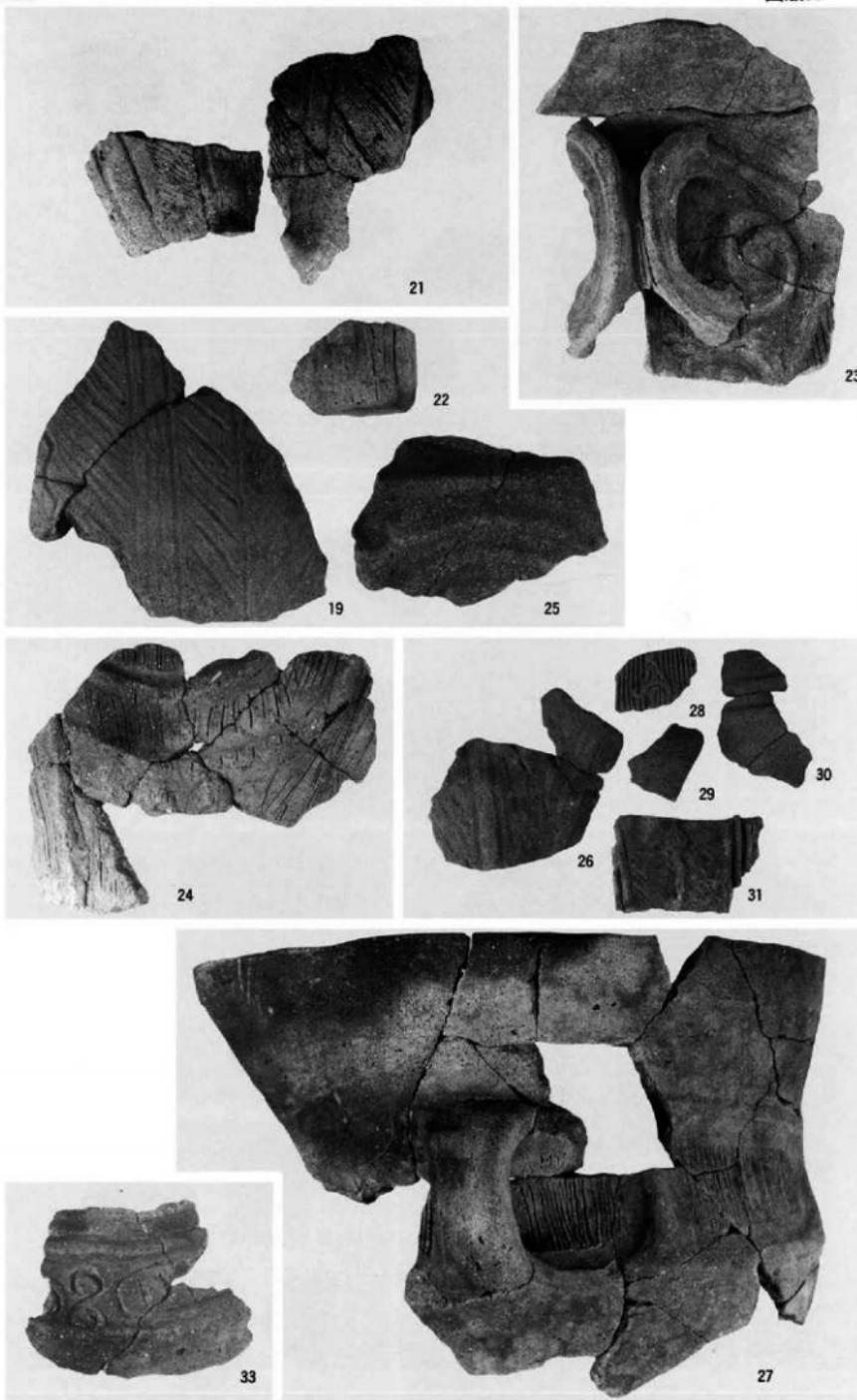


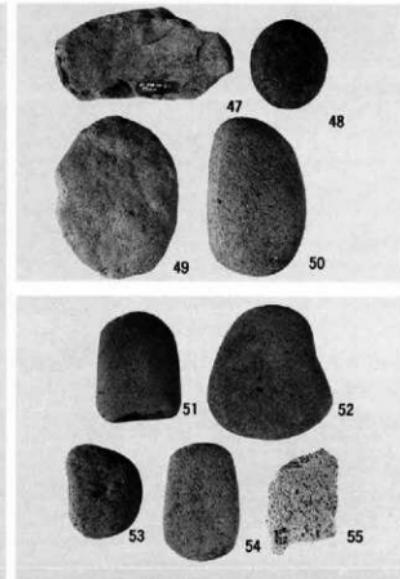
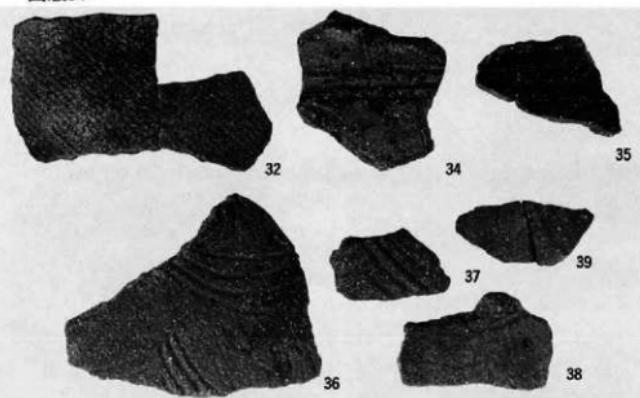
8号住
出土遗物

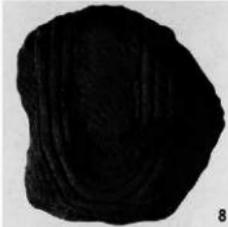












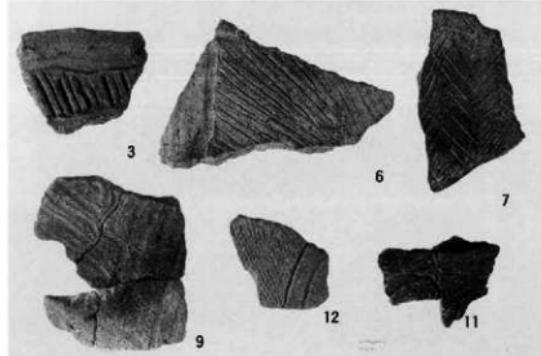
1

8

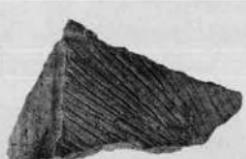
10号住出土遺物



2



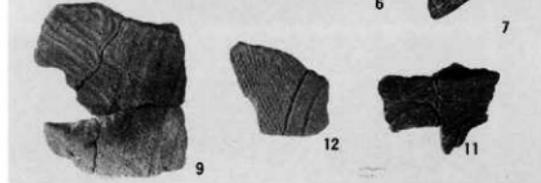
3



6



7



9



12



11



5



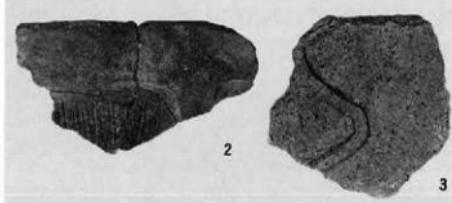
4



13号住出土遺物



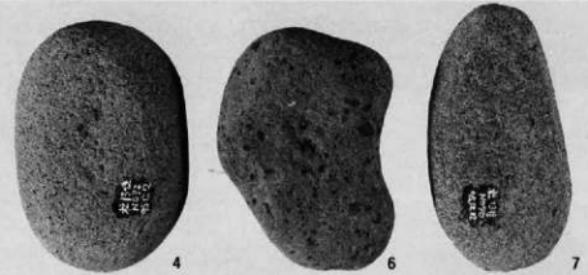
1



2

3

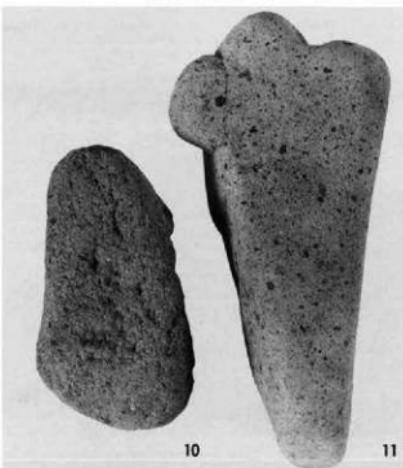
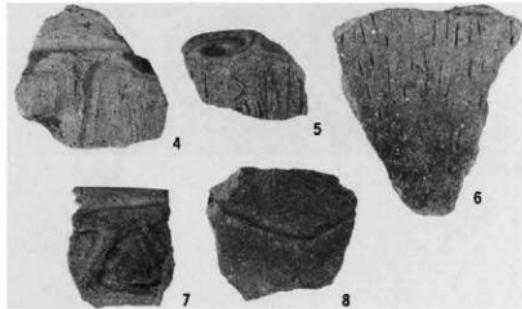
図版66



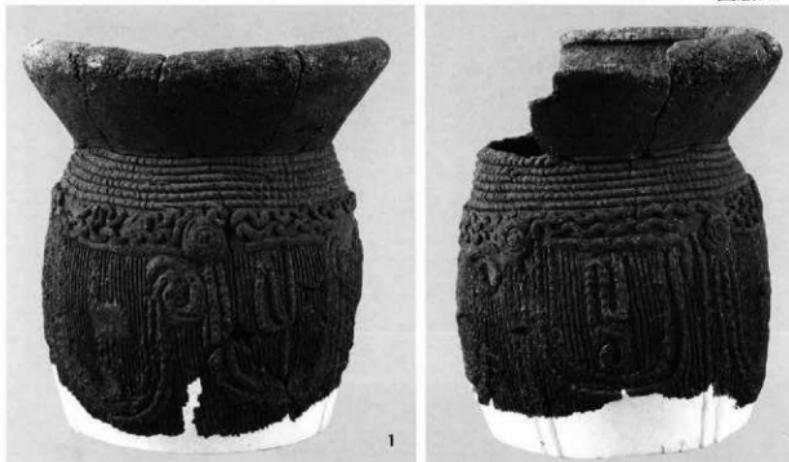
13号住出土遺物



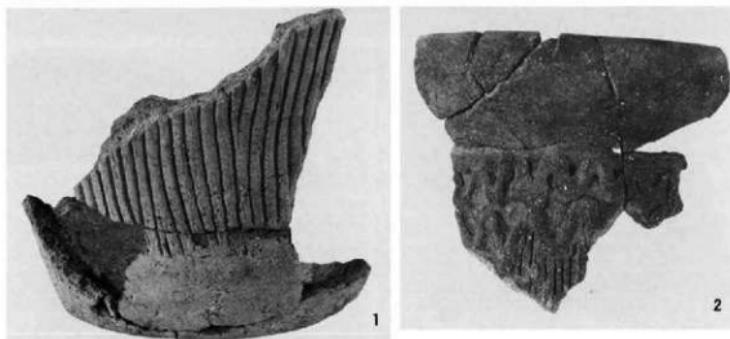
14号住出土遺物



27号住出土遺物



28号住出土遺物





3



4



5



6



7



8

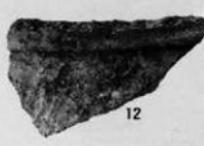


9



10

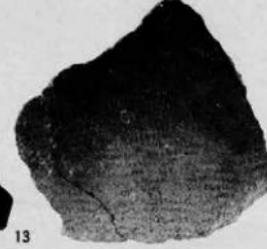
11



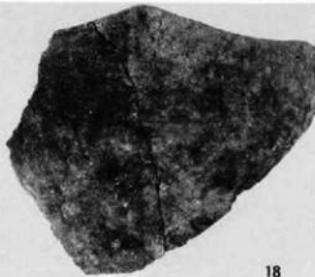
12



13



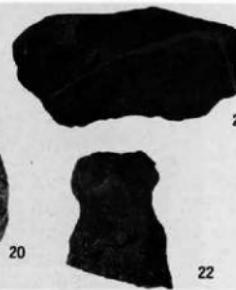
14



18



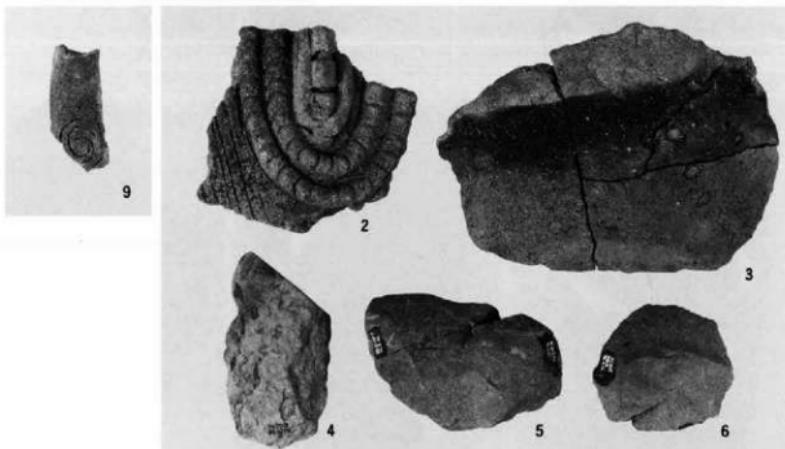
20



22

23

30号住出土遺物



31号住出土遺物





3



3



5



7



9



18



14

31号住出土遺物



6



8



10



11



12



13



14



15



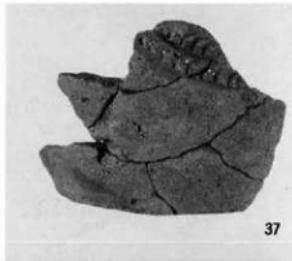
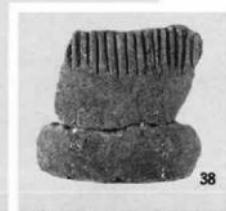
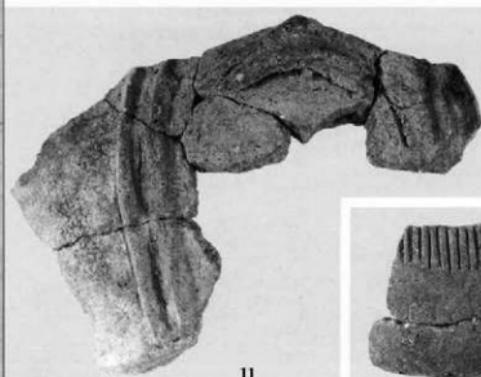
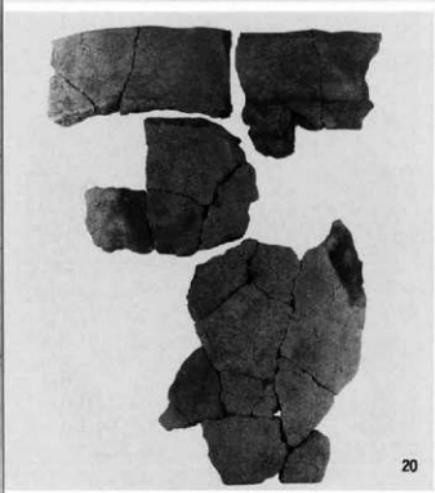
16



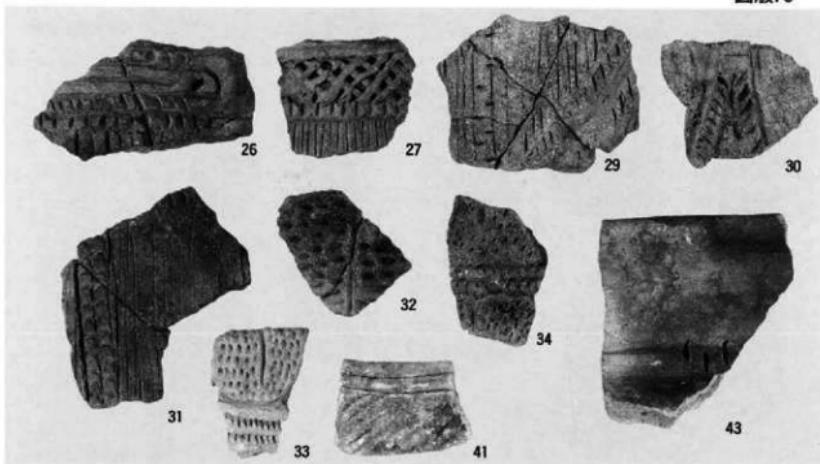
17



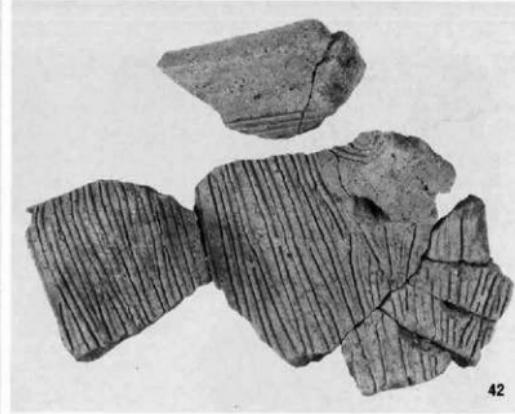
18



31号住
出土遺物



35



42



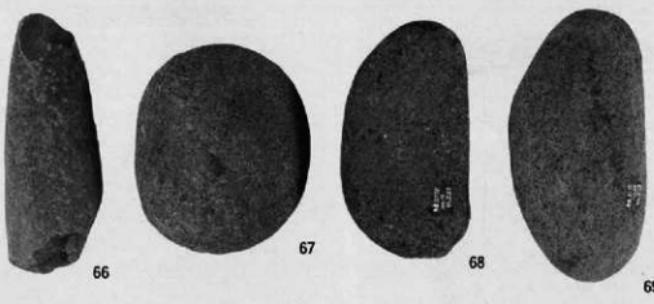
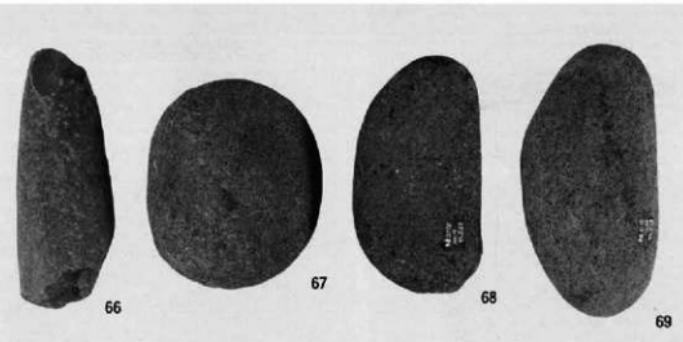
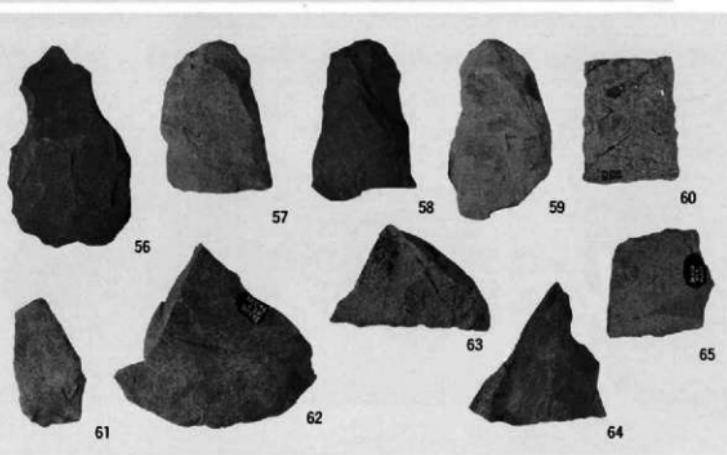
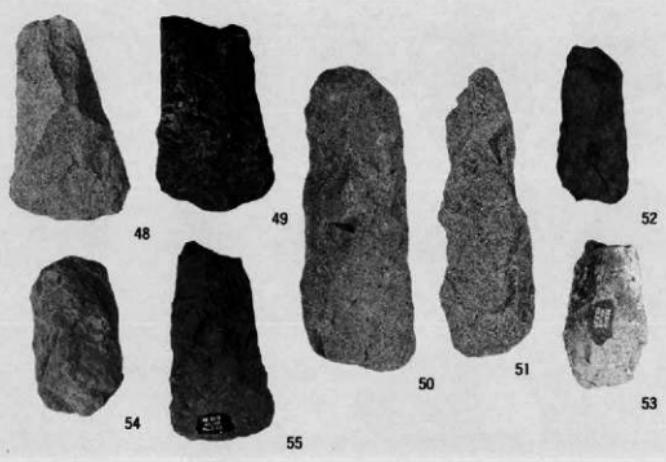
45



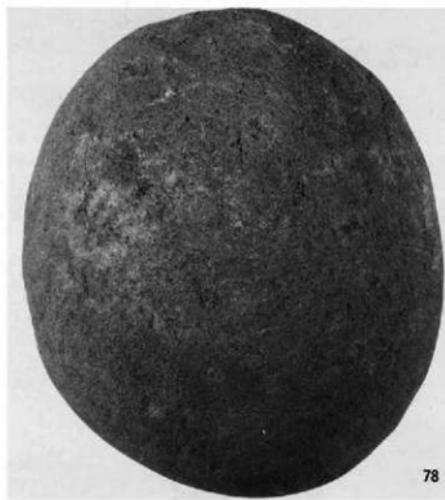
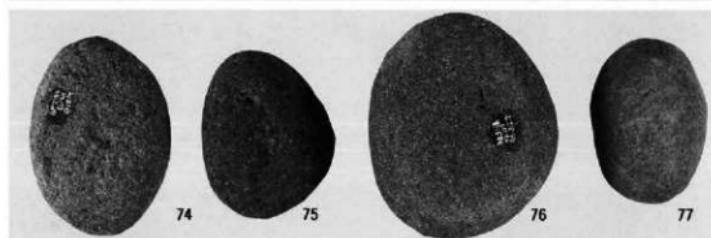
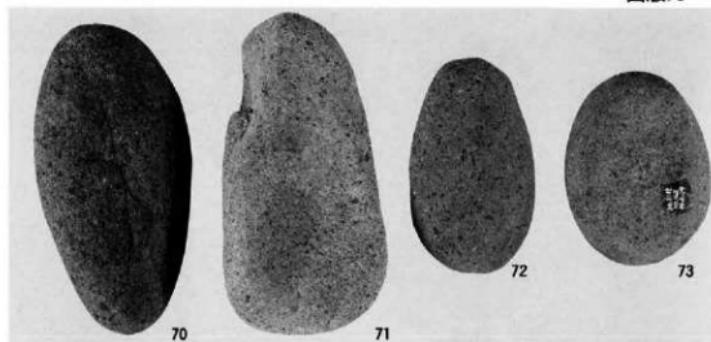
46(裏面)

图版74

31号住出土遗物

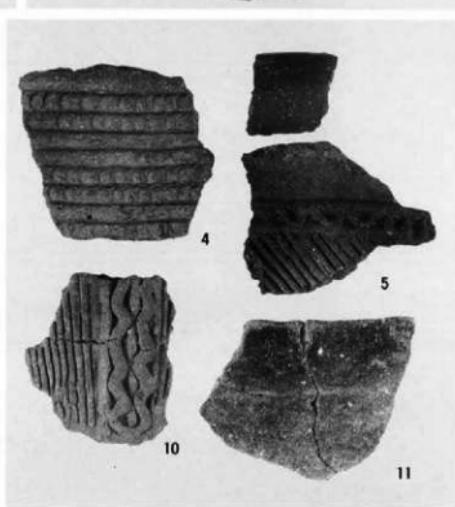


31号住出土遺物

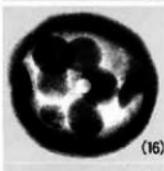
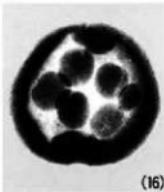
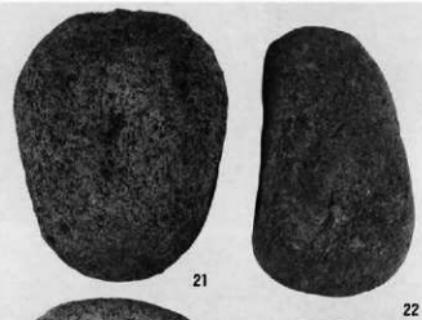
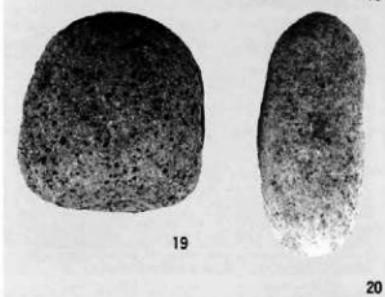
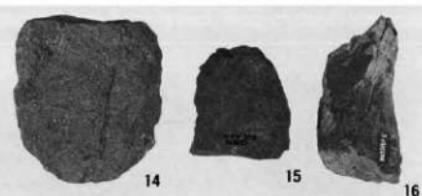
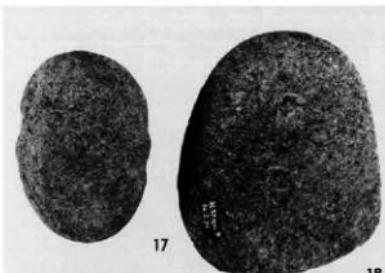


32号住出土遺物

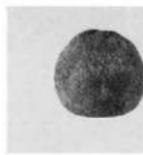
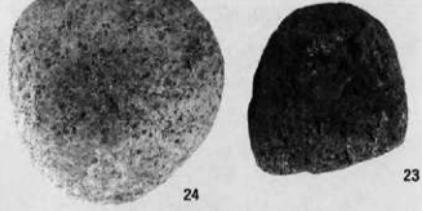


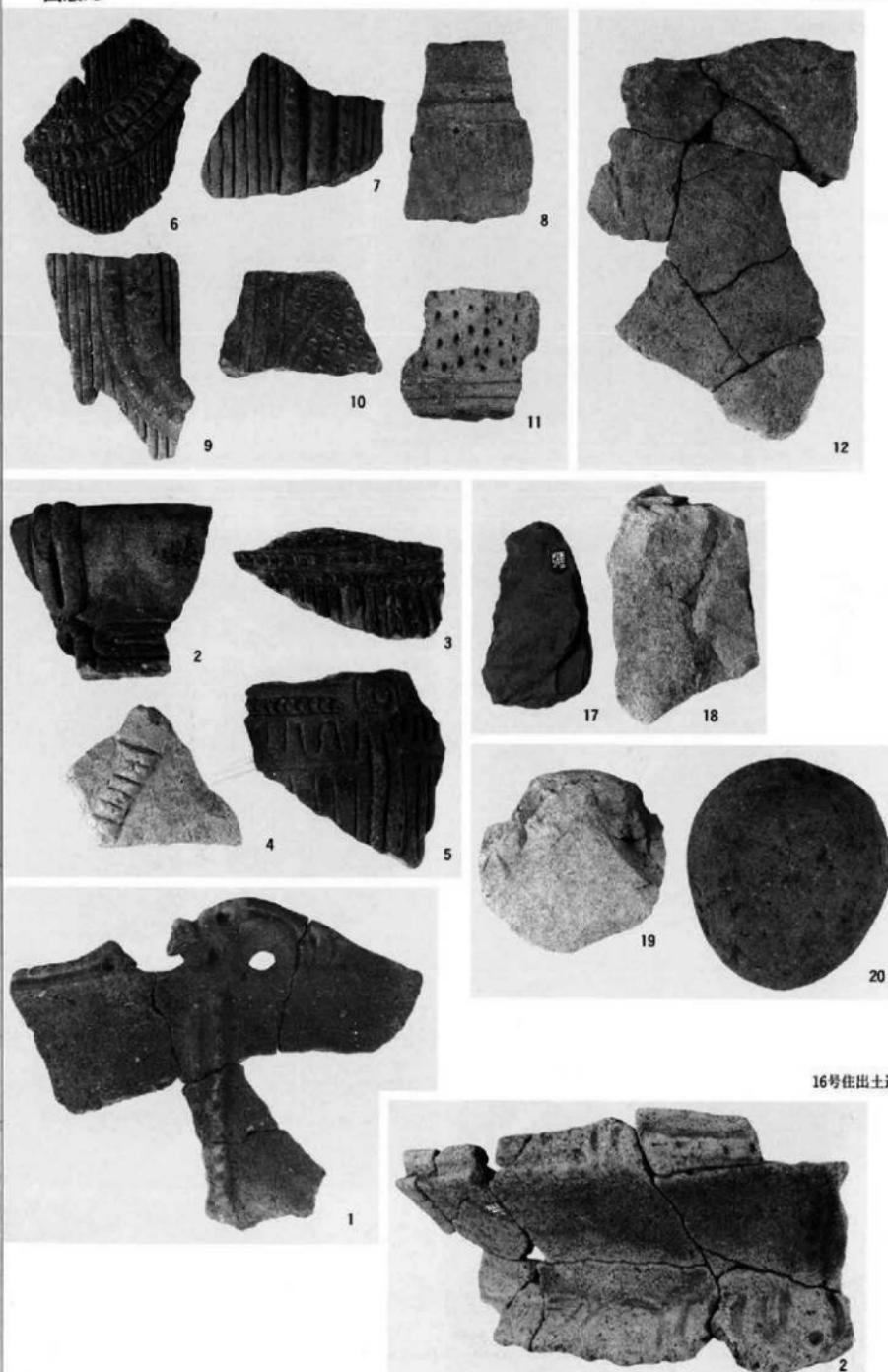


32号住出土遺物



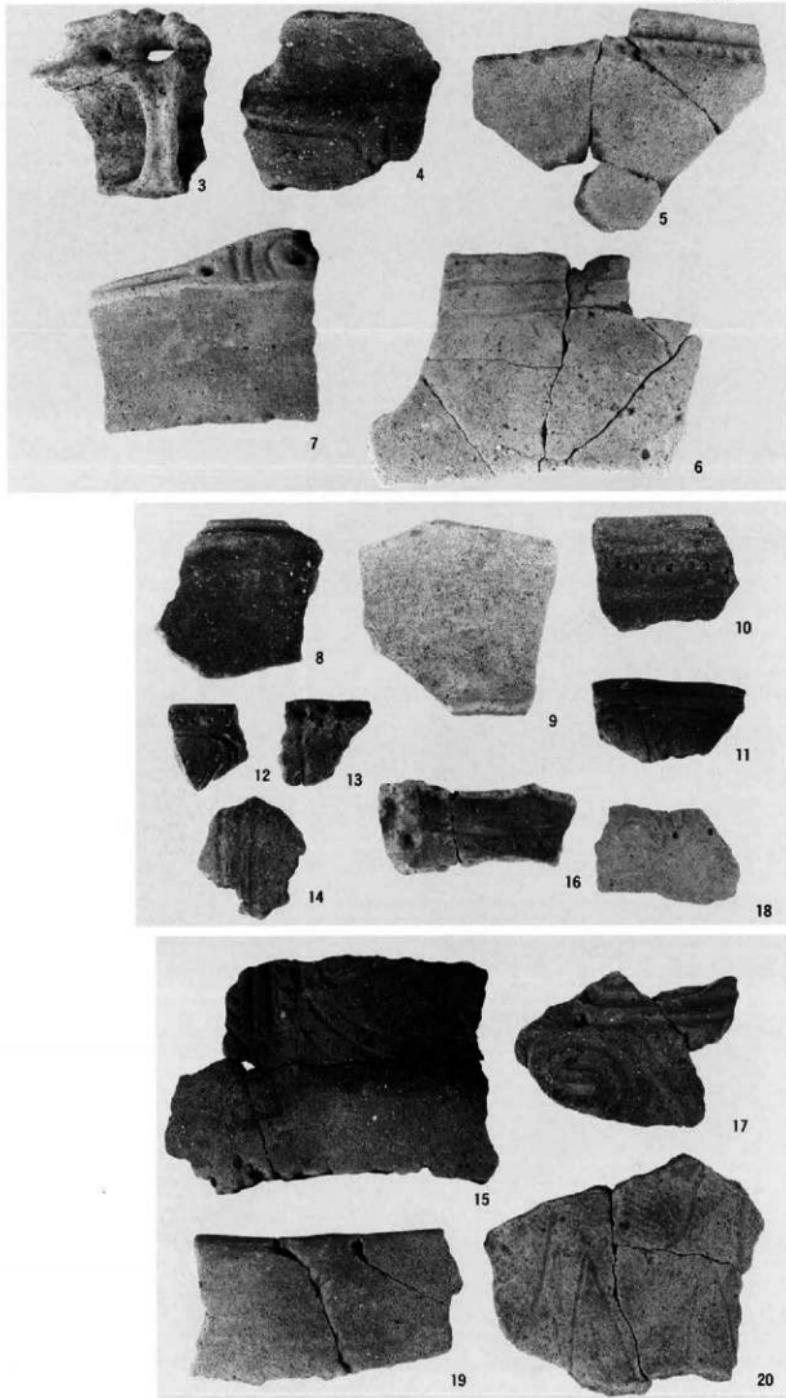
16のX線写真

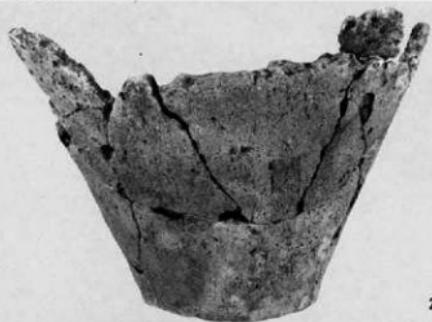




16号住出土遗物

16号住出土遺物





24



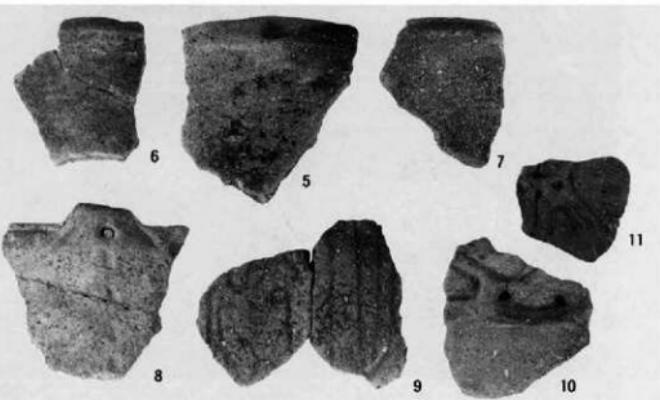
32



1



2



6

5

7

11

8

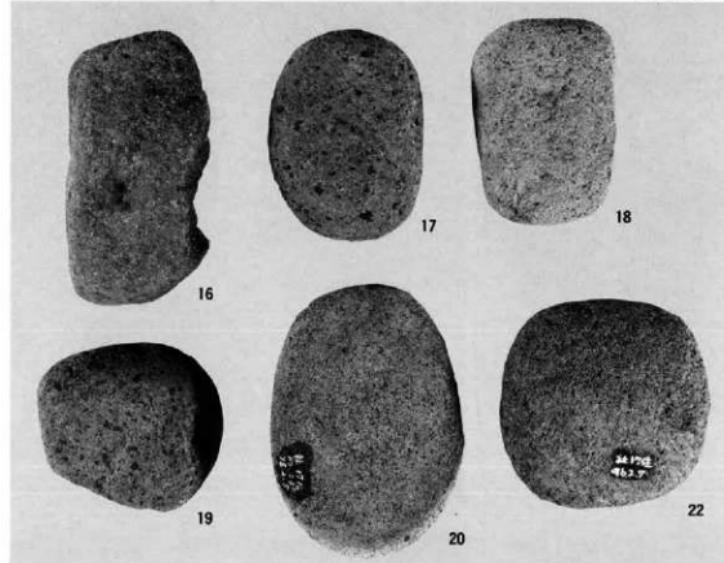
9

10

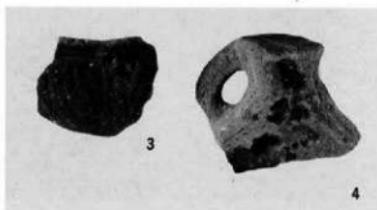
12



17号住出土遺物

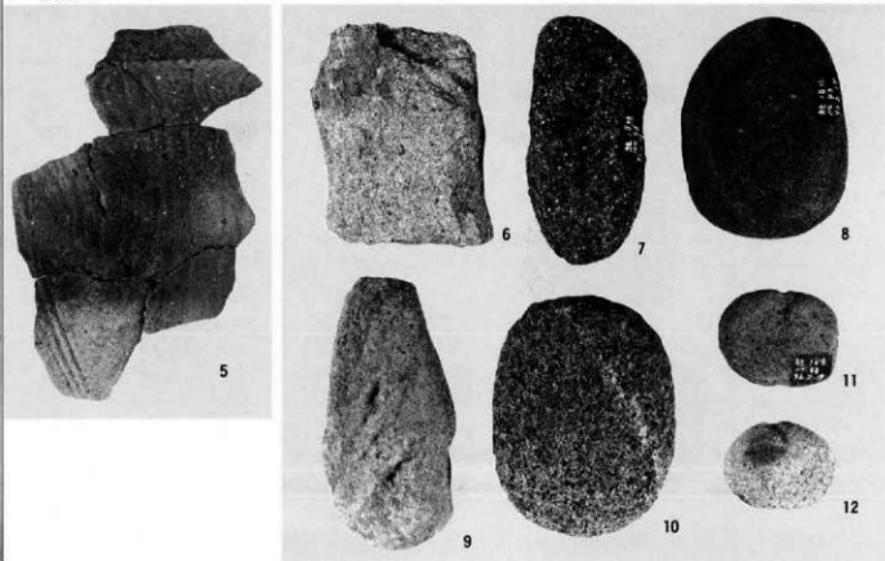


18号住出土遺物

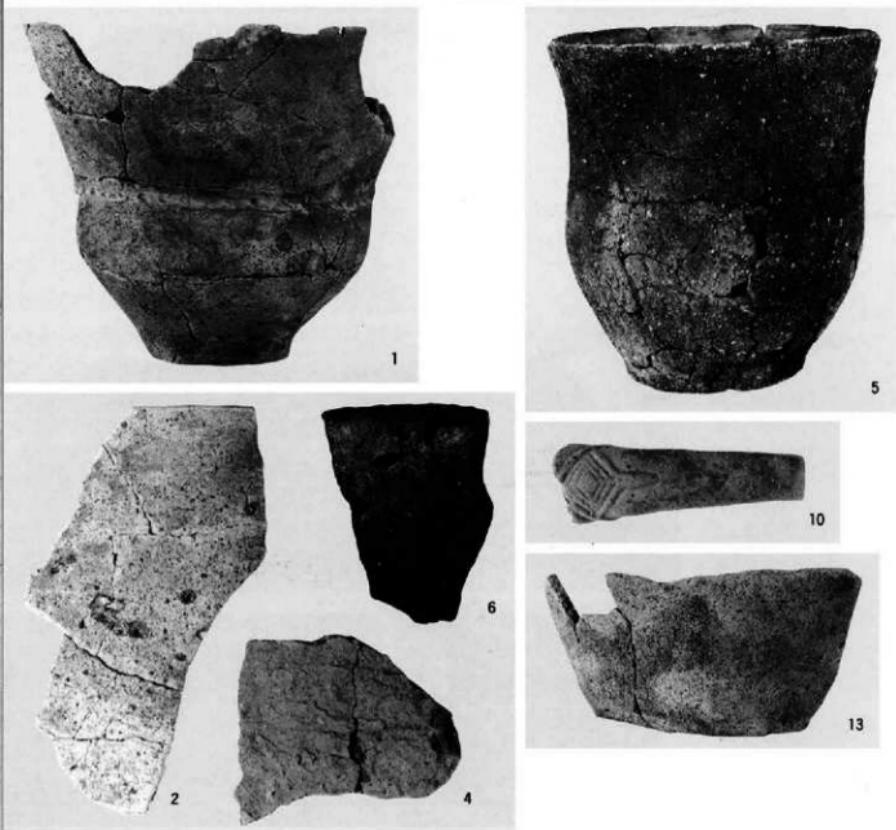


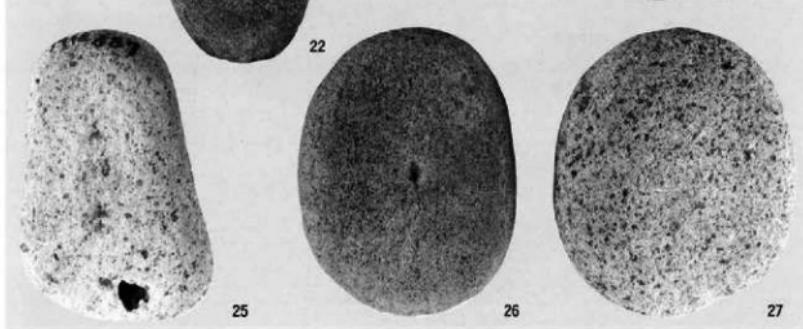
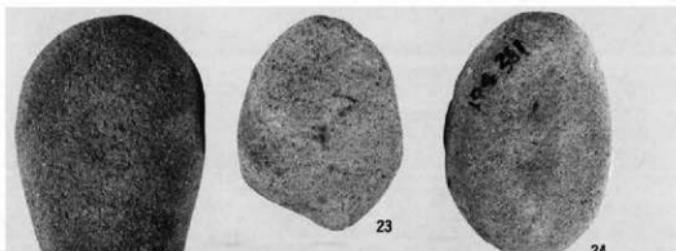
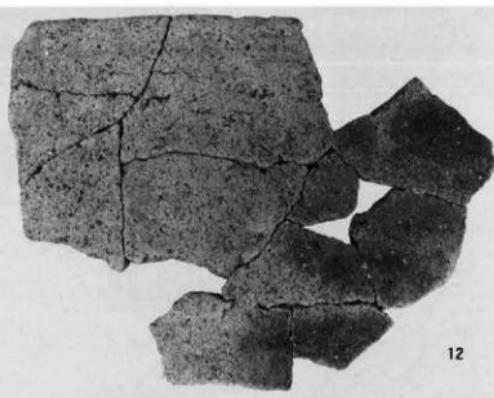
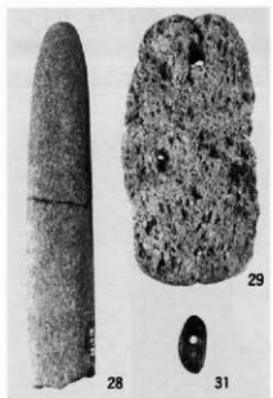
図版82

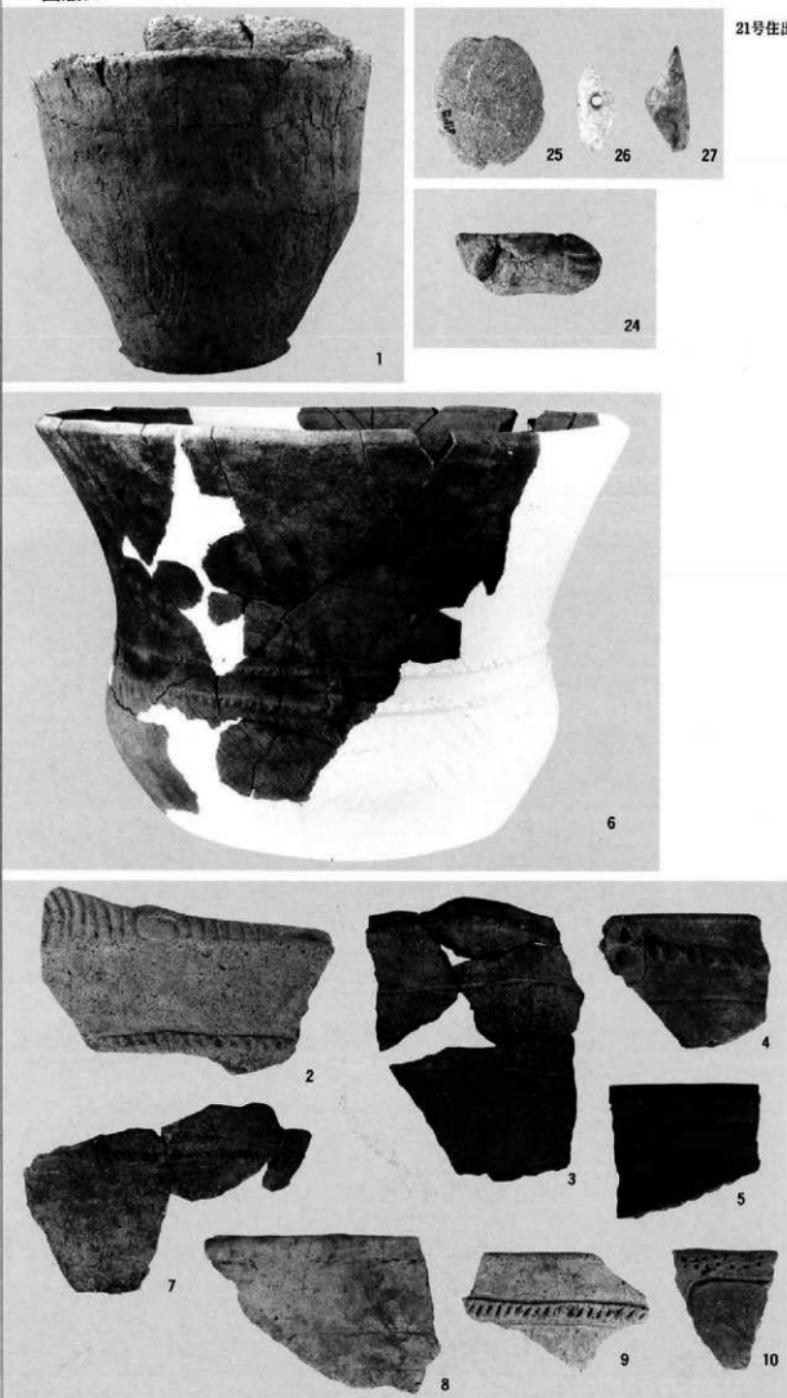
18号住出土遺物

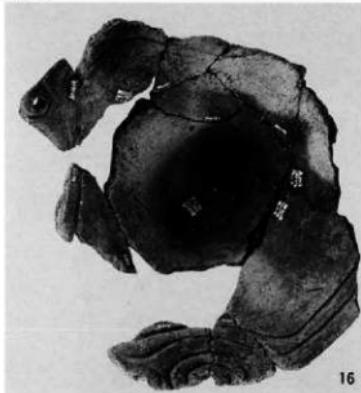


19号住
出土遺物

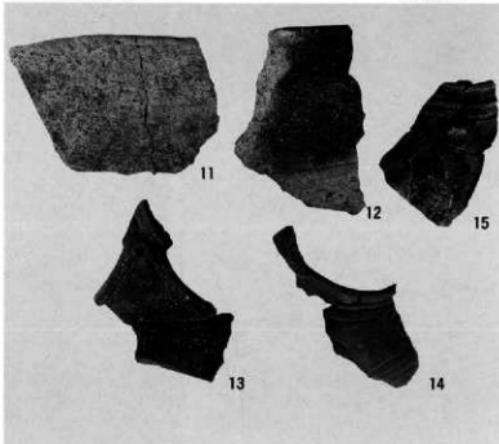








16



11

12

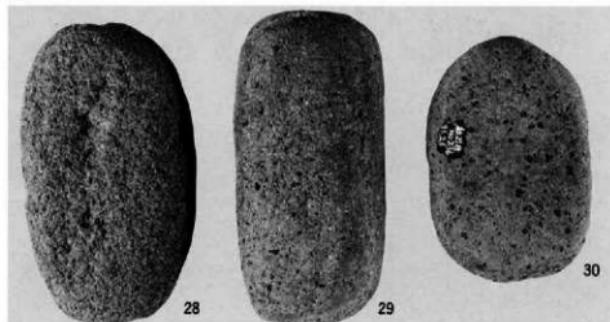
15

13

14



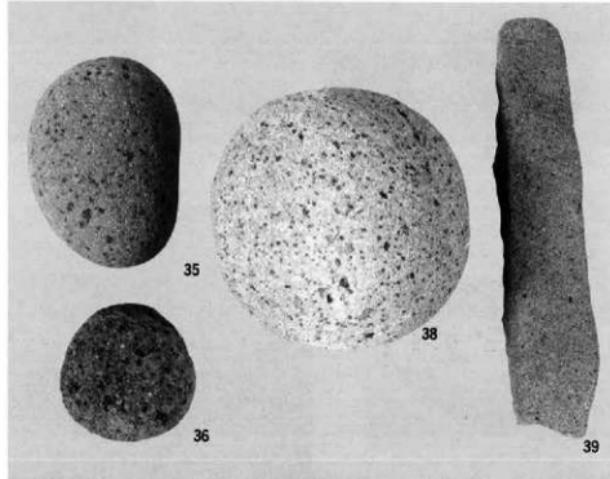
16



28

29

30

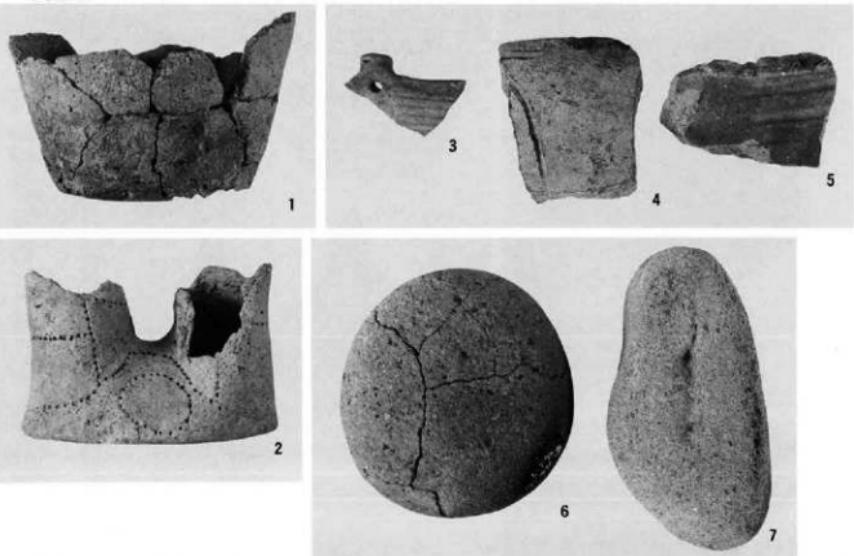
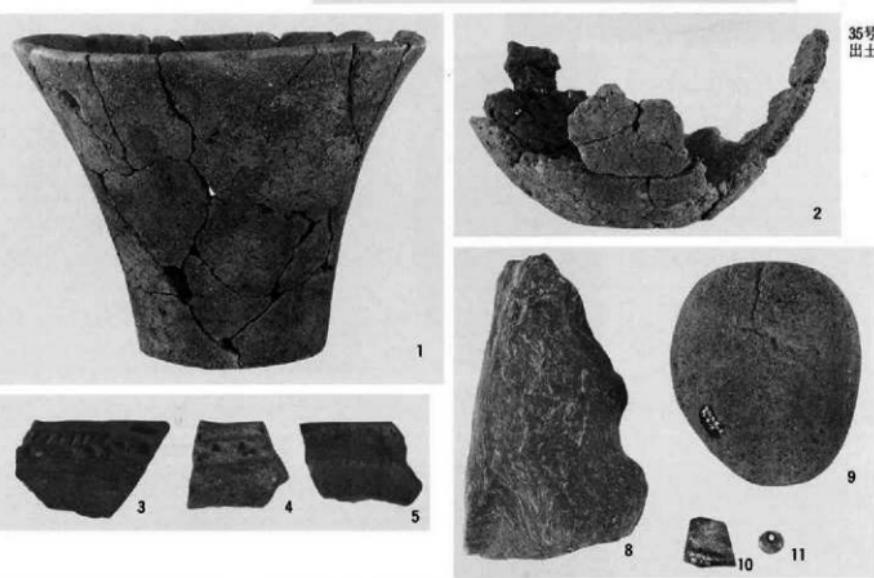


35

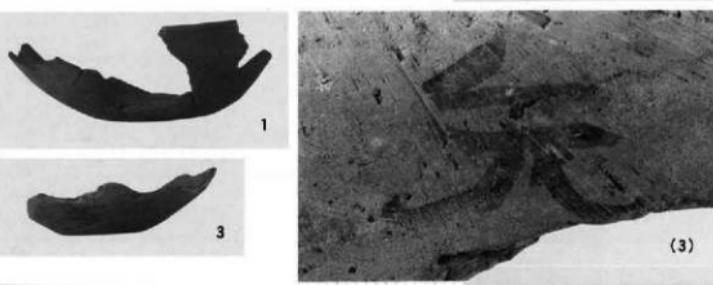
38

36

39

35号住
出土遗物

1号住出土遗物



(3)



5



15



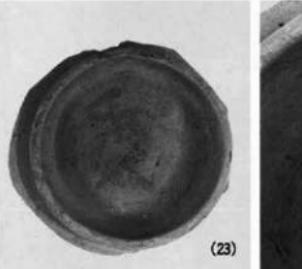
20



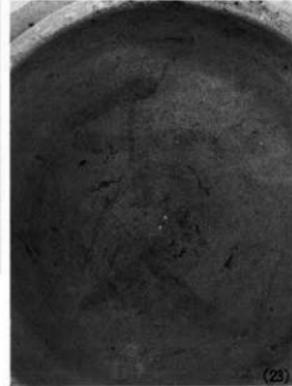
22



23



(23)



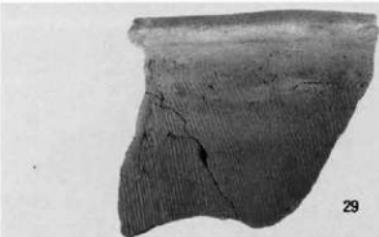
(23)



31



32



29



30



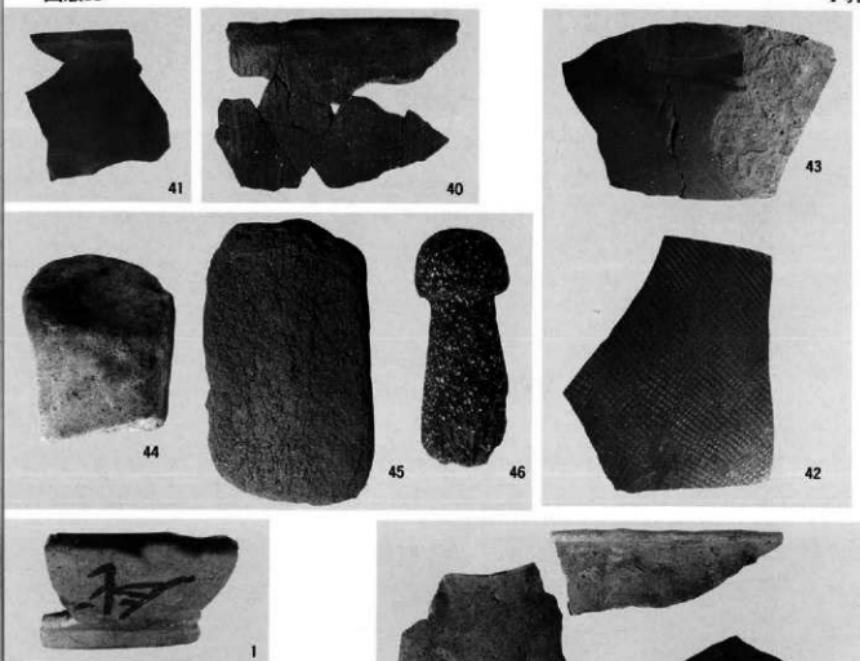
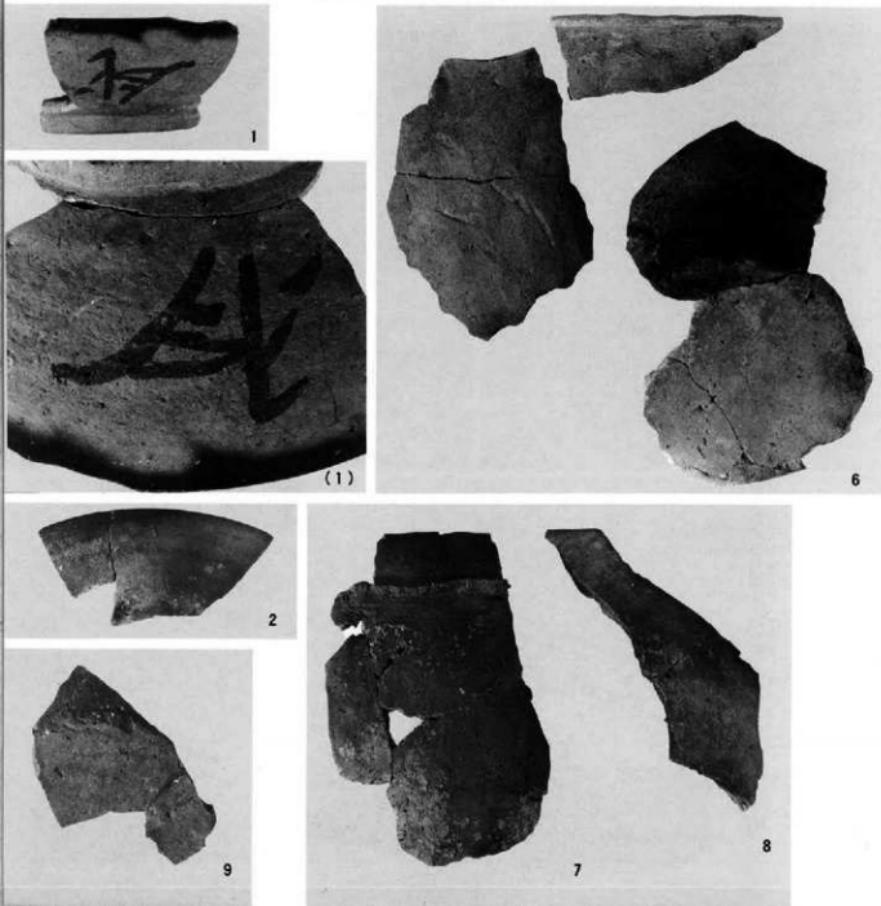
33

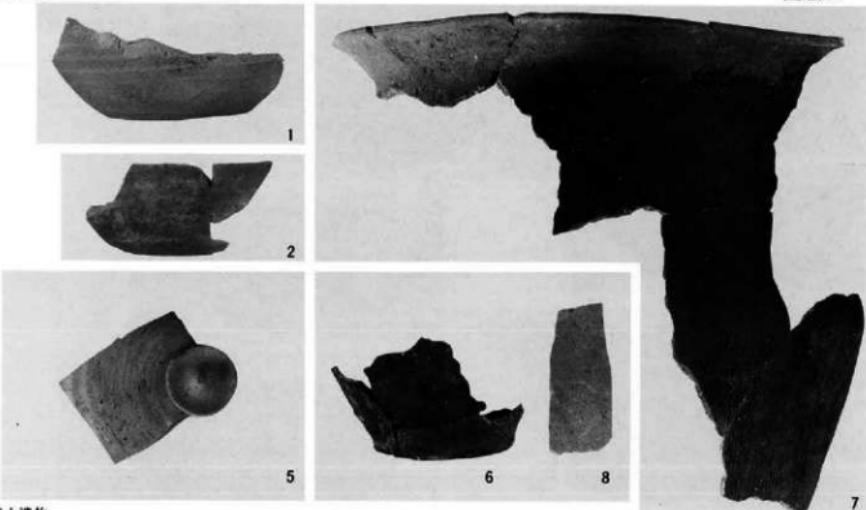


34

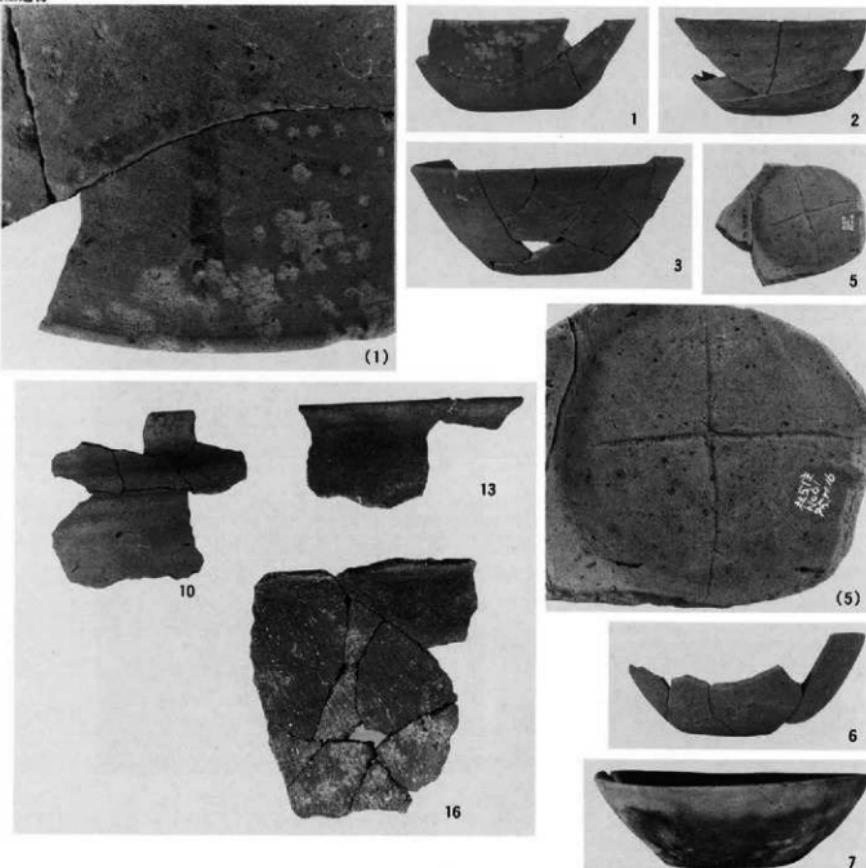


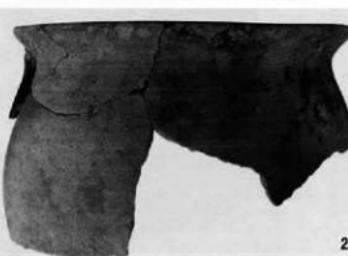
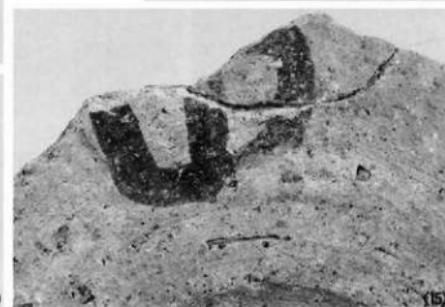
35

2号住
出土遺物

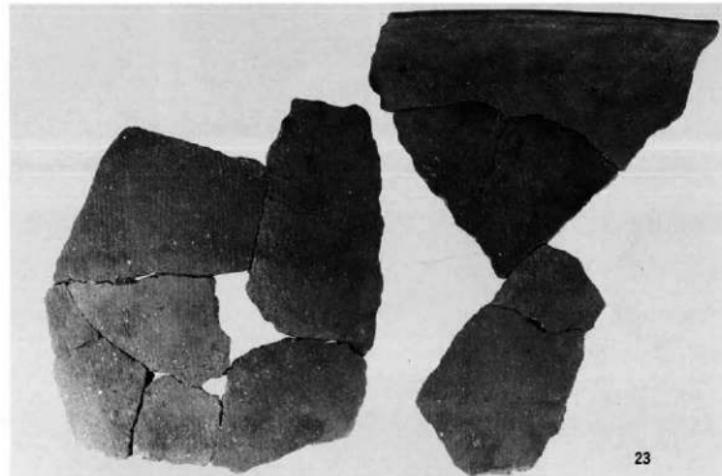
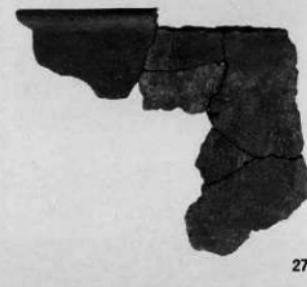


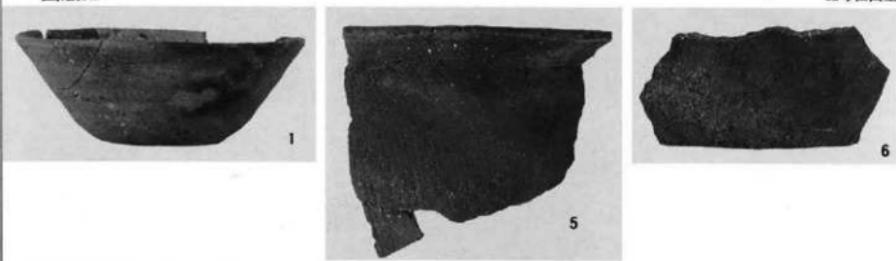
5号住出土遺物



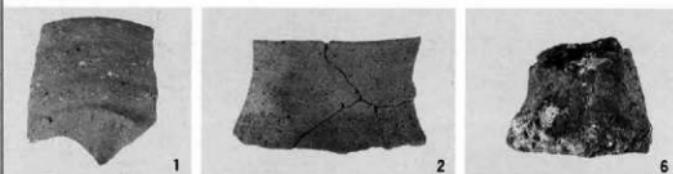


6号住出土遺物

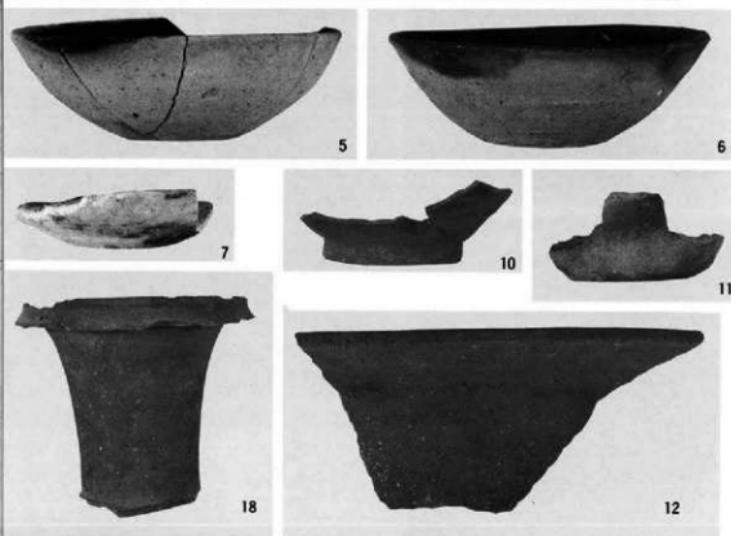


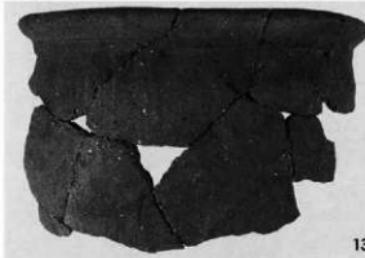
15号住
出土遺物

20号住出土遺物



24号住出土遺物





13



20



8



7



17



22



28



19



20

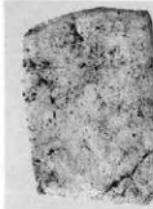


25

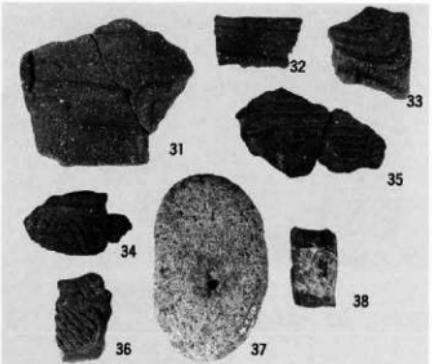
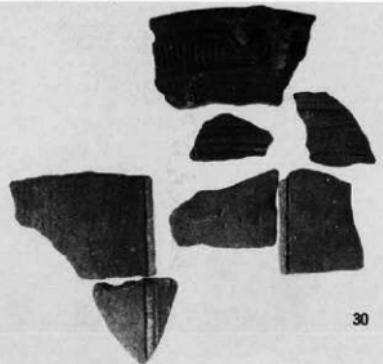


26

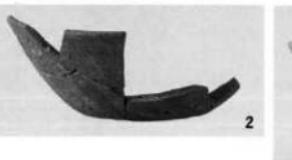
27

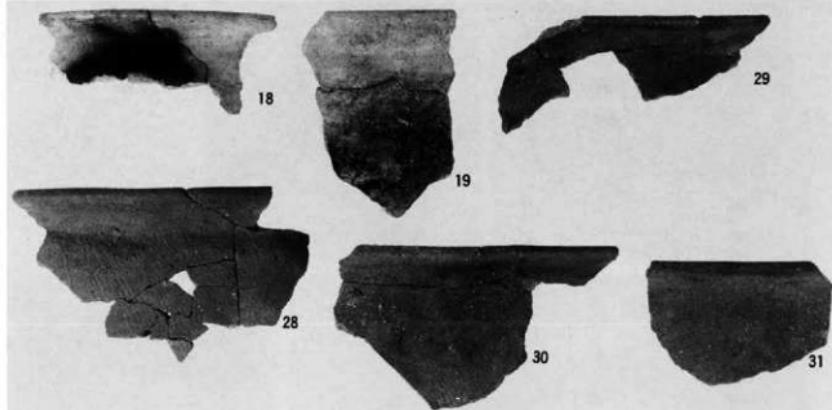


22

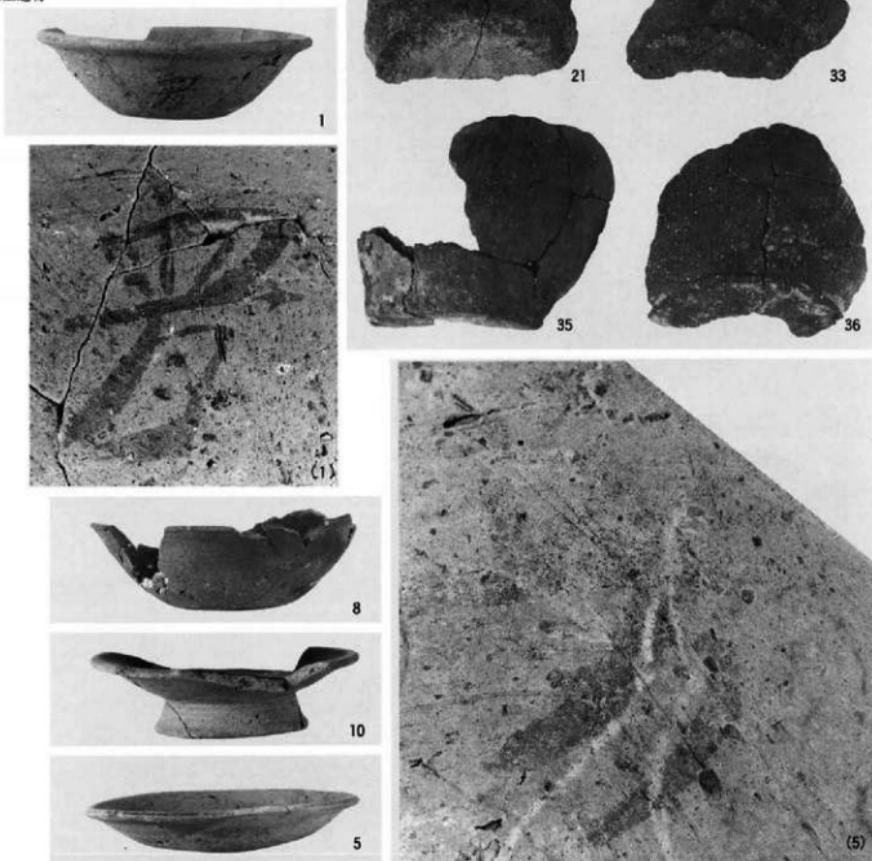


29号住出土遺物





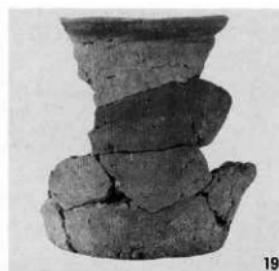
37号住出土遺物



図版96

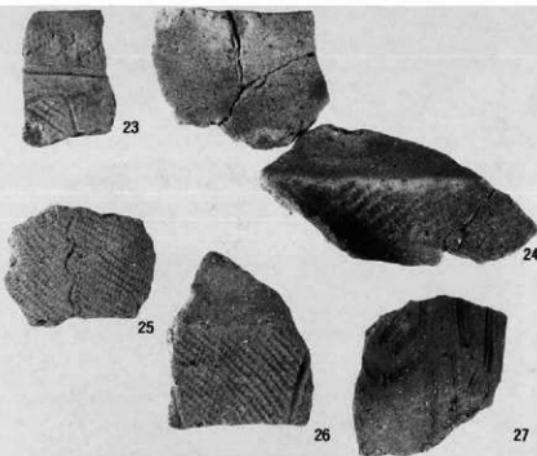


11



19

37号住出土遺物



22

ピット出土遺物



26

27

24

25

26

24

25

26

27



41号ピット12



263号ピット60



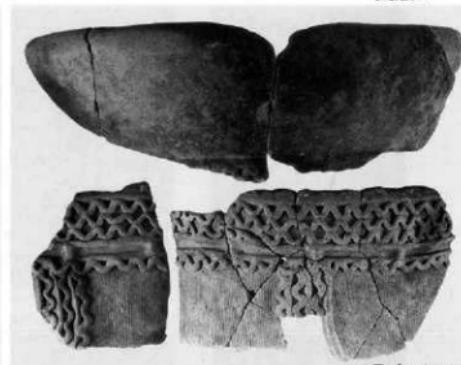
250号ピット56



263号ピット63



401号ピット91



408号ピット101

404号ピット



93

94

95

96

97

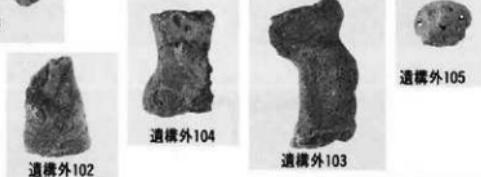
鉄製品
鍛錆
土偶
墨書き土器



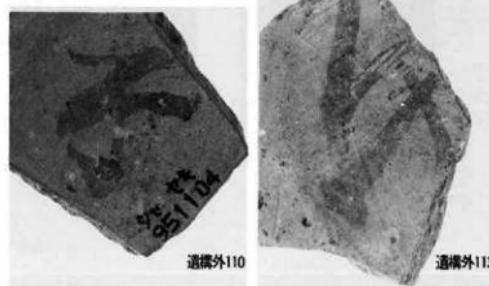
5号住20



24号住25



遺構外105

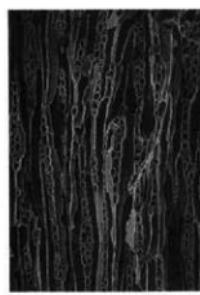


遺構外110

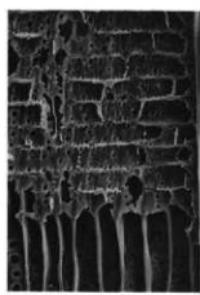
遺構外113



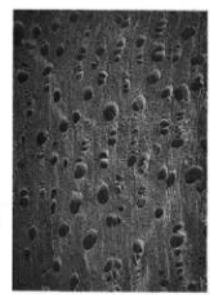
1a. モミ属 (横断面)
P250 埋堀 bar:0.5mm



1b. 同左 (接線断面) bar:0.1mm



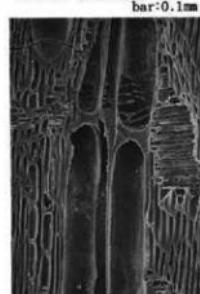
1c. 同左 (放射断面) bar:0.05mm



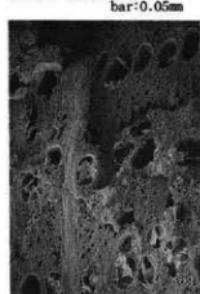
2a. カバノキ属 (横断面)
16住 戸 bar:0.5mm



2b. カバノキ属 (横断面)
bar:0.1mm



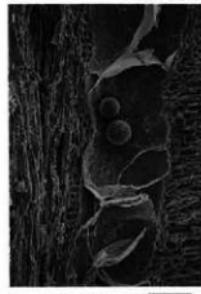
2c. 同左 (接線断面) bar:0.1mm



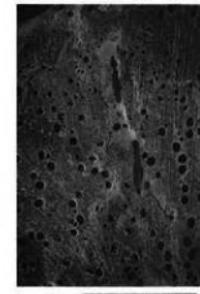
3a. コナラ属コナラ節 (横断面)
34住 No2 内土 bar:1mm



3b. 同左 (接線断面) bar:0.1mm



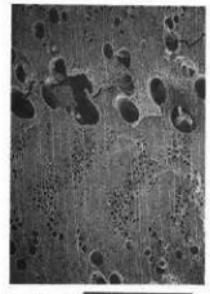
3c. コナラ属コナラ節
(放射断面) bar:0.1mm



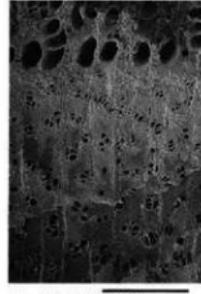
4a. クリ (2年枝) (横断面)
6住 遠 4層 bar:1mm



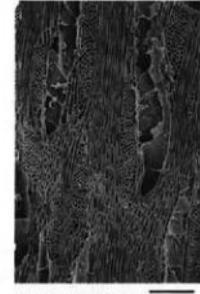
4b. 同左 (接線断面) bar:0.1mm



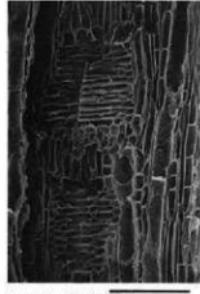
4c. クリ (横断面)
6住 No81 bar:1mm



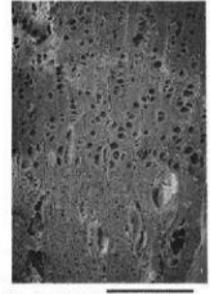
5a. クワ属 (横断面)
17住 戸 bar:0.5mm



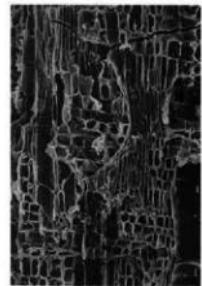
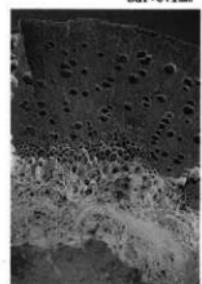
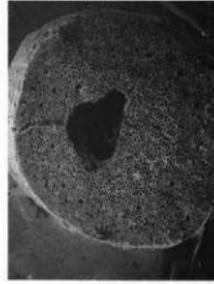
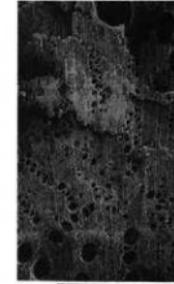
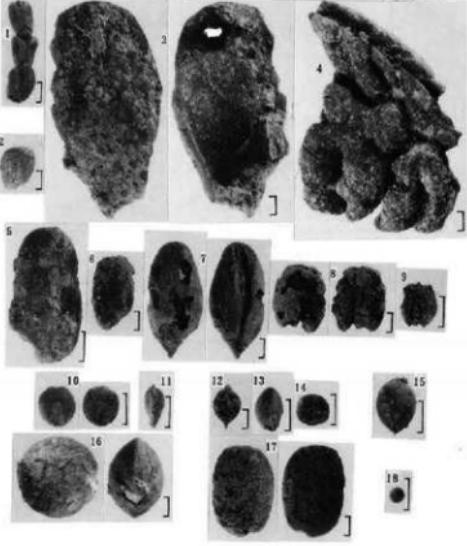
5b. 同左 (接線断面) bar:0.1mm



5c. 同左 (放射断面) bar:0.1mm



6a. モモまたはウメ (横断面)
6住 遠4層 bar:0.5mm

7b.モモまたはウメ(接線断面)
6住 寄4層 bar:0.1mm7c.同左(放射断面)
bar:0.1mm8a.環孔材A(横断面)
37住 寄3層 bar:0.5mm8b.同左(接線断面)
bar:0.1mm8c.環孔材A(放射断面)
37住 寄3層 bar:0.1mm9a.広葉樹の当年枝(横断面)
12住 寄 bar:0.5mm9b.同(接線断面)
bar:0.1mm9c.同(放射断面)
bar:0.1mm10.イネ科(横断面)
12住 寄 bar:1mm12.クリ(横断面)
8住 壷内(PLD-170)
bar:1mm

産出した大型植物化石 (スケールは全て1mm)

11.モモまたはウメ(2年枝)(横断面)
6住 寄 4層 bar:0.5mm

- 1.ヒノキ、小枝、1住-16
- 2.クワ属、種子、1住-103
- 3.オニグルミ、炭化核、34住伊北ビット
- 4.モキ、炭化核、26住カマド
- 5.イネ、炭化胚乳、1住-51
- 6.イネ、炭化胚乳、1住-52
- 7.オオムギ、炭化胚乳、1住-17
- 8.コムギ、炭化胚乳、1住-33
- 9.アワ、炭化胚乳、1住-62
- 10.アワ、炭化胚乳、1住カマド2層
- 11.カヤフリクサ属、果実、1住-4
- 12.タテハ属A、炭化果実、19住伊上(南)
- 13.タテハ属B、炭化果実、1住-38
- 14.シロザ近似種、種子、18住伊2層
- 15.エノキグサ、種子、1住-31
- 16.カヌマグラ、種子、1住-31
- 17.ササゲ属、炭化種子、16住伊
- 18.菌核、1住-90

報告書概要

フリガナ	シャグチイセキダイサンジショウサホウコクシ	
書名	社口遺跡第3次調査報告書	
副題		
シリーズ		
著者名	橋原功一・森原智彦子・河西学・新山雅広・植川弥生・山形秀樹	
発行者	高根町教育委員会・社口遺跡発掘調査団	
編集機関	社口遺跡発掘調査団	
住所・電話	〒406 山梨県東八代郡石和町四日市場1566 帝京大学山梨文化財研究所内 TEL 0552-63-6441	
印刷所	株エンドレス 〒405 山梨県山梨市上石森123 TEL 0553-22-4574	
印刷・発行日	平成9年(1997)3月・平成9年(1997)3月31日	
社口遺跡	所在地	山梨県北巨摩郡高根町村山東割字社口
	25,000分の1 地図名・位置・標高	谷戸 北緯35°50'10" 東経138°25'40" 標高725~737m
概要	主な時代	縄文時代草創期~早期・中期・後期、平安時代・中世
	主な遺構	縄文時代早期を中心とした包含層・中期住居址14軒・後期住居址(敷石住居址)7軒、平安時代住居址12軒、鐵文時代~中世のビット(土坑)
	主な遺物	表裏織文土器・撚糸文土器・洛沢式土器・曾利I~IV式土器・烟之内1・2式土器及び石器・十億・玉・平安時代下部器・須恵器・灰陶器・石製品・鉄製品など
	特殊遺構	縄文中期集石炉4基・敷石住居址7軒・中世墓坑1基・近世塚
	特殊遺物	表裏織文土器・土偶・玉・丸石・鉄製品・墨書き器など
	調査期間	平成7年(1995)10月16日~平成8年(1996)3月24日

社口遺跡第3次調査報告書

平成9年(1997)3月31日発行

編集・発行 高根町教育委員会

〒408 山梨県北巨摩郡高根町村山北割3261

TEL 0551-47-3111

社口遺跡発掘調査団

〒406 山梨県東八代郡石和町四日市場1566

帝京大学山梨文化財研究所内

TEL 0552-63-6441

印刷

株エンドレス

〒405 山梨県山梨市上石森123

TEL 0553-22-4574

